日廻岱B遺跡

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XV－

２００５・３

秋田県教育委員会

遺跡遠景(西→)

S I 2001・2005・2042竪穴住居跡 完掘状況 (北→)

ＳＩ2001炉断面(南東→)

ＳＩ2005炉Ｂ・ＳＲ01断面(南→)

ＳＩ2007炉断面(南東→)

ＳＩ2017新期炉断面(北西→)

ＳＩ2025炉側面(南東→)

ＳＩ2134-ｂ炉Ｂ側面(南→)

ＳＩ2134-ｃ炉Ｃ側面(北西→)

ＳＮＲ2378断面(北東→)

炉体土器・埋設土器(Ⅳ群ａ～ｃ・ｈ類)

炉体土器・埋設土器(Ⅳ群ｆ類)

狩猟文土器俯瞰

狩猟文土器側面

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、そうした自然災害の驚異や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われております。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、森吉山ダム建設に先立って、平成14年度に森吉町において実施した日廻岱Ｂ遺跡の発掘調査成果についてまとめたものであります。調査では縄文時代前期の竪穴住居跡や、縄文時代後期の竪穴住居跡、土器埋設炉などを確認し、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、森吉町、森吉町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年３月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　清

例　言

1．本書は、秋田県北秋田郡森吉町森吉字日廻岱89外に所在する日廻岱Ｂ遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

2．発掘調査は森吉山ダム建設事業に係り、平成14(2002)年度に秋田県教育委員会が実施した。

3．遺跡の調査結果については平成14年度に秋田県教育委員会より刊行された『秋田県埋蔵文化財センター年報』、『日廻岱Ｂ遺跡発掘調査資料』において概要を公表したが、整理作業の進捗に伴う諸々の検討の結果、時期・性格など所見を変更した部分がある。本書と相違のある場合、本書をもって訂正したものとする。

4．執筆分担は下記のとおりである。編集は菅野美香子が行った。

第１章～第３章：菅原一彦

第４章：菅野美香子、菅原一彦、榮一郎、石川和良

第５章：株式会社古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社

第６章：菅野美香子

5．本書第１、２図に使用した地図の原図は国土地理院発行1/50,000地形図「米内沢」・「大葛」である。第９図は森吉山ダム工事事務所提供の1/1,000平面図をもとに作成した。

6．平成17年３月22日に北秋田郡森吉町・合川町・鷹巣町・阿仁町の４町が合併し、「北秋田市」が発足した。本遺跡が所在する旧森吉町については「北秋田郡森吉町」の表記を「北秋田市」と読み替える住所表示の変更となったため、本報告書中本文において「北秋田郡森吉町」と表記した行政名称については、「北秋田市」と読み替えていただきたい。なお、抄録中の市町村コードについては合併前の旧コードを記載した。

7．土層断面図などの土色の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。

8．発掘調査・自然科学分析・整理作業においては一部下記の機関に委託した。

水準測量および方眼杭設置：有限会社穴山測量設計

遺跡空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル

放射性炭素年代測定・岩石肉眼鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社

火山灰(テフラ)分析：株式会社古環境研究所　　遺構図面製図：第一測量設計株式会社

石器実測・製図：株式会社アルカ　　遺物写真撮影：いろは写房

9．調査に関する記録と出土品は秋田県教育委員会が保管している。

10．発掘調査および遺構・遺物の整理に当たって、県内の教育委員会・諸機関のほか、以下の方々および機関からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する。(五十音順・敬称略)

赤石登　安孫子昭二　阿部勝則　岩井浩介　榎本剛治　岡村道雄　葛西勵　鎌田祐二　坂本尚史　佐々木浩一　高橋憲太郎　竹下将男　中村哲也　成田滋彦　藤沼邦彦　村木淳　安原誠　柳瀬由香　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　八戸市博物館　八戸市教育委員会　宮古市教育委員会

凡　例

1．本書に掲載した平面図の方位は日本測地系平面直角座標第Ｘ系座標北である。巻末の報告書抄録の経緯度は世界測地系に準拠する。

2．遺構の略記号は以下の通りである。

ＳＩ：竪穴住居跡　Ｐ：竪穴住居跡に伴う柱穴様ピット　ＳＮＲ：土器埋設炉、土器埋設立石炉

ＳＲ：土器埋設遺構　ＳＱＮ：石囲炉　ＳＱ：配石遺構　ＳＮ：焼土遺構　ＳＫ：土坑

ＳＫＩ：竪穴状遺構　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柵列　ＳＫＰ：柱穴様ピット

ＲＰ：土器　ＲＱ：石器　Ｓ：礫

※1配石遺構の下部に掘り込みを伴う遺構は土坑とした。

※2埋設された土器に近接して焼土が位置するもの、および土器に炉体土器としての使用痕跡があるものは土器埋設炉とし、それらが認められないものは土器埋設遺構とした。

※3平面径２ｍ以上の円形もしくは楕円形の掘り込みで底面が平坦であるが、炉もしくは柱穴が確認できない遺構は竪穴状遺構とした。

3．遺構図および遺物図の縮尺は基本的に以下の通りである。各図にスケールを付してある。

ＳＩ、ＳＮＲおよびＳＲ周辺図、ＳＫＰ、ＳＮ：1／50　　ＳＱ、ＳＮ、ＳＫ、ＳＫＩ：1／40

ＳＩ炉、ＳＮＲ、ＳＲ、ＳＱＮ：1／20　遺構図に挿入した土器実測図：1／10

ＳＢ、ＳＡ：1／100　　ＳＢを構成するピット：1／60

土器実測図：1／3　　石器実測図：2／3、1／2　　金属製品：1／2

4．遺物写真の縮尺は不同である。

5．遺構平面図では柱穴様ピットの断面位置指示線には符号は付さず、断面図のみに断面位置指示線の相対的な方位をアルファベットで付した。

6．土層は基本層位にローマ数字(Ⅰ、Ⅱ・・・)、遺構堆積土にはアラビア数字(1、２・・・)を用いた。基本層位は数箇所で観察しており、それぞれに①～④の識別番号を付した。「①Ⅰ層」は「基本層位①におけるⅠ層」を表す。

7．土器実測図は、土器断面図の左側に外面図(拓影)、右側に内面図(拓影)を配した。

8．石器の器種名は以下の２種について略号を用いた。

ＲＦ：二次加工のある剥片　　ＵＦ：使用痕のある剥片

9．遺物番号は種別ごとに遺構内出土遺物から連番で付した。番号は以下のとおりである。なお、挿図中の遺物番号と図版中の番号は一致する。

土器･土製品：１～　　石器･石製品：Ｓ１～　　陶磁器･金属器：①～

10．挿図中に用いたスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。

焼土 　礫(断面) 　アスファルト

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第１節　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・１
　第２節　調査要項・・・・・・・・・・・・・・・・２
第２章　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　第１節　遺跡の位置と立地・・・・・・・・・・４
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・５
第３章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・14
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・14
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・15
　　１　野外調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　　２　室内整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・22
第４章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・24
　第１節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・24
　第２節　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・28
　　１　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　　（１)検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　　（２)出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　　２　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　　（１)遺構と遺構内出土遺物・・・・・・・29
　　　① 竪穴住居跡 ・・・・・・・・・・・・・29
　　　ａ 前期の竪穴住居跡 ・・・・・29
　　　ｂ 後期の竪穴住居跡 ・・・・・30
　　　ｃ 晩期の竪穴住居跡 ・・・・・56
　　　② 土器埋設炉 ・・・・・・・・・・・・・57
　　　③ 土器埋設遺構 ・・・・・・・・・・・74
　　　④ 石囲炉 ・・・・・・・・・・・・・・・・84
　　　⑤ 配石遺構 ・・・・・・・・・・・・・・84
　　　⑥ 焼土遺構 ・・・・・・・・・・・・・・87
　　　⑦ 土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・89
　　　⑧ 竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・112
　　　⑨ 柱穴様ピット・・・・・・・・・・・113
　　（２)遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・117
　　　① 土器・土製品・・・・・・・・・・・117
　　　② 石器・石製品・・・・・・・・・・・123
　　３　近世 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
　　（１)遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
　　　① 掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・125
　　　② 柵列跡・・・・・・・・・・・・・・・・128
　　　③ 土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・129
　　　④ 柱穴様ピット・・・・・・・・・・・130
　　（２)遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
第５章　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・295
　第１節　火山灰(テフラ)分析 ・・・・・・・295
　第２節　放射性炭素年代測定 ・・・・・・・298
　第３節　岩石肉眼鑑定 ・・・・・・・・・・・・302
第６章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・311
報告書抄録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・387

挿　図　目　次

第１図　日廻岱Ｂ遺跡の位置 ……４
第２図　日廻岱Ｂ遺跡の位置と周辺の遺跡 ……11
第３図　グリッド配置図 ……16
第４図　北部段丘面遺構配置図 ……17
第５図　北東端緩斜面遺構配置図 ……18
第６図　南部段丘面(北側)遺構配置図 ……19
第７図　南部段丘面(南側)遺構配置図(１) ……20
第８図　南部段丘面(南側)遺構配置図(２) ……21
第９図　遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図 ……25
第10図　基本土層柱状図(１) ……26
第11図　基本土層柱状図(２) ……27
第12図　ＳＩ1105竪穴住居跡 ……135
第13図　ＳＩ2158竪穴住居跡 ……136
第14図　ＳＩ1229竪穴住居跡 ……137
第15図　ＳＩ2001・2005・2042竪穴住居跡(１)……138
第16図　ＳＩ2001・2005・2042竪穴住居跡(２)……139
第17図　ＳＩ2001竪穴住居跡 ……140
第18図　ＳＩ2005竪穴住居跡 ……141
第19図　ＳＩ2042／2028竪穴住居跡 ……142
第20図　ＳＩ2007竪穴住居跡 ……143
第21図　ＳＩ2017竪穴住居跡(１) ……144
第22図　ＳＩ2017竪穴住居跡(２) ……145
第23図　ＳＩ2019竪穴住居跡(１) ……146
第24図　ＳＩ2019竪穴住居跡(２) ……147
第25図　ＳＩ2025竪穴住居跡(１) ……148
第26図　ＳＩ2025竪穴住居跡(２) ……149
第27図　ＳＩ2036竪穴住居跡 ……150
第28図　ＳＩ2228竪穴住居跡 ……151
第29図　ＳＩ2134竪穴住居跡(１) ……152
第30図　ＳＩ2134竪穴住居跡(２) ……153
第31図　ＳＩ2338竪穴住居跡 ……154
第32図　ＳＩ2370竪穴住居跡 ……155
第33図　ＳＩ2344竪穴住居跡(１) ……156
第34図　ＳＩ2344竪穴住居跡(２)／ＳＩ2303
　竪穴住居跡・ＳＫＩ2357竪穴状遺構 ……157
第35図　ＳＩ2374竪穴住居跡・
　ＳＮＲ2377・2378土器埋設炉(１) ……158
第36図　ＳＩ2374竪穴住居跡・
　ＳＮＲ2377・2378土器埋設炉(２) ……159
第37図　ＳＩ2376竪穴住居跡・
　ＳＲ2379土器埋設遺構 ……160
第38図　ＳＩ2381竪穴住居跡 ……161
第39図　ＳＩ2460竪穴住居跡・
　ＳＮ2177焼土遺構周辺(１) ……162
第40図　ＳＩ2460竪穴住居跡・
　ＳＮ2177焼土遺構周辺(２) ……163
第41図　ＳＩ2475竪穴住居跡・ＳＮＲ2024
　土器埋設炉・ＳＲ2452土器埋設遺構
　周辺(１) ……164
第42図　ＳＩ2475竪穴住居跡・ＳＮＲ2024
　土器埋設炉・ＳＲ2452土器埋設遺構
　周辺(２) ……165
第43図　ＳＩ2333／2506竪穴住居跡 ……166
第44図　ＳＩ2507竪穴住居跡 ……167
第45図　ＳＮＲ2026・2034・2039土器埋設炉・
　ＳＲ2040・2106土器埋設遺構周辺(１) ……168
第46図　ＳＮＲ2026・2034・2039土器埋設炉・
　ＳＲ2040・2106土器埋設遺構周辺(２) ……169
第47図　ＳＮＲ2109・2186土器埋設炉・
　ＳＮ2369焼土遺構周辺(１) ……170
第48図　ＳＮＲ2109・2186土器埋設炉・
　ＳＮ2369焼土遺構周辺(２) ……171
第49図　ＳＮＲ2156土器埋設炉・ＳＲ2101・2102・
　2103土器埋設遺構周辺(１) ……172
第50図　ＳＮＲ2156土器埋設炉・ＳＲ2101・2102・
　2103土器埋設遺構周辺(２)／
　ＳＮＲ2322土器埋設炉・
　ＳＲ2309土器埋設遺構周辺 ……173
第51図　ＳＮＲ2176土器埋設炉・
　ＳＲ2179土器埋設遺構周辺 ……174
第52図　ＳＮＲ2371土器埋設炉・
　ＳＲ2299土器埋設遺構周辺 ……175
第53図　ＳＮＲ2279土器埋設炉・ＳＲ2193・2194・
　2195・2216・2363土器埋設遺構周辺(１)……176
第54図　ＳＮＲ2279土器埋設炉・ＳＲ2193・2194・
　2195・2216・2363土器埋設遺構周辺(２)……177
第55図　ＳＮＲ2335土器埋設炉周辺(１) ……178
第56図　ＳＮＲ2335土器埋設炉周辺(２)／
　ＳＮＲ2308土器埋設炉周辺 ……179
第57図　ＳＮＲ2611・2612土器埋設炉・
　ＳＲ2185土器埋設遺構周辺(１) ……180
第58図　ＳＮＲ2611・2612土器埋設炉・
　ＳＲ2185土器埋設遺構周辺(２) ……181
第59図　ＳＮＲ2002／2613／2614土器埋設炉 ……182

第60図　ＳＮＲ2615土器埋設炉／
ＳＲ2147土器埋設遺構周辺 ……183
第61図　ＳＲ2105土器埋設遺構周辺／ＳＲ2317／
2331・2332／2405土器埋設遺構／
ＳＱＮ2018石囲炉 ……184
第62図　ＳＱ2009・2010・2013・2014／2518／
2526配石遺構 ……185
第63図　ＳＱ2325／2523配石遺構／
ＳＮ1006焼土遺構 ……186
第64図　ＳＫ1012／1228／1232・1233／2016／
2027土坑 ……187
第65図　ＳＫ2030／2031／2032／2033／2037／
2041／2043土坑 ……188
第66図　ＳＫ2045／2046／2065／2072／2100／
2140／2141／2146土坑 ……189
第67図　ＳＫ2099／2142／2191／2214／2215／
2221土坑 ……190
第68図　ＳＫ2227／2239／2240／2251／2253／
2267土坑 ……191
第69図　ＳＫ2258／2266／2300／2304／2307／
2323／2327土坑 ……192
第70図　ＳＫ2315・2316／2334／2355／2356／
2372土坑 ……193
第71図　ＳＫ2339・2340／2366／2373／2463／
2501土坑 ……194
第72図　ＳＫ2500／2503土坑 ……195
第73図　ＳＫ2504／2505／2513／2517／
2524土坑 ……196
第74図　ＳＫ2400／2525／2527／
2602・2603土坑 ……197
第75図　ＳＫ1176土坑／ＳＫＩ2181竪穴状遺構
……198
第76図　ＳＫＩ2330／2388竪穴状遺構 ……199
第77図　遺構内(ＳＩ1105・1229・2158)
出土土器類(１) ……200
第78図　遺構内(ＳＩ2001・2005)出土土器類(２)
……201
第79図　遺構内(ＳＩ2005・2007)出土土器類(３)
……202
第80図　遺構内(ＳＩ2017・2019)出土土器類(４)
……203
第81図　遺構内(ＳＩ2019・2025)出土土器類(５)
……204
第82図　遺構内(ＳＩ2025・2036・2042)
出土土器類(６) ……205
第83図　遺構内(ＳＩ2042)出土土器類(７) ……206
第84図　遺構内(ＳＩ2134)出土土器類(８) ……207
第85図　遺構内(ＳＩ2228・2303・2344)
出土土器類(９) ……208
第86図　遺構内(ＳＩ2338・2370・2374)
出土土器類(10) ……209
第87図　遺構内(ＳＩ2374・2376)出土土器類(11)
……210
第88図　遺構内(ＳＩ2381・2460・2475)
出土土器類(12) ……211
第89図　遺構内(ＳＩ2333・2506・2507・
ＳＮＲ2002・2034)出土土器類(13) ……212
第90図　遺構内(ＳＮＲ2024・2026・2039・
2109・2176)出土土器類(14) ……213
第91図　遺構内(ＳＮＲ2156・2186・2279・
2308・2322)出土土器類(15) ……214
第92図　遺構内(ＳＮＲ2335・2371・2377・2611)
出土土器類(16) ……215
第93図　遺構内(ＳＮＲ2378・2612)出土土器類(17)
……216
第94図　遺構内(ＳＮＲ2613・2615)出土土器類(18)
……217
第95図　遺構内(ＳＮＲ2614・2615)出土土器類(19)
……218
第96図　遺構内(ＳＲ2040・2101・2102・2103・
2105・2106・2147)出土土器類(20) ……219
第97図　遺構内(ＳＲ2179・2185・2193・2194・2195・
2216・2299・2309・2379)出土土器類(21)
……220
第98図　遺構内(ＳＲ2317・2331・2332・2363・2405・
2452・ＳＱ2325・ＳＫ1176・1228)
出土土器類(22) ……221
第99図　遺構内(ＳＫ2016・2030・2037・2065・2215・
2227・2239・2240)出土土器類(23) ……222
第100図　遺構内(ＳＫ2240・2315・2316・2323・
2334・2355・2373・2500・ＳＫＩ2330・
ＳＫＰ2210・2367・2386・2435)
出土土器類(24) ……223
第101図　遺構内(ＳＩ1105)出土石器類(１) ……224
第102図　遺構内(ＳＩ1105・2158)出土石器類(２)
……225
第103図　遺構内(ＳＩ2158・1229・2001・2005)
出土石器類(３) ……226
第104図　遺構内(ＳＩ2005)出土石器類(４)…… ……227
第105図　遺構内(ＳＩ2005)出土石器類(５)…… ……228

第106図　遺構内(ＳＩ2005･2025･2042)
出土石器類(６)･･･229
第107図　遺構内(ＳＩ2042･2134･2228)
出土石器類(７)･･･230
第108図　遺構内(ＳＩ2228･2303･2338･2344)
出土石器類(８)･･･231
第109図　遺構内(ＳＩ2344)出土石器類(９)･･･232
第110図　遺構内(ＳＩ2374)出土石器類(10)･･･233
第111図　遺構内(ＳＩ2370･2376)出土石器類(11)
･･･234
第112図　遺構内(ＳＩ2381･ＳＱＮ2018･ＳＫ1012)
出土石器類(12)･･･235
第113図　遺構内(ＳＫ2030･2032･2214)
出土石器類(13)･･･236
第114図　遺構内(ＳＫ2142･2227･2240･2316･
2339･2340･2373･ＳＫＰ1204･2115･
2282･2379)出土石器類(14)･･･237
第115図　遺構外出土土器類(１)･･･238
第116図　遺構外出土土器類(２)･･･239
第117図　遺構外出土土器類(３)･･･240
第118図　遺構外出土土器類(４)･･･241
第119図　遺構外出土土器類(５)･･･242
第120図　遺構外出土土器類(６)･･･243
第121図　遺構外出土土器類(７)･･･244
第122図　遺構外出土土器類(８)･･･245
第123図　遺構外出土土器類(９)･･･247
第124図　遺構外出土土器類(10)･･･248
第125図　遺構外出土土器類(11)･･･249
第126図　遺構外出土土器類(12)･･･250
第127図　遺構外出土土器類(13)･･･251
第128図　遺構外出土土器類(14)･･･252
第129図　遺構外出土石器類(１)･･･253
第130図　遺構外出土石器類(２)･･･254
第131図　遺構外出土石器類(３)･･･255
第132図　遺構外出土石器類(４)･･･256
第133図　遺構外出土石器類(５)･･･257
第134図　遺構外出土石器類(６)･･･258
第135図　遺構外出土石器類(７)･･･259
第136図　遺構外出土石器類(８)･･･260
第137図　遺構外出土石器類(９)･･･261
第138図　遺構外出土石器類(10)･･･262
第139図　遺構外出土石器類(11)･･･263
第140図　遺構外出土石器類(12)･･･264
第141図　遺構外出土石器類(13)･･･265
第142図　遺構外出土石器類(14)･･･266
第143図　遺構外出土石器類(15)･･･267
第144図　遺構外出土石器類(16)･･･268
第145図　ＳＢ501掘立柱建物跡(１)･･･281
第146図　ＳＢ501掘立柱建物跡(２)／
ＳＢ502掘立柱建物跡･･･282
第147図　柱穴様ピット配置図
(ＬＫ～ＬＴ･50～56区)･･･283
第148図　ＳＢ1173掘立柱建物跡(１)･･･284
第149図　ＳＢ1173掘立柱建物跡(２)･･･285
第150図　ＳＢ1174／1175掘立柱建物跡･･･286
第151図　ＳＡ1240柵列跡･
ＳＢ1182掘立柱建物跡(１)･･･287
第152図　ＳＢ1182掘立柱建物跡(２)･･･288
第153図　ＳＢ2035掘立柱建物跡(１)･･･289
第154図　ＳＢ2035掘立柱建物跡(２)･･･290
第155図　ＳＢ2035掘立柱建物跡(３)･･･291
第156図　ＳＡ1183／1261柵列跡(１)･･･292
第157図　ＳＡ1183／1261柵列跡(２)･･･293
第158図　ＳＫ01／02／12／14土坑･･･294
第159図　近世出土遺物･･･294
第160図　第Ⅳ群土器群変遷図(案)･･･312
第161図　北部段丘面住居配置復元図･･･317

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧(１)･(２)･･･12
第２表　縄文時代柱穴様ピット一覧(１)～(３)･･･114
第３表　石器･石製品出土量一覧･･･124
第４表　近世柱穴様ピット一覧(１)～(４)･･･131
第５表　土器･土製品観察表(１)～(９)･･･269
第６表　石器･石製品観察表(１)～(３)･･･278
第７表　近世出土遺物観察表･･･294
第８表　竪穴住居跡一覧･･･319
第９表　土器埋設炉･土器埋設遺構･
焼土遺構一覧(１)･(２)･･･319

図　版　目　次

巻頭図版１
巻頭図版２
巻頭図版３
巻頭図版４
図版１　遺跡遠景
図版２　ＳＩ1105／1229／2158竪穴住居跡
図版３　ＳＩ2001･2005･2042竪穴住居跡(１)
図版４　ＳＩ2001･2005･2042竪穴住居跡(２)
図版５　ＳＩ2001･2005･2042竪穴住居跡(３)／ＳＩ2007竪穴住居跡
図版６　ＳＩ2017竪穴住居跡
図版７　ＳＩ2019／2028竪穴住居跡
図版８　ＳＩ2025／2036竪穴住居跡
図版９　ＳＩ2228／2134竪穴住居跡(１)
図版10　ＳＩ2134竪穴住居跡(２)
図版11　ＳＩ2344竪穴住居跡
図版12　ＳＩ2338竪穴住居跡(１)
図版13　ＳＩ2338竪穴住居跡(２)／ＳＩ2374竪穴住居跡･ＳＮＲ2377･2378土器埋設炉(１)
図版14　ＳＩ2374竪穴住居跡･ＳＮＲ2377･2378土器埋設炉(２)
図版15　ＳＩ2376竪穴住居跡･ＳＲ2379土器埋設遺構(１)
図版16　ＳＩ2376竪穴住居跡･ＳＲ2379土器埋設遺構(２)／ＳＩ2381竪穴住居跡
図版17　ＳＩ2460竪穴住居跡／ＳＩ2475竪穴住居跡／ＳＩ2506竪穴住居跡
図版18　ＳＩ2507竪穴住居跡
図版19　ＳＩ2333竪穴住居跡／ＳＱＮ2018石囲炉
図版20　ＳＮＲ2002／2026／2034土器埋設炉
図版21　ＳＮＲ2024／2039／2322土器埋設炉
図版22　ＳＮＲ2109／2156土器埋設炉･ＳＲ2101土器埋設遺構
図版23　ＳＮＲ2176土器埋設炉･ＳＲ2179土器埋設遺構／ＳＮＲ2186土器埋設炉周辺
図版24　ＳＮＲ2279／2308／2335土器埋設炉
図版25　ＳＮＲ2371／2611／2613土器埋設炉
図版26　ＳＮＲ2612／2614／2615土器埋設炉
図版27　ＳＲ2040／2105／2102･2103土器埋設遺構
図版28　ＳＲ2106／2185／2193土器埋設遺構
図版29　ＳＲ2147／2194･2195／2299土器埋設遺構
図版30　ＳＲ2216／2317／2331･2332／2363土器埋設遺構
図版31　ＳＱ2009／2010／2013／2014／2523／2526／2325配石遺構／ＳＫ2517土坑
図版32　ＳＱ2325配石遺構／ＳＫ2030／2500土坑
図版33　ＳＫ2501／2503／2504／2505／2513／2525土坑
図版34　ＳＫＰ2148／2437／ＳＢ1173･1174･1175／1182／2035掘立柱建物跡／ＳＡ1183柵列跡
図版35　遺構内出土土器(１)
図版36　遺構内出土土器(２)
図版37　遺構内出土土器(３)
図版38　遺構内出土土器(４)
図版39　遺構内出土土器(５)
図版40　遺構内出土土器(６)
図版41　遺構内出土土器(７)
図版42　遺構内出土土器(８)
図版43　遺構内出土土器(９)
図版44　遺構内出土土器(10)
図版45　遺構内出土土器(11)
図版46　遺構内出土土器(12)
図版47　遺構内出土土器(13)
図版48　遺構内出土土器(14)
図版49　遺構内出土土器(15)
図版50　遺構内出土土器(16)
図版51　遺構内出土土器(17)
図版52　遺構内出土石器(１)
図版53　遺構内出土石器(２)
図版54　遺構外出土土器(１)
図版55　遺構外出土土器(２)
図版56　遺構外出土土器(３)
図版57　遺構外出土土器(４)
図版58　遺構外出土土器(５)
図版59　遺構外出土土器(６)
図版60　遺構外出土土器(７)
図版61　遺構外出土土器(８)
図版62　遺構外出土石器(１)
図版63　遺構外出土石器(２)
図版64　遺構外出土石器(３)
図版65　遺構外出土石器(４)
図版66　遺構外出土石器(５)

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

岩手県二戸郡安代町田山に源を発し、秋田県北部を東から西に流れる米代川の流域では、しばしば大洪水による被害を受けている。(註１)

昭和47年７月に北九州で始まった梅雨前線による集中豪雨は、日本全国各地に被害をもたらした。本県でも、この集中豪雨による被害は大きく、天災融資法と激甚災害法とが適用されるほどであった。また、能代市･二ツ井町･森吉町･合川町･西仙北町･角館町には災害救助法が適用された。この中でも、特に被害が大きかったのが、米代川下流に位置する能代市･二ツ井町であった。(註２)

翌年、大洪水を機に「米代川工事実施基本計画」の見直しが行われ、上流ダム群により水量を調節することとなった。こうした上流ダム群の一つとして阿仁川の右支流、小又川に建設されることになったのが阿仁川ダムである。後に森吉山ダムと改称されるこのダムは、洪水調節の他、既得取水の安定化･河川環境の保全、灌漑用水･水道用水の供給、水力発電などを目的とする多目的ダムである。(註３)

秋田県教育委員会は、森吉山ダム建設によって水没する当該地域に関する埋蔵文化財の保護を目的として、平成４･５年の２箇年にわたって遺跡分布調査を実施した。その結果、桐内遺跡、二重鳥遺跡、漆下遺跡、栩岱(とちたい)遺跡、砕渕(じゃきぶち)遺跡、丹瀬口遺跡の新発見の６遺跡が開発区域に係わることを確認した。(註４)この結果に基づき、事業主体である森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は協議を重ね、平成３年発行の『秋田県遺跡地図(県北版)』に記された「周知の遺跡」、および遺跡分布調査で発見された「新発見の遺跡」の双方についての範囲確認調査を秋田県教育委員会が実施し、遺構･遺物の広がりを把握していくことを申し合わせた。

秋田県教育委員会では、平成６年度より範囲確認調査を実施し、平成10年にすべての範囲確認調査を終了した。その結果、新発見の遺跡が増え、現在貯水予定地周辺地域では60遺跡を数えている。(註５～７)

森吉山ダム関連の工事は、平成６年の下流工事用道路から開始され、翌年には事業地内の材料運搬路に移った。一方、同年に第12回日本ジャンボリーが平成10年に森吉山麓で開催されることが決定した。これに伴い、中心会場のノロ川への幹線道路として、森吉山ダムの工事用道路を一部供用することとなった。これを受けて、森吉町教育委員会によって、平成７年に日廻岱Ａ遺跡･砕渕遺跡、平成８年には地蔵岱遺跡･森吉家ノ前Ｂ遺跡･天津場Ｃ遺跡･深渡遺跡･上悪戸Ｄ遺跡のアクセス道路部分の発掘調査が実施され、記録保存が図られている。(註８～10)

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事工程に合わせて発掘調査を実施する合意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。平成７年、本遺跡が立地する日廻岱地区で範囲確認調査を実施し、日廻岱Ａ(4,100㎡)と日廻岱Ｂ(18,400㎡)の両遺跡を確認した。(註11)調査の結果、日廻岱Ａ･Ｂ遺跡ともに縄文時代前期と後期の遺物が出土し、日廻岱Ａ遺跡については縄文時代後期、日廻岱Ｂ遺跡については縄文時代前期と後期の集落遺跡と想定されることが報告されている。なお、日廻岱Ａ遺跡は平成７年度に森吉町教育委員会、平成12年度に秋田県教育委員会が発掘調査を実施し、縄文時代後期～晩期と近世

の遺跡であることが報告されている。秋田県教育委員会では、平成９～15年の７年間で、深渡遺跡(註12)、姫ヶ岱Ｃ・Ｄ遺跡(註13・14)、桐内Ａ～Ｄ遺跡(註15～17)、桐内沢遺跡(註18)、日廻岱Ａ・Ｂ遺跡(註19)、向様田Ａ～Ｆ遺跡(註20～23)、砕渕遺跡(註24)、漆下遺跡、森吉家ノ前Ａ・Ｃ遺跡、深渡Ａ遺跡(一部)等の発掘調査を実施している。

日廻岱Ｂ遺跡はダム湛水区域内に所在し、遺跡が水没するため、発掘調査を行って記録保存を図ることが必要になった。今回の調査は、遺跡総面積18,400㎡を平成14年５月14日から９月６日まで実施した。

第２節　調査要項

遺　跡　名　　日廻岱Ｂ遺跡(略号２ＨＭＴ－Ｂ)

遺跡所在地　　秋田県北秋田郡森吉町森吉字日廻岱89外

調査期間　　平成14年５月14日～９月６日

調査目的　　森吉山ダム建設事業に係る発掘調査

調査面積　　18,400㎡

調査主体者　　秋田県教育委員会

調査担当者

児玉　　準(秋田県埋蔵文化財センター　副主幹)		榮　　一郎(同　学芸主事)	
菅原　一彦(同　学芸主事)		山本　起嗣(同　学芸主事)	
石川　和良(同　学芸主事)		菅野美香子(同　文化財主事)	
佐々木彩子(同　非常勤職員)		鈴木　博文(同　非常勤職員)	
福山　大智(同　非常勤職員)		藤田　大誠(同　非常勤職員)	
松尾　睦子(同　非常勤職員)		毛利　美樹(同　非常勤職員)	

総務担当者

［平成14年度］	佐藤　　悟(秋田県埋蔵文化財センター　総務課長)	嶋田　敏輝(同　主査)	
	高橋　　修(同　主任)	成田　　誠(同　主事)	
［平成15年度］	金　　義晃(同　総務課長)	池端　　徹(同　副主幹)	
	高橋　　修(同　主任)	田口　　旭(同　主事)	
［平成16年度］	渡辺　　憲(同　総務課長)	池端　　徹(同　副主幹)	
	高橋　　修(同　主任)	田口　　旭(同　主事)	

※職名は調査年当時のもの

調査協力機関　　国土交通省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所

森吉町・森吉町教育委員会

註１　無明舎出版編　『秋田県昭和史』　無明舎出版　1989(平成元)年

註２　無明舎出版編　『秋田県近代総合年表』　無明舎出版　1988(昭和63)年

註３　川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年

註４　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第251集　1994(平成６)年

註５　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第259集　1995(平成７)年

註６　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年

註７　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

註８　森吉町教育委員会『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書』　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～
1996(平成８)年

註９　森吉町教育委員会『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書』　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～
1997(平成９)年

註10　森吉町教育委員会『上悪戸Ｄ遺跡発掘調査報告書』～比内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～ 1997(平成９)年

註11　註６に同じ

註12　秋田県教育委員会『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』
秋田県文化財調査報告書第286集　1999(平成11)年

註13　秋田県教育委員会『姫ヶ岱Ｃ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』
秋田県文化財調査報告書第287集　1999(平成11)年

註14　秋田県教育委員会『姫ヶ岱Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』
秋田県文化財調査報告書第300集　2000(平成12)年

註15　秋田県教育委員会『桐内Ｃ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』
秋田県文化財調査報告書第299集　2000(平成12)年

註16　秋田県教育委員会『桐内Ｂ遺跡･桐内Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』
秋田県文化財調査報告書第318集　2001(平成13)年

註17　秋田県教育委員会『桐内Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』
秋田県文化財調査報告書第334集　2002(平成14)年

註18　秋田県教育委員会『桐内沢遺跡･日廻岱Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』
秋田県文化財調査報告書第335集　2002(平成14)年

註19　註18に同じ

註20　秋田県教育委員会『向様田Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－遺構篇』
秋田県文化財調査報告書第346集　2003(平成15)年

註21　秋田県教育委員会
『向様田Ｂ遺跡･向様田Ｃ遺跡･向様田Ｅ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』
秋田県文化財調査報告書第347集　2003(平成15)年

註22　秋田県教育委員会『向様田Ｆ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』
秋田県文化財調査報告書第348集　2003(平成15)年

註23　秋田県教育委員会『向様田Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ－遺物篇』
秋田県文化財調査報告書第370集　2004(平成16)年

註24　秋田県教育委員会『砕渕遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ－』
秋田県文化財調査報告書第349集　2003(平成15)年

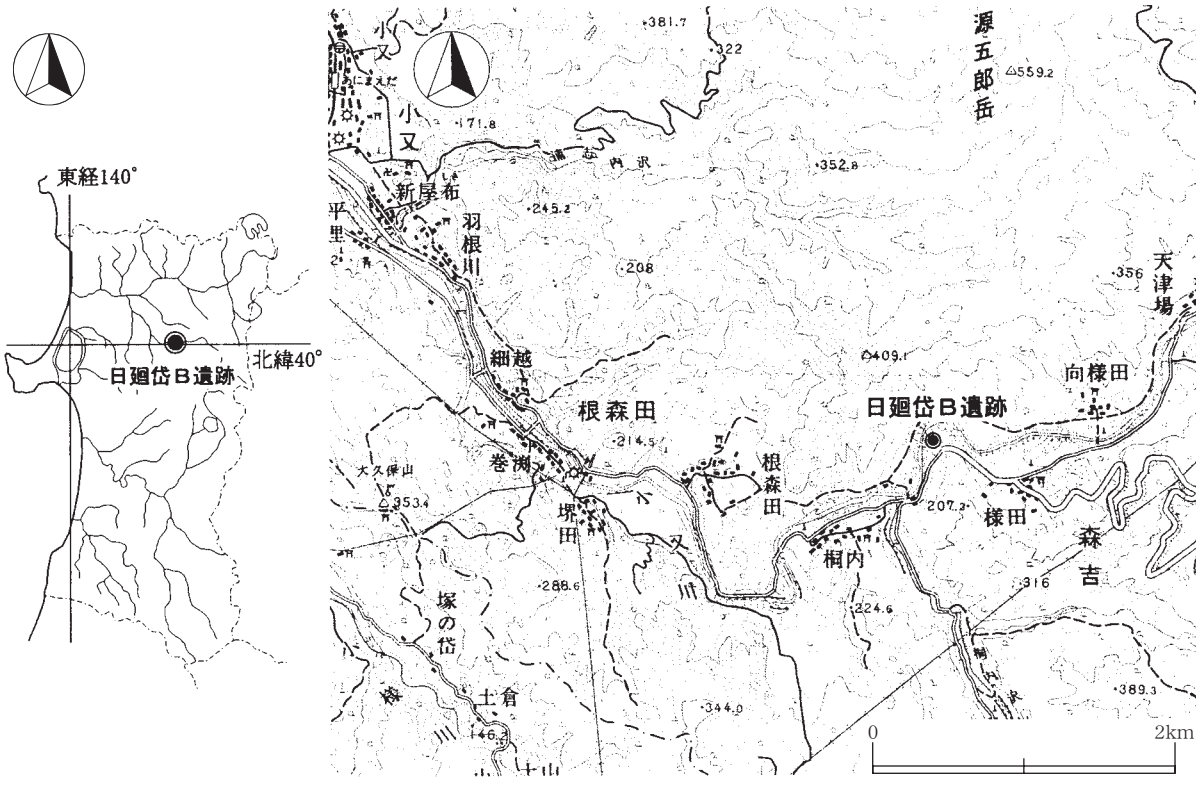
第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

日廻岱Ｂ遺跡は、秋田県北秋田郡森吉町に所在し、北緯40°02′32″、東経140°28′02″（世界測地系）に位置する。森吉山の北麓を西流する小又川左岸の河岸段丘上に立地する。秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅から南東約５㎞の地点である。

遺跡の所在する森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て、阿仁川に合流する小又川流域からなる。東は鹿角市･仙北郡田沢湖町、北は北秋田郡比内町･鷹巣町･合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の北秋田郡阿仁町との境には町名の由来となった標高1,454mのアスピーテ･トロイデ複式火山である森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地をはさんで、北北東に小繁森(標高1,010m)、北に高烏帽子(標高764m)、北西に源五郎岳(標高559m)などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10～11㎞である。これらの山地は分水嶺をなし、行政区分上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は、北秋田郡･仙北郡･鹿角市の境界をなす三ツ又森(標高1,119m)･柴倉岳(標高1,178m)に源を発し、六郎沢･粒様沢(つぶさまさわ)･ノロ川･連瀬沢(れんせざわ)などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。



第１図　日廻岱Ｂ遺跡の位置

小又川沿いには集落･耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大６段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側から山が迫ってきており、おおむね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面の方が勾配が急である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともにほ場整備事業が行われた。現在は、森吉山ダム建設のために、桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

この地域に分布する地質は、いわゆる東北地方日本海側グリーンタフ地域に属し、新第三紀中新世の地層を主としている。先第三紀の古期堆積岩(粘板岩、ホルンフェルス)が小繁森の頂上付近に顔を出しているが、本地域の基盤岩は新第三紀中新世初期～中期の火山岩類、火山砕屑岩類および堆積岩類からなる。これらを貫く粗粒玄武岩の貫入石がダイクおよびシート状に複雑に分布している。また、第四紀層の森吉山および柴倉岳の火山活動に伴う泥流堆積物･段丘堆積物･扇状地堆積物･河床堆積物･現河床堆積物が小又川に沿う平坦地を中心に被覆している。

当地区の地質を概観すると、小又川を境に右岸側は火山性砕屑岩類が分布し、左岸側には粗粒玄武岩が急崖を形成し、第四紀火山泥流堆積物が広く被覆している(註１)。

日廻岱Ｂ遺跡の立地する地点は、地形分類図では低地区分である谷底平野となっている(註２)。この谷底平野に浸食の復活により河岸段丘が形成されたものと考えられる。東側方向は台地･段丘地区分である砂礫段丘Ⅳとなっている。地質基盤は、第四期完新世の沖積段丘堆積物であり、未固結堆積物である礫を中心とする。ただし、遺跡内は北部と中央～南部の２つの段丘面に分けられる。北部は段丘礫層が、中央～南部は砂層が基盤である。

第２節　歴史的環境

日廻岱Ｂ遺跡周辺の遺跡分布については、平成３年発行の『秋田県遺跡地図(県北版)』およびこれまで実施されている遺跡分布調査･範囲確認調査から、大半の遺跡が小又川の流域に分布していることが認められる。森吉山ダム建設事業に伴う発掘調査が進むにつれて、当該地域の各時代における様相が徐々に明らかになってきている。これまでの発掘調査例を中心に歴史的環境を概観する。文中(　)内に示す数字は、第２図、第１表と対応する。

旧石器時代の遺跡は、平成15年に発掘調査された二重鳥Ａ遺跡(44)がある。現在から約15,000～14,000年前の後期旧石器時代のナイフ形石器、掻器、石刃、剥片など約330点が出土している(註３)。小又川を含めた阿仁川流域では初例である。また、平成７年の範囲確認調査で二重鳥Ｂ遺跡(45)、ネネム沢Ａ遺跡(63)において、わずかながら旧石器時代の遺物出土例が報告されている(註４)。遺跡例が僅少であるため、当該期の遺跡立地等の詳細は不明である。

縄文時代に入っても、周辺の遺跡では、草創期の遺跡は確認されていない。当該期の遺跡立地等の詳細についても不明である。

早期は、気候が温暖化の時期をむかえ、日本列島でも本格的な定住生活が開始されたとされている(註５)。周辺遺跡では、姫ヶ岱Ｄ遺跡(31)で尖底土器の底部が出土している(註６)。また、桂の沢遺跡(17)では爪形

文･貝殻沈線文･条痕文の土器が出土している[註7]。今回の日廻岱Ｂ遺跡の調査でも、尖底土器の底部や爪形文、貝殻沈線文･条痕文の土器が少量出土している。いずれの遺跡においても遺構は確認されていない。遺物が断片的に出土しているのみであり、当該期の遺跡立地等の詳細については不明である。

前期の前半期は、温暖な気候条件のもとで、定型的な大規模集落が形成されたとされている[註8]。秋田県でも、能代市杉沢台遺跡や協和町上ノ山Ⅱ遺跡などが代表遺跡として挙げられる。周辺の遺跡では、現在までに大規模集落の確認例は報告されていない。竪穴住居跡の検出例を見ても、二重鳥Ｃ遺跡(46)３軒[註9]、森吉家ノ前Ａ遺跡(66)１軒[註10]、深渡遺跡(76)５軒[註11]である。今回の日廻岱Ｂ遺跡の調査でも、当該期の竪穴住居跡２軒を検出している。よって、小規模な集落が点在していたと想定され、本遺跡もその中の小規模な集落だった可能性が高い。

中期には、東北地方を含む東日本を中心に縄文時代のピークを迎えたとされている[註12]。当該地域においても、その特徴は見受けられ、遺跡数は増加する。それに伴って、竪穴住居跡の検出例も増加する。二重鳥Ｃ遺跡(46)では、中期全般にわたる竪穴住居跡の検出例が報告され、中でも中葉の竪穴住居跡は11軒確認されている。また、当該期の土坑やフラスコ状土坑も多数検出されている[註13]。他の周辺遺跡でも竪穴住居跡の検出例はあるものの、いずれも数件程度の小規模な集落である。二重鳥Ｃ遺跡(46)は、他の周辺遺跡が立地する段丘面よりも約30m高い台地上に立地していることから、当該期の拠点は比較的高位段丘面に所在していたことも想定されよう。今回の日廻岱Ｂ遺跡の発掘調査では、縄文時代中期の遺物は少量出土した。しかし、当該期の遺構は検出されず、詳細は判然としない。

後期の東日本では祭祀的遺物が豊富に作られ、環状列石を代表例とする大規模な祭祀遺構を生んだ[註14]。秋田県では、大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡などが代表遺跡として挙げられる。今回の日廻岱Ｂ遺跡の調査では、これまでに周辺遺跡で検出例のなかった初頭の竪穴住居跡をまとまって検出した。また、本遺跡に近接して後期全般において形成された集落および祭祀遺跡である漆下遺跡が立地する。この遺跡は、居住域･墓域･捨て場等が明確に区別して形成されている[註15]。このような遺跡立地状況から、当該地域においては、遅くても後期前葉前後には、居住域、墓域、捨て場等が明確に区別されていたと推定される。換言すれば、以前の集落形態とは明らかに変異したといえよう。

晩期は、東北地方北部を中心に亀ヶ岡文化が展開する[註16]。当該地域においても、明らかにこの文化の影響は見られ、その代表遺跡として向様田遺跡群が挙げられる。特に、向様田Ａ遺跡(53)では、前半期の大規模な環状配石遺構と土坑墓群を検出している[註17]。また、隣接する向様田Ｄ遺跡(56)でも同時期の大量な遺物を伴う盛土が形成されている[註18]。これらは独立した祭祀域と考えられている[註19]。しかし、当該期における竪穴住居跡の検出例は少なく、集落の様相については不明な点が多い。周辺遺跡では、姫ヶ岱Ｄ遺跡(31)で２軒[註20]、二重鳥Ｅ遺跡(48)３軒[註21]、向様田Ｆ遺跡(58)２軒[註22]のみであり、現時点では晩期の大規模集落跡は確認されていない。今回の日廻岱Ｂ遺跡の発掘調査では、当該期の検出遺構は１基のみであるため、遺跡立地等の詳細は判然としない。

弥生時代については、上悪戸Ｂ遺跡(20)[註23]･桐内Ａ遺跡(23)[註24]･森吉家ノ前Ａ遺跡(66)[註25]で遺物が出土している。日廻岱Ｂ遺跡においても、平成７年の範囲確認調査で遺物が極少量出土している。いずれにしても、遺物が断片的に出土しているのみで、遺構検出例はない。そのため、集落の具体的な特徴や水稲耕作の存否を含めた生業形態など、当時の詳細な状況は不明である。また、古墳時代については、現在までに遺跡の確認例はなく、当時の遺跡立地等は不明である。

古代については、元慶２(878)年には秋田城下で蝦夷の激しい反乱が起こっている。いわゆる「元慶の乱」であり、八郎潟周辺の６ヶ村とともに、米代川流域の上津野(鹿角)、火内(大館・比内)、楢淵(すぎぶち)などの６村が蜂起している。「楢淵(すぎぶち)」とは、現在の阿仁地方であると考えられている。これらの地域は、自主独立を要求する蝦夷社会が確立され、古代にあっては律令化外の地として考えられている(註26)。周辺遺跡における古代の遺跡は、向様田Ｅ遺跡(57)・惣瀬遺跡(59)・天津場Ａ遺跡(60)・ネネム沢Ａ遺跡(63)・地蔵岱遺跡(71)が確認されている(註27)。このうち、向様田Ｅ遺跡(57)では、標高156m程の丘陵地で古代の竪穴住居跡３軒が検出されている(註28)。地蔵岱遺跡(71)では、平成８年の森吉町教育委員会が実施した発掘調査で、段丘北側の斜面から鉄滓の捨て場が確認されているが(註29)、遺跡内の一部が発掘調査されたに過ぎず、詳細は判然としない。また、同遺跡の平成９年の範囲確認調査では、平安時代の一定規模の集落跡であり、羽口・鉄滓が出土していることが報告されている(註30)。当時、当該地域においても集落が存在し、鉄など何らかの生産活動を行っていた可能性も想定される。今回の日廻岱Ｂ遺跡の発掘調査では、古代の遺構や遺物は確認されず、当該期の詳細は不明である。

森吉町を含めた阿仁地方の中世の様相については、発掘調査例や文献資料も少ないため、不明な点が多い。周辺の遺跡としては、いわゆる「中世城館(跡)」が阿仁前田地区に立地する。前田館(４)・花館(15)・天館(16)・仲ノ又館(18)があり(註31)、仲ノ又館には空堀や見張り台跡がある(註32)。いずれも、築館年代・館主は不明である。森吉山ダム建設区域ではこのような城館(跡)は確認されていないが、森吉家ノ前Ａ(66)で多数の中世掘立柱建物跡を検出している。総柱式の建物が主体をなし、建物の重複から数期間におよぶ変遷を想定できる。小又川流域では一定期間継続する中世の大規模な集落の検出は初例である(註33)。また、森吉家ノ前Ｂ遺跡(67)で室町時代後半に属すると推定される竪穴住居跡１軒が検出され、鉄器や中世陶器が出土している(註34)。森吉地区においては、一定規模の集落が存在していたと推定される。今回の日廻岱Ｂ遺跡の発掘調査では、中世の遺構は検出されず、不明である。

もともと森吉町を含む北秋田郡は地下資源や鉱山資源といった天然資源が豊富な地域であり、近世には阿仁銅山が盛んに採掘された。この銅山用の材、精錬用薪炭の供給地として森吉山を中心とした阿仁周辺が指定され、当然ながら小又川周辺の山々でも銅山用の材、精錬用薪炭が生産された。これらの生産物は、牛馬や人力によって桐内沢を経由して阿仁町の向林や三枚に運搬され、当時の物流のメインルートはここであった。このような経緯で当地方が開発され、順次拠点となった集落の中間に集落が配置されたと考えられる。これが森吉山ダム建設が決定する以前の集落の原型となった(註35)。近世の遺跡は、本遺跡に隣接する日廻岱Ａ遺跡(32)(註36)、二重鳥Ｇ遺跡(50)(註37)、深渡Ａ遺跡(77)(註38)などがある。いずれの遺跡でも、掘立柱建物跡が検出されている。今回の日廻岱Ｂ遺跡の発掘調査でも、近世の掘立柱建物跡７棟を検出している。建物構造として、母屋＋附属屋のものがあり、農耕等に使用する家畜の存在が推定される。

上述から、この地域一帯は、遅くても縄文時代前期中葉以降から小規模な集落が断続的に営まれて現代に至ったといえよう。

註１　川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年

註２　秋田県農政部農地整備課　『大野台開発計画区域　土地分類基本調査　米内沢』　1978(昭和53)年

註３　森吉町埋蔵文化財発掘調査委員会　『平成15年度　埋蔵文化財発掘調査概報　森吉Ｂ遺跡･二重鳥Ａ遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　2004(平成16)年

註４　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年

註５　勅使河原彰　「早期」　『縄文時代研究事典』　東京堂出版　1995(平成７)年

註６　秋田県教育委員会　『姫ヶ岱Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』
秋田県文化財調査報告書第300集　2000(平成12)年

註７　秋田県教育委員会　『桂の沢遺跡－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』
秋田県文化財調査報告書第247集　1994(平成６)年

註８　註５に同じ

註９　森吉町教育委員会　『平成13年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～二重鳥Ｃ･Ｇ遺跡』　2003(平成15)年

註10　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』21(平成14年度)　2003(平成15)年

註11　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』22(平成15年度)　2004(平成16)年

註12　註５に同じ

註13　註９に同じ

註14　註５に同じ

註15　註10に同じ

註16　註５に同じ

註17　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－遺構篇』
秋田県文化財調査報告書第346集　2003(平成15)年

註18　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』20(平成13年度)　2002(平成14)年

註19　註17に同じ

註20　註６に同じ

註21　森吉町教育委員会　『平成12年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｄ･Ｅ･Ｆ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　2002(平成14)年

註22　秋田県教育委員会　『向様田Ｆ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－』
秋田県文化財調査報告書第348集　2003(平成15)年

註23　森吉町教育委員会　『平成10年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ｂ･Ｃ遺跡　姫ヶ岱Ａ･Ｂ･Ｃ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1999(平成11)年

註24　秋田県教育委員会　『桐内Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　秋田県文化財発掘調査報告書第334集　2002(平成14)年

註25　註11に同じ

註26　註１に同じ

註27　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県北版)』　1991(平成３)年

註28　秋田県教育委員会　『向様田Ｂ遺跡･向様田Ｃ遺跡･向様田Ｅ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第347集　2003(平成15)年

註29　森吉町教育委員会　『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』
1997(平成９)年

註30　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

註31　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

註32　註31に同じ

註33　註11に同じ

註34　註29に同じ

註35　註１に同じ

註36　秋田県教育委員会　『桐内沢遺跡･日廻岱Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』
秋田県文化財調査報告書第335集　2002(平成14)年

註37　註９に同じ

註38　註11に同じ

第１表文献(表中の番号は文献番号に対応する)

１　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県北版)』　1991(平成３)年

２　秋田県　『秋田県史考古編』　1960(昭和35)年

３　沼館愛三　『出羽諸城の研究』　1980(昭和55)年

４　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

５　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第226集　1992(平成４)年

６　秋田県教育委員会　『桂の沢遺跡－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第247集　1994(平成６)年

７　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

８　森吉町教育委員会　『上悪戸Ｄ遺跡発掘調査報告書～比内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』
1997(平成９)年

９　秋田県教育委員会　『桐内Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　秋田県文化財発掘調査報告書第334集　2002(平成14)年

10　秋田県教育委員会　『桐内Ｂ遺跡･桐内Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』
秋田県文化財調査報告書第318集　2001(平成13)年

11　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第259集　1995(平成７)年

12　秋田県教育委員会　『桐内Ｃ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第299集　2000(平成12)年

13　秋田県教育委員会　『桐内沢遺跡･日廻岱Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』　秋田県文化財調査報告書第335集　2002(平成14)年

14　秋田県教育委員会　『姫ヶ岱Ｃ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』　秋田県文化財調査報告書第287集　1999(平成11)年

15　秋田県教育委員会　『姫ヶ岱Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　秋田県文化財調査報告書第300集　2000(平成12)年

16　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年

17　森吉町教育委員会　『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』
1996(平成８)年

18　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

19　森吉町教育委員会　『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』
1997(平成９)年

20　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

21　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第251集　1994(平成６)年

22　秋田県教育委員会　『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』
秋田県文化財調査報告書第286集　1999(平成11)年

23　秋田県教育委員会　『上岱Ⅰ遺跡発掘調査報告書－国道105号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』
秋田県文化財調査報告書第184集　1989(平成元)年

24　森吉町教育委員会　『平成10年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ｂ･Ｃ遺跡　姫ヶ岱Ａ･Ｂ･Ｃ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1999(平成11)年

25　森吉町教育委員会　『平成12年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｄ･Ｅ･Ｆ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　2002(平成14)年

26　森吉町教育委員会　『平成13年度　埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～
二重鳥Ｃ･Ｇ遺跡』　2003(平成15)年

27　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－遺構篇』
秋田県文化財調査報告書第346集　2003(平成15)年

28　秋田県教育委員会　『向様田Ｂ遺跡･向様田Ｃ遺跡･向様田Ｅ遺跡
－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第347集　2003(平成15)年

29　秋田県教育委員会　『向様田Ｆ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』
秋田県文化財調査報告書第348集　2003(平成15)年

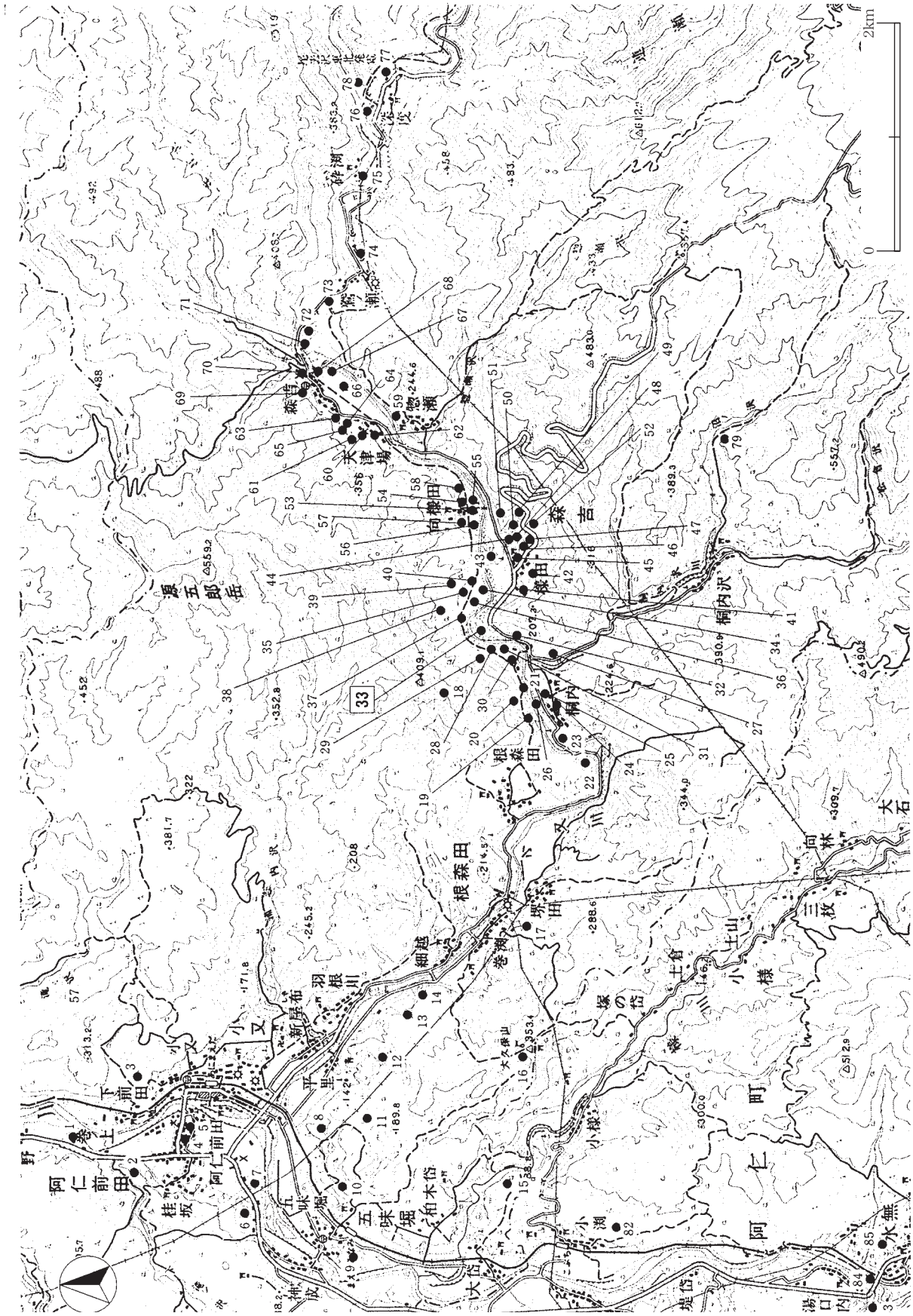
30　秋田県教育委員会　『砕渕遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ－』
秋田県文化財調査報告書第349集　2003(平成15)年

31　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』20(平成13年度)　2002(平成14)年

32　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』21(平成14年度)　2003(平成15)年

33　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』22(平成15年度)　2004(平成16)年

34　森吉町埋蔵文化財発掘調査委員会　『平成15年度　埋蔵文化財発掘調査概報　森吉Ｂ遺跡･二重鳥Ａ遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　2004(平成16)年



第２図　日廻岱Ｂ遺跡の位置と周辺の遺跡

第１表　周辺遺跡一覧(１)

地図番号	遺跡名	遺　跡　所　在　地	主な時代	遺　構　・　遺　物	文献
1	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱345	縄文	縄文土器片	1
2	高館	森吉町阿仁前田字道行沢118	中世	空堀	1･4
3	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根36	縄文	縄文土器片、石器	1
4	前田館	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	中世	館跡	1･3･4
5	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	縄文	縄文土器片(前期･中期)、石器	1
6	陣場岱II	森吉町阿仁前田字陣場岱15、字菅ノ沢7	縄文	縄文土器片	1
7	陣場岱I	森吉町阿仁前田字陣場岱140-1	縄文	縄文土器片(前期･中期)、石鏃、石匙、石槍	1
8	五味堀高屋布	森吉町五味堀字下夕大久保岱174	縄文	縄文土器片	1
9	五味堀	森吉町五味堀字五味堀1	縄文	縄文土器片、石器	1
10	ボサツ堂	森吉町五味堀字堂ノ前45-46	縄文	縄文土器片(晩期)	1･2
11	五味堀大久保岱	森吉町五味堀字大久保岱20	縄文	縄文土器片(後期)、独鈷石	1
12	小又小平里A	森吉町小又字涌坪74	縄文	縄文土器片(後期)、石器	1
13	小又小平里B	森吉町小又字上岱9	縄文	縄文土器片(後期)、石器	1
14	片平館	森吉町根森田字片平館3	縄文	縄文土器片(後期)、石器	1
15	花館	森吉町五味堀字野崎1-82	中世	空堀	1･4
16	天館	森吉町五味堀字天館101	中世	館跡	1･4
17	桂の沢	森吉町根森田字桂ノ沢19-2外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、配石遺構、焼土遺構、土器埋設遺構、土坑、捨て場、土製品、石器	1･5･6
18	仲ノ又館	森吉町根森田字仲ノ又75	中世	空堀	1･4
19	上悪戸A	森吉町根森田字上悪戸4-1外	縄文	縄文土器片(後期)、土坑、石器	7
20	上悪戸B	森吉町根森田字上悪戸8-12	弥生	弥生土器片、土坑、石器	7･24
21	上悪戸C	森吉町根森田字上悪戸7外	縄文	縄文土器片(後期)、土坑、溝跡、柱穴様ピット、石器	7･24
22	上悪戸D	森吉町根森田字上悪戸34-33外	縄文	縄文土器片(後期･晩期)、竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、石囲炉、柱穴様ピット、石器、土製品	7･8
23	桐内A	森吉町森吉字桐内前田5-1外	縄文･弥生･近世	縄文土器(早期･中期･後期･晩期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、配石遺構、フラスコ状土坑、土坑、溝跡、窯跡、柱穴様ピット、土製品、石製品、弥生土器、陶磁器	7･9
24	桐内B	森吉町森吉字桐内家ノ下16外	縄文	縄文土器片(前期～晩期)、土器埋設遺構、石器	7･10
25	桐内C	森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文	縄文土器(前期･中期･後期･晩期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、石囲炉、焼土遺構、土坑、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、トランシェ様石器	11･12
26	桐内D	森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文	縄文土器片(早期～晩期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、土坑、溝跡、柱穴様ピット、土製品、石器	10･11
27	桐内沢	森吉町森吉字桐内沢関下タ103	縄文	縄文土器(前期･中期･後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、竪穴状遺構、フラスコ状土坑、捨て場、石器	11･13
28	姫ヶ岱A	森吉町根森田字姫ヶ岱8外	縄文	縄文土器片(前期)、土坑、配石遺構、石器	7･24
29	姫ヶ岱B	森吉町根森田字姫ヶ岱14-10外	縄文	縄文土器、土坑、柱穴様ピット、石器	7･24
30	姫ヶ岱C	森吉町根森田字姫ヶ岱12-2外	縄文	縄文土器(中期･後期･晩期)、竪穴住居跡、焼土遺構、フラスコ状土坑、土坑、石囲炉、石器	7･14･24
31	姫ヶ岱D	森吉町根森田字姫ヶ岱12-31外	縄文	縄文土器片(早期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、配石遺構、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、石器	7･15
32	日廻岱A	森吉町森吉字日廻岱65外	縄文･近世	縄文土器(前期･中期･後期･晩期)、掘立柱建物跡(近世)、焼土遺構、土坑、溝跡、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、陶磁器、銭貨、砥石	13･16･17
33	日廻岱B	森吉町森吉字日廻岱86外	縄文･近世	縄文土器片(早期～晩期)、竪穴住居跡、竪穴状遺構、配石遺構、焼土遺構、土器埋設遺構、土器埋設炉、柱穴様ピット、土坑、掘立柱建物跡(近世)、石器、土製品、石製品、陶磁器	16･本書
34	橋場岱A	森吉町森吉字橋場岱48外	縄文	縄文土器片(中期･後期)、竪穴住居跡、土坑、石器	7
35	橋場岱B	森吉町森吉字橋場岱69外	縄文	縄文土器片(後期･晩期)、土坑、溝跡、石器	7
36	橋場岱C	森吉町森吉字橋場岱42外	縄文	縄文土器片(後期･晩期)、配石遺構、土坑、石器	7
37	橋場岱D	森吉町森吉字橋場岱110-1	縄文	縄文土器片(晩期)、竪穴住居跡、配石遺構、土坑、溝跡、石器	7
38	橋場岱E	森吉町森吉字橋場岱109	縄文	縄文土器片、竪穴住居跡、竪穴状遺構、配石遺構、土坑、石器	7
39	橋場岱F	森吉町森吉字橋場岱101外	縄文	縄文土器片(晩期)、土坑、石器	7
40	橋場岱G	森吉町森吉橋場岱6-1外	縄文	縄文土器片(後期)、石器	7
41	上ハ岱A	森吉町森吉字上ハ岱102外	縄文	縄文土器片(中期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器	16
42	上ハ岱B	森吉町森吉字上ハ岱70外	旧石器･縄文	旧石器、縄文土器片(後期)、竪穴住居跡、土坑	16
43	漆下	森吉町森吉字漆下2-1外	縄文･中世	縄文土器(前期･中期･後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、配石遺構、焼土遺構、竪穴状遺構(中世)、掘立柱建物跡(縄文･中世)、捨て場、フラスコ状土坑、土器埋設炉、石積み階段状道路、陥し穴、柱列、柱穴様ピット、土坑、石組炉(中世)、溝跡、土製品、石器、石製品	16･31･32

第１表　周辺遺跡一覧（２）

地図番号	遺跡名	遺　跡　所　在　地	主な時代	遺　構　・　遺　物	文献
44	二重鳥A	森吉町森吉字二重鳥31-1外	旧石器・縄文	旧石器、縄文土器片（前期～晩期）、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑フラスコ状土坑、土器埋設炉、土器埋設遺構、焼土遺構、捨て場、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品	16・34
45	二重鳥B	森吉町森吉字二重鳥11外	旧石器・縄文	旧石器、縄文土器片（前期～晩期）、竪穴住居跡、焼土遺構、土坑、石器	16
46	二重鳥C	森吉町森吉字二重鳥93外	縄文	縄文土器片（前期～後期）、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土器埋設遺構、配石遺構、焼土遺構、土器埋設炉、フラスコ状土坑、土坑、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、土偶	16・26
47	二重鳥D	森吉町森吉字二重鳥39	縄文	縄文土器片（後期）、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、土坑、石器、土製品、石製品	16・25
48	二重鳥E	森吉町森吉字二重鳥65外	縄文・弥生	縄文土器片（前期・後期・晩期）、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、土坑、フラスコ状土坑、石器、土製品、石製品、弥生土器	16・25
49	二重鳥F	森吉町森吉字二重鳥124-1外	縄文・弥生	縄文土器、柱穴様ピット、土坑、フラスコ状土坑、石器、弥生土器	16・25
50	二重鳥G	森吉町森吉字二重鳥80外	縄文・近世以降	縄文土器片（中期・晩期）、掘立柱建物跡（縄文・近世）、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、土坑、銭貨、煙管	16・26
51	二重鳥H	森吉町森吉字二重鳥6外	縄文	縄文土器片（晩期）、土坑、石器	1・16
52	水上ミ	森吉町森吉字水上ミ42-1外	縄文	縄文土器片（中期・晩期）、竪穴住居跡、土坑、石器	16
53	向様田A	森吉町森吉字向様田家ノ下モ8外	縄文	縄文土器（晩期）、竪穴住居跡、焼土遺構、土器埋設遺構、環状配石遺構、土坑、柱穴様ピット、捨て場、石器、石製品、土製品	7・27
54	向様田B	森吉町森吉字向様田67-1外	縄文	縄文土器（晩期）、配石遺構、土坑、石器、土製品	7・28
55	向様田C	森吉町森吉字向様田76外	縄文	縄文土器（後期・晩期）、配石遺構、土坑、石器、土製品、石製品	7・28
56	向様田D	森吉町森吉字向様田家ノ下モ14-1外	縄文	縄文土器（中期・後期・晩期）、竪穴住居跡、配石遺構、焼土遺構、捨て場、土器埋設遺構、柱穴様ピット、土坑、盛土、石器、土製品、石製品	7・31
57	向様田E	森吉町森吉字向様田家ノ下モ36外	縄文・古代・中世	縄文土器（後期・晩期）、竪穴住居跡（縄文・古代）、焼土遺構、土器埋設遺構、土坑、炉、溝跡、掘立柱建物跡（中世）、柱列（中世）、石器、土製品、土師器、須恵器、鉄製品	7・28
58	向様田F	森吉町森吉字向様田57外	縄文	縄文土器（後期・晩期）、竪穴住居跡、土坑、柱穴、溝跡、石器	7・29
59	惣瀬	森吉町森吉字惣瀬86外	縄文・古代	縄文土器片（後期）、竪穴住居跡（古代）、土坑、石器	18
60	天津場A	森吉町森吉字天津場15-3	縄文・古代	縄文土器片（後期）、竪穴住居跡、土坑、石器、須恵器	16
61	天津場B	森吉町森吉字天津場16-1	縄文	縄文土器片（後期）、竪穴住居跡、石囲炉、土坑、石器	16
62	天津場C	森吉町森吉字天津場87-1外	縄文	縄文土器片（後期）、土坑、石器	16・19
63	ネネム沢A	森吉町森吉字ネネム沢26外	旧石器・縄文・古代	旧石器、縄文土器片（後期）、土器（古代）、焼土遺構、竪穴住居跡、土坑	16
64	ネネム沢B	森吉町森吉字ネネム沢17外	縄文	縄文土器片（後期）、焼土遺構、石器	16
65	ネネム沢C	森吉町森吉字ネネム沢6-1	縄文	縄文土器片（晩期）、土坑	16
66	森吉家ノ前A	森吉町森吉字森吉家ノ前145外	縄文・古代・中世	縄文土器片（前期・中期・後期）、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、竪穴状遺構、土坑、溝跡（中世）、掘立柱建物跡（中世）、柱穴様ピット、石器、土師器、須恵器、羽口、陶磁器（中世）、銭貨（中世）	16・32・33
67	森吉家ノ前B	森吉町森吉字森吉家ノ前138外	縄文・中世	縄文土器片（後期）、竪穴住居跡（中世）、焼土遺構、配石遺構、土坑、石器、石冠、木器、中世陶器、鉄器	16・19
68	森吉家ノ前C	森吉町森吉字森吉家ノ前114外	中世・近世	縄文土器片、掘立柱建物跡（中世・近世）、竪穴状遺構、炉跡、石器、陶磁器（中世・近世）	16・33
69	森吉A	森吉町森吉字森吉95	縄文	縄文土器片（後期）、土坑、石組、火葬墓、石器	16
70	森吉B	森吉町森吉字森吉69	縄文	縄文土器片（後期）、石器	16・34
71	地蔵岱	森吉町森吉字地蔵岱74外	縄文・古代	縄文土器片（中期・後期）、竪穴住居跡（縄文・古代）、土坑、焼土遺構、溝跡、捨て場、石器、石製品、土師器、須恵器、羽口、鉄滓	18・19
72	地蔵岱A	森吉町森吉字地蔵岱124外	縄文	縄文土器片（中期・後期）、焼土遺構、土坑	18
73	鷲ノ瀬	森吉町森吉字鷲ノ瀬80外	縄文	縄文土器片（後期）、竪穴住居跡、土器埋設遺構、土坑、フラスコ状土坑、貝風呂、石器	1・18・20
74	栩岱	森吉町森吉字栩岱74外	縄文	縄文土器片（後期・晩期）	21
75	砕渕	森吉町森吉字砕渕124外	縄文	縄文土器（中期・後期）、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、石器、土製品、石製品	17・30
76	深渡	森吉町森吉字深渡家ノ前104-1外	縄文	縄文土器（前期～晩期）、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、フラスコ状土坑、土坑、柱穴様ピット、石棺様組石、掘立柱建物跡、石器	18・19 22・33
77	深渡A	森吉町森吉字深渡家ノ前45外	縄文・近世	縄文土器（前期・中期・後期・晩期）、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、石器、トランシェ様石器、掘立柱建物跡（近世）、陶磁器（近世）	18・33
78	丹瀬口	森吉町森吉字丹瀬2-1外	縄文	縄文土器片（後期）	21
79	桐内沢清兵衛岱	森吉町森吉字清兵衛岱46	縄文	縄文土器片（後期・晩期）	1
80	風張城	阿仁町吉田字寺屋布1-7	中世	空堀、井戸跡	1
81	家の上	阿仁町吉田字家ノ上	縄文	縄文土器片、石鏃	1
82	高田城	阿仁町小淵字山ノ内65-32	中世	空堀	1
83	熊堂	阿仁町水無字湯口内451-1	縄文	縄文土器片（中期）、石鏃	1
84	上岱II	阿仁町水無字上岱135-2	縄文	縄文土器片（中期）	1
85	上岱I	阿仁町水無字上岱104-2	縄文	縄文土器片（前期・中期・後期）、竪穴住居跡、土坑、石器	1・23

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

日廻岱Ｂ遺跡は、森吉山の北麓を西流する小又川が南の丘陵で遮られ北折し、さらに南に流れを変える屈曲部左岸の河岸段丘上に立地する。遺跡は日廻岱地区の北東部に位置し、南西側には日廻岱Ａ遺跡が隣接する。第２章でも述べたが、遺跡内は北部と中央～南部の２段丘面に分かれる。北部段丘面の標高は約131mであり、北端部には標高約129mの一段低い段丘面がある。また、北部段丘面の北東端部は、現状で北東側の標高が約133m、南西側の標高が約130mと北東側から南西側に傾斜する緩斜面であるが、断層あるいは地すべり地形であると想定される。南部段丘面は北側で標高約127m、南側で標高約124mを測り、比高差は３m程である。遺跡の現況はほぼ全域が休耕田で、昭和48年以降の耕地整理による水田造成時に地山面まで削平を受けている。

南部段丘面北西側では、縄文時代早期中葉の爪形文、貝殻腹縁文･条痕文などを施文した土器片が出土している。また、南部でも縄文時代早期の尖底土器の底部小破片が出土している。

縄文時代前期後葉では、南部段丘面で縄文時代前期末の竪穴住居跡１軒を検出している。また、北部段丘面でも、縄文時代前期の竪穴住居跡１軒を検出している。さらに、遺跡西端部の地山漸移層から縄文時代前期後葉の遺物が出土しているため、同時期に小規模な集落が存在していたと推定される。

縄文時代中期は中葉～後葉の遺物が全体的に出土している。出土量が僅少であり、遺構は確認されていないことから、当該期の様相は定かではない。

縄文時代後期初頭の集落跡は、北部段丘面に立地する。23軒の竪穴住居跡の他、竪穴住居の炉と考えられる土器埋設炉、土器埋設遺構等が分布し、それに伴う同時期の遺物も多数出土している。住居跡は床面まで削平されているものも多いが、分布状況から中央に広場を持つ環状集落を形成していたものと判断できる。また、土坑数基を検出しているが、その分布からは墓域が存在していたとは判断し難く、おそらく墓域は別地点に形成していたと推定される。北東端緩斜面では、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡２軒と土坑数基を検出している。土坑は検出状況から土坑墓と推定されるものが多く、小規模な居住域と墓域を形成していたと推定される。

北部段丘面北端では、竪穴住居跡から縄文時代晩期前葉の遺物が出土している。当該期の検出遺構はこの１基であるため、遺跡立地等の詳細については判然としない。

近世の遺構として、南部段丘面で掘立柱建物跡を７棟検出し、周辺から近世陶磁器の小破片も少量出土している。掘立柱建物跡は、主屋と附属屋から構成されており、当該期にもこの地域を集落として利用していたといえよう。

以上のことから、日廻岱Ｂ遺跡では縄文時代と近世に集落が営まれたと推定される。中心となる縄文時代においては、縄文時代後期初頭にはいわゆる環状集落が形成され、当該地域の拠点集落として存在していた可能性が高い。

第２節　調査の方法

１　野外調査

調査はグリッド法で行った(第３図)。調査対象全域にグリッドを設定するため、旧建設省打設の３級基準点No.９を用いて、調査区内に日本測地系平面直角座標第Ｘ系の座標値に整合する点(Ｘ＝4,150.000m、Ｙ＝31,200.000m)を求め、これを原点(ＭＡ50)とした。この原点を通る国家座標第Ｘ系の南北方向に南北基準線Ｘ軸を設定した。これに直交して、原点を通る線を東西基準線Ｙ軸とし、両基準線に平行して当該区域に４×４ｍの方眼グリッドを組んだ。原点をＭＡ50として、東西方向には、基準線上を西に４ｍ進む毎にＭＢ･ＭＣ･ＭＤ････と正順に、東に４ｍ進む毎にＬＴ･ＬＳ･ＬＲ････と逆順に各々Ａ～Ｔまでの２文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、基準線上を北に４ｍ進む毎に51･52･53････、南に４ｍ進む毎に49･48･47････と増減する２桁のアラビア数字を付した。各区は、南東隅を画する南北線と東西線の呼称を組み合わせて、ＭＡ50･ＭＢ51･ＭＣ52････のように呼ぶこととした。

現状での地形が遺跡内で北部･中央部･南部の３つに大きく分かれることと、調査面積が広大で効率化を図るために、便宜的に調査区を北側調査区(北部段丘面･北東端緩斜面･北端部段丘面)、中央調査区(南部段丘面北側)、南側調査区(南部段丘面南側)の３調査区に分割した。

遺構番号は、確認順に南側調査区は01から、中央調査区は1001から、北側調査区は2001から付し、遺構の性格を表す略記号と組み合わせてＳＫ01のように呼称した。ただし、調査の進行に伴い、遺構の性格が当初予想したものと異なると判断して略記号を変更した場合や、途中で遺構でないことが判明して欠番とした場合がある。確認後の遺構精査は、長軸に沿う２分割法と、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを残す４分割法で行うことを原則とした。

遺構内出土遺物は遺跡名･出土遺構名･出土層位･出土年月日･種別と必要に応じて遺物番号を、遺構外出土遺物は遺跡名･出土区･出土層位･出土年月日･種別をチャック付きポリ袋もしくは耐水用荷札に記入のうえ取り上げることを原則とした。

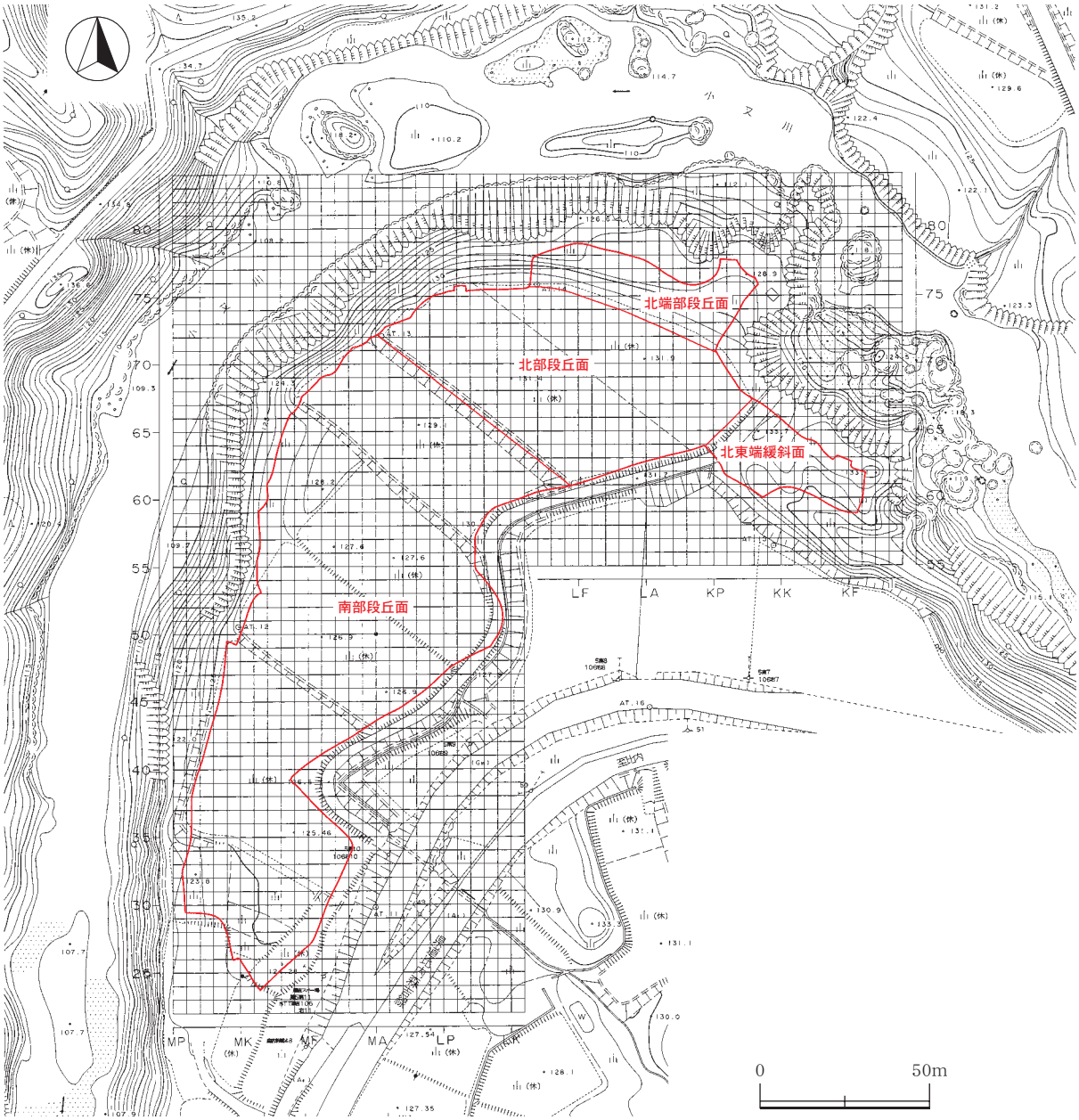
記録は、図面と写真によった。遺構実測は、平面図については、原則的に各グリッド杭を基準として、主に手作業で計測を行ったが、一部はトータルステーションを使用した。断面図はすべて手作業で計測を行った。土層断面図には、土層の特徴を注記し、必要に応じてエレベーション図も作成した。遺構の平面図･断面図の原図縮尺は１/20を基本としたが、細部の表現が必要なところでは縮尺１/10の計測も行っている。写真は、35㎜カメラを使用し、フィルムは35㎜のモノクロ･カラーリバーサル･ネガカラーを主に使用したが、必要に応じてブローニー判のモノクロ･カラーリバーサルも使用した。また、発掘調査終了の際はラジコン･ヘリコプターによる遺跡全景の空中写真撮影を行った。

２　室内整理

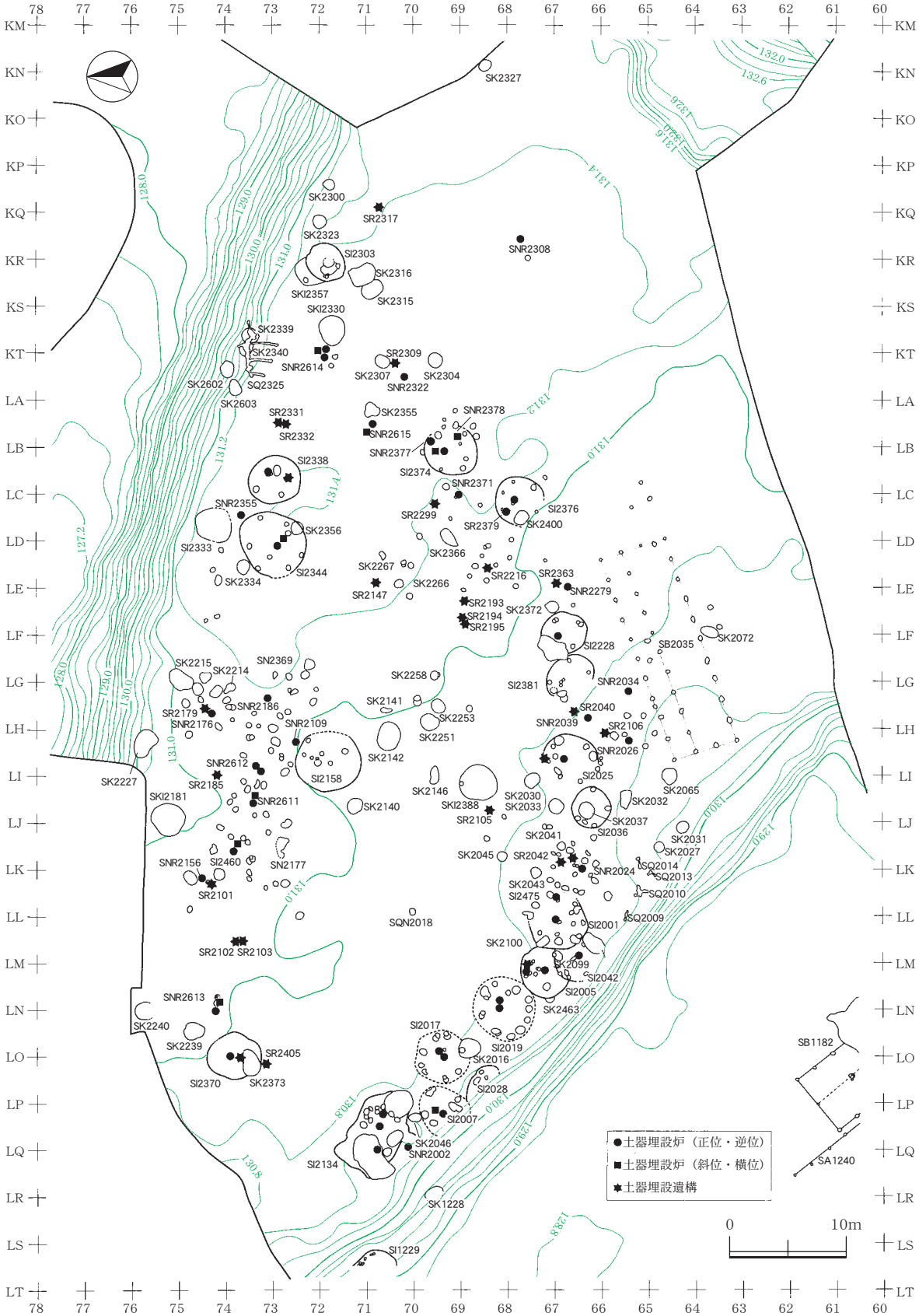
各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせて平成14年11月から平成15年３月まで第二原図を作成した。第二原図の製図は平成15年12月から平成16年２月にかけて第一測量設計株式会社に委託した。

出土遺物は、平成14年９月から平成15年１月にかけて洗浄･注記作業を実施した。注記作業終了後、土器の接合復元作業を平成14年11月から平成15年３月に行った。この間、各出土遺物を分類し、報告書に掲載するものを選別した。最終的に、土器･土製品約460点、石器･石製品約200点を図化した。実測は、基本的に１／１で実測図を作成し、報告書に掲載するにあたっては適宜縮尺を変えて製図した。土器･土製品は、実測･製図を平成15年４月から平成16年３月にかけて秋田県埋蔵文化財センター北調査課で行った。石器の実測･製図については、150点を平成15年６月から11月にかけて株式会社アルカに委託した。残り50点は平成15年12月から平成16年３月にかけて秋田県埋蔵文化財センター北調査課で作業を行った。また、出土遺物の写真撮影は平成16年３月と11月にいろは写房に委託した。

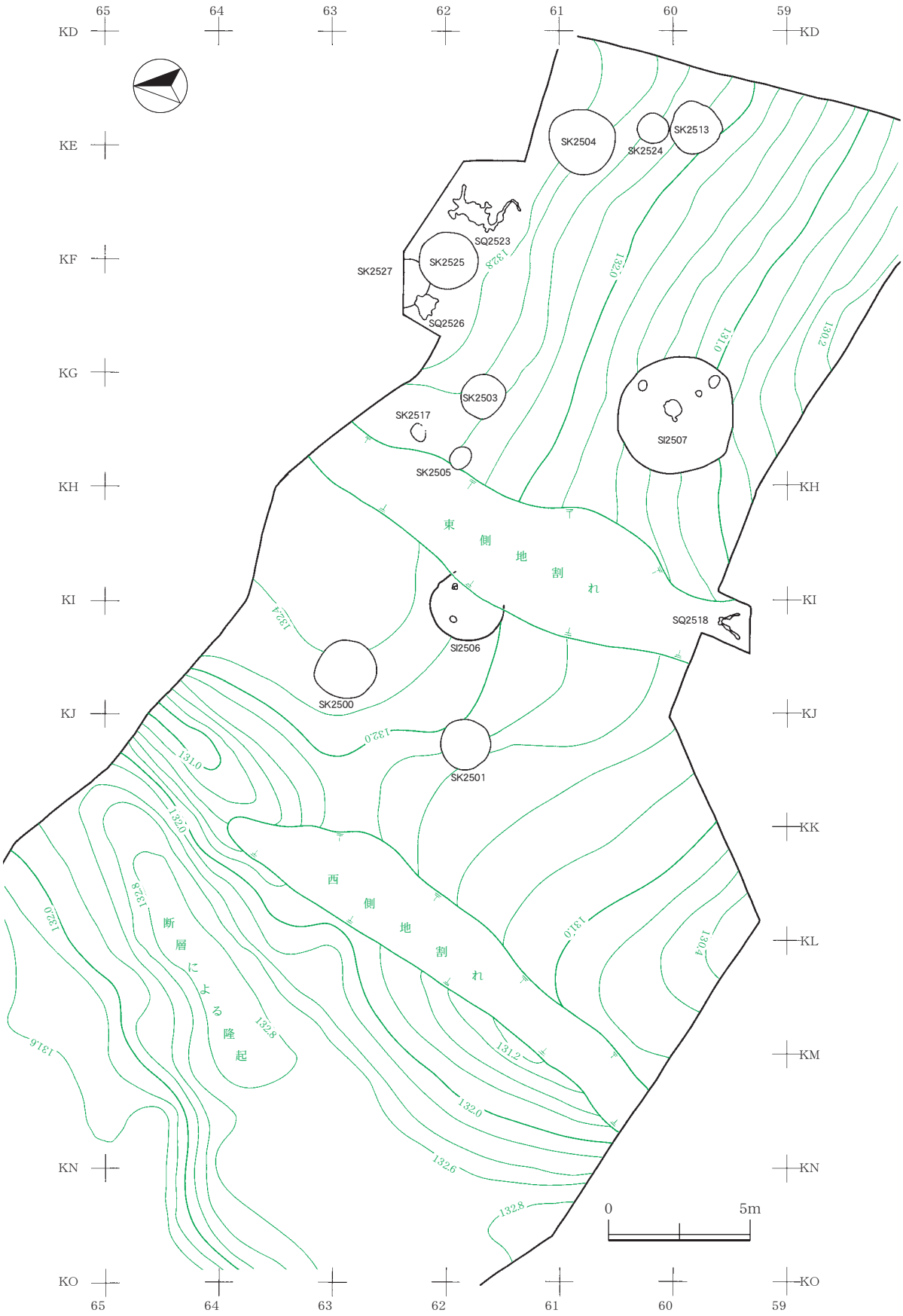
原稿は、平成16年12月に取りまとめて編集し、平成16年12月末に入稿した。



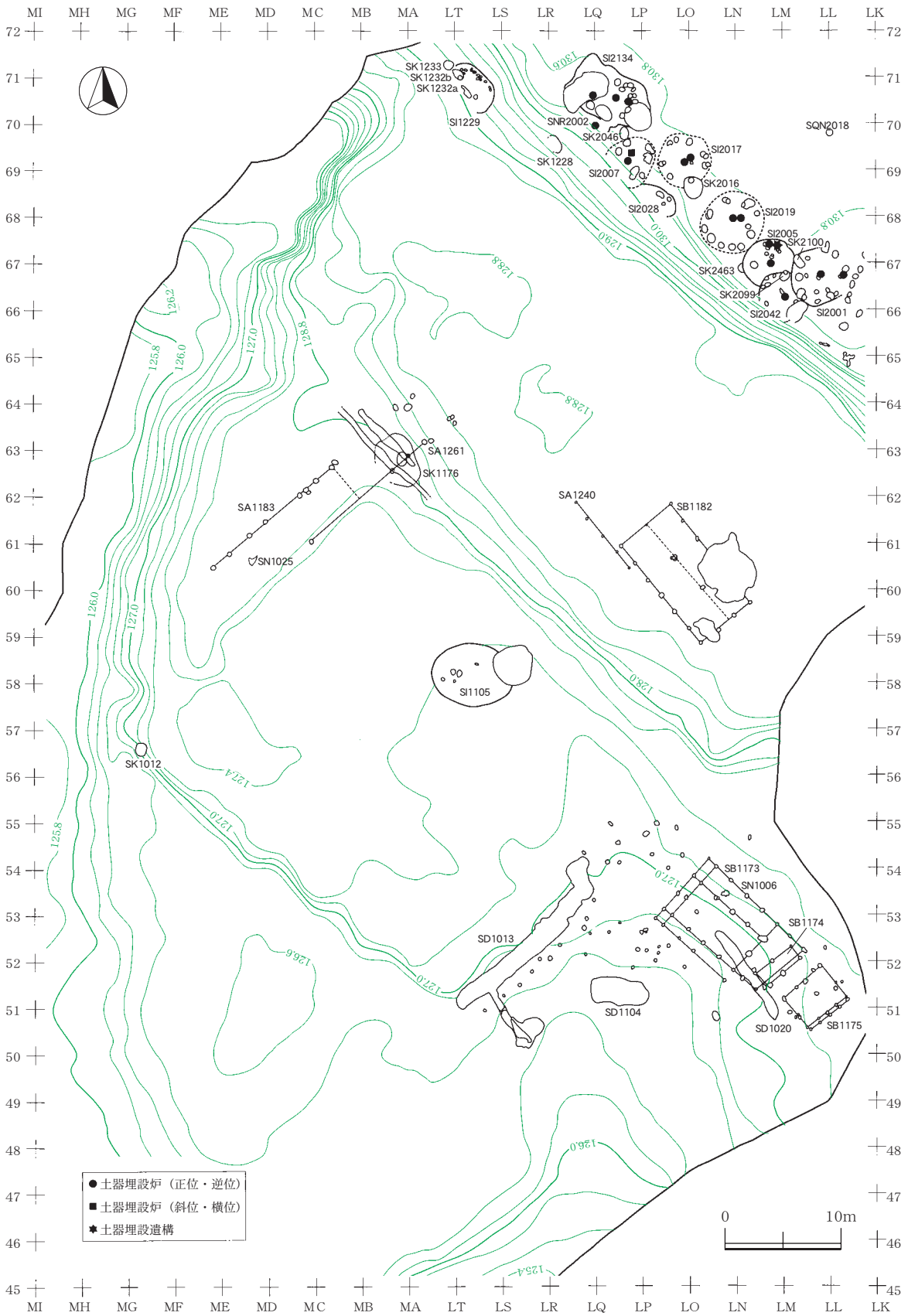
第３図　グリッド配置図



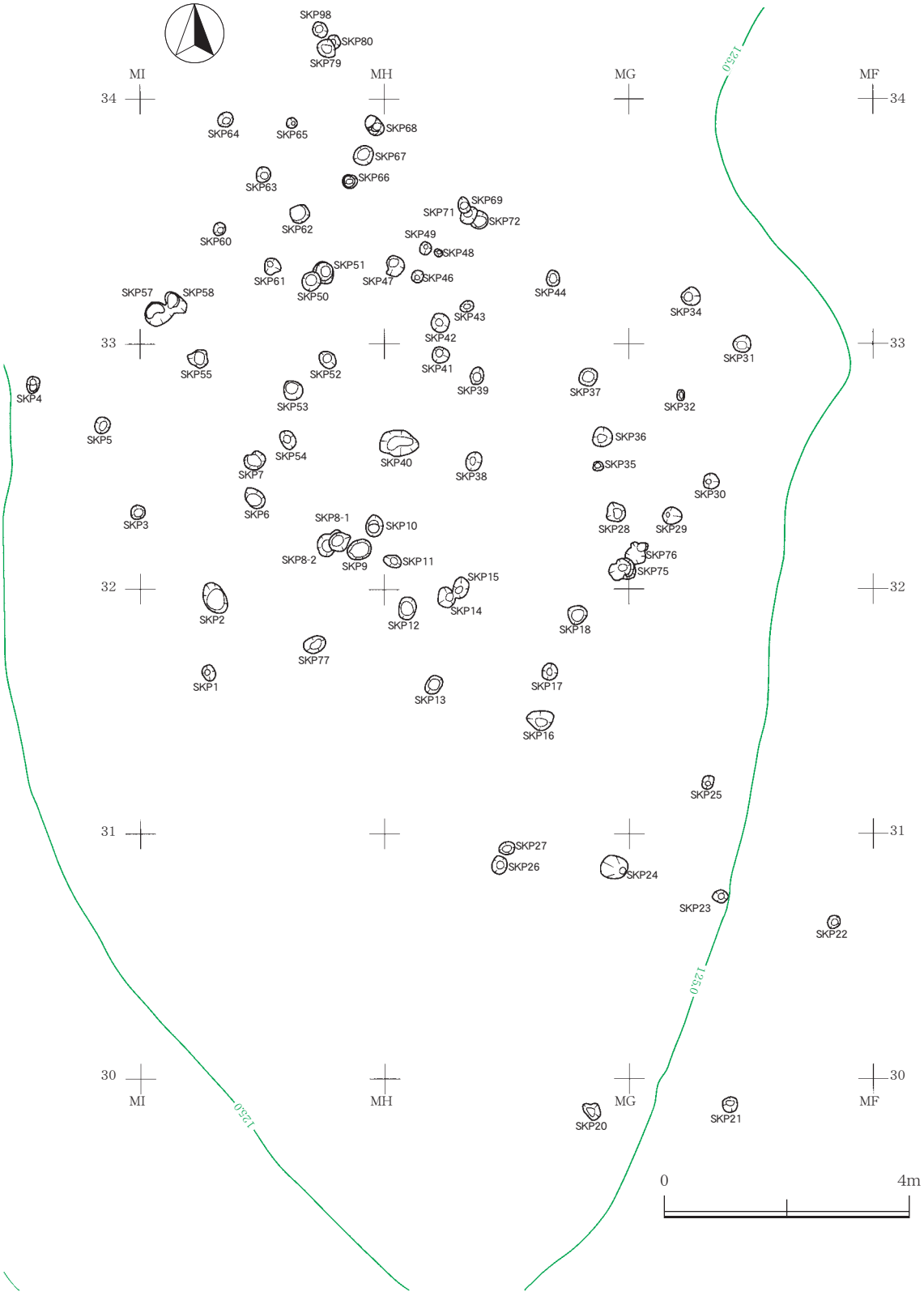
第４図　北部段丘面遺構配置図



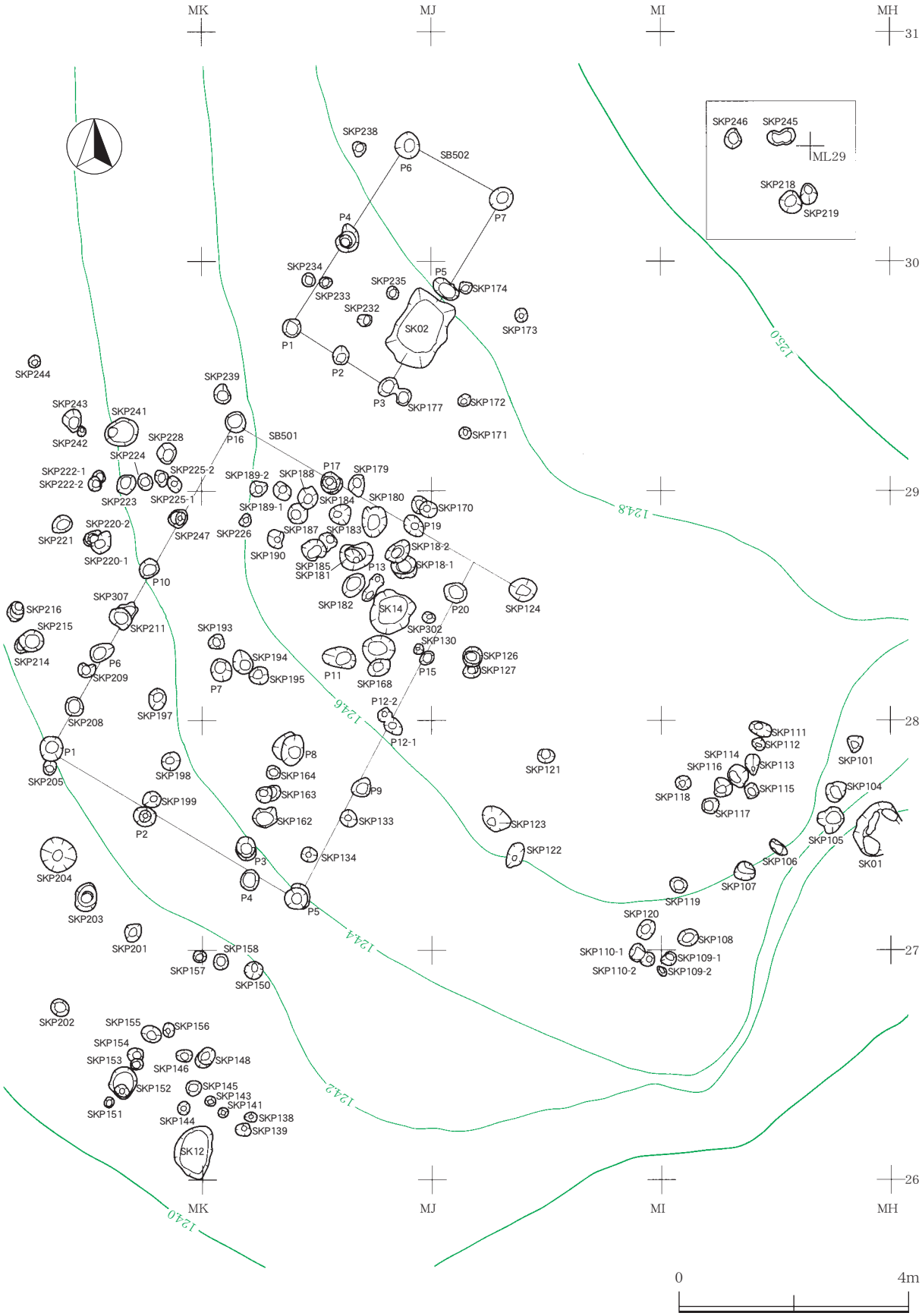
第５図　北東端緩斜面遺構配置図



第６図　南部段丘面(北側)遺構配置図



第７図　南部段丘面(南側)遺構配置図(１)



第８図　南部段丘面(南側)遺構配置図(２)

第３節　調査の経過

発掘調査開始前の平成14年４月22～26日、４月30日～５月２日、７日～９日の合計11日間、重機による表土除去を行った。発掘調査は、平成14年５月14日～９月６日まで実施した。

第１週（５月14日～17日）　発掘機材、ベルトコンベアーの搬入、事務所周辺の整備を行った。北側調査区･中央調査区は基本土層の写真撮影、図面作成を開始した。

第２週（５月20日～24日）　粗掘りを開始した。中央調査区･南側調査区では検出遺構の精査も開始した。北側調査区では基本土層ベルトの調査を行った。

第３週（５月27日～31日）　粗掘りと遺構精査を進めた。北側調査区では、竪穴住居跡に伴う焼土と土器埋設遺構９基を検出した。また、すでに検出していた10×２間の庇付の掘立柱建物跡と土坑６基の精査を行った。中央調査区では、基本土層ベルトの調査および調査区東側と西側の遺構検出を行った。南側調査区では、多数検出した柱穴様ピット約70基の精査を行った。28日、杉渕北調査課長来跡。29日、大野副所長来跡。

第４週（６月３日～７日）　北側調査区では、引き続いて竪穴住居跡に伴う焼土･土器埋設遺構･10間×２間の庇付の掘立柱建物跡･土坑の精査を行った。竪穴住居跡に伴う焼土･土器埋設遺構の検出状況から調査区南西側で竪穴住居跡が一部重複しながら弧状に巡ることが判明。中央調査区では、調査区東側で掘立柱建物跡と思われる柱穴様ピット群を検出したため、北東方向に調査範囲を拡張して表土除去と粗掘りを行った。また、西側の遺構検出も行った。南側調査区では、引き続き柱穴様ピット群の精査を行った。５日、芳賀所長、杉渕北調査課長来跡。６日、文化財保護室藤澤･泉田学芸主事来跡。

第５週（６月10日～14日）　北側調査区では、竪穴住居跡･土坑などの精査を行った。中央調査区では、調査区東側の掘立柱建物跡と新しく検出した竪穴住居跡の精査を行った。また、調査区北側の未調査部分の粗掘りも行った。南側調査区では、引き続き柱穴様ピット群の精査を行った。11日、鈴木文化財保護室長、杉渕北調査課長来跡。13日、大野副所長、杉渕北調査課長来跡。14日、杉渕北調査課長来跡。

第６週（６月17日～20日）　北側調査区では、竪穴住居跡の精査を引き続き行った。また、調査区中央東側の精査も始め、新たに土器埋設遺構４基を検出した。中央調査区では、引き続き掘立柱建物跡と竪穴住居跡の精査を行った。また、調査区北側の未調査部分の粗掘りも行った。南側調査区では、柱穴様ピット群の精査が終了したため、ベルトコンベアーを撤去し調査を終了した。19日、奈良文化財研究所岡村道雄氏、大野副所長、杉渕北調査課長来跡。

第７週（６月24日～28日）　北側調査区では、引き続き竪穴住居跡の精査を行った。中央調査区では、調査区東側と西側の掘立柱建物跡と縄文時代前期竪穴住居跡の精査を行った。また、未調査部分の粗掘りも行った。26日、前田基幹集落センターで作業員の健康診断を行った。

第８週（７月１日～５日）　北側調査区では、竪穴住居跡に伴う土器埋設遺構の精査を行った。調査区北東側では石囲炉･土器埋設遺構等を検出した。中央調査区では、調査区東側と西側の掘立柱建物跡と不整形土坑の精査を行った。

第９週（７月８日～12日）　北側調査区では、南西部の精査を終了したため、中央部の精査を進めた。新たに土器埋設遺構10基を検出した。北東部では、土器埋設遺構の精査を行った。北東端部の粗掘りを開始した。中央調査区では、調査区東側の掘立柱建物跡と中央部北側の不整形土坑･掘立柱建物跡の精査を行った。12日、芳賀所長来跡。

第10週（７月15日～19日）　北側調査区では、調査区中央部で検出した土器埋設遺構とその周辺にある柱穴様ピットの精査を行った。ＬＨ75区から板状土偶が出土した。北東部では、土器埋設遺構と竪穴住居跡の精査を行った。北東端部では、重機による表土除去時に確認している配石遺構の精査を行った。また、未調査部分の粗掘りを行った。中央調査区では、中央部柱穴様ピット群の精査を行った。

第11週（７月22日～26日）　北側調査区では、調査区中央部南方寄りに新たに竪穴住居跡を検出し、竪穴住居跡の炉と推定される土器埋設遺構の精査を行った。北東部では、竪穴住居跡の精査を行った。北東端部では、配石遺構の精査を行い、斜面下の部分に石囲炉を伴う竪穴住居跡を検出した。北端部の下位面部分では、粗掘りを行った。中央調査区では、引き続き中央部柱穴様ピット群の精査を行った。重機による北西部の盛土除去も行った。また、地山面の地形測量も開始した。

第12週（７月29日～８月２日）　北側調査区では、調査区中央部中央の竪穴住居跡の炉と推定される土器埋設遺構およびそれに伴う柱穴群の精査を終了した。中央部南方寄りに新たに竪穴住居跡を検出し、精査を行った。北東端部は検出した遺構の精査を行った。北端部の下位面と斜面では粗掘りを行った。北東部の精査は終了した。中央調査区では、調査区中央部を地山付近まで掘り下げ、遺構･遺物の最終確認をした。北端部北側調査区境界付近を掘り下げ、竪穴住居跡と土坑それぞれ１基ずつを検出した。北西部の造成土を重機により掘削した。

第13週（８月５日～９日）　北側調査区では、調査区中央南方寄りに検出した竪穴住居跡の精査を行った。北端部の下位面と斜面は、引き続き粗掘りを行った。北東端部では、石囲炉を伴う竪穴住居跡の精査と未調査部分の掘り下げを行った。新たに配石遺構１基を検出した。中央調査区では、石囲炉を伴う竪穴住居跡の精査を終了し、大形不整形土坑の精査を行った。７日、大野副所長来跡。９日、南側調査区を原因者森吉山ダム工事事務所に引き渡した。

第14週（８月19日～23日）　北側調査区では、調査区中央部南方の精査を終了した。北端部では、下位面の精査を終了し、引き続き斜面の粗掘りを行った。北東端部では、引き続き配石遺構･大規模の性格不明遺構の精査を行った。石囲炉を伴う竪穴住居跡の精査を終了した。中央調査区では、引き続き大形不整形土坑の精査を行った。また、小又川寄りの落ち込み部分の粗掘りも行った。22日、芳賀所長、杉渕北調査課長来跡。

第15週（８月26日～29日）　北側調査区では検出遺構の精査をほぼ終了した。遺跡全景空中写真撮影に備え、竪穴住居群が弧状に形成されている景観を明瞭に示すため、完掘した竪穴住居跡のプラン上にペンキを塗った。中央調査区では、残っていた区域の地形測量を行った。

第16週（９月２日～６日）　各調査区ですべての遺構精査が終了し、現場撤収作業を行う。２日、ラジコン･ヘリコプターによる遺跡全景空中写真撮影。３･４日、パリノ･サーヴェイ株式会社による岩石肉眼石質鑑定。６日、調査終了。

第４章　調査の記録

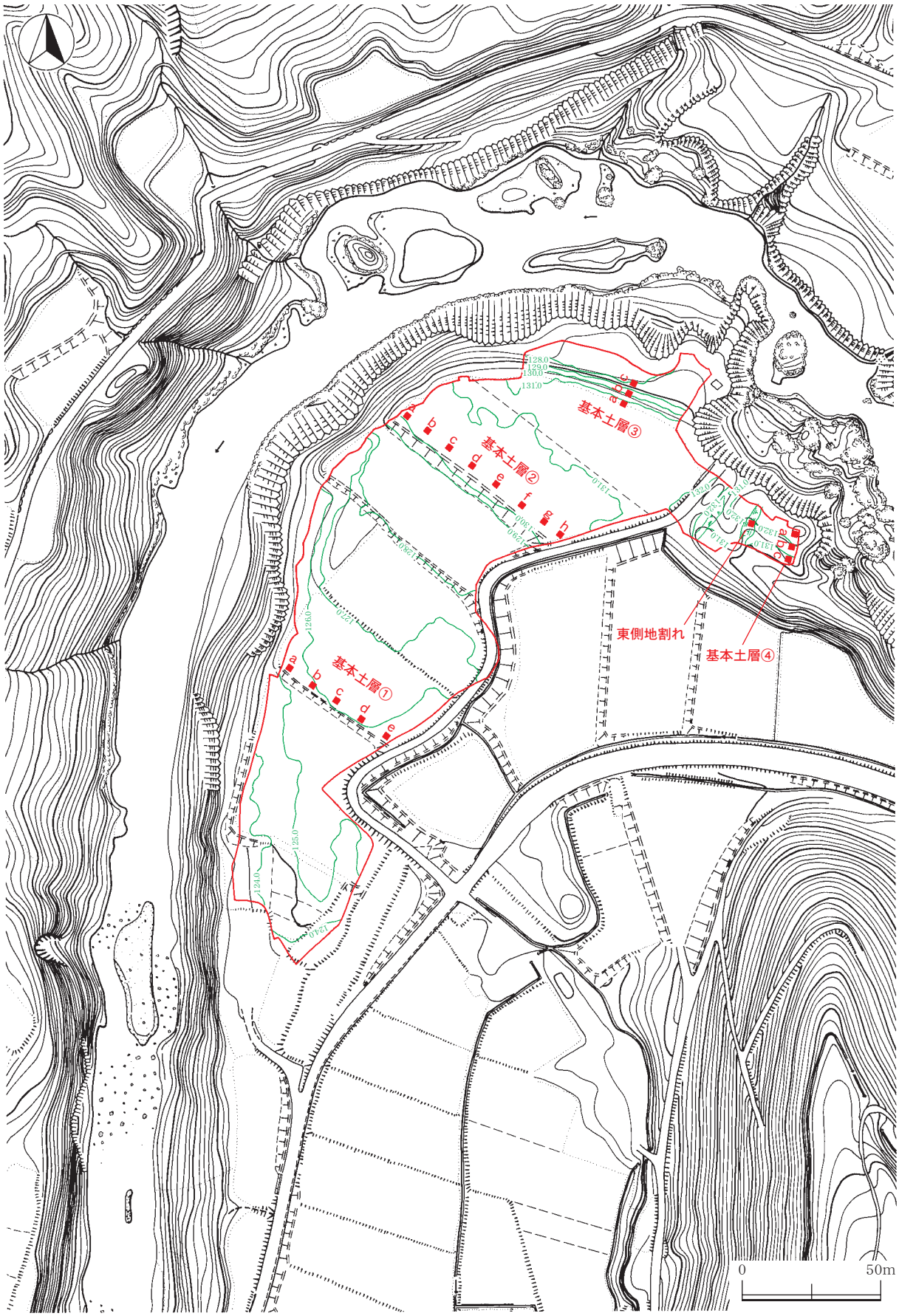
第１節　基本層序(第９～11図)

調査区は、南北２段の段丘面、北東端部の緩斜面、北端部の小規模な段丘面および段丘崖に大きく分かれる。北側の段丘面と南側の段丘面は第９図の基本土層②ラインをおおよその境界とする。北側が高位の段丘面で、南側の低位段丘面との高低差は約２ｍである。

南部段丘面は遺跡内で最も広い面で、調査前は大きく３段の平坦面からなる旧水田であった。調査の結果、それらの３段の平坦面は後世の造成の結果であり、段丘面としては１面であることが判明した。当該面は北側が高く、南に低く傾斜する。南北は約180ｍにおよび、高低差は約９ｍである。昭和50年代のほ場整備に伴う大規模な造成により、全体的に大きく削平を受けている。特に北側では削平が強く、一面に段丘礫層が露出する。縄文時代の遺構がかろうじて残存していたのは中央やや北寄りの部分である。南側および中央東側では近世の所産である掘立柱建物跡、柱穴群が確認されている。また、西側は段丘崖に続く斜面であり、縄文時代早期の遺物が少量出土している。基本土層①ではⅠ層は表土で層厚10㎝弱、Ⅱ層は旧水田の耕作土で層厚10㎝前後である。Ⅲ･Ⅳ層は耕地整理による一括の造成土で、東側には旧水田耕作土(Ⅴ層)が確認された。Ⅵ層は腐植を多く含む黒褐色土であり、上位層との層界は明瞭、下位層との層界は不明瞭である。Ⅶ層は地山漸移層である。Ⅵ層はこの地点および西側の斜面で残存しているのみであり、大部分でほ場整備の際の削平により消失している。地山は黄褐色砂質シルト層である。遺構確認面はⅦ層上面、Ⅶ層が残存していない部分は地山上面である。縄文時代の遺構と近世の遺構は同一面で検出した。

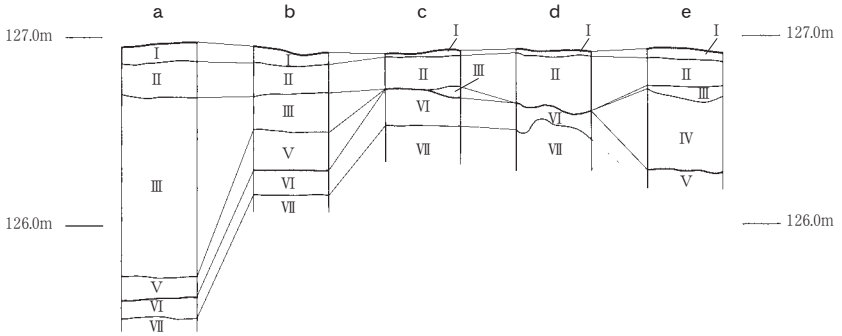
北部段丘面は遺跡内で最も高い段丘面で、調査前の現況は集落移転に伴い放棄された旧水田であった。面積は約4,000㎡、現地表面の標高は約131.5ｍである。昭和50年代のほ場整備により全体的に削平を受けている。基本土層②ではⅠ層は表土で層厚約10㎝である。Ⅱ層は旧水田の耕作土で層厚は10㎝前後である。部分的に水田床土直下に酸化鉄が沈着する(Ⅲ層)。Ⅳ層は細分が可能だが、耕地整理による一括の造成土である。層厚は10㎝前後、北西端では１ｍである。南側では２枚の旧水田耕作土が確認でき(Ⅴ･Ⅵ層)、その直下に縄文時代後期初頭の包含層であるⅦ･Ⅷ層が位置する。Ⅶ層とその上位層との層界は明瞭である。Ⅸ層は地山漸移層で、削平を強く受けている東側では盛土直下に地山漸移層が位置する。地山は黄褐色シルト層で、西側では部分的に段丘礫層が露出する。遺構はⅨ層上面、削平によりⅨ層が残存していない場合は地山上面で検出した。Ⅶ層の遺存状況および遺構の遺存状況から、旧地形は小又川の流れに沿って、北東側が高く南西側に緩やかに傾斜していたと考えられ、耕地造成の際に東側を削平し、西側に盛土をして平坦面を造ったと考えられる。

北端の小規模な段丘面は北部段丘面のさらに北側に位置し、現地表面は北部段丘面より約3.5ｍ低い。面積約1,000㎡、現地表面の標高は約128ｍである。地山層まで削平を受けており、地山直上に耕作土が堆積する。遺構は検出されなかった。段丘崖は北部段丘面からの流出土が堆積する(基本土層③)。Ⅰ層は表土で層厚は約10㎝、Ⅱ～Ⅴ層は上からの流出土で上位で約10㎝、下位では約80㎝堆積する。Ⅲ～Ⅴ層からは縄文時代後期初頭の遺物が18ℓの遺物収納箱で約40箱出土した。流出土に伴い



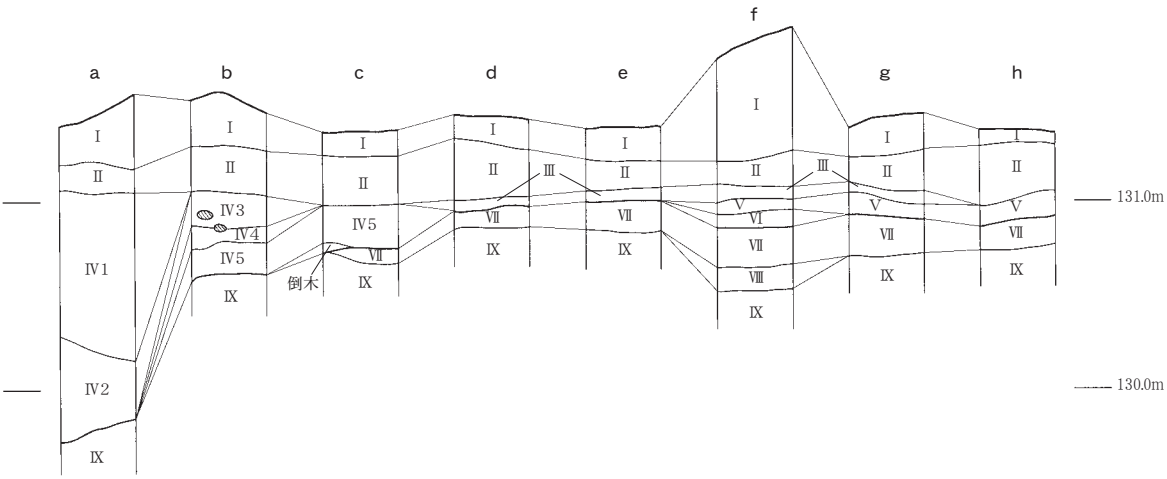
第９図　遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図

基本土層①



基本土層①
Ⅰ　表土
Ⅱ　旧水田耕作土1　黒褐色土(10YR2/3)シルト～細砂　しまり強　粘性やや弱
Ⅲ　盛土1　黒褐色土(10YR2/2)シルト　しまりやや弱　粘性やや強　混入地山土35%
Ⅳ　盛土2　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂　しまりやや強　粘性やや弱　混入炭化物
Ⅴ　旧水田耕作土2　黒褐色土(10YR2/2)シルト　しまりやや強　粘性強　混入炭化物(φ1～10㎜)10%
Ⅵ　黒ボク土　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂　しまり強　粘性やや弱　混入炭化物
Ⅶ　地山漸移層　暗褐色土(10YR3/3)細砂(やや砂質強い)しまりやや強　粘性弱

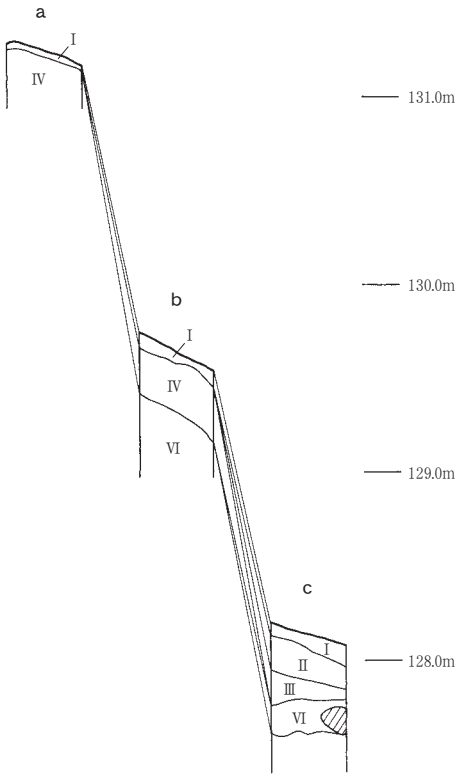
基本土層②



基本土層②
Ⅰ　表土
Ⅱ　旧水田耕作土1　黒褐色土(10YR2/3)　しまり強　粘性やや弱　混入砂粒全体に5%
Ⅲ　旧水田耕作土に伴う鉄錆層1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性やや弱　鉄分非常に多く沈着
Ⅳ1 盛土1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性やや弱　混入砂粒全体に5%
Ⅳ2 盛土2　黒褐色土(10YR3/2)　しまりやや強　粘性やや弱　混入地山塊5%
Ⅳ3 盛土3　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまりやや強　粘性やや弱　混入地山塊15%　円礫(50～150㎜)
Ⅳ4 盛土4　黒褐色土(10YR2/2)　しまりやや強　粘性やや弱　混入地山土10%　円礫(50～100㎜)
Ⅳ5 盛土5　暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや弱　粘性やや弱　混入地山土25%　黒色土15%
Ⅴ　旧水田耕作土2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性やや弱
Ⅵ　旧水田耕作土に伴う鉄錆層2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性やや弱　鉄分の沈着多い
Ⅶ　黒ボク土1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性やや弱
Ⅷ　黒ボク土2　暗褐色土(10YR3/3)　しまり弱　粘性やや弱
Ⅸ　地山漸移層　暗褐色土(10YR3/3)　しまり弱　粘性やや弱

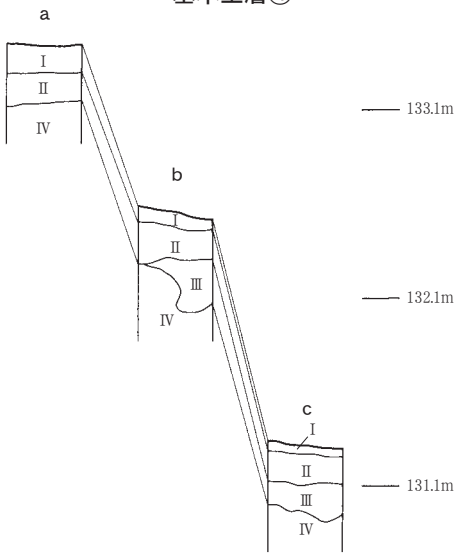
第10図　基本土層柱状図(１)

基本土層③



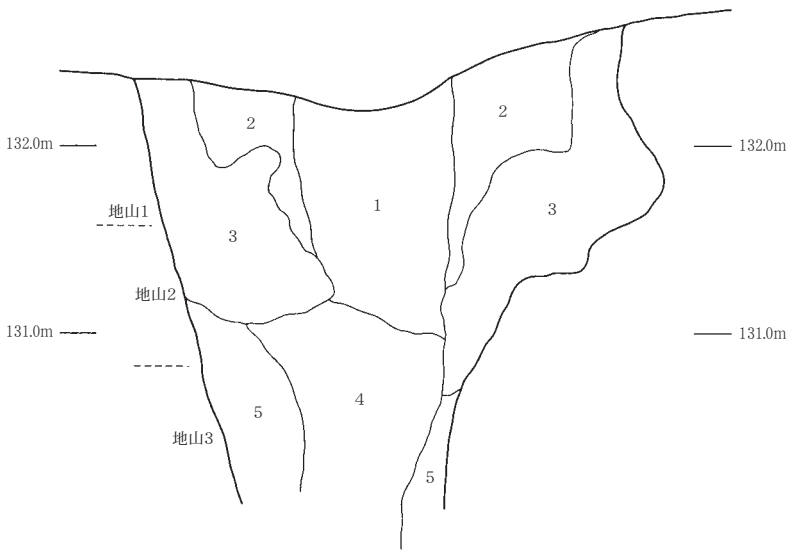
基本土層③
Ⅰ　表土1　暗褐色土(10YR3/4)　しまり弱　粘性やや弱　地山粒中量　混入炭化物極少量
Ⅱ　表土2　黒色土(10YR2/1)　しまりやや弱　粘性やや弱　砂粒多量　混入炭化物極少量
Ⅲ　流土1　黒褐色土(10YR2/3)　しまりやや強　粘性やや強　地山粒少量　混入炭化物5%
Ⅳ　流土2　暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや弱　粘性やや強　地山粒少量　混入炭化物少量
Ⅴ　流土3　黒褐色土(10YR2/2)　しまりやや強　粘性やや強
Ⅵ　地山漸移層　暗褐色土(10YR3/4)　しまりやや強　粘性やや弱　地山土中量

基本土層④



基本土層④
Ⅰ　表土　黒色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱　混入根、砂粒多量
Ⅱ　黒ボク土　黒褐色土(10YR2/3)　しまりやや弱　粘性弱
　　混入根多量　地山塊少量　砂中量
Ⅲ　地山漸移層　暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや弱　粘性やや弱
　　混入根多量　地山塊少量　砂中量
Ⅳ　地山層　黄褐色土(10YR5/8)

東側地割れ



東側地割れ
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　混入地山土(φ30～50㎜)5%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　黒褐色土(10YR3/3)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ3～5㎜)1%
　地山粒(φ10～30㎜)3%
3　地山1崩落土
　黄橙色土(7.5YR7/8)
　粘性弱
　混入軽石(φ10㎜)5%
　暗褐色土(10YR3/3)5%
4　地山1崩落土と表土流入土混合
　黒褐色土(10YR3/2)
　黄橙色土(7.5YR7/8)
　しまり弱　粘性弱
　混入地山塊(φ200㎜)
5　地山2崩落土
　明黄褐色土(10YR6/8)
　しまり弱　粘性中
地山1　黄橙色土(7.5YR7/8)
　　しまり強　混入軽石(φ10㎜)
地山2　明黄褐色土(10YR6/8)
　　しまり弱
地山3　浅黄橙色土(10YR8/3)
　　しまり弱

第11図　基本土層柱状図(２)

流れ込んだものとしてはやや量が多いことから、北部段丘面に集落が構成されていた後期初頭に、小規模な捨て場として利用されていた可能性も考えられる。

北東端の緩斜面(基本土層④)は、面積約1,000㎡、現地表面の標高は132.5～134.5mであり、南に低く約25°傾斜する。調査前の現況は荒地であった。削平は受けていないが、根による攪乱が著しい。Ⅰ層は表土で層厚10cm前後、Ⅱ層は黒ボク土で層厚約10cm、Ⅲ層は地山漸移層である。Ⅳ層は地山で黄褐色粘土質層である。遺構はⅢ層もしくはⅣ層上面で確認した。また、北東端暖斜面には、断層に起因すると推定できる地割れ２条が南北に走り、西側の地割れの西脇には帯状の隆起が認められる。これらは一連の断層活動の結果である可能性がある。東側の地割れは、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡を破壊していることから、この断層活動は縄文時代後期初頭以降の所産と考えられる。地割れは調査前には完全に埋没しており、覆土からは縄文時代後期初頭の遺物が出土した。覆土は、出土遺物から縄文時代後期初頭の包含層が、地割れに流れ込み堆積したものと判断する。

第２節　検出遺構と出土遺物

１　概要

(１)検出遺構

今回の調査では縄文時代の遺構と近世の遺構を確認した。

確認した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡28軒、土器埋設炉21基、土器埋設遺構22基、石囲炉１基、配石遺構８基、焼土遺構４基、土坑66基、竪穴状遺構４基、柱穴様ピット275基である。縄文時代の遺構は前期後葉、後期初頭、晩期前葉の３時期に大きく分けられる。前期後葉では、北部段丘面と南部段丘面にそれぞれ１軒の竪穴住居跡を確認した。小規模な集落が営まれていたと推定される。後期初頭では北部段丘面に22軒、北東端緩斜面に２軒、南部段丘面に１軒の竪穴住居跡を確認した。出土遺物から、北部段丘面に位置する竪穴住居跡の大多数が、北東端緩斜面および南部段丘面に営まれた竪穴住居跡よりも新しいと推定される。北部段丘面で検出された土器埋設炉･焼土遺構は、竪穴住居跡に伴う炉跡と推定され、それらを数え合わせると、50軒を超える竪穴住居が構築されていたと考えられる。竪穴住居跡および炉跡は中央の広場を挟み、環状に位置する。数世代にわたり集団で生活を営んでいた様子が伺われる。集落に伴う土坑墓群や貯蔵穴、掘立柱建物跡などの遺構は認められない。縄文時代晩期前葉では北部段丘面に竪穴住居跡が１軒検出されたのみである。

近世では掘立柱建物跡７棟、柵列跡３条、土坑４基、柱穴様ピット405基を確認した。遺構の分布は大きく２箇所で、南部段丘面の中央部と南部である。掘立柱建物跡および柵列跡は中央部、南部ともに軸を同じくすることから、相互に関連があったものと想定する。確認した柱穴様ピットは、掘立柱建物の柱穴となり得るものが多数を占めることから、現状では７棟の掘立柱建物跡を復元したが、それ以上の棟数が存在していたと推定される。

(２)出土遺物

遺物は縄文時代の遺物と近世の遺物が出土した。縄文時代の遺物は18ℓの遺物収納箱226箱で、土器･土製品類が151箱、石器･石製品類が75箱である。縄文土器は早期～晩期にかけて幅広い時期の土

器が出土しているが、多数の遺構が確認された縄文時代後期初頭の土器が大半を占める。縄文土器の詳細な分類は「第４章 第２節 ２（２）遺構外出土遺物 ①土器・土製品」に記載しており、遺構に伴う土器の記述もそれに基づく。

近世の遺物は18ℓの遺物収納箱で１箱出土した。陶磁器類のほか、金属製品も出土している。特徴、時期などは第７表に掲載した。

２　縄文時代

（１）遺構と遺構内出土遺物

① 竪穴住居跡

ａ 前期の竪穴住居跡

ＳＩ1105竪穴住居跡(遺構第12図、遺物第77図１～６、第101・102図Ｓ１～10、図版２・35・52)

≪位置・確認状況≫南部段丘面ＬＲ～ＬＴ57・58区に位置する。旧水田耕作土層(①Ⅱ層)直下、地山上面で焼土面を確認し、周辺を精査したところ、不明瞭な長楕円形の平面プランを確認した。これらは上位を削平された竪穴住居跡に伴う地床炉と、それに伴う竪穴掘り込みであると想定したことから、この焼土面を中心として十字に幅約20㎝の試掘溝を掘削し、竪穴掘り込みの有無等を検討した。その結果、焼土面周辺は既に床面以下まで掘り下げられていることが判明したものの、土層断面形状から住居構築時の掘削痕と推定される掘り込みを確認した。よって、竪穴住居跡と判断した。

≪重複≫他の遺構との重複関係はないが、北東～東側が倒木により破壊されている。

≪形態・規模≫平面形は、現状で長軸7.0ｍ前後、短軸約5.4ｍの長楕円形で、竪穴掘削痕のみが残存する。竪穴平面長軸方位は、ほぼ東－西である。

≪壁・床面≫壁はほ場整備の際の削平により遺存しない。床面は調査時の削平により残存せず、硬化範囲の有無等も不明である。

≪炉≫竪穴のほぼ中央に地床炉が位置する。炉の掘り込み等は確認していない。平面形は不整な楕円形であり、長軸1.6ｍ前後、短軸0.8ｍ前後の範囲で焼土化する。確認面から最深部まで約20㎝ほど被熱している。

≪柱穴≫検出した柱穴は５基(Ｐ１～Ｐ５)である。Ｐ５のみが深く、焼土面を挟んだ反対側に柱穴があったものと推定される。これらが主柱穴として想定されるが、東側が倒木痕により破壊されているため、詳細は不明である。Ｐ１～４の性格は不明である。

≪覆土・混入物≫覆土は部分的に残存していたが、調査時の削平により、詳細は不明である。土層断面で確認できる層(１・２層)は上面に焼土面が形成されることから、いずれも竪穴掘削時の残土と推定する。

≪出土遺物≫遺物は、本住居跡全体から出土している。確認時に取り上げてしまったものが多く、出土層位は定かではない。出土土器は総数42点で、Ⅱ群約40点、Ⅳ群が２点である。出土石器は151点で、石錐１点、石篦１点、スクレイパー６点、剥片137点、磨石６点である。そのうち土器６点、石器10点を図示した。図示した６点の土器はいずれも円筒下層ｄ式に相当する。

≪時期・所見≫竪穴覆土出土土器から、構築の上限時期は縄文時代前期後葉(円筒下層ｄ式期)と想定する。Ｐ２から剥片が多く出土しており、石質はいずれも珪質頁岩で１㎝未満のものが多くを占めるこ

とから、住居内で石器製作が行われていたと考えられよう。

ＳＩ2158竪穴住居跡(遺構第13図、遺物第77図７～15、第102･103図Ｓ11～18、図版２･35･52)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ･ＬＩ71･72区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山上面を精査中に不定形に広がる暗褐色土を確認し、その上面に焼土粒の広がりを検出した。焼土遺構として調査を進めたが、焼土粒を中心として周辺に十字の試掘溝を掘削したところ、確認面より約20㎝下に平坦な硬化面を確認したことから、これを床面と判断し竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫長軸約5.6m、短軸約5.1mの平面円形で、確認面から床面までの深さは約20㎝である。

≪壁･床面≫外側に開いて緩やかに立ち上がる。床は平坦でやや硬化する。床面レベルは約130.8m、床面積は約22.50㎡である。

≪炉≫２基の地床炉を伴う。焼土面は４箇所で確認したが、住居南寄りに位置する３箇所は近接するため１つの炉と捉え、当住居の炉は２基であると解釈した。北側の炉を炉Ａ、南側の炉を炉Ｂとする。

炉Ａの焼土面は約50㎝の範囲に不整形に広がり、やや弱く焼土化する。

炉Ｂは３箇所の焼土面からなる。それぞれ長軸35～65㎝の平面不整形に被熱する。被熱の深さは床面より５㎝程度である。

≪柱穴≫住居内にはＰ１～６が位置する。Ｐ１～３･５は床面からの深さが10㎝前後と浅く、Ｐ４･６は40～50㎝と比較的深い。現状では主柱穴や柱配置は特定しがたい。

≪覆土･混入物≫５層に分層した。１～３層は住居覆土である。１層には焼土粒が多く、２層には地山塊が多く含まれる。一連の人為埋め戻しと推定する。４層の上面には炉が形成されることから、４･５層は竪穴掘削時の残土と判断する。

≪出土遺物≫遺物は２･３層の西側より多く出土した。縄文土器片89点(Ⅱ群85点、Ⅲ群２点、Ⅳf2類１点、Ⅳa3類１点)、石器59点(石匙１点、スクレイパー７点、剥片48点、ＲＦ１点、ＵＦ２点)を数える。そのうち縄文土器片９点、石器８点を図示した。

南西部のテラス部分床面直上では、胴～底部が残存する深鉢形土器(11)が１点出土した。底部を住居内側に向け、横倒しの状態であった。口縁～胴部上半は欠損する。床面直上で出土したことから、本遺構の廃絶に付随するものと考え、本遺構の時期の指標とした。Ⅲ･Ⅳ群の遺物は廃絶後の混入と判断する。

≪時期･所見≫上記深鉢形土器の出土状況から、廃絶時期は縄文時代前期後葉(円筒下層ｄ式)に比定する。

ｂ 後期の竪穴住居跡

ＳＩ1229竪穴住居跡(遺構第14図、遺物第77図16～21、第103図Ｓ19･20、図版２･35)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＬＳ70･71区に位置する。段丘崖から続く緩斜面の地山上面で石組炉を確認し、竪穴住居跡が存在することを確認した。

≪重複≫北側でＳＫ1232-ａ･ｂ土坑およびＳＫ1233土坑と重複する。ＳＫ1232-ａ･ｂおよびＳＫ1233ともに本住居跡を掘り込んでおり、本住居跡が旧い。

≪形態･規模≫確認段階で北東側は覆土を掘り過ぎてしまい、南西側は削平を受けていたため、詳細

は不明であるが、残存部分から竪穴平面形は、円形もしくは楕円形と推定する。

≪壁･床面≫壁は北東側はやや急に、南東側は緩やかに開いて立ち上がる。床面は斜面に沿って南西側に傾斜している。

≪炉≫石組炉で住居のほぼ中央に位置する。掘り込み内に８の字状に石が組まれ、その北西端よりさらに直線的に石組が延びる。炉の南西端側には地山面のわずかな凹凸があり、同様の石列の抜け跡とすれば、石囲炉の北端と西端から「ハ」の字状の石組を構築していたと考えられる。形状が複式炉に類似しており、本来２箇所の石組部と「ハ」の字状の前庭部からなっていた可能性が高い。２箇所の石組部では、それぞれに焼土面が形成される。炉床は北西側の方が深い。

≪柱穴≫北東側の壁際に小規模な柱穴が多数巡る。深さは10～20㎝前後である。南西側は削平により消失した可能性が高い。

≪覆土･混入物≫削平および調査中の掘りすぎにより覆土は一部しか残存しておらず、堆積状況の詳細については不明である。

≪出土遺物≫遺構確認時の掘りすぎにより遺構外出土遺物として取り上げてしまったものが多く、本遺構に伴う遺物は縄文土器片15点(Ⅰ群１点、Ⅱ群４点、Ⅳ群約10点)、石器８点(スクレイパー２点、剥片１点、ＲＦ２点、ＵＦ３点)である。そのうち土器片６点、石器２点を図示した。出土した土器片は３時期あるが、Ⅰ群やⅡ群の土器片は、本遺構の周辺で他にも出土していることから、どちらも覆土に混入したものと判断する。

≪時期･所見≫出土土器から後期初頭を上限と推定する。炉内の覆土から出土した炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代2040±40BP、暦年較正交点BC40である。出土土器および炉の形態に基づく本遺構の推定時期より約2000年新しい年代値をとるが、分析試料が後世の攪乱により流入した結果と判断する。また炉を構築する礫は輝石安山岩、凝灰岩などからなり、遺跡内で採取できる段丘礫層由来と考えて矛盾はない。

ＳＩ2001竪穴住居跡(遺構第15～17図、遺物第78図22～33、第103図Ｓ21～23、図版３～５･36･52)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ･ＬＬ66･67区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。ほ場整備の際に削平を受け、遺存状態が悪い。南西側ではかろうじて壁の立ち上がりを確認したが、北東側では壁･床共に削平を受けている。地山漸移層上面に凹凸が認められ、この凹凸を竪穴掘削痕と判断し竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫ＳＩ2005･2042･2475竪穴住居跡と重複する。土層断面より、ＳＩ2005･2042より本住居が新しいと判断する。また、本住居の炉は、ＳＩ2475の柱穴と考えられるＳＫＰ2174に壊されることから、本遺構が旧いと判断した。

≪形態･規模≫北東部が削平を受けているが、現存部分から直径約4.8ｍの平面円形と推定する。

≪壁･床面≫壁は南西側は約60°の角度で開いて立ち上がる。北東側は削平により消失する。床面の硬化範囲は認められない。床面レベルは約130.70ｍ、推定床面積は約18.00㎡である。

≪炉≫土器埋設炉である。住居ほぼ中心に位置する。炉体土器(ＲＰ１)は正位に埋設される。構築時の掘り込みは確認できず、土器と掘方の大きさは、ほぼ同じであったと考えられる。

ＲＰ１は煮沸具から転用された深鉢形土器で、口縁～底部まで遺存するが、ＳＫＰ2174と重複するため南西部分が破損する。口縁部は内外面ともに上端より３㎝前後の範囲で被熱による帯状の赤変が

認められる。被熱状況は内面がより顕著である。

土器内覆土は２層(５・６層)に分層した。上位(５層)は地山土を含む黒褐色土を基質とする。炉体土器口縁部の赤変部分を被覆して堆積しており、炉体土器の被熱状況との整合性がないことから、炉廃絶後に堆積した層であると推定する。下位(６層)は地山由来土である。掘り込み掘削土由来と想定し、構築時に充塡されたものと推定する。炉体土器口縁部の赤変状況から、土器内側も炉床として使用されたと推定されるが、土器内には焼土が認められないことから、掻き出されたものと推測する。

焼土は炉体土器の周囲に接して広がる。土層断面で確認した部分は焼土面であったが、焼土範囲の中には焼土塊の堆積が含まれている可能性が高い。

≪柱穴≫住居内にはＳＫＰ2054、2055、2058～2063、2067、2068、2098、2145、2437、2440が位置する。数軒の竪穴住居の重複があり、本遺構に付随する柱穴は明確ではない。しかしＳＫＰ2054、2055、2061、2063、2067、2098、2145、2437は最深レベルが130.04～130.36m(確認面からの深さ44～66㎝)と他のピットと比べ深く、炉を中心に位置することから、これらが本住居の主柱穴となりえようか。ＳＫＰ2061、2145、2437の覆土からは６～17個の礫を検出した。いずれも５～20㎝ほどの円礫である。出土状況から、柱を抜き取ったのちに柱穴を半分ほど埋め戻し、礫を入れ、さらに埋め戻したと想定される。廃絶儀礼であろうか。

≪覆土･混入物≫３層に分層した。３層上面に焼土面が形成されることから、３層は竪穴掘削時の残土と判断する。１･２層は覆土であるが、残存状況が悪く、堆積状況を復元することは困難である。

≪出土遺物≫縄文土器･土製品359点(Ⅱ群１点、Ⅲa類２点、Ⅳa1類８点、Ⅳa2類５点、Ⅳb類４点、Ⅳc1類１点、Ⅳc2類１点、Ⅳd類１点、Ⅳf1類300点以上、Ⅳf2類11点など)、石器･石製品23点(スクレイパー１点、ＲＦ３点、ＵＦ１点、剥片15点、円盤状石製品２点)が出土し、縄文土器11点と土製品１点、石器３点を図示した。遺物は炉体土器を除き、床面および覆土からの出土である。一括で取り上げたため詳細な出土状況は不明である。出土した土器のほとんどは小片で、接合する個体は少ないが、本遺構は上位を削平されており、竪穴の凹みを利用した廃棄が行われた可能性も否定できない。Ⅱ･Ⅲ群の３点は小片であり、混入と判断する。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2005竪穴住居跡

(遺構第15･16･18図、遺物第78･79図34～47、第103～106図Ｓ24～36、図版３～５･36･37･53)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＬ･ＬＭ66･67区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、不整円形に広がる黒色土を確認し、形状･規模から竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫土層の観察より、ＳＩ2001･2042竪穴住居跡、ＳＫ2099土坑より旧く、ＳＫ2463土坑より新しい。また、本遺構に伴うＳＲ01は、同じく本遺構に伴う炉Ｂの炉体土器(ＲＰ２)と重複し、炉Ｂが新しい。

≪形態･規模≫径約3.9mの平面円形である。確認面から床面までの深さは12㎝である。

≪壁･床面≫壁は約45°の角度で開いて立ち上がる。床面には凹凸があり、中心約2.0mの範囲に強く被熱した焼土面が不整形に広がる。床面レベルは130.60m前後、床面積は約12.00㎡である。

≪炉≫２基確認した。住居中央に位置する土器埋設炉を炉Ａ、住居北壁際に位置する土器埋設立石炉を炉Ｂとする。重複しないため新旧関係は不明であるが、互いに干渉しない位置にあることから、同

時存在もあり得る。

炉Ａ　土器埋設炉である。床面が全体的に被熱するため、本炉に伴う炉床は明瞭ではない。

炉体土器(ＲＰ１)は煮沸具より転用された深鉢形土器で、正位に埋設される。底部は欠損し、口縁部は残存していない。炉体土器の上端に特徴的にみられる帯状の赤変は外面にのみ認められる。

土器内は３層(１～３層)に分層した。上位(１・２層)に黒褐色～黒色土が堆積し、対応する土器の内面器壁には被熱痕(ハジケ)が確認できる。下位(３層)にはにぶい黄褐色土が堆積する。掘り込み掘削土由来と想定し、構築時に充塡された土と推定する。土器裏込土は４層に分層した(４～７層)。地山土由来の褐色土と黒褐色土が互層に堆積する。

土器の北35㎝には小規模なピット(Ｐ９)があり、位置と形状から立石の抜き取り痕の可能性が高いと判断する。土器とＰ９の間には浅い掘り込み(Ｐ10)が位置する。覆土(10層)に焼土塊が含まれることから、灰の掻き出し穴と推測する。

本炉の確認面より５㎝ほど低い位置には焼土面が確認された。焼土面は炉体土器の北20㎝付近に位置し、Ｐ９、Ｐ10と重複するため様相ははっきりしないが、炉体土器の被熱状況から推定される炉の機能面レベルより５㎝ほど低い位置に形成されていることから、地床炉から土器埋設炉への造り替えを想定できようか。

炉Ｂ　土器埋設立石炉である。炉体土器(ＲＰ２)は、煮沸具より転用された深鉢形土器の胴部で、ＳＲ01土器埋設遺構の埋設土器(ＲＰ３)西側上部を破壊して正位に埋設される。口縁部は残存しないが、上端割れ口は摩滅することから、炉使用時にはすでに破損していたものと推定する。炉体土器に特徴的な上端の帯状赤変はないが、内面には全面に被熱痕(ハジケ)が認められる。

土器内覆土は２層(３・４層)に分層した。土器の被熱状況との整合性がないことから、炉廃絶後の一括した埋め戻しと考えられる。

約70㎝南東には立石が伴う。石は扁平な円礫で平面楕円形である。石質は輝石安山岩である。石の短辺を立てて、下半を土中に埋め込む。明確な被熱痕はない。

炉床は土器と立石の間に位置する。炉床の直上には、強く被熱した隅丸三角形の粘土塊が検出された。炉との関係は現状では特定しがたい。立石と土器を通る直線の方位はＮ－75°－Ｗである。

≪柱穴≫住居内にはＰ１～10が位置する。主柱穴は位置および規模よりＰ１、３～５、７の５角形と推定するが、規模的にはＰ２も主柱穴となり得る。柱穴はいずれも平面円形で直径15～30㎝、床面からの深さは34～60㎝である。

Ｐ２は炉Ｂの炉体土器に接して位置する。炉Ｂとの新旧関係は定かではなく、同時存在もあり得る。Ｐ７は住居覆土中で確認した。住居より新しい可能性もあるが、柱穴配置および規模から当住居の主柱穴になり得ると判断した。その場合、Ｐ７は住居が埋没した後も、柱が残存していたと考えられる。

≪その他の付属施設≫竪穴北壁際にＳＲ01埋設土器遺構を検出した。炉Ｂの炉体土器(ＲＰ２)の西半を掘削中に、ＲＰ２の下部がＳＲ01の埋設土器(ＲＰ３)の上部に重複する形で確認した。埋設土器は底部を残したまま正位に埋設される。口縁部は欠損する。西側上部は炉Ｂの炉体土器により破壊されている。確認レベルから、土器は床面下に埋まっていたと推定される。土器内覆土、裏込土ともに地山土由来の単一層である。住居に伴う埋甕と推測する。出入口の可能性も想定されるが、根拠となるような痕跡は認められなかった。

≪覆土･混入物≫６層(８～13層)に分層した。下位(10･11層)には地山土･炭化物を含んだ黒色土が堆積し、上位(８･９層)には炭化物を含む黒褐色土が堆積する。いずれも礫を多く含むことから人為的な堆積と判断する。壁際に堆積する12･13層は壁の崩落土と判断する。

≪出土遺物≫縄文土器･土製品359点(Ⅳa1類10点、Ⅳa2類７点、Ⅳb類７点、Ⅳc1類２点、Ⅳc2類５点、Ⅳd類３点、Ⅳf1約類約290点、Ⅳf2類10点、Ⅳf3類15点、Ⅳf4類１点、Ⅳg類２点、赤彩土器片１点、円盤状土製品２点など)、石器･石製品106点(スクレイパー９点、剥片75点、ＲＦ２点、ＵＦ７点、磨製石斧２点、凹石２点、磨石２点、石錘２点、石皿１点、砥石１点、石製品未製品１点、球状石製品１点、ベンガラ素材１点)が出土し、縄文土器･土製品14点と石器13点を図示した。遺物は床面および覆土からの出土である。一括で取り上げたため、詳細な出土状況は不明である。土器は、炉体土器２点と埋設土器１点を除いていずれも小片であり、住居廃絶後に覆土に混入したもの、もしくは竪穴の窪みを利用し廃棄されたものと推定する。

41は把手状の装飾が付く壺形土器の口縁部である。把手状の装飾はＳＫ2030の覆土から出土し、接合した。34は深鉢の口縁部片である。大木８ａ式に比定する。他の遺物と時期が異なるため、混入と判断する。Ｓ36は球状石製品である。２個体に割れた状態で出土し、接合した。加撃痕があり、人為的に分割したものと考えられる。

≪時期･所見≫炉体土器および埋設土器、炉の形態から縄文時代後期初頭に比定する。[14]Ｃ年代測定では、炉Ａの炉体土器内最下層より出土した炭化材が補正年代3770±40BP、暦年較正交点BC2200、炉Ｂの炉体土器内の最上層より出土した炭化材が補正年代3850±40BP、暦年較正交点BC2300である。炉Ａの年代と炉Ｂの年代には80年の開きがあるが、採取した層位が異なるため、炉の新旧関係に対応するとは断言しがたい。

床面の被熱状況から、焼失住居の可能性も考えられるが、炭化物の出土量は他の遺構と大差なく、現状では断定しがたい。また、ＳＫ2030土坑より出土した土器と接合する土器片が出土しているが、いずれも覆土からの出土であることから、ＳＫ2030土坑が本遺構より新しい可能性が考えられる。

ＳＩ2007竪穴住居跡(遺構第20図、遺物第79図48･49、図版５･37)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＯ･ＬＰ68･69区に位置する。盛土層(②Ⅳ5層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で土器埋設炉を確認し、その周囲約4.0ｍの範囲で地山の凹凸を確認した。この凹凸を竪穴掘削痕と推定し、炉および柱穴の配置から竪穴住居跡と判断した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫南西側が大きく削平を受けており消失するが、遺存部分より平面楕円形と推定する。短径は約4.0ｍである。

≪壁･床面≫壁は削平により消失する。床面は平坦である。硬化範囲は特定できない。床面レベルは約130.65ｍである。

≪炉≫炉は２基確認した。住居ほぼ中央に位置する土器埋設炉を炉Ａ、住居東寄りに位置する立石炉を炉Ｂとする。重複しないため新旧関係は不明である。構築される位置が互いに干渉しないことから、同時存在もあり得る。

炉Ａ　２個の土器(ＲＰ１、ＲＰ２)が正位と斜位に埋設される土器埋設炉である。検出レベルがほぼ同じであることから同時に機能していたと考えられる。

ＲＰ１は転用の痕跡が認められない深鉢形土器で、正位に埋設される。底部は欠損するが、口縁部は部分的に遺存する。口縁部内面は上端から５㎝の範囲で帯状に強く被熱し、外面は北側部分が強く被熱する。炉体土器の被熱部分に対応する焼土面は認められないことから、炉廃絶時に焼土は掻き出されたものと想定する。胴部内面には弱いハジケが認められる。土器内覆土は２層(５・６層)に分層したが、どちらの層も土器の被熱部分を被覆して堆積しており、炉体土器の被熱状況との整合性がないことから、炉廃絶以降、内部の土を全て掻き出した後に堆積したものと判断する。７層は土器の裏込土であり、掘り込み掘削土由来と推定する。

ＲＰ２も転用の痕跡のない深鉢形土器で、ＲＰ１の約20㎝北側に位置する。口縁を住居の内側、ＲＰ１方向に向けて、斜位に埋設される。口縁部は残存しないが、割れ口が摩耗することから、炉使用時にはすでに欠損していたものと推定する。炉体土器内面は底部を除くほぼ全面に被熱痕(ハジケ)が認められ、特に埋設時の上部にあたる部分に顕著である。土器内覆土は２層(１・２層)に分層した。いずれも地山由来土である。土器の被熱状況と対応しないことから、炉廃絶後の人為堆積と考えられる。４層は土器の裏込土で、掘り込み掘削土由来と推定する。

焼土面は土器の周囲に接して広がり、ＲＰ２の下に連続する。ＲＰ１とＲＰ２の間に位置する窪みは、灰等が掻き出された痕跡であろうか(３層)。周辺には広い範囲で焼土塊が検出されており、掻き出された焼土が堆積したものと考えられる。

ＲＰ１は焼土面を切って埋設されており、土器埋設炉構築以前に地床炉が営まれていた可能性も考えられるが、現状では特定しがたい。２つの土器を通る直線の方位はＮ－21°－Ｅである。

炉Ｂ　立石炉である。炉に伴う礫は、不整楕円形の扁平な円礫で、石材は輝石安山岩である。短辺を立てて、下半を土中に据える。礫の上部は若干被熱する。

焼土面は礫の北西側に接して広がる。被熱状況は弱い。また、礫の南東側にも10㎝の範囲で弱く被熱した焼土を検出したが、焼土面か、焼土ブロックかは判然としない。焼土面の状況から、当炉は使用頻度が低いか、もしくは使用期間が短かったと推定する。

≪柱穴≫住居内にはＰ１～５が位置する。柱穴配置、深さからＰ２、Ｐ３、Ｐ５が主柱穴と考える。南西側は大幅に削平されているが、配置状況から、本来４～５本柱であったと考えられる。柱穴の形状から柱の抜き取りが行われたと推定する。

≪覆土･混入物≫削平により覆土は残存していない。

≪出土遺物≫床面まで削平されていたため、出土した遺物は炉体土器２点のみである。

49は炉Ａの炉体土器(ＲＰ１)である。Ⅳa1類に属する。器形は胴上部で膨らみ、頸部でくびれ、口縁部は開く。４単位の波状口縁と復元できるが、波頂部はすべて破損している。文様帯は胴最大径部分より上位で、横位に連結する波状沈線文で区画される。文様帯内には縄文は施されない。文様単位は４単位で、幅２㎜程度の細く深い沈線で施文される。

≪時期･所見≫炉体土器から、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2017竪穴住居跡(遺構第21･22図、遺物第80図50～52、図版６･38)

ＳＩ2017は、炉と柱穴に新旧の重複があることから、竪穴には重複を確認できなかったものの、１度の改築を想定しうる。

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＮ･ＬＯ68･69区に位置する。盛土層(②Ⅳ5層)直下、地山層上面で確

認した。壁･床面ともに削平を受け消失する。土器埋設炉を確認し、その周囲約4.7ｍの範囲で地山面の凹凸が認められた。この凹凸を竪穴掘削痕と判断し、竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫ＳＫ2016土坑と重複し、本遺構の柱穴であるＰ４をＳＫ2016底面で確認したことから、本遺構が旧いと判断する。

≪形態･規模≫径約4.7ｍの平面円形である。

≪壁･床面≫壁は削平により消失する。現状で床面には段丘礫が露出しており、炉の焼土面が残存していることから、削平を考慮しても、住居床面に段丘礫が露出していた可能性がある。床面レベルは130.75ｍ前後、床面積は約17.30㎡である。

≪炉≫住居中央やや東寄りに焼土２箇所と炉体土器２基を確認した。炉体土器の新旧が明確であり、柱穴が２時期想定されることから、炉も同時存在ではなく改築と判断した。近接して検出した立石は炉体土器との位置関係より旧期炉に伴うと判断する。

新期炉　土器埋設炉である。焼土面は２箇所(ＳＮ01･ＳＮ02)で検出されているが、位置関係より、ＳＮ01が旧期炉に伴うであろうことから、本炉に伴う焼土面は、炉体土器の北側約20㎝に位置するＳＮ02と推定する。

炉体土器(ＲＰ１)は、径約35㎝、深さ30㎝の掘り込みを、10㎝ほど埋め戻して正位に埋設される。古期炉の炉体土器(ＲＰ２)と重複し、ＲＰ２の南西側上端を破壊している。

ＲＰ１は深鉢形土器で、底部は欠損し、口縁部も残存していない。上端の割れ口に摩耗や被熱痕跡が認められないことから、土器上端は削平された可能性が高い。土器外面には上端から約２㎝の範囲で被熱による非常に弱い赤変が認められる。土器の内面にハジケなどの被熱痕は認められない。

土器内覆土は４層(１～４層)に分層した。上位(１･２層)は地山塊を含む黒色土を基質とすることから、一連の人為堆積と推定する。廃絶後の堆積であろうか。下位(３･４層)は地山土由来の褐色～暗褐色土で、炉体土器設置の際に充塡された土と推定する。土器裏込土(５･６層)とともに、掘り込み掘削土に由来すると推定する。

旧期炉　土器埋設立石炉である。炉体土器の約50㎝南東に立石があり、その間に位置する焼土面(ＳＮ01)が、本炉の炉床と推定する。立石と焼土、および土器を結ぶ直線方位はＮ－50°－Ｗである。

炉体土器(ＲＰ２)は底部が欠損した深鉢形土器で、径約30㎝の平面円形の掘り込み底面に正位に埋設される。新期炉の炉体土器(ＲＰ１)と重複しており、南西側の胴部上半は破壊されている。口縁部は残存していないが、割れ口の状況から、削平により破損した可能性が考えられる。土器の内側には、全面的に被熱によるハジケが認められる。

土器内覆土は３層(７～９層)に分層した。いずれも黒褐色土を基質とする。堆積要因は現状では特定しがたい。土器の裏込土(10層)は地山土が混入する暗褐色土であることから、掘り込み掘削土の埋め戻し土と推定する。

立石は長径28㎝、短径17㎝、最大厚14㎝の長楕円形の円礫である。短辺を立てて、下半を土中に埋め込む。焼土面が位置する北西側の上半は、弱く被熱する。

立石と土器の間には、浅い窪みを検出した。覆土(12層)に焼土が混入することと、焼土を切っていることから、灰を掻き出した痕跡と判断する。

≪柱穴≫柱穴は12基確認した。８基に新旧の重複が認められ、深さと配置から、２時期に分別した。

新期柱穴　Ｐ１～３・５・６・８の６本を主柱穴と考える。Ｐ１～３・６は旧期柱穴と重複する。Ｐ１・５・８については断面で柱痕跡を確認した。柱の太さは20～30cmと推定される。確認面からの深さは30～50cmと、旧期柱穴より浅い。覆土は暗褐色土を基質とする。

旧期柱穴　Ｐ４・７・９～12の６本を主柱穴と考える。Ｐ９～12は新期柱穴と重複する。柱痕跡を明確に確認できたものはない。底面レベルは50～70cmと新期柱穴より深い。覆土は褐色～暗褐色土を基質とする。

≪覆土･混入物≫覆土は削平により消失するが、竪穴掘削時の残土が斑状に残存する。

≪出土遺物≫縄文土器16点(Ⅳa2類８点、Ⅳb類５点、Ⅳf1類２点、Ⅳg類１点)、石器４点(ＲＦ１点、ＵＦ３点)が出土し、炉体土器２点と土器片１点を図示した。大半が竪穴掘削痕残土からの出土で、混入したものと考えられる。土器はいずれも小片で、接合する個体はない。

新期炉の炉体土器の下部からは、底部片が出土した。この底部片は粘土紐接合部で破損しており、ＳＩ2370竪穴住居跡の炉体土器と接合する(86)。明瞭な加撃痕は認められない。新期炉を構築する際に、埋設したものであろう。

≪時期･所見≫時期は、炉体土器および炉の形態から、縄文時代後期初頭に比定する。上記の遺物の接合状況から、本住居の新期炉と、ＳＩ2370竪穴住居跡に伴う土器埋設炉は、同時期に構築されたと判断できる。

ＳＩ2019竪穴住居跡(遺構第23･24図、遺物第80･81図53･54、図版７･38)

ＳＩ2019は柱穴に関して新旧の重複が見られることから１度の改築を想定する。

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＭ･ＬＮ67･68区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山層上面で確認した。壁･床面ともに削平を受け消失する。土器埋設炉を確認し、その周囲約5.5ｍの範囲で地山層の凹凸が認められた。この凹凸を竪穴掘削痕と判断し竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫竪穴掘削痕および柱穴配置から、竪穴の平面形は長軸約5.7m、短軸約5.1ｍの楕円形と推定する。

≪壁･床面≫壁･床ともに削平により消失する。炉の焼土面および炉体土器の残存状況から、削平の度合いは高くないと考えられる。床面レベルは130.80ｍ前後、床面積は約22.00㎡と推定する。

≪炉≫土器埋設炉で、住居の中心やや北寄りに位置する。炉体土器は近接して２基(ＲＰ１、ＲＰ２)埋設される。重複しないため、ここでは同時存在として報告する。２基の土器を通る直線の方位はＮ－84°－Ｅで、東側の土器をＲＰ１、西側の土器をＲＰ２とした。

ＲＰ１は底部が欠損した深鉢形土器で、径30cm、深さ23cmの掘り込み底面に正位に設置される。口縁部は残存しないが、上端割れ口に被熱痕が認められることから、炉使用時にはすでに欠損していたものと判断できる。土器は内外面ともに上端が帯状に赤変し、内面が特に顕著である。赤変範囲は内面が上端より８cm前後、外面は上端より４cm前後である。胴部内面には被熱痕は認められない。

土器内覆土は３層(１～３層)に分層した。２層上面には焼土面が形成されるが、土器の被熱範囲が焼土面より上位に位置することから、内部は撹拌され、焼土面は削られている可能性が高い。よって１層は炉廃絶後の堆積、２層は構築時の堆積と判断する。３層は地山由来土で、土器の裏込土(４層)とともに、構築時に充塡された掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。

ＲＰ２は底部が欠損した深鉢形土器で、径35㎝、深さは23㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。口縁部は残存しないが、上端割れ口が摩滅し、被熱痕があることから、炉使用時にはすでに欠損していたものと推定する。土器は内外面ともに上端が帯状に赤変し、内面が特に顕著である。赤変範囲は内面が上端より４㎝前後、外面が上端より２㎝前後である。胴部内面上半には被熱によるハジケが認められる。

土器内覆土は４層(５～８層)に分層した。５～７層は、土器内面の被熱状況と整合性がなく、焼土も混入しないことから、廃絶後に内部の土が掻き出され、その後に埋め戻された土と想定する。８層は地山由来土で、土器裏込土(９層)とともに、構築時に充填された掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と判断する。

焼土は２箇所(ＳＮ01、ＳＮ02)で検出した。ＳＮ01は焼土面で、ＲＰ１とＲＰ２の間、それぞれに接して位置する。厚さは約５㎝である。ＳＮ02はＲＰ１の北東15㎝に位置する。焼土面か焼土塊の堆積かは不明である。

≪柱穴≫14基の柱穴を確認した。２基の柱穴が重複するＰ１とＰ７、Ｐ２とＰ８、Ｐ６とＰ12において、新期柱穴は旧期柱穴より浅い傾向があることから、重複がない柱穴は深さで新期と旧期を分類した。Ｐ13、Ｐ14は他の柱穴より浅く、主柱穴ではないと判断した。

新期柱穴　Ｐ１～６の６本を確認した。Ｐ１･２･６は旧ピットと重複する。底面標高は30～50㎝と、旧期柱穴より浅い。覆土は暗褐色土を基本とする。Ｐ１･４･５は断面で柱痕跡を確認した。柱の太さは20㎝前後と推定される。

旧期柱穴　Ｐ７～12の６本を確認した。Ｐ７･８･12は新ピットと重複する。確認面からの深さは46～63㎝で新期柱穴より深い。覆土は暗褐色土を基本とする。Ｐ９は断面で柱痕跡を確認した。柱の太さは20㎝前後と推定する。

≪覆土･混入物≫削平により消失する。

≪出土遺物≫縄文土器は炉体土器を含み24点(Ⅳf1類21点、Ⅳf2類１点、Ⅳf3類２点)、石器は７点(剥片６点、ＲＦ１点)が出土し、そのうち炉体土器２点を図示した。炉体土器を除き、すべての遺物が竪穴掘削時の残土から出土した。

≪時期･所見≫炉体土器および炉の形態から縄文時代後期初頭と判断する。

ＳＩ2025竪穴住居跡(遺構第25･26図、遺物第81･82図55～61、第106図Ｓ37、図版８･38･39)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ･ＬＩ66･67区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。壁は調査時の削平のため検出できなかった。土器埋設炉を確認し、その周囲４～５ｍの範囲で地山の凹凸が認められたことから、この凹凸を竪穴掘削痕と判断し、竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫本遺構の柱穴であるＰ４とＳＫＰ2130が重複し、ＳＫＰ2130がＰ４を掘り込むことから、本遺構が旧いと判断する。

≪形態･規模≫竪穴掘削痕および柱穴の配置から、長軸約4.8m、短軸約4.0ｍの平面楕円形と推定する。

≪壁･床面≫壁は削平により消失する。床面は平坦である。硬化範囲等は認められない。推定床面レベルは130.75m前後、推定床面積は約15.00㎡である。

≪炉≫土器埋設立石炉である。住居のほぼ中心に位置する。炉体土器から約25㎝北側に立石が位置し、

炉体土器と立石の間に焼土面が形成される。土器と焼土面、立石を結ぶ直線の方位はＮ－17°－Ｅである。

炉体土器は２個の土器が入れ子状態で設置される。外側の土器をＲＰ１、内側の土器をＲＰ２とした。どちらも底部を欠損した深鉢形土器で、径43㎝、深さ25㎝の掘り込みに正位に埋設される。ＲＰ１は掘り込み底面に設置され、ＲＰ２は掘り込み底面より４㎝ほど浮いた状態であった。ともに口縁部は残存しないが、上端割れ口が摩滅し、被熱痕が認められることから、機能時にはすでに欠損していたものと推定する。

ＲＰ１、ＲＰ２ともに、内外面上端に帯状の赤変が認められ、内面がより顕著である。ＲＰ１の赤変の範囲は、内面が上端より５㎝前後、外面は上端より２㎝前後で部分的である。ＲＰ２の赤変の範囲は、内面が上端より５㎝前後、外面は上端より４㎝前後である。ＲＰ１には胴部内面に被熱によるハジケが認められるが、下端部より８㎝の範囲は被熱しない。ＲＰ２には胴部内面上半に弱いハジケが認められる。

土器内覆土は６層(２～７層)に分層した。上位の覆土(２～６層)は、土器の赤変境界と土器内覆土の層界が対応しないことから、炉廃絶後に内容物が掻き出され、その後埋め戻されたものと考えられる。７層は地山由来土であり、土器内面の被熱境界と対応することから、構築時に充填された土と判断する。８・９層は炉体土器の裏込土で、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。

立石の石質は輝石安山岩で、上端がほぼ水平に破損している。被熱により脆くなった部分が、ほ場整備の削平の衝撃により、剥離したと推測する。

≪柱穴≫Ｐ１～６を検出した。配置から主柱穴はＰ１～４と考えられる。主柱穴は平面円形または楕円形を呈し、径は約40～60㎝、住居床面からの深さは10～40㎝である。覆土は黒褐～暗褐色土を基質とする。柱痕跡は確認していない。

≪その他の付属施設≫本住居には土器埋設遺構(ＳＲ01)と、土坑２基(ＳＫ02、ＳＫ03)が伴う。いずれも住居床面精査中に確認した。

ＳＲ01は住居北壁際に位置する。周辺に焼土面が検出されなかったことから、ここでは土器埋設炉ではなく土器埋設遺構として報告するが、埋設土器(ＲＰ３)には炉体土器に特徴的な胴部内面のハジケが認められるため、土器埋設炉の炉体土器であった可能性も否定できない。ＲＰ３の器高から、土器の上端レベルは約130.9ｍと推定でき、本住居の床面より15㎝ほど高い。本遺構が土器埋設炉とすれば、別住居の重複の可能性も考えられる。しかし、壁際に位置するため床面が高かったと推定し、ここでは本住居に付随する遺構として報告する。

埋設土器は深鉢形土器で、径約50㎝の掘り込み底面に、正位に埋設される。土器の底部は欠損し、口縁部は一部遺存する。土器内覆土は５層(１～５層)に分層した。覆土の様相から土器内には柱状の器物が設置されていた可能性がある。６層は土器の裏込土で、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。また、土器の南西側にはＰ５が検出された。土器内に器物が設置されていたとすれば、これらはセットで祭祀的な性格を帯びているとも考えられようか。

ＳＫ02は北東壁際に位置する。径84㎝の平面円形で住居床面からの深さは最大で38㎝である。壁は開いて立ち上がり、底面は平坦で東側は一段高い。覆土は４層からなり、地山土が混入することから、人為堆積と判断する。

ＳＫ03は南壁際に位置する。長軸88㎝、短軸62㎝の平面楕円形で住居床面からの深さは20㎝である。覆土は３層からなり、地山土が混入することから、人為堆積と判断する。ＳＫ02、ＳＫ03ともに住居壁際に位置し、貯蔵穴等の性格が推測されるが、用途についての痕跡は確認できなかった。

≪覆土･混入物≫竪穴掘削時の残土のみを確認した。

≪出土遺物≫縄文土器は炉体土器、埋設土器を含み33点(26点はＳＫ02より出土)、石器は５点が出土し、そのうち縄文土器７点、石器１点を図示した。縄文土器の内訳はⅣa1類３点、Ⅳa2類２点、Ⅳb類１点、Ⅳc1類１点、Ⅳf1類14点、Ⅳf2類10点、Ⅳf5類２点である。石器は石鏃１点、ＵＦ１点、ＲＦ３点である。一括で取り上げたため、詳細な出土状況は不明である。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。^{14}Ｃ年代測定では炉体土器内最下層より出土した炭化材で補正年代3740±40BP、暦年較正交点BC2140、ＳＲ01の埋設土器内３層より出土した炭化材で補正年代3800±40BP、暦年較正交点BC2280の値が与えられおり、約140年の差異がある。測定結果を根拠とすれば、炉とＳＲ01には時期差があることとなり、本住居が構築される以前にＳＲ01を炉とする住居が存在していたと推定することも可能である。しかしながら、前者は炉体土器内最下層、後者は埋設土器最上層と資料の出土状況が異なるため、現状では一概に断定はできない。

ＳＩ2028竪穴住居跡(遺構第19図、図版７)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＯ68区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で立石と焼土を確認し、周辺を精査したところ、地山の凹凸を確認したため、この凹凸を竪穴掘削痕と判断し、竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫南西側が大きく削平を受けており平面形は不明であるが、円形もしくは楕円形と推定する。最大残存長は約4.0ｍである。

≪壁･床面≫壁は削平により消失する。床は平坦で硬化面などは認められない。床面レベルは約130.60ｍである。

≪炉≫立石炉である。住居北東寄りに位置する。立石は20×38×25㎝の扁平な円礫で、1／3が土中に埋められる。立石に被熱痕はない。焼土面は立石の南西約10㎝に位置し、約25㎝の平面不整円形に広がる。立石と焼土面を結ぶ直線の方位はＮ－35°－Ｅである。

≪柱穴≫３基検出した(Ｐ１～２)。Ｐ１、２ともに主柱穴となり得る。Ｐ１は形状から柱が抜き取られた可能性がある。

≪覆土･混入物≫竪穴掘削時の残土のみを確認した。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫炉に立石を伴うことから、周囲に位置する住居と同時期と推定し、縄文時代後期初頭と推定する。

ＳＩ2036竪穴住居跡(遺構第27図、遺物第82図62、図版８)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＩ65･66、ＬＪ66区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で円形に広がる黒褐色土を確認し、形状･規模から竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫ＳＫ2037土坑と重複し、土層断面より本遺構が旧いと判断する。

≪形態･規模≫径約3.1ｍの平面円形である。確認面から床面までの深さは約10㎝である。

≪壁･床面≫壁はやや開いて立ち上がる。床面は平坦で硬化範囲は認められない。床面レベルは130.60m前後、床面積は7.50㎡である。

≪炉≫炉は検出されていない。住居中央にＳＫ2037が位置するため、ＳＫ2037構築の際に破壊された可能性が高い。

≪柱穴≫Ｐ１～５を確認した。位置、規模からいずれも主柱穴となり得る。確認面からの深さは21～31㎝である。覆土は黒褐～暗褐色土を基本とする。柱痕跡は確認していない。

≪覆土･混入物≫４層に分層した。３･４層は地山土由来で壁崩落土と推測する。１･２層は地山塊が混入するため、人為の埋め戻し土と判断する。

≪出土遺物≫縄文土器片41点(Ⅳa2類１点、Ⅳb類１点、Ⅳc1類１点、Ⅳc2類１点、Ⅳf1類35点、Ⅳf2類２点)、石器８点(剥片６点、ＲＦ１点、ＵＦ１点)が出土し、土器片１点を図示した。遺物は床面直上および覆土から出土した。一括で取り上げたため、詳細な出土状況は不明であるが、いずれも小片であることから、覆土に混入したものが多いと推測する。

≪時期･所見≫本遺構に明確に属する遺物がないため時期は定かではないが、周辺の竪穴住居跡と同時期と推測し、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2042竪穴住居跡

(遺構第15･16･19図、遺物第82･83図63～68、第106･107図Ｓ38～42、図版３～５･39)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＬ･ＬＭ65･66区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、略円形に広がる黒色土を確認し、規模･形状から竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫土層断面から、ＳＩ2005竪穴住居跡より新しく、ＳＩ2001竪穴住居跡、ＳＫ2099土坑、倒木痕より旧いと判断した。

≪形態･規模≫南西部が削平により消失しており、南東には倒木痕が位置するため、平面形は明確ではないが、現存部分から径約4.0mの円形と推定する。確認面から床面までの深さは約10㎝である。

≪壁･床面≫壁は開き気味に立ち上がる。床は平坦で、硬化面は認められない。床面レベルは130.75m前後である。

≪炉≫土器埋設立石炉である。住居の中心に位置する。炉体土器の北約80㎝に立石が位置し、その間に焼土面が形成される。炉体土器と立石、焼土面を通る直線の方向はＮ－２°－Ｗである。立石は他の土器埋設立石炉の立石と比較して小さい。

炉体土器(ＲＰ１)は底部を欠損した深鉢形土器で、正位に埋設される。口縁部は部分的に欠損するが、割れ口に被熱痕が認められることから、炉使用時に破損したと考えられる。土器内面には被熱痕(ハジケ)が全面に認められ、口縁部には、部分的に赤変が認められる。

土器内覆土は３層に分層した。堆積状況より、炉廃絶後の一括の人為堆積と推測する。土器の裏込土(５･６層)は、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定される。８層は竪穴掘削時の残土である。

土器に東接して、長軸10㎝、短軸５㎝の扁平な楕円形の礫が２個位置する。ともに強く被熱している。炉機能時より据えられていたものか、廃絶儀礼的なものかは判然としない。

立石と土器の間には浅い窪みが位置する。焼土面を掘り込んでおり、窪み内の堆積土(１層)には焼土塊、炭化物を多く含むことから、灰などを掻き出した際の窪みと想定する。

≪柱穴≫住居内にはＰ１～３が位置する。いずれも主柱穴となり得る。本遺構は南西部分が大きく削

平されており、柱穴が消失した可能性があるため、主柱穴の本数を特定することはできない。柱穴は径約15㎝前後の円形で、確認面からの深さは31～48㎝である。Ｐ３はＳＫＰ2067と重複し、Ｐ３のほうが旧い。

≪覆土･混入物≫２層(４･５層)に分層した。４層は覆土、５層は上面に炉の焼土面が形成されることから竪穴掘削時の残土と判断する。削平により残存状況が悪く、４層の堆積過程は不明瞭だが、西壁際床面でほぼ完形に復元可能な土器片が１個体分まとまって出土した(ＲＰ２)ことから、廃絶行為として土器を置き、人為的に埋め戻したと推測する。

≪出土遺物≫縄文土器片203点(Ⅳa1類13点、Ⅳa2類77点、Ⅳd類１点、Ⅳf1類75点、Ⅳf2類７点、Ⅳf4類１点、Ⅳf5類29点)、石器20点(スクレイパー３点、剥片９点、ＲＦ３点、ＵＦ２点、凹石１点、磨製石斧１点、石皿１点)が出土し、そのうち縄文土器片６点、石器５点を図示した。出土した遺物のうち確実に当住居に伴うのは炉体土器と住居西壁際で出土したＲＰ２、および炉周辺で出土した石皿である。他は一括で取り上げたため詳細は不明である。

68は土器埋設炉の炉体土器(ＲＰ１)である。Ⅳa1類に属する。胴上部で膨らみ、頸部でくびれ口縁部は開く。６単位の波状口縁で文様も口縁の単位に規制される。文様は胴最大径部分より上に施文され、文様帯は横位に連結する波状沈線で区画され、文様帯内は縄文は施されない。沈線は幅２㎜で比較的深い。67は住居西壁際床面より出土したＲＰ２である。Ⅳa2類に属する。胴上部で最大径となり、頸部でくびれ口縁部は開く。文様は口縁部から胴上部にかけ地文撚糸文に沈線で施文される。文様帯は２段で４単位の横位の波状文で区画し、波状部を縦位の蛇行文で連結する。沈線幅は２㎜前後と細く深い。63は住居内北西部覆土より出土した。接合はしないが同一個体片62点を数える。内面に顕著な被熱痕(ハジケ)が確認でき、外面にも部分的に認められる。当遺跡において、内面のハジケは炉体土器に特徴的に見られることから、炉体土器として使用されたものが廃棄されたと推定する。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2134竪穴住居跡(遺構第29･30図、遺物第84図69～76、第107図Ｓ43～45、図版９･10･40)

北部段丘面ＬＯ～ＬＱ70･71区の地山漸移層(②Ⅸ層)上面で黒褐色土の広がりを確認した。規模、形状から竪穴住居の重複を想定したが、平面形を検出することができず、竪穴床面で炉を３基検出したことから、３軒の重複と認定した。東側の炉を炉Ａ、西側の炉を炉Ｂ、中央の炉を炉Ｃとし、炉Ａを伴う住居をＳＩ2134-ａ竪穴住居跡、炉Ｂを伴う住居をＳＩ2134-ｂ竪穴住居跡、炉Ｃを伴う住居をＳＩ2134-ｃ竪穴住居跡とする。調査中の覆土の削平により、土層による新旧は不明であるが、炉の検出レベルよりＳＩ2134-ｃが最も古い可能性が高く、ＳＩ2134-ａとＳＩ2134-ｂの新旧関係は不明である。柱穴は10基が竪穴掘り込み内に位置するが、帰属する住居は明確でない。また、近接してＳＮＲ2002土器埋設炉が位置する。ＳＮＲ2002が本遺跡において一般的な竪穴住居の中心に位置する炉とすれば、本住居跡ａ･b･ｃいずれにも重複していたと推定されるが、直接の重複がないため新旧関係は不明である。

遺物は一括で取り上げた。出土遺物の詳細はＳＩ2134-ａ竪穴住居跡の出土遺物の項目で記述した。また、土坑を２基検出した(ＳＫ01、ＳＫ02)。位置関係からＳＫ01はＳＩ2134-ｂに、ＳＫ02はＳＩ2134-ｃに伴う可能性が高いと判断したため、それらの詳細は、各住居の項目に記述する。

また、本遺構内の東側に位置する倒木痕より、炉体土器に特有に見られる被熱痕(ハジケ)をもつ同

一個体片が集中して出土した(第120図343)。攪乱が激しかったため詳細は不明であるが、土器埋設炉がさらに１基存在していた可能性が推定される。

ＳＩ2134-ａ竪穴住居跡(遺構第29･30図、遺物第84図69･72･75･76、第107図Ｓ43～Ｓ45、図版９･10･40)

≪形態･規模≫ＳＩ2134-ｂ･ｃと重複しており、明確なプランは検出できなかった。確認面から床面までの深さは約10㎝である。

≪壁･床面≫壁は開いて立ち上がる。床面は平坦である。硬化面などは認められない。床面レベルは約130.70ｍである。

≪炉≫土器埋設立石炉である。住居ほぼ中央に位置すると推測する。炉体土器の東側45㎝には立石を伴い、土器と立石の間には平面15㎝前後、厚さ５㎝程度の不整形に広がる焼土面が２箇所形成される。土器と立石、焼土面を結ぶ直線の方位はＮ－68°－Ｅである。

炉体土器(ＲＰ１)は、底部が残存する深鉢形土器で、径30㎝、床面からの深さ15㎝の掘り込み底面に、正位に埋設される。土器の口縁部は残存しておらず、割れ口に摩滅や被熱が確認できないことから、炉廃絶後に欠損したものと判断する。土器には内外面とも上端に帯状の赤変が認められる。赤変の範囲は内面が上端より９㎝前後、外面は上端より８㎝前後である。胴部内面には部分的に弱い被熱痕(ハジケ)が形成される。

土器内覆土は地山塊を多く含む黒色土の単一層(１層)である。覆土の堆積状況と炉体土器内面の被熱状況には整合性がないことから、炉廃絶後土器の内容物を掻き出し、人為的に埋め戻したと推定する。土器の裏込土(２層)は、地山土が混入する黒褐色土の単一層で、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定される。

立石は40×35×15㎝の扁平な輝石安山岩で、長軸を立てて、扁平面を土器側に向けて据えられる。石材は輝石安山岩である。土器側の扁平面の上端から18㎝の範囲は弱く被熱し、被熱境界が住居床面に対応する。

≪覆土･混入物≫検出中の削平により詳細は不明である。

≪出土遺物≫ＳＩ2134-ａ、ＳＩ2134-ｂ、ＳＩ2134-ｃ合わせて、縄文土器片･土製品246点(Ⅳa1類10点、Ⅳa2類16点、Ⅳb類５点、Ⅳc1類６点、Ⅳc2類２点、Ⅳd類２点、Ⅳf1類116点、Ⅳf2類18点、Ⅳf3類９点、Ⅳf4類１点、Ⅳf5類46点、Ⅳg類14点、円盤状土製品１点)、石器が11点(石鏃１点、石匙１点、スクレイパー２点、剥片７点)が出土し、土器４点、石器３点を図示した。炉体土器以外は一括で取り上げたため、出土状況の詳細は不明であるが、いずれも小片であり、覆土に混入したもの、もしくは竪穴の窪みを利用し廃棄されたものと推定する。

69は深鉢形土器で土器埋設炉の炉体土器(ＲＰ１)である。Ⅳa1類に属する。口縁部から胴部上半までが欠損しており、器形は定かではない。文様帯は口縁部から胴部中位と推定され、２条の沈線で区画される。沈線は浅く、幅４㎜と比較的太い。

≪時期･所見≫炉体土器から、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2134-ｂ竪穴住居跡(遺構第29･30図、遺物第84図71、図版９･10･40)

≪形態･規模≫ＳＩ2134-ａ･ｃ、倒木痕に破壊されるため、明確なプランは検出できなかった。確認面から床面までの深さは10㎝前後である。

≪壁･床面≫壁は開いて立ち上がる。床面には全体的に段丘礫が露出するが、本来表出していなかっ

た礫が倒木により巻き上げられた可能性がある。床面レベルは130.75m前後である。
≪炉≫土器埋設炉である。後世の倒木痕と重複するため、残存状況は悪い。
炉体土器(ＲＰ２)は深鉢形土器で、胴部下半を打ち欠き逆位に据える。口縁部は残存する。土器内面は被熱痕(ハジケ)が全面に認められる。土器内覆土は黒褐色土の単一層であるが、周辺の土層と差異がないことから、倒木により攪乱を受けていると判断する。
土器の北西約10cmには弱く焼けた焼土面が位置する。土器の被熱状況および炉体土器と焼土の位置関係より本炉は北側に立石を伴う土器埋設立石炉であった可能性が考えられる。しかし炉周辺は倒木により段丘礫が巻き上げられており、本炉に伴う礫を抽出することは不可能であった。
≪覆土･混入物≫検出中の削平により詳細は不明である。
≪その他の付属施設≫炉の南側約20cmにＳＫ01土坑が位置する。径70cm前後の平面不整円形で、床面からの深さは約30cmである。壁はやや開いて立ち上がり、底面は平坦である。覆土は３層からなり、２･３層には地山土が混入することから人為堆積と判断する。１層は堆積状況から、２･３層と一連の堆積と判断する。貯蔵穴などの性格が推測されるが、用途についての痕跡は確認できなかった。
≪出土遺物≫本遺構に確実に伴う遺物は炉体土器１点(71)で、深鉢形土器の口縁から胴部である。Ⅳa2類に属する。胴最大幅は胴上部にあり、頸部で括れ口縁部は開く。４単位の波状口縁で、隆帯を貼り付ける。文様帯は口縁部から胴部最大径部分まで、２段からなる。地文縄文に沈線で横位に連結した入組状の波状文を４単位施文する。沈線幅は２㎜と細く深い。
≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭と判断する。

ＳＩ2134-ｃ竪穴住居跡(遺構第29･30図、遺物第84図70･73･74、図版９･10･40)
≪形態･規模≫ＳＩ2134-ａ･ｂと重複しており、明確なプランは検出できなかった。確認面から床面までの深さは約20cmである。
≪壁･床面≫壁は開いて立ち上がる。床は平坦で、硬化面などは認められない。床面レベルは130.60m前後である。
≪炉≫土器埋設立石炉である。炉体土器の東側約40cmに立石を伴い、土器と礫に接して強く被熱した焼土面が楕円形に広がる。土器の西側にも接して焼土が伴うが、焼土面かブロックかは判然としない。立石と土器、焼土面を結ぶ直線の方位はＮ－68°－Ｅである。
炉体土器(ＲＰ３)は底部が残存する深鉢形土器で、径30cm、床面からの深さ18cmの掘り込み底部に正位に据えられる。口縁部は残存しないが、土器の上端割れ口は摩滅し、被熱することから、炉機能時にはすでに口縁部が欠損していたと判断できる。土器内面上端は、５cmの範囲で帯状の赤変と、著しいハジケが認められる。外面には、焼土面と対応する位置に、若干の赤変が認められるのみである。胴部内面には被熱痕はない。
土器内の覆土は２層(１･２層)に分層した。上位(１層)は土器内面の赤変境界を被覆して堆積するため、炉廃絶後内容物を掻き出した後に人為的に埋め戻されたものと推定する。２層は、土器裏込土と土質が異なることから、構築時に充填されたものではなく、廃絶後の堆積と推測する。土器裏込土(３層)は褐色土の単一層で、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。
立石は36×35×15cmの扁平な円礫で、石材は輝石安山岩である。立石は長軸を立てて、扁平面を土器に向け据えられる。立石に被熱痕は認められない。

≪その他の付属施設≫炉の1.0m南西にＳＫ02土坑が位置する。長軸約1.6m、短軸約1.1mの平面楕円形で、床面からの深さは36cmである。壁は緩やかに開いて立ち上がる。床面は丸みを帯び、南東側でやや盛り上がる。覆土は２層に分層した。１層は地山土が混入するため人為堆積と判断する。２層は炉機能時の自然堆積の可能性もあるが、詳細は判然としない。貯蔵穴等の施設と推測するが、用途についての痕跡は検出されなかった。

≪覆土･混入物≫検出中の削平により詳細は不明である。

≪出土遺物≫遺物は炉体土器１点とＳＫ02土坑より出土した縄文土器片15点である。ＳＫ02出土土器の内訳はⅣa1類１点、Ⅳa2類１点、Ⅳc2類１点、Ⅳf1類10点、Ⅳf2類１点、小型土器１点である。炉体土器を含め３点を図示した。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭と判断する。

ＳＩ2228竪穴住居跡(遺構第28図、遺物第85図77～79、第107･108図Ｓ46～48、図版９･40)

本住居は柱穴に新旧の重複があることから、竪穴には重複を確認できなかったものの、１度の改築を想定しうる。

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＥ･ＬＦ66･67区に位置する。全体に削平を受けているが、旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山層上面で土器埋設炉を確認し、周囲約４mの範囲で地山層の凹凸が認められたことから、この凹凸を竪穴掘削痕と判断し、竪穴住居跡と認定した。

≪重複≫倒木痕より旧い。

≪形態･規模≫長軸約4.0m、短軸約3.5mの平面楕円形である。

≪壁･床面≫壁は削平により消失する。床は平坦で、硬化面は認められない。住居中央約２mの範囲に不整形に焼土面が広がる。床面レベルは約131.00m、床面積は約11.00㎡である。

≪炉≫中央やや北西寄りに、土器埋設炉が構築される。床面が広く被熱しているため、炉に伴う焼土は検出できなかった。

炉体土器(ＲＰ１)は、底部が残存する深鉢形土器で、径約30cm、床面からの深さ27cmの掘り込み底面に正位に埋設される。土器の口縁部は一部しか残存しておらず、割れ口には被熱や摩滅が認められないことから、炉廃絶後に欠損したものと推測する。

残存する口縁部分には内外面ともに帯状の赤変が認められる。赤変の範囲は内面が口縁部より３cm前後、外面は口縁部より５cm前後である。残存部分が少ないためか、現状で確認できる被熱状況は弱い。胴部内面は被熱によるハジケが認められ、底部付近の４層に対応する部分には被熱痕はない。

土器内覆土は４層に分層した。１･２層は土器内面の赤変境界と整合性がないことから、炉廃絶後の堆積と判断する。３層と４層の境界が、土器内面の被熱境界に対応することから、３層も炉廃絶後の堆積、４層は構築時に充填された土と推定する。土器裏込土(５層)は、褐色土の単一層で、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。

≪柱穴≫住居内にはＰ１～５が位置する。倒木痕により一部不明であるが、柱穴位置から主柱はほぼ方形に４本配置されていたと推定する。柱穴が重複して２基位置する例が２箇所(Ｐ１とＰ３、Ｐ２とＰ４)で確認された。改築の結果であろう。土層断面から床面からの深さ25～30cmのＰ２･３が旧く、約10cmのＰ１･４が新しいと判断できる。Ｐ５は単独で存在するが、床面からの深さが30cmであることから、Ｐ２･３と一連の柱穴と推定する。

≪覆土･混入物≫削平により覆土は残存していない。１･２層は竪穴掘削時の残土である。
≪出土遺物≫縄文土器49点(Ⅳa1類１点、Ⅳb類２点、Ⅳc3類９点、Ⅳf1類25点、Ⅳf2類６点、Ⅳf4類１点、Ⅳf5類５点)、石器13点(スクレイパー３点、剥片７点、ＵＦ２点、凹石１点)が床面および竪穴掘削時の残土より出土し、縄文土器片３点、石器３点を図示した。
　南側床面直上で同一個体土器片がまとまって出土し、Ⅳc3類９点とⅣf1類の多くはこの土器片である。同一個体片ではあるが、ほとんど接合はしなかった(77･78)。
≪時期･所見≫炉体土器および、床面直上でまとまって出土した土器片から、縄文時代後期初頭に比定する。床面の被熱状況から、焼失住居の可能性も考えられるが、炭化物の出土量は他の遺構と大差なく、現状では特定しがたい。

ＳＩ2303竪穴住居跡(遺構第34図、遺物第85図80、第108図Ｓ49)
≪位置･確認面≫北部段丘面ＫＱ･ＫＲ71･72区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で石囲炉を確認し、竪穴住居に伴う炉と認定した。
≪重複≫ＳＫＩ2357竪穴状遺構と重複し、土層断面より本遺構が新しいと判断する。
≪形態･規模≫径約3.5ｍの平面ほぼ円形である。
≪壁･床面≫削平により壁は残存しない。床面は平坦である。硬化面などは認められない。床面レベルは約131.40m、床面積約9.00㎡である。
≪炉≫住居中心に石囲炉が構築される。径95㎝、床面からの深さ８㎝の掘り込み内に、長軸72㎝、短軸60㎝の平面楕円形に礫が配される。長径10～30㎝の円礫８個で形成され、うち１点は確認段階において割れていた。焼土は検出されていないが、炉石は被熱痕があることから、廃絶時に焼土が掻き出された可能性が高い。石囲炉の周囲には、長径15～45㎝の偏平な円礫が６個検出された。礫配置の規則性や本住居跡に付随するか否かは定かではない。
≪柱穴≫本遺構に伴う柱穴は認められなかった。
≪覆土･混入物≫３層に分層した。１層は炉廃絶後の堆積で、地山土が混入することから人為堆積と判断する。２層は炉石設置の際の根固土で、掘り込み掘削土由来と推定する。３層は竪穴掘削時の残土である。
≪出土遺物≫縄文土器片12点(Ⅱ群１点、Ⅳa1類３点、Ⅳc2類１点、Ⅳf1類７点)、石器４点(石錐１点、剥片１点、敲石１点、石核１点)が出土し、そのうち土器１点、石器１点を図示した。縄文土器片はいずれも小片で、掘削痕からの出土である。
≪時期･所見≫時期を特定できる遺物が出土していないため、時期は不明である。炉の形態が後述するＳＩ2507竪穴住居跡に類似することから、ＳＩ2507竪穴住居跡と同時期と推定し、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2338竪穴住居跡(遺構第31図、遺物第86図84･85、第108図Ｓ50、図版12･13･41)
≪位置･確認面≫北部段丘面ＬＢ･ＬＣ72･73区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山層上面を精査中、立石と埋設された土器、その周囲に焼土の広がりを確認し、土器埋設立石炉と判断した。その後、周囲を精査したところ地山の凹凸を確認したため、これを竪穴底面掘削痕と推定し、竪穴住居跡と認定した。
≪重複≫確認段階では重複する遺構はなかったが、ＳＮＲ2335土器埋設炉が竪穴住居に伴う炉とすれ

ば、本遺構と重複していたと推測できる。直接の重複がないため、新旧は判断しがたい。
≪形態･規模≫長軸約4.5m、短軸約4.2mの平面円形である。
≪壁･床面≫床面まで削平を受けており、壁は残存しない。床面は若干削平が及んでおり詳細は不明だが、ほぼ平坦であると思われる。床面レベルは約131.40m、床面積は約14.50㎡である。
≪炉≫住居の中心より約60㎝北東寄りに、土器埋設立石炉が構築される。土器と立石を結ぶ直線の方向はＮ－６°－Ｗで、炉体土器の46㎝南方に立石(閃緑岩)が位置する。焼土面は確認されていないが、焼土塊が住居床面全体に散在することから、廃絶後に掻き出されたものと想定する。

炉体土器(ＲＰ１)は深鉢形土器で、径約50㎝、床面からの深さ約30㎝の掘り込み底面に、底部を残したまま正位に埋設される。口縁部は欠損するが、割れ口が摩滅し、被熱痕が認められることから、炉機能時にはすでに欠損していたと推定する。土器上端は内外面とも５～９㎝の範囲で被熱により帯状に赤変するが、内面がより顕著である。内面上半には弱いハジケが認められる。

土器内覆土は４層に分層した。上位(１～３層)は、土器の赤変境界と土器内覆土の層界は対応しないことから、炉廃絶後の堆積と判断する。４層は黒褐色土を基質とするため、堆積成因は現状では特定できない。土器裏込土(５層)と基質が異なることから、廃絶後の堆積と考えられようか。土器裏込土は暗褐色土で、掘り込み掘削土由来と推定する。
≪柱穴≫住居西側に２基の柱穴を検出した(Ｐ１、Ｐ２)。いずれも暗褐色土の単層である。浅いことから、主柱穴となり得るか否かは判然としない。
≪その他の付属施設≫住居内南西側にはＳＲ01土器埋設遺構を検出した。焼土面が検出されなかったことから、土器埋設炉ではなく土器埋設遺構としたが、埋設土器(ＲＰ２)には、炉体土器に特徴的な胴部内面のハジケが認められるため、土器埋設炉であった可能性も否定できない。本遺構が土器埋設炉とすれば、別住居の重複の可能性も考えられるが、検出レベルが本住居の炉と同じであり、なおかつ炉体土器、埋設土器ともに上部を削平されたとは考えがたいことから、同住居に付随する遺構と判断した。

埋設土器は底部が穿孔され、正位に埋設される。口縁部は一部残存している。床面レベルと土器の残存高から、埋設土器は床面から５㎝ほど表出していたと復元できる。土器内覆土は３層に分層した。２層の上部には焼土塊が混入する。全体に地山土の混入が見受けられ、いずれも人為堆積と判断する。土器口縁部には若干の赤変と、内面胴部上半に弱いハジケが認められる。土器の被熱状況は弱く、土器埋設炉であった場合、使用頻度が低かったと想定され、ゆえに焼土面の形成が弱く、焼土面が検出されなかったのであろうか。
≪覆土･混入物≫削平により覆土は残存していない。１層は竪穴掘削時の残土である。２層は立石の裏込土である。
≪出土遺物≫土器は炉体土器と埋設土器の２点、石器は竪穴掘削時の残土より石匙１点が出土し、いずれも図示した。

84は土器埋設炉の炉体土器(ＲＰ１)である。Ⅳa2類に属する。口縁部付近には尖鋭な工具を用いた沈線文が４単位施される。単位文様は２㎝程度のワンポイント的なもので、当遺跡で他に類例はない。
≪時期･所見≫炉体土器、埋設土器から縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2344竪穴住居跡(遺構第33･34図、遺物第85図81～83、第108･109図Ｓ51～56、図版11･41･52)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＣ･ＬＤ72･73区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面でプランを確認した。

≪重複≫ＳＫ2356土坑と重複する。住居床面で確認したことから、本遺構より旧いと推定する。また、直接重複はしないが、近接するＳＮＲ2335土器埋設立石炉を炉とする竪穴住居跡と重複していた可能性がある。竪穴の切り合いがないため新旧は不明である。

≪形態･規模≫長軸約6.0m、短軸約5.3mの平面不整楕円形で、確認面からの深さは６～14cmである。南西部は確認調査時の壺掘りによって、部分的に欠損している。

≪壁･床面≫壁は外に開きながら立ち上がる。床面はほぼ平坦で、全体にやや締まる。床面レベルは131.25m前後、床面積は約20.90㎡である。

≪炉≫住居内やや南東寄りに、２個の土器が、正位(ＲＰ１)と横位(ＲＰ２)に埋設される土器埋設立石炉が構築される。立石は２個の土器を結ぶ直線上に位置し、焼土面はＲＰ１から立石の間、およそ80×40cmの範囲に広がる。ＲＰ２の下にも連続しており、全体的に強く被熱している。２個の土器と立石、焼土面を結ぶ直線方位はＮ－46°－Ｅである。

炉体土器ＲＰ１は深鉢形土器で、ＲＰ２の56cm南東に正位に埋設される。底部は欠損し、口縁部は遺存しないが、上部割れ口に摩滅痕、被熱痕が認められることから、炉使用時すでに口縁部は部分的に欠損していたと判断する。土器内面は上端から７cm前後の範囲で、帯状に被熱によるハジケと赤変が認められる。土器外面にも、上端より６cm前後の範囲で、帯状の被熱痕が認められるが、内面がより顕著である。胴部内面上半には弱い被熱痕が認められる。

土器内覆土は３層に分層した。１層は土器内面上端の被熱境界との整合性がないことから、廃絶後に土器内の土を掻き出して、埋め戻した可能性を考える。２層は、対応する炉体土器の胴部内面に被熱痕跡がないことから、構築時に充塡された土の可能性が考えられるが、３層と基質を異にするため、断定はしがたい。３層は地山由来土であり、炉構築の際に充塡された、掘り込み掘削土由来と推定する。

炉体土器ＲＰ２は深鉢形土器の口縁～胴部の縦半分で、口縁部をＲＰ１に向けて、横位に埋設される。割れ口が摩滅するため、使用時にはすでに、縦半分は欠損していたと考えられる。土器内面はほぼ全面に被熱痕(ハジケ)が認められる。

立石はＲＰ２より28cm南東に位置する。長軸40cmの扁平な円礫で、長軸を垂直に据える。上部は破損しており、破損部分に風化を認めることができないことから、ほ場整備の際の削平によるものと推測する。

≪柱穴≫床面から７基のピットを検出した。配置よりＰ１～Ｐ６が住居の主柱穴であると推定する。いずれも径約40cm弱の平面ほぼ円形である。深さはＰ２が50cm、Ｐ５が36cmと深く、他の４基は15cm以下と浅い。Ｐ７は住居中央やや西寄りに位置し、用途･性格は不明である。

≪その他の附属施設≫炉の北西側に、長軸約2.0m、短軸約0.9mの平面楕円形の範囲で、焼土面を確認した。焼土面は非常に硬質であり、西側にはＰ７が隣接することから、Ｐ７を埋設土器の抜き取り痕と想定し、土器埋設炉が構築されていた可能性と、ＳＩ2005竪穴住居跡やＳＩ2376竪穴住居跡に類似するような焼失住居の可能性が考えられるが、現状では判然としない。

≪覆土･混入物≫４層に分層した。１～３層には地山由来土の混入が認められることから人為堆積と判断する。連続性は定かではない。４層は竪穴隅に堆積した地山由来土で、壁の崩落土と判断する。
≪出土遺物≫縄文土器片94点(Ⅱ群１点、Ⅳb類３点、Ⅳc1類１点、Ⅳc2類１点、Ⅳf1類86点、Ⅳg類２点)、石器･石製品53点(スクレイパー３点、剥片34点、ＲＦ２点、ＵＦ７点、凹石５点、円盤状石製品１点、有孔石製品１点)が出土し、そのうち土器３点、石器６点を図示した。石英質の剥片が７点出土しており、特徴的である。遺物は一括で取り上げたため、出土状況の詳細は不明であるが、土器片はいずれも小片で、接合する個体が少ないことから、覆土に混入したものと推定する。
≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭と判断する。

ＳＩ2370竪穴住居跡(遺構第32図、遺物第86図86･87、第111図Ｓ62、図版41)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＮ･ＬＯ73･74区に位置する。当初、旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で約70㎝離れた土器埋設遺構２基を確認した。これらは、竪穴住居跡に伴う上位を削平された土器埋設炉であった可能性を想定したことから、ＲＰ１をほぼ中心として十字に幅15㎝前後の試掘溝を掘削し、竪穴掘り込みの有無等を検討した。その結果、土器埋設遺構周辺は既に床面以下まで掘り下げていたものの、その周縁部には竪穴床面と壁および竪穴覆土が一部遺存することを認め、竪穴住居跡が存在すると判断した。ＳＲ01は本住居に伴うものではない可能性があるが、位置関係からここでは住居内の土器埋設遺構として報告する。
≪重複≫南側でＳＫ2373土坑と重複する。ＳＫ2373が本住居跡を掘り込んでおり、本遺構が旧い。
≪形態･規模≫竪穴は長軸約4.6m、短軸約3.9mの楕円形平面をなす。確認面からの深さは最大で10㎝前後である。
≪壁･床面≫遺存部分では、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。壁溝、壁柱穴は確認できない。床面はほぼ平坦である。ＳＫ2373土坑と重複するため、必ずしも明確ではなかったが、床面は南側が若干傾斜している可能性がある。貼床の痕跡、床面の硬化範囲等は認めることはできない。床面レベルは約130.9m、床面積は約114.20㎡である。
≪炉≫埋設された土器(ＲＰ１)が、竪穴のほぼ中央に位置することから、周囲には焼土面を認めることはできないものの、上位が削平された土器埋設炉であったと判断する。炉体土器は胴径16㎝、残存高11㎝の深鉢胴部を正位に埋設する。現状では胴北半側を欠く。胴部上端には炉機能時の二次被熱痕が残る可能性があるものの、遺存状態が不良なため、断定できない。炉体土器内側の覆土は、黒褐色を呈する砂質土である。焼土粒、炭化物粒等は認めることはできない。炉および竪穴住居廃絶後に堆積した当時の表土起源の流入土であった可能性も想定し得るが、竪穴周囲の旧表土層は竪穴住居跡確認時には既に削平されていたことから、断定しがたい。
≪柱穴≫確認できなかった。
≪その他の附属施設≫ＳＲ01土器埋設遺構は、南半側がＳＫ2373土坑に破壊されている。埋設土器(ＲＰ２)は、誤って土層断面等を観察することなく取り上げてしまったため、その詳細は判然としない。確認時点では、縦位に埋まった胴部破片10点前後が、大勢として不整な半環状に巡っていた。遺存状態が悪く接合はできなかった。一部は抜き取られた可能性もあろう。周囲には焼土面を認めることはできなかった。なお、本遺構とＳＲ01土器埋設遺構とを結ぶ直線の方位はＮ－13°－Ｅ前後である。

≪覆土･混入物≫竪穴周囲の基盤土と類似した褐色砂質土である。基盤土に比べ相対的に暗い色調を呈する。遺物を少量含むほかは、顕著な混入物を認めることができない。覆土はごく一部が遺存していたに過ぎないこともあり、その由来と堆積要因は特定しがたい。
≪出土遺物≫覆土中および床面直上から縄文時代後期初頭の土器小破片５点、敲石１点、剥片類４点が出土し、土器２点、石器１点を図示した。

86は炉体土器(ＲＰ１)で、前述のように胴部約1／2のみ遺存する。本例は、ＳＩ2017土器埋設炉ＲＰ１の掘り込み底面から出土した底部破片と接合した。両者は粘土紐接合部で分離し、それぞれが擬口縁および擬口縁逆形を明瞭に残す。分離部分周辺には加撃痕を認めることはできないことから、意図的に割ったのではなく、土器焼成時に接合部で割れたものと推定する。
≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。ＳＲ01土器埋設遺構は、本住居炉と併存した土器埋設炉もしくは土器埋設遺構、あるいはより旧い竪穴住居跡に伴う土器埋設炉の可能性等が想定し得るものの、現状では断定できない。

本竪穴住居跡は炉体土器から縄文時代後期初頭に属すると判断する。なお、竪穴北東側床面直上出土の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代2810±40BP、暦年較正交点BC940である。炉体土器に基づく竪穴住居跡推定時期よりは1000年前後新しい年代値となる。後世の攪乱による混入等を想定せず、両者の整合性をとるならば、本竪穴住居跡は、住居廃絶後、周囲からの流入土によって長期間かかって埋積されたとする想定があり得ようか。

ＳＩ2374竪穴住居跡(遺構第35･36図、遺物第86･87図88～95、第110図Ｓ57～61、図版13･14･42･52)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＡ･ＬＢ68･69区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で不整形に広がる黒褐色土を確認し、規模、形状から竪穴住居跡と認定した。
≪重複≫ＳＮＲ2377土器埋設炉、ＳＮＲ2378土器埋設炉と重複する。ＳＮＲ2377は炉体土器の遺存状況より、本遺構が新しいと考えられる。ＳＮＲ2378は本遺構の覆土中で確認したことから、本遺構の方が旧いと考えられる。
≪形態･規模≫長軸約4.6m、短軸約4.2mの平面楕円形で、確認面から床面までの深さは約５㎝である。
≪壁･床面≫壁は開いて立ち上がる。床は平坦で、硬化面は認められない。床面レベルは131.25m前後、床面積は約15.10㎡である。
≪炉≫住居内北寄りに、２個の土器が埋設される土器埋設炉が構築される。２個の土器を結ぶ直線方位はＮ－２°－Ｅで、南側の土器(ＲＰ１)は正位埋設、北側の土器(ＲＰ２)は横位埋設である。焼土面は土器の周囲に接して広がり、ＲＰ２の下まで続く。ＲＰ１の南側に位置する焼土は塊状であることから、掻き出した焼土が堆積したものと判断する。

ＲＰ１は深鉢形土器で、底部を残したまま正位に埋設される。口縁部は部分的に遺存するが、欠損する部分には割れ口に摩滅痕、被熱痕が認められることから、炉使用時にはすでに口縁部は部分的に欠損していたと判断できる。土器内面は、口縁部から３㎝の範囲で帯状に赤変するなど、被熱による劣化が著しい。土器外面にも口縁より５㎝の範囲で被熱痕が認められるが、内面の被熱がより強い。胴部内面にも被熱によるハジケが認められる。

土器内覆土は２層(１･２層)からなるが、土器の赤変境界とは合致しないことから、廃絶後に土器内の土を掻き出し埋め戻した可能性を考える。土器裏込土(３層)は、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土

と判断する。

ＲＰ２は深鉢形土器で、口縁部をＲＰ１に向け横位に埋設される。口縁部片の出土状況から、接合はできなかったが、完形に近い状態で埋設されたと判断する。炉体土器内面は底部を除くほぼ全面に被熱痕(ハジケ)が認められる。

土器内覆土は２層(４・５層)に分層した。４層は焼土塊が多く混入する。いずれも炉廃絶後の堆積と推定する。

ＲＰ１とＲＰ２の間には浅い落ち込みがあり、焼土面を掘り込むことから灰を掻き出した際の窪みと考えられる。

≪柱穴≫住居内にはＳＫＰ2398、2399などが位置するが、当住居は竪穴住居の炉と推定されるＳＮＲ2377･2378と重複することから、それらに付随する柱穴が含まれると考えられる。ピットの位置および深さから、ＳＫＰ2398、2399、2414、2462の４本が当住居の主柱穴であったと推定する。

≪覆土･混入物≫１層は住居の覆土であり炭化物を少量含む。礫や遺物が多く混入しており、人為の埋め戻しと判断する。２層は竪穴掘削時の残土である。

≪出土遺物≫縄文土器127点(Ⅳa1類２点、Ⅳa2類３点、Ⅳb類５点、Ⅳc1類５点、Ⅳc2類５点、Ⅳf1類82点、Ⅳf2類４点、Ⅳf5類18点、Ⅳg類２点、小型土器１点)、石器･石製品19点(石鏃１点、スクレイパー３点、剥片４点、ＲＦ６点、ＵＦ２点、凹石１点、石核１点、円盤状石製品１点)が出土し、縄文土器８点、石器５点を図示した。一括で取り上げたため、出土状況の詳細は不明であるが、小片が多く接合する個体は少ない。

≪時期･所見≫炉体土器から、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2376竪穴住居跡(遺構第37図、遺物第87図96～101、第111図Ｓ63～65、図版15･16･43)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＢ･ＬＣ67･68区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で黒褐色土の広がりを確認し、規模･形状から竪穴住居跡と認定した。南西側の壁･床面は後世の削平により失われている。

≪重複≫ＳＫ2400土坑と重複し、本住居の床面を掘り込むことから、本遺構が旧いと判断する。また、床面でＳＲ2379土器埋設遺構を確認した。ＳＲ2379埋設土器の残存状況より、本遺構が新しいと判断する。

≪形態･規模≫径約3.9ｍの平面円形で、確認面から床面までの深さは15㎝前後である。

≪壁･床面≫壁は開いて立ち上がる。床は平坦で硬化面は認められない。住居中央約2.0ｍの範囲に不整形に焼土面が広がる。床面レベルは131.10ｍ前後、床面積は約12.00㎡である。

≪炉≫住居のほぼ中心に、土器埋設炉が構築される。床面全体が被熱するため、炉に伴う焼土面は検出できなかった。炉体土器(ＲＰ１)は底部が欠損する深鉢形土器で、径約40㎝、床面からの深さは約20㎝の掘り込み底面に正位に設置される。口縁部は残存していないが、割れ口が摩滅し、被熱することから、使用時にはすでに破損していたと判断できる。土器の上部は内外面ともに帯状に被熱する。範囲は内面が上端より４㎝前後、外面は上端より２㎝前後である。胴部内面上半には弱いハジケが認められる。

土器内覆土は２層(４・５層)に分層した。上位(４層)は土器の被熱部分を覆う状態で堆積することから、炉廃絶後に内部の土を掻き出し埋め戻した人為堆積土と推定する。下位(５層)は地山由来土で、

土器裏込土(６層)とともに、構築時に充填された土と判断する。
≪柱穴≫Ｐ１～Ｐ７を検出した。配置からＰ１～Ｐ５が主柱穴となり得る。Ｐ３を除き、径20～30㎝の平面円形で、床面からの深さは10～30㎝である。Ｐ３は他の柱穴より規模が大きく、径45㎝、床面からの深さ45㎝である。
≪覆土･混入物≫５層に分層した。５層は竪穴掘削時の残土、４層は住居使用時の自然堆積と判断する。２･３層は地山塊が混入することから、人為による埋め戻し土と判断する。１層からは遺物が多く出土しており、竪穴の窪みを利用した廃棄が行われた可能性がある。
≪出土遺物≫縄文土器片273点(Ⅲa類２点、Ⅳa1類２点、Ⅳa2類３点、Ⅳb類11点、Ⅳc1類２点、Ⅳc2類６点、Ⅳf1類231点、Ⅳf2類１点、Ⅳf3類１点、Ⅳf5類12点、小型土器２点)、石器･石製品52点(石匙１点、スクレイパー２点、剥片41点、ＲＦ２点、ＵＦ２点、石錘１点、凹石１点、円盤状石製品１点、ベンガラ素材１点)が出土し、縄文土器片６点、石器３点を図示した。炉体土器を除き、遺物は一括で取り上げたため、出土状況の詳細は不明である。土器片はいずれも小片であり、覆土に混入したもの、もしくは竪穴の窪みを利用し廃棄されたものが多いと推定する。
≪時期･所見≫炉体土器および周囲に位置する遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。床面の被熱状況から、焼失住居の可能性も考えられるが、炭化物の出土量は他の遺構と大差なく、現状では特定しがたい。

ＳＩ2381竪穴住居跡(遺構第38図、遺物第88図102～104、第112図Ｓ66～68、図版16･43･52)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＦ･ＬＧ66･67区に位置する。地山層上面で石組炉を確認し、周辺を精査したところ4.0ｍ前後の範囲で基盤層の凹凸が認められた。この凹凸を竪穴掘削痕と判断し、竪穴住居跡と認定した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫長軸約4.5ｍ、短軸約3.4ｍの平面楕円形と推定する。竪穴平面長軸方位はＮ－67°－Ｗである。
≪壁･床面≫壁は削平により消失する。床面は平坦であり、硬化面は認められない。床面レベルは約130.90ｍである。推定床面積は約12.00㎡である。
≪炉≫住居北寄りに石組炉が構築される。４個の礫からなり、立位で検出された礫は西側の１個のみであったが、南の礫の脇に掘り込み痕を確認したこと、北側の礫の下に空洞が認められたこと、礫の下に焼土が確認できることから、横位で検出された３個の礫は、本来立位の状態であったと判断する。掘り込み痕から推定すると、１辺約40㎝の方形に礫が据えられていたと考えられる。焼土面は方形に配された礫の中心やや南寄りに位置し、径は17㎝、厚さは２㎝である。被熱状況は弱い。礫に明瞭な被熱痕は認められない。
≪柱穴≫住居内に６基の柱穴を確認した(Ｐ１～６)。Ｐ４～６は平面20～30㎝の円形で、深さ40～60㎝である。Ｐ２も合わせ、配置･規模などからこれら４基が主柱穴と推定する。Ｐ１、Ｐ３の性格は判然としない。Ｐ３の中位からは、円盤状石製品が２個重なって出土した。儀礼的なものであろうか。
≪覆土･混入物≫調査中の削平により覆土の詳細は不明である。１層は竪穴掘削時の残土である。
≪出土遺物≫縄文土器片64点(Ⅳa1類１点、Ⅳa2類１点、Ⅳb類２点、Ⅳc1類２点、Ⅳc2類１点、

Ⅳc3類１点、Ⅳf1類36点、Ⅳf2類９点、Ⅳf3類１点、、Ⅳf5類９点、Ⅳg類１点)、石器･石製品19点(剥片15点、ＵＦ２点、円盤状石製品２点)が出土し、縄文土器片３点、石器･石製品３点を図示した。遺構を検出する際に一括で取り上げたため、出土状況の詳細は不明である。

≪時期･所見≫周辺に位置する竪穴住居跡との位置関係から、それらと同時期と推測し、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2460竪穴住居跡(遺構第39･40図、遺物第88図105･106、図版17･43)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ73･74区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、段丘礫層上面で埋設された土器とその周辺に焼土面の広がりを確認したことから、竪穴住居跡の検出に努めたが、床面まで削平を受けていたため平面形を検出することは不可能であった。そのため埋設された土器をＳＲ2295土器埋設遺構として調査をした。その後、ＳＲ2295に近接して土器片がまとまって出土したことから、試掘溝を掘削したところ底部が横位に検出され、横位の土器埋設遺構ＳＲ2296とした。整理段階において、焼土面の状況から、２基の炉体土器を伴う竪穴住居跡と認定し、ＳＩ2460竪穴住居跡と変更した。

≪重複≫周辺にＳＮＲ2156土器埋設炉、ＳＮＲ2611土器埋設炉等が位置することから、それらが竪穴住居に伴う土器埋設炉とすれば、住居が重複していた可能性が高いが、いずれも削平を受けているため、新旧関係は明らかではない。

≪形態･規模≫床面まで削平を受けているため、形態、規模は不明である。

≪壁･床面≫削平により壁は消失する。床面には炉を中心として約2.5ｍの範囲で不整形に焼土が広がる。床面レベルは約130.90ｍである。

≪炉≫住居ほぼ中央に、２個の土器を伴う土器埋設炉が構築される。２個の炉体土器を結ぶ直線の方位はＮ－59°－Ｗで、北西側の土器(ＲＰ１)は正位埋設、南東側の土器(ＲＰ２)は横位埋設である。炉周辺は広く焼土化しており、炉に伴う焼土を検出することはできなかった。

ＲＰ１は底部が欠損する深鉢形土器で、径約30㎝、床面からの深さ約20㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。口縁部は遺存しないが、割れ口は摩滅し、被熱痕が認められることから、炉使用時にはすでに欠損していたと推定する。上端には、内外面ともに被熱による帯状の赤変が認められる。赤変の範囲は内面が上端より３㎝前後、外面は上端より３㎝前後で、被熱状況は内面がより顕著である。胴部内面にも被熱痕(ハジケ)が認められる。

土器内覆土は３層(２～４層)に分層した。２層は土器の赤変境界を被覆し堆積することから、炉廃絶後、土器の内容物を掻き出した後に堆積した土と判断する。３層は人為堆積である。炉廃絶後の堆積もしくは炉機能時の堆積と推測するが、判然としない。４層は、対応する土器の内面に被熱痕が認められないことから、構築時に充填された土と判断する。土器裏込土(５層)は暗褐色土の単一層で、４層とともに掘り込み掘削土由来と推定する。

ＲＰ２は口縁部が欠損した深鉢形土器で、土器上部をＲＰ１に向け横位に埋設される。掘り込みは確認できなかった。土器内面には全体に強い被熱痕(ハジケ)が認められる。土器内には暗褐色土(６層)が堆積するが、遺存状態が悪く、堆積状況などの詳細は不明である。

ＲＰ１の北東に近接して扁平な礫が検出されたが、炉との関係は判然としない。

≪柱穴≫炉の周囲にＳＫＰ2161、2162、2235、2237、2238、2271～2274、2285、2290が位置するが、

住居プランが不明確であること、重複する別住居の存在が想定できることから、当住居に付随する柱穴を抽出することは不可能であった。

≪覆土･混入物≫削平により消失しているが、ＲＰ１、ＲＰ２の間に堆積する暗褐色土(１層)が住居覆土と判断する。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器である深鉢形土器２点で、第88図105･106に図示した。

≪時期･所見≫炉の形態から、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2475竪穴住居跡(遺構第41･42図、遺物第88図107、図版17･43)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ67区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で土器埋設炉を確認し、竪穴住居跡の検出に努めたが、削平により竪穴の検出は不可能であったため、ＳＲ2021土器埋設遺構として調査を進めた。整理段階で柱穴配置から竪穴住居跡と認定し、ＳＩ2475竪穴住居跡とした。

≪重複≫当竪穴住居の柱穴と判断したＳＫＰ2174がＳＩ2001竪穴住居跡の炉体土器を破壊して構築されること、ＳＩ2001竪穴住居跡の柱穴であるＳＫＰ2145を掘り込んで本住居の炉が構築されることから、ＳＩ2001より新しいと判断する。また、近接してＳＮＲ2024土器埋設炉が位置する。ＳＮＲ2024が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、本遺構と重複していたと推定される。炉体土器より本遺構が新しいと推定する。

≪形態･規模≫削平を受けているため平面形は検出できなかったが、柱穴配置より直径約4.5ｍの平面円形と推測する。

≪壁･床面≫壁･床面共に削平により消失する。推定床面レベルは約130.90ｍである。

≪炉≫住居中心に土器埋設炉が構築される。炉体土器(ＲＰ１)は、底部が残存する深鉢形土器で、径35㎝、確認面からの深さ15㎝の掘り込み底面に、正位に埋設される。口縁部は破損するが、割れ口が摩滅することから炉使用時にはすでに欠損していたと判断する。上端には、内外面ともに被熱による帯状の赤変が認められる。赤変の範囲は内面が上端より６㎝前後、外面は上端より３㎝前後で、内面がより顕著である。胴部内面上半にも弱い被熱痕(ハジケ)が認められる。

土器内覆土(１層)は黒褐色土の単一層である。上部に焼土塊が混入する。土器の赤変境界を被覆し堆積することから、炉廃絶後、内容物を掻き出した後に堆積したものと判断する。土器裏込土(２層)は黒褐色土の単一層である。旧表土由来であろうか。３層は竪穴掘削時の残土の可能性がある。

≪柱穴≫炉周囲にはＳＫＰ2054～2059などの柱穴様ピットが位置するが、ＳＩ2001と重複するため、本遺構に伴う柱穴は明確ではない。しかしながらＳＫＰ2056、2079、2174、2440は底面レベルが130.27～130.43m(確認面からの深さ35㎝前後)で、炉を中心に位置することから、これらが本遺構の柱穴となりえよう。ＳＫＰ2055も位置より本遺構に伴う可能性があるが、ＳＩ2001に伴う可能性もあり現状では断定しがたい。

≪覆土･混入物≫削平により残存していない。

≪出土遺物≫覆土が削平されているため出土遺物は炉体土器のみである。第88図107に図示した。胴上半で緩やかに最大径となり、頸部でやや括れる。口縁部は残存していないが、開いていたものと推定する。文様帯は胴部中位に及び、１条の沈線で区画される。地文縄文に、幅６㎜と比較的太く浅い沈線で６単位の文様を施す。

≪時期･所見≫炉体土器から、縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＩ2506竪穴住居跡(遺構第43図、遺物第89図108･109、図版17･44)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＨ･ＫＩ62･63区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)上面で、やや不明瞭な半円形状のプランを確認し、遺構が存在することを推測した。さらに精査を続けたところ、立石と焼土面および遺物の出土を確認した。これらは、上位を削平された竪穴住居跡に伴う立石炉と、それに伴う竪穴掘り込みである可能性を想定したことから、この立石を中心として十字に土層観察用の畦を設定し、竪穴の有無等を検討した。その結果、北側と西側に竪穴住居の壁の立ち上がりを確認したため、竪穴住居跡の存在を認めた。

≪重複≫他の遺構との重複関係はないが、南東側が地割れによる落ち込みによって破壊されている。

≪形態･規模≫南東側が消失するが、現状から、平面形は円形と推定する。遺存する部分の最大径は3.2ｍである。

≪壁･床面≫壁の高さは北側が10㎝でやや緩やかに立ち上がる。西側は12㎝で、やや急に立ち上がる。床面は北西側に一部遺存し、ほぼ平坦である。南東側は地割れにより破壊されているため、壁･床面のいずれも不明である。床面レベルは約132.20ｍ、推定床面積は約8.00㎡である。

≪炉≫竪穴のほぼ中央と推定される場所で立石炉を確認した。立石は被熱によってひび割れている。また、焼土面の平面形は不整な円形であり、被熱範囲は45×40㎝である。被熱の深さは最大で約10㎝で、立石の周辺が強く焼けている。

≪柱穴≫検出した柱穴は２基である。これらを住居の柱穴と想定するが、南西側からは柱穴が検出されず、南東側は地割れにより破壊されているために、その詳細は現状では特定しがたい。

≪覆土･混入物≫覆土は３層に分層した。３層は住居を構築する際の掘削痕と推定する。２層は立石の掘り込みと判断する。１層は住居廃絶後の表土が流入したものと推測する。

≪出土遺物≫土器片約30点と剥片３点が出土し、土器片２点を図示した。土器はいずれも小片で、Ⅳ群に比定される。

≪時期･所見≫出土土器から、縄文時代後期初頭の所産と考えられる。柱穴覆土内から出土の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代3850±40BP、暦年較正交点BC2300である。

ＳＩ2507竪穴住居跡(遺構第44図、遺物第89図110～116、図版18･44)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＦ･ＫＧ60･61区に位置する。黒褐色シルト質土層(④Ⅱ層)で不明瞭な円形に近いプランを確認し、遺構が存在することを推測した。平面形の規模から竪穴住居の掘り込みである可能性を想定したことから、このプランの中央を中心にして、土層観察用の畦を残しながら約20㎝の試掘溝を掘削し、掘り込みの有無等を検討した。その結果、竪穴掘り込みと石囲炉を確認し、竪穴住居跡の存在を認めた。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面形は、長軸約4.3ｍ、短軸約4.1ｍの正円に近い形状である。

≪壁･床面≫壁はやや急に立ち上がる。壁高は現状で最大30㎝前後である。床面は、北側から南側に向かって傾斜し、堅く締まっている。周溝、壁柱穴は確認できない。床面レベルは130.1～130.4ｍ、床面積は約13.80㎡である。

≪炉≫ほぼ中央部に石囲炉を検出した。この炉は深さ10㎝程度の浅い掘り込み周囲に、円礫をほぼ平

面円形に巡らした構造をしており、南東側に一部礫の抜けた箇所がある。礫には被熱痕が認められる。炉内の覆土からは、焼土が確認できなかったため、掻き出されたものと想定する。

≪柱穴≫検出した柱穴は３基である。柱穴の配置状況からは、Ｐ１、Ｐ２ともに住居の主柱穴と想定しうるが、掘り込みが浅いために判然としない。また、北西側と南西側では柱穴は確認できなかった。

≪覆土･混入物≫３層に分層した。３層は住居の壁際の埋め戻し、あるいは壁の崩落土と推測する。２層は地山土の混入が顕著なことから住居廃絶時の埋め戻しによるものと推測する。１層は、住居廃絶後に一定期間経過してから流入した表土と推測する。

≪出土遺物≫遺物は覆土～床面から出土した。土器片は約50点出土し、いずれもⅣ群である。出土石器は約10点である。土器７点を図示した。

110、111は深鉢形土器の口縁部である。同一個体の可能性が高い。Ⅳh類に属する。胴下半部がしまり、胴上半が広がる器形と推定する。口縁には４単位の突起痕があり、把手の痕跡が残る。二重口縁状であり、胴部に施された貼付隆帯には２条の刻み目が施される。東北地方中部の土器、門前式土器に並行する土器と推定する。

≪時期･所見≫縄文時代後期初頭に比定する。出土土器から、北部平坦面に位置する住居群より旧いか、初期段階に並行すると推定する。

炉内覆土から出土の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代3830±40BP、暦年較正交点BC2290である。また、覆土３層から出土の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代4290±40BP、暦年較正交点BC2900である。覆土３層出土の炭化材は、覆土に混入したものと判断する。

ｃ 晩期の竪穴住居跡

ＳＩ2333竪穴住居跡(遺構第43図、遺物第89図117、図版19･42)

本遺構の形態は中央に石囲炉を伴う竪穴住居跡に類似するため、ここでは竪穴住居跡として報告する。しかし、中央の石組周辺には被熱痕や焼土がなく、炉と認定するには根拠に乏しいこと、竪穴状掘り込み内に柱穴等が確認できなかったこと、さらに、詳細は不明であるが石組を一部埋めてその直上に大形円礫を置くという石組と関連する儀礼的行為の痕跡を認めることができること等から、本遺構は竪穴住居跡ではなく、竪穴状掘り込み内で組石および立石に係わる祭祀を執り行った配石遺構の可能性もある。

≪位置･確認状況≫ＬＣ73･74区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で環状の石組を確認するとともに、配石の周囲で円形平面の竪穴状掘り込みを確認した。精査の結果、配石は竪穴状掘り込みの中心付近に位置し、かつ、掘り込み底面を掘り込んで構築されていると認めたことから、両者は一連の施設と判断した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪規模･形態≫竪穴状掘り込みは、中央から東側にかけては水田造成時に大きく削平されており、掘り込み掘削痕と推定できる地山面の凹凸範囲を確認したにとどまる。現状から、竪穴状掘り込みは長軸約3.0m、短軸約2.9mのややいびつな円形平面と判断する。床面は地山中に段丘礫が少ない南西側では比較的平坦であるが、段丘礫が増加する中央から北東側では段丘礫の抜き取り痕等による凹凸が著しい。西側の壁は開き気味に立ち上がり、壁高は14cmである。底面には柱穴、壁溝等は確認できな

い。

石組は掘り込み中心から僅かに南西寄りに位置する。竪穴状掘り込み底面を円形の溝状に掘り込み、その中に径10～20㎝前後の円礫30点余りを長辺側を上に向けて据えている。礫を原則として二重に巡らし、外径約60㎝、内径約40㎝の環状をなす。配石中央には底面から８㎝上位に長径32㎝の大形円礫が置かれている。配石には被熱痕跡を認めることはできず、また、配石内外には焼土面あるいは焼土粒等も検出できなかったことから、本石組が石囲炉か否かは現状では断定しがたい。

石組から北北東約1.2ｍの竪穴状掘り込み底面には、円礫を立てた立石が存在する。円礫は長径24㎝で、掘り込み底面からは10㎝前後突き出ていたものと推定できる。また、配石と立石の間の竪穴状掘り込み底面では、立石に向かって「ハ」字形に開く配置となる長径20～25㎝の柱状円礫２点を確認した。ただし、調査時点では竪穴状掘り込み底面上に据えたものか、地山の段丘礫が露出したものかは判断できなかった。

≪覆土≫竪穴状掘り込み内の覆土(１層)は、地山土粒および多数の小形段丘礫を含む暗褐色土である。竪穴状掘り込み掘削土の埋め戻し土であった可能性があろう。配石底面直上に堆積する２層はその上位の大形円礫を置くために埋め戻したものと判断できる。３層は配石根固めのための埋め戻し土、４層は竪穴状掘り込み掘削時の残土、もしくは底面整地のための埋め戻し土であろう。

≪出土遺物≫竪穴状掘り込みの南西壁際の底面直上から大洞Ｂ$_1$式台付鉢形土器の大形破片が出土している。第89図117に図示した。このほか、１層中から縄文時代後期初頭の土器片２点も出土した。

≪時期･所見≫竪穴状掘り込み底面直上から出土した台付鉢形土器破片と２層出土炭化物の^{14}Ｃ年代測定結果(較正年代BC1270～1120)から、縄文時代晩期初頭大洞Ｂ$_1$式期に属すると判断する。本遺構の構築から埋没までには、竪穴状掘り込みを掘削し、底面に配石･立石を設置した段階、配石上を埋め戻し大形円礫を置いた段階、竪穴状掘り込み壁際の底面に台付鉢形土器破片を廃棄し、掘り込みを埋め戻した段階の３段階の変遷を想定することができる。これら各段階は、本遺構の性格にも何段階かの変遷があることを示唆するものであろう。

② 土器埋設炉

ＳＮＲ2002土器埋設炉(遺構第59図、遺物第89図118･119、図版20･44)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＰ70区に位置する。確認調査時のトレンチを精査中、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、高さ30㎝弱の立石と、その両脇に長楕円形の円礫を確認し、配石遺構と判断した。その後、脇に位置する基本土層ベルトを掘削したところ、南西側に近接して焼土面と埋設された土器を確認したため、土器埋設立石炉と認定した。

≪重複≫直接の重複はないが、近接してＳＩ2134竪穴住居跡が位置する。本遺構が竪穴住居の炉とすれば、重複していたと推定できるが、新旧は特定しがたい。

≪形態･焼土≫炉体土器は深鉢形土器で、長軸33㎝、短軸25㎝、深さ20㎝の掘り込み内に正位に埋設される。底部と胴部は分離しており、底部は胴部より５㎝南西に埋設される。接点をもたないため同一個体か否かは定かではないが、胎土が類似するため同一個体の可能性が高い。口縁部は欠損し、内外面とも上端より３㎝前後の範囲で帯状に赤変する。割れ口に被熱痕が認められることから、炉機能時には口縁部は欠損していたものと推定できる。胴部内面には弱いハジケが認められる。

炉体土器の北東約50㎝には、礫が土器を中心に弧を描くように３個配置される。中央に、長軸40㎝、厚さ18㎝の礫を垂直に立て、両脇に長軸20㎝の長楕円形の円礫を、土器を囲むように横位に据える。立石は炉の内側が平坦に破損する。破損箇所が炉床面の下まで続くことから、被熱による破損ではなく、設置時に意図的に破損されたものと考えられる。

焼土面は土器と立石の間に位置し、約30㎝の範囲に広がる。厚さは３㎝である。被熱状況は非常に弱い。炉体土器と礫および焼土面の中心を通る直線の方位はＮ－70°－Ｗである。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土(１層)は、土器胴部内面に被熱が認められないことから、構築時に充塡された土と推定する。掘り込みの裏込土(２層)は暗褐色土単一層である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と判断する。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器(ＲＰ１)の胴部と底部である。第89図118・119に図示した。118は炉体土器の胴部で、119は胴部より５㎝南西にずれた位置に埋設されていた底部である。

≪時期･所見≫炉体土器、および炉の形態から縄文時代後期初頭に比定する。

立石を伴う例は本遺跡内に約10例ほど認められるが、立石の両側に袖状に礫を伴う例は本遺構のみである。本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認しており、一定程度削平されたものと推定できる。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

ＳＮＲ2024土器埋設炉(遺構第41･42図、遺物第90図121、図版21･44)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ66区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、埋設された土器、焼土面、石組を確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居の炉と仮定すると、ＳＩ2475竪穴住居跡と重複していたこととなる。炉体土器より、本遺構が旧い可能性が考えられる。またＳＲ2452が近接して位置する。土器の残存状況より、本遺構の構築面が低いと推定されることから、本遺構が旧いと考えられる。

≪形態･焼土≫石組を伴う土器埋設炉である。炉体土器(ＲＰ１)は底部が残存する深鉢形土器で、径20㎝、検出面からの深さ15㎝の掘り込み底面に、底部を残し正位に埋設される。口縁部は欠損するが、割れ口が摩滅し一部煤が付着することから、炉機能時には欠損していたと考えられる。また割れ口は平坦であり、粘土紐接合部で欠損したものと判断できるが、明確な加撃痕などは確認できず、意図されたものか否かは現状では判然としない。内面には上端から最大９㎝の範囲で部分的に被熱によるハジケが認められる。外面には炉機能時の明確な痕跡は確認できない。

土器の北約40㎝には、土器を中心に弧を描くように円礫が３個配される。ほぼ真北に位置する礫が約35㎝と最も大きく、西側ほど小さい。北に位置する礫に東接して、径約20㎝のピットが位置する。規模･位置から礫の抜け痕と推定でき、土器を中心に礫が半円形に組まれていたと想定する。

焼土面は石組と炉体土器の間に位置する。約20㎝の範囲で不整形に広がり、被熱状況はやや弱い。埋設土器と北側に位置する礫の中心を通る直線の方位はＮ－５°－Ｅである。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は３層に分層した。１層は炉体土器内面の被熱境界とほぼ対応することから炉廃絶後の堆積、２･３層に対応する部分には被熱痕が認められないことから、構築時に充

塡された土である可能性を想定する。土器裏込土(４層)は暗褐色土単一層である。裏込土、構築時に土器内に充塡された土とも、掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。

≪出土遺物≫出土遺物は炉体土器(ＲＰ１)１点である。第90図121に図示した。Ⅳa2類に属する。Ｕ字状の沈線文が胴部下半にかけ４単位施される。沈線の太さは３㎜でやや深い。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。石組が伴う例は遺跡内では本遺構のみである。本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。竪穴掘り込みは確認できなかったが、焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

また、本遺構周辺にはＳＫＰ2069、2073など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが多く位置するが、竪穴住居の炉と推測されるＳＲ2452土器埋設遺構が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。しかしながら本遺構が、本遺跡において一般的な竪穴住居の中心に位置する炉と仮定すると、ＳＫＰ2069、2070、2073、2077、2080、2081、2470の７基が本遺構を中心に位置することから、これらの柱穴のいずれかが本遺構に伴う柱穴となりえよう。また、これらの柱穴は底面標高が130.21～130.41ｍと類似しており、このことからも蓋然性が高いと言えよう。

ＳＮＲ2026土器埋設炉(遺構第45･46図、遺物第90図122･123、図版20･44)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ65区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中に埋設された土器(ＲＰ１)と焼土を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･焼土≫炉体土器は深鉢形土器で、径37㎝、深さ15㎝の掘り込み底面に、底部を残したまま正位に埋設される。口縁部は残存しないが、割れ口が摩滅し、被熱痕が認められることから、炉使用時にはすでに欠損していたものと判断する。上端には内外面ともに被熱による帯状の赤変が認められる。赤変の範囲は内面が上端より４㎝前後、外面は上端より３㎝前後で、内面の被熱がより顕著である。胴部内面にも被熱痕(ハジケ)が認められる。

焼土はブロック状で、炉体土器に接して北側へ広がる。平面形は長軸約40㎝の不整形で、確認面からの厚さは４㎝である。ブロック状であることと、炉体土器が最も強く被熱している部分が、焼土と反対側の南側であることから、炉体土器の南側で形成された焼土が掻き出され、堆積したものと推定する。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は黒褐色土の単一層(２層)である。炉体土器の内面の赤変境界と整合性がないことから、廃絶後に土器の内容物を掻き出し、堆積したものと推測する。土器の裏込土(３層)は暗褐色土である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。１層は焼土塊である。炉床より掻き出した焼土が堆積したものであろう。

≪出土遺物≫炉体土器である深鉢形土器と、円盤状土製品が出土し、２点とも図示した。円盤状土製品は炉体土器の上面付近で出土したが、出土状況が定かではなく、炉と相関関係は不明である。また、掘り込み覆土より剥片が２点出土した。覆土に混入したものと判断する。

≪時期･所見≫時期は炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。

炉体土器の被熱状況から、炉床は地山漸移層(②Ⅸ層)上面と復元できることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

本遺構南東側にはＳＫＰ2120～2122、2125など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが数基位置するが、ＳＮＲ2034土器埋設炉が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。これらの柱穴の底面標高は130.25～130.38ｍである。遺構の北西側には該当する柱穴は検出されなかった。

また、本遺構の2.08ｍ北側にはＳＲ2106土器埋設遺構が位置する。位置関係、および検出レベルが本遺構と同じであることから、ＳＲ2106は本遺構を炉とする竪穴住居の壁際に埋設された土器埋設遺構の可能性が考えられるが、現状では特定しがたい。

ＳＮＲ2034土器埋設炉(遺構第45･46図、遺物第89図120、図版20･44)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ65区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、埋設された土器の上部(ＲＰ１)と、焼土を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･焼土≫炉体土器は口縁部と底部を欠損した深鉢形土器で、径約35㎝、確認面からの深さ約15㎝の掘り込み底面に逆位に埋設される。埋設時の上端部分は非常に強く被熱しており、赤変とハジケが顕著に認められる。赤変の範囲は内面が上端より２～７㎝前後、外面は上端より１～６㎝前後で、被熱状況は内面がより強い。胴部内面にも部分的に被熱痕(ハジケ)が認められる。

焼土は炉体土器の周囲と、北側約10㎝に位置する。土器周囲に位置する焼土は焼土面であるが、強く被熱しており、部分的にブロック状を呈する。土器の北側の焼土はブロックであり、二次堆積と判断できる。炉体土器周辺で形成された焼土が灰などと共に掻き出され、堆積したものであろう。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は３層(１～３層)に分層した。１･２層には焼土ブロックが混入する。焼土面は認められない。炉体土器の被熱状況と、土器内覆土の被熱状況が対応しないことから、廃絶後の堆積と推測する。

土器の裏込土は２層(４･５層)からなる。暗褐色土を基質とし、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。

≪出土遺物≫炉体土器である深鉢形土器１点と、掘り込み覆土より剥片が２点出土し、炉体土器を図示した。炉体土器は土器の胴下半部で、上端は粘土紐接合部で破損する。明瞭な加撃痕は確認できないが、炉体土器に転用する際に、人為的に成形されたものと推測する。２点の剥片は覆土に混入したものと判断する。

≪時期･所見≫時期は炉体土器および炉の形態から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅴ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。竪穴掘り込みは確認できなかったが、焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

本遺構南西側にはＳＫＰ2120、2122、2135など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが数基位置するが、ＳＮＲ2026土器埋設炉が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難

しい。遺構の北東側に該当する柱穴は認められない。

ＳＮＲ2039土器埋設炉(遺構第45･46図、遺物第90図124、図版21･45)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ66区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に埋設された土器(ＲＰ１)の上部と近接して広がる焼土面を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･焼土≫炉体土器は底部を欠損した深鉢形土器で、径32㎝、確認面からの深さ20㎝の掘り込み内に正位に埋設される。口縁部は残存していないが、割れ口が摩滅することから、機能時には欠損していたものと推定する。土器内外面ともに焼土面に対応する北側で上端に弱い劣化が認められる。土器胴部内面に被熱痕は認められない。

焼土面は炉体土器に接して北側へ不整形に広がる。土器に接する部分は焼土面であるが、北側は焼土ブロックである。灰等を掻き出した際に堆積したものと推定する。焼土面の厚さは３㎝である。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は２層(１･２層)に分層した。いずれも地山土が混入し、人為堆積と判断する。土器内面に被熱痕が認められないため、１･２層ともに構築時に充塡された土と想定するが、現状では特定しがたい。堆積状況から、灰等を掻き出す際に撹拌された可能性も考えられる。土器裏込土は２層(３･４層)からなる。地山土が混入した暗褐色土を主体とする。掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。

≪出土遺物≫炉体土器である深鉢形土器の胴部１点が出土した。第90図124に図示した。

≪時期･所見≫時期は炉体土器および炉の形態から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は地山漸移層(②Ⅸ層)で確認しており、竪穴掘り込み、柱穴は確認できなかったが、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

ＳＮＲ2109土器埋設炉(遺構第47･48図、遺物第90図125、図版22･45)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ72区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、埋設された土器の上部と焼土面を確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＮＲ2186土器埋設炉、ＳＮＲ2612土器埋設炉を炉とする竪穴住居と重複していたと考えられる。遺構の重複がないため新旧関係は現状では特定しがたい。

≪形態･焼土≫炉体土器(ＲＰ１)は底部が欠損する深鉢形土器で、径26㎝、深さ17㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。土器には機能時の被熱痕は内外ともに認められない。

焼土面は炉体土器に接して南東側へ不整形に広がる。長軸42㎝、短軸32㎝、確認面から厚さは２㎝である。炉体土器に被熱痕が認められないこと、焼土の厚みが薄いことなどから、本遺構は一定程度削平を受けていると判断できる。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は３層(１～３層)に分層した。１･２層は人為堆積と推定するが、堆積の成因は現状では特定しがたい。３層は地山土由来で、土器設置時の堆積と推定する。４層は土器の裏込土で、掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と考えられる。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器１点である。第90図125に図示した。

≪時期･所見≫時期は炉体土器および周囲の土器埋設炉の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

また、本遺構周辺にはＳＫＰ2231、2232など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが数基位置するが、ＳＮＲ2186土器埋設炉やＳＮＲ2612土器埋設炉が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。しかしながら、本遺構が本遺跡において一般的な、竪穴住居の中心に位置する炉と仮定すると、ＳＫＰ2218･2219、2222、2241が本遺構に伴う柱穴の可能性が考えられる。これらの柱穴は底面標高が130.75m前後と類似しており、蓋然性が高いと言えよう。遺構の東側には該当する柱穴は検出していない。

ＳＮＲ2156土器埋設炉(遺構第49･50図、遺物第91図127、図版22･45)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ74区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中に、埋設された土器の上部を確認した。焼土は検出されなかったが、埋設土器に炉体土器特有の被熱痕が認められたため、土器埋設炉と認定した。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＩ2460竪穴住居跡、ＳＲ2101土器埋設遺構と重複していたと考えられる。直接の重複がないため、新旧関係は判断しがたい。

≪形態･焼土≫炉体土器(ＲＰ１)は底部が欠損する深鉢形土器で、径27㎝、深さ20㎝の掘り込み内に正位に埋設される。口縁部は残存しないが、上端割れ口が被熱していることから、炉使用時には欠損していたものと判断する。上端には内外面ともに被熱による帯状の赤変が認められる。赤変の範囲は内面が上端より５㎝前後、外面は上端より３㎝前後で、被熱状況は内面がより強い。胴部内面にも被熱痕(ハジケ)が認められる。

周囲に焼土は認められず、上位は一定程度削平されたと判断される。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は２層(４･５層)に分層した。５層に炉体土器の上端被熱部分が混入することから、土器内覆土は炉廃絶後に堆積したものと判断する。堆積要因は定かではないが、炉体土器の上端部が滑り落ちたように検出されていることから、自然堆積の可能性も考えられる。６･７層は土器の裏込土であり、掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器１点である。第91図127に図示した。Ⅳa2類に属する。胴上半で緩やかに最大径となり、頸部でやや括れる。口縁部は残存していないが、開いていたものと推定する。文様帯は胴最大径部よりやや下位で、２条の横位沈線で区画される。地文縄文に、横位に連続する波状文が沈線で２段施文される。文様単位は６単位である。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、焼土が検出されていないことからも、上位は一定程度削平されたものと推定できる。このことから、本遺構の機能面は当時の表土面から掘り込まれた面と考えられ、竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高いと判断する。

ＳＮＲ2176土器埋設炉(遺構第51図、遺物第90図126、図版23･45)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ74区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、焼土面と埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＲ2179土器埋設遺構と重複していたと考えられる。本遺構の機能面は炉体土器の被熱状況から131.06ｍと推定でき、ＳＲ2179の埋設土器の検出レベルが131.09mであることから、本遺構が旧いもしくは同一住居内に構築された遺構と考えられる。さらにＳＲ2179の埋設土器は上端が破損しており割れ口に摩滅が認められないことから、ＳＲ2179の構築面は本遺構より高いと推定される。以上からＳＲ2179より本遺構が旧い可能性が考えられる。

≪形態･焼土≫炉体土器は底部を欠損した深鉢形土器で、径約30㎝、深さ17㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。炉体土器内面には上端より３㎝前後の範囲で被熱によるハジケが部分的に認められるが、被熱状況は弱い。焼土面は３箇所で確認した。いずれも被熱状況は弱い。近接してＳＲ2179土器埋設遺構が位置することから、そのうちのいくつかはＳＲ2179に付随する焼土面である可能性もあるが、現状では特定できない。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は３層(１～３層)に分層した。１層と土器の被熱範囲がほぼ合致することから、１層は廃絶後の堆積、２･３層は構築時に充塡された土と推定する。４層は炉体土器の裏込土である。暗褐色土の単一層で、掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。

≪出土遺物≫炉体土器である深鉢形土器１点、掘り込み覆土より剥片が１点出土した。剥片は覆土に混入したものと判断する。炉体土器を図示した。

126は炉体土器ＲＰ１で、Ⅳa2類に属する。文様帯は胴部下半に及び、１条の横位沈線で区画される。文様は、地文縄文に幅５㎜と比較的太く浅い沈線で施文される。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期に比定する。

炉体土器の上端部分の被熱状況が弱いことや、土器上端割れ口に摩滅が認められないこと、本遺構が旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で検出されたことを考え合わせると、本遺構の使用面は水田造成時に削平を受けた可能性が高い。また、本遺構は焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴は検出されなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

また、本遺構周辺にはＳＫＰ2203･2205～2213、2244が位置するが、ＳＲ2179土器埋設遺構が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。ＳＫＰ2203、2211、2244は底面標高が130.62～130.70ｍと比較的深いことから、ＳＲ2179よりも本遺構に伴う柱穴である可能性が高いといえようか。

ＳＮＲ2186土器埋設炉(遺構第47･48図、遺物第91図128、図版23･45)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に焼土面を確認し、さらに精査を進めたところ、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＮＲ2109土器埋設炉、ＳＮ2369焼土遺構を炉とする竪穴住居と重複していたと考えられる。竪穴掘り込みが残存しないため、新旧関係は不明である。

≪形態･焼土≫炉体土器は底部を欠損する深鉢形土器で、径約30㎝、深さ30㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。口縁部は残存しないが、割れ口が摩滅することから、炉機能時にはすでに欠損していたものと判断する。上端には内外面ともに上端から３㎝前後の範囲で、帯状の赤変が認められる。被熱状況は内外面ともに弱いが、内面が若干強い。胴部に被熱痕はほとんど確認できない。

焼土面は炉体土器の周囲を基本に南側へ広がる。強く被熱しており､厚さは10㎝前後である。土器内上位にも焼土面が形成される。外面に比較して被熱状況はやや弱い。焼土面の厚さは８㎝前後である。土器内外で火を焚いた結果であろう。

≪覆土･混入物≫土器内覆土は４層(１～４層)に分層した。２層上面に焼土面が形成されていることから、２層上面が炉機能面と判断できる。このことから、２～４層は炉体土器設置の際に充塡された土、１層は炉廃絶後の堆積と判断する。土器の裏込土(５層)は褐色土単一層である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と考えられる。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器(ＲＰ１)１点である。第91図128に図示した。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。炉体土器内部に焼土面が形成される例は、他にＳＮＲ2612土器埋設炉ＲＰ２に認められるのみである。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構も竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

また、本遺構周辺にはＳＫＰ2231･2232など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが数基位置するが、ＳＮＲ2109土器埋設炉やＳＮ2369焼土遺構が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。本遺構が当遺跡において一般的な、竪穴住居の中心に位置する炉と仮定すると、位置関係からＳＫＰ2231、2232、2234、2246が本遺構に伴う柱穴の可能性があるが、これらの柱穴は底面標高が130.58～130.96ｍとばらつきがあり、現状では特定しがたい。

ＳＮＲ2279土器埋設炉(遺構第53･54図、遺物第91図129、図版24･45)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＤ66区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中に、埋設された土器(ＲＰ１)の上部と焼土面を確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＲ2363土器埋設遺構と重複していたと考えられる。遺構の重複はないが、土器の残存状況からＳＲ2363の構築面は本遺構より高いと想定されることから、本遺構が旧いと推測する。

≪形態･焼土≫炉体土器は底部を欠損した深鉢形土器で、径約30㎝、確認面からの深さ12㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。口縁部は欠損しており、割れ口には摩滅などはない。内面にはほぼ全面に被熱によるハジケが認められる。

焼土面は炉体土器の周囲および北側へ広がる。厚さは３㎝ほどで被熱状況はやや弱い。土器の南側にも15㎝の不整形に焼土面が形成される。土器上端の割れ口に摩滅が見られないことや、焼土面の被熱状況が弱いことから、遺構上部は削平されたと推定できる。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は２層(１･２層)に分層した。１層は黒褐色土である。土器の被熱状況と対応しないことから、廃絶後の堆積と判断する。２層は地山土を多く含む暗褐色土で、炉体土器

の対応する部分には被熱によるハジケが認められないことから、構築時に充填された土と推定する。土器の裏込土(３層)は暗褐色土単一層である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と考えられる。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器１点である。第91図129に図示した。

≪時期･所見≫炉体土器および周囲に位置する土器埋設炉の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、炉体土器の残存状況、焼土面の被熱状況なども考え合わせると、上位は一定程度削平されたものと推定できる。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、本炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、本遺構も竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

ＳＮＲ2308土器埋設炉(遺構第56図、遺物第91図130、図版24･46)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＱ67区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中、埋設された土器(ＲＰ１)の上部と立石を検出し、その周囲に焼土面を確認したことから土器埋設立石炉であると判断した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･焼土≫炉体土器は底部が残存する深鉢形土器で、径約25㎝、確認面からの深さ13㎝の掘り込み底面に底部を残したまま正位に埋設される。口縁部は残存しないが、上端割れ口に被熱痕が認められることから、炉機能時には欠損していたものと推定する。内面上端には、３㎝前後の範囲で被熱による帯状の赤変が認められる。胴部内面上半には弱いハジケが認められる。

埋設土器の東約60㎝には立石が位置する。礫は長軸25㎝の扁平な円礫で、土器と反対側に傾いて埋められ、地表には10㎝ほどが表出する。

焼土面は土器と立石の間、立石より５㎝北西側に位置する。25㎝前後の範囲に円形に広がり、被熱状況は礫より20㎝の付近で強く、その周辺は弱い。埋設土器と北側に位置する礫の中心を通る直線の方位はＮ－88°－Ｗである。

≪覆土･混入物≫土器内覆土(１層)は黒褐色土の単一層である。根による攪乱のため、土器が部分的に破損している。

≪出土遺物≫炉体土器である深鉢形土器が１点出土した。第91図130に図示した。

≪時期･所見≫炉体土器および、周囲に位置する土器埋設炉の時期から縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設立石炉であった可能性が高い。本遺構周辺で確認された柱穴はＳＫＰ2312のみである。本遺構に伴う柱穴か否かは判然としない。

ＳＮＲ2322土器埋設炉(遺構第50図、遺物第91図131、図版21･46)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＴ70区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中、立石と埋設された土器、焼土ブロックが充填した掘り込みを確認した。立石を伴う例はＳＩ2134-ａ竪穴住居跡炉やＳＩ2338竪穴住居跡炉など本遺跡内に10例ほど認められるが、それらはいずれも立石と焼土、炉体土器が直線上に並ぶ。しかし本遺構は炉体土器と立石は直線上に

並ばないことから、立石炉と土器埋設遺構の切り合いの可能性もあるが、現状では断定しがたいため、ここでは土器埋設立石炉として報告する。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･焼土≫炉体土器は深鉢形土器の胴部下半で、底部は中心が打ち欠かれる。径18cm、確認面からの深さ６cmの掘り込み底面に正位に埋設される。炉体土器には炉機能時の被熱痕は認められない。炉体土器の北東17cmには、径23cm、確認面からの深さ３cmの掘り込み内に焼土ブロックが堆積する。立石はその東側に接して位置する。立石の法量は25×13×８cmで、確認面からの深さ15cmの掘り込みに設置される。礫の被熱状況は不明である。炉体土器と焼土の中心を通る直線の方位はＮ－49°－Ｅ、焼土と立石を通る直線の方位はＮ－64°－Ｗである。立石と焼土を結ぶ直線上に長軸20cmの扁平な川原石が位置するが、本遺構との関係は現状では特定しがたい。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は褐色土の単一層である(１層)。地山由来土と判断する。土器裏込土(２層)は暗褐色土の単一層である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。

≪出土遺物≫出土遺物は炉体土器(ＲＰ１)１点である。第91図128に図示した。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定される。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。よって、竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

また、本遺構の1.20m北東側にはＳＲ2309土器埋設遺構が位置する。本遺構が本遺跡において一般的な竪穴住居に伴うものと仮定すると、同一住居内の土器埋設遺構の可能性があるが、現状では判然としない。

ＳＮＲ2335土器埋設炉(遺構第55･56図、遺物第92図135、図版24･48)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＣ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中、扁平な円礫と焼土、および北西側に埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。礫は横倒しの状態で検出したが、礫の下部にピット状の空洞を確認したため、立石が倒れたものと判断し、土器埋設立石炉と認定した。

≪重複≫遺構プランの重複はないが、近接してＳＩ2338竪穴住居跡･ＳＩ2344竪穴住居跡が位置する。本遺構が竪穴住居の炉とすると、重複していたと考えられる。どちらも直接の重複がないため、新旧は特定しがたい。

≪形態･焼土≫炉体土器は底部を穿孔された深鉢形土器で、正位に埋設される。胴部内面上半には弱いハジケが認められる。炉体土器の南東約40cmには、径35cm、厚さ約10cmの扁平な円礫が横位で検出された。礫の下には径約25cm、深さ15cmの空洞があったことから、本来立位であった礫が倒されたものと考えられる。礫の被熱状況は不明である。

焼土面は礫の下に位置し、約30cmの範囲に広がり、厚さは３cm前後である。炉体土器と礫の中心を通る直線の方位はＮ－54°－Ｗである。

≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土は３層に分層した。いずれも地山ブロックが混入しており、人為堆積と考えられる。堆積時期が設置時か廃絶時かは定かではない。

≪出土遺物≫炉体土器である深鉢形土器が出土し、第92図135に図示した。Ⅳa2類に属する。胴上半

で緩やかに最大径となり、頸部で括れる。口縁部は開くと推定される。文様帯は胴部下半に及び、地文縄文に、横位に連結した波状文が上から下まで一筆書きで施文される。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認しており、一定程度削平されたものと推定される。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

ＳＮＲ2371土器埋設炉(遺構第52図、遺物第92図132～134、図版25･46)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＢ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、埋設された土器(ＲＰ１)の上部と焼土を確認した。

≪重複≫ＳＫＰ2464より新しい。

≪形態･焼土≫炉体土器(ＲＰ１)は底部を欠損した深鉢形土器である。口縁部は残存しないが、上端の割れ口は摩滅し、被熱痕が認められることから、機能時には口縁部は破損していたものと推定する。土器上端には内外面ともに被熱による帯状の赤変が認められる。被熱範囲は土器内面は上端から約５㎝、外面は約４㎝前後であり、内面の被熱がより強い。胴部内面上半には弱いハジケが認められる。焼土面は炉体土器に接し、北側へ広がる。非常に強く被熱しており、厚さは５㎝ほどである。

≪覆土･混入物≫土器内覆土は３層(４～６層)に分層した。地山土(４層)がブロック状に混入することから人為堆積と考えられ、土器胴部内面に被熱痕が認められないことから、いずれも構築時に充塡されたものと推定する。

≪出土遺物≫炉体土器および２点の縄文土器片が出土し、第92図132～134に図示した。２点の土器片の詳細な出土状況は不明である。

132は炉体土器で、Ⅳa2類に属する。文様帯は口縁～胴部上半である。幅約２㎜の比較的深い沈線で、横位に連結する波状文が施文される。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構も竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

周辺にはＳＫＰ2383、2385、2404が位置する。これらは底面標高が130.90～131.13ｍと類似しており、本遺構に伴う竪穴住居跡の柱穴となる可能性がある。

ＳＮＲ2377土器埋設炉(遺構第35･36図、遺物第92図136、図版13･14･42)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＡ69区に位置する。ＳＩ2374竪穴住居跡床面を精査中に、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。焼土が認められなかったため、調査段階ではＳＩ2374の壁際に構築された土器埋設遺構と判断した。しかし整理段階で、ＲＰ１の上端に、炉体土器に特徴的に認められる被熱による帯状の赤変を確認し、ＲＰ１は土器埋設炉の炉体土器と類推した。炉の赤変状況より機能面はＳＩ2374床面より高いと復元できたため、ＳＩ2374に伴う遺構ではなく、ＳＩ2374竪穴掘削時に、上部を削平された土器埋設炉であると判断した。

≪重複≫ＳＩ2374より旧い。
≪形態･焼土≫炉体土器は底部を欠損した深鉢形土器で、径約30㎝の平面円形の掘り込み底面に正位に埋設される。口縁部は欠損し、割れ口に摩滅は認められない。土器上端には、わずかではあるが帯状の赤変が確認でき、土器胴部内面にはハジケが認められる。
　焼土面は認められないが、土器内覆土に若干の焼土粒が混入する。炉体土器の赤変部分から、機能面は131.40m前後と推定される。
≪覆土･混入物≫土器内覆土は３層に分層した。１層には焼土粒が混入する。２･３層は基質を同じくするが、混入物の差異で分層した。堆積時期は現状では特定しがたいが、土器の被熱状況に対して、覆土に被熱が認められないことから、廃絶後の堆積と推測する。４層は土器裏込土である。掘り込み掘削土由来と推定する。
≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器１点である。第92図136に図示した。
≪時期･所見≫炉体土器および周囲に位置する遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。
　本遺構はＳＩ2374竪穴住居跡床面で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。焼土面は検出されなかったが、炉体土器の被熱状況から、機能面は地山漸移層(②Ⅸ層)であった可能性が高く、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。ＳＩ2374竪穴住居跡と重複し、周辺にはＳＮＲ2378土器埋設炉が位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。ＳＫＰ2397、2412、2413などが本遺構に伴う柱穴となり得ようか。

ＳＮＲ2378土器埋設炉(遺構第35･36図、遺物第93図139、図版13･14･43)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＡ69区に位置する。ＳＩ2374竪穴住居跡覆土掘削中に床面より５㎝ほど高い位置で横位の土器埋設炉を確認し、ＳＩ2374に付随する土器埋設炉と推定したが、ＳＩ2374床面でさらに土器埋設炉１基を確認したため、ＳＩ2374に伴う炉ではなく、切り合いと判断した。
≪重複≫ＳＩ2374より新しい。
≪形態･焼土≫炉体土器は口縁部をＮ－42°－Ｗに向け、横位に埋設する。埋設時の上部に当たる部分は欠損する。割れ口が摩滅することから、炉機能時には欠損していたものと判断する。掘り込みは長軸38㎝、短軸30㎝の平面楕円形で床面からの深さ10㎝である。土器の口縁部に接して強く焼けた焼土を伴う。土器は内面に弱い被熱痕(ハジケ)が認められる。
≪覆土･混入物≫土器内の覆土は１～４層に分層した。黒褐色土を基本とし、全体に焼土ブロックを含む。堆積時期は現状では判然としない。
≪出土遺物≫炉体土器１点が出土した。第93図139に図示した。深鉢形土器の縦半分である。口縁部は小さな波状を呈し、胴部には沈線による文様が施される。文様内は縄文が磨り消され、文様頂部には竹管による刺突が縦に２個施される。東北地方中部の土器の影響を受けたものと推測される。当遺跡では他に同種の土器は出土しておらず、他の土器と比較して胎土が軟質であることから搬入品の可能性が考えられる。
≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。
　本遺構はＳＩ2374竪穴住居跡覆土中で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

ＳＩ2374竪穴住居跡と重複し、周辺にはＳＮＲ2377土器埋設炉が位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。ＳＫＰ2412、2413、2424～2426などが本遺構に伴う柱穴となり得ようか。

ＳＮＲ2611土器埋設炉(遺構第57･58図、遺物第92図137･138、図版25･47)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＩ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)の下位の段丘礫層を精査中に横位の土器(ＲＰ２)と焼土面を確認し調査を進めたところ、北西側約40㎝にさらに１基埋設された土器(ＲＰ１)を確認した。調査段階ではＲＰ１をＳＲ2178、ＲＰ２をＳＲ2104とし、調査を行ったが、横位土器埋設遺構と正位土器埋設遺構が１組となって炉を形成する事例が、本遺跡において複数例確認されたことから、本遺構も同様の形態をもつ土器埋設炉と判断し、ＳＮＲ2611に変更した。

≪重複≫本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＮＲ2612土器埋設炉と重複していたと推定される。ＲＰ２と重複するＳＫＰ2367は、ＳＮＲ2612を炉とする竪穴住居の柱穴の可能性が高いことから、ＳＮＲ2612は本遺構より旧いと推測される。

≪形態･焼土≫炉体土器は、正位に埋設される土器(ＲＰ１)と、横位に埋設される土器(ＲＰ２)の２基であり、２つの土器を通る直線の方位はＮ－58°－Ｗである。

ＲＰ１は底部を欠損した深鉢形土器で、径20㎝、確認面からの深さ17㎝の掘り込みに正位に埋設される。口縁部は残存せず、残存高は７㎝前後である。土器の胴部内面には、被熱によるハジケが認められる。

ＲＰ２は深鉢形土器の胴～底部縦半分で、口縁部側をＲＰ１に向け、横位に埋設される。

焼土面はＲＰ１とＲＰ２の間に位置し、ＲＰ２の下に連続する。被熱状況はやや弱い。

≪覆土･混入物≫ＲＰ１炉体土器内覆土は黒褐色土の単一層である(１層)。２･３層は炉構築時に充塡された土であり、掘り込み掘削土由来と推定する。ＲＰ２の覆土は残存していない。

≪出土遺物≫出土遺物は炉体土器２点である。第92図137･138に図示した。ＲＰ２(138)は、破損が著しく、底部と胴部は接合しないが、検出状況より同一個体であると判断できる。また、ＲＰ２掘り込み覆土より剥片が１点出土した。覆土に混入したものと判断する。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は、焼土面が段丘礫層に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、本遺構は竪穴の掘り込みは確認できなかったが、竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

また、本遺構周辺にはＳＫＰ2275、2286など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが数基位置する。ＳＮＲ2612が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。本遺構が径４ｍ前後の竪穴住居と仮定すると、位置関係からＳＫＰ2275～2278、2286、2287、2292、2294が本遺構に伴う柱穴の可能性が考えられよう。

ＳＮＲ2612土器埋設炉(遺構第57･58図、遺物第93図140･141、図版26･46)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中に埋設された土器１基(ＲＰ１)と焼土面を確認し、調査を進めたところ、土器北東側に接してさらに１基埋設された土器(ＲＰ２)を確認した。土器埋設炉の改築の可能性もあるが、現状では特定しがたいため、ここでは同時存在として報告する。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＮＲ2611土器埋設炉を

炉とする竪穴住居と重複していたと考えられる。使用面はＳＮＲ2611の方が高く、本遺構の竪穴の直径が４ｍを超過する場合、本遺構が旧い可能性が考えられる。また、ＳＮＲ2611のＲＰ２はＳＫＰ2367より新しい。ＳＫＰ2367は位置関係から本遺構に伴う柱穴の可能性が高く、その新旧関係からも、ＳＮＲ2611より本遺構が旧い可能性が指摘できる。

≪形態･焼土≫炉体土器は２基重複して埋設され、ＲＰ２の上部にＲＰ１が重なる。

ＲＰ１は底部を欠損した深鉢形土器で、径約38㎝、確認面からの深さ38㎝の掘り込み内に、正位に埋設される。口縁部は残存しないが、上端割れ口に摩滅や被熱痕が認められることから、炉機能時にはすでに破損していたものと判断できる。内面上端に、１～８㎝の範囲で帯状に被熱による赤変、ハジケが認められ、特に焼土が接する南西側で顕著である。外面にも上端より１～５㎝の範囲で帯状に被熱による赤変が認められるが、被熱状況は内面がより強い。胴部内面には被熱によるハジケが認められる。

ＲＰ２は底部を欠損した深鉢形土器で、径約30㎝、確認面からの深さ約30㎝の掘り込み底面に、正位に埋設される。口縁部は残存しないが、上端割れ口に摩滅や被熱痕が認められることから、機能時には破損していたものと判断できる。炉体土器内面には、上端より７㎝前後の範囲で帯状に被熱による赤変が認められ、特に焼土が接する南東側で顕著である。外面にも上端より４㎝前後の範囲で、帯状に赤変が認められるが、被熱状況は内面がより強い。胴部内面上半には、被熱による弱いハジケが認められる。

焼土面は炉体土器に接して南東側へ広がる。強く被熱しており、厚さは５㎝前後である。ＲＰ１の南西側にも土器に接して狭い範囲に焼土面を確認した。ＲＰ２の北側にも焼土が位置するが、長軸20㎝と小規模であり、ブロック状を呈することから炉から掻き出された焼土が堆積したものと考える。２基の炉体土器を通る直線の方位はＮ－40°－Ｅである。

≪覆土･混入物≫ＲＰ１炉体土器内覆土は３層(１～３層)に分層した。１･２層は土器内面の赤変境界と対応せず、境界を被覆して堆積することから、炉廃絶後の堆積と判断する。３層は地山由来土で、３層に対応する炉体土器の胴部内面に被熱痕が認められないことから、炉体土器設置時に充填された土と推定する。ＲＰ１の裏込土は３層(４～６層)に分層した。土器の高さに合わせ、掘り込みを10㎝ほど埋め戻したのちに、土器を設置する。いずれも掘り込み掘削土由来と推定する。

ＲＰ２内覆土は５層(７～11層)に分層した。７～10層は人為堆積と判断する。土器の赤変境界と対応せず、赤変境界を被覆し堆積することから、廃絶後の堆積と考えられる。10層は焼土塊である。11層は地山由来土であり、構築時に充填された土と推定する。対応する土器内面器壁には被熱痕は認められない。裏込土は暗褐色土の単一層(13層)である。掘り込み掘削土由来と推定する。

≪出土遺物≫出土遺物は炉体土器２点である。第93図140･141に図示した。

≪時期･所見≫炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。炉床が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、炉は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構も竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性が高い。

また、本遺構周辺にはＳＫＰ2224、2286など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが数基位置す

るが、ＳＮＲ2109、2611土器埋設炉が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。しかしながら、本遺構が本遺跡において一般的な、竪穴住居の中心に位置する炉と仮定すると、位置関係からＳＫＰ2220、2224、2291、2293、2367が本遺構に伴う柱穴の可能性が考えられよう。

ＳＮＲ2613土器埋設炉(遺構第59図、遺物第94図142･143、図版25･47)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬM74区に位置する。表土層(②Ⅰ層)直下に露出する基盤の段丘礫層上面で２基の土器埋設遺構と焼土面を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･焼土≫ＲＰ１は深鉢形土器の底部で、径17㎝、深さ６㎝の小形の掘り込み内に正位に埋設する。土器に炉機能時の被熱痕跡は認められない。ＲＰ２は、ＲＰ１の東約50㎝に位置する。長軸78㎝、短軸推定40㎝前後の楕円形平面で、深さは最大10㎝の掘り込みの西半側底面上に、口縁部側を西に向けて深鉢形土器を横位に埋設する。深鉢形土器上面側は破壊されている。土器に炉機能時の被熱痕跡は認めることはできない。掘り込み東端側底面には平面長径23㎝、深さ16㎝の柱穴状の小穴が伴う。また、土器埋設のための掘り込みは、推定長径40㎝前後の焼土層を掘り込んでいる。当該焼土層は推定長径60㎝、深さ15㎝の掘り込みの埋め戻し土上面が焼土化したものである。なお、２基の炉体土器の中心を通る直線の方位は、Ｎ－79°－Ｗである。

≪覆土･混入物≫ＲＰ１については、確認時には既に土器内覆土は掘り上げていたため、その覆土の層相は不明である。ＲＰ２の土器内覆土は混入物の少ない黄褐色土である。遺構周辺とは別地点のシルト質地山土に由来する埋土である。土器の裏込土は暗褐色土単一層である。径20㎜前後の基盤起源の小段丘礫を含み、基本的に掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と判断する。東端側小穴覆土も類似の暗褐色土であるが、相対的に段丘礫は少ない。上面に焼土面を伴う掘り込みの覆土は褐色土単一層である。周囲の基盤土起源の段丘礫をほとんど含まず、別地点のシルト質地山土由来の埋め戻し土である。本遺構は、基盤の段丘礫層を掘り上げ、当該礫層の代わりに褐色土を埋めて、平坦な炉床面を構築した地床炉の変異形と判断できよう。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器２点である。第94図142･143に図示した。

≪時期･所見≫出土した土器、および周囲に位置する同種の遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は表土層(②Ⅰ層)直下で確認しており、いずれもその上位は一定程度削平されたものと推定できる。正位埋設の土器と横位埋設の土器が近接して構築される例は、ＳＩ2007竪穴住居跡土器埋設炉、ＳＩ2344竪穴住居跡土器埋設炉などに類例が認められる。竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、炉床面が段丘礫層上面とほぼ同一面であることから、炉床面は当時の表土面から掘り込まれた面に対応すると判断できる。このことから本例も竪穴住居に伴う土器埋設炉であったと想定できよう。

炉本体は、上述のように、掘り込みに褐色土を埋めて炉床を構築し、その西約15㎝に深鉢形土器(ＲＰ１)を正位に埋設して使用したものと想定する。さらに、炉廃絶後に炉床の一部を掘り込んで、別の深鉢形土器を横位に埋設している(ＲＰ２)。その際、横位埋設土器の東側には小形柱状施設を据えた可能性も想定できよう。横位埋設土器内部には別地点の基盤土由来の埋土があり、かつ、土器内面等には顕著な二次被熱痕跡を認めることができない。現状では、当該埋設土器には、炉の使用と関

連する実用的な機能は想定しがたい。本例土器の埋設(さらに東側の小形柱状施設の構築)は、炉廃絶あるいは竪穴住居廃絶に伴う儀礼的行為であった可能性を想定できようか。

ＳＮＲ2614土器埋設炉(遺構第59図、遺物第95図146～148、図版26･48)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＳ71･72区に位置する。旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で埋設された土器２基(ＲＰ１、ＲＰ２)とその周辺に焼土の広がりを確認し、土器埋設炉であると判断した。調査のためトレンチを掘削したところ、さらに埋設された土器１基(ＲＰ３)を確認した。

≪重複≫本遺構が竪穴住居跡に伴う炉と仮定するとＳＫＩ2330竪穴状遺構と重複していたと考えられる。直接重複しないため、新旧関係は不明である。

≪規模･形態≫炉体土器ＲＰ１とＲＰ２の検出レベルが131.40m前後であり、炉体土器ＲＰ３とＲＰ２の下に位置する焼土面の検出レベルが131.35mであることから、炉の改築を想定する。

新期炉　２基の炉体土器(ＲＰ１、ＲＰ２)を伴う土器埋設炉である。

ＲＰ１は底部中心を穿孔した深鉢形土器の胴～底部で、径25㎝、確認面からの深さ13㎝の円形の掘り込み底面に正位に埋設される。上端の破損部分にも被熱痕が認められ、炉機能時には口縁部は欠損していたと判断できる。炉体土器内面は上端から５㎝の範囲で帯状に被熱する。胴部内面および外面に明確な被熱痕は確認できない。

ＲＰ２はＲＰ１の30㎝北東に位置する。旧炉の炉床を掘り込んで横位に埋設される。検出状況から構築時には底部は欠損していたと推定される。土器が赤味を帯びるため、被熱による赤変を認めることはできないが、口縁部内面付近には被熱によるものと推測される剥離が見られる。

ＲＰ１とＲＰ２の間には強く被熱した焼土塊が散在する。ＲＰ２の下面に位置する旧期炉の炉床を掘り込んだ際に堆積したものであろうか。当炉に伴う焼土面は旧炉の焼土面と焼土塊に連続すると推定され、当炉に伴う焼土面を判別することはできなかった。なお、２基の炉体土器の中心を通る直線の方位は、Ｎ－24°－Ｅである。

旧期炉　新期炉炉体土器ＲＰ２の下に位置する焼土面とその南側に位置する炉体土器(ＲＰ３)よりなる。炉体土器は口縁部と底部を欠損した深鉢形土器で、土器と同じ大きさの掘り込み底面に正位に埋設される。新期炉との機能面の高さの差異から察するに、新炉機能時にはＲＰ３は表出していなかったと判断できる。土器には赤変は認められないが、胴部内面に被熱によるものと見られるハジケが確認できる。焼土面はＲＰ３の北側25㎝、ＰＲ２の直下に位置する。被熱範囲は長軸約55㎝の不整形であり、強く赤変している。

≪覆土･混入物≫ＲＰ１内は地山塊(１層)を含む黒褐色土の単一層(２層)であり、土器裏込土(３層)に類似することから、土器内覆土は構築時に充填された土と推定する。ＲＰ２内に堆積する４層は地山土が混入することから人為的な堆積と推定する。ＲＰ２の口縁部内面には被熱痕が認められるが、４層は焼土化しておらず、炉廃絶後に堆積したものと推定する。５層は土器裏込土である。ＲＰ３内覆土は焼土塊(６層)を含む黒褐色土の単一層(７層)である。焼土塊が混入することから、構築時に充填された土ではなく、使用中の堆積もしくは廃絶後の堆積と推定する。

≪出土遺物≫炉体土器３点が出土し、第95図146～148に図示した。

≪時期･所見≫時期は炉体土器、および周囲に位置する類例遺構から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、土器の残存状態から上部は削平されたものと

推定される。炉床が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、当時の表土面から掘り込まれた面に構築された可能性が高い。以上から、竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、本遺構は竪穴住居内に構築された土器埋設炉の可能性が考えられる。正位埋設の土器と横位埋設の土器が近接して構築される例は、ＳＩ2007竪穴住居跡土器埋設炉、ＳＩ2344竪穴住居跡土器埋設炉などに類例が認められる。

ＳＮＲ2615土器埋設炉(遺構第60図、遺物第94･95図144･145、図版26･47)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＡ70区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中、埋設された２基の土器(ＲＰ１、ＲＰ２)の上部と、近接して焼土の広がりを確認し、土器埋設炉であると判断した。

≪重複≫本遺構が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、ＳＫ2355土坑と重複していたと推定されるが、遺構の重複がないため新旧関係は不明である。

≪形態･焼土≫炉体土器は２基検出した。２つの土器を通る直線の方位はＮ－69°－Ｗである。

ＲＰ１は底部が残存する深鉢形土器で、正位に埋設される。口縁部は遺存していない。胴部内面には被熱によるハジケが認められる。

ＲＰ２は深鉢形土器でＲＰ１の南東41㎝に位置し、口縁部側をＲＰ１に向け斜位に埋設される。底部は残存するが、口縁部は残存しない。胴部は縦半分が欠損するが、設置段階においてすでに欠損していたものか、削平により失われたものかは現状では特定しがたい。土器外面上端には赤変が認められ、部分的に表出していたと想定される。内面には全体的に被熱によるものと考えられるハジケが認められる。

焼土面は２箇所検出した。１つはＲＰ１とＲＰ２の間、ＲＰ２の口縁部側に接して広く被熱し、ＲＰ２の下部分に連続する。被熱状況は非常に強い。もう１つの焼土はＲＰ１の東側に接して位置する。範囲は狭く、被熱状況は非常に弱い。

≪覆土･混入物≫ＲＰ１は半截した方向が土器の中心を通らなかったため、覆土の観察は部分的なものに留まった。観察した範囲では黒褐色土の単一層である(３層)。土器裏込土(４層)は暗褐色土の単一層である。ＲＰ２内覆土は焼土塊が全体に混入する地山由来土である(１層)。構築時の掘り込み掘削土由来とも考えられるが現状では特定しがたい。２層はＲＰ２の掘り込み裏込土であり、暗褐色土の単一層である。

≪出土遺物≫炉体土器２個が出土した。第94･95図144･145に図示した。

145は炉体土器ＲＰ１である。Ⅳa2類に属する。底部から胴部上半にかけて開き、肩部で比較的強く屈曲し、口縁部は開く。口縁部から肩部にかけ地文縄文に沈線で文様が巡るが、他の土器と異なり、各部分で異なる文様が施文される。沈線は２㎜と細く、比較的深い。144は炉体土器ＲＰ２である。Ⅳa2類に属する。胴部上半で緩やかに最大径を持つ。文様帯は口縁部から胴部最大径までである。文様は、地文縄文に横位に連結する波状沈線文が施文される。沈線は幅２㎜で、比較的深い。文様単位は６単位である。

≪時期･所見≫時期は炉体土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、炉床が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、炉は

当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。以上から、竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、本遺構は竪穴住居内に構築された土器埋設炉の可能性が考えられる。

③ 土器埋設遺構

ＳＲ2040土器埋設遺構(遺構第45･46図、遺物第96図149、図版27･48)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ66区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪埋設状況≫埋設土器は底部を欠損した深鉢形土器で、径約35㎝、確認面からの深さ20㎝の掘り込み底面に逆位に埋設される。土器胴部内面は被熱によるハジケが認められる。

≪覆土･混入物≫埋設土器内覆土は４層(１～４層)に分層した。黒褐色土を主体とし、部分的に地山土が混入する。堆積の成因は現状では判然としない。土器裏込土(５層)は地山土が混入する暗褐色土で、掘り込み掘削土の埋め戻し土由来と推定する。

≪出土遺物≫出土した遺物は炉体土器１点のみである。第96図149に図示した。

≪時期･所見≫時期は埋設土器および周囲に位置する遺構の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認しており、土器の遺存状況から推定すると、遺構構築面は当時の地表面より掘り込まれた面であったと考えられる。このことから、竪穴掘り込み、柱穴は確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う土器埋設遺構であった可能性が高い。土器内面には炉体土器特有に見られるハジケが認められることから上部を削平された土器埋設炉の可能性も考えられるが、ここでは焼土が確認されなかったため土器埋設遺構として報告する。

ＳＲ2101土器埋設遺構(遺構第49･50図、遺物第96図150、図版22･48)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ74区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中に埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。

≪重複≫ＳＫＰ2395より新しい。また、ＳＮＲ2156土器埋設炉が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、本遺構と重複していたと考えられる。遺構の重複がないため、相互関係は特定しがたい。

≪埋設状況≫埋設土器は深鉢形土器の胴部下半で、段丘礫層を掘り込み、正位に埋設される。土器の残存高は10㎝ほどで、底部は残存する。

≪覆土･混入物≫土器内覆土は２層(１･２層)に分層した。地山塊が混入する暗褐色土で人為堆積と判断する。土器裏込土(３層)は掘り込み掘削土由来と推定する。

≪出土遺物≫出土遺物は埋設土器１点である。第96図150に図示した。文様帯は胴部下半に及び、地文縄文に沈線文が施される。沈線は浅く、幅は５㎜と広い。Ⅳa2類に属する。

≪時期･所見≫埋設土器および周囲に位置する遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定される。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは現状では特定しがたい。

また、焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在することと、本遺構は上部が強く削平されていることを考え合わせると、土器埋設炉であった可能性も否定できない。

ＳＲ2102土器埋設遺構(遺構第49･50図、遺物第96図151、図版27･49)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＬ73区に位置する。段丘礫層上面を精査中埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪埋設状況≫段丘礫層を掘り込んで構築される。埋設土器は深鉢形土器の胴部で、正位に埋設される。土器の残存高は10㎝ほどで底部、口縁部とも欠損する。土器上部の欠損は、ほ場整備の際の削平によるものと推定される。

≪覆土･混入物≫土器内覆土は２層(１･２層)に分層した。１層は黒褐色土である。堆積要因は判然としない。２層は地山土の多く混入する暗褐色土で、構築時に充塡された土と推定する。３層は土器裏込土で掘り込み掘削土由来と推定する。

≪出土遺物≫埋設土器である深鉢形土器の胴部下半が出土し、第96図151に図示した。

≪時期･所見≫埋設土器および周囲に位置する遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。

また、焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在すること、本遺構は上部が強く削平されていることから、土器埋設炉であった可能性も考えられる。

20㎝南側にはＳＲ2103土器埋設遺構が近接するが、切り合わないため、現状では相互関係は特定しがたい。

ＳＲ2103土器埋設遺構(遺構第49･50図、遺物第96図152、図版27)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＬ73区に位置する。段丘礫層上面を精査中に埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪埋設状況≫段丘礫層を掘り込んで構築される。埋設土器は深鉢形土器の胴部で、正位に埋設される。土器の残存高は４㎝ほどで底部、口縁部とも欠損する。土器上部の欠損は、ほ場整備の際の削平によるものと推定される。土器に明瞭な被熱痕は認められない。

≪覆土･混入物≫遺存状況が悪く、覆土の観察は不可能であった。

≪出土遺物≫出土遺物は埋設土器１点である。遺存状況が悪く復元はできなかったが、検出時の状況から胴部は一周すると推定される。第96図152に図示した。

≪時期･所見≫埋設土器および、周囲に位置する遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは現状では特定しがたい。

焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在することから、土器埋設炉であった可能性も考えられる。

また、20㎝北側にはＳＲ2102土器埋設遺構が近接する。切り合わないため、現状では相互関係は特定しがたい。

ＳＲ2105土器埋設遺構(遺構第61図、遺物第96図153、図版27･49)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＩ68区に位置する。土器が集中して出土したため、上部の土器を取

り上げ精査したところ、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で埋設された土器を確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･焼土≫埋設土器は深鉢形土器の胴部下半から底部である。径約20㎝、確認面からの深さ７㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。
≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土(１層)は暗褐色土の単一層である。堆積要因は判然としない。土器の裏込土(２層)は暗褐色土の単一層である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と考えられる。
≪出土遺物≫出土した遺物は埋設土器１点である。第96図153に図示した。
≪時期･所見≫時期は炉体土器および周囲に位置する土器埋設遺構から縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できるが、遺存状況が悪いことから竪穴住居内に構築されたものか屋外に構築されたものかは判然としない。周辺の土器埋設炉、土器埋設遺構の検出状況から類推すると、竪穴住居内に構築された可能性が高いといえよう。

ＳＲ2106土器埋設遺構(遺構第45･46図、遺物第96図154、図版28･49)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ65区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。周辺に焼土面が確認できないため土器埋設炉ではなく、土器埋設遺構と認定した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫埋設土器は胴部上半以上を欠損した壺で、径25㎝、深さ６㎝の掘り込み内に正位に埋設される。土器には明確な使用痕はない。
≪覆土･混入物≫炉体土器内覆土(１層)は黒褐色土の単一層である。土器の裏込土(２層)は地山土が混入する暗褐色土である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。
≪出土遺物≫出土した遺物は埋設土器１点である。小形の壺形土器で、口縁部は欠損する。器壁は薄く、胎土は緻密である。外面は無文で、丁寧にミガキを施す。第96図154に図示した。
≪時期･所見≫時期は、周囲に位置する土器埋設炉や土器埋設遺構と同時期と推定し、縄文時代後期初頭に比定する。
　本遺構は旧水田耕作土(②Ⅴ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。遺構構築面が定かではないため、性格は現状では特定しがたい。
　周囲に位置する土器埋設炉や土器埋設遺構と同様に、竪穴住居に伴うものと仮定すると、位置や検出レベルから、ＳＮＲ2026土器埋設炉を炉とする竪穴住居に付随する施設であった可能性がある。ＳＮＲ2026が住居中央に位置するとすれば、本遺構は住居壁際に構築されていたと推測できるが、現状では特定しがたい。壺形土器が埋設される例は本例のみである。

ＳＲ2147土器埋設遺構(遺構第60図、遺物第96図155、図版29･49)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＤ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。周辺に焼土面が確認できないことから土器埋設炉ではなく、土器埋設遺構と認定した。確認時に正位埋設と推測し調査を行ったが、土器取り上げの際に斜位であることが判明した。結果的に土層断面は土器の長軸ではなく、口縁部から胴部を断ち割る形となった。
≪重複≫重複する遺構はない。

≪埋設状況≫埋設土器は口縁部と底部を欠損した深鉢形土器である。口縁部側を南西側に向け斜位に埋設される。土器内面はハジケによる劣化が激しい。外面には煤が付着し、胴部下半は被熱による赤変が認められる。

≪覆土･混入物≫土器内覆土は３層に分層した。上位は黒～黒褐色土、下位は黒褐色土が堆積する。土器裏込土(４層)は黒褐色土の単一層である。土器の長軸を断ち割ることができなかったため堆積要因等は不明である。

≪出土遺物≫出土した遺物は埋設土器１点である。第96図155に図示した。

≪時期･所見≫時期は埋設土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。土器の残存状況から当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたか、深い掘り込み内に埋設されたと推測される。周辺の埋設土器遺構の状況から類推すると、竪穴住居内に構築された遺構の可能性が考えられるが、現状では特定しがたい。

ＳＲ2179土器埋設遺構(遺構第51図、遺物第97図156、図版23･49)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ74区に位置する。ＳＮＲ2176土器埋設炉を精査中、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、40㎝北東側に埋設された土器(ＲＰ１)を確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、近接するＳＮＲ2176が竪穴住居に伴う土器埋設炉と仮定すると、本遺構と重複していたと考えられる。直接の重複はないが、埋設土器の破損状況から本遺構は上位を削平されていると考えられ、構築面がＳＮＲ2176より上位であると推定できることから、本遺構が新しいと推測する。

≪埋設状況≫ＲＰ１は深鉢形土器の底部で正位に埋設される。土器の残存高は６㎝ほどで胴部以上は欠損している。掘り込みは径15㎝で確認面からの深さは５㎝である。土器の遺存状況から上位はかなり強く削平を受けたと推測される。

≪覆土･混入物≫土器内覆土は褐色土の単一層(５層)であり、地山由来土である。とくに目立った混入物はなく、遺物の混入もない。土器裏込土(６層)は暗褐色土の単一層であり、掘り込み掘削土由来の埋め戻し土と推定する。

≪出土遺物≫出土遺物は埋設土器１点である。第97図156に図示した。

≪時期･所見≫埋設土器および周辺に位置する土器埋設遺構の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは現状では特定しがたい。

また、焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在すること、本遺構は上部が強く削平されていること、埋設土器内面にハジケが認められることから、土器埋設炉であった可能性も考えられる。

ＳＲ2185土器埋設遺構(遺構第57･58図、遺物第97図157、図版28･49)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ74区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、埋設された土器の上部を確認した。土器には被熱痕が認められず、周辺に焼土面も確認できないことから土器埋設炉ではなく土器埋設遺構と認定した。

≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫埋設土器は底部が穿孔された深鉢形土器で正位に埋設される。口縁部は残存していない。ほ場整備の際に欠損した可能性が考えられる。掘り込みは土器の大きさとほぼ同じである。
≪覆土･混入物≫土器内覆土は２層に分層した。１層は地山ブロックであることから、人為堆積と判断する。３層は地山土由来の褐色土単一層で、構築時に充填された掘り込み堀削土由来と推定する。土器内から遺物等は出土しなかった。
≪出土遺物≫埋設土器１点が出土した。第97図157に図示した。胴中位に沈線が２条巡る。沈線は浅く、幅は４㎜と比較的太い。Ⅳa2類に属する。また、掘り込み覆土より剥片が１点出土した。覆土に混入したものと判断する。
≪時期･所見≫時期は埋設土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。遺構構築面が定かでないため、竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。

また、焼土が伴わないことから土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在すること、本遺構は上部が強く削平されていることから、土器埋設炉であった可能性も考えられるが、現状では特定しがたい。

ＳＲ2193土器埋設遺構(遺構第53･54図、遺物第97図159、図版28･50)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＥ68区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。
≪重複≫ＳＫＰ2459と重複し、本遺構がＳＫＰ2459を掘り込むことから本遺構が新しいと判断する。
≪埋設状況≫埋設土器は底部を欠損した深鉢形土器で、正位に埋設される。土器の残存高は５㎝ほどである。掘り込みは土器とほぼ同じ規模で、確認面からの深さは13㎝である。
≪覆土･混入物≫土器内覆土は暗褐色土の単一層であり、地山土が混入することから、人為堆積と判断する。遺物の混入はない。
≪出土遺物≫出土遺物は埋設土器１点である。深鉢形土器の胴部下半で、下端は粘土紐接合部で欠損する。第97図159に図示した。
≪時期･所見≫埋設土器および周辺に位置する土器埋設遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。

また、焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在すること、本遺構は上部が強く削平されていることから、土器埋設炉であった可能性も考えられるが、現状では特定しがたい。

ＳＲ2194土器埋設遺構(遺構第53･54図、遺物第97図160、図版29･50)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＥ68区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫ＲＰ１は底部を欠損した深鉢形土器で正位に埋設される。土器の残存高は10㎝ほどである。掘り込みは土器とほぼ同じ大きさで確認面からの深さは10㎝である。

≪覆土･混入物≫土器内覆土は暗褐色土の単一層であり、地山土が混入することから、人為堆積と判断する。遺物の混入はない。
≪出土遺物≫出土遺物は埋設土器１点である。第97図160に図示した。また、掘り込み覆土より剥片が２点出土した。覆土に混入したものと判断する。
≪時期･所見≫埋設土器および周辺に位置する土器埋設遺構から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅸ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在すること、本遺構は上部が強く削平されていることから、土器埋設炉であった可能性も考えられる。

また、本遺構はＳＲ2195土器埋設遺構と近接する。ＳＩ2017竪穴住居跡の炉やＳＩ2019竪穴住居跡の炉など造り替えも含め土器が２個隣接して埋設される例がある。本遺構も同種の遺構である可能性があるが、現状では両者の関係は特定しがたい。

ＳＲ2195土器埋設遺構(遺構第53･54図、遺物第97図161、図版29･50)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＥ68区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫埋設土器は底部を欠損した深鉢形土器で正位に埋設される。土器の残存高は６㎝程度である。掘り込みは土器とほぼ同じ大きさで確認面からの深さは約５㎝である。
≪覆土･混入物≫土器内覆土は黒褐色土の単一層である。地山土が混入することから、人為堆積と判断する。遺物の混入はない。
≪出土遺物≫出土遺物は埋設土器１点である。第97図161に図示した。
≪時期･所見≫埋設土器および周辺に位置する土器埋設遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在すること、埋設土器にハジケが認められること、本遺構は上部が強く削平されていることから、土器埋設炉であった可能性も考えられる。

また、本遺構はＳＲ2194土器埋設遺構と近接する。ＳＩ2017竪穴住居跡の炉やＳＩ2019竪穴住居跡の炉など造り替えも含め、土器が２個隣接して埋められる例がある。本遺構も同種の遺構である可能性があるが、現状では両者の関係は特定しがたい。

ＳＲ2216土器埋設遺構(遺構第53･54図、遺物第97図158、図版30･50)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＤ68区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫埋設土器は深鉢形土器の底部で正位に埋設される。掘り込みは平面円形で径16㎝、確認面からの深さ10㎝である。底面から７㎝ほど土を充填する。
≪覆土･混入物≫土器内覆土(１層)は黒色土単一層である。堆積要因は判然としない。２･３層は土器

の裏込土であり、掘り込み掘削土由来土と推定する。土器内から遺物等の出土はない。
≪出土遺物≫埋設土器１点である。第97図158に図示した。
≪時期･所見≫埋設土器および周辺に位置する土器埋設遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。
本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは現状では特定しがたい。焼土が伴わないため土器埋設遺構としたが、本遺構の周辺には土器埋設炉が多く存在すること、埋設土器内面にハジケが認められること、本遺構は上部が強く削平されていることから、土器埋設炉であった可能性も考えられるが、現状では特定しがたい。本遺構が竪穴住居に伴うものと仮定すると、周辺にＳＫＰ2297、2364、2365、2368、2408、2409、2421が位置し、底面標高は130.75～130.84ｍと類似していることから、これらのいずれかが竪穴住居に付随する柱穴と想定される。

ＳＲ2299土器埋設遺構(遺構第52図、遺物第97図162、図版29･50)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＣ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に埋設された土器を確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫埋設土器は胴部縦半分が欠損する深鉢形土器である。取り上げ時の状況から、埋設段階においてすでに半分は欠損していたと判断される。上部が南西側に傾いて検出されており斜位埋設のようにも見えるが、土器の遺存状態から推定すると、結果として傾いて埋設された可能性が高いと推測する。
≪覆土･混入物≫土器内覆土は２層(１･２層)に分層した。土器の遺存状況から開口期間があったとは考えにくく、土器埋設の際に充填された土と推測する。３層は土器の裏込土であり、掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と判断する。土器内から遺物等の出土はなかった。
≪出土遺物≫埋設土器１点と、掘り込み覆土から剥片が７点出土した。剥片は覆土に混入したものと判断する。埋設土器を第97図162に図示した。
≪時期･所見≫時期は埋設土器および、周辺に位置する土器埋設遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は一定程度削平されたものと推定する。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。埋設土器内面にはハジケが認められることから、土器埋設炉であった可能性が高い。

ＳＲ2309土器埋設遺構(遺構第50図、遺物第97図163、図版50)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＴ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中に、埋設された土器(ＲＰ１)の上部を確認した。土器には被熱痕が認められず、周辺に焼土面も確認できないことから土器埋設炉ではなく、土器埋設遺構と認定した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫埋設土器は深鉢形土器で、径約30㎝、確認面からの深さ約20㎝の掘り込み底面に、底部を残したまま正位に埋設される。
≪覆土･混入物≫土器内覆土は２層(１･２層)に分層した。１層は地山ブロックであり、１･２層ともに人為堆積と判断する。３層は土器の裏込土であり、暗褐色土の単一層である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。土器内から遺物等の出土はなかった。

≪出土遺物≫埋設土器１点が出土した。第97図163に図示した。
≪時期･所見≫時期は埋設土器および周囲に位置する遺構の年代から縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。埋設土器内面にはハジケが認められることから、土器埋設炉であった可能性が高い。

ＳＲ2317土器埋設遺構(遺構第61図、遺物第98図165、図版30･50)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＰ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に埋設された土器を確認した。土器には被熱痕が認められず、周辺に焼土面も確認できないことから、土器埋設炉ではなく、土器埋設遺構と認定した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪埋設状況≫埋設土器は深鉢形土器の胴部下半で、径約30㎝、確認面からの深さ８㎝の掘り込み底面に底部を残したまま正位に埋設される。確認面で土器のほぼ中央に５㎝程度の小礫が検出されたが、本遺構との関係は判然としない。
≪覆土･混入物≫土器内覆土(１層)は黒褐色土の単一層である。堆積要因は現状では特定できない。２層は土器裏込土である。掘り込み掘削土を主体とする埋め戻し土と推定する。
≪出土遺物≫埋設土器である深鉢形土器の胴部下半が１点出土した。第98図165に図示した。
≪時期･所見≫時期は埋設土器および周囲に位置する遺構の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。構築面が不明であるため、竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。埋設土器の内面に弱いハジケが認められること、本遺構の周辺には、土器埋設炉が多く存在することから、本遺構もまた土器埋設炉であった可能性が考えられる。

ＳＲ2331土器埋設遺構(遺構第61図、遺物第98図168、図版30)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＡ72区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、埋設された土器の上部を確認した。土器には被熱痕が認められず、周辺に焼土面も確認できないことから土器埋設炉ではなく、土器埋設遺構と認定した。
≪重複≫ＳＲ2332土器埋設遺構と重複し、ＳＲ2332に掘り込まれることから本遺構が旧いと判断する。
≪埋設状況≫非常に遺存状態が悪く、確認面より４㎝しか遺存しないことから上位は強く削平を受けたと推測される。埋設土器は底部を欠損した深鉢形土器の胴部下半で、径約20㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。
≪覆土･混入物≫遺存状態が悪く、土器内覆土の観察は不可能であった。３層は暗褐色土の単一層で土器裏込土である。
≪出土遺物≫出土した遺物は埋設土器１点である。状態が悪く全体を復元することは不可能であった。第98図168に図示した。
≪時期･所見≫時期は埋設土器および周囲に位置する遺構の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。遺構上位は大きく削平されており、構築面が不明であるため、竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。また、本遺構はＳＲ2332土器埋設遺構と近接する。ＳＩ2017竪穴住居跡の炉やＳＩ2019竪穴住居跡の炉など造り替えも含め土器が２個隣接して埋設される例がある。本遺構

も同種の遺構である可能性があるが、現状では両者の関係は特定しがたい。

ＳＲ2332土器埋設遺構(遺構第61図、遺物第98図166、図版30)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＡ72区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に埋設された土器の上部を確認した。

≪重複≫ＳＲ2331土器埋設遺構と重複し、本遺構がＳＲ2331を掘り込むことから本遺構が新しいと判断する。

≪埋設状況≫埋設土器は底部を欠損した深鉢形土器の胴部下半で、径25㎝の掘り込み底面に正位に埋設される。

≪覆土･混入物≫暗褐色砂質土が、埋設土器の内外に堆積する。土器埋設時に連続して埋め戻されたものであろうか。

≪出土遺物≫出土した遺物は埋設土器１点である。状態が悪く土器を復元することは不可能であった。第98図166に図示した。

≪時期･所見≫時期は埋設土器および周囲に位置する遺構の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。遺構上位は大きく削平されており、構築面が不明であるため、竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。また、本遺構はＳＲ2331と近接する。ＳＩ2017竪穴住居跡の炉やＳＩ2019竪穴住居跡の炉など造り替えも含め土器が２個隣接して埋設される例がある。本遺構も同種の遺構の可能性があるが、現状では特定しがたい。

ＳＲ2363土器埋設遺構(遺構第53･54図、遺物第98図167、図版30)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＤ66区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)を精査中に、土器の底部を確認した。周辺に土器埋設遺構が一定量存在すること、本遺構周辺は水田造成時に上位が削平を受けていることから、本遺構も土器埋設遺構であった可能性が高いと判断し、土器埋設遺構とした。

≪重複≫ＳＮＲ2279が近接して位置する。直接の重複はないが、ＳＮＲ2279が竪穴住居に伴う炉とすると、本遺構と重複していたと考えられる。ＳＮＲ2279の構築面は本遺構より低いと想定できることから、本遺構が新しいと推定する。

≪埋設状況≫埋設土器は正位に埋設されたと想定する。掘り込みは削平により確認できなかった。

≪覆土･混入物≫底部まで削平を受けており、覆土は残存していない。

≪出土遺物≫埋設土器である土器の底部が１点出土した。第98図167に図示した。

≪時期･所見≫時期は、周辺に位置する土器埋設遺構の時期から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確認した。土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。竪穴住居に伴うものか、屋外に構築されたものかは判然としない。

ＳＲ2379土器埋設遺構(遺構第37図、遺物第97図164、図版15･16･43)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＣ67･68区に位置する。ＳＩ2376竪穴住居跡床面を精査中に、埋設された土器の上部を確認した。調査時にはＳＩ2376に伴う土器埋設遺構と判断したが、遺存状況が極めて悪く、住居に伴う土器埋設遺構としては不自然な点があることから、整理段階で２基の遺構の切り合いと認定した。

≪重複≫ＳＩ2376竪穴住居跡と重複し、ＳＩ2376が本遺構を掘り込むことから、本遺構が旧いと判断する。

≪埋設状況≫埋設土器は深鉢形土器の口縁部で、逆位に埋設される。残存高は５～10㎝ほどで、東側1／4周が欠損する。掘り込みは削平により確認できなかった。土器内面には炉体土器に特徴的に見られるハジケが認められる。

≪覆土･混入物≫黒褐色土の単一層である。地山土が混入することから、人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫埋設土器１点である。第97図164に図示した。

≪時期･所見≫時期は埋設土器から縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は、埋設土器内面に炉体土器に特徴的な被熱痕が認められること、残存状態が悪く1／4周が欠損すること、割れ口が摩滅しないことなどの点を考え合わせ、ＳＩ2376の竪穴を掘削の際に、上部を削平された土器埋設炉である可能性が高いと判断した。竪穴住居構築の際に削平された土器埋設炉はＳＮＲ2377土器埋設炉に類例が求められる。

ＳＲ2405土器埋設遺構(遺構第61図、遺物第98図169)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＯ73区に位置する。表土層(②Ⅰ層)下の地山漸移層(②Ⅸ層)上面で正位に埋設された南西半部分を欠く深鉢形土器胴部を確認した。土器の周囲には焼土面は確認できず、土器に被熱痕も認められないことから、土器埋設遺構と認定した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪埋設状況≫埋設土器は正位に設置されたと推定する。遺存状況が非常に悪い。

≪覆土･混入物≫暗褐色砂質土が、埋設土器の内外に堆積する。土器埋設時に連続して埋め戻されたものであろうか。

≪出土遺物≫出土した遺物は埋設土器１点である。第98図169に図示した。底部近くの胴部片であるが、状態が悪く全体の形状を復元することはできなかった。

≪時期･所見≫埋設土器や、周囲に位置する遺構の時期から縄文時代後期初頭に属すると判断する。遺構上位は大きく削平されたものと推定でき、詳細な性格は特定しがたい。

ＳＲ2452土器埋設遺構(遺構第41･42図、遺物第98図170･171、図版50)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ66区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中、埋設された土器(ＲＰ１)を確認し、さらに北側1.00ｍに縄文土器の底部が横転した状態で検出された(ＲＰ２)。どちらも遺存状況が悪く、土器埋設遺構と断定しがたい状況ではあったが、周囲に土器埋設炉、土器埋設遺構が多く検出されていることを重視し、本遺構も上部が削平された土器埋設遺構もしくは土器埋設炉と認定した。

≪重複≫重複する遺構はないが、ＳＮＲ2024土器埋設炉が竪穴住居の炉と仮定すると、本遺構と重複していたと考えられる。本遺構の掘り込み面はＳＮＲ2024機能面より高いと推定されることから、本遺構が新しい可能性がある。

≪埋設状況≫ＲＰ１は深鉢形土器の胴部下半で正位に埋設される。土器の残存高は５㎝ほどである。底部は粘土紐接合部で欠損する。口縁部から胴上半部はほ場整備の際の削平により欠損したものと推定される。土器に明確な加撃痕、被熱痕は確認できない。ＲＰ２は底部のみを検出した。

≪覆土･混入物≫削平により覆土は残存していない。

≪出土遺物≫埋設土器２点が出土した。第98図170･171に図示した。

≪時期･所見≫埋設土器から縄文時代後期初頭に比定する。本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下で確

認しており、土器の残存状態から上部は強く削平されたものと推定できる。

正位に埋設された土器と横位に埋設された土器が近接して構築される例は、ＳＩ2007竪穴住居跡土器埋設炉、ＳＩ2344竪穴住居跡土器埋設炉など、竪穴住居の炉に類例が求められることから、本遺構も焼土は検出されていないが、竪穴住居の炉であった可能性が高いと類推する。しかし削平が著しく、現状では特定しがたい。

また、本遺構の周囲には柱穴様ピットが多く位置している。本遺構が竪穴住居跡に伴う土器埋設炉とすると、ＳＫＰ2057、2068、2076、2439が本遺構を中心に台形に位置し、底面標高が130.48～130.58mと近似値であることから、本遺構に伴う柱穴の可能性が指摘できよう。

④ 石囲炉

ＳＱＮ2018石囲炉(遺構第61図、遺物第112図Ｓ69、図版19)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ69･70区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面を精査中、円形に組まれた礫とその内側に焼土面を確認した。形状から竪穴住居の石囲炉と想定し、周囲を精査し掘り込みの検出に努めたが、周囲は強く削平を受けており、竪穴を検出することはできなかった。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･焼土≫８～30cmの長楕円形の安山岩７個が、50cmの平面円形に組まれる。掘り込みは55cm前後の平面円形で、礫は掘り込み内に一回り小さい円を描くように組まれる。礫の内側には礫に接してドーナツ状に焼土面が形成され、対応して礫にも被熱痕跡が認められる。中央部分には焼土面が認められず黒色土が堆積する。掻き出しを行った痕跡であろうか。

≪覆土･混入物≫１層は焼土を掘り込む状態で堆積することから、廃絶後の掻き出しによる堆積の可能性が考えられる。２層は掘り込み掘削土由来と推定される、礫の根固め土である。焼土面は２層上面に形成される。

≪出土遺物≫炉を構成する礫のうち、１点に敲打痕が認められた。また、覆土より石錐が１点出土し、第112図Ｓ69に図示した。

≪時期･所見≫形状がＳＩ2507竪穴住居跡の炉に類似することから、本遺構も縄文時代後期初頭に比定する。

本遺構は旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認されており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。調査では竪穴掘り込みや柱穴は確認できなかったが、炉床面が地山面とほぼ同一面であることから、炉床面は当時の表土面から掘り込まれた面に対応すると判断できる。このことから、本例は竪穴住居に伴う石囲炉であったと想定できよう。

⑤ 配石遺構

ＳＱ2009配石遺構(遺構第62図、図版31)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ･ＬＬ65区に位置する。黒色土中(②Ⅶ層)で立石を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫３個の立石を直線状に配する。中央の礫が最も大きく長径40cmである。北西側の礫は

長軸30㎝、南東の礫は16㎝である。石質はいずれも輝石安山岩である。

≪覆土･混入物≫礫群下部に掘り込みは認められない。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫構築層位から、時期は縄文期と考えられる。近接するＳＱ2010、2013、2014と合わせて小規模な配石群を形成する。現状では性格は特定しがたい。

ＳＱ2010配石遺構(遺構第62図、図版31)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ64･65区に位置する。黒色土中(②Ⅶ層)で礫群を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫礫群はＴ字状に長径30～35㎝の５個の礫を横位に配する。輝石安山岩を用いるが、南端の礫のみ緑色凝灰岩である。掘り込みは確認できず、横位に配されることから地表面に直接置かれたものと推定する。

≪覆土･混入物≫礫群下部に掘り込みは認められない。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫遺構構築層位から、時期は縄文期と推定する。近接するＳＱ2009、2013、2014と合わせて小規模な配石群を形成する。現状では性格は特定しがたい。

ＳＱ2013配石遺構(遺構第62図、図版31)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ･ＬＫ64区に位置する。黒色土中(②Ⅶ層)で礫群を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫礫群はＬ字状に３個の輝石安山岩を配する。東側の礫は立位であり、他は横位である。礫は15～25㎝のものが用いられ、周辺に位置する配石遺構と比較して小規模である。

≪覆土･混入物≫礫群下部に掘り込みは認められなかった。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫遺構構築層位から、時期は縄文期と考えられる。近接するＳＱ2009、2010、2014と合わせて小規模な配石群を形成する。現状では性格は特定しがたい。

ＳＱ2014配石遺構(遺構第62図、図版31)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ65区に位置する。黒色土中(②Ⅶ層)で礫群を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫礫群は東西方向に２個の礫を配する。西側の礫は長軸42㎝で立位に据えられる。東側の礫は長軸25㎝で横位である。石質はどちらも輝石安山岩である。

≪覆土･混入物≫礫群下部に掘り込みは認められなかった。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫確認面から、時期は縄文期と考えられる。近接するＳＱ2009、2010、2013と合わせて小規模な配石群を形成する。現状では性格は特定しがたい。

ＳＱ2325配石遺構(遺構第63図、遺物第98図172･173、図版31･32)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＳ72･73、ＫＴ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で礫群を確認し、規則性があると判断して配石遺構と認定した。下部に土坑が位置するが、本遺構に伴うものとしては部分的であることから、本遺構に付随する土坑ではないと判断した。

≪重複≫ＳＫ2339土坑、ＳＫ2340土坑より新しい。
≪形態･規模≫配石を形成する礫の総数は、計32点である。そのうち北側の直線に近い弧状的な配列をなす礫群は計23点であり、約4.2ｍに及ぶ。斜面上端部にあるため、崩落した礫や原位置から動いた礫も多いと考えられる。よって、弧状的配列に組み込まれない上部･下部の計９点の礫も本遺構に属するものと想定する。石質は輝石安山岩、安山岩が主体を占め、西端の両脇に位置する２点は凝灰岩である。意図的に配置したものか否かは現状では判断しがたい。
≪出土遺物≫縄文土器片が８点出土したが、いずれも出土状況は定かではない。２点を図示した。172は深鉢形土器の口縁部で、１㎜程度の細い沈線文が施文され、ボタン状貼付が施される。173は小型土器の底部である。
≪時期･所見≫時期の特定できる遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、遺構の形態から、縄文時代後期と思われる。
　本来の礫群の配置は、楕円形をかたどるライン上に礫が抜けたと思われる痕跡が認められることから、楕円形に礫が配置されていた可能性も考えられる。よって、北側(斜面側)の弧状的配列とほぼ同径の礫群が南側(平場側)にも配置されていたものと想定できる。

ＳＱ2518配石遺構(遺構第62図)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＩ60区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)で礫群を確認した。
≪重複≫なし。
≪形態･規模≫礫は６点で、いずれも輝石安山岩である。径13～21㎝の大きさである。２点は同一個体が分割したものであるが、人為的か否かは不明である。６点中５点に被熱痕があるが、周囲に焼土は認められない。西側の１点のみは斜立した状態にあり、この礫は原位置にあると考えられる。
≪覆土･混入物≫礫群の下部に掘り込みは認められない。
≪出土遺物≫なし。
≪時期･所見≫確認面から、時期は縄文期と考えられる。火を用いた施設の建材である礫が散逸した結果であると捉えておく。

ＳＱ2523配石遺構(遺構第63図、図版31)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＥ62区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)上面で礫群を確認した。
≪重複≫なし。
≪形態･規模≫大小47個の礫が散在する。礫の分布範囲は3.01×1.67ｍであり、中央部からやや北側に礫が集中している。現状では礫配置の規則性は明確でない。礫の大きさは概ね５～20㎝程度に収まるが、北端にある礫は径35㎝であり、中央部からやや南寄りにある立石は径25㎝と大きめである。立石は高さ31㎝である。石質は輝石安山岩、安山岩を主体とし、中央西寄りに１点凝灰岩が含まれる。現状では意図的な配置とは考えがたい。
≪覆土･混入物≫礫群の下部に明確な掘り込みは確認できなかった。立石の掘り込みの埋土は黒褐色土で、④Ⅱ層由来土と推定する。
≪出土遺物≫なし。
≪時期･所見≫④Ⅱ層を掘り込んでおり、時期は縄文期と推定する。立石を伴う配石遺構であるが、現状では性格を付与することは難しい。

ＳＱ2526配石遺構(遺構第62図、図版31)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＦ63区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)上面で礫群を確認した。

≪重複≫なし。

≪形態･規模≫礫群は70×90㎝の規模で楕円形をなす。礫の総数は11点であり、長径約10～25㎝の小さめの礫である。すべて横向きに置かれており、立てられた痕跡はない。２点は楕円形の外側にあるが、確認面を同じくするため、関連あるものとした。焼土や被熱痕は認められない。石質はいずれも輝石安山岩であるが、南東の１点は流紋岩である。現状では意図的な配置とは考えがたい。

≪覆土･混入物≫礫群下部に掘り込みは認められなかった。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫確認層位から、時期は縄文期と考えられる。現状では性格を付与することは難しい。

⑥ 焼土遺構

ＳＮ1006焼土遺構(遺構第63図)

≪位置･確認状況≫ＬＮ53区に位置する。地山漸移層(①Ⅶ層)上面で焼土面(一部ブロック状)の広がりを確認した。これは、上位を削平された竪穴住居に伴う地床炉と想定したことから、この焼土面を中心として十字に幅約20㎝の土層観察用の畦を残しながら掘削した。その結果、土層断面形状から炉の掻き出し部分が認められたことから、竪穴住居跡の地床炉であると判断した。

≪重複≫他の遺構との切り合い関係は認められないが、上位部分が削平を受けて破壊されている。

≪規模と平面形≫焼土面の平面形は、一辺が23㎝前後の不明瞭な隅丸方形状を呈しており、一部ブロック状に広がっている。

≪覆土≫掘り込み覆土は上下に二分できる。上層部分は一部攪乱を受けているが、焼土ブロック･炭化物粒を含む暗褐色土、下層は暗褐色土を主体とする覆土である。上層の焼土は掘り込み上位での焚き火によって形成された焼土が一部ブロック状になったものと推定する。また、下層の覆土は掘り込み下位での焚き火によって形成された焼土･灰などを掻き出した後の残土と推定する。

≪出土遺物≫縄文時代前期末の土器片40点、後期初頭の土器片６点が出土している。

≪時期･所見≫出土土器や周辺の遺構検出状況から、後期初頭の土器片は混入したものと考えられ、本遺構は縄文時代前期末の竪穴住居に伴う地床炉と想定される。

覆土から出土の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代500±40BP、暦年較正交点ＡＤ1420である。分析試料は攪乱を受けたものと想定される。

ＳＮ1025焼土遺構(遺構第６図)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＭＣ60区に位置する。重機による表土掘削時の盛土除去中に地山漸移層(①Ⅶ層)上面で焼土面を確認した。

≪重複≫他の遺構との切り合い関係は認められないが、北側が攪乱を受けている。

≪形態･規模≫平面形は、現状で長軸65㎝の不整形である。深さは確認面より最大で10㎝である。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫出土遺物がなく、時期を特定することは困難である。焼土面が地山面に形成されていることから、竪穴住居に伴う炉とも考えられるが、周辺の攪乱や削平が著しく、詳細は判然としない。

ＳＮ2177焼土遺構(遺構第39･40図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ72区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)で確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、攪乱による破壊が著しい。

≪形態･規模≫撹乱が著しく、平面形状は復元しがたい。

≪覆土･混入物≫１層は掘り込み覆土である。本遺構が竪穴住居跡に伴う炉と推定すると、１層は竪穴掘削時の残土の可能性が考えられる。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫撹乱内より、65×40×20cmの円礫が出土した。礫は長軸約30cmの位置で被熱している部分と被熱していない部分が明確に分かれる。被熱状況から炉に伴う立石として用いられていた可能性が想定される。埋設土器は検出されなかったが、ＳＮＲ2002土器埋設炉やＳＮＲ2335土器埋設炉と同種の遺構であった可能性が高い。

本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認し、上位は一定程度削平された可能性が高い。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)上面に形成されることから、本遺構は当時の表土面から掘り込まれた面に構築されたと考えられる。以上から、竪穴掘り込みは認められなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う炉の可能性が考えられよう。近接して位置するＳＫＰ2281、2282が本遺構に伴う柱穴となり得ようか。

ＳＮ2369焼土遺構(遺構第47･48図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＦ72･73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、焼土面を確認した。

≪重複≫重複する遺構はないが、本遺構が竪穴住居の炉と仮定すると、ＳＮＲ2186土器埋設炉を炉とする竪穴住居と重複していたと推定できる。新旧関係は判然としない。

≪形態･規模≫平面不整形で、長軸72cm、短軸50cm、厚さ５cmの範囲で被熱する。焼土の南東部直上には扁平な円礫が位置し、さらに礫の南東には長軸約40cmの平面楕円形のピットが位置する。礫は部分的に破損する。

≪覆土･混入物≫焼土面は礫の加重で下方に歪曲する。１層はピットの覆土である。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫本遺構は、焼土面直上で礫が検出され、礫に近接してピットが位置することから、ピットを礫の抜け痕と推定し、立石炉であったと判断する。

明確な時期は不明であるが、土器埋設炉などと同じレベルで近接して確認されたことから、それらとほぼ同時期と推定し、縄文時代後期初頭と想定する。本遺構は旧水田耕作土(②Ⅱ層)直下で確認しており、上位は一定程度削平されたものと推定できる。焼土面が地山漸移層(②Ⅸ層)に形成されることから、当時の表土面から掘り込まれた面に形成されたと考えられる。このことから、竪穴掘り込みは確認できなかったが、本遺構は竪穴住居に伴う炉であった可能性が高い。また、本遺構周辺にはＳＫＰ2249など竪穴住居の柱穴と思われる柱穴様ピットが数基位置するが、ＳＮＲ2186土器埋設炉が近接して位置することから、本遺構に伴う柱穴を抽出することは難しい。

⑦ 土坑

ＳＫ1012土坑(遺構第64図、遺物第112図Ｓ70)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＭＦ56区に位置する。地山漸移層(①Ⅶ層)上面で、不整な楕円形のプランを確認した。

≪重複≫他の遺構との重複関係はない。

≪形態･規模≫平面形は長軸1.12m、短軸0.96mのやや不整な隅丸方形で、確認面からの深さは最大で43cmである。

≪壁･底面≫壁は底面から急傾斜に立ち上がり、掘り込み中位面からは比較的緩やかに開く。底面は鍋底状である。

≪覆土･混入物≫覆土は２層に分層した。２層は暗褐色砂質土を基質とし、地山土の混入が顕著であることから一括の埋め戻しと推定する。１層は一定期間経過して掘り込み面が窪んだ後に黒ボク土を基質とする当時の表土が流入したものと推定する。

≪出土遺物≫遺物は当土坑全体に散在して出土した。出土土器は縄文土器片が５点出土しているが、そのほとんどが小破片あるいは摩滅しており、詳細を判断するには至らない。出土石器は４点である。図示したＳ70は、全面に磨り痕が認められるが、形状、石質から磨石ではなく、石製品の可能性も考えられる。

≪時期･所見≫出土土器の下限は縄文時代後期初頭であるが、覆土からの出土であり本遺構の時期を決定づけるものではなく詳細な時期は不明である。１･２層の層界には28cmの円礫が立位で検出されている。１層が後世の堆積とすると、礫の上半分は遺構を埋め戻した後、一定期間表出していたことになる。以上から本遺構は土坑墓の可能性があるが、他に土坑墓としての性格を決定づける要素がないため特定しがたい。

ＳＫ1176土坑(遺構第75図、遺物第98図174～179、図版51)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＭＡ62～64、ＭＢ63～65区に位置する。地山漸移層(①Ⅶ層)下面で、不整な半円状の不明瞭なプランを確認し、遺構が存在することを推測した。その後、このプランの中央を中心にして土層観察用の畦を残しながら約20cmの試掘溝を掘削し、掘り込みの有無等を検討した。その結果、掘り込みを確認したため、土坑が存在することを認めた。

≪重複≫ＳＡ1261Ｐ２とＰ３と重複し本遺構が旧い。北西側には隣接して倒木痕があり、南西側は水田造成時の削平を受けて破壊されている。

≪形態･規模≫平面形は不整な楕円形と推定され、長軸4.7m前後、短軸3.5m前後である。中央部やや北東側はわずかに掘り窪められている。確認面からの深さは最大で20cm前後である。

≪壁･底面≫壁は急に立ち上がる。底面は不整でやや凹凸がある。

≪覆土･混入物≫覆土は３層に分層した。いずれも地山土の混入が顕著であり一括の人為的埋め戻しと推定する。

≪出土遺物≫遺物は覆土全体より出土した。土器はいずれも小片でⅠ群４点、Ⅱ群10点、Ⅳ群５点である。石器は、スクレイパー３点、剥片５点が出土した。そのうち土器６点を図示した。174は口唇部に貝殻腹縁文、口縁部に爪形文が施文される。178、179は貝殻腹縁文が施文される。いずれも胎土は緻密で焼成は良い。縄文時代早期、白浜式に比定される土器であろうか。175は胎土に繊維が混入

する。型式比定は困難であるが、前期前葉の所産であろうか。

≪時期･所見≫出土土器の下限は縄文時代後期初頭であるが、本遺構の帰属時期は特定しがたい。大型の不整な掘り込みであり、性格は不明である。

ＳＫ1228土坑(遺構第64図、遺物第98図180～185、図版51)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＬＱ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)で確認した。

≪重複≫他の遺構との重複関係はないが、南西側が水田造成時の削平を受けて破壊されている。

≪形態･規模≫長軸1.62m、短軸は1.00m前後の不整な楕円形と推定される。確認面からの深さは最大で22㎝である。

≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

≪覆土･混入物≫覆土は３層に分層した。覆土上位は縄文時代表土層由来の黒ボク土を基質とし、下位は上位黒ボク土と地山土が混合した暗褐色土であるが、その境界は漸移的である。覆土上面で多数の縄文土器小片が出土した。一連の埋め戻しと推定する。

≪出土遺物≫確認段階で縄文時代後期初頭の土器片約80点が折り重なって出土した。そのうち約60点が同一個体であったが、復元は不可能であった。出土石器は剥片１点である。土器を６点図示した。180は表裏縄文の土器である。覆土に混入したものと判断する。

≪時期･所見≫出土土器から縄文時代後期初頭の所産と判断する。多数の土器片が折り重なって出土していることから、副葬品を伴う土坑墓の可能性も想定できるが、判然としない。

ＳＫ1232-ａ土坑(遺構第64図)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＬＴ71区に位置する。ＳＩ1229竪穴住居跡を確認後、この住居跡を堀り込む不整な楕円形のプランを確認した。その後、２基の切り合いであることが判明したため、本遺構をＳＫ1232-ａ土坑、もう１基の本遺構より旧いものをＳＫ1232-ｂ土坑とした。

≪重複≫ＳＫ1232-ｂおよびＳＩ1229と重複する。本遺構が新しい。

≪形態･規模≫最大径44㎝のやや不整な円形である。確認面からの深さは最大で20㎝である。

≪壁･底面≫壁は急傾斜で立ち上がる。底面は西から東に向かって傾斜する。

≪覆土･混入物≫覆土は単一層である。地山土を基質とし、一括埋め戻しと推定する。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫ＳＩ1229が縄文時代後期初頭と推定されることから、本遺構は縄文時代後期初頭以降の所産と考えられる。性格は不明である。

ＳＫ1232-ｂ土坑(遺構第64図)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＬＳ69･70、ＬＴ71区に位置する。ＳＩ1229竪穴住居跡を確認後、このプランを切っている不整な楕円形のプランを確認した。その後、精査中に２基の切り合いであることが判明したため、本遺構をＳＫ1232-ｂ土坑、もう１基の本遺構より新しいものをＳＫ1232-ａ土坑とした。

≪重複≫ＳＫ1232-ａおよびＳＩ1229と重複する。ＳＫ1232-ａよりも旧く、ＳＩ1229より新しい。

≪形態･規模≫長軸1.22m、短軸0.73mの平面不整楕円形で、確認面からの深さは最大で32㎝である。

≪壁･底面≫壁は北東側と南西側が急傾斜で立ち上がる。北西側は緩やかに開く。底面は南から北に緩やかに傾斜する。

≪覆土･混入物≫覆土は３層に分層した。地山土を基質とするが、やや暗い色調を呈する。堆積状況は一連の埋め戻しによるものと想定されるが、現状では特定しがたい。
≪出土遺物≫石器３点が出土した。いずれも剥片である。
≪時期･所見≫ＳＩ1229が縄文時代後期初頭と推定されることから、本遺構は縄文時代後期初頭以降の所産と考えられる。詳細な性格は不明である。

ＳＫ1233土坑(遺構第64図)

≪位置･確認状況≫南部段丘面ＬＴ71区に位置する。ＳＩ1229竪穴住居跡を確認後、このプランを切っている不整な楕円形のプランを確認した。
≪重複≫ＳＩ1229と重複する。本遺構がＳＩ1229を掘り込んでおり、本遺構が新しい。
≪形態･規模≫長軸91㎝、短軸81㎝の平面楕円形で、確認面からの深さは最大で44㎝である。
≪壁･底面≫残存する壁は、南側がほぼ垂直に立ち上がり、北側は比較的急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦面である。
≪覆土･混入物≫単一層である。地山土を基質とし、小礫が多量に混入するため一括の埋め戻しと推定する。
≪出土遺物≫縄文土器片１点、剥片１点が出土した。
≪時期･所見≫ＳＩ1229が縄文時代後期初頭と推定されることから、本土坑は縄文時代後期初頭以降の所産と考えられる。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2016土坑(遺構第64図、遺物第99図186～188、図版51)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＮ68区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面でやや不明瞭なプランを確認した。
≪重複≫ＳＩ2017竪穴住居跡と重複する。本遺構がＳＩ2017を掘り込むことから本遺構が新しいと判断する。
≪形態･規模≫平面不整円形で、長軸1.90ｍ、短軸1.78ｍ、確認面からの深さは最大で40㎝である。
≪壁･底面≫壁はなだらかに立ち上がる。底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫黒褐色土の単一層である。堆積要因は現状では特定しがたい。
≪出土遺物≫覆土から縄文土器片37点、石器４点が出土した。縄文土器片は小片が多く時期比定可能なものはすべてⅣ群である。３点を図示した。石器は剥片３点、ＲＦ1点である。
≪時期･所見≫遺構内南寄りに立石を伴う。立石は平面形隅丸三角形で法量は39×36×12㎝である。立石の掘り込みは平面隅丸方形で長軸40㎝、確認面からの深さは22㎝である。石は逆三角形状に尖部を下に向け設置される。立石の上部は16㎝の範囲で表面に荒れが認められる。弱く被熱している可能性があるが、周辺に焼土は検出されていない。立石の検出状況から焼土が削平された可能性は低く、立石炉で使用された礫を転用したと推測するが、現状では判然としない。時期は出土遺物から縄文時代後期初頭に比定する。

ＳＫ2027土坑(遺構第64図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ64区に位置する。黒色土層(②Ⅶ層)中でやや明瞭なプランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面はほぼ円形で、径95㎝、確認面からの深さは最大で10㎝である。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫黒色土の単一層である。堆積要因は現状では特定しがたい。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫遺物が出土していないため時期は不明であるが、覆土の様相から他の遺構より新しいと推測する。近接するＳＢ2035掘立柱建物と同時期の可能性もある。現状からは性格は不明である。

ＳＫ2030土坑(遺構第65図、遺物第99図189～196、第113図Ｓ71～74、図版32)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ･ＬＩ67区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で黒色土の明瞭なプランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸1.38m、短軸1.16m、確認面からの深さは最大で36㎝である。
≪壁･底面≫壁は北側はやや内湾し、南側はやや開いて立ち上がる。底面はほぼ平坦である。
≪覆土･混入物≫３層に分層した。壁際中位以上(２層)に黒褐色土が含まれる以外は黒色土を基本とする。１層には、１～10㎝の円礫や土器片、炭化物が多く含まれる。３層からはチップ状の剥片が多数出土した。一括の埋め戻しと推測するが現状では特定しがたい。
≪出土遺物≫縄文土器片229点、石器71点が出土した。土器はいずれも小片で、接合する個体は少数であった。時期を特定できるものはすべてⅣ群である。８点を図示した。石器の内訳はスクレイパー４点、ＲＦ４点、ＵＦ４点、剥片52点、石核１点、凹石２点、磨石３点、岩版１点である。４点を図示した。
≪時期･所見≫覆土からの遺物を指標とすれば、縄文時代後期初頭の所産と推定される。性格は判然としないが、遺物や礫が多く混入することから、土坑墓の可能性もある。また、覆土から出土した41は、ＳＩ2005竪穴住居跡より出土した壺形土器の口縁部片と接合したが、いずれも覆土からの出土であることから、ＳＩ2005より本遺構の方が新しい可能性が考えられる。

ＳＫ2031土坑(遺構第65図)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ･ＬＩ64区に位置する。黒色土層(②Ⅶ層)中でやや不明瞭なプランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸1.14m、短軸1.00m、確認面からの深さは最大で48㎝である。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫黒色土単一層である。堆積要因は判然としない。
≪出土遺物≫スクレイパー１点、ＵＦ１点、剥片４点が出土した。
≪時期･所見≫時期が特定できる遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測し、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状では性格は不明である。

ＳＫ2032土坑(遺構第65図、遺物第113図Ｓ75)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＩ65区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面でやや不明瞭なプランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整長方形で、長軸1.58m、短軸1.14m、確認面からの深さ20㎝である。
≪壁･底面≫壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面は中央付近が若干の凸状を呈する。
≪覆土･混入物≫地山土を多く含む黒褐色土の単一層である。
≪出土遺物≫覆土より縄文土器片１点とＲＦ１点が出土した。縄文土器片は小片であるが、Ⅳ群に属するものと判断する。石器１点を図示した。
≪時期･所見≫土器から縄文時代後期初頭を上限とする。現状からは性格は不明である。

ＳＫ2033土坑(遺構第65図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＩ66･67区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で黒色土の明瞭なプランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫平面はほぼ円形で、長軸1.40m、短軸1.30m、確認面からの深さは最大で40㎝である。
≪壁･底面≫北壁は袋状を呈し、南壁は段をもって外傾して立ち上がる。底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫５層に分層した。最上層の１層および、最下層の５層には地山土が混入する。中位の３層から径20㎝前後の円礫が３個検出された。一括の埋め戻しと推定する。
≪出土遺物≫縄文土器片35点と石器20点が出土した。縄文土器片はいずれも小片であり、接合する個体はなかった。時期の特定できるものはすべてⅣ群である。石器の内訳はＲＦ１点、剥片19点である。
≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。性格は判然としないが、形状が近接するＳＫ2030土坑に類似しており、土坑墓の可能性も考えられる。

ＳＫ2037土坑(遺構第65図、遺物第99図197･198、図版51)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＩ66区に位置し、ＳＩ2036竪穴住居跡覆土(２層)上面で明瞭なプランを確認した。
≪重複≫ＳＩ2036より新しい。
≪形態･規模≫長軸1.48m、短軸1.30mの平面不整円形を呈し、確認面からの深さは最大で42㎝である。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は擂鉢状である。
≪覆土･混入物≫２層に分層した。南壁際に暗褐色土が堆積する他は黒色土の単一層である。全体に炭化物が少量含まれる。一括の埋め戻しと判断する。
≪出土遺物≫遺物はすべて覆土から出土した。縄文土器片32点、剥片２点である。縄文土器片はいずれも小片で接合する個体はない。時期の特定できるものはすべてⅣ群である。本遺構はＳＩ2036を掘り込んで構築されており、遺物は混入した可能性が高い。土器２点を図示した。
≪時期･所見≫ＳＩ2036の遺物が混入している可能性が高いことから詳細な時期は定かではないが、ＳＩ2036を掘り込んで構築されることから、縄文時代後期初頭以降の所産と推定する。

ＳＫ2041土坑(遺構第65図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ66区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面でやや明瞭なプランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫平面はほぼ円形で、径73㎝、確認面からの深さは最大で39㎝である。
≪壁･底面≫壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫４層に分層した。黒褐～黒色土を基質とする。１･２層には20㎝前後の円礫が７個充填されていた。礫の検出状況より人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。礫が充填されていることが特筆されるが、現状では性格は不明である。

ＳＫ2043土坑(遺構第65図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ･ＬＪ67区に位置する。地山漸位層(②Ⅸ層)上面で明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整円形で、径98㎝、確認面からの最深値は20㎝である。

≪壁･底面≫壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面は東側に緩やかな窪みを持つ。

≪覆土･混入物≫２層に分層した。１層は黒褐色土で、２層は地山塊を含む黒色土である。１層では６～26㎝の礫を検出した。一括の埋め戻しと推測する。

≪出土遺物≫縄文土器片５点、剥片１点が覆土から出土した。土器片は縄文時代後期の所産と推定する。また確認面で59×39×12㎝の扁平な円礫１点とその周辺に10～20㎝の礫３個を同一レベルで検出した。

≪時期･所見≫出土遺物から時期は縄文時代後期を上限とする。礫の出土状況および覆土の堆積状況から土坑墓の可能性があるが、現状では特定しがたい。

ＳＫ2045土坑(遺構第66図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＪ67･68区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面でやや明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面はほぼ円形で、径86㎝、確認面からの深さは最大で18㎝である。

≪壁･底面≫壁の西側はやや開いて、東側はなだらかに立ち上がる。底面はやや擂鉢状を呈する。

≪覆土･混入物≫２層に分層した。上層に地山土を含む黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積する。上層と下層の境付近に長径約20㎝の長方体の角礫を１個含む。一括の埋め戻しと考えられる。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状では性格は不明である。

ＳＫ2046土坑(遺構第66図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＰ69･70区に位置する。地山漸位層(②Ⅸ層)上面でやや明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸1.07ｍ、短軸0.70ｍ、確認面からの深さは最大で16㎝である。

≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫覆土は地山塊が混入する暗褐色土の単一層である。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状からは性格は不明である。

ＳＫ2065土坑(遺構第66図、遺物第99図199、図版51)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ･ＬＩ64区に位置する。地山漸位層(②Ⅸ層)上面でやや明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整円形で、長軸1.47m、短軸1.30m、確認面からの深さは最大で34㎝である。

≪壁･底面≫北壁はなだらかに、南壁はやや内湾気味に開いて立ち上がる。底面はやや丸みを帯びる。

≪覆土･混入物≫２層に分層した。地山土の混入度合で分層した。下位の方が地山土の混入割合が高い。層界では土器片がまとまって出土した。一括の埋め戻しと推定する。

≪出土遺物≫１･２層の層界で土器片がまとまって出土した。29点を数え、すべて接合した。その結果、深鉢形土器の口縁～胴部の縦1／4で、内面が上を向いた状態であったことが判明した。Ⅱ群に比定できる。第99図199に図示した。他に遺物は出土していない。

≪時期･所見≫出土した土器から縄文時代前期後葉(円筒下層ｄ式)に比定する。遺物の出土状況から土坑墓の可能性もあるが、現状では特定しがたい。

ＳＫ2072土坑(遺構第66図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＥ63区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸1.56m、短軸0.95m、確認面からの深さは最大で28㎝である。

≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は南側は平坦だが、北側はピット状に落ち込む。

≪覆土･混入物≫５層に分層したが、堆積状況が不自然であることから、一括の人為堆積の可能性が高い。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。性格を特定するには至らなかった。

ＳＫ2099土坑(遺構第67図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＬ66区に位置する。ＳＩ2042竪穴住居跡精査中にＳＩ2042床面で明確なプランを確認した。

≪重複≫土層の観察からＳＩ2005竪穴住居跡、ＳＩ2042より新しい。

≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸96㎝、短軸76㎝、確認面からの最深値44㎝である。

≪壁･底面≫壁はやや開いて立ち上がる。底面は凹凸があり、舟底状を呈する。

≪覆土･混入物≫３層に分層した。下位および壁際に褐色～暗褐色土、上位に黒褐色土が堆積する。一括の埋め戻しと推定する。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土しておらず、詳細な時期･性格は不明であるが、ＳＩ2042より新しく縄文時代後期初頭以降に比定する。

ＳＫ2100土坑(遺構第66図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＬ67区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫ＳＩ2001竪穴住居跡と重複するが、ＳＩ2001が床面まで削平されていることから新旧関係は不明である。

≪形態･規模≫平面不整隅円長方形で、長軸1.27m、短軸0.70m、確認面からの深さ40㎝である。

≪壁･底面≫壁はやや開いて直線的に立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。地山塊の混入が目立つ。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状からは性格は不明である。

ＳＫ2140土坑(遺構第66図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＩ71区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整円形で、長軸1.48m、短軸1.26m、確認面からの深さは最大で1.17mである。

≪壁･底面≫上半は段を持ちながら外傾し、下半は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫３層に分層した。中位(２層)に暗褐色土が堆積する他は黒褐色土である。掘り込みが狭くなる中位付近で、漸移的に明るい暗褐色土に変わる。全体に炭化物がごく少量含まれる。一括の埋め戻しと推定する。

≪出土遺物≫覆土より縄文土器片が４点、剥片が６点出土した。いずれも小片で時期の特定は困難であるが、縄文時代後期と推定する。

≪時期･所見≫出土遺物から、縄文時代後期を上限とする。形状から柱穴の可能性もある。

ＳＫ2141土坑(遺構第66図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫長軸90㎝、短軸50㎝の平面不整楕円形で、確認面からの深さは最大で16㎝である。

≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は南側は平坦であるが、北側はピット状に落ち込む。

≪覆土･混入物≫黒褐色土の単一層である。地山塊の混入が目立ち、人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。底面の形状から、本遺構は２基の遺構が重なっている可能性が考えられるが、覆土に明確な違いが確認できなかったことから、１基の遺構とする。

ＳＫ2142土坑(遺構第67図、遺物第114図Ｓ77)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ･ＬＨ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で不明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面楕円形である。長軸2.44m、短軸1.94m、確認面からの深さ38㎝である。

≪壁･底面≫壁は直線的に立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫４層に分層した。全体的に地山土が混入する。堆積状況から人為堆積と判断する。３層からは20～40㎝の円礫を14点検出した。

≪出土遺物≫石匙１点、剥片６点が出土し、石匙を第114図Ｓ77に図示した。一括で取り上げたため、出土状況は不明である。

≪時期･所見≫時期が特定できる遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。覆土の堆積状況、および礫の混入から、土坑墓の可能性がある。土坑墓とすれば、出土した石匙は副葬品であろうか。

ＳＫ2146土坑(遺構第66図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ･ＬＩ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面でやや明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面長楕円形で、長軸1.56m、短軸0.80m、確認面からの深さは最大で32㎝である。

≪壁･底面≫壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面は長軸両側にテラスを持ち、中央は窪む。

≪覆土･混入物≫５層に分層した。覆土は全体的に西側から流れ込む。全体に地山土の混入が認められることから、一括の人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫剥片７点が出土した。土器は出土していない。

≪時期･所見≫時期が特定できる遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状からは性格は不明である。

ＳＫ2191土坑(遺構第67図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＫ74区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸1.34m、短軸1.04m、確認面からの深さは最大で38㎝を測る。

≪壁･底面≫壁は東側は直線的に開いて、西側はなだらかに立ち上がる。底面は東側が深く、西側はテラス状に一段高い平坦面となる。

≪覆土･混入物≫５層に分層した。堆積状況は柱抜き取りの様相を示す。

≪出土遺物≫縄文土器片９点、ＵＦ２点、剥片３点が覆土から出土した。縄文土器片は時期の特定できるものはすべてⅣ群である。

≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。覆土の堆積状況から柱を抜き取った柱穴の可能性が高い。

ＳＫ2214土坑(遺構第67図、遺物第113図Ｓ76)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ74区に位置する。地山漸位層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整楕円形で、長軸1.18m、短軸0.91m、確認面からの深さは最大で30㎝である。

≪壁･底面≫壁は外傾して立ち上がる。底面は東側にピット状の落ち込みを持ち、西側は一段高く、テラス状となる。

≪覆土･混入物≫３層に分層した。

≪出土遺物≫縄文土器片14点、石器18点が覆土より出土した。縄文土器片は小片のため時期の特定は

困難であるが、いずれも縄文時代後期の所産と推定する。石器の内訳は石錐１点(第113図Ｓ76)、ＲＦ１点、ＵＦ６点、剥片10点である。一括で取り上げたため、詳細な出土状況は不明である。

≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期を上限とする。土層の堆積状況から、柱が抜き取られた柱穴の可能性もあるが、ここでは土坑として扱う。

ＳＫ2215土坑(遺構第67図、遺物第99図200～202)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＦ･ＬＧ74･75区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整楕円形で、長軸2.32m、短軸1.54m、確認面からの深さは最大で30㎝である。

≪壁･底面≫壁はなだらかに立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫２層に分層した。北側上部にはこぶし大の円礫が６個以上混入していた。また南側底面直上からは、２～10㎝の円礫がまとまって検出されている。

≪出土遺物≫縄文土器片22点、ＲＦ１点、剥片５点が覆土から出土した。縄文土器はいずれも小片であるが、時期の特定できるものはすべてⅣ群である。縄文土器３点を図示した。

≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。礫が多数検出されたことから、土坑墓の可能性があるが、現状では特定しがたい。

ＳＫ2221土坑(遺構第67図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ72区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸80㎝、短軸62㎝、確認面からの深さは最大で14㎝である。

≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。堆積要因は判然としない。確認面で長径30㎝の扁平な円礫を検出した。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推定すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状からは性格は不明である。

ＳＫ2227土坑(遺構第68図、遺物第99図203～205、第114図Ｓ79)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ･ＬＧ75区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整楕円形で、長軸2.58m、短軸1.84m、確認面からの深さは最大で52㎝である。

≪壁･底面≫壁はなだらかに立ち上がる。底面は北西側にテラスをもち、南東側は擂鉢状に落ち込む。

≪覆土･混入物≫３層に分層した。黒褐～暗褐色土を基質とする。上部中央には５～20㎝の円礫がまとまって出土した。土層状況から掘り直しが行われている可能性が高い。

≪出土遺物≫縄文土器片98点、スクレイパー１点、ＲＦ２点、ＵＦ１点、剥片２点が覆土より出土した。縄文土器片は時期判別の可能なものはすべてⅣ群であった。また、朱塗り土器の小片２点が出土している。土器３点、石器１点を図示した。

≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。礫が多く出土していること、朱塗り土器片が出土していることなどから、土坑墓の可能性もあるが判然としない。

ＳＫ2239土坑(遺構第68図、遺物第99図206)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＮ74区に位置する。盛土層(②Ⅳ層)下の地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫なし。

≪形態･規模≫長軸1.75m、短軸1.55mの正円に近い楕円形平面をなす。確認面から底面までの深さは91cmである。

≪壁･底面≫壁は、南側がやや開き気味に、北側が内傾気味にそれぞれ立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ水平な平坦面で、径1.45mの円形平面をなす。

≪覆土･混入物≫覆土は褐色砂質土の混入度の差で二分した。しかし、ともに暗褐色砂質土を基質とし、その境界は漸移的である。さらに、覆土断面には壁の崩壊土、あるいは当時の表土由来の流入土等と想定し得るような層相や形状を示す堆積層を認めることはできない。これらのことから、覆土は連続した埋め戻し土と判断する。

≪出土遺物≫縄文時代後期初頭土器破片19点、ＲＦ１点、剥片４点が出土し、土器１点を図示した。

≪時期･所見≫出土炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代3740±40BP、暦年較正交点BC2140である。フラスコ状土坑の系譜を引く土坑墓の可能性がある。

ＳＫ2240土坑(遺構第68図、遺物第99･100図207～215、第114図Ｓ78、図版51)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＮＭ･ＮＮ75区に位置する。当初、南半側を盛土層(②Ⅳ層)下の地山層上面で確認した。北半側は小又川に面した段丘崖際の調査予定地外に位置していた。このため、土坑南半側を先に掘り下げ、調査予定地範囲の北壁に沿った土層断面を記録した後、予定地北隣りを拡張し、土坑平面北半側を確認調査した。結果的に、北半側は南半側よりも上位の地山漸移層(②Ⅸ層)中位～上面で掘り込み平面を確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫長軸1.65m、短軸1.50mのほぼ平面円形で、確認面からの深さは最大で83cmである。

≪壁･底面≫壁は、底面から50cm前後はほぼ垂直に、それより上位はやや開きながら立ち上がる。東壁は内湾する。底面はほぼ水平な平坦面である。底面は径約1.20mの円形平面をなす。

≪覆土･混入物≫覆土は暗褐色～褐色砂質土を基質とする。主として色調の違いで三分したが、その境界は漸移的である。覆土は、総体として、周囲の旧表土と推測できる暗褐色砂質土と類似する。しかし、周囲から流入したと想定し得るような断面形状および層相を示す堆積層は認められないことから、覆土は主として当時の表土を連続して埋め戻した堆積であった可能性が高いと判断する。

≪出土遺物≫縄文土器破片約112点、スクレイパー１点、ＲＦ１点、剥片類15点、頁岩の原石１点などが出土した。このうち、縄文土器破片は縄文前期～中期に属する数点のほかは、縄文後期初頭に属する。土器９点、石器１点を図示した。

≪時期･所見≫１層から出土した炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代3750±40BP、暦年較正交点BC2140である。

ＳＫ2251土坑(遺構第68図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整円形で、長軸1.66m、短軸1.48m、確認面からの深さは最大で30cmである。
≪壁･底面≫南西壁は段を持ち、北東壁は開いて立ち上がる。床面は平坦である。
≪覆土･混入物≫４層に分層した。北西側からにぶい黄褐色土、地山土を含んだ暗褐色土が流れ込むように堆積し(３･４層)、その後当時の表土由来の黒褐色土が堆積する(１･２層)。全体に地山土が混入することから一括の人為堆積と推定する。
≪出土遺物≫スクレイパー１点が覆土から出土している。
≪時期･所見≫時期が特定できる遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期と推定すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状からは性格は不明である。

ＳＫ2253土坑(遺構第68図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＧ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫平面楕円形で、長軸1.30m、短軸1.07m、確認面からの深さは最大で20cmである。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫地山土を含む暗褐色土の単一層である。人為堆積と判断する。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推測できる。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2258土坑(遺構第69図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＦ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。
≪重複≫ＳＫＰ2284柱穴より新しい。
≪形態･規模≫平面不整円形で、径81cm、確認面からの深さは最大で26cmである。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫３層に分層した。黒褐色土～暗褐色土を基調とし、各層土が他層に混入する。一連の人為堆積と判断する。
≪出土遺物≫覆土より縄文土器片６点が出土した。小片のため明確に時期の特定できる個体はないが、縄文時代後期の所産と推定する。
≪時期･所見≫遺物が小片のため詳細な時期は不明であるが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すれば、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2266土坑(遺構第69図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＤ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫平面は円形で、径75cm、確認面からの深さは最大で16cmを測る。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。地山土が多く混入することから人為堆積と判断する。
≪出土遺物≫遺物は出土しなかった。
≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推測される。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2267土坑(遺構第68図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＤ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整楕円形で、長軸76㎝、短軸50㎝、確認面からの深さは最大で18㎝である。

≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。堆積要因は特定しがたい。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は定かではないが、周囲に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推測される。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2300土坑(遺構第69図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＰ71区に位置する。北端斜面上端部の地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整楕円形で、長軸1.04m、短軸0.91m、確認面からの深さは最大で41㎝である。

≪壁･底面≫北壁はやや開いて立ち上がり、南壁は幾分フラスコ状を呈する。底面は北側が若干高く、南側でやや低い。いずれもほぼ平坦である。

≪覆土･混入物≫３層に分層した。色調および混入物で分層した。地山土の混入状況および堆積の状態から、人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫覆土より縄文土器片が６点出土した。いずれも小片であり時期特定は困難だが、特定可能なものはⅣ群に属する。

≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。斜面上端部という立地と規模･形態から、貯蔵穴的利用が推定できる。

ＳＫ2304土坑(遺構第69図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＳ･ＫＴ69区に位置する。地山面直上で明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面はほぼ円形で、長軸1.38m、短軸1.21m、確認面からの深さは最大で24㎝である。

≪壁･底面≫壁は外に開きながら緩やかに立ち上がる。底面は鍋底状である。

≪覆土･混入物≫黒色土の単一層である。上部は削平により損失したと思われる。地山土や小礫が混入することから人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫縄文土器片４点、石器５点が出土した。土器は小片のため詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期の所産と推定する。

≪時期･所見≫遺物が小片のため詳細な時期は不明であるが、周囲に位置する遺構と同時期と推測すると、縄文時代後期初頭の可能性がある。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2307土坑(遺構第69図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＳ･ＫＴ70区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)直上で径70㎝前後の不整形黒色土プランを確認し、周囲を精査したところプランが広がり、後述のような規模･形態となった。

≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫平面は楕円形で、長軸1.38m、短軸1.04mである。確認面からの深さは最大で78㎝である。
≪壁･底面≫北東壁は凹凸を持ち開き気味に立ち上がる。南西壁は幾分フラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。
≪覆土･混入物≫４層に分層した。１層は窪みに落ち込んだ自然堆積であり、２･３層は地山土の混入状況より一連の人為堆積と判断する。４層は開口状態時における自然流入土である可能性が高い。
≪出土遺物≫覆土より縄文土器片４点が出土した。小片であるが、時期の特定が可能なものは縄文時代後期の所産である。
≪時期･所見≫覆土からの遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。

ＳＫ2315土坑(遺構第70図、遺物第100図216)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＲ70･71区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面でＳＫ2316土坑と共に確認した。
≪重複≫ＳＫ2316と重複し、本遺構の方が旧い。
≪形態･規模≫西側は部分的に倒木により撹乱を受けており、東側はＳＫ2316に壊される。残存部から平面は楕円形と推定され、長軸1.98m、短軸は推定で1.38mである。確認面からの深さは最大で36㎝である。
≪壁･底面≫壁は残存していない部分が多いが、残存部はなだらかに開いて立ち上がる。底面は西端部にピット状の落ち込みがあり、その他はほぼ平坦である。
≪覆土･混入物≫黒褐色土の単一層である。地山土が混入し、人為堆積と判断する。
≪出土遺物≫覆土より縄文土器の底部片１点と剥片がそれぞれ１点出土した。土器を第100図216に図示した。底部片のため詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期と推定する。
≪時期･所見≫時期の明確な遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、周囲に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推測できる。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2316土坑(遺構第70図、遺物第100図217･218、第114図Ｓ80)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＱ･ＫＲ70･71区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面でＳＫ2315土坑と共に確認した。
≪重複≫ＳＫ2315と重複し、本遺構の方が新しい。
≪形態･規模≫平面不整形で、長軸2.22m、短軸1.66m、確認面からの深さは最大で24㎝である。
≪壁･底面≫壁は外に開きながら緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫２層に分けられ、１層には礫の混入が見られる。どちらも地山土が混入することから一連の人為堆積と判断する。
≪出土遺物≫覆土より縄文土器片53点、石器10点が出土した。縄文土器はいずれも小片で時期の定かな遺物は少ない。石器の内訳は石錐１点、剥片６点、ＲＦ１点、ＵＦ２点である。土器片２点と石器１点を図示した。
≪時期･所見≫時期の明確な遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、周囲に位置する

遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推測できる。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2323土坑(遺構第69図、遺物第100図219･220、図版51)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＰ･ＫＱ71･72区に位置する。北端斜面上端部の地山漸移層(②Ⅸ層)上面で、明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫ほぼ平面円形で、長軸1.22m、短軸1.16m、確認面からの深さは最大で31㎝である。

≪壁･底面≫壁はわずかに開き気味に立ち上がり、底面は鍋底状である。

≪覆土･混入物≫５層に分層した。断面はいわゆるレンズ状に堆積し、自然に流入･堆積したものと思われる。

≪出土遺物≫覆土より縄文土器片29点とＵＦ１点が出土した。土器は時期の定かなものはすべて縄文時代後期初頭で、２点を図示した。そのうち220は同一個体片が10点出土している。

≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。性格は不明である。

ＳＫ2327土坑(遺構第69図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＭ68区に位置する。断面に落ち込みがあるのを確認し、遺跡範囲を拡張して明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整形を呈し、長軸1.10m、短軸0.93m、確認面からの深さは最大で64㎝である。

≪壁･底面≫壁はやや垂直気味に立ち上がり、底面は北西から南東にかけて傾斜する。

≪覆土･混入物≫４層に分層した。１層は窪みに落ち込んだ新しい土であろうが、他は人為堆積の可能性が高い。

≪出土遺物≫遺物は覆土よりＵＦが１点出土したのみである。

≪時期･所見≫本遺構２層に明確なテフラの堆積があり、テフラ検出分析を委託したところ、十和田中掫テフラ(To-Cu:約5,500年前)とそれ以前に噴出したテフラに由来する可能性が高いという結果が提出された。本遺構が位置する遺跡範囲拡張部の面は、水田造成の際の削平を免れたと捉えてもよい堆積状況であり、縄文時代前期からの堆積層が残存していないわけではない。よって、テフラ分析の結果を重視すれば、縄文時代前期を上限とすると言える。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2334土坑(遺構第70図、遺物第100図221)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＤ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫ほぼ平面円形で、長軸1.32m、短軸1.10m、確認面からの深さは最大で28㎝である。

≪壁･底面≫壁は外に開きながら立ち上がる。段丘礫層上部を掘り込んで構築されているので底面には礫が露出し、比較的凹凸に富む。南西部の底面直上に扁平礫が３個据えられている。出土状況からは段丘礫ではなく、人為的に混入された礫と判断した。

≪覆土･混入物≫４層に分けられるが、地山土の混入状況から、一括の人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫覆土より縄文土器片が33点と石器12点が出土した。縄文土器片は小片で詳細な時期は明瞭ではないが縄文時代後期に比定する。石器の内訳はスクレイパー１点、ＵＦ２点、剥片９点である。

土器１点を図示した。

≪時期･所見≫時期の明確な遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、周囲に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推測される。底面直上より礫が３点出土していることから土坑墓の可能性も指摘されるが現状では特定しがたい。

ＳＫ2339土坑(遺構第71図、遺物第114図Ｓ81)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＳ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫ＳＫ2340土坑より新しく、ＳＱ2325配石遺構より旧い。

≪形態･規模≫平面ほぼ円形で、長軸1.46m、短軸1.39m、確認面からの深さは最大で28㎝である。

≪壁･底面≫壁は外に開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

≪覆土･混入物≫２層に分けられるが、いずれも地山土が混入するため、一括の人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫覆土より縄文土器片２点とＵＦ１点、剥片２点が出土した。土器は２点ともに縄文時代後期初頭の所産である。ＵＦ１点を図示した。

≪時期･所見≫出土した土器片から、縄文時代後期初頭を上限とする。性格は不明である。

ＳＫ2340土坑(遺構第71図、遺物第114図Ｓ82)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＳ73区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫ＳＱ2325配石遺構、ＳＫ2339土坑より旧い。

≪形態･規模≫平面不整形で、長軸1.42m、短軸1.10mである。確認面からの深さは最大で70㎝である。

≪壁･底面≫壁はやや垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。地山土の混入が顕著であり人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫覆土より縄文土器片11点とスクレイパー１点、ＵＦ１点、剥片５点が出土した。縄文土器は小片のため詳細な時期は定かではないが縄文時代後期初頭に比定する。スクレイパー１点を図示した。

≪時期･所見≫ＳＫ2339の時期を後期初頭に比定すると、本遺構はそれ以前に比定される。現状では性格は不明である。

ＳＫ2355土坑(遺構第70図、遺物第100図222)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＴ･ＬＡ70･71区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫ＳＮＲ2615土器埋設炉が近接して位置する。ＳＮＲ2615が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、本遺構と重複していたと推定できる。直接の重複がないため新旧関係は不明である。

≪形態･規模≫平面不整形で、長軸1.31m、短軸1.01m、確認面からの深さは最大で29㎝である。

≪壁･底面≫壁は南側はなだらかに、北側は急傾斜で立ち上がる。底面は北側で深く、南側でテラス状に高い。

≪出土遺物≫覆土より土器が１点出土し、第100図222に図示した。

≪時期･所見≫時期が特定できる遺物が出土していないため時期は不明である。覆土から縄文時代の所産と判断する。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2356土坑(遺構第70図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＣ72区に位置する。ＳＩ2344竪穴住居跡の床面精査中に確認した。

≪重複≫ＳＩ2344と重複する。覆土上面では確認できなかったことから、ＳＩ2344より旧いと考えら

れる。

≪形態･規模≫平面ほぼ円形で、長軸1.12m、短軸1.08mである。中央部から北西寄り28cmの位置に、高さ22cmの礫が立位で検出された。礫の上部には剥離痕が認められる。北西部はＳＩ2344炉の試掘溝により消失する。

≪壁･底面≫南東の壁は下位に段を持ち、外に開きながら立ち上がる。底面は起伏を持ち、約10cmの段差がある。

≪出土遺物≫遺物は出土しなかった。

≪時期･所見≫ＳＩ2344との関係から、縄文時代後期初頭以前と判断する。性格は不明である。

ＳＫ2366土坑(遺構第71図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＣ69区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整楕円形である。長軸1.86m、短軸1.08m、確認面からの深さは最大で20cmである。

≪壁･底面≫壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面は平坦である。

≪覆土･混入物≫暗褐色土を基質とする単一層である。地山土が混入するため人為堆積と判断する。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫時期を特定できる要素がないため詳細な時期は不明である。周囲に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推測される。現状では性格は不明である。

ＳＫ2372土坑(遺構第70図)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＥ66･67区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面不整楕円形で、長軸1.18m、短軸1.04m、確認面からの深さは最大で27cmである。

≪壁･底面≫壁はなだらかに立ち上がる。南側にテラスを持ち、北側は一段低く落ち込む。

≪覆土･混入物≫２層に分層した。１層は黒褐色土を基質とし全体的に地山土が混入し、濁りが顕著である。遺構の北側上面には円礫を検出した。最大幅30cm、最大厚10cmである。

　また礫より８cm下の位置に、焼土塊に挟まれた炭化物塊を確認した。炭化物塊は長軸32cm、短軸22cmの平面楕円形を呈し、厚さは１cm前後である。焼土塊も含めた厚さは３cm前後である。遺構内で火を焚いた痕跡はなく、他からの混入と考えられる。一括の人為堆積であろう。

≪出土遺物≫覆土より縄文土器片１点、石核１点、剥片１点が出土した。土器は小片のため詳細な時期は定かではないが、縄文時代後期と推定する。

≪時期･所見≫出土した遺物から縄文時代後期を上限とする。現状では性格は不明である。

ＳＫ2373土坑(遺構第71図、遺物第100図223･224、第114図Ｓ83)

≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＮ･ＬＯ73区に位置する。盛土層(②Ⅳ層)下の地山漸移層(②Ⅸ層)上面で確認した。

≪重複≫ＳＩ2370竪穴住居跡を掘り込み、本遺構が新しい。

≪形態･規模≫掘り込みは長軸2.30m、短軸1.52mの平面不整楕円形である。確認面からの深さは最大30cmである。

≪壁･底面≫壁は比較的急傾斜に立ち上がり、底面はほぼ平坦だが北側に低く傾斜する。
≪覆土･混入物≫遺物を比較的多量に含む暗褐色砂質土単一層である。覆土全体に遺物が包含される状況から、一気に埋め戻されたものと想定できる。
≪出土遺物≫縄文時代後期初頭の土器片約30点、石鏃１点、剥片類７点などが出土した。このうち、石鏃は土坑西端側底面直上からの出土である。土器片のうち数点はＳＩ2370ＲＰ１と同一個体である。土器片２点と、石鏃１点を図示した。
≪時期･所見≫出土縄文土器から、縄文時代後期を上限とすると判断する。土坑形状および覆土の特徴から、楕円形平面の大形土坑墓であった可能性も想定し得る。その場合、底面直上から出土した石鏃は副葬品であった可能性があろう。

ＳＫ2400土坑(遺構第74図、図版15)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＣ67区に位置する。ＳＩ2376竪穴住居跡床面で確認した。
≪重複≫ＳＩ2376を掘り込み、本土坑が新しい。
≪形態･規模≫長軸約1.3m、短軸約1.0mの平面楕円形で、床面からの深さは22㎝である。
≪壁･底面≫壁は、南東側は急傾斜に、北西側はなだらかに立ち上がる。床は南東側が深く、北西側はテラス状に高い。
≪覆土･混入物≫４層に分層した。堆積状況から、一連の人為堆積と推定する。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫周囲に位置する遺構の時期から、縄文時代後期初頭に比定する。性格は不明である。

ＳＫ2463土坑(遺構第71図)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＭ66･67区に位置する。地山漸移層(②Ⅸ層)上面で明確なプランを確認した。
≪重複≫ＳＩ2005竪穴住居跡より旧い。
≪形態･規模≫ＳＩ2005に切られるため全体は不明だが、現存部より平面楕円形と推定される。現状で長軸90㎝、短軸50㎝、確認面からの深さは最大12㎝である。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がり、底面は平坦である。
≪覆土･混入物≫地山土を多く含む暗褐色土の単一層であり、人為堆積と推定する。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫遺物が出土しておらず詳細な時期は不明だが、覆土の基質がＳＩ2158竪穴住居跡と類似することからＳＩ2158と同時期の縄文時代前期後葉の可能性が考えられる。

ＳＫ2500土抗(遺構第72図、遺物第100図225、図版32)
≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＩ63･64区に位置する。重機による表土掘削時に礫の集中地点を確認し、遺構が存在することを予測した。黒褐色シルト質土(④Ⅱ層)上面で径約10～40㎝の礫を円形に配置した遺構を検出し、当初は配石遺構とした。その後、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑と認定した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫上面には、径約10～40㎝程度の礫をほぼ円形に全面的に配している。上位掘り込みの平面形は、長軸2.23m、短軸2.05mの円形に近い楕円形である。この掘り込みの中央部やや東側寄り

に小規模な掘り込みを確認した。長軸72㎝、短軸67㎝の掘り込みであり、壁際には立石を巡らし、底面には礫を敷いている。礫は約50個検出され、石質は輝石安山岩･安山岩を主体とし、石英斑岩、閃緑岩がそれぞれ１つずつ混入する。それらは小礫であり、石質に応じての意図的な位置関係は認められない。

≪壁･底面≫上部の掘り込みの壁は比較的緩やかに立ち上がる。下部掘り込みの壁は急傾斜で立ち上がる。上部掘り込みの底面はほぼ平坦である。下部掘り込みの底面も平坦である。

≪覆土･混入物≫覆土は３層に分層した。１層は、旧表土層の黒ボク土を由来とする自然堆積と推測する。２･３層ともにブロック状の地山土の混入が顕著に見られることから、一連の埋め戻しと判断する。

≪出土遺物≫確認面から10点の土器片が出土した。Ⅲb類４点、Ⅳ群６点である。１点を図示した。

≪時期･所見≫出土土器から縄文時代中期末を上限とする。礫の確認状況、掘り込みの形状から配石を伴う土坑墓と判断する。

ＳＫ2501土坑(遺構第71図、図版33)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＪ62･63区に位置する。黒褐色シルト質土(④Ⅱ層)下面で集石を確認し、当初は配石遺構とした。その後、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫掘り込みの平面形は、径1.80ｍ前後の円形である。確認面からの深さは最大で24㎝である。上面には径約20～40㎝の礫５点を配している。検出された礫の石質は輝石安山岩もしくは安山岩である。

≪壁･底面≫北側の壁は急傾斜に立ち上がり、南側の壁はやや緩やかに開きながら立ち上がる。底面は北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。

≪覆土･混入物≫覆土は単一層である。暗褐色シルト質土を主体とするが、黒褐色シルト質土が比較的多量に混入する。地山土がわずかに混入することから、堆積状況は埋め戻しを想定し得るが、判然としない。

≪出土遺物≫縄文時代中期末の土器片５点、後期初頭の土器片13点が出土している。

≪時期･所見≫出土土器から縄文時代後期初頭の所産と推定する。礫の確認状況、掘り込みの形状から土坑墓の可能性も想定し得るが、判然としない。

ＳＫ2503土坑(遺構第72図、図版33)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＧ62区に位置する。黒褐色シルト質土(④Ⅱ層)上面で集石を確認し、遺構が存在することを予測した。これらは７点の礫が弧状に配されていることが判明したため、当初は配石遺構とした。その後、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫掘り込みの平面形は、最大径1.64ｍの隅丸方形に近い円形である。確認面からの深さは最大で13㎝である。上面には径約５～25㎝の礫７点を南西側に弧状に配している。これら以外の礫は確認できなかった。石質は輝石安山岩もしくは安山岩である。

≪壁･底面≫残存する壁は、北側が急傾斜で立ち上がり、南側は比較的緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸があり、北東側から南西側に向かって緩やかに傾斜している。
≪覆土･混入物≫覆土は色調の違いにより、２層に分層した。１層は黒褐色土を、２層は暗褐色土を主体とするがその境界は漸移的である。１層は礫の直下に堆積することから、礫の掘り込み土と推定される。２層は、地山土がブロック状に混入していることから、埋め戻しの可能性が高い。
≪出土遺物≫遺物は出土しなかった。
≪時期･所見≫出土遺物がないため、時期を特定することは困難である。しかし、周辺遺構の分布状況から、縄文時代後期初頭の所産である可能性が高いと考える。礫の確認状況、遺構の形状から配石を伴う土坑墓の可能性を想定し得る。本来は、掘り込みの壁際に礫が円形に配されていたとも想定される。底面直上から出土の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代3830±40BP、暦年較正交点BC2290である。

ＳＫ2504土坑(遺構第73図、図版33)
≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＤ･ＫＥ61･62区に位置する。重機による表土掘削時に礫の集中地点を確認し、遺構が存在することを予測した。黒褐色シルト質土層(④Ⅱ層)上面で径約10～50㎝の礫を円形に配置した遺構を検出し、当初は配石遺構とした。その後、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫掘り込みの平面形は、長軸2.38m、短軸2.28mの隅丸方形に近いややいびつな円形である。確認面からの深さは最大で34㎝である。上面には、径約10～50㎝の礫を円形に配している。礫は約50個検出され、安山岩系を主体とする。他には凝灰岩が６点、珪質頁岩２点、デイサイト１点である。石質に応じた規則的な配置などは現状では認められない。
≪壁･底面≫壁は、北側と東側が急傾斜に立ち上がり、南側と西側は比較的緩やかに立ち上がる。底面は北東側から南西側に緩やかに傾斜し、わずかながら鍋底状を呈する。
≪覆土･混入物≫覆土は３層に分層した。１層は、旧表土層に由来する礫の裏込土と推測する。２･３層ともに暗褐色土を主体とするが、上位層(２層)が黒味が強く、その境界は漸移的である。両層ともにブロック状の地山土の混入が顕著に見られることから、一連の埋め戻しと判断する。
≪出土遺物≫縄文時代前期の土器片１点、後期初頭の土器片２点が出土している。
≪時期･所見≫出土遺物が少ないため、時期を特定することは難しい。しかし、周辺遺構の状況から縄文時代後期初頭の所産である可能性が高い。礫の確認状況、遺構の形状から配石を伴う土坑墓と判断する。覆土３層から出土の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代3810±40BP、暦年較正交点BC2270、2260、2220である。

ＳＫ2505土坑(遺構第73図、図版33)
≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＧ62区に位置する。黒褐色シルト質土層(④Ⅱ層)上面で礫の集中地点を確認し、遺構が存在することを予測した。当初は配石遺構としたが、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫掘り込みの平面形は、長軸86㎝、短軸69㎝の楕円形である。確認面からの深さは最大

で28㎝である。上面には、径約10～35㎝の礫９点を中心部に密集させて配している。検出された礫は、安山岩系を主体とし、凝灰岩が２点混ざる。石質に応じての有意な配置は現状では認められない。

≪壁･底面≫壁は比較的急傾斜で立ち上がる。底面は鍋底状を呈する。

≪覆土･混入物≫単一層である。暗褐色土を基質とするが、地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と考えられる。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫出土遺物がないため、時期を特定することは困難である。しかし、周辺遺構の分布状況から縄文時代後期初頭の所産である可能性がある。礫の確認状況、遺構の形状から配石を伴う土坑墓の可能性を想定し得る。覆土から出土した炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代4010±40BP、暦年較正交点BC2550、2540、2490である。

ＳＫ2513土坑(遺構第73図、図版33)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＤ･ＫＥ60･61区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)上面で半円状に並ぶ礫群を確認した。当初は配石遺構としたが、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面円形で直径約1.89ｍである。確認面からの深さは最大で16㎝である。プラン内の半円状に並ぶ礫の総数は10点である。礫は長径７～21㎝の大きさである。周囲には他に２点の礫があり、遺構内の礫は計12点である。１点が凝灰岩で、他は輝石安山岩である。半円状配石部はプランの北半に位置し、長径88㎝、短径34㎝である。

≪壁･底面≫壁は開き気味に立ち上がる。底面は起伏が激しく、北から南へ傾斜している。

≪覆土･混入物≫黒褐色土の単一層である。全体に撹乱が多い。人為堆積と思われる。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫確認面から、時期は縄文期と考えられる。

半円状配石部の中心から南東29㎝の位置に、長径19㎝の焼土粒混入面がある。半円状配石部に付随する可能性が高いが、相互の関係は判然としない。半円状配石部は屋内施設に伴う円形石囲炉の半損部分、または半円を意識した石組炉とも考えられるが、周囲のプランの規模と対比すれば、屋外炉的施設である可能性が高いと思われる。

ＳＫ2517土坑(遺構第73図、図版31)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＧ63区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)で確認した。当初は配石遺構としたが、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫平面楕円形を呈し、長軸66㎝、短軸45㎝である。確認面からの深さは最大で38㎝である。楕円形プラン内全面に径10㎝未満の小礫が敷き詰められている。約30個の礫が覆土上面に配され、意図的な配置であることは疑いない。覆土内部や坑底部に礫は確認されなかった。検出された礫は安山岩系を主体とし、凝灰岩、流紋岩、砂岩が混入する。石質による有意な配置は現状では認められない。

≪壁･底面≫東南壁は緩やかに開きながら立ち上がり、北西壁はやや急に立ち上がる。底面は中央部

に窪みを持ち、全体に擂鉢状気味である。
≪覆土･混入物≫黒褐色土の単一層である。地山塊の混入もあり、人為的な埋め戻し土と思われる。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫確認面から、時期は縄文期と考えられる。近傍に配石墓の可能性が高い遺構が複数認められることから、小規模な墓坑として使用された可能性を推測する。

ＳＫ2524土坑(遺構第73図)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＤ61区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)で礫群を確認した。当初は配石遺構としたが、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫黒褐色土のプランはほぼ円形を呈し、長軸1.11m、短軸1.07mである。確認面からの深さは最大で10cmである。プランに係る礫の総数は12点であり、長径８～28cmの大きさである。西端にある扁平礫が一番大きい。礫配置は分散的で、明確な規則性は判読できない。
≪壁･底面≫周囲のプランの壁は開き気味に立ち上がる。底面は全体に波打ち、北から南へ、また東から西へかけてそれぞれ緩やかに傾斜している。
≪覆土･混入物≫④Ⅱ層由来の黒褐色土の単一層である。人為堆積と思われる。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫時期は周囲に位置する遺構と同時期と推定し、縄文時代後期初頭に比定する。本土坑では礫群下部の掘り込みが明確に認められるが、深さが浅いことから、配石墓的性格の可能性は低いと判断する。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2525土坑(遺構第74図、図版33)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＦ･ＫＥ62･63区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)上面でプランと礫群を確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫ＫＦ62区の北端から遺構範囲外の面にかけて、長軸2.10m、短軸2.02mの暗褐色土の円形プランがあり、内部に大小44個の礫が配置されている。確認面からの深さは最大で18cmである。礫は比較的扁平なものが多く用いられている。礫群は直径約２mの円形プラン内にほぼ収まり、外側に長径約20～40cmの礫が置かれ、内側に長径約５～25cmの礫が置かれる。
≪壁･底面≫周囲のプランの壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は全体に平坦である。
≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。地山粒が覆土全体に混じっており、人為堆積の痕跡を伺わせる。また、根による撹乱が著しい。
≪出土遺物≫縄文土器片４点、石器１点が出土した。土器片は小片であるが縄文時代後期初頭に比定する。
≪時期･所見≫出土遺物を重視すれば、縄文時代後期の遺構と推定される。前述の状況からは、外側に大きめの礫、内側に比較的小さめの礫を配置したことを読みとっても差し支えないであろう。また、外側の大礫は横向きに配され、内側の小礫は斜立させられたものが多く、内外における礫配置の規則性を示している。しかし、礫の中には後の時代に流入した礫も存在すると思われ、特に覆土に入り込まない内部の小礫はその可能性が高い。現状からは、大礫によって台形に近い方形を外枠としてかた

どり、その中に小礫を敷き詰めた形態をとる配石遺構と見なせる。ただ、北側は急傾斜する崖であり、崩落した大礫があることおよび掘り込みが円形プランをなすことを念頭に置くと、本来の配石外枠は円形を意識して大礫が配されていた可能性も残る。

ＳＫ2527土坑(遺構第74図)

≪位置･確認状況≫北東端緩斜面ＫＦ63区に位置する。地山漸移層(④Ⅲ層)上面で確認した。当初は配石遺構としたが、本遺構に伴う掘り込みを確認したため、配石を伴う土坑であることを認めた。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫北側は急斜面になっており、暗褐色土のプランも傾斜する間際で切れており、径約1.9ｍの半円の形状をなす。礫群は1.20ｍの規模で弧状をなす。礫の総数は11点で、すべて暗褐色土のプラン内にある。礫は長径20㎝前後のものが３点、他は10～15㎝のものである。急斜面上端部にあるため、動いた礫や崩落した礫が多いと推定できる。

≪壁･底面≫周囲のプランの壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は全体に平坦であるが、東側に低く傾斜を持つ。

≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。人為堆積と思われる。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫確認面から、時期は縄文期と考えられる。残存状況は悪いが、南側に楕円形に礫が配されたＳＱ2526配石遺構が近接していることから、本来の形態は楕円形を意識して礫が配されていた可能性もある。現状からは、性格は不明である。

ＳＫ2602土坑(遺構第74図)

≪位置･確認状況≫北側段丘崖ＫＴ73･74区に位置する。地山漸移層(③Ⅵ層)上面で明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫不整な楕円形で、長軸1.50ｍ、短軸1.16ｍ、確認面からの深さは最大で24㎝である。

≪壁･底面≫壁はわずかに開き気味に立ち上がり、底面は礫層上部を掘り込んでいるため、若干波打ち、斜面西側に傾斜する。

≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。堆積要因は現状では特定しがたいが、礫が混入することから人為による一括の埋め戻し土である可能性が高い。

≪出土遺物≫縄文時代後期初頭と考えられる深鉢形土器の底部１点、土器片５点の計６点が出土した。

≪時期･所見≫出土遺物から縄文時代後期初頭を上限とする。覆土上面には礫が散らばっており、中には明らかに立てられているものもある。ただし土坑墓と定義づけるには条件が不足しており、性格の特定は難しい。

ＳＫ2603土坑(遺構第74図)

≪位置･確認状況≫北側段丘崖ＫＴ73区に位置する。地山漸移層(③Ⅵ層)上面で明瞭なプランを確認した。

≪重複≫重複する遺構はない。

≪形態･規模≫ほぼ平面楕円形で、長軸1.50ｍ、短軸0.98ｍ、確認面からの深さは最大で21㎝である。

≪壁･底面≫壁は開き気味に立ち上がり、底面は礫層上部を掘り込んでいるため、比較的大きく波打

ち、斜面西側に傾斜する。
≪覆土･混入物≫暗褐色土の単一層である。礫が混入することから人為による一括の埋め戻し土である可能性が高い。
≪出土遺物≫同一個体と推定できる土器片３点が出土した。
≪時期･所見≫規模･形態･出土遺物から、ＳＫ2602土坑と同時期に構築された類似する土坑であると思われるが、性格の特定は難しい。

⑧ 竪穴状遺構

ＳＫＩ2181竪穴状遺構(遺構第75図)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＩ･ＫＪ74･75区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で不整な円形プランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫不整な楕円形を呈し、長軸約3.6m、短軸約3.3m、確認面からの深さは約30㎝である。
≪壁･底面≫壁は開いて立ち上がる。底面は段丘礫が露出し、凹凸がある。
≪覆土･混入物≫３層に分層した。堆積状況から自然堆積と判断する。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫時期は周辺に位置する遺構と同時期とすれば、縄文時代後期初頭と推定される。炉や柱穴等を確認できなかったため、ここでは竪穴状遺構として報告する。現状では詳細な性格を付与することはできない。
ＳＫＩ2330竪穴状遺構(遺構第76図、遺物第100図226～228)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＳ71･72区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で不整な円形プランを確認した。
≪重複≫近接してＳＮＲ2614土器埋設炉が位置する。ＳＮＲ2614が竪穴住居に伴う炉と仮定すると、本遺構と重複していたと推定できる。直接の重複がないため、新旧関係は不明である。
≪形態･規模≫不整な円形を呈し、長軸2.58m、短軸2.19m、確認面からの深さは24～28㎝である。
≪壁･底面≫壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、西側に若干起伏を持つ。
≪覆土･混入物≫３層に分層した。覆土の様相から人為堆積と推定する。
≪出土遺物≫覆土よりⅣ群に比定できる土器片が約10点出土し、３点を図示した。
≪時期･所見≫時期は出土遺物および、周辺に位置する遺構と同時期と推測し、縄文時代後期初頭に比定する。炉や柱穴等を確認できなかったため、竪穴状遺構とする。現状では詳細な性格を付与することはできない。
ＳＫＩ2357竪穴状遺構(遺構第34図)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＫＱ･ＫＲ71･72に位置する。確認時はＳＩ2303竪穴住居跡と一連のものとしたが、断面観察の結果、切り合いが認められたため、ＳＩ2303に重複する別遺構と判断し、竪穴状遺構とした。
≪重複≫ＳＩ2303より旧い。
≪形態･規模≫ＳＩ2303と重複するため全体は不明であるが、残存部分から、平面形は長軸3.14m、短

軸2.60ｍの不整楕円形と推定する。
≪壁･底面≫壁、底面ともに削平により消失する。
≪覆土･混入物≫削平により残存していない。５層は竪穴掘削時の残土、４層は柱穴(Ｐ１)覆土である。
≪出土遺物≫ＳＩ2303と一括で取り上げたため、本遺構に伴う遺物を抽出することは不可能であった。
≪時期･性格≫本遺構に伴う遺物が明確でないことから、詳細な時期は不明である。ＳＩ2303より旧いことから、縄文時代後期初頭以前と判断する。炉は検出されていないが、柱穴が１基検出されており、本遺構は削平を受けた竪穴住居跡である可能性が高いと判断する。

ＳＫＩ2388竪穴状遺構(遺構第76図)
≪位置･確認状況≫北部段丘面ＬＨ･ＬＩ68区に位置する。旧水田耕作土層(②Ⅱ層)直下、地山漸移層(②Ⅸ層)上面で不整な円形プランを確認した。
≪重複≫重複する遺構はない。
≪形態･規模≫不整な楕円形を呈し、長軸約4.1ｍ、短軸約3.8ｍである。北端には柱穴様ピット(Ｐ１)が位置する。
≪壁･底面≫壁は開き気味に立ち上がり、底面は凹凸を持つ。
≪覆土･混入物≫３層に分層した。１･２層はＰ１の覆土である。３層は地山土が多く含まれ、底面の凹凸が顕著であることから、竪穴掘削時の残土と推定する。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫時期は周辺に位置する遺構と同時期と推測し、縄文時代後期初頭に比定する。形状および柱穴(Ｐ１)が検出されたことから類推し、本遺構は削平を受けた竪穴住居跡である可能性が高いと考えられる。しかし炉を確認できなかったため、ここでは竪穴状遺構として報告する。

⑨ 柱穴様ピット(遺物第100図229～232　第114図Ｓ84～87)
詳細な時期が特定できる柱穴様ピットは少ないが、時期が明確な竪穴住居跡遺構の配置状況や覆土の様相から、縄文時代に帰属すると推定される柱穴様ピットを174基検出した。すべて調査区北部段丘面に位置する。竪穴住居に伴うと推定される土器埋設炉に近接する例が多く、いずれも竪穴住居に伴う柱穴である可能性が高い。平面形は円形や不整円形などで、方形を呈するものはない。確認面からの深さは30～60㎝前後が多く、60～80㎝と深いものも一定量存在する。遺物が出土したピットもあるが、多くが小片で覆土からの出土であることから、覆土に混入したものと推定する。ＳＫＰ2061、2138、2148、2437などでは覆土中位で拳大の円礫が10点前後まとまって出土した。人為的に入れられた可能性が考えられる。

第２表に一覧を掲載した。凡例は以下の通りで、第３表も以下に従う。

・辺長は最も径の長い部分を計測した。(　)が付されているものは残存長である。

・底面標高は最も深い部分を計測した。

・切り合いの記号「＜」「＞」について、「Ａ＞Ｂ」はＡはＢより新しい、「Ａ＜Ｂ」はＡはＢより旧い、を示す。

第２表　縄文時代柱穴様ピット一覧（１）

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	平面図	土層	切り合い
SI1105 P1	LT58	不整円	0.35	126.99	第12図	第12図	
SI1105 P2	LS58	楕円	0.28	126.97	第12図	第12図	
SI1105 P3	LS58	楕円	0.67	126.90	第12図	第12図	
SI1105 P4	LT58	不整円	0.52	126.82	第12図	第12図	
SI1105 P5	LT58	円	0.21	126.93	第12図	第12図	
SI2158 P1	LH72	円	0.31	130.68	第13図	第13図	
SI2158 P2	LH72	円	0.27	130.73	第13図	第13図	
SI2158 P3	LH71	円	0.40	130.61	第13図	第13図	
SI2158 P4	LH71	不整円	0.57	130.23	第13図	第13図	
SI2158 P5	LH 71･72	楕円	0.56	130.68	第13図	第13図	
SI2158 P6	LH71	不整円	0.43	130.37	第13図	第13図	
SI2005 P1	LM67	楕円	0.35	130.00	第15図	第18図	
SI2005 P2	LM67	不整円	(0.37)	129.92	第15図	第18図	＜SI2005 炉B
SI2005 P3	LL67	円	0.24	130.12	第15図	第18図	
SI2005 P4	LL66	楕円	0.34	120.98	第15図	－	＜SK2099
SI2005 P5	LM66	円	0.28	130.47	第15図	－	
SI2005 P6	LM66	不整円	0.35	130.27	第15図	10YR2/3	
SI2005 P7	LM67	不整円	0.35	130.36	第15図	第16図	
SI2005 P8	LM67	円	0.34	130.39	第15図	－	
SI2005 P9	LM67	円	0.17	130.40	第15図	第18図	＞SI2005 P10
SI2005 P10	LM67	円	(0.34)	130.35	第15図	第18図	＜SI2005 P9
SI2007 P1	LP69	不整楕円	(0.62)	130.28	第20図	第20図	
SI2007 P2	LP69	不整円	0.73	130.19	第20図	10YR3/4	
SI2007 P3	LO69	不整	0.11	130.26	第20図	10YR3/4	
SI2007 P4	LO 68･69	不整楕円	0.50	130.31	第20図	第20図	
SI2007 P5	LP･LO 68･69	不整楕円	0.12	130.18	第20図	10YR3/4	
SI2017 P1	LN69	不整円	0.55	130.52	第21図	第22図	＞SI2017 P9
SI2017 P2	LN69	楕円	0.42	130.50	第21図	第22図	＞SI2017 P10
SI2017 P3	LN69	不整円形	0.41	130.51	第21図	10YR2/3	＞SI2017 P11
SI2017 P4	LN68	不整円	0.52	130.12	第21図	第22図	
SI2017 P5	LO 68･69	不整円	0.54	130.32	第21図	第22図	
SI2017 P6	LO69	不整円	0.30	130.38	第21図	第22図	＞SI2017 P12
SI2017 P7	LO69	不整円	(0.56)	130.23	第21図	第22図	
SI2017 P8	LO69	不整円	0.55	130.40	第21図	第22図	
SI2017 P9	LN69	楕円	(0.60)	130.20	第21図	第22図	＜SI2017 P1
SI2017 P10	LN69	不整円	(0.53)	130.27	第21図	第22図	＜SI2017 P2
SI2017 P11	LN69	不整円	(0.55)	130.08	第21図	第22図	＜SI2017 P3
SI2017 P12	LO69	不整楕円	(0.42)	130.20	第21図	第22図	＜SI2017 P6
SI2019 P1	LN68	円	0.42	130.37	第23図	第24図	＞SI2019 P7
SI2019 P2	LM68	不整楕円	(0.19)	130.50	第23図	第24図	＞SI2019 P8
SI2019 P3	LM67	不整円	0.77	130.27	第23図	第24図	
SI2019 P4	LN67	不整円	0.54	130.33	第23図	第24図	
SI2019 P5	LN67	不整楕円	0.68	130.41	第23図	第24図	
SI2019 P6	LN68	不整楕円	0.80	130.31	第23図	－	＞SI2019 P12
SI2019 P7	LN68	不整楕円	(0.57)	130.53	第23図	第24図	＜SI2019 P1
SI2019 P8	LM68	楕円	0.44	130.46	第23図	第24図	＜SI2019 P2
SI2019 P9	LM68	円	0.48	130.20	第23図	第24図	
SI2019 P10	LM67	不整円	0.68	130.43	第23図	第24図	
SI2019 P11	LN67	不整円	0.83	130.21	第23図	第24図	
SI2019 P12	LN68	不整円	(0.57)	130.26	第23図	－	＜SI2019 P6
SI2019 P13	LM67	不整円	0.48	130.45	第23図	第24図	
SI2019 P14	LM67	不整円	0.60	130.71	第23図	第24図	
SI2025 P1	LH 66･67	不整円	0.37	130.60	第25図	10YR2/3	
SI2025 P2	LH66	不整楕円	0.54	130.43	第25図	第26図	
SI2025 P3	LI66	不整円	0.40	130.19	第25図	第26図	
SI2025 P4	LH66	円	(0.34)	130.38	第25図	第26図	＜SKP2130
SI2025 P5	LH67	円	0.25	130.54	第25図	第26図	＞SI2025 SR01
SI2025 P6	LH 66･67	不整円	0.45	130.50	第25図	第26図	
SI2028 P1	LO68	不整楕円	0.73	130.25	第19図	10YR3/4	
SI2028 P2	LO68	不整円	0.35	130.45	第19図	－	
SI2028 P3	LO68	不整円	(0.31)	130.37	第19図	第19図	
SI2036 P1	LI66	不整円	0.42	130.28	第27図	第27図	
SI2036 P2	LI66	不整円	0.45	130.34	第27図	第27図	
SI2036 P3	LI65	不整楕円	0.55	130.35	第27図	第27図	
SI2036 P4	LI･LJ 66	円	0.39	130.32	第27図	第27図	
SI2036 P5	LI66	楕円	0.46	130.33	第27図	－	
SI2042 P1	LM66	円	0.32	130.25	第15図	第19図	
SI2042 P2	LM66	不整円	0.35	130.19	第15図	第19図	
SI2042 P3	LL66	不整楕円	(0.90)	130.26	第15図	第16図	＜SKP2067
SI2228 P1	LE 66･67	円	0.33	130.62	第28図	第28図	＞SI2228 P3
SI2228 P2	LE66	不整楕円	0.51	130.39	第28図	第28図	
SI2228 P3	LE66	円	(0.39)	130.34	第28図	第28図	＜SI2228 P1
SI2228 P4	LE66	不整円	0.35	130.73	第28図	第28図	
SI2228 P5	LF66	不整円	0.44	130.25	第28図	第28図	
SI2338 P1	LB73	楕円	0.55	131.09	第31図	第31図	
SI2338 P2	LB72	円	0.50	131.24	第31図	第31図	
SI2344 P1	LC73	不整円	0.38	131.22	第33図	10YR3/3	
SI2344 P2	LC72	不整円	0.37	130.76	第33図	10YR3/4	
SI2344 P3	LD72	不整円	0.42	130.97	第33図	10YR2/3	
SI2344 P4	LD72	不整円形	0.48	131.04	第33図	10YR2/3	

第２表　縄文時代柱穴様ピット一覧(２)

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	平面図	土層	切り合い
SI2344 P5	LD73	不整円	0.41	130.77	第33図	10YR3/3	
SI2344 P6	LC･LD 73	楕円	0.53	131.11	第33図	10YR3/4	
SI2344 P7	LD73	円	0.36	130.83	第33図	第33図	
SI2376 P1	LB68	楕円	0.25	130.98	第37図	10YR2/1	
SI2376 P2	LB67	不整円	0.25	130.79	第37図	第37図	
SI2376 P3	LB67	楕円	0.50	130.64	第37図	第37図	
SI2376 P4	LC67	円	0.21	130.87	第37図	10YR2/2	
SI2376 P5	LC68	不整円	0.32	130.75	第37図	第37図	
SI2376 P6	LC68	不整楕円	0.27	130.79	第37図	第37図	
SI2376 P7	LC67	不整円	0.22	130.60	第37図	10YR3/3	
SI2381 P1	LG66	不整楕円	(0.59)	130.71	第38図	第38図	＜SI2381 P2
SI2381 P2	LG66	楕円	0.83	120.18	第38図	第38図	＞SI2381 P1
SI2381 P3	LG 66･67	楕円	0.58	130.60	第38図	第38図	
SI2381 P4	LF･LG 67	不整円	0.40	130.28	第38図	第38図	
SI2381 P5	LF66	楕円	0.32	130.24	第38図	第38図	
SI2381 P6	LF66	不整円	0.63	130.55	第38図	第38図	
SI2506 P1	KI62	楕円	0.23	132.10	第43図	－	
SI2506 P2	KH62	楕円	0.17	132.19	第43図	－	
SI2507 P1	KG61	円	0.35	131.23	第44図	第44図	
SI2507 P2	KG60	円	0.47	130.81	第44図	第44図	
SI2507 P3	KG60	円	0.23	130.72	第44図	10YR2/3	
SKP2054	LK67	不整	0.95	130.11	第15図	10YR3/3	
SKP2055	LK67	不整円	0.65	130.16	第15図	第16図	
SKP2056	LK67	楕円	0.50	130.47	第41図	第42図	
SKP2057	LK66	不整楕円	0.65	130.52	第41図	10YR2/2 ～3/4	
SKP2058	LK66	楕円	0.45	130.28	第15図	第17図	
SKP2059	LL66	円	0.35	130.27	第15図	第17図	
SKP2060	LL66	楕円	0.39	130.55	第15図	第17図	
SKP2061	LL67	円	0.38	130.05	第15図	第17図	
SKP2062	LK67	楕円	0.58	130.54	第15図	第17図	
SKP2063	LL66	楕円	0.41	130.36	第15図	第17図	
SKP2067	LL66	不整楕円	0.91	130.26	第15図	第17図	＞SI2042 P3
SKP2068	LJ 66･67	楕円	0.34	130.58	第41図	10YR3/3	
SKP2069	LJ66	楕円	0.34	130.24	第41図	10YR2/3	
SKP2070	LJ 66･67	不整円	0.34	130.32	第41図	第42図	
SKP2073	LJ66	不整円形	0.47	130.36	第41図	10YR2/2 ～3/3	
SKP2076	LJ66	楕円	0.50	130.48	第41図	第42図	
SKP2077	LJ66	不整楕円	0.57	130.40	第41図	第42図	
SKP2078	LK66	不整円	0.50	130.50	第41図	第42図	＞SKP2470
SKP2079	LK66	不整楕円	0.42	130.38	第41図	10YR2/3	
SKP2080	LK66	不整楕円	0.58	130.30	第41図	10YR4/3	
SKP2081	LK66	不整楕円	0.70	130.44	第41図	第42図	
SKP2084	LJ66	不整楕円	0.60	130.54	第41図	10YR2/3	
SKP2085	LK65	不整円	0.75	130.30	第41図	10YR3/4	
SKP2098	LL66	不整楕円	0.72	130.04	第15図	第17図	
SKP2107	LP70	不整円	0.50	130.22	第29図	10YR4/4	
SKP2108	LP70	不整楕円	0.60	130.25	第29図	10YR3/4 ～4/4	
SKP2111	LP 70･71	円	0.62	130.06	第29図	第29図	
SKP2112	LI･LJ 67	不整楕円	0.53	130.21	第41図	10YR2/3	
SKP2113	LI･LJ 67	不整楕円	0.45	130.41	第41図	第42図	
SKP2114	LP 70･71	不整円	0.40	130.17	第29図	10YR2/2	
SKP2115	LP 70･71	不整円	0.54	130.07	第29図	10YR2/3	
SKP2119	LF64	不整円	0.45	130.37	第4図	－	
SKP2120	LG65	不整円形	0.50	130.34	第45図	第45図	
SKP2121	LH･LG 64	不整円	0.50	130.38	第45図	第45図	
SKP2122	LG65	楕円	0.57	130.36	第45図	10YR2/3	
SKP2123	LH 65･66	不整円形	0.27	130.42	第45図	第45図	
SKP2124	LH 65･66	不整楕円	0.39	130.46	第45図	10YR3/2	
SKP2125	LH 64･65	不整円	0.50	130.25	第45図	第45図	
SKP2130	LH66	不整楕円	0.71	130.58	第45図	10YR2/3	＞SI2025P4
SKP2135	LG64	不整楕円	0.40	130.45	第45図	10YR2/2	
SKP2136	LF 64･65	不整円	0.54	130.51	第4図	－	
SKP2137	LH65	不整楕円	0.50	130.23	第45図	第45図	＜SKP2457
SKP2138	LH65	不整円	0.78	130.39	第45図	第45図	
SKP2145	LK66	円	0.35	130.07	第15図	第17図	＜SI2475炉
SKP2148	LH66	不整円	0.45	130.38	第45図	第46図	
SKP2149	LG72	円	0.35	130.94	第47図	10YR3/4	
SKP2150	LF72	不整楕円	0.80	130.84	第47図	10YR3/3 ～4/4	
SKP2151	LF72	不整円	0.10	130.85	第47図	第48図	
SKP2154	LP70	楕円	0.48	130.38	第29図	－	
SKP2155	LP70	不整楕円	0.43	130.34	第29図	－	
SKP2161	LK73	不整円形	0.51	130.70	第39図	第40図	
SKP2162	LK･LJ 73	楕円	0.55	130.53	第39図	第40図	
SKP2163	LK72	不整円	0.77	130.72	第49図	第49図	
SKP2164	LK72	不整円	0.55	130.65	第49図	第49図	
SKP2165	LK･LL 72	不整円	0.76	130.55	第49図	第49図	
SKP2166	LK73	不整円	0.45	130.45	第39図	第40図	
SKP2174	LL66	不整円	0.35	130.43	第41図	第17図	＞SI2001炉
SKP2187	LP70	不整楕円	0.41	130.02	第29図	10YR4/3	＜SKP2458 SI2134-a炉A
SKP2189	LJ66	不整円	0.58	130.47	第41図	10YR3/3	
SKP2196	LE74	不整楕円	0.47	130.98	第55図	第56図	
SKP2197	LE74	不整円	0.32	131.11	第55図	第56図	
SKP2198	LD74	楕円	0.92	131.14	第55図	第56図	
SKP2199	LD74	楕円	0.51	131.21	第55図	第56図	
SKP2200	LD74	不整楕円	0.50	131.22	第55図	第56図	
SKP2203	LH74	不整円	0.67	130.62	第51図	第51図	
SKP2205	LG74	不整楕円	0.73	130.94	第51図	10YR3/3	
SKP2206	LG73	円	0.35	130.84	第51図	10YR3/3	
SKP2207	LG73	不整円	0.55	130.78	第51図	第51図	＞SKP2244
SKP2208	LG 73･74	楕円	0.70	130.74	第51図	第51図	
SKP2209	LG 73･74	不整楕円	0.11	130.75	第51図	第51図	
SKP2210	LF74	不整円	0.11	130.79	第51図	10YR3/3 ～4/3	
SKP2211	LG･LF 74	不整円	0.18	130.70	第51図	第51図	
SKP2212	LG74	不整円	0.60	130.85	第51図	10YR4/3	

第２表　縄文時代柱穴様ピット一覧（３）

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	平面図	土層	切り合い
SKP2213	LG74	不整円	0.80	130.74	第51図	10YR3/2～4/3	
SKP2218	LH72	円	0.29	130.71	第13図	－	
SKP2219	LH72	不整円	0.34	130.76	第47図	第48図	
SKP2220	LH72	円	0.35	130.84	第57図	第58図	＞SKP2241
SKP2222	LH72	不整円	0.45	130.74	第47図	第48図	
SKP2223	LH72･73	不整円	0.83	130.88	第47図	10YR3/3	
SKP2224	LH72･73	不整円	0.48	130.79	第57図	第58図	
SKP2226	LH73	不整円	0.47	130.77	第57図	第58図	＞SKP2236
SKP2229	LG･LH72･73	楕円	0.88	130.64	第47図	10YR3/3～4/3	
SKP2230	LG73	不整円	0.55	130.58	第47図	第48図	
SKP2231	LG72	不整円	0.51	130.75	第47図	第48図	
SKP2232	LG72	円	0.49	130.58	第47図	第48図	
SKP2233	LG72	不整楕円	0.76	130.92	第47図	第48図	
SKP2234	LG72	不整円	0.35	130.76	第47図	第48図	
SKP2235	LJ74	不整	0.85	130.85	第39図	10YR4/3	
SKP2236	LH73	不整円	(0.56)	130.79	第57図	第58図	＜SKP2226
SKP2237	LJ･LK74	不整円	0.11	130.44	第49図	－	
SKP2238	LJ73	不整円	0.49	130.72	第39図	10YR3/4	
SKP2241	LH72	不整円	(0.39)	130.75	第47図	第48図	＜SKP2220
SKP2243	LG72	楕円	0.73	130.88	第47図	10YR3/4	
SKP2244	LG73	楕円	(0.78)	130.68	第51図	第51図	＜SKP2207
SKP2246	LG73	不整円	0.47	130.93	第47図	10YR3/4	
SKP2247	LG73	不整円	0.35	130.53	第47図	10YR2/3	
SKP2249	LF72	不整円	0.62	130.83	第47図	第48図	
SKP2264	LD68	楕円	0.42	131.05	第53図	第54図	
SKP2265	LE70	不整円	0.53	130.84	第60図	第60図	
SKP2268	LD70	不整楕円	0.46	130.86	第60図	第60図	＞SKP2454
SKP2270	LD70	円	0.53	131.10	第60図	10YR3/4	
SKP2271	LJ73	円	(0.50)	130.34	第39図	第40図	＜SKP2272 ＞SKP2290
SKP2272	LJ73	円	0.35	130.51	第39図	第40図	＞SKP2271･2290
SKP2273	LJ73	不整円	0.48	130.59	第39図	10YR3/4	
SKP2274	LJ73	楕円	0.52	130.57	第39図	10YR3/2	
SKP2275	LI73	不整楕円	0.57	130.70	第57図	第58図	
SKP2276	LI73	不整円	0.42	130.59	第57図	10YR3/1	
SKP2277	LI73	円	0.43	130.60	第57図	10YR3/4	
SKP2278	LI73	不整楕円	0.65	130.71	第57図	10YR3/4	
SKP2280	LG68	不整円	0.55	130.70	第4図	10YR3/4	
SKP2281	LJ73	不整円	0.48	130.49	第39図	10YR4/3	
SKP2282	LI･LJ72	不整	0.11	130.51	第39図	10YR3/4	
SKP2285	LJ74	不整楕円	0.68	130.64	第39図	10YR4/3	
SKP2286	LI73	楕円	0.70	130.87	第57図	10YR3/4	
SKP2287	LI73	不整楕円	0.77	130.76	第57図	10YR3/4	
SKP2288	LK74	楕円	0.67	130.75	第49図	10YR3/3	
SKP2290	LJ73	不整楕円	(0.59)	130.61	第39図	10YR4/3	＜SKP2271･2272
SKP2291	LH73	不整楕円	0.63	130.58	第57図	10YR4/3	
SKP2292	LI73	不整楕円	0.58	130.71	第57図	10YR3/3	
SKP2293	LI73	不整円	0.50	130.64	第57図	10YR3/4	
SKP2294	LI73	不整楕円	0.63	130.74	第57図	10YR3/4	
SKP2297	LD68	不整円	0.59	130.75	第53図	10YR3/3	
SKP2312	KQ67	円	0.47	131.02	第56図	－	
SKP2313	KT71	楕円	0.48	131.28	第4図	10YR2/2～3/4	
SKP2314	KT･KS71	不整円	0.50	131.03	第4図	10YR3/4～4/4	

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	平面図	土層	切り合い
SKP2364	LD68	不整円	0.38	130.84	第53図	第54図	
SKP2365	LD68	不整円	0.34	130.75	第53図	第54図	
SKP2367	LI73	不整楕円	0.43	130.55	第57図	10YR3/3	＜SNR2611
SKP2368	LC･LD68	不整楕円	0.48	130.91	第53図	－	＞SKP2421
SKP2383	LC69	楕円	0.36	131.06	第52図	10YR2/2～2/3	
SKP2385	LB69	不整円	0.62	130.90	第52図	第52図	
SKP2386	LM74	不整楕円	0.19	130.75	第4図	－	
SKP2395	LK74	円	0.23	130.31	第49図	－	＜SR2101
SKP2397	LA･LB69	不整円形	0.48	130.16	第35図	第35図	
SKP2398	LA69	円	(0.60)	130.80	第35図	第35図	
SKP2399	LB68･69	円	0.45	130.89	第35図	第35図	
SKP2402	LD67	不整円	0.47	130.62	第53図	第54図	
SKP2404	LC68	円	0.35	131.13	第52図	10YR2/2～3/3	
SKP2406	LA69	不整円形	0.22	131.10	第35図	10YR3/4	
SKP2407	LB68	不整円形	0.35	131.15	第35図	10YR4/4	
SKP2408	LD68	楕円	0.49	130.76	第53図	第54図	
SKP2409	LD68	不整円	0.37	130.79	第53図	第54図	
SKP2410	LD67	楕円	0.40	130.77	第53図	10YR2/3	
SKP2412	LA69	不整円	0.22	130.07	第35図	第35図	
SKP2413	LA69	楕円	0.22	131.11	第35図	10YR3/2	
SKP2414	LB69	不整円	0.27	130.87	第35図	第35図	
SKP2415	LD67	不整円	0.25	130.68	第53図	10YR3/2	
SKP2417	LC67	円	0.35	130.81	第53図	第54図	
SKP2418	LE66	不整円	0.30	130.72	第53図	10YR3/2	
SKP2420	LT68	不整円	0.47	130.30	第61図	第61図	
SKP2421	LD68	不整楕円	(0.35)	130.78	第53図	－	＜SKP2368
SKP2424	LA68	円	0.55	131.08	第35図	10YR3/2	
SKP2425	LA68	楕円	0.58	131.02	第35図	10YR3/3	
SKP2426	LA69	楕円	0.89	131.03	第35図	10YR3/2	
SKP2427	LA69	不整楕円	0.57	131.06	第35図	第35図	
SKP2428	LJ68	不整円	0.39	130.25	第61図	第61図	
SKP2429	LB67	円	0.35	130.98	第4図	10YR2/2～3/2	
SKP2435	LC69	不整円	0.45	130.79	第52図	第52図	
SKP2437	LK66	不整楕円	0.75	130.26	第15図	第17図	
SKP2438	LK66	不整円	0.38	130.32	第41図	10YR2/2	
SKP2439	LK66	楕円	0.43	130.49	第41図	10YR2/3	
SKP2440	LK66	不整円	0.42	130.41	第15図	第17図	
SKP2454	LD70	不整楕円	(0.39)	131.09	第60図	第60図	＜SKP2268
SKP2455	LG69	推定円	0.74	130.38	第4図	10YR3/3～4/3	＜SKP2456
SKP2456	LG69	不整円	0.53	130.49	第4図	10YR3/3	＞SKP2455
SKP2457	LP70	円	0.34	130.35	第29図	－	
SKP2458	LP70	円	0.32	130.27	第29図	－	＞SKP2187
SKP2459	LE68	不整円	0.14	130.49	第53図	第54図	＞SKP2459
SKP2462	LA68	円	0.35	130.75	第35図	10YR3/3	
SKP2464	LB69	不整円	(0.50)	130.43	第52図	第52図	＜SNR2371
SKP2465	LJ66	楕円	0.22	130.60	第41図	10YR3/3	
SKP2466	LJ66	不整円	0.20	130.60	第41図	－	
SKP2467	LJ66	不整楕円	0.68	130.41	第41図	－	
SKP2470	LK66	不整楕円	(0.37)	130.41	第41図	第42図	＜SKP2078

(２)遺構外出土遺物

ここでは、遺構外から出土した縄文時代の遺物について記述する。遺構外より出土した遺物は18ℓの遺物収納箱で土器72箱、土製品0.5箱、石器18箱、石製品１箱である。昭和50年代のほ場整備の際に遺跡全体が削平を受けたため、遺構外からの出土遺物は多くない。遺構外でまとまって遺物が出土したのは、削平を免れた北部段丘崖と北東端の緩斜面で、他は少数である。また、平成７年度の範囲確認調査(註１)の際に出土した遺物についても遺構外出土遺物として取り扱う。個別の特徴などは、第５表土器観察表、第６表石器観察表に記載した。範囲確認調査出土遺物は、観察表の出土地点の欄に「範確」と記し、備考欄に範確時のトレンチ番号を記した。土器の特徴は、基本的に上部から下部の順に記載した。法量欄の(　)は残存値を表す。

① 土器・土製品

縄文時代早期から弥生時代の土器が出土した。後世の削平により層位的に土器の前後関係を把握することはできなかったため、文様や胎土などで分類を行い帰属時期を推定した。多くの遺構が確認された縄文時代後期前葉に帰属する土器が多数を占め、縄文時代前期に帰属する土器が２箱程度、他は数点から十数点程度である。遺構外から出土した土器は、全体の形状がわかる程度まで復元できる個体は少なく、遺構内より出土した土器のほうが遺存状況が良好なものが多いことから、ここでは適宜、遺構内出土土器についても記述する。

推定時期から以下の、第Ⅰ～Ⅶ群に大別した。各群は型式比定が可能なものは細分した。

第Ⅰ群　縄文時代早期～前期前葉
第Ⅱ群　縄文時代前期後葉
第Ⅲ群　縄文時代中期中葉～後葉
第Ⅳ群　縄文時代後期初頭
第Ⅴ群　縄文時代後期前葉～後葉
第Ⅵ群　縄文時代晩期前葉
第Ⅶ群　弥生時代前期

第Ⅰ群(第115図233～244)

縄文時代早期～前期前葉に比定される一群である。233は深鉢形土器の尖底である。貝殻条痕文を施文する。234は深鉢形土器の胴部で貝殻腹縁文が施文される。貝殻腹縁文が施文される土器は、他にもＳＩ1229竪穴住居跡出土の17やＳＫ1176土坑出土の174、178、179があり、遺跡中央西側部分に集中する。いずれも胎土は緻密で焼成が良い。縄文時代早期中葉に帰属すると推定する。235～244は胎土に繊維が混入する土器群である。235～237は裏にも縄文が施される、いわゆる表裏縄文の土器である。赤御堂式に並行するものであろうか。243は底面にも縄文が施文される。244は押引文が施文される。早稲田６類に比定できようか。当期の遺構は確認していない。

第Ⅱ群(第115･116図245～272)

縄文時代前期後葉、円筒下層ｄ式に比定される一群である。口縁部文様帯は縄の側面圧痕で構成さ

れるもの(245～254など)と、単軸絡条体側面圧痕で構成されるもの(255･256)がある。胴部の文様は単軸絡条体第1A類(245～248など)と羽状縄文(251･252など)に大別できる。胎土に繊維が混入するものが大半を占めるが、246･253･255･257には胎土に繊維が含まれない。これらは比較的焼きが良く、内面は丁寧なミガキ調整が施されている。ＳＩ1105竪穴住居跡より出土した１や６、ＳＩ2158竪穴住居跡出土の10や12はこれらの類例である。竪穴住居跡や土坑などが少数確認されている。

第Ⅲ群(第116･117図273～296)

縄文時代中期中葉～後葉に属する一群である。円筒上層系をａ類、大木系をｂ類とした。

ａ類(第116･117図273～285)

273～277は円筒上層ｃ式に比定される一群である。出土量は極めて少ないが、口縁～胴上半が復元可能な個体が北側段丘崖より出土した(273)。出土した土器の過半数が北側段丘崖からの出土である。当期の遺構は確認していない。

278～285は円筒上層ｄ式に並行する一群である。278･280･282～285は口縁部に隆帯を貼り付けるものを主体とすることから、円筒上層ｄ式に並行するとした。隆帯上には、縄文を施した上に粘土紐や縄側面圧痕で、鋸歯状の文様が施されるものが多い(278･283･284)。279･281は口縁部の隆帯はないが、粘土紐で鋸歯状の文様を施す。

ｂ類(第117図286～296)

大木系の一群である。286～291は大木８ａ式に並行すると推定する。286～288は胴部片で、地文縄文に細い粘土紐で文様が施される。289～291はやや内湾する口縁部である。地文縄文に細い粘土紐で文様が描かれる。当期の遺構は確認していない。

292は口縁部片で、縦位渦巻文が施文される。文様の特徴より大木９式に比定する。本遺跡では他に類例はない。

293～296は磨消縄文を主文様とする。文様の特徴などから大木10式に並行するものと推定する。当期の遺構は確認していない。

第Ⅳ群(第118～127図297～433)

縄文時代後期初頭に属する一群である。本遺跡内で確認した遺構の大多数が当期に該当し、出土土器も多くが本群に属する。文様の地文、施文技法などによりａ～ｈ類に細分した。ｆ類、ｇ類など時期の特定が困難なものは、胎土･焼成で本群に含まれると判断した。ａ～ｇ類は大木10式より新しく、十腰内式より旧い土器群で、現状では適切な型式比定はできない。以下に基準を記す。

ａ類　主文様を沈線で構成する一群。地文の状態により３細分した。

-１　文様帯には縄文などの地文が施されないもの。

-２　文様帯にも縄文などの地文が施され、その上に沈線文が施文されるもの。

-３　縄文や撚糸文が施された後に、文様帯のみ地文を磨り消して、沈線文が施文されるもの。

ｂ類　主文様を縄側面圧痕で構成するもの。

ｃ類　主文様を粘土紐を貼り付けて構成するもの。粘土紐上の施文の有無などにより３細分した。

-１　粘土紐上に施文を施さないもの。

-２　粘土紐上に刺突列を施すもの。
-３　粘土紐上に縄側面圧痕を施すもの。
ｄ類　主文様を刺突列で構成するもの。
ｅ類　ボタン状貼付のみを施すもの。
ｆ類　文様をもたないもの。５細分した。
-１　縄文を施すもの。
-２　単軸絡条体回転施文を施すもの。
-３　刺突を施すもの。
-４　条痕文を施すもの。
-５　無文のもの。
ｇ類　底部のみのもの。
ｈ類　その他の特徴を有するもの。

第Ⅳ群ａ類

ａ類－1(第118図297～313)

主文様を沈線で施文するもののうち、文様帯には縄文などの地文が施されない一群である。波状文、蛇行文、三角形文、渦文などで構成される。深鉢形土器を主体とするが、壺形土器も存在する。本遺跡から出土した土器は大半を深鉢形土器が占め、壺形土器は数点であるが、壺形土器は大半が本群に属する。

297～303、305～308は深鉢形土器の口縁部片または胴部片である。遺構外から出土した土器では、器形を復元できるものはなかったが、本群に属するＳＩ2007竪穴住居跡炉体土器ＲＰ１(49)やＳＩ2042竪穴住居跡炉体土器ＲＰ１(68)などから器形などの特徴を類推することができる。器形は、胴部下半から上半にかけては開いて立ち上がる。胴上半で最大径となり、丸みを帯びて内湾する。頸部でやや括れ、口縁は開く。口縁は波状口縁(297～299など)と平口縁(300など)に大別され、波状口縁の場合、４単位もしくは６単位で構成される。波頂部に刻み目が施される例もある(299)。文様帯は口縁部から胴部の最大径までとし、横に連結した波状文で区画する。底部から胴部にかけては縄文が施される。沈線を施文した後に胴部の縄文が施されるタイプ(49)と、胴部の縄文を施した後に沈線で施文するタイプ(68)がある。

304･309～313は壺形土器片である。312は口縁部は欠損するが、ほぼ完形に復元できた例である。文様構成や胴部に縄文が施文されないなど、深鉢形土器とは特徴が異なる。304･311･312には沈線内に赤彩の痕跡が確認できることから、日常的な用途ではない可能性が高い。

ａ類－2(第119･120図314～343)

主文様を沈線で構成するもののうち、文様帯にも縄文などの地文が施され、その上に沈線文が施文される一群である。本遺跡で出土した有文土器のうち、もっとも出土量が多い。遺構外から出土した土器では、器形を復元できるものはなかったが、本群に属するＳＩ2042竪穴住居跡ＲＰ２(67)やＳＩ2134-ｂ竪穴住居跡炉体土器ＲＰ２(71)、ＳＩ2475炉体土器ＲＰ１(107)などから器形などの特徴を類推することができる。器形･文様構成は基本的にａ類－1に類似する。文様帯は、ａ類－1と同様の、口縁部から胴部の最大径までのもの(67･71など)と、胴部最大径を超え胴部下半まで及ぶもの(107･127･

343など)がある。主文様を構成する沈線は、ａ類－１で多用される幅２㎜前後で深いもの(314～321など)に加え、幅５㎜前後で浅いもの(107･329･343など)がある。後者は、文様帯が胴部下半に及ぶタイプにのみ見られる特徴である。

ａ類－3(第120図344～348)

主文様を沈線で構成するもののうち、縄文や撚糸文が施された後に、文様帯のみ地文を磨り消して、沈線文が施文される一群である。類例が少ないため特徴を抽出することは困難であるが、文様構成、器形などはａ類－１に類似すると推定される。

344は北側段丘崖より出土した。復元はできなかったが、周囲から同一個体片が多く出土した。文様モチーフは、ａ類－１に属するＳＩ2007竪穴住居跡炉体土器ＲＰ１(49)に類似する。内面には炉体土器に特有に見られる被熱痕(ハジケ)が確認できることから、炉体土器として使用されていたものが、段丘崖に捨てられたものと推定する。

第Ⅳ群ｂ類(第121図349～363)

主文様を縄側面圧痕で構成する一群である。遺構内外から一定量出土している。いずれも小片だが、ＳＮＲ2186土器埋設炉炉体土器ＲＰ１(128)やＳＩ2005竪穴住居跡より出土した39は比較的残存状況がよい。文様モチーフは直線的なものが多く、「Ｌ」字状の方形区画文(361･363)などｃ類-２との共通性が認められる。また、ボタン状貼付(362･363)や刺突充塡(39･362)が併用される例も一定量あり、その点でもｃ類に共通する。全体の器形が復元できる資料はないが、破片資料や器形がある程度復元できた39などから、ａ類に比較してやや小振り(口径･器高ともに20㎝前後)で器壁が薄いものが目立つ傾向がある。

第Ⅳ群ｃ類

ｃ類－1(第121･122図364～371)

主文様を粘土紐の貼り付けで構成し、粘土紐上に施文を施さない一群である。類例が少なく、個体ごとにバリエーションがあるため、全体の特徴を掴みづらいが、縄側面圧痕と併用される例が半数程度認められる(364･365･369･370)。またその内365･369･370にはボタン状貼付が伴う。

364は縄側面圧痕で渦文を施文した上に、粘土紐を貼り付ける。粘土紐を貼り付ける際に、縄側面圧痕が部分的に磨り消される。

371は内部が３つに仕切られ、外面にいわゆる「狩猟文」が描かれる特殊な土器である。北側段丘崖より破片が広範囲に散乱する状況で出土した。調査段階で底部は認識したが、全体の形状を類推することができなかったため、他の同一個体片を現場で認識することなく、他の土器と一括で取り上げた。接合作業の過程で、同一個体と思われる土器片を集め、接合を試みたところ、完形に近い状態に復元が可能であった。

底部には高台が付き、口縁部に向かって直線的に大きく開く。平面形は隅丸三角形である。内部には粘土板を２枚接合した平面「Ｔ」字状の仕切りが設けられ、３つの空間に分けられる。内面は仕切りの壁も含め、ミガキ調整が施される。口縁部は平口縁であるが、仕切りと器壁が接合する部分に山形の小突起が付く。仕切りの２枚の粘土板の接合部分は、上端が破損しており、接合状況が確認できる。接合部分には直径1.5㎝程度の平面円形の粘土単位が認められる。接合部の厚みより円形の粘土単位は逆円錐状を呈すると推定される。土器中央の「Ｔ」字の接合部分に、突起のような何らかの装飾を伴

っていた痕跡と考えられる。

外面には複節縄文を地文に、断面三角形の粘土紐で「狩猟文」が描かれる。描かれた文様は４単位４種類であるが、一部欠損しており、本来５～６単位の文様が描かれていた可能性が高い。文様モチーフは、青森県韮窪遺跡から出土した狩猟文土器(註２)のモチーフと、形状を同じくすることから「弓矢」「陥し穴／罠」「動物」を表していると類推する。また、「動物」と「陥し穴／罠」の間に描かれるモチーフは、岩手県馬立Ⅱ遺跡出土の狩猟文土器(註３)に類似した要素があり、「人」を表していると推定する。「動物」と「弓矢」の間は欠損するため、この部分には、さらに何らかのモチーフが描かれていた可能性を想定する。各地で出土した狩猟文土器に頻出する「木」が描かれていたのであろうか。

胎土は他のⅣ群の土器と大差なく、焼成は良い。内部に仕切りがあるためか、他の土器よりも重量感がある。口縁が大きく開く逆三角形の器形は、本遺跡には類例はないが、内部が３つに仕切られるという特殊性に起因するものと考えられ、本土器は胎土焼成状態より在地性が高いと推測する。外面に煤が付着し、内面上部には被熱による赤変が認められることから、火にかけて使用したものと推定されるが、用途は現状では判断しがたい。出土状況より、流土に混入したもの、もしくは上位段丘面より投げ捨てられたものと推測する。内部が３つに仕切られる例は、現在のところ類例を見ない。

なお実測図に記載した推定線(破線)は、「人」は岩手県馬立Ⅱ遺跡出土の狩猟文土器を、それ以外の文様は青森県韮窪遺跡から出土した狩猟文土器を参考に復元した。

ｃ類-２(第123図372～391)

主文様を粘土紐を貼り付けて構成し、粘土紐上に刺突列を施す一群で、いわゆる「連鎖状文」とも呼ばれるタイプである。本遺跡で出土した有文土器のうち、ａ類‐２に次いで出土量が多い。遺構外より出土したものはすべて破片資料である。ＳＩ2025竪穴住居跡炉体土器ＲＰ１(55)やＳＮＲ2612土器埋設炉炉体土器ＲＰ２(141)も本類に属する。モチーフは直線的な文様が多く、「Ｌ」字状の方形区画文(376･388など)などｂ類との共通性が認められる。また、ボタン状貼付(372～378など)や刺突充塡(372･384)が併用される例も一定量あり、その点でもｂ類に共通する。縄側面圧痕と併用される例(372･375･377など)も見受けられ、ｂ類との関連性が認められる。少数ではあるが、蛇行文が施文される例(373～375)もある。また、粘土紐の両脇に沈線を施すタイプ(374･388･391)も一定量存在する。

ｃ類-３(第124図392～398)

主文様を粘土紐を貼り付けて構成し、粘土紐上に縄側面圧痕を施す一群である。出土量が少なく、破片資料のみであるため全体的な傾向を読み取ることは困難である。ボタン状貼付を伴うタイプ(395･396･398)や、縄側面圧痕を併用するタイプ(393･394･396･398)など、文様モチーフはｃ類‐２に類似するものが多い。

第Ⅳ群ｄ類(第124図399～402)

主文様を刺突列で構成する一群である。出土量は少なく、すべて破片資料である。刺突列の両脇に沈線が施文される例(400～402)があり、そのうち402は器形、文様などがｃ類‐２の372や384に類似する。粘土紐を簡略化し、２本の沈線で同様の効果を狙ったものであろうか。

第Ⅳ群ｅ類(第124図403～405)

ボタン状貼付のみを施す一群である。出土量は少なく、すべて破片資料である。403は口縁部のみ

であるため確認できないが、欠損部分に何らかの文様が施文されていたと推定される。405は口縁部から胴部の形状が復元できる壺形土器である。底部は出土しなかった。Ⅳ群の大多数が北部段丘面からの出土に対し、これは南部平坦面の中央付近より出土した。口縁部には丸みを帯びた隆帯を貼り付け、刻み目を密に施す。部分的に赤彩の痕跡を確認することができる。本遺跡にはこのような文様モチーフや器形に類例はない。

第Ⅳ群ｆ類

ｆ類－1(第124～126図406～420)

縄文を施す一群である。出土量は最も多い。文様帯が欠損し、胴部縄文のみが残存した例も一定量含まれると推定される。基本的に縄の施文方向は縦位である。無節縄文(406～408)、単節縄文(409～419)が主体を占め、複節縄文、０段多条、付加条(420)などがごく少数確認できる。口縁部が内湾する例(409･410)や、内傾する例(415･416)、胴部が膨らみ上部でやや括れて口縁が開く例(406)など様々な器形がある。土器埋設炉炉体土器は本類に帰属するものが多い。

ｆ類－2(第126図421～423)

単軸絡条体を回転施文する一群である。出土量は少ない。軸に撚糸を一方向に巻いて回転施文する単軸絡条体第１類に比して、回転圧痕が網目状に展開する単軸絡条体第５類の方が出土量はやや多い。422･423の他に、ＳＩ2134－c竪穴住居跡炉体土器ＲＰ３(70)、ＳＩ2228竪穴住居跡炉体土器ＲＰ１(79)も後者である。一方前者は421の他に、ＳＩ2338竪穴住居跡埋設土器ＲＰ２(85)がある。

ｆ類－3(第127図424～428)

刺突を充塡させる一群である。一定量の出土が認められる。0.5～１㎝の爪形もしくは棒状の刺突が胴部一面に施文される。施文の際に脇を隆起させるタイプ(424･427･428)と、させないタイプ(425･426)がある。ｂ類やｃ類-２の胴部に施文される例が多いが、428やＳＩ2005竪穴住居跡出土土器(37)のように文様帯を持たない例や、443のように小型土器に施文される例もある。

ｆ類－4(第127図429)

条痕文を施す一群である。出土したのはいずれも破片で、数例を数えるのみである。遺構内からの出土例はない。

ｆ類－5(第127図430)

無文の一群である。430は底部片である。器形がａ類－１の312に類似することから、同種の壺の底部と推定する。

第Ⅳ群ｇ類(第127図431)

底部のみの一群である。北側段丘崖から出土した土器片は、胴部、口縁部の出土量に比して、底部の出土量が多い傾向が看取できる。炉体土器・埋設土器には底部が欠損するものが半数程度存在することから、人為的に打ち欠いた底部を、北側段丘崖に投げ捨てた可能性が考えられる。時間の制約により、接合状況の確認は困難であった。

第Ⅳ群ｈ類(第127図432～433)

その他、縄文時代後期初頭に属すると推定する一群である。施文技法はａ類と同じく、沈線で主文様を構成するが、文様要素に東北地方中南部地域の宮戸Ⅰｂ式の影響が認められる。遺構外出土土器では432と433を確認した。胎土･焼成より同一個体と考えられる。ＳＮＲ2378土器埋設炉炉体土器

ＲＰ１(139)もこれらと同様の特徴を持つ。いずれも胎土･焼成が他のⅣ群の土器とは異なることから、搬入品の可能性も考えられる。

第Ⅴ群(第127図434～439)

縄文時代後期前葉～後葉に属する一群である。概期の遺構は確認していない。434は十腰内１ａ式、435･436は十腰内２式、437～439は十腰内５式の特徴を有する。十腰内式に比定できる土器は本遺跡では数点を数えるのみである。434･435は北側段丘崖より出土した。436は範囲確認調査時に出土したものである。439は縄文時代の遺構や遺物を全く確認していない南部段丘面の南側付近より出土した。437･438は胎土･焼成が類似することから同一個体と推定される。注口形土器の出土は本例のみである。

第Ⅵ群

縄文時代晩期前葉(大洞Ｂ$_1$式)に比定されるタイプである。ＳＩ2333竪穴住居跡の床面直上で出土した台付鉢(117)が唯一の出土例である。

第Ⅶ群(第127図440～441)

弥生時代に比定される土器である。２点を確認し図示した。該期の遺構は確認していない。441は範囲確認調査時の出土遺物である。440は南部段丘面の南側付近、第Ⅴ群の439に近接して出土した。いずれも出土状況は不明である。

小型土器(第128図442～446)

出土点数は10点に満たない。胎土焼成より、いずれも縄文時代後期初頭に属すると考えられる。図示した５点のうち、444を除く４点は北側段丘崖より出土した。445は筒型を呈する。他は小片のため、器形は定かではないが、いずれも深鉢形を呈していたものと推定する。文様要素から上記の分類に対比させると、442･446はⅣf1類、443はⅣf2類、444はⅣg類、445はⅣf5類である。

土製品(第128図447～458)

447～455は円盤状土製品である。455は底部を打ち欠き作成している。他は胴部片を利用する。456は顔型土製品である。一部欠損しているが、ほぼ完形に近い。刺突で目や口などを表現する。両耳には穿孔が施される。また髪の部分には、耳より大きい穿孔がある。ペンダントとして使用されたものであろうか。457･458は板状土偶の胴部である。457は沈線で裏表共に文様が描かれる。乳房部の剥離痕がある。458は刺突列で文様を描く。

② 石器・石製品

ここでは、製品として加工、使用された狭義の石器に加え、使用痕や加工痕のある剥片類、石器製作工程に関わる石核、剥片も含め石器・石製品類に含めた。遺跡より出土した石器は以下の表の通りである。石器の詳細な時期は判断しがたいが、最も遺構が多く検出された縄文時代後期初頭に帰属するものが多数を占めると推定する。

第３表　石器･石製品出土量一覧

	石鏃	尖頭器	石錐	石匙	石篦	打製石斧	スクレイパー	ＲＦ	ＵＦ	剥片
遺構内出土	6	0	5	5	1	0	54	44	58	621
遺構外出土	19	2	6	13	17	1	63	179	580	1933
合計	25	2	11	18	18	1	117	223	638	2554
	石核	磨製石斧	石錘	敲･磨石	凹石	石皿	砥石	円盤状石製品	その他石製品	合計
遺構内出土	4	4	3	13	13	2	1	8	7	849
遺構外出土	126	8	3	7	18	1	0	7	9	2992
合計	130	12	6	20	31	3	1	15	16	3841

石鏃(第129図Ｓ88～Ｓ104)

石鏃は、無茎鏃(Ｓ88～Ｓ98)と有茎鏃(Ｓ99～Ｓ101)に大別できる。無茎鏃は、基部はいずれも凹基である。基部の形状で、逆Ｖ字状を呈するもの(Ｓ88～Ｓ92)、逆Ｕ字状を呈するもの(Ｓ93～Ｓ96)、浅く弧を描くもの(Ｓ97･Ｓ98)に細分が可能である。また、有茎鏃は、Ｓ99が平基である以外はいずれも凸基である。Ｓ92は基部から先端部近くまで、Ｓ103は茎部にそれぞれアスファルトが付着する。

尖頭器(第129図Ｓ105･Ｓ106)

Ｓ105は細かい調整加工が行われていないことから、未製品と考えられる。Ｓ106は両面共に調整加工が施される。

石錐(第130図Ｓ107～Ｓ109)

図示した３点は、いずれも不定形の剥片の一部に短い錐部を作り出している。Ｓ108･Ｓ109は、錐部の先端に摩耗痕がある。

石匙(第130･131図Ｓ110～Ｓ120)

石匙は多くが縦長剥片を素材とし、素材の打面側につまみを作出する。Ｓ116は横長剥片を素材とする可能性があり、つまみは側縁側に作出する。Ｓ110～Ｓ116はいわゆる縦型石匙である。縦型石匙は身部先端が尖るもの(Ｓ110～Ｓ112)と、身部先端が平坦で、片側の側縁端部が尖るもの(Ｓ114～Ｓ117)がある。Ｓ118は器体が撥形を呈し、刃部が両側縁に作出される。Ｓ119は刃部が破損しており、形状は不明である。Ｓ120は全体的に細かい調整加工が施されておらず、背面には自然面が残る。

石篦(第131～Ｓ134図Ｓ121～Ｓ137)

Ｓ121～Ｓ130は横長剥片を素材とし、側縁に刃部を作出する。Ｓ121～Ｓ125は円刃でＳ126～Ｓ130は直刃である。Ｓ131～Ｓ133は縦長剥片を素材とする。Ｓ132･Ｓ133は打面側に、Ｓ131は末端側に円刃を作出する。Ｓ134･Ｓ135は両面に調整加工を施す。刃部形状はＳ134は平刃、Ｓ135は円刃である。Ｓ136は基部、刃部が作出されておらず、Ｓ137は基部が作出されていない。どちらも未製品と考えられる。

スクレイパー(第134～137図Ｓ138～Ｓ161)

Ｓ138～Ｓ141は急角度の二次加工によって、厚手の刃部を作出したものである。いずれも縦長剥片を素材とし、刃部を素材剥片の側縁に作出するもの(Ｓ138)と、末端縁に作出するもの(Ｓ139～Ｓ141)がある。Ｓ142～Ｓ161は細かい二次加工によって、刃部を作出したものである。Ｓ147、Ｓ154、Ｓ157は横長剥片を素材とし、他は縦長剥片を素材とする。Ｓ142～Ｓ148の刃部平面形は丸みを帯び、Ｓ149～Ｓ152は直線的である。Ｓ153～Ｓ156は刃部の先端が尖る。Ｓ157～Ｓ161は平面形が不整形の

ものである。

石核(第138図Ｓ162･Ｓ163)

Ｓ162は先行する作業面を打面とし、打面と作業面を入れ替えて、剥片剥離を連続して行う。Ｓ163は各方向から不整形な剥片が剥出されている。どちらも石質は珪質頁岩である。

磨製石斧(第139･140図Ｓ164～Ｓ171)

Ｓ193･Ｓ194は小型品である。すべて両刃で、基部側面は平坦である。大型品で形状がわかるものは撥形の平面形を呈する。Ｓ166･Ｓ171は基部が欠損する。Ｓ167～170は刃部に刃こぼれの痕跡がみられる。Ｓ170は風化が著しい。

石錘(第140図Ｓ172～Ｓ174)

Ｓ173は抉りを左右対称に両面から入れる。Ｓ172･Ｓ174の抉りは左右非対称である。

磨石(第141図Ｓ175)

全面に磨痕が認められる。側面には敲打痕が残る。

敲石(第141図Ｓ176)

側面全体に敲打痕が残る。表裏面に磨痕が認められる。

凹石(第141図Ｓ177･Ｓ178)

Ｓ177は表裏面それぞれに凹痕が残る。Ｓ178は、表裏面に加え、側面にも凹痕が残る。磨痕も認められる。

石皿(第142図Ｓ179)

表面を長方形に５㎝ほど削りくぼめ、使用面を形成する。他に加工痕は認められない。

石製品(第142～144図Ｓ180～Ｓ195)

Ｓ180、181、195は有孔石製品である。Ｓ180は正面がやや平坦な球形、Ｓ181は丸みを帯びた円柱形である。中央に盲孔を施す。Ｓ182～188は円盤状石製品である。多くが全面研磨成形であるが、Ｓ183は研磨が施されない。Ｓ189･Ｓ190は球形の石製品で、敲打により器形を整え、研磨で仕上げている。Ｓ191は破損が激しく全体形状は復元しがたいが、湾曲することから碗状の形状を呈していたと推測する。研磨痕が顕著に残る。Ｓ192･Ｓ194は岩版である。どちらも両面に沈線で文様が描かれる。Ｓ192は完形で、Ｓ194は上端が破損する。Ｓ193は石皿状の石製品である。破損しており、大きさは現状で６㎝程度である。現存部分より、完形でも10㎝程度のものと推定され、小型であることから実用品ではない可能性が高い。

３　近世

(１)遺構

①掘立柱建物跡

ＳＢ501掘立柱建物跡(遺構第145･146図)

≪位置･確認状況≫ＭＩ28･ＭＪ27～29･ＭＫ27･28区に位置する。地山面精査中にピット群を検出し、完掘後、柱穴列等を検討し掘立柱建物跡と認定した。

≪重複≫ＳＫ14土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

≪形態･規模≫桁行３間×梁行２間の直屋で、南東側1.2ｍに下屋が付き、棟通りに柱穴１基を持つ。

建物方位はＮ－30°－Ｅを示す。上屋は桁行6.4～6.7m、梁行3.6～3.8mを測る。柱間寸法は桁行1.7～3.0m、梁行1.7～2.0m、下屋柱間は1.2～2.0mであり、ばらつきが目立つ。

≪柱穴≫検出した柱穴は20基である。長径40cm前後の平面楕円形のものが多く、略円形も若干含まれる。下屋柱穴は上屋柱穴に比して径が小さく、35cm前後のものが多い。Ｐ16には径約16cm、高さ約25cmの柱根の一部が残存する。

≪出土遺物≫遺物は出土していない。

≪時期･所見≫下屋部分に一度掘り起こしてから埋め戻した土坑(ＳＫ14)が存在するが、当遺構に伴うものかどうか、現状では不明である。周辺より18世紀代の磁器が出土していることから、近世に属する可能性が高い。

ＳＢ502掘立柱建物跡(遺構第146図)

≪位置･確認状況≫ＭＩ･ＭＪ29･30区に位置する。地山面精査中にピット群を検出し、完掘後、柱穴列等を検討し掘立柱建物跡と認定した。

≪重複≫ＳＫ02土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

≪形態･規模≫桁行２間×梁行１間の掘立柱建物跡で、桁行3.8～3.9m、梁行1.85～1.95mを測る。建物方位はＮ－30°－Ｅである。柱間寸法は桁行･梁行ともに1.85～2.00mである。

≪柱穴≫検出した柱穴は７基である。平面形は、径32～44cmの略円形を呈すものが多く、Ｐ４のみ長径50cmの楕円形を呈す。現水田造成時の削平を受けるため、確認面からの深さはばらつきを見せるが、柱穴の底面標高は概ね124.2m前後にまとまる傾向を示す。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫当遺構はＳＢ501と同様の建物方位を示すことから、同時並行の付属屋と推定する。また、Ｐ４･Ｐ７間にＳＫ02が位置するが、両者の関連は判然としない。周辺より18世紀代の磁器が出土していることから、近世に属すると推定する。

ＳＢ1173掘立柱建物跡(遺構第148･149図、図版34)

≪位置･確認状況≫ＬＬ51･52、ＬＭ51～53、ＬＮ51～54、ＬＯ52･53区に位置する。地山上面で多数の柱穴様ピット群を確認した。ピット群の配置状況を検討し、掘立柱建物跡と認定した。

≪重複≫他の遺構との重複はない。

≪形態･規模≫桁行４間×梁行３間の掘立柱建物跡で、南東側には張り出し部分と考えられる附属施設が付く。また、北西側に最長部分で90cmおよび南西側に最長部分で1.1m離れて下屋が付く。建物方位はＮ－45°－Ｗを示す。母屋は桁行7.1～7.3m、梁行5.5～5.8mである。柱間寸法は、桁行が1.8～1.9m、梁行も1.8～1.9mのほぼ等間である。ただし、張り出し部分と考えられる附属施設の桁行の柱間寸法は1.10～1.70mであり、ややばらつきが目立つ。

≪柱穴≫検出した柱穴は30基である。平面形は長軸30～40cm程度の楕円形のものが多く、円形に近いものも若干含まれる。柱痕跡を明瞭に示す柱穴が多い。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫Ｐ13から出土した柱材に由来する炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代180±40BP、暦年較正交点ＡＤ1670、1770、1800、1940、1950である。年代測定から、近世以降に属すると判断できる。

ＳＢ1174掘立柱建物跡(遺構第150図、図版34)

≪位置･確認状況≫ＬＬ･ＬＭ51･52区に位置する。地山上面で多数の柱穴様ピット群を確認した。これらのピットの配置状況を検討した結果、掘立柱建物跡の存在を認めた。

≪重複≫他の遺構との重複はない。

≪形態･規模≫桁行２間×梁行１間で、建物方位はＮ－50°－Ｅを示す。桁行3.6～3.8m、梁行1.3～1.5mである。柱間寸法は、桁行が1.7～2.0m、梁行は1.3～1.5mとややばらつきが目立つ。

≪柱穴≫６基の柱穴からなる。平面形は長軸20～50cmの楕円形であり、規模にばらつきがある。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫本遺構はＳＢ1173内に構築された馬屋のような小規模な建物と考えられる。周辺より出土した遺物より18世紀以降の所産と推定する。

ＳＢ1175掘立柱建物跡(遺構第150図、図版34)

≪位置･確認状況≫ＬＫ･ＬＬ50･51区に位置する。地山上面で多数の柱穴様ピット群を確認した。これらのピットの配置状況を検討した結果、掘立柱建物跡の存在を認めた。

≪重複≫他の遺構との重複はない。

≪形態･規模≫桁行４間×梁行２間の掘立柱建物跡で、南東側に40cm離れて下屋が付く。建物方位はＮ－48°－Ｅを示す。桁行4.2～4.3m、梁行3.2～3.5mである。柱間寸法は、桁行が0.8～1.5m、梁行は1.1～2.1mとかなりばらつきが目立つ。

≪柱穴≫検出した柱穴は17基である。平面形は長軸25～50cmの楕円形であり、規模にばらつきがある。柱痕跡を明瞭に残す柱穴もある。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫本遺構はＳＢ1173掘立柱建物跡とほぼ同様の建物方向を示すことから、ＳＢ1173と同時並行と推定する。建物規模から納屋などの収納施設と想定されよう。Ｐ９出土炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代110±40BP、暦年較正交点ＡＤ1700、1720、1820、1840、1880、1920、1950である。年代測定の結果より、近世以降であると考えられる。

ＳＢ1182掘立柱建物跡(遺構第151･152図、図版34)

≪位置･確認状況≫ＬＭ59･60、ＬＮ58～61、ＬＯ59～61、ＬＰ60･61区に位置する。地山上面～段丘礫層で多数の柱穴様ピット群を確認し、配置状況を検討した結果、掘立柱建物跡の存在を認めた。

≪重複≫他の遺構との重複関係はない。東側が倒木による撹乱を受けている。

≪形態･規模≫桁行６間×梁行３間で、建物方位はＮ－40°－Ｗを示す。桁行約10.9m、梁行5.5～5.6mである。柱間寸法は、桁行が1.8～1.9m、梁行は北西側が2.7～2.8mで南東側が1.8～1.9mと梁行側の違いが大きい。

≪柱穴≫検出した柱穴は16基である。平面形は、長軸30～50cm前後の楕円形のものが中心である。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫Ｐ１より出土した柱材由来炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代270±40BP、暦年較正交点ＡＤ1650である。年代測定の結果より、近世の可能性が高い。

ＳＢ2035掘立柱建物跡(遺構第153～155図、図版34)

≪位置･確認状況≫ＬＣ～ＬＨ･63～66区に位置する。地山面精査中にピット群を検出し、配置等を検

討した結果、掘立柱建物跡と認定した。
≪重複≫他の遺構との重複はない。
≪形態･規模≫桁行10間×梁行２間の直屋で、北側2.0ｍに下屋が付く。南側2.0ｍにもＳＫＰ2176、2178が主軸に並行して位置する。南側はより大きく削平をされているため判然としないが、２基の柱穴は当遺構に伴う下屋の可能性が高い。上屋は桁行18.5ｍ、梁行1.6ｍを測る。建物方位はＮ－70°－Ｅを示す。柱間寸法はすべて1.8mであり規格性が強い。
≪柱穴≫検出した柱穴は35基である。平面形は長軸８～25㎝前後の円～楕円形を呈すものが多く、不整円形も若干含まれる。柱痕跡を確認できるものはいずれも８㎝前後の丸柱である。
≪出土遺物≫遺物は出土していない。
≪時期･所見≫遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、南部段丘面に位置する掘立柱建物と同時期とすれば、近世に比定できる。

② 柵列跡

ＳＡ1183柵列跡(遺構第156･157図、図版34)
≪位置･確認状況≫ＭＢ62、ＭＣ61･62、ＭＤ60･61、ＭＥ60区に位置する。地山上面で柱穴様ピット群を確認し、配置状況から柱穴列の存在を認めた。掘立柱建物跡の可能性も想定したが、南東側が削平されているため、現状では判定できない。
≪重複≫他の遺構との重複関係はないが、一部倒木による攪乱を受けている。
≪形態･規模≫確認した柱穴は７基である。柱間は1.8～1.9mが多く、一部2.4mである。南東側は削平を受けているが、柱穴様ピット１基を検出している。このピットと本遺構で掘立柱建物跡の存在が想定されるが、周辺の削平が著しく判然としない。
≪出土遺物≫なし。
≪時期･所見≫Ｐ１から出土した柱材由来の炭化材の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代160±40BP、暦年較正交点ＡＤ1680、1740、1800、1930、1950である。
ＳＡ1240柵列跡(遺構第151図)
≪位置･確認状況≫ＬＰ60･61、ＬＱ61区に位置する。地山上面で小規模な柱穴様ピットのプランを確認し、これらの配置状況から柱穴様ピット５基から構成される柵列跡であることを認めた。
≪重複≫他の遺構との重複関係はない。
≪形態･規模≫柱穴間の距離は1.7～2.0mとややばらつきがある。主軸方位はＮ－40°－Ｗである。
≪出土遺物≫なし。
≪時期･所見≫ＳＢ1182掘立柱建物跡に近接し、主軸を同じくすることから関連性の強い施設と推定する。近世以降の所産と考えられるが、詳細は不明である。
ＳＡ1261柵列跡(遺構第156･157図)
≪位置･確認状況≫ＬＴ62･63、ＭＡ62区に位置する。地山上面で柱穴様ピットを確認し、配置状況から柵列跡の存在を認めた。
≪重複≫ＳＫ1176土坑と重複する。本遺構がＳＫ1176を掘り込んでおり、本遺構が新しい。
≪形態･規模≫現状で柱穴４基の柱穴列である。柱間距離は1.8mである。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫周辺に位置する遺構と同様、近世以降の所産と推定するが、判然としない。

③ 土坑

ＳＫ01土坑(遺構第158図)

≪位置･確認状況≫ＭＧ･ＭＨ27区に位置する。地山上面で、旧河道へ落ち込む肩口にコの字状に並ぶ石および、その掘方と思われる黒褐色土のプランを検出した。

≪形態･規模≫石組みの平面形は最大径80㎝で、径約27～43㎝程の礫３点を「コ」の字状に配置し、南東側が開いた形となる。礫の配置と同程度の掘方を有し、深さは24㎝程である。

≪覆土･混入物≫覆土は黒褐色土単一層である。全体に根が巡りしまりがほとんどない。

≪出土遺物≫当遺構の南端から25㎝離れた場所で両極に調整痕のある角礫が出土している。

≪時期･所見≫当遺構は構築当時の原形をとどめているとは考えにくく、遺構の詳細な性格は不明である。周辺より18世紀代の磁器が出土しており、近世に属する可能性が高い。

ＳＫ02土坑(遺構第158図)

≪位置･確認状況≫ＭＩ･ＭＪ29区に位置する。地山上面で黒褐色方形のプランを確認した。

≪重複≫ＳＢ502掘立柱建物と重複するが新旧関係は不明である。

≪形態･規模≫平面形は長軸1.25m、短軸0.86mの隅丸方形を呈す。

≪壁･底面≫底面は鍋底状で、壁は南南西で極めて緩やかに立ち上がる他は、ほぼ垂直に立ち上がる。

≪覆土･混入物≫覆土は黒褐色土単一層である。地山面を掘り込んだ後、表土付近の黒ボク土を一括で埋め戻したものと思われる。覆土下位から中位にかけて礫を３点検出しているが、特に配置したものではなく埋め戻しの際に混入したものと考える。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫当遺構はＳＢ502の付属施設の可能性も視野に入れて精査を進めたが、同時並行を示す根拠がなく、詳細な性格は不明である。

ＳＫ12土坑(遺構第158図)

≪位置･確認状況≫ＭＪ･ＭＫ26に位置する。地山上面で黒褐色楕円形のプランを確認した。

≪重複≫なし。

≪形態･規模≫平面形は、長軸85㎝、短軸63㎝の不整楕円形を呈する。削平を受けるため、残存するのは坑底部のみであり、深さ７㎝である。

≪壁･底面≫壁は極めて緩やかに外傾して立ち上がっていたものと思われ、底面はほぼ平坦である。

≪覆土･混入物≫黒褐色土単一層である。

≪出土遺物≫なし。

≪時期･所見≫現状からは詳細な性格は不明である。周辺より18世紀代の遺物が出土しており、該期以降の所産と推定する。

ＳＫ14土坑(遺構第158図)

≪位置･確認状況≫ＭＪ28に位置する。地山上面で黒褐色楕円形のプランを確認した。

≪重複≫ＳＢ501掘立柱建物跡の下屋内に位置するが、新旧関係は不明である。

≪形態･規模≫平面形は長軸79㎝、短軸68㎝の不整な楕円形である。深さは25㎝である。
≪壁･底面≫底面はかなり丸みを帯び、壁面も丸みを帯びたまま立ち上がる。
≪覆土･混入物≫覆土は２層に分層した。１･２層共に地山塊を多量に含む坑掘削時の埋め戻し土と考えられる。
≪出土遺物≫なし。
≪時期･所見≫現状からは詳細な性格は不明である。周辺より18世紀代の遺物が出土しており、該期以降の所産と推定する。

④ 柱穴様ピット

近世に帰属すると推定される柱穴様ピットは351基検出した。ピットは調査区南部、南東部、中央部の３箇所でまとまって検出された。一覧を第４表に掲載した。

南東部ピット群は段丘砂礫層を掘り込んで構築され、すぐ東側に旧河道がある。当ピット群には明瞭な柱痕跡を示すもの、柱根が残存するものも存在したが、明瞭な建物配置は認定できなかった。この区域におけるピットの多くは概ね径20～30㎝前後で、覆土は水田耕作土と類似する例が多い。したがって東側ピット群における柱穴の多くは近世以降から現代にかけて構築された可能性が高い。なおＳＫＰ50より検出した柱材炭化物は放射性炭素年代測定の結果19世紀初頭から後半にかけての値を得ている。

南部ピット群は当遺跡の最南端に位置する。南東側ピット群同様柱痕跡を示すもの、柱根が残存するものがあり、柱穴直径は30～40㎝のものが多い。出土遺物は極めて少ないが、ＳＫＰ153より18世紀に比定される磁器を、ＳＫＰ195より漆器に塗布されていたであろう漆膜を検出している。当該区における柱穴も現表土および旧水田土由来の覆土が多く、そのほとんどは近現代に比定されるものと考える。

中央部ピット群は、そのほとんどが同地区で検出した近世掘立柱建物跡の周辺から確認している。確認したピット内からは、遺物は出土しなかった。一部柱痕跡を示すものもあるが、検出した掘立柱建物跡以外には建物配置を認定することはできなかった。柱穴直径は30～40㎝であり、覆土も水田由来土に類似する例が多い。よって、当該区の柱穴の多くは近世以降から現代にかけて構築された可能性が高い。

(２)遺物(第159図)

近世の遺物は極めて少なく、18ℓ遺物収納箱に0.5箱程度が出土した。すべて南部段丘面からの出土である。陶磁器のほか、キセルや銭などの金属製品もある。第159図に図示し、第７表に一覧を掲載した。

註１　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年
註２　青森県教育委員会　『韮窪遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第84集　1984(昭和59)年
註３　財団法人岩手県埋蔵文化振興事業団埋蔵文化財センター　『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
　　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第122集　1988(昭和63)年

第４表　近世柱穴様ピット一覧(１)

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SB501 P1	MK27	楕円	0.42	123.75	10YR2/2	＞SKP205
SB501 P2	MK27	楕円	0.42	123.82	10YR2/2	
SB501 P3	MJ27	楕円	0.50	123.66	第146図	
SB501 P4	MJ27	楕円	0.36	124.13	第146図	
SB501 P5	MJ27	円	0.48	123.94	10YR2/3	
SB501 P6	MK28	楕円	0.44	123.91	第146図	
SB501 P7	MJ28	楕円	0.40	123.97	第146図	
SB501 P8	MJ27	楕円	0.60	123.63	10YR2/2～10YR2/3	
SB501 P9	MJ27	不整楕円	0.34	124.00	10YR3/2	
SB501 P10	MK28	楕円	0.34	123.79	10YR2/3	
SB501 P11	MJ28	楕円	0.58	123.76	第146図	
SB501 P12-1	MJ27・28	楕円	(0.32)	124.23	10YR2/3	
SB501 P12-2	MJ28	不整円	0.26	124.14	－	
SB501 P13	MJ28	楕円	(0.28)	124.27	－	
SB501 P14	MJ28	楕円	(0.26)	124.27	－	
SB501 P15	MI・MJ28	楕円	0.30	124.50	10YR3/2	
SB501 P16	MJ29	円	0.38	124.08	第146図	
SB501 P17	MJ28・29	円	0.36	124.07	10YR2/3	
SB501 P18-1	MJ28	楕円	0.50	124.26	10YR2/3～10YR3/2	＜SKP169-2
SB501 P18-2	MJ28	推定楕円	0.48	124.38	－	＞SKP169-1
SB501 P19	MJ28	楕円	0.42	124.41	10YR2/3	
SB501 P20	MI・MJ28	円	0.40	124.35	第146図	
SB502 P1	MJ29	円	0.32	124.11	10YR2/2	
SB502 P2	MJ29	楕円	0.34	124.27	10YR2/3	
SB502 P3	MJ29	楕円	0.36	124.18	10YR2/3	
SB502 P4	MJ30	円	0.36	124.14	第146図	
SB502 P5	MI29	楕円	0.50	124.27	10YR2/2	
SB502 P6	MJ30	円	0.42	124.20	－	
SB502 P7	MI30	円	0.44	124.26	－	
SB1173 P1	LO52	円	0.26	126.66	－	
SB1173 P2	LO52	不整楕円	0.32	126.60	第149図	
SB1173 P3	LO52	円	0.20	126.75	－	
SB1173 P4	LN52	不整円	0.32	126.64	－	
SB1173 P5	LN51	楕円	0.32	126.70	－	
SB1173 P6	LO53	不整円	0.39	126.59	第149図	
SB1173 P7	LO 52・53	不整楕円	0.39	126.52	第149図	
SB1173 P8	LO・LN52	円	0.47	126.53	第149図	
SB1173 P9	LN52	円	0.37	126.55	－	
SB1173 P10	LN52	不整楕円	0.40	126.61	－	
SB1173 P11	LN51	円	0.39	126.44	第149図	
SB1173 P12	LM51	不整楕円	(0.42)	126.71	－	
SB1173 P13	LM51	円	0.17	126.90	－	
SB1173 P14	LO53	楕円	0.36	126.86	－	
SB1173 P15	LO53	不整	0.58	126.73	第149図	
SB1173 P16	LM52	不整円	0.60	126.61	－	
SB1173 P17	LN53	不整円	0.39	126.71	第149図	
SB1173 P18	LN53	不整円	0.29	126.65	第149図	
SB1173 P19旧	LN53	不整円	(0.41)	126.80	第149図	＜SKP1086新
SB1173 P19新	LN53	不整円	0.26	127.19	－	＞SKP1086旧
SB1173 P20	LN53	不整円	0.35	126.72	－	
SB1173 P21	LM52	円	0.39	126.70	第149図	

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SB1173 P22	LM52	不整楕円	0.97	126.64	第149図	
SB1173 P23	LN54	不整円	0.19	127.07	－	
SB1173 P24	LN54	楕円	0.33	126.74	第149図	
SB1173 P25	LN53	楕円	0.44	126.61	－	
SB1173 P26	LM53	円	0.37	126.71	第149図	
SB1173 P27	LM53	不整円	0.41	126.49	第149図	
SB1173 P28	LM52	円	0.28	126.65	－	
SB1173 P29	LL52	楕円	0.65	126.61	第149図	
SB1173 P30	LL52	不整楕円	0.61	126.97	第149図	
SB1174 P1旧	LM51	不整円	(0.33)	126.49	－	＜SKP1064新
SB1174 P1新	LM51	不整円	0.44	126.74	－	＞SKP1064旧
SB1174 P2	LM52・51	楕円	0.42	126.63	－	
SB1174 P3	LL52	不整楕円	0.34	126.51	－	
SB1174 P4	LM51	不整楕円	0.52	126.80	第150図	
SB1174 P5	LM・LL51	不整楕円	0.50	126.92	第150図	
SB1174 P6	LL52	不整円	0.33	126.74	－	
SB1175 P1	LL51	不整楕円	0.53	126.80	－	
SB1175 P2	LL51	円	0.35	126.73	－	
SB1175 P3	LL51	不整円	0.47	126.85	第150図	
SB1175 P4	LL51	円	0.30	126.88	－	
SB1175 P5	LL51	円	0.40	126.71	第150図	
SB1175 P6	LL50	円	0.25	126.98	－	
SB1175 P7	LK51	不整円	0.15	127.07	－	
SB1175 P8	LL50	不整円	0.23	126.81	－	
SB1175 P9	LL50	不整円	0.20	126.90	第150図	
SB1175 P10	LL50	不整円	0.27	127.02	第150図	
SB1175 P11	LK51	不整楕円	0.31	127.00	第150図	
SB1175 P12	LK51	楕円	0.19	127.10	－	
SB1175 P13	LL50	円	0.26	126.78	－	
SB1175 P14	LL50	円	0.23	126.79	－	
SB1175 P15	LK50	円	0.27	126.83	－	
SB1175 P16	LK51・50	円	0.28	126.83	第150図	
SB1175 P17	LK51	不整円	0.32	126.94	－	
SB1182 P1	LP60	楕円	0.34	128.56	第152図	
SB1182 P2	LP60	不整円	0.31	128.64	第152図	
SB1182 P3	LO60	円	0.33	128.50	第152図	
SB1182 P4	LO59	不整円	0.49	128.41	第152図	
SB1182 P5	LO59	不整円	0.43	128.40	第152図	
SB1182 P6	LO・LN59	円	0.31	128.30	第152図	
SB1182 P7	LN58	楕円	0.34	128.34	第152図	
SB1182 P8	LN59	不整円	0.37	128.38	第152図	
SB1182 P9	LO61	円	0.13	128.70	第152図	
SB1182 P10-1	LO60	不整円	0.30	128.57	10YR2/1～10YR2/2	＞SKP1184・1185・1186
SB1182 P10-2	LO60	楕円	(0.33)	128.62	10YR2/2	＞SKP1185＜SKP1181
SB1182 P11	LN 59・60	不整円	0.44	128.47	第152図	
SB1182 P12	LN・LM59	不整円	0.41	128.45	第152図	
SB1182 P13	LO61	円	0.26	128.66	第152図	
SB1182 P14	LO61	円	0.24	128.61	第152図	
SB1182 P15	LN61	不整楕円	0.40	128.56	第152図	
SB1182 P16	LM59	円	0.29	128.45	第152図	

第４表　近世柱穴様ピット一覧（２）

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SB2035 P1	LC64	楕円	0.25	130.60	第154図	
SB2035 P2	LD64	不整円	0.31	130.49	第154図	
SB2035 P3	LD64	不整円	0.32	130.35	第154図	
SB2035 P4	LE64	不整楕円	0.52	130.49	第154図	
SB2035 P5	LE64	不整楕円	0.51	130.50	第154図	
SB2035 P6	LE・LF63	不整楕円	0.44	130.55	第154図	
SB2035 P7	LF63	不整楕円	0.54	130.31	第154図	
SB2035 P8	LF63	不整円	0.44	130.41	第154図	
SB2035 P9	LG63	不整円	0.57	130.30	第154図	
SB2035 P10	LG63	楕円	0.55	130.34	第154図	
SB2035 P11	LH63	円	0.34	130.32	第154図	
SB2035 P12	LC65	円	0.16	130.64	第154図	
SB2035 P13	LH63	楕円	0.50	130.25	第154図	
SB2035 P14	LD65	楕円	0.31	130.68	第154図	
SB2035 P15	LD65	円	0.29	130.68	第154図	
SB2035 P16	LE65	不整円	0.33	130.64	第154図	
SB2035 P17	LE65	不整円	0.34	130.59	第154図	
SB2035 P18	LE64	不整円	0.26	130.58	第154図	
SB2035 P19	LF64	不整楕円	0.45	130.46	第155図	
SB2035 P20	LF64	楕円	0.38	130.57	第155図	
SB2035 P21	LG64	不整円	0.37	130.47	第155図	
SB2035 P22	LG64	不整楕円	0.53	130.34	第155図	
SB2035 P23	LH64	不整楕円	0.34	130.47	第155図	
SB2035 P24	LH63	楕円	0.38	130.38	第155図	
SB2035 P25	LD65・66	円	0.23	130.69	第155図	
SB2035 P26	LD65	円	0.29	130.52	第155図	
SB2035 P27	LE65	円	0.32	130.65	第155図	
SB2035 P28	LE65	円	0.33	130.63	第155図	
SB2035 P29	LE・LF65	不整円	0.27	130.54	第155図	
SB2035 P30	LF65	不整円	0.34	130.54	第155図	
SB2035 P31	LF65	不整円	0.36	130.57	第155図	
SB2035 P32	LG64	不整円	0.36	130.56	第155図	
SB2035 P33	LG64	楕円	0.48	130.72	第155図	
SB2035 P34	LH64	楕円	0.43	130.53	第155図	
SB2035 P35	LH64	不整円	0.35	130.36	第155図	
SA1183 P1	MB62	不整円	0.50	127.68	第157図	
SA1183 P2	MB・MC62	不整楕円	0.53	127.68	第157図	
SA1183 P3	MC62	不整円	0.47	127.77	第157図	
SA1183 P4	MD61	不整円	0.33	127.86	第157図	
SA1183 P5	MD61	不整円	0.43	127.86	第157図	
SA1183 P6	MD60	不整円	0.39	127.70	第157図	
SA1183 P7	ME60	楕円	0.45	127.47	第157図	
SA1240 P1	LQ61	不整円	0.19	128.65	−	
SA1240 P2	LQ61	円	0.10	128.62	−	
SA1240 P3	LP61	不整円	0.18	128.38	−	
SA1240 P4	LP60	楕円	0.20	128.61	−	
SA1240 P5	LP60	楕円	0.17	128.66	−	
SA1261 P1	LT63	不整円	0.47	127.90	第157図	
SA1261 P2	MA62	円	0.35	127.85	第157図	
SA1261 P3	MA62	円	0.45	127.84	第157図	
SA1261 P4	MC61	円	0.38	127.51	第157図	
SKP1	MH31	不整円	0.26	124.96	10YR3/3	
SKP2	MH31・32	楕円	0.53	124.77	−	

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SKP3	MI・MH32	円	0.24	125.01	10YR2/3	
SKP4	MI32	楕円	0.28	124.84	10YR2/2	
SKP5	MI32	円	0.28	124.80	10YR3/3	
SKP6	MH32	楕円	0.39	124.85	−	
SKP7	MH32	不整円	0.36	124.81	10YR2/3	
SKP8-1	MH32	不整円	0.36	124.85	−	＞SKP8-2
SKP8-2	MH32	不整楕円	(0.50)	124.99	−	＜SKP8-1
SKP9	MH32	楕円	0.39	125.01	10YR2/3	
SKP10	MH32	楕円	0.36	124.77	10YR2/2	
SKP11	MG32	楕円	0.29	125.09	10YR2/3	
SKP12	MG31	楕円	0.37	125.00	10YR3/3	
SKP13	MG31	楕円	0.32	124.86	−	
SKP14	MG31・32	楕円	(0.32)	124.79	−	
SKP15	MG31・32	楕円	(0.35)	124.86	−	
SKP16	MG31	不整楕円	0.44	124.87	−	
SKP17	MG31	円	0.29	124.78	10YR2/3	
SKP18	MG31	不整円	0.33	125.08	10YR2/1	
SKP20	MG29	不整円	0.32	124.95	10YR2/3	
SKP21	MF29	円	0.25	124.89	10YR2/1	
SKP22	MF30	円	0.22	124.81	10YR1.7/1	
SKP23	MF30	不整円	0.25	124.89	10YR2/2	
SKP24	MG30	楕円	0.46	124.60	10YR2/3	
SKP25	MF31	不整円	0.24	124.90	10YR2/3	
SKP26	MG30	円	0.30	124.95	10YR3/3	
SKP27	MG30	楕円	0.25	125.01	10YR3/4	
SKP28	MG32	不整円	0.32	124.80	10YR1.7/1	
SKP29	MF32	円	0.32	129.01	10YR2/2～10YR3/4	
SKP30	MF32	円	0.26	124.86	10YR2/1	
SKP31	MF32・33	不整円	0.29	125.00	10YR3/3	
SKP32	MF32	楕円	0.18	125.11	−	
SKP34	MF33	不整円	0.31	124.95	−	
SKP35	MG32	円	0.19	125.15	10YR3/3	
SKP36	MG32	円	0.33	124.83	10YR2/3	
SKP37	MG32	円	0.31	125.08	−	
SKP38	MG32	円	0.32	124.87	10YR3/4	
SKP39	MG32	円	0.29	124.84	10YR3/3	
SKP40	MG・MH32	不整楕円	0.64	124.91	−	
SKP41	MG32	円	0.29	124.60	−	
SKP42	MG33	円	0.31	124.84	10YR3/3	
SKP43	MG33	楕円	0.23	125.07	−	
SKP44	MG33	楕円	0.27	125.06	10YR3/4	
SKP46	MG33	円	0.21	125.07	−	
SKP47	MG33	不整円	0.35	124.90	10YR2/2	
SKP48	MG33	円	0.24	125.19	10YR3/3	
SKP49	MG33	円	0.22	125.11	−	
SKP50	MH33	円	0.33	124.99	−	＞SKP51
SKP51	MH33	不整円	(0.37)	124.91	−	＜SKP50
SKP52	MH32	不整円	0.32	124.92	−	
SKP53	MH32	不整円	0.34	124.88	−	
SKP54	MH32	楕円	0.31	124.95	10YR2/3	
SKP55	MH32	不整円	0.34	124.73	10YR2/2	
SKP57	MH33	不整円	(0.39)	124.91	−	
SKP58	MH33	不整楕円	(0.43)	124.94	−	

第４表　近世柱穴様ピット一覧（３）

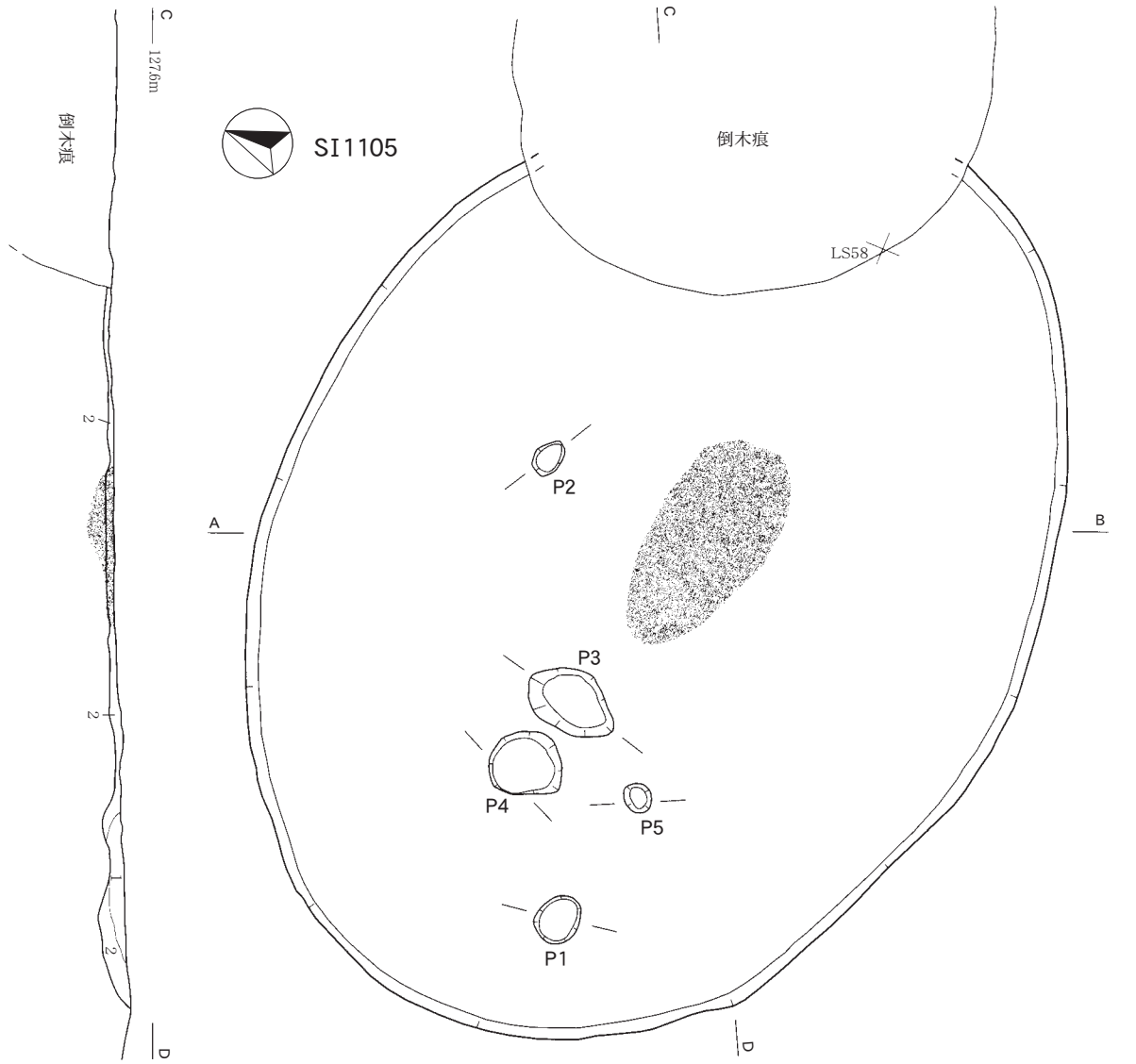
遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SKP60	MH33	円	0.22	124.91	－	
SKP61	MH33	不整円	0.29	124.80	－	
SKP62	MH33	不整円	0.33	125.21	－	
SKP63	MH33	不整円	0.27	124.86	－	
SKP64	MH33	円	0.27	124.99	－	
SKP65	MH33	円	0.18	125.13	－	
SKP66	MH33	円	0.22	125.02	10YR1.7/1	
SKP67	MH33	円	0.32	124.95	－	
SKP68	MH33	楕円	(0.34)	124.95	－	
SKP69	MG33	楕円	0.27	124.77	－	＞SKP71
SKP71	MG33	不整円	(0.31)	124.98	－	＞SKP72 ＜SKP69
SKP72	MG33	不整円	(0.31)	125.10	－	＜SKP71
SKP75	MF・MG32	不整楕円	0.47	124.64	－	＞SKP76
SKP76	MF・MG32	不整楕円	(0.38)	124.85	－	＜SKP75
SKP77	MH31	楕円	0.37	125.04	－	
SKP79	MH34	不整円	0.33	124.94	－	＞SKP80
SKP80	MH34	不整円	0.23	125.03	－	＜SKP79
SKP98	MH34	円	0.27	124.95	－	
SKP101	MH27	不整円	0.26	124.52	10YR3/3	
SKP104	MH27	楕円	0.34	124.50	10YR3/3	
SKP105	MH27	不整楕円	0.48	124.38	10YR3/3	
SKP106	MH27	楕円	0.32	124.38	10YR3/3	
SKP107	MH27	不整円	0.32	124.48	10YR3/3	
SKP108	MH27	楕円	0.36	124.43	10YR3/3	
SKP109-1	MH・MI26	楕円	(0.26)	124.38	10YR3/3	
SKP109-2	MH・MI26	楕円	0.24	124.40	10YR3/3	
SKP110-1	MI26・27	楕円	0.30	124.25	10YR3/3	＞SKP110-2
SKP110-2	MI27	円	(0.22)	124.24	10YR3/3	＜SKP110-1
SKP111	MH27	楕円	0.42	124.46	10YR3/3	
SKP112	MH27	楕円	0.26	124.54	10YR3/3	
SKP113	MH27	楕円	0.66	124.52	10YR3/3	
SKP114	MH27	楕円	0.66	124.48	10YR3/3	
SKP115	MH27	不整楕円	0.24	124.45	10YR3/3	
SKP116	MH27	不整円	0.30	－	10YR3/3	
SKP117	MH27	円	0.28	124.43	10YR2/2～10YR3/3	
SKP118	MH27	楕円	0.28	124.42	10YR3/3	
SKP119	MH27	楕円	0.30	124.43	10YR3/3	
SKP120	MI27	楕円	0.34	124.20	10YR3/3	
SKP121	MI27	円	0.26	124.06	10YR2/3	
SKP122	MI27	楕円	0.48	124.01	10YR2/3	
SKP123	MI27	楕円	0.54	124.21	10YR3/2	
SKP124	MI・MJ28	楕円	0.50	124.11	10YR2/3	
SKP126	MI28	円	0.34	124.14	10YR3/2	＞SKP127
SKP127	MI・MJ28	推定円	0.30	124.26	10YR2/3	＜SKP126
SKP130	MJ28	円	0.22	124.51	10YR3/2	
SKP133	MJ27	楕円	0.30	124.27	10YR3/2	
SKP134	MJ27	楕円	0.28	124.09	－	
SKP138	MJ26	楕円	0.22	123.84	10YR2/3	
SKP139	MJ26	楕円	0.30	124.24	10YR2/3	

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SKP141	MJ26	楕円	0.16	123.89	10YR2/3	
SKP143	MJ26	円	0.18	123.74	10YR2/3	
SKP144	MK26	円	0.26	123.65	10YR2/3	
SKP145	MK26	円	0.26	123.93	5YR3/2	
SKP146	MK26	楕円	0.26	123.86	10YR2/2	
SKP148	MK・MJ26	楕円	0.38	123.83	10YR2/2	
SKP150	MJ26	円	0.30	123.77	10YR2/3	
SKP151	MK26	円	0.18	123.83	10YR2/3	
SKP152	MK26	楕円	0.56	123.62	10YR1.7/1～10YR2/3	
SKP153	MK26	円	0.24	123.92	10YR2/2～10YR2/3	＞SKP154
SKP154	MK26	円	0.26	123.86	10YR2/2	＜SKP153
SKP155	MK26	楕円	0.38	123.63	10YR2/2	
SKP156	MK26	楕円	0.24	124.00	10YR2/2	
SKP157	MJ・MK26	楕円	0.24	124.10	10YR2/3	
SKP158	MJ26	円	0.24	124.04	10YR2/2	
SKP159	MJ27	楕円	0.36	124.13	－	
SKP162	MJ27	楕円	0.42	124.23	10YR2/3	
SKP163	MJ27	不整楕円	0.42	124.10	10YR2/2～10YR3/3	
SKP164	MJ27	円	0.24	124.16	－	
SKP168	MJ28	不整楕円	0.68	124.49	10YR2/3	
SKP170	MI・MJ28	楕円	0.46	124.39	10YR2/3	
SKP171	MI29	楕円	0.22	124.52	10YR2/3	
SKP172	MI29	楕円	0.22	124.52	10YR2/3	
SKP173	MI29	円	0.22	124.62	10YR2/3	
SKP174	MI29	円	0.24	124.43	10YR2/3	
SKP177	MJ29	円	0.30	124.17	10YR2/3	
SKP179	MJ28・29	楕円	0.42	124.27	10YR2/3	
SKP180	MJ28	楕円	0.54	124.51	－	
SKP181	MJ28	楕円	0.58	124.45	10YR2/3	
SKP182	MJ28	楕円	0.48	124.48	10YR2/3	
SKP183	MJ28	不整円	(0.32)	124.33	10YR2/3	＜SKP185
SKP184	MJ28	不整円	0.40	124.13	10YR2/2～10YR3/4	
SKP185	MJ28	不整円	(0.40)	124.22	10YR2/3	＞SKP183
SKP187	MJ28	円	(0.32)	124.04	10YR2/2	＜SKP188
SKP188	MJ28・29	円	0.42	124.45	10YR3/1～10YR3/3	＞SKP187
SKP189-1	MJ28・29	楕円	0.34	124.42	10YR2/3	
SKP189-2	MJ28・29	楕円	0.32	124.32	－	
SKP190	MJ28	不整円	0.30	124.06	7.5YR3/2	
SKP193	MJ28	円	0.28	124.12	10YR2/1	
SKP194	MJ28	楕円	0.42	124.24	10YR2/3～10YR3/3	
SKP195	MJ28	円	0.32	123.75	10YR2/2～10YR3/3	
SKP197	MK28	楕円	0.38	123.98	－	
SKP198	MK27	円	0.30	124.09	－	
SKP199	MK27	楕円	0.32	123.95	－	
SKP201	MK27	不整楕円	0.30	123.83	10YR2/3	
SKP202	MK26	円	0.52	123.83	10YR2/3	
SKP203	MK27	楕円	0.50	123.77	10YR2/2	
SKP204	MK27	円	0.62	123.62	10YR2/2	
SKP205	MK27	楕円	(0.22)	124.05	－	＜SB501P1
SKP208	MK28	円	0.32	123.82	10YR1.7/1	

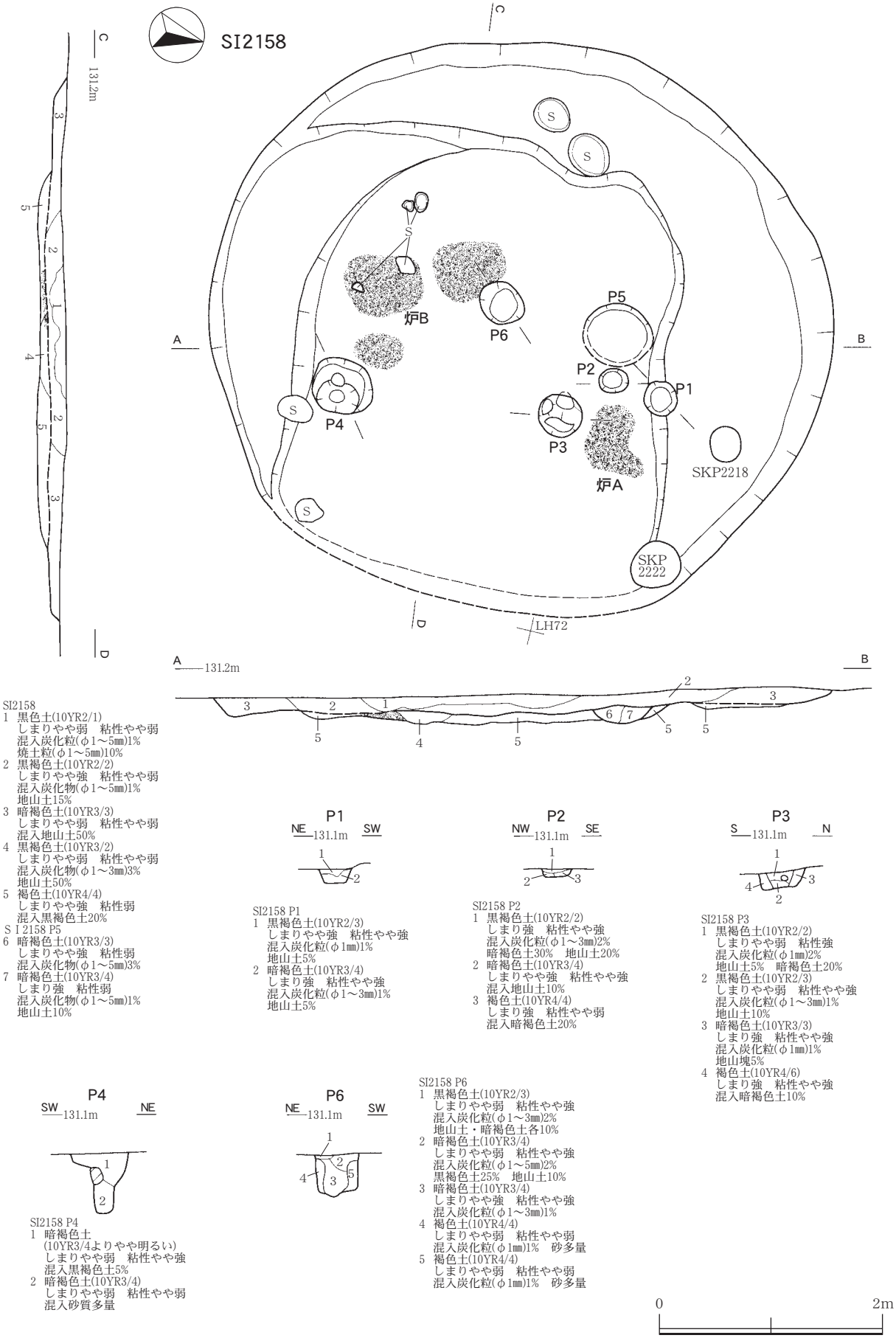
第４表　近世柱穴様ピット一覧（４）

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SKP209	MK28	楕円	0.30	123.93	−	
SKP211	MK28	不整楕円	0.42	124.03	−	＞SKP307
SKP214	MK28	推定楕円	−	124.06	10YR2/1	＜SKP215
SKP215	MK28	楕円	(0.42)	123.70	10YR2/1～7.5YR3/2	＞SKP214
SKP216	MK28	楕円	0.34	123.66	10YR2/2	
SKP217	MH27	円	0.26	123.70	−	
SKP218	ML28	円	0.40	124.09	10YR2/2	
SKP219	MK･MI28	楕円	0.34	123.88	10YR2/3	
SKP220-1	MK28	不整楕円	0.34	123.36	10YR2/2	＞SKP220-2
SKP220-2	MK28	推定楕円	0.38	123.96	10YR3/1	＜SKP220-1
SKP221	MK28	楕円	0.34	123.87	10YR2/1	
SKP222-1	MK29	推定楕円	0.24	124.24	10YR2/2	＜SKP222-2
SKP222-2	MK29	円	0.24	124.03	10YR2/2	＞SKP222-1
SKP223	MK28･29	楕円	0.36	124.13	10YR2/2	
SKP224	MK29	楕円	0.32	124.05	10YR2/1	
SKP225-1	MK29	楕円	0.34	124.10	10YR2/2	
SKP225-2	MK29	不整楕円	0.30	124.14	10YR1.7/1	
SKP226	MJ28	円	0.24	−	10YR3/3	
SKP228	MK29	楕円	0.44	124.24	10YR2/3	
SKP232	MJ29	円	0.24	124.40	10YR2/1	
SKP233	MJ29	円	0.20	124.32	10YR2/2	
SKP234	MJ29	楕円	0.24	124.29	10YR2/2	
SKP235	MJ29	円	0.20	124.29	10YR2/2	
SKP238	MJ30	円	0.24	124.47	10YR2/1	
SKP239	MJ29	不整円	0.32	124.24	10YR2/2	
SKP241	MK29	楕円	0.60	124.07	10YR2/3	
SKP242	MK29	円	0.18	124.14	10YR2/2	
SKP243	MK29	楕円	0.34	123.80	10YR2/2	
SKP244	MK29	円	0.20	123.96	10YR2/1	
SKP245	ML29	不整楕円	0.50	123.71	10YR2/2	
SKP246	ML29	不整楕円	0.32	123.92	10YR2/1	
SKP247	MK28	楕円	0.32	123.94	10YR2/2	
SKP302	MI･MJ28	円	0.20	124.41	−	
SKP307	MK28	不整楕円	−	124.03	−	＜SKP211
SKP1040	LK51	楕円	0.21	−	−	
SKP1041	LK51	不整円	0.29	127.05	−	
SKP1043	LL51	不整円	0.38	127.10	−	
SKP1046	LL50	不整円	0.45	126.60	−	
SKP1053	LL52	楕円	0.29	127.18	−	
SKP1087	LN53	不整円	0.32	126.62	−	
SKP1090	LM54	不整円	0.29	127.42	−	
SKP1102	LO52	不整	0.41	126.56	10YR2/1～10YR3/2	
SKP1103	LO･LP52	不整円	0.33	126.25	10YR1.7/1～10YR2/1	
SKP1106	MB62	不整楕円	0.64	127.60	10YR1.7/1～10YR4/4	
SKP1110	MC62	不整円	0.50	127.44	10YR1.7/1～10YR4/6	＞SKP1113
SKP1113	MC62	不整円	(0.34)	127.78	10YR2/1	＜SKP1110
SKP1120	LN50	楕円	0.84	126.71	10YR1.7/1～10YR3/1	
SKP1172	LL50	楕円	0.24	126.80	−	
SKP1184	LO60	楕円	(0.27)	128.66	10YR2/2	＜SKP1181
SKP1185	LO60	楕円	(0.26)	128.61	10YR2/1～10YR2/2	＜SKP1181･1186

遺構番号	区	平面形状	辺長(m)	底面標高(m)	土層	切り合い
SKP1188	LT63	楕円	0.50	128.00	10YR1.7/1	
SKP1189	MA63	楕円	0.60	127.92	10YR2/2～10YR4/4	
SKP1192	LS50	円	0.23	126.62	10YR2/3	
SKP1193	LR51	不整円	0.21	126.58	10YR2/2	
SKP1194	LR51	不整円	0.27	126.50	10YR2/2～10YR2/3	
SKP1195	LR51	円	0.25	126.53	10YR2/2～10YR3/3	
SKP1196	LR52	円	0.27	126.81	10YR2/2	
SKP1197	LQ･LR52	不整円	0.40	126.37	10YR2/1～10YR2/2	
SKP1198	LQ52	円	0.25	126.64	10YR2/2	
SKP1199	LQ52	不整円	0.45	126.74	10YR2/1	
SKP1200	LQ52	楕円	0.42	126.81	10YR1.7/1	
SKP1202	LP54	不整円	0.32	126.83	10YR1.7/1～10YR2/2	
SKP1204	LO54	不整楕円	0.60	127.00	10YR2/2～10YR3/2	
SKP1207	LP54	不整楕円	0.38	126.95	10YR2/1～10YR2/2	
SKP1208	LP54	不整楕円	(0.26)	126.62	10YR1.7/1	＜SKP1209
SKP1209	LP54	不整楕円	(0.23)	126.57	10YR2/1	＞SKP1208
SKP1210	LQ54	不整楕円	0.32	126.47	10YR2/1～10YR3/4	
SKP1212	LQ52	円	0.22	126.31	10YR2/1	
SKP1213	LP52	円	0.22	126.63	10YR1.7/1	
SKP1215	LQ53	不整円	0.27	126.73	10YR2/2	
SKP1217	LP52	楕円	0.24	126.55	10YR2/1～10YR3/2	
SKP1219	LS･LT63	楕円	0.40	128.46	10YR2/2～10YR2/3	
SKP1220	LT63	不整楕円	(0.44)	128.49	10YR2/2	＜SKP1221
SKP1221	LT63	不整円	(0.35)	128.38	10YR2/2	＞SKP1220
SKP1223	LT･MA63	楕円	0.70	128.15	10YR2/2～10YR2/3	
SKP1224	LT64	不整楕円	0.42	127.80	10YR2/1～10YR4/4	
SKP1231	MA63	楕円	0.30	127.90	−	
SKP1238	LQ61	楕円	0.17	128.51	10YR3/3	
SKP1241	LO53･54	不整円	0.30	126.89	−	
SKP1242	LO54	不整円	0.33	126.86	−	
SKP1243	LQ52	円	0.21	126.44	−	
SKP1244	LP51	不整円	0.32	126.32	−	
SKP1245	LP52	楕円	0.37	126.78	−	
SKP1246	LO51･52	円	0.29	126.35	−	
SKP1247	LO52	不整円	0.24	126.52	−	
SKP1248	LO52	不整円	0.25	126.44	−	
SKP1249	LO52	不整円	0.26	126.47	−	
SKP1250	LO52	楕円	0.35	126.50	−	
SKP1251	LO51	円	0.31	126.50	−	
SKP1254	LO54	円	0.41	126.57	−	
SKP1257	LP54	不整円	0.41	126.61	−	
SKP1258	LO54	楕円	0.42	127.19	−	
SKP1259	LO54･55	楕円	0.44	126.53	−	
SKP2126	LE63	円	0.51	130.31	−	
SKP2127	LE63	円	0.47	130.30	−	
SKP2430	LB65	不整円	0.33	130.64	10YR3/4～10YR4/4	
SKP2431	LB･LC64･65	楕円	0.45	130.66	10YR2/2	
SKP2432	LC65	円	0.30	130.62	10YR2/2～10YR3/3	
SKP2433	LC･LD64	不整円	0.45	130.64	10YR2/2	



第12図　ＳＩ1105竪穴住居跡



SI2158
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%
　焼土粒(φ1～5㎜)10%
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～5㎜)1%
　地山土15%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土50%
4　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)3%
　地山土50%
5　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入黒褐色土20%
ＳＩ2158 P5
6　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化物(φ1～5㎜)3%
7　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化物(φ1～5㎜)1%
　地山土10%

P1
NE 131.1m SW

SI2158 P1
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土5%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土5%

P2
NW 131.1m SE

SI2158 P2
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　暗褐色土30%　地山土20%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土10%
3　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性やや弱
　混入暗褐色土20%

P3
S 131.1m N

SI2158 P3
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化粒(φ1㎜)2%
　地山土5%　暗褐色土20%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土10%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山塊5%
4　褐色土(10YR4/6)
　しまり強　粘性やや強
　混入暗褐色土10%

P4
SW 131.1m NE

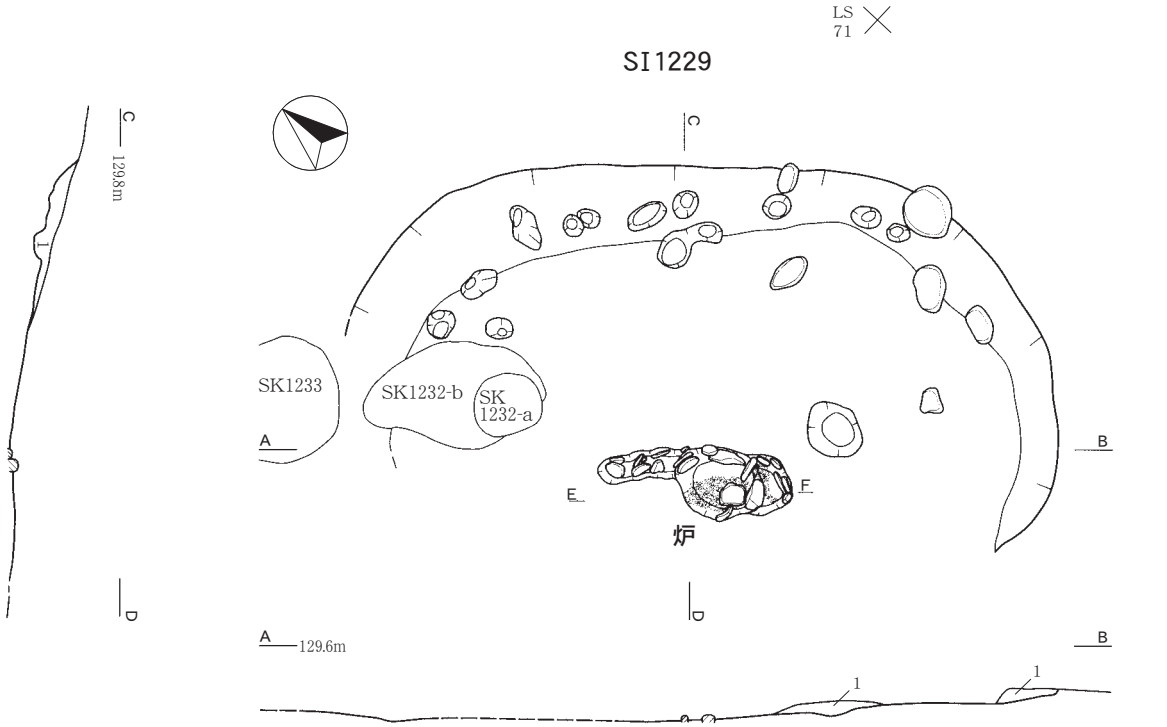
SI2158 P4
1　暗褐色土
　(10YR3/4よりやや明るい)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入黒褐色土5%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入砂質多量

P6
NE 131.1m SW

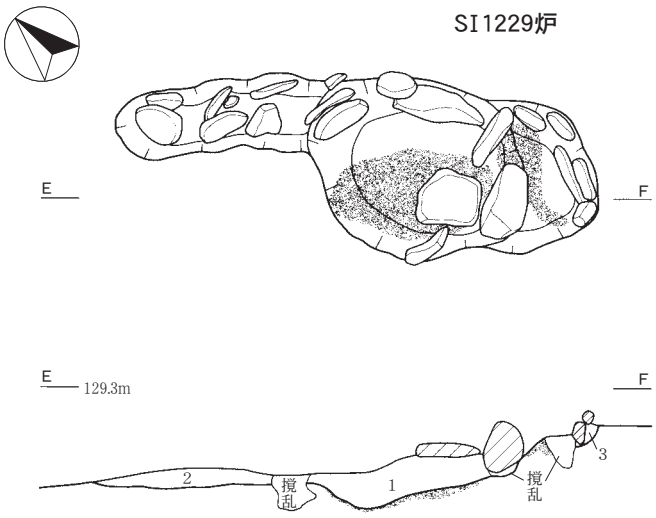
SI2158 P6
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　地山土・暗褐色土各10%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)2%
　黒褐色土25%　地山土10%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
4　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%　砂多量
5　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%　砂多量

0　2m

第13図　ＳＩ2158竪穴住居跡

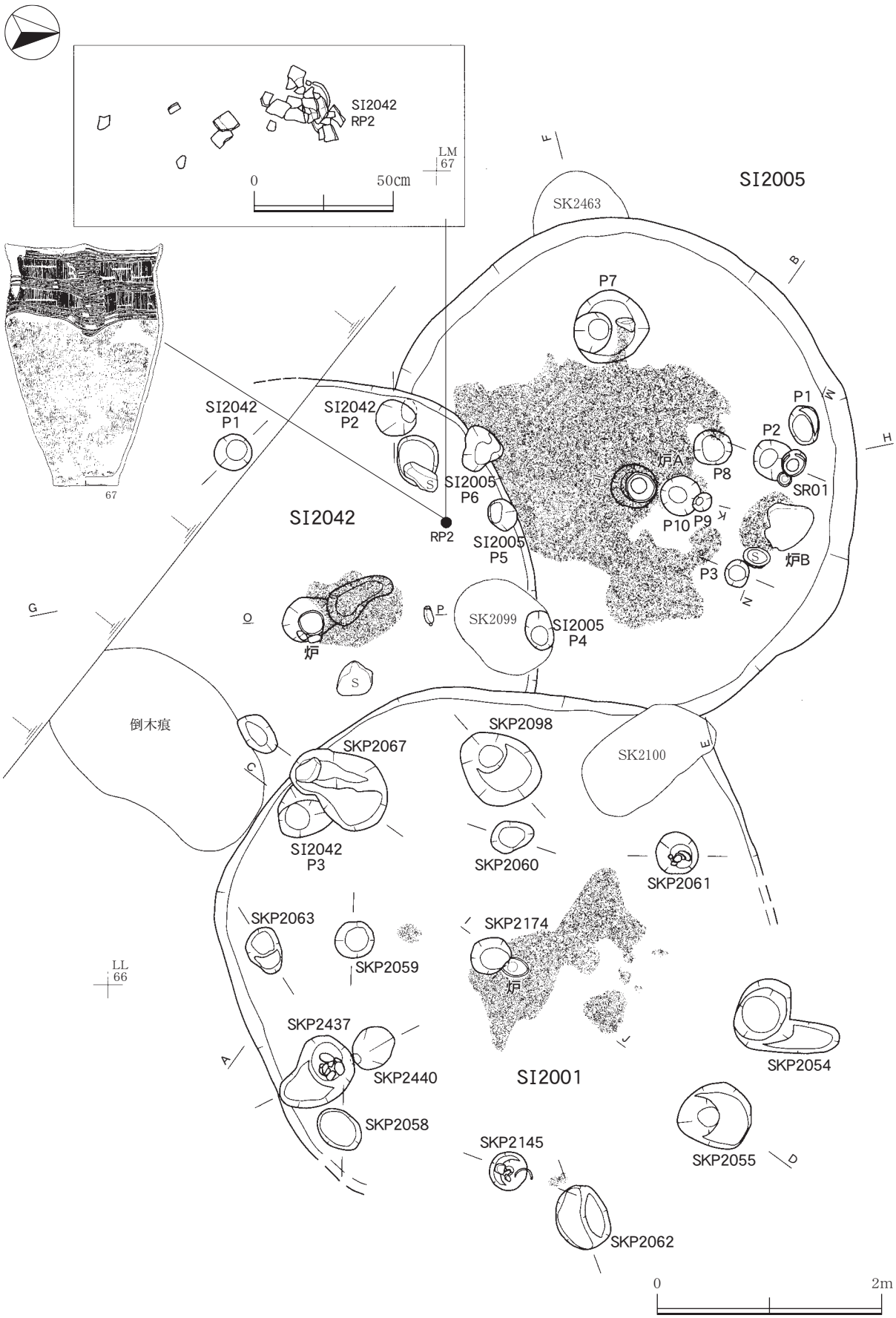


SI1229
1　褐色土(10YR4/4)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%

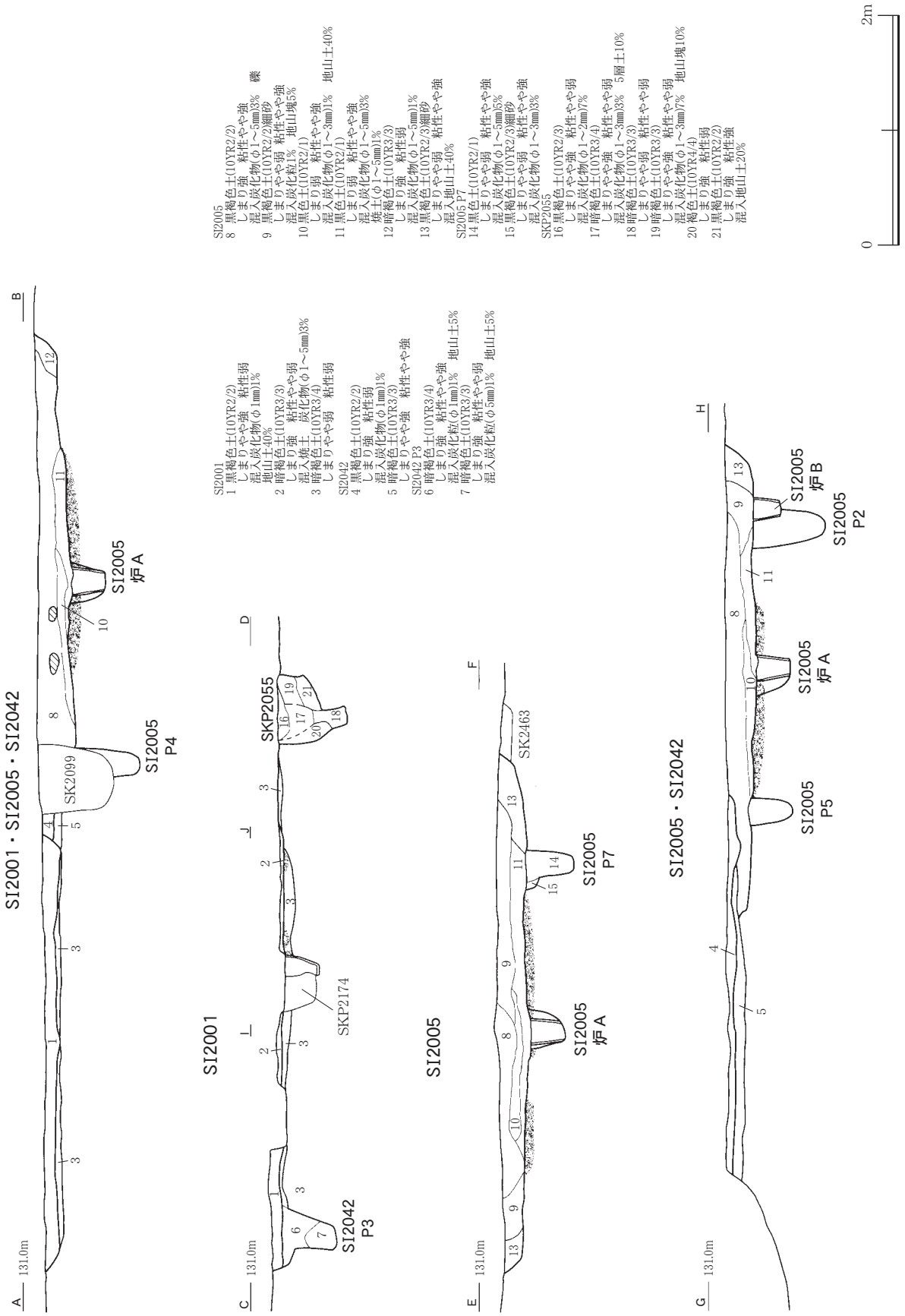


SI1229炉
1　赤褐色土(5YR4/6)
　しまり中　粘性やや弱
　混入黒褐色土10%
2　暗褐色土(10YR3/4)シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　混入焼土30%
3　暗褐色土(10YR3/4)シルト
　しまり弱　粘性中
　混入炭化物(φ1～2㎜)1%

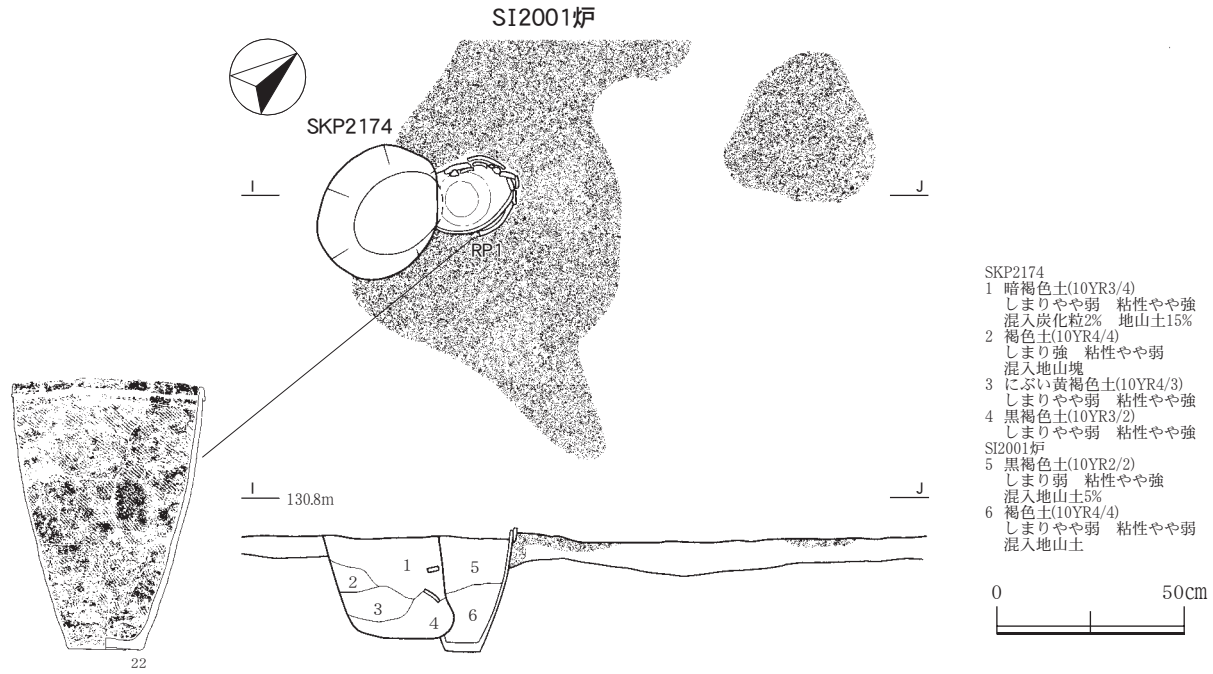
第14図　ＳＩ1229竪穴住居跡

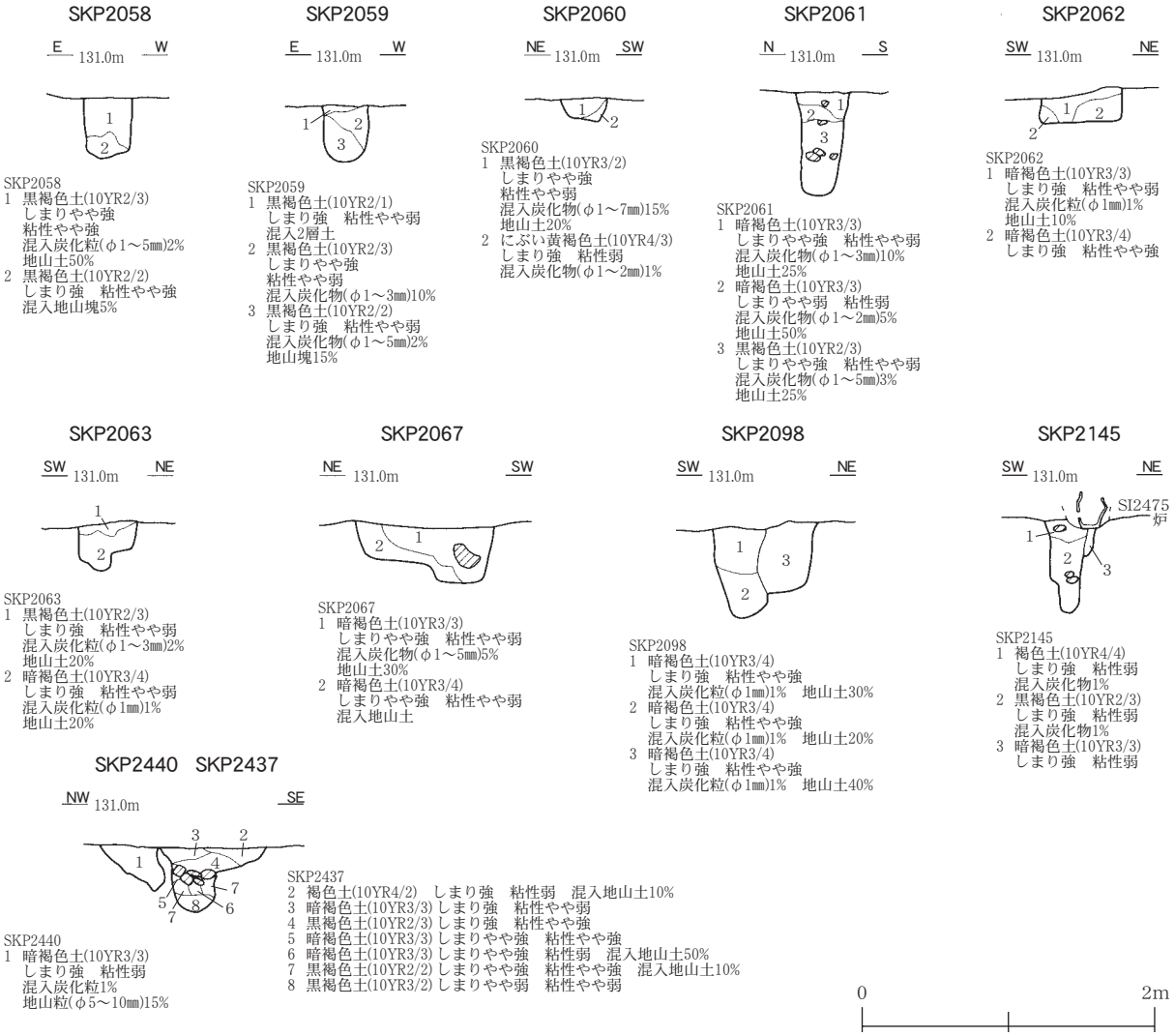


第15図　ＳＩ2001・2005・2042竪穴住居跡（１）

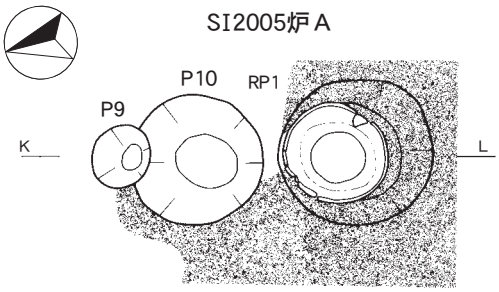


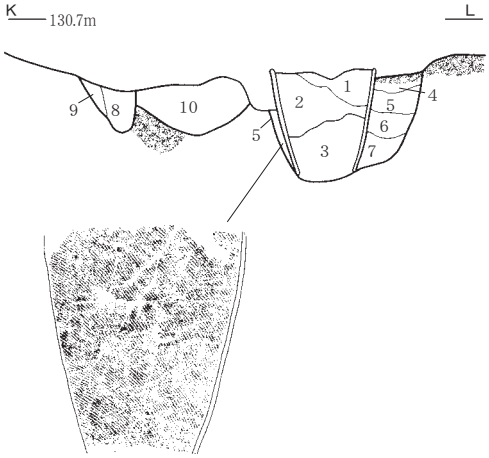
第16図　ＳＩ2001・2005・2042竪穴住居跡（２）





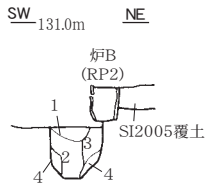
第17図　ＳＩ2001竪穴住居跡





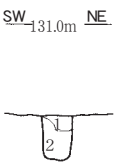
SI2005炉A
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物5%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性強
　混入黒褐色土塊20%
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまりやや強　粘性弱
　混入焼土10%　黒色土塊20%
4　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山土20%
5　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
6　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや弱　粘性やや強
7　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
SI2005 P9
8　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性やや強
9　褐色土(7.5YR4/4)
　しまりやや強　粘性弱
SI2005 P10
10 褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性弱
　混入焼土50%

SI2005P2

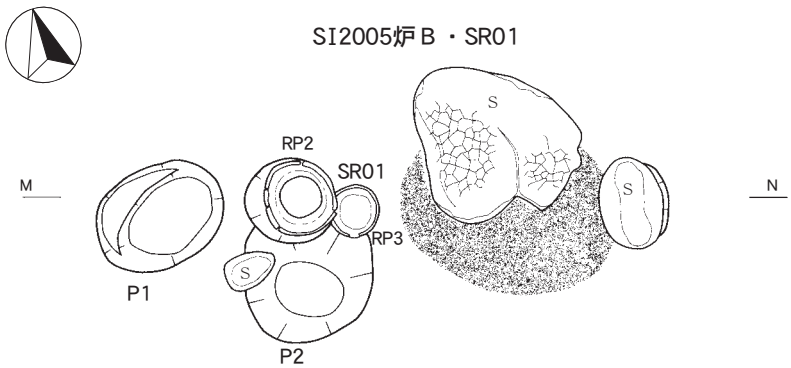


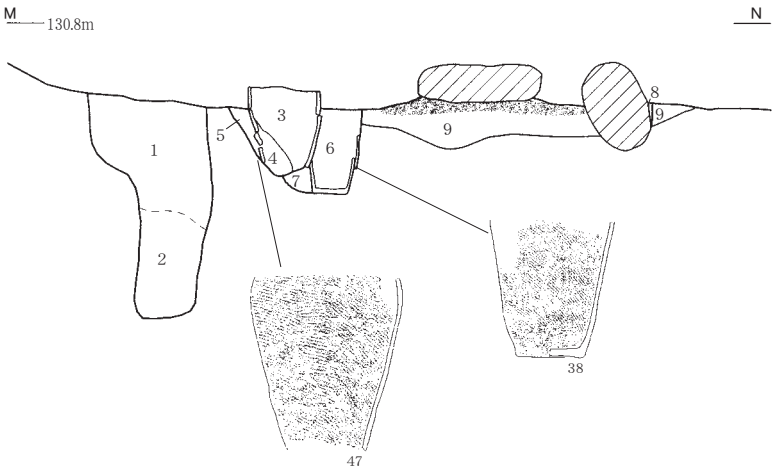
SI2005 P2
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ5～7㎜)2%
　地山土10%
2　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや弱　粘性やや強
3　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや強　粘性やや強
4　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入暗褐色土10%

SI2005P3



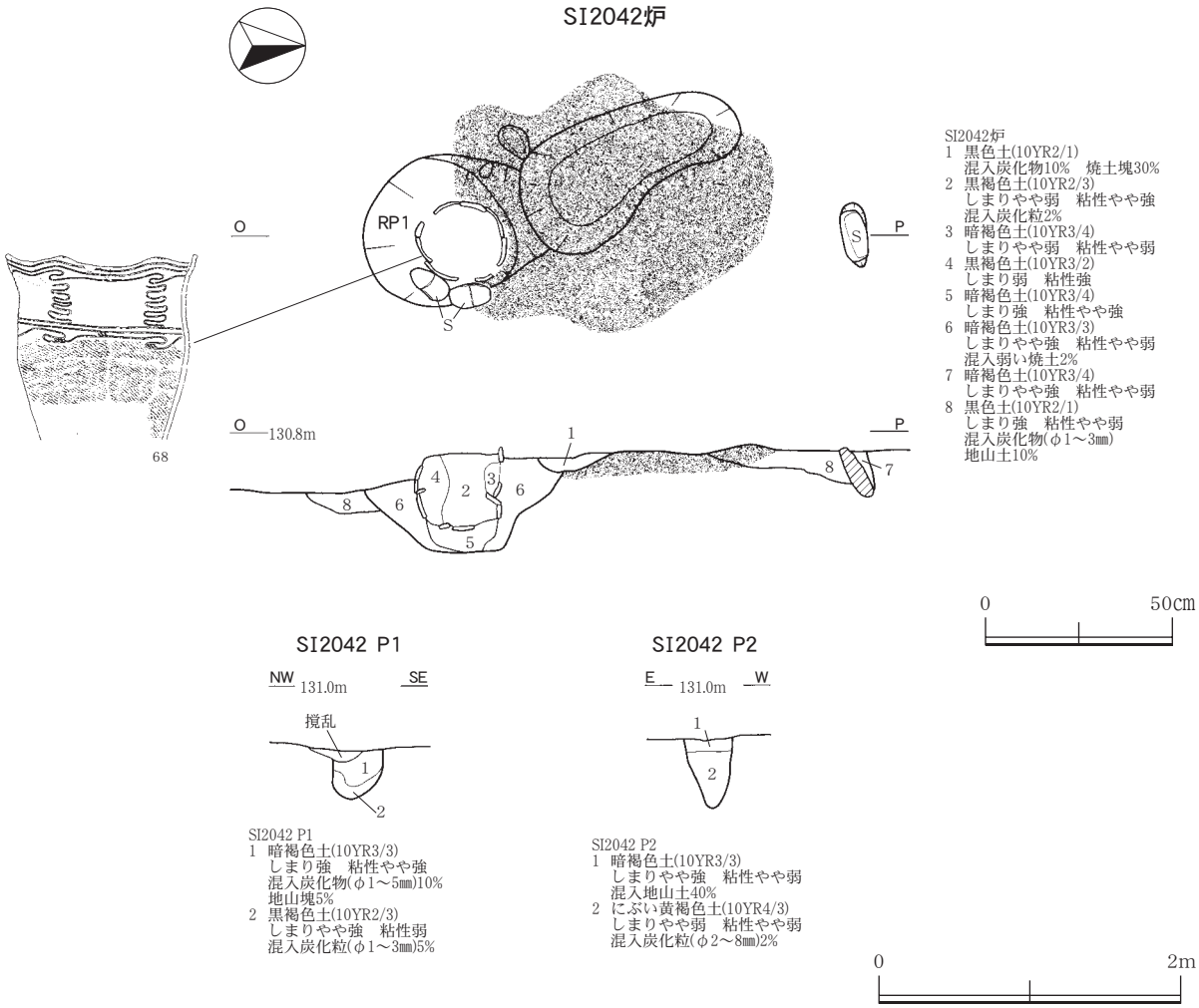
SI2005 P3
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ2～5㎜)10%
　地山粒(φ5～10㎜)25%
2　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや弱　粘性弱

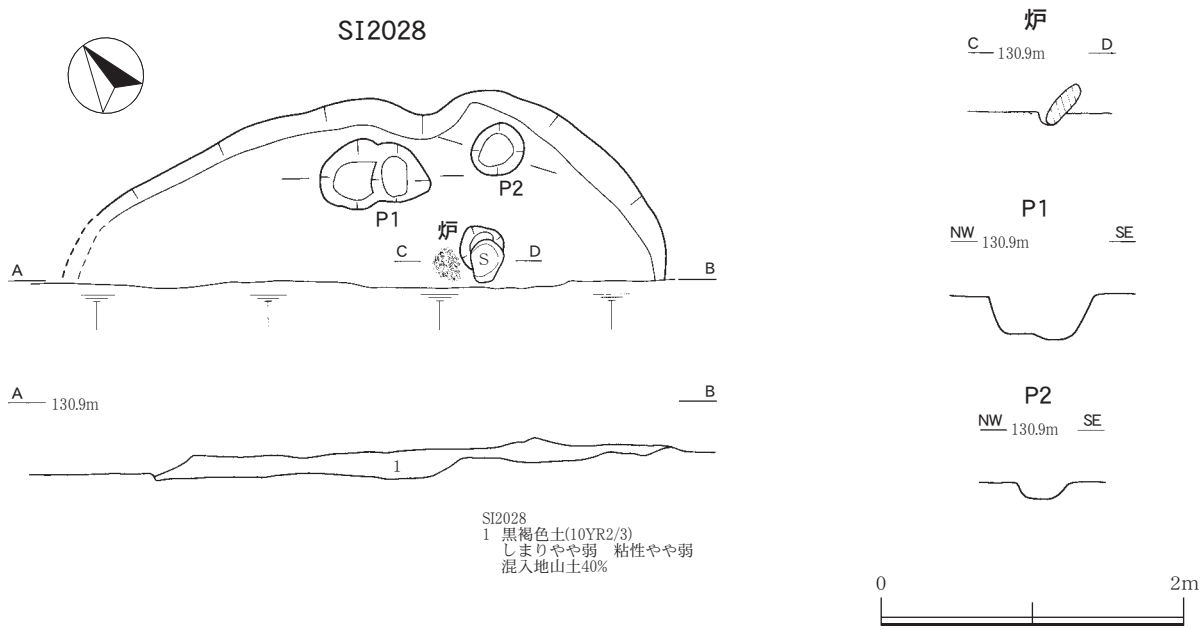




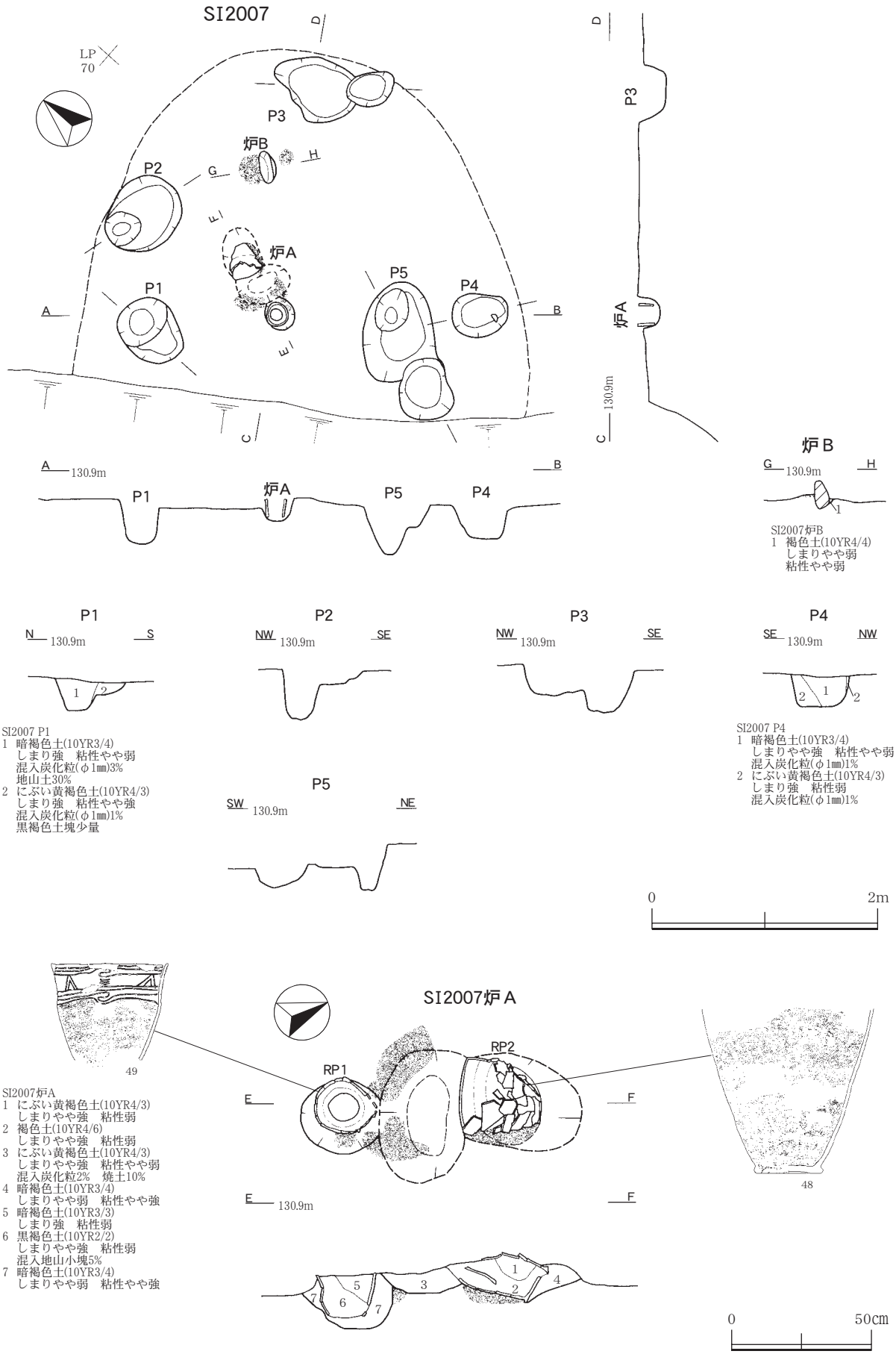
SI2005 P1
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)5%　地山土40%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ2～4㎜)5%　地山土10%
SI2005炉B
3　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物(φ2～6㎜)5%　地山土3%
4　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒2%
5　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)2%　地山土3%
SI2005 SR01
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ4～8㎜)1%　地山土10%
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
SI2005炉B 立石
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
9　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土30%

第18図　ＳＩ2005竪穴住居跡

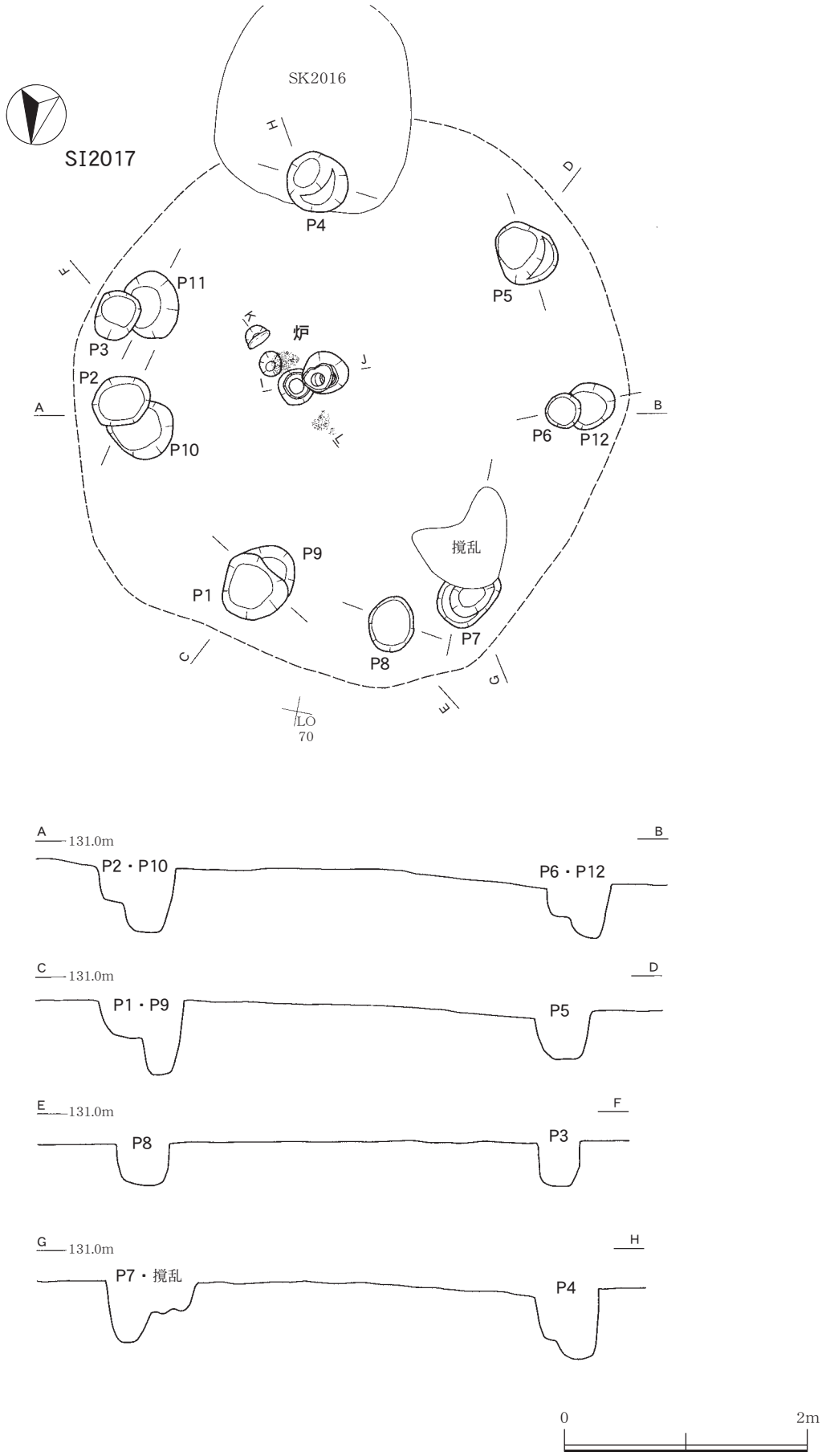




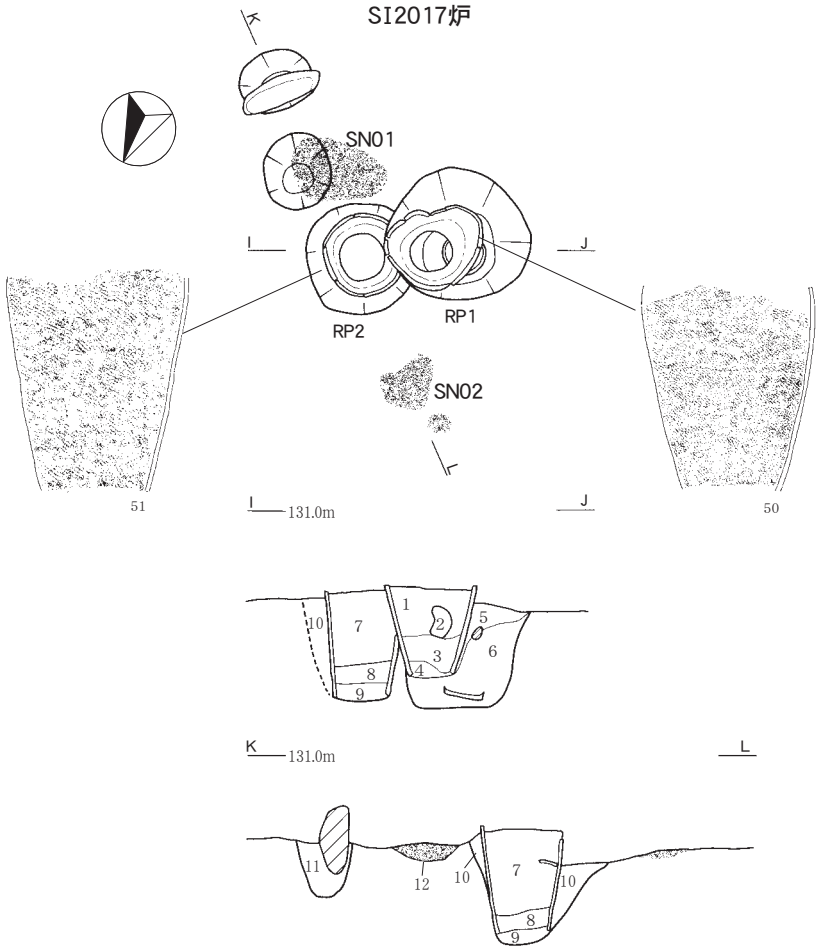
第19図　ＳＩ2042／2028竪穴住居跡



第20図　ＳＩ2007竪穴住居跡



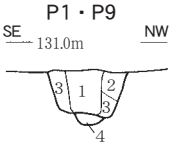
第21図　ＳＩ2017竪穴住居跡(１)



SI2017炉
1 黒色土(10YR2/1)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入炭化粒1%
2 地山塊
3 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや弱　粘性弱
4 褐色土(10YR4/4)
しまりやや弱　粘性弱
5 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや弱　粘性弱
混入炭化物(φ1～3㎜)1%　地山土30%
6 暗褐色土(10YR3/4)
しまり強　粘性弱
混入炭化物(φ1～3㎜)1%
7 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性弱
混入炭化粒(φ1～3㎜)3%
焼土粒微量　地山粒(φ1㎜)
8 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱　粘性弱
混入炭化物(φ1～5㎜)5%　地山土30%
9 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱　粘性弱
混入炭化粒(φ1㎜)1%
10 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性弱
混入炭化粒(φ1～5㎜)5%　地山土30%
11 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや弱　粘性やや強
混入黒褐色土塊
12 暗褐色土(10YR3/4)
しまり強　粘性弱
混入焼土20%

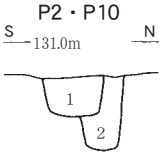
0　50cm

P1・P9



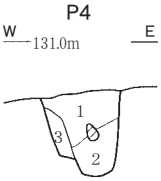
SI2017 P1
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入2層土
2 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
3 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや弱　粘性やや弱
SI2017 P9
4 褐色土(10YR4/4)
しまりやや弱　粘性やや弱

P2・P10



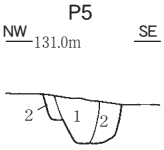
SI2017 P2
1 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや弱　粘性弱
混入炭化物(φ1～3㎜)1%
SI2017 P10
2 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性弱

P4



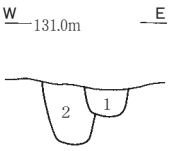
SI2017 P4
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)
しまりやや弱　粘性やや弱
2 褐色土(10YR4/4)
しまりやや弱　粘性やや弱
3 褐色土(10YR4/6)
しまりやや強　粘性やや弱

P5



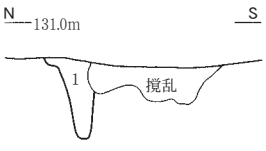
SI2017 P5
1 褐色土(10YR4/4)
しまりやや弱　粘性弱
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや強　粘性弱

P6・P12



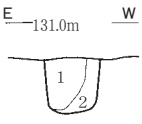
SI2017 P6
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
SI2017 P12
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや強　粘性やや弱

P7



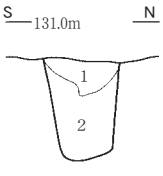
SI2017 P7
1 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性やや弱

P8



SI2017 P8
1 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化物2%
2 褐色土(10YR4/4)
しまりやや強　粘性やや弱

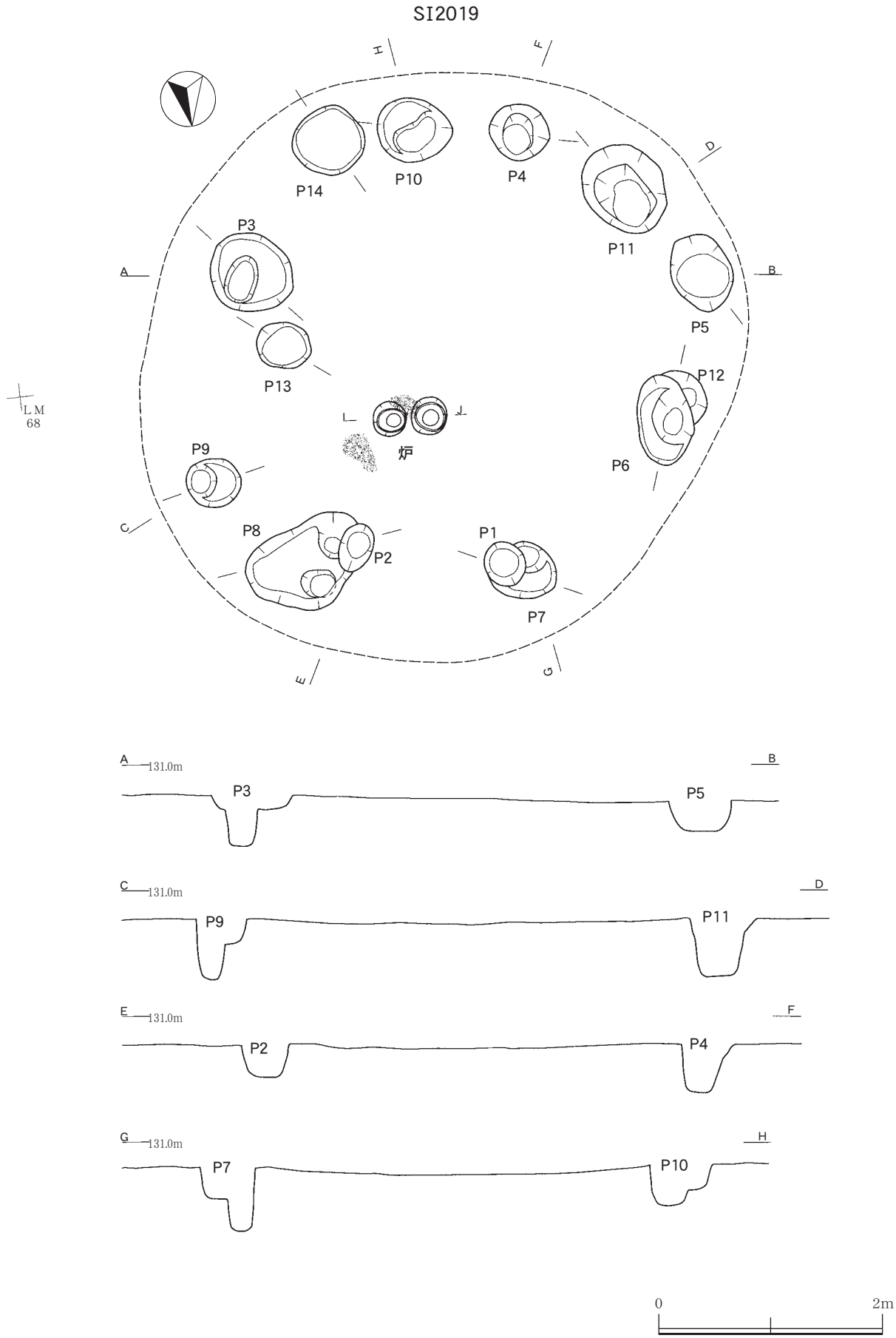
P11



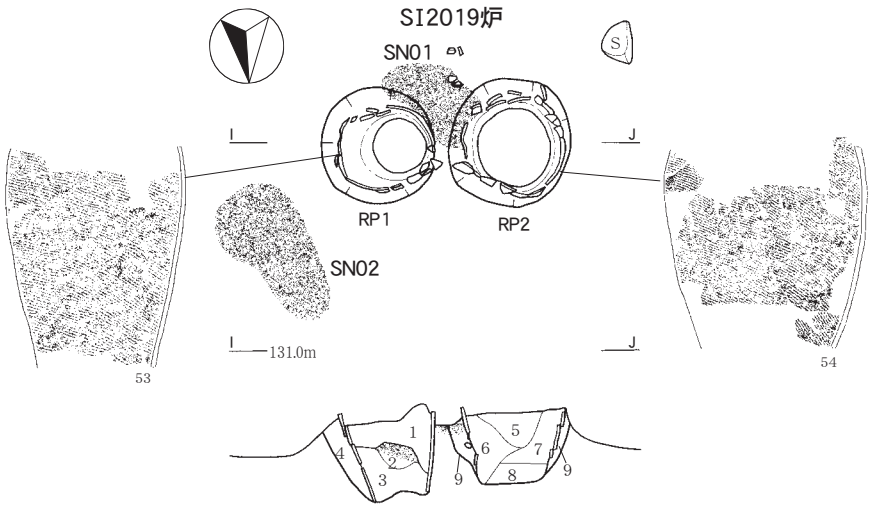
SI2017 P11
1 褐色土(10YR4/4)
しまりやや強　粘性弱
混入2層土
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや弱　粘性やや弱

0　2m

第22図　ＳＩ2017竪穴住居跡(２)

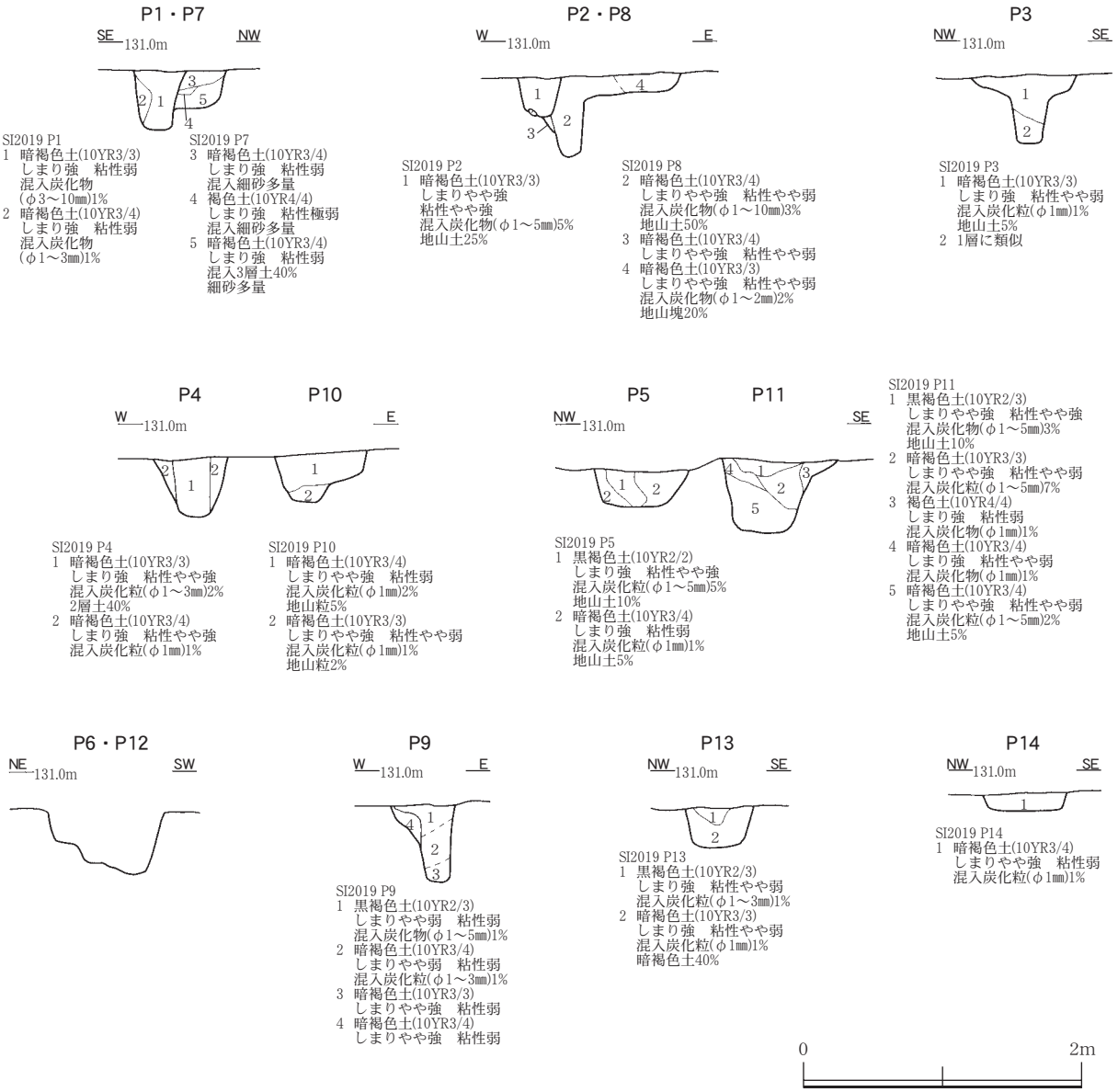


第23図　ＳＩ2019竪穴住居跡(１)



SI2019炉RP1
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性弱
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%　焼土10%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)5%　地山土40%
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山土30%
SI2019炉RP2
5　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物(φ1～5㎜)5%
6　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ1～3㎜)3%
7　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～2㎜)2%　地山土40%
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入7層9層土15%
9　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入黒褐色土

0　50cm



SI2019 P1
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化物
　(φ3～10㎜)1%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化物
　(φ1～3㎜)1%

SI2019 P7
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入細砂多量
4　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性極弱
　混入細砂多量
5　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入3層土40%
　細砂多量

SI2019 P2
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強
　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～5㎜)5%
　地山土25%

SI2019 P8
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～10㎜)3%
　地山土50%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
4　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～2㎜)2%
　地山塊20%

SI2019 P3
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土5%
2　1層に類似

SI2019 P4
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　2層土40%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%

SI2019 P10
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1㎜)2%
　地山粒5%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山粒2%

SI2019 P5
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)5%
　地山土10%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土5%

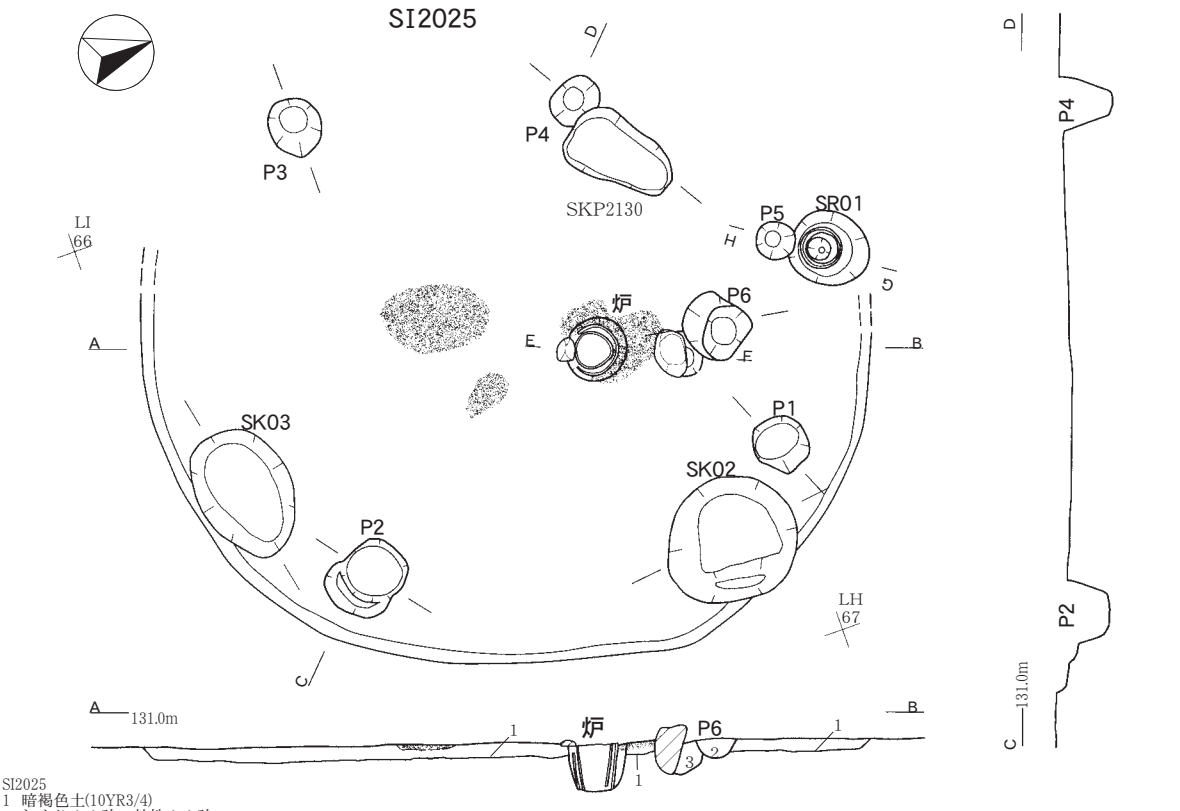
SI2019 P11
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～5㎜)3%
　地山土10%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)7%
3　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化物(φ1㎜)1%
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1㎜)1%
5　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)2%
　地山土5%

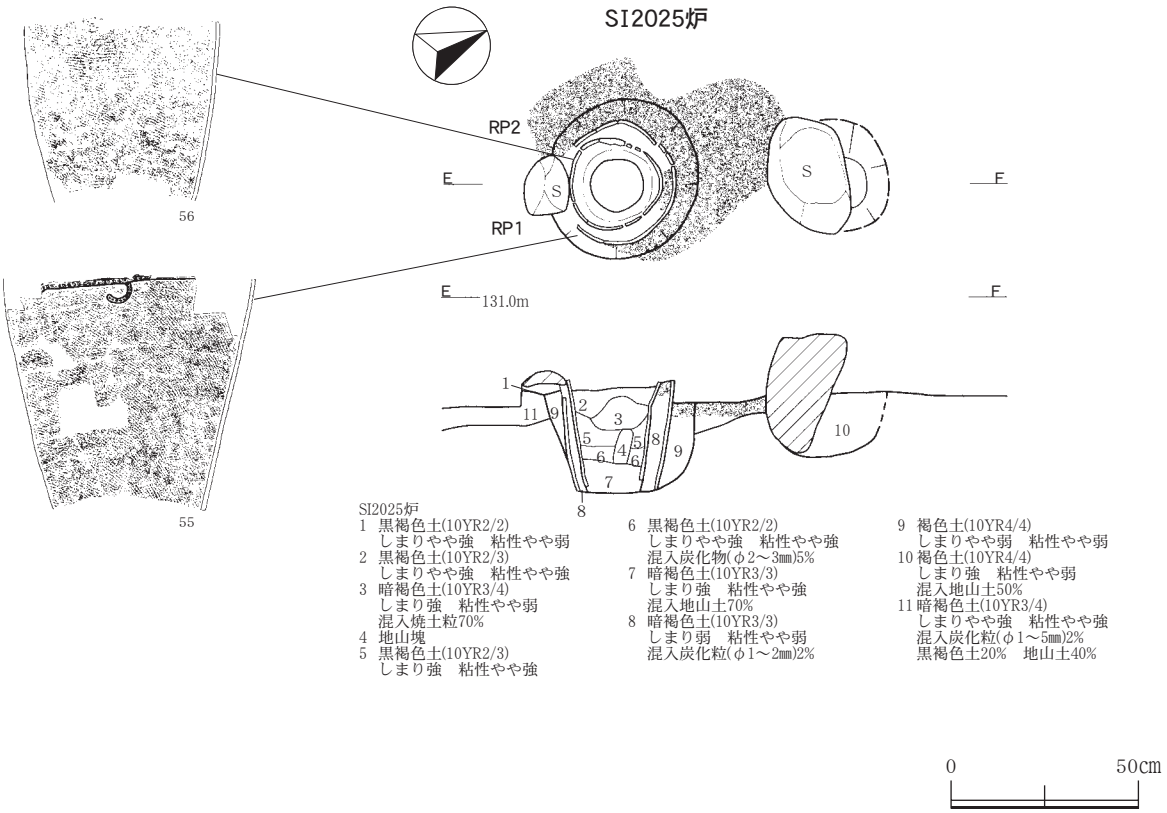
SI2019 P9
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物(φ1～5㎜)1%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性弱
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱

SI2019 P13
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　暗褐色土40%

SI2019 P14
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%

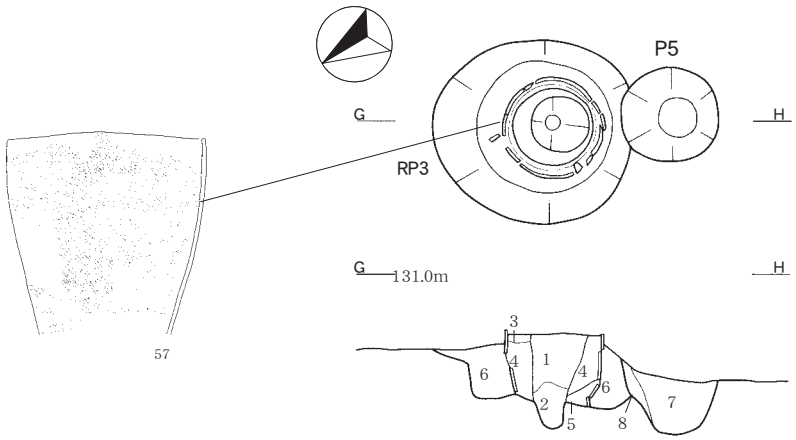
第24図　ＳＩ2019竪穴住居跡(２)





第25図　ＳＩ2025竪穴住居跡(１)

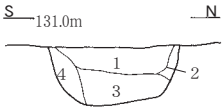
SI2025 SR01



SI2025 SR01
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり強　粘性やや弱
混入炭化粒3%
2 暗褐色土(10YR3/4)
しまり強　粘性やや弱
混入地山土10%
3 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性弱
4 褐色土(10YR4/4)
しまり強　粘性弱
混入5層土10%
5 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや弱
6 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性やや強
SI2025 P5
7 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱　粘性やや強
混入地山土15%
8 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性やや弱

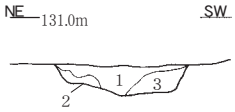
0　50cm

SK02



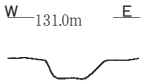
SK02
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化物(φ1～5㎜)25%
地山塊10%
2 褐色土(10YR4/4)
しまりやや強　粘性やや強
3 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性強
混入炭化物(φ1～10㎜)10%
地山土10%
4 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
地山土30%

SK03

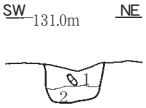


SK03
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山塊5%　地山土30%
2 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山土50%
3 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山土60%

P1

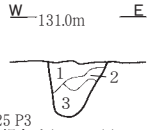


P2



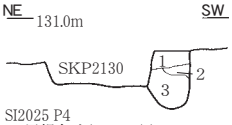
SI2025 P2
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化粒(φ3～10㎜)2%
地山塊(φ5～20㎜)5%
2 黒色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性強
混入地山土5%

P3



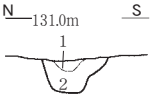
SI2025 P3
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化物(φ3～8㎜)3%
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまりやや強　粘性やや強
混入地山土20%
3 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや強　粘性やや弱

P4



SI2025 P4
1 黒褐色土(10YR3/4)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山土15%
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまり強　粘性やや弱
混入炭化物(φ10㎜)1個
3 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入炭化粒1%

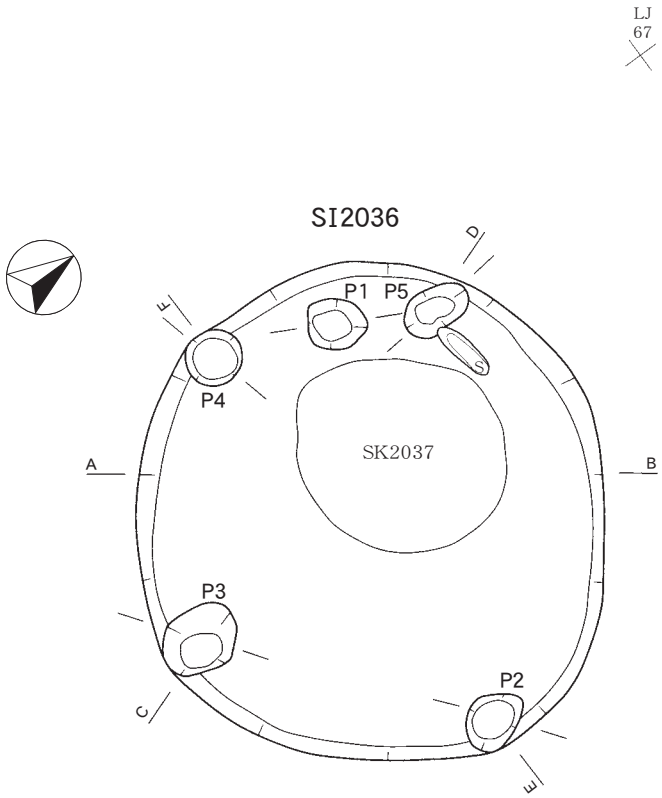
P6



SI2025 P6
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
地山土10%
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまり強　粘性やや強
混入炭化粒(φ1㎜)1%
地山土10%

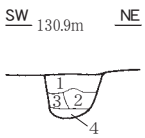
0　2m

第26図　ＳＩ2025竪穴住居跡(２)



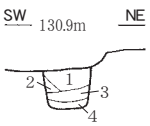
SI2036
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)20%
　地山塊5%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物(φ1㎜未満)3%
　地山塊5%
3　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入2層土30%
4　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入地山土30%

P1



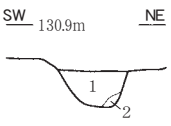
SI2036 P1
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化粒極少量
　地山土20%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性弱
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性弱
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱

P2



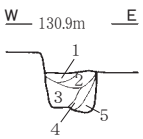
SI2036 P2
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)2%
　地山土50%
2　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入1層土30%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ1～3㎜)3%
4　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや弱

P3



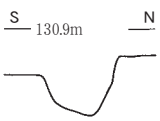
SI2036 P3
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～5㎜)7%
　地山土40%
2　褐色土(10YR4/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入1層土50%

P4

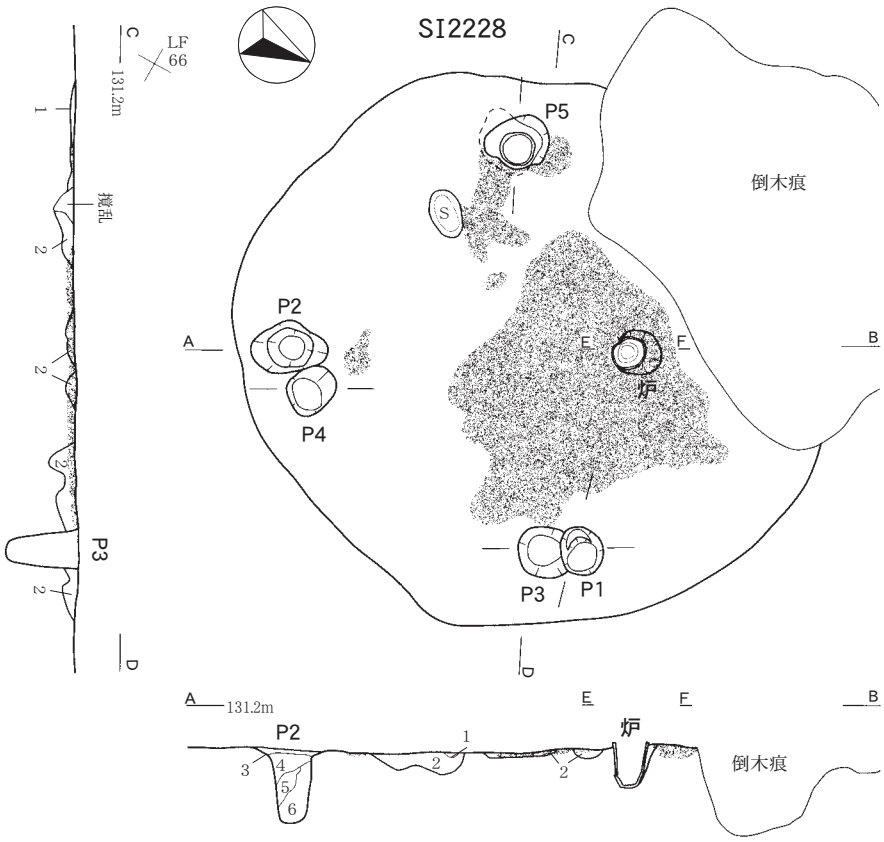


SI2036 P4
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒1%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～2㎜)2%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性弱
4　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
5　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性弱

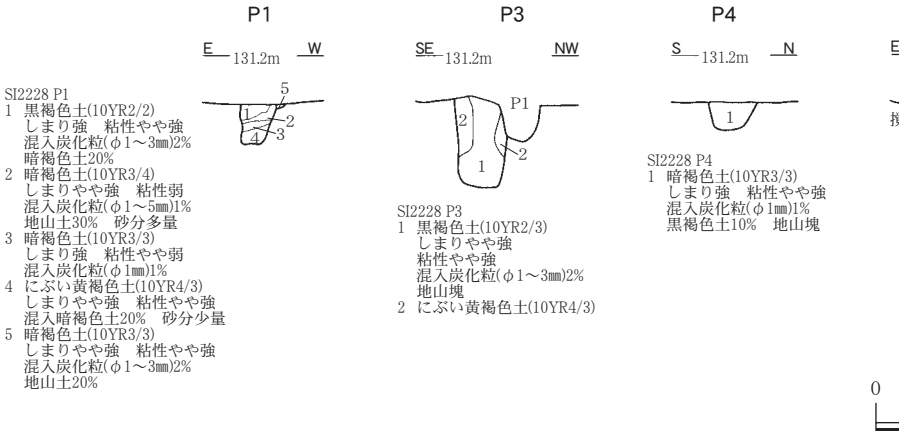
P5



第27図　ＳＩ2036竪穴住居跡



SI2228
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)3%
　暗褐色土20%　地山土30%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入地山土　黒褐色土
　砂分多量
SI2228 P2
3　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土少量
4　黒褐色土(10YR3/2)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土5%
5　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　砂分少量
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入暗褐色土　砂分多量



SI2228 P1
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　暗褐色土20%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%
　地山土30%　砂分多量
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入暗褐色土20%　砂分少量
5　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　地山土20%

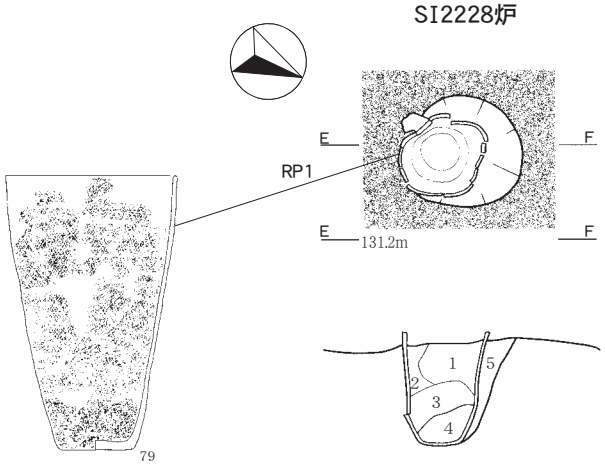
SI2228 P3
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強
　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　地山塊
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)

SI2228 P4
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　黒褐色土10%　地山塊

SI2228 P5
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　焼土粒少量　地山土5%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性弱
　混入地山土20%　砂分多量
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　砂分多量

0　2m

SI2228炉

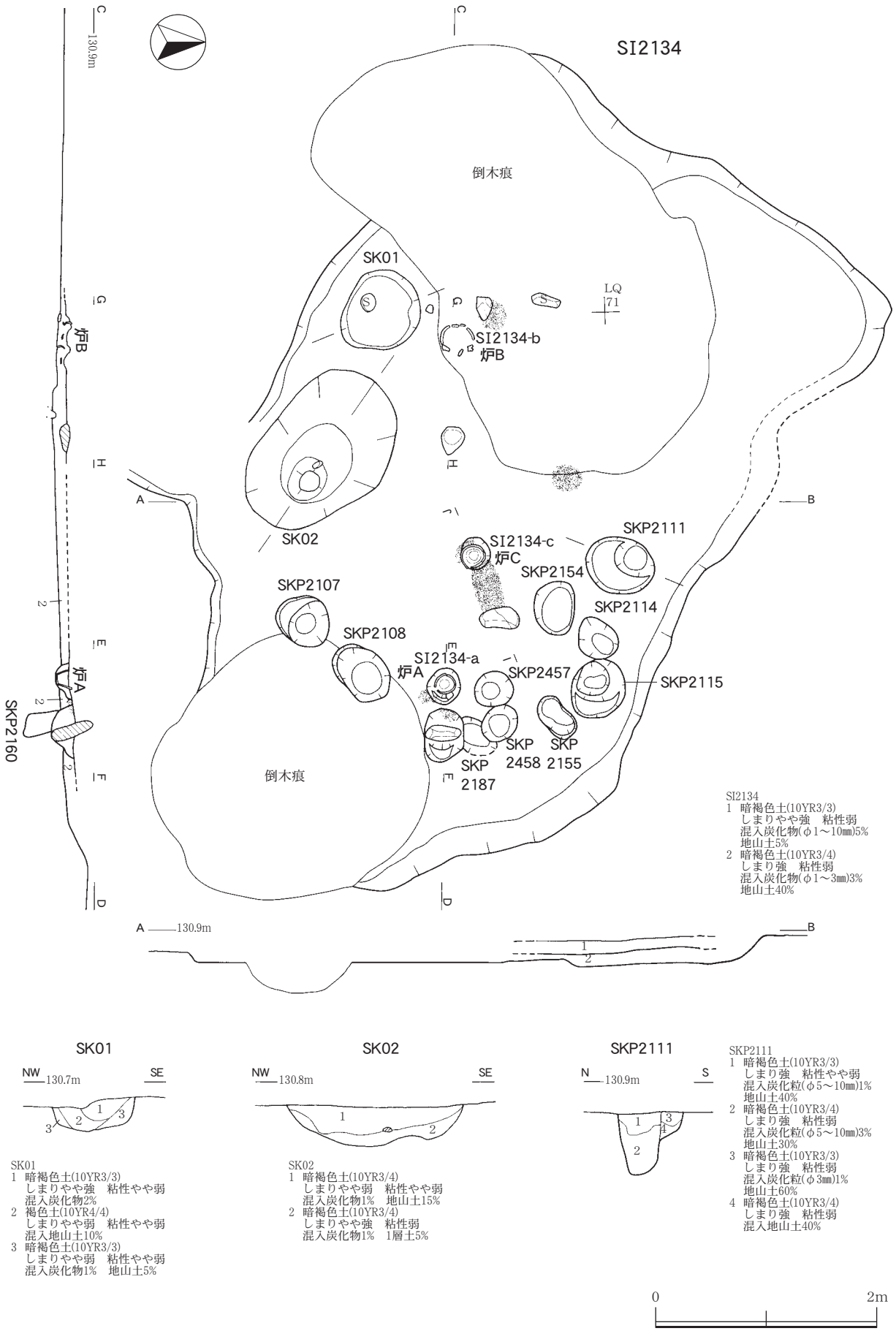


79

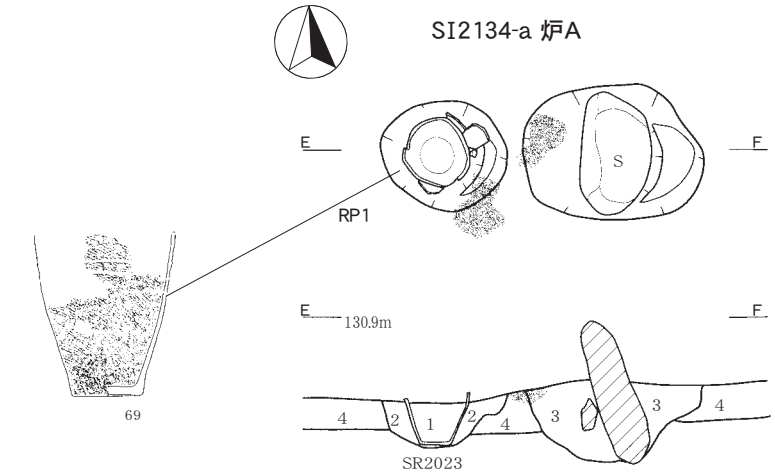
SI2228炉
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)5%
　焼土粒微量
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～2㎜)1%
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり弱　粘性弱
5　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性弱

0　50cm

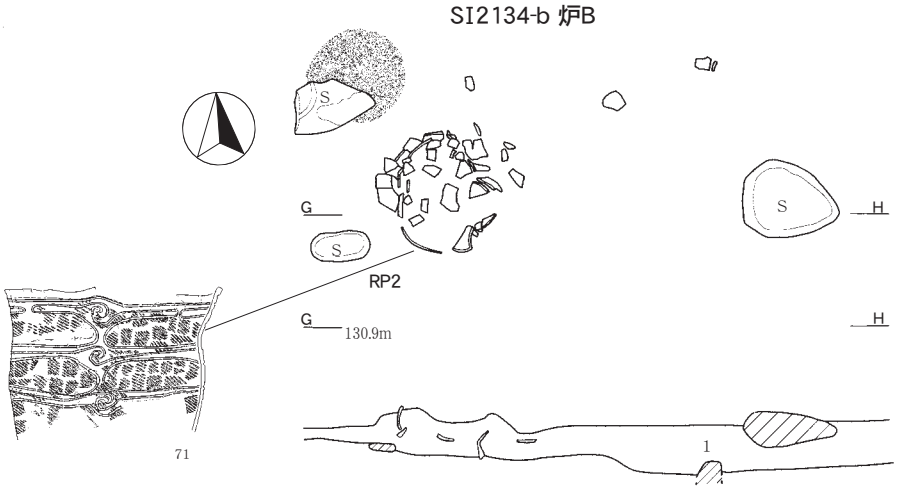
第28図　ＳＩ2228竪穴住居跡



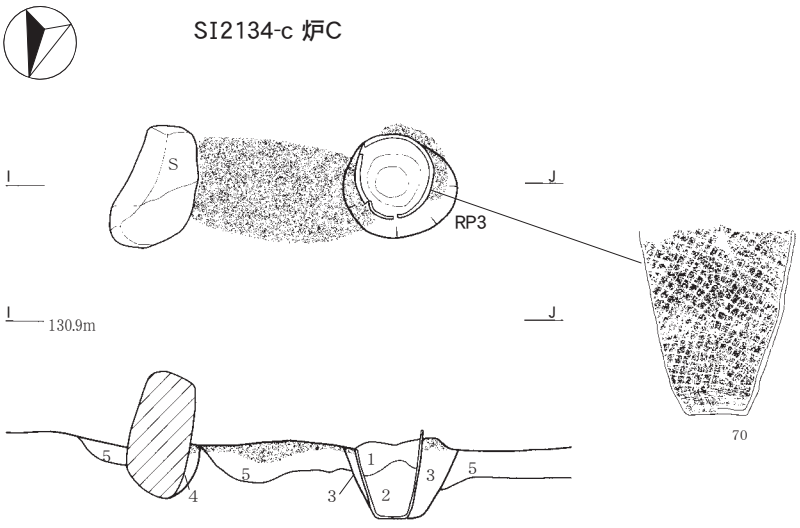
第29図　ＳＩ2134竪穴住居跡(１)



SI2134-a炉
1 黒色土(10YR2/1)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山土40%
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化物少量　地山土30%
3 暗褐色土(10YR3/3)
しまり強　粘性弱
4 暗褐色土(10YR3/4)
しまり強　粘性弱
混入炭化物(φ1～3㎜)3%　地山土40%



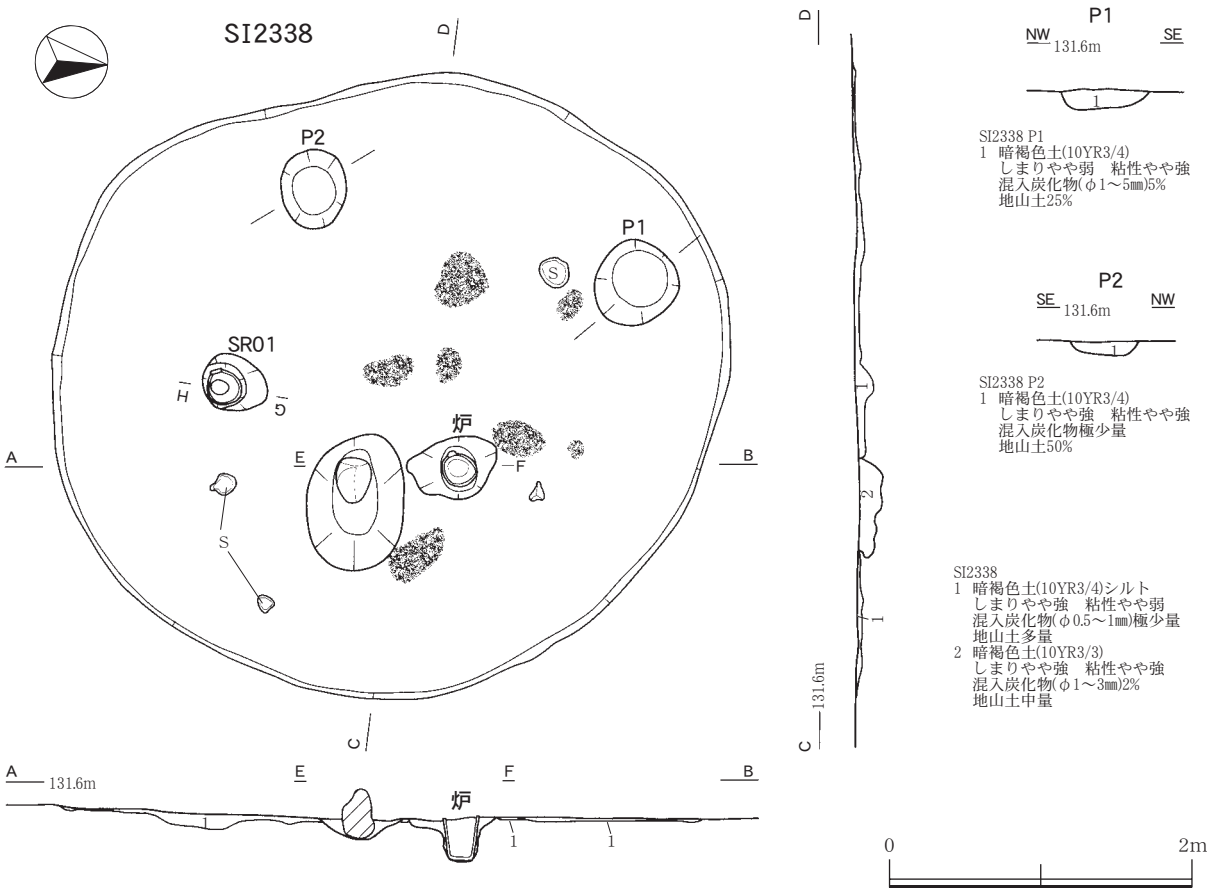
SI2134-b炉
1 黒褐色土(10YR2/3)
倒木により攪乱されている

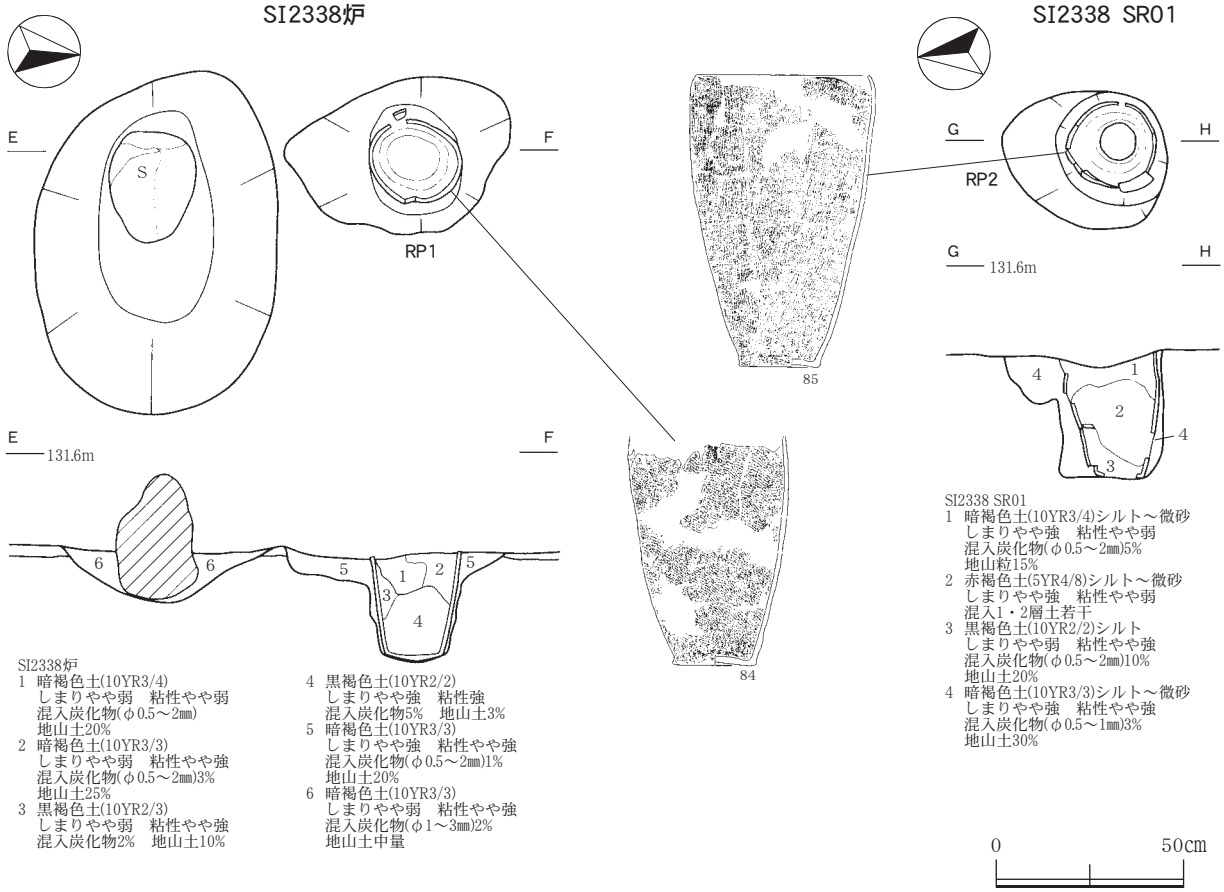


SI2134-c炉
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化物(φ2～5㎜)2%　地山土10%
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性弱
3 褐色土(10YR4/4)
しまり強　粘性なし
混入炭化物(φ1～3㎜)2%
4 褐色土(10YR4/4)
混入炭化物(φ20㎜)1%
5 褐色土(10YR4/4)
混入炭化物(φ2～3㎜)1%　地山土25%

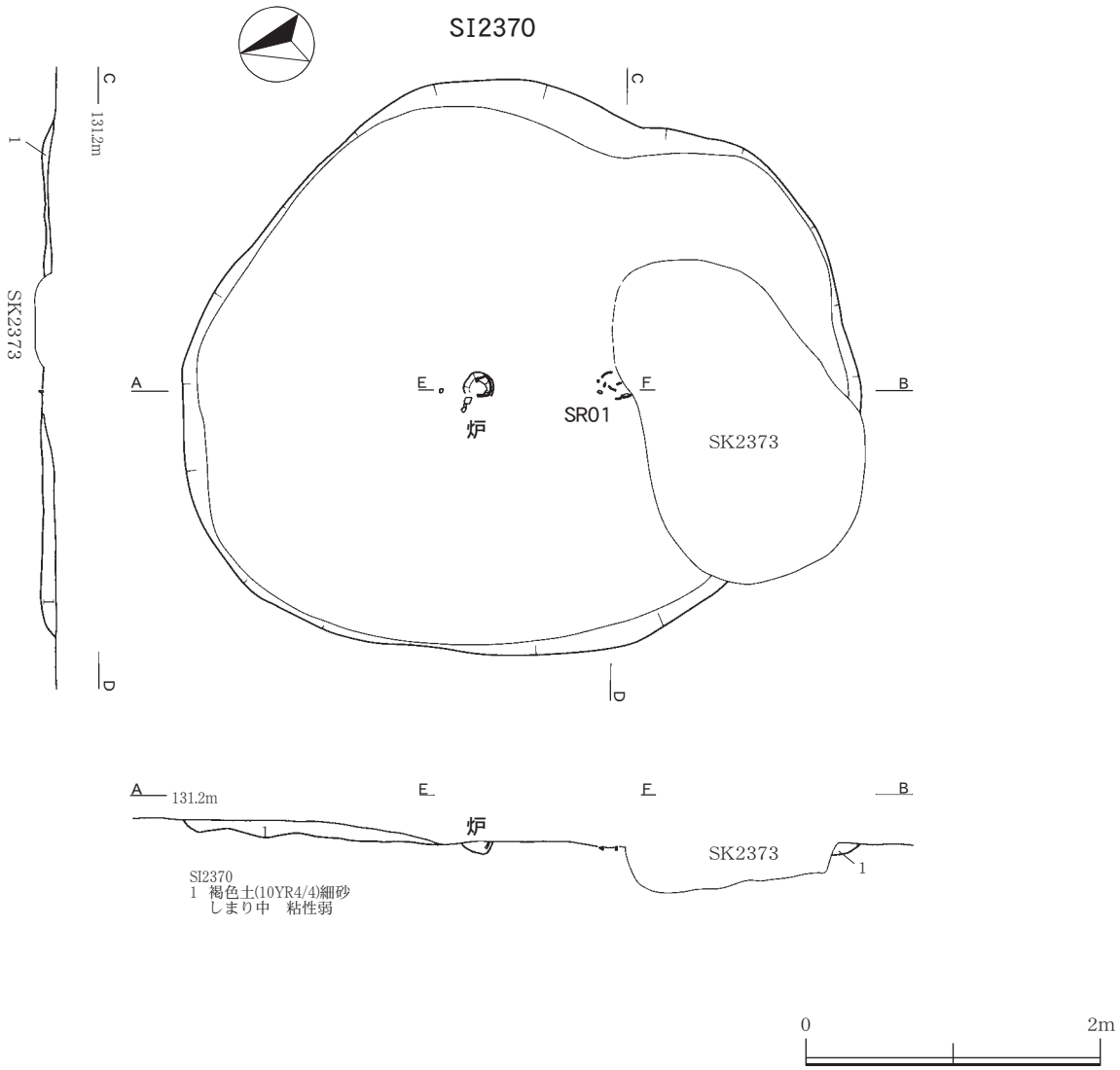
0　50cm

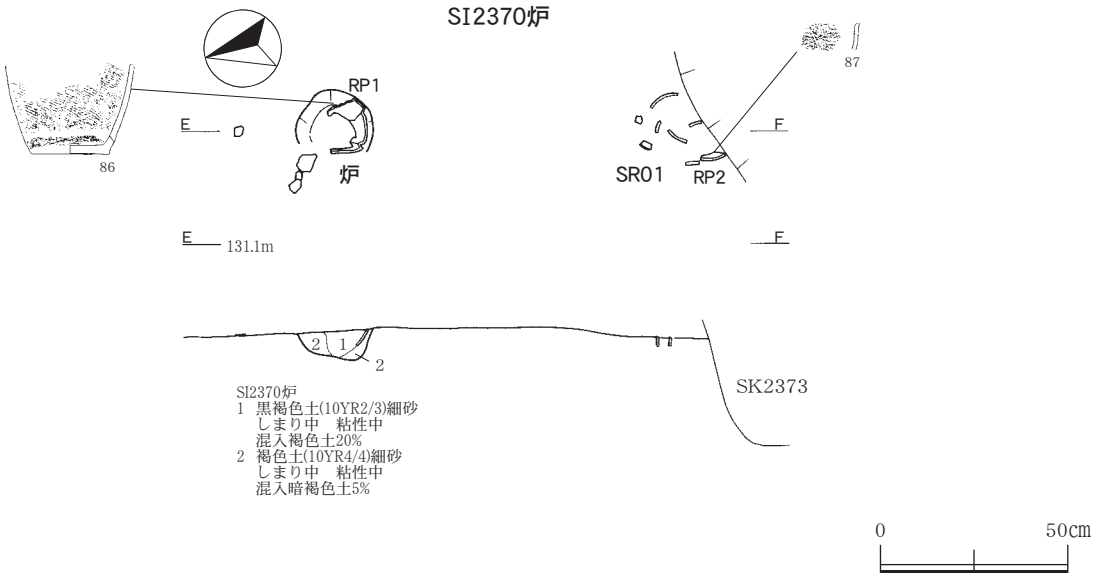
第30図　ＳＩ2134竪穴住居跡(２)



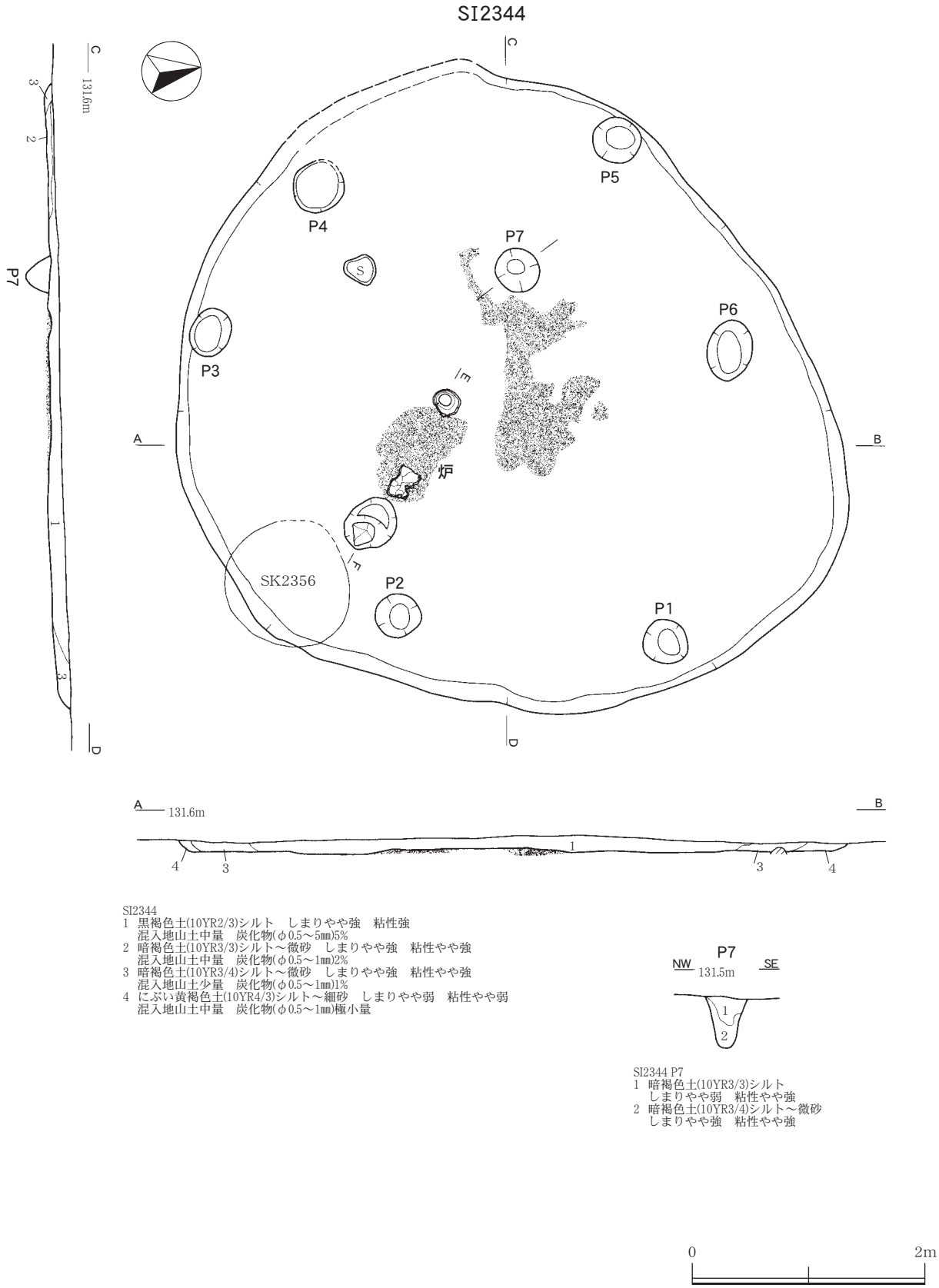


第31図　ＳＩ2338竪穴住居跡

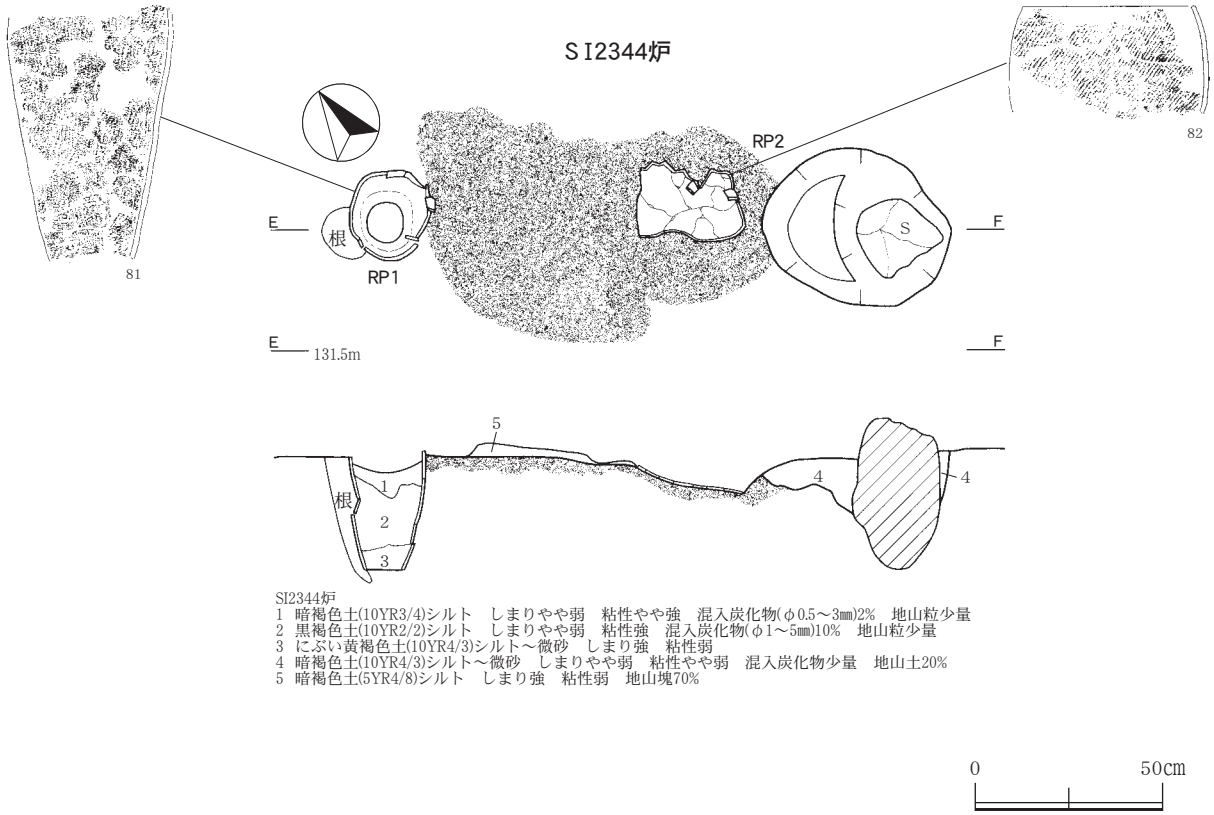




第32図　ＳＩ2370竪穴住居跡

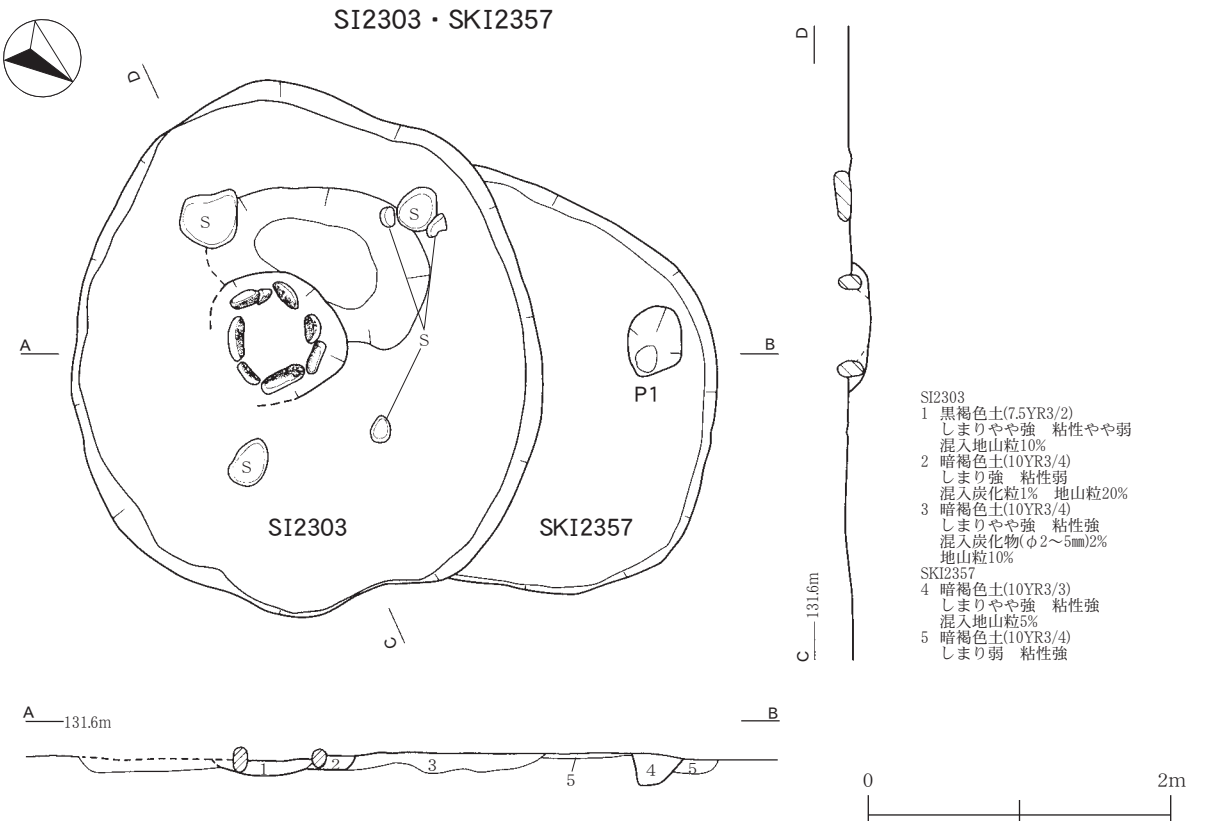


第33図　ＳＩ2344竪穴住居跡(１)



SI2344炉
1　暗褐色土(10YR3/4)シルト　しまりやや弱　粘性やや強　混入炭化物(φ0.5～3㎜)2%　地山粒少量
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト　しまりやや弱　粘性強　混入炭化物(φ1～5㎜)10%　地山粒少量
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)シルト～微砂　しまり強　粘性弱
4　暗褐色土(10YR4/3)シルト～微砂　しまりやや弱　粘性やや弱　混入炭化物少量　地山土20%
5　暗褐色土(5YR4/8)シルト　しまり強　粘性弱　地山塊70%

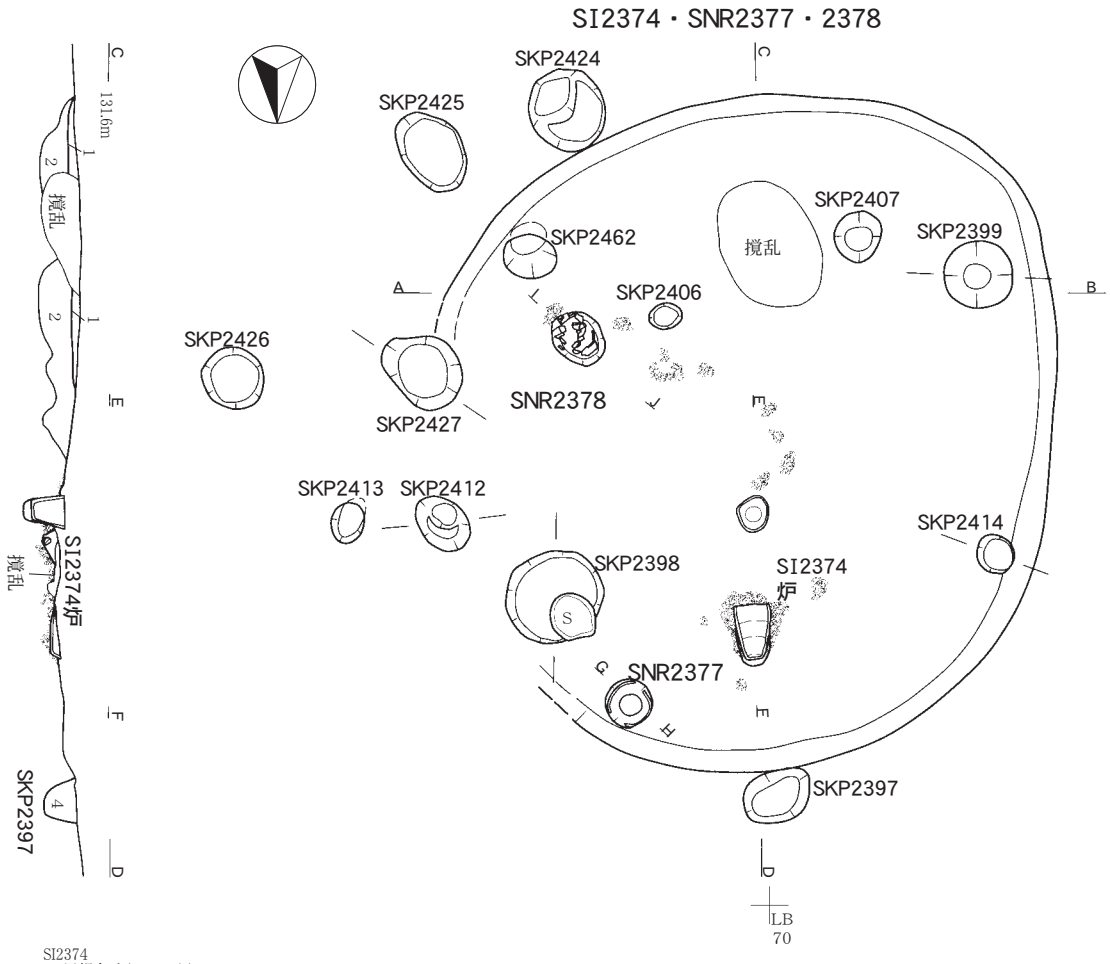
0　50cm



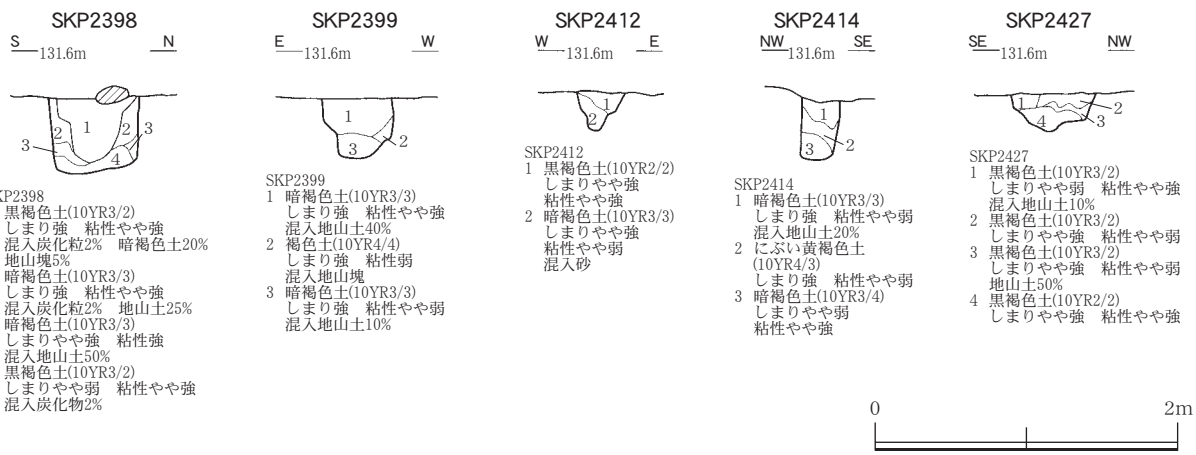
SI2303
1　黒褐色土(7.5YR3/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山粒10%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒1%　地山粒20%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ2～5㎜)2%
　地山粒10%
SKI2357
4　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性強
　混入地山粒5%
5　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり弱　粘性強

0　2m

第34図　ＳＩ2344竪穴住居跡(２)／ＳＩ2303竪穴住居跡・ＳＫＩ2357竪穴状遺構



SI2374
1　黒褐色土(10YR3/2)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化物(φ1cm)1%
2　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土50%
SKP2399
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入地山土40%
SKP2397
4　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化物2%　地山土25%



SKP2398
1　黒褐色土(10YR3/2)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒2%　暗褐色土20%
　地山塊5%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒2%　地山土25%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性強
　混入地山土50%
4　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物2%

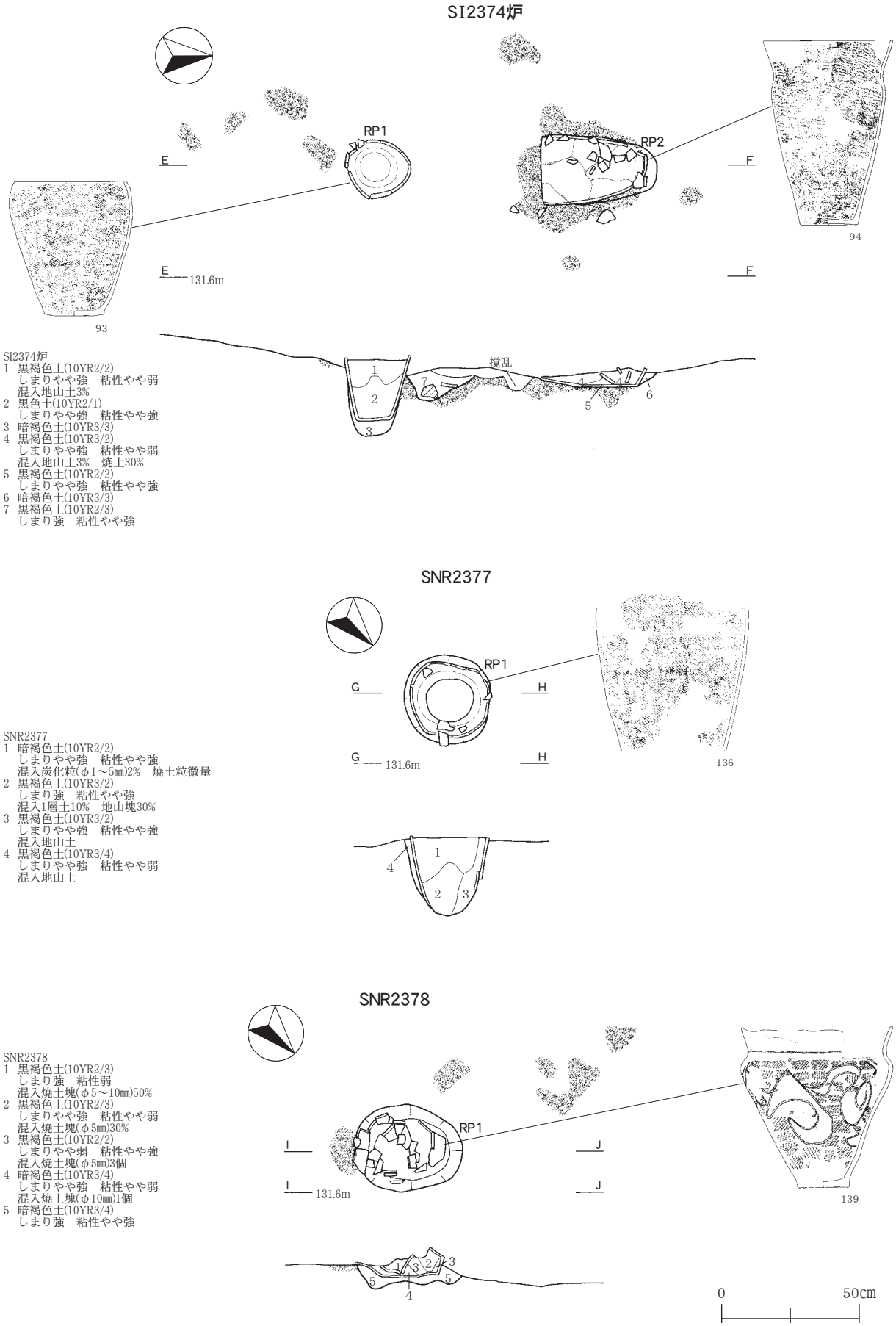
SKP2399
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入地山土40%
2　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性弱
　混入地山塊
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入地山土10%

SKP2412
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強
　粘性やや強
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強
　粘性やや弱
　混入砂

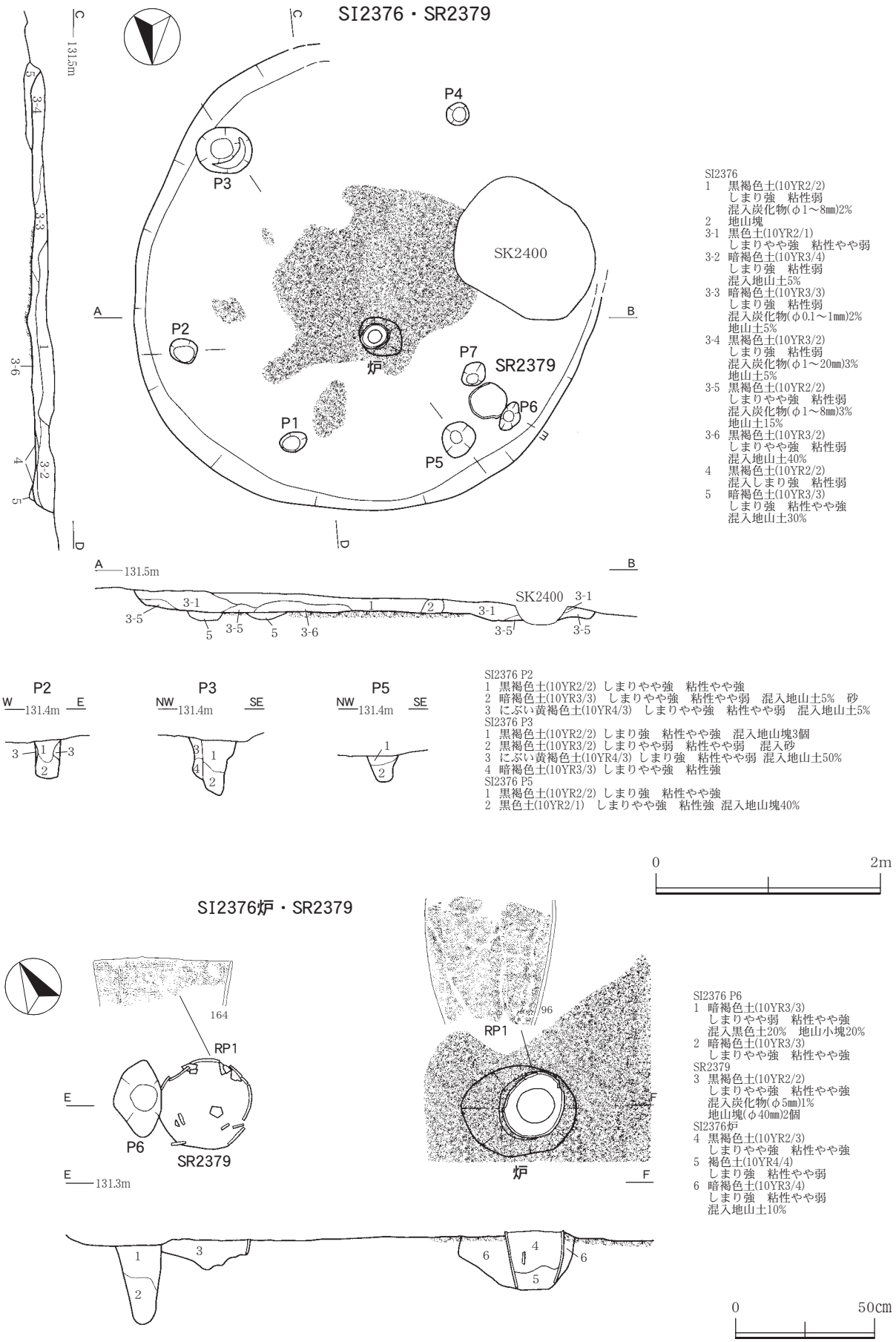
SKP2414
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入地山土20%
2　にぶい黄褐色土
　(10YR4/3)
　しまり強　粘性やや弱
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱
　粘性やや強

SKP2427
1　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山土10%
2　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
3　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　地山土50%
4　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや強

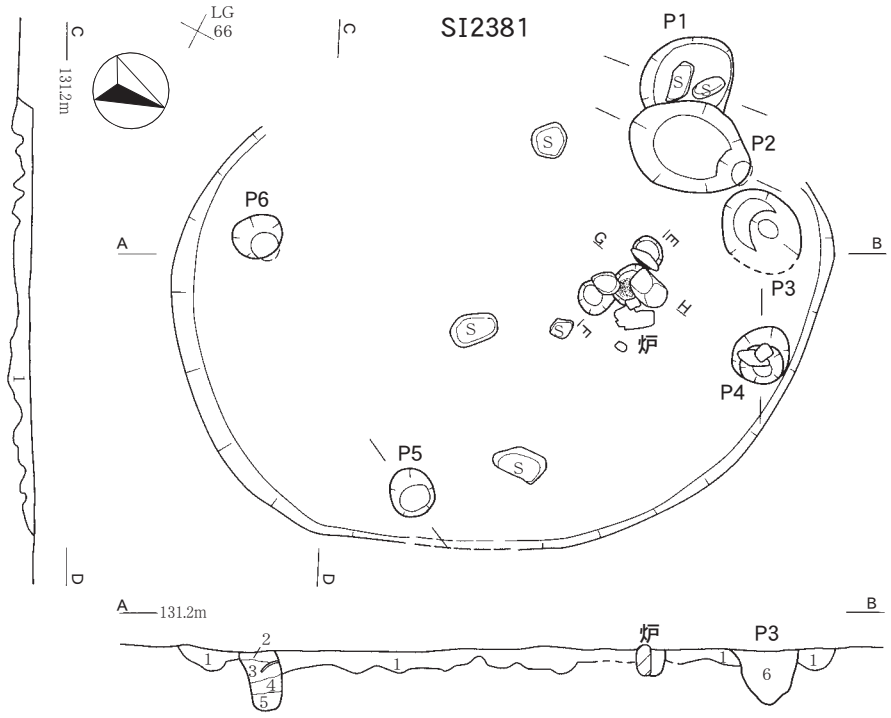
第35図　ＳＩ2374竪穴住居跡・ＳＮＲ2377・2378土器埋設炉（１）



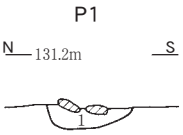
第36図　ＳＩ2374竪穴住居跡・ＳＮＲ2377・2378土器埋設炉(２)



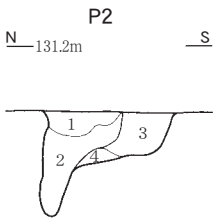
第37図　ＳＩ2376竪穴住居跡・ＳＲ2379土器埋設遺構



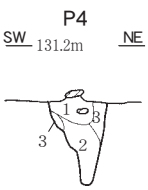
SI2381
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入地山土 黒褐色土
SI2381 P6
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　黒褐色土20%　地山土20%
3　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%
　地山塊20%
4　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山塊70%
5　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%
SI2381 P3
6　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土30%
　炭化粒(φ1～5㎜)3%



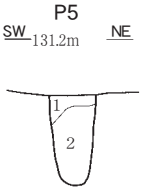
SI2381 P1
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強



SI2381 P2
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土10%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土20%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土10%
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土40%



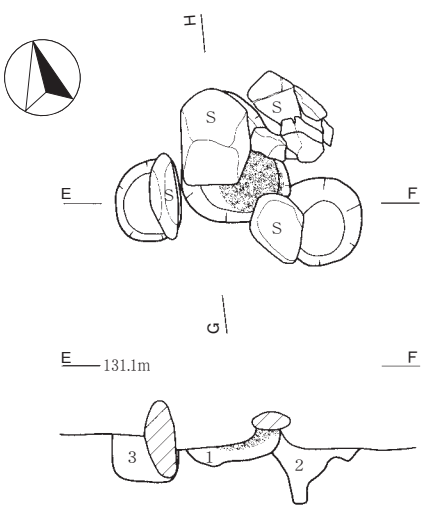
SI2381 P4
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%
　地山土10%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入黒褐色土塊10%



SI2381 P5
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山粒(φ3～5㎜)2%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%

0　2m

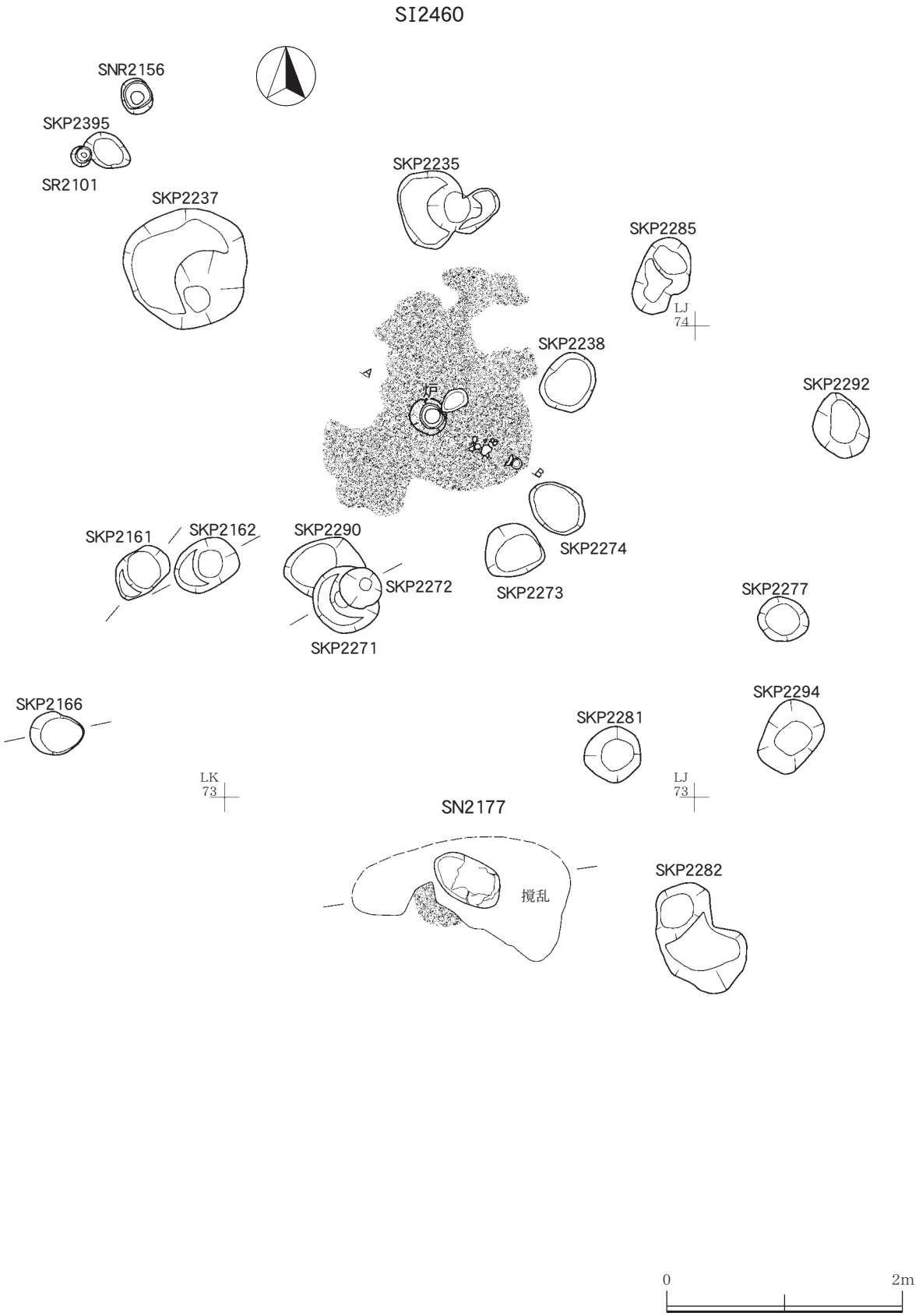
SI2381炉



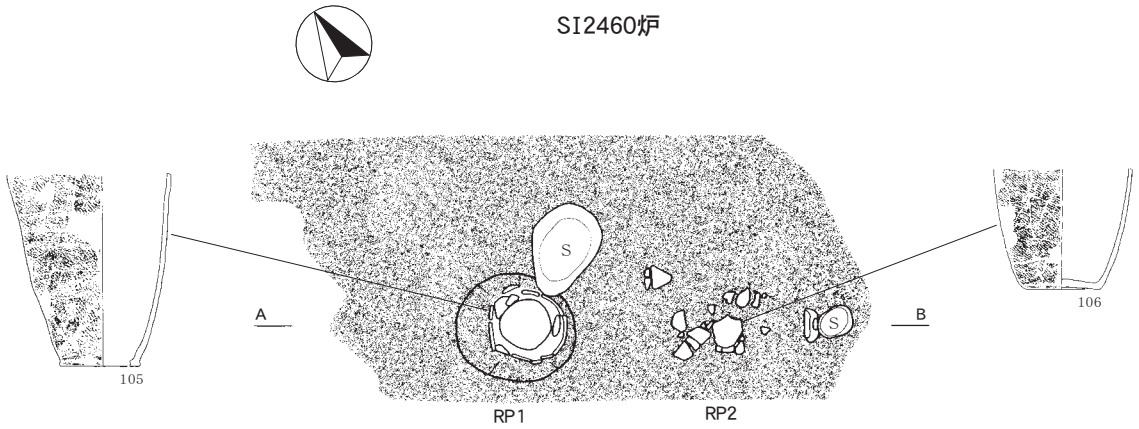
SI2381炉
1　黒褐色土(10YR3/2)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土3%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　礫1の堀込み

0　50cm

第38図　ＳＩ2381竪穴住居跡



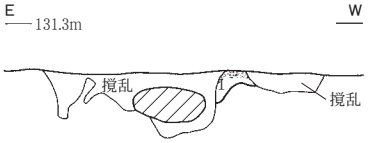
第39図　ＳＩ2460竪穴住居跡・ＳＮ2177焼土遺構周辺（１）



SI2460炉
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
3　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%　地山土5%
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
5　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%　焼土20%
6　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%

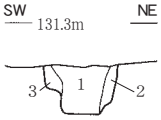
0　50cm

SN2177



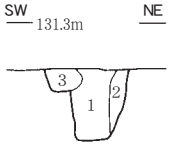
SN2177
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒1%　地山土40%

SKP2161



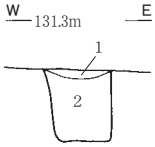
SKP2161
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)2%
　地山土30%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　地山土10%
3　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%

SKP2162



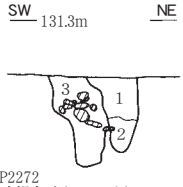
SKP2162
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
　地山土10%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　1層土10%
3　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%

SKP2166



SKP2166
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性弱
　混入炭化物(φ1～10㎜)3%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%

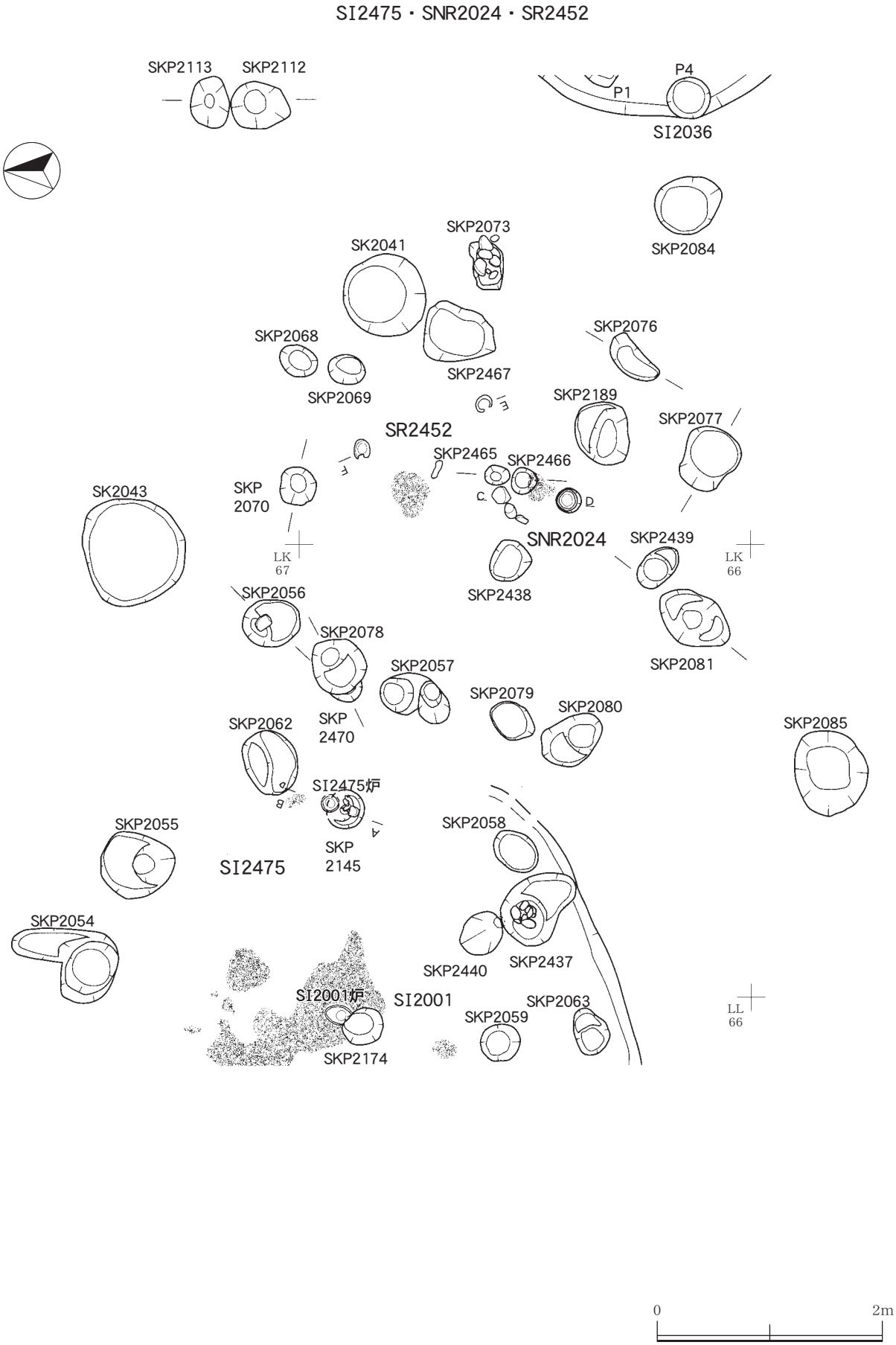
SKP2271・SKP2272



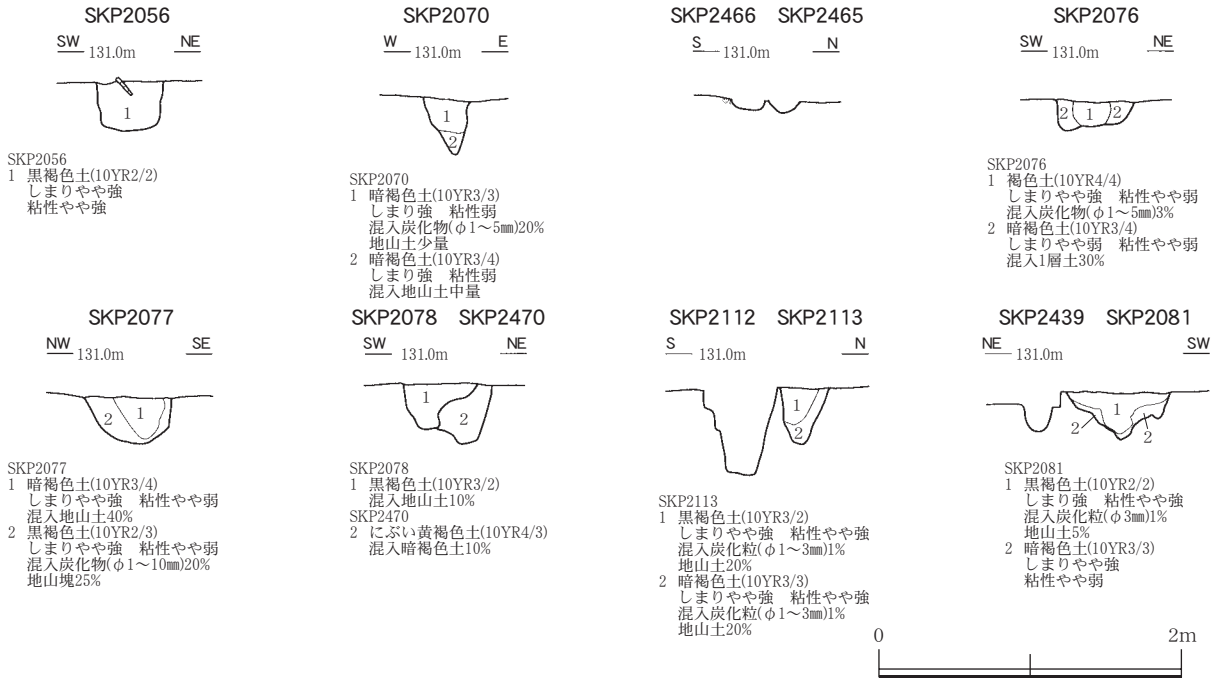
SKP2272
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒2%
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまりやや強　粘性やや強
SKP2271
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒2%

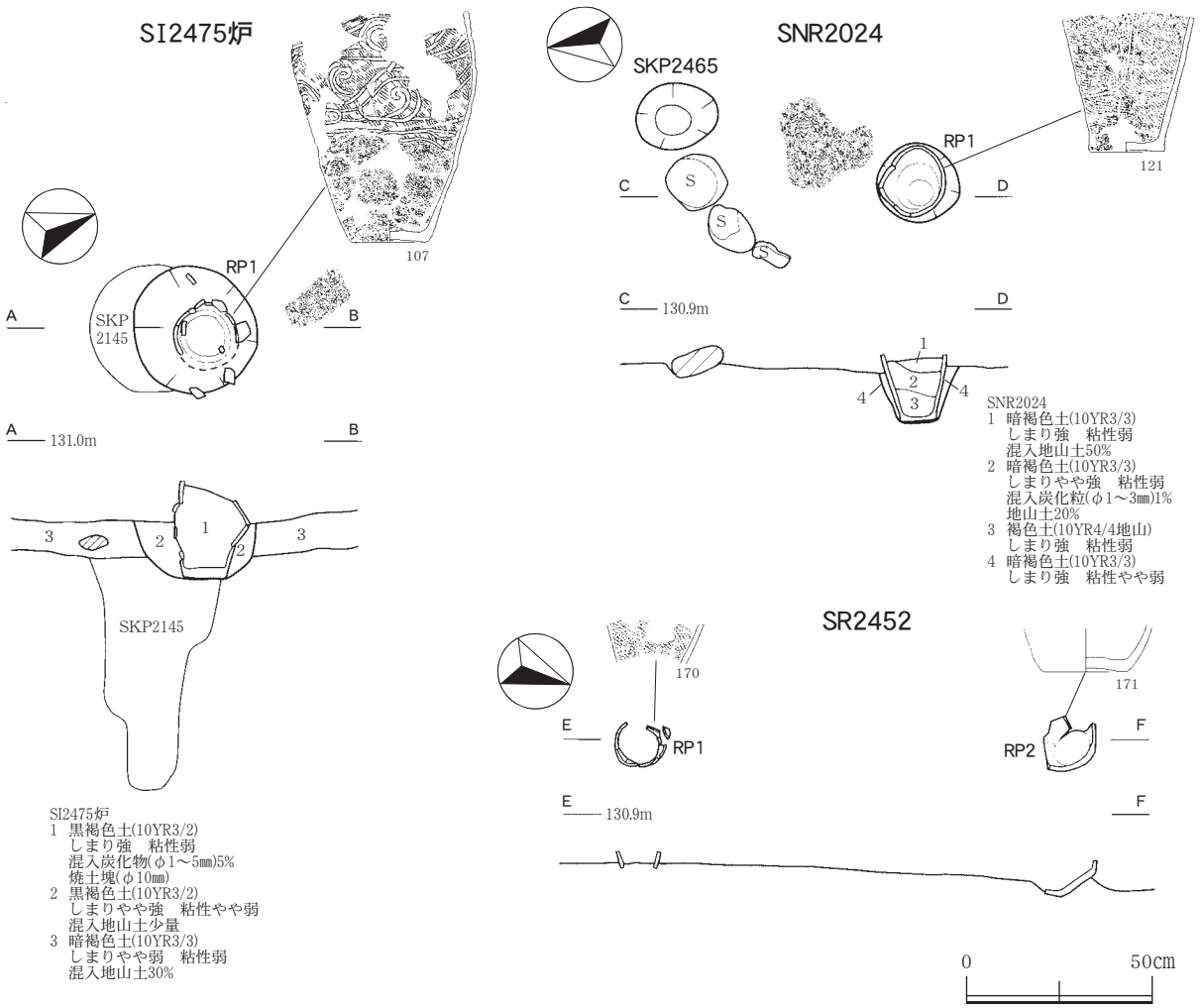
0　2m

第40図　ＳＩ2460竪穴住居跡・ＳＮ2177焼土遺構周辺(２)

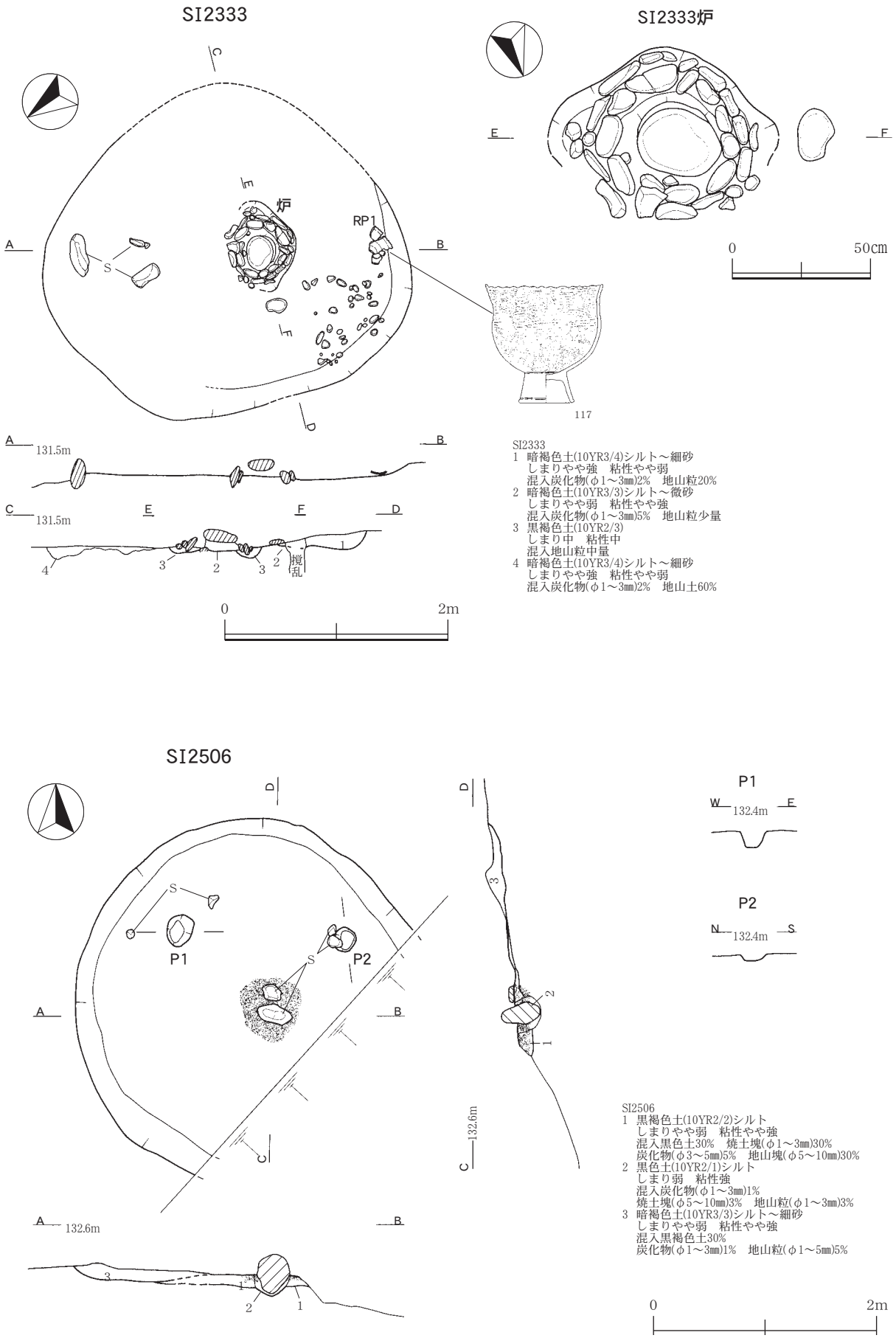


第41図　ＳＩ2475竪穴住居跡・ＳＮＲ2024土器埋設炉・ＳＲ2452土器埋設遺構周辺（１）

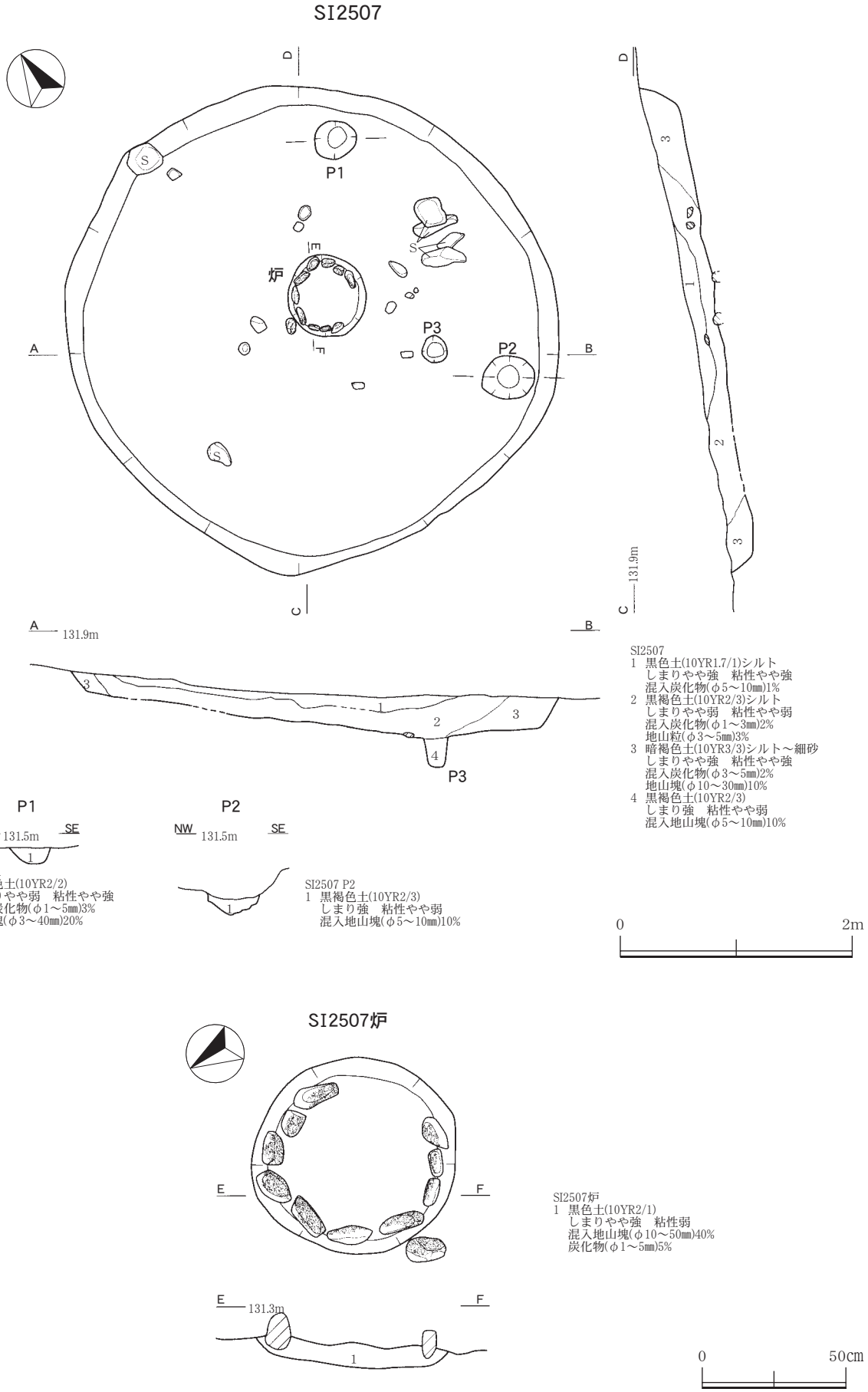




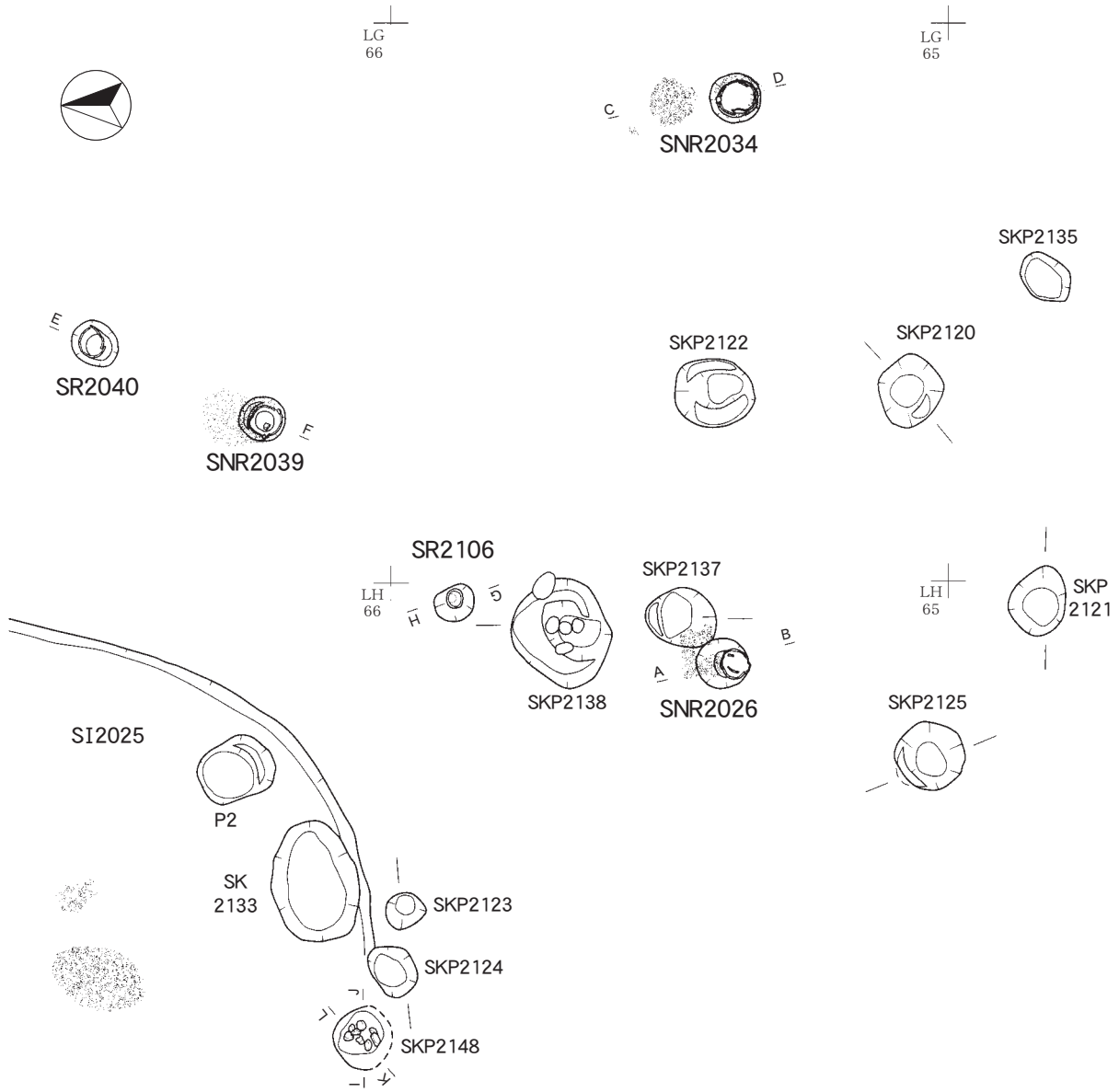
第42図　ＳＩ2475竪穴住居跡・ＳＮＲ2024土器埋設炉・ＳＲ2452土器埋設遺構周辺(２)

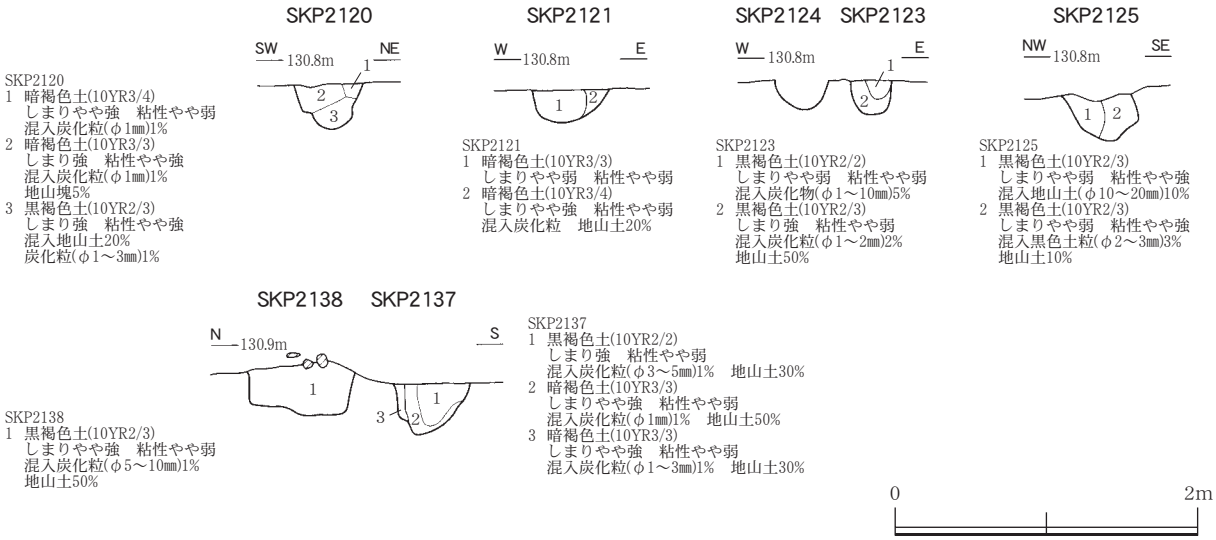


第43図　ＳＩ2333／2506竪穴住居跡



第44図　ＳＩ2507竪穴住居跡





SKP2120
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山塊5%
3　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入地山土20%
　炭化粒(φ1～3㎜)1%

SKP2121
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒　地山土20%

SKP2123
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～10㎜)5%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～2㎜)2%
　地山土50%

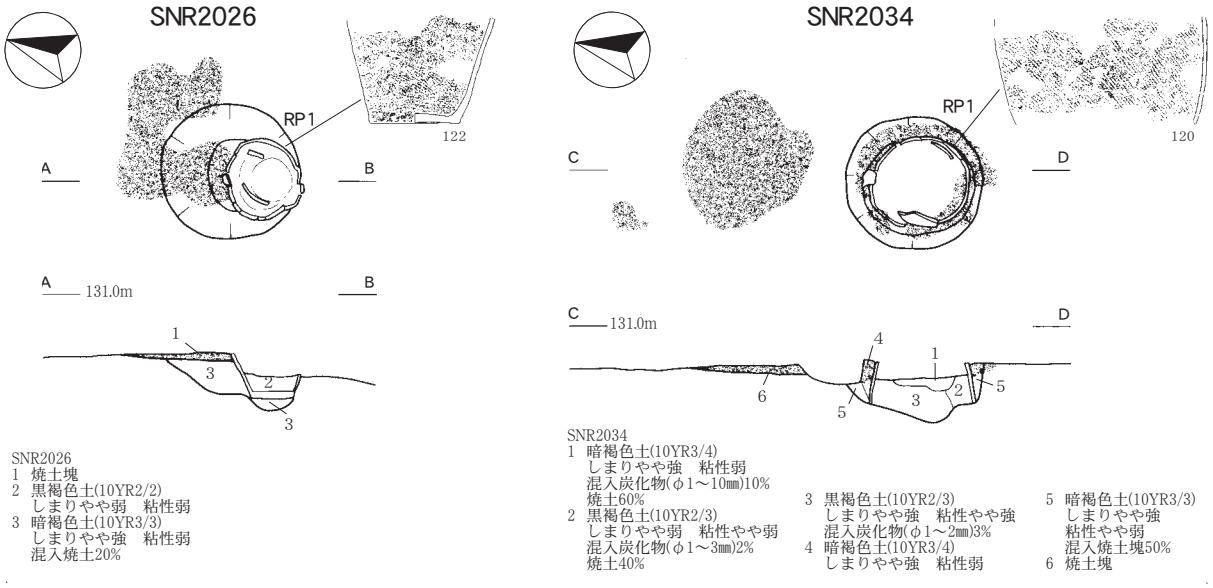
SKP2125
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山土(φ10～20㎜)10%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入黒色土粒(φ2～3㎜)3%
　地山土10%

SKP2138
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ5～10㎜)1%
　地山土50%

SKP2137
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ3～5㎜)1%　地山土30%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%　地山土50%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%　地山土30%

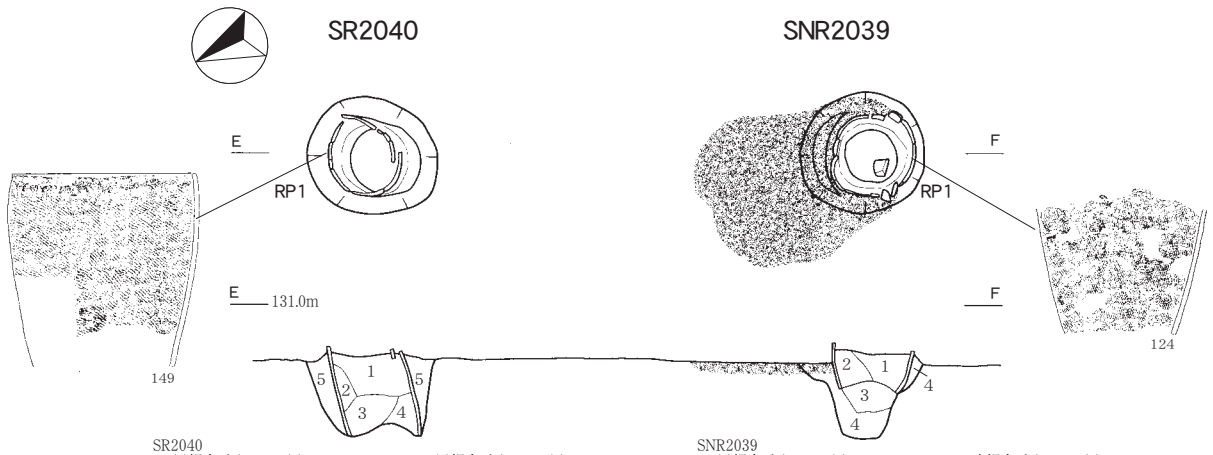
0　2m

第45図　ＳＮＲ2026・2034・2039土器埋設炉・ＳＲ2040・2106土器埋設遺構周辺(１)



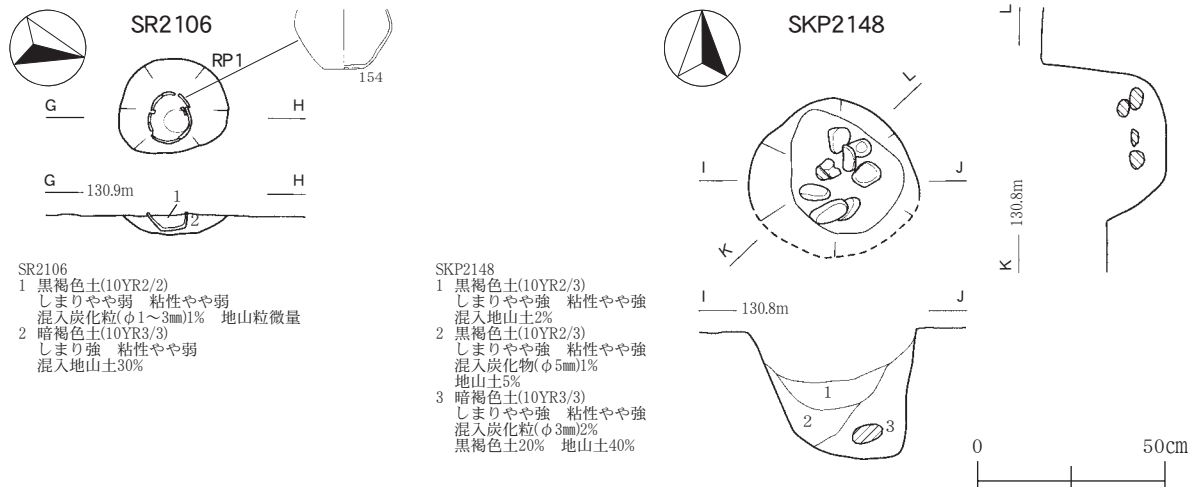
SNR2026
1　焼土塊
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性弱
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性弱
　混入焼土20%

SNR2034
1　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化物(φ1～10㎜)10%
　焼土60%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)2%
　焼土40%
3　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～2㎜)3%
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性弱
5　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強
　粘性やや弱
　混入焼土塊50%
6　焼土塊



SR2040
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)3%
　地山粒微量
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～5㎜)2%
　地山粒10%
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～5㎜)1%
　地山粒5%
4　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1㎜)1%
　地山土20%
5　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土30%

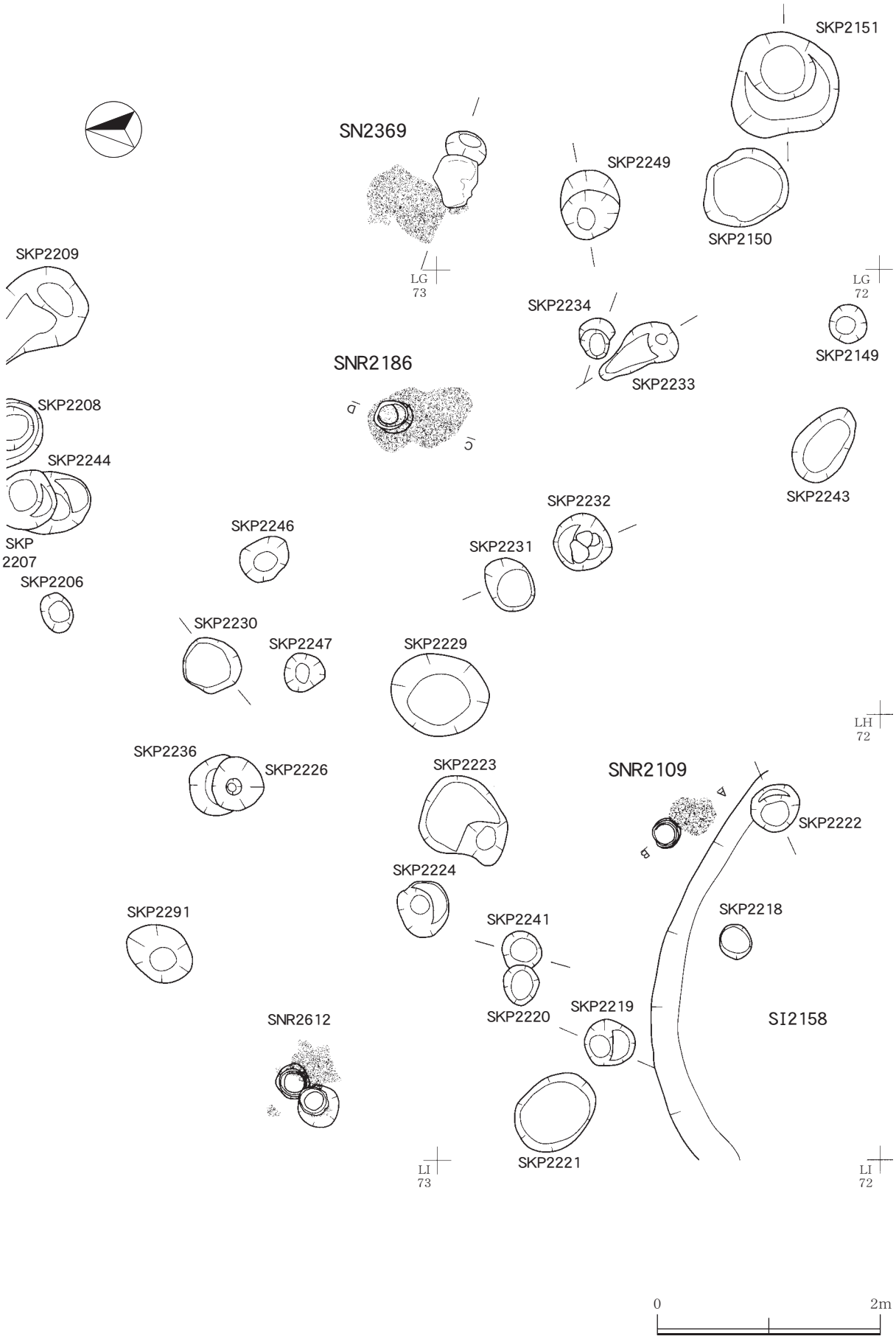
SNR2039
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土5%
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～10㎜)1%
　地山土2%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%
　焼土粒1%　地山土30%
4　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山粒微量



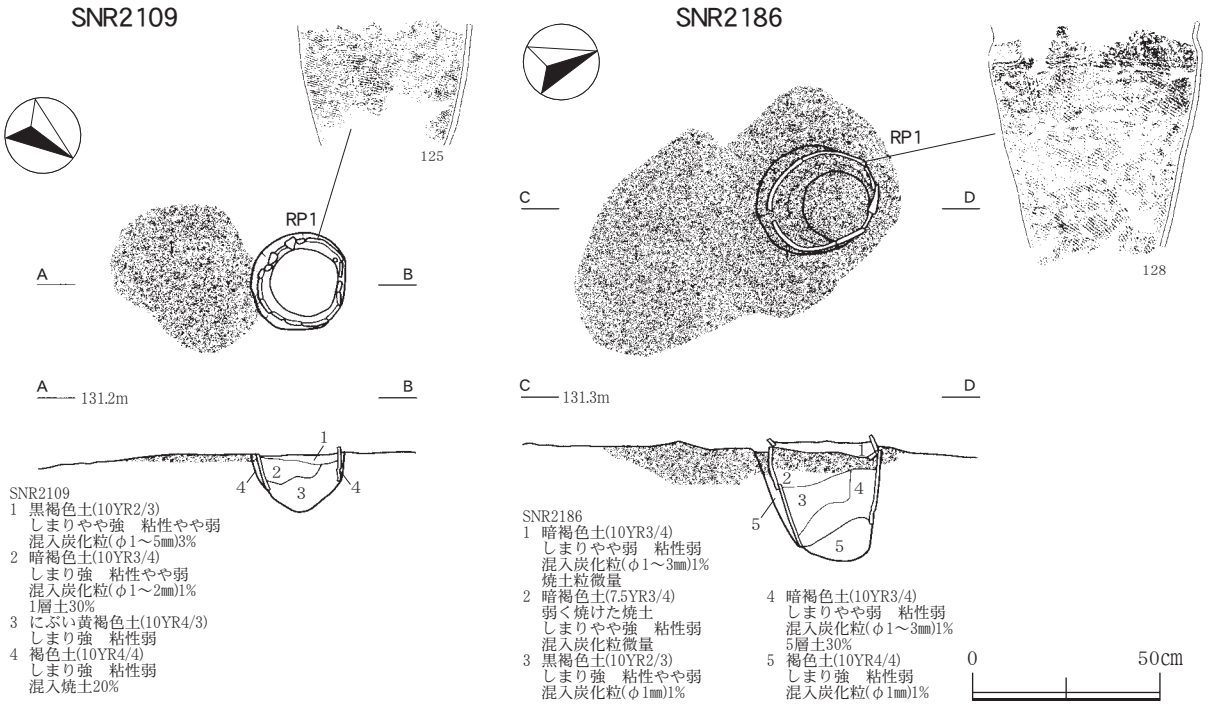
SR2106
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%　地山粒微量
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや弱
　混入地山土30%

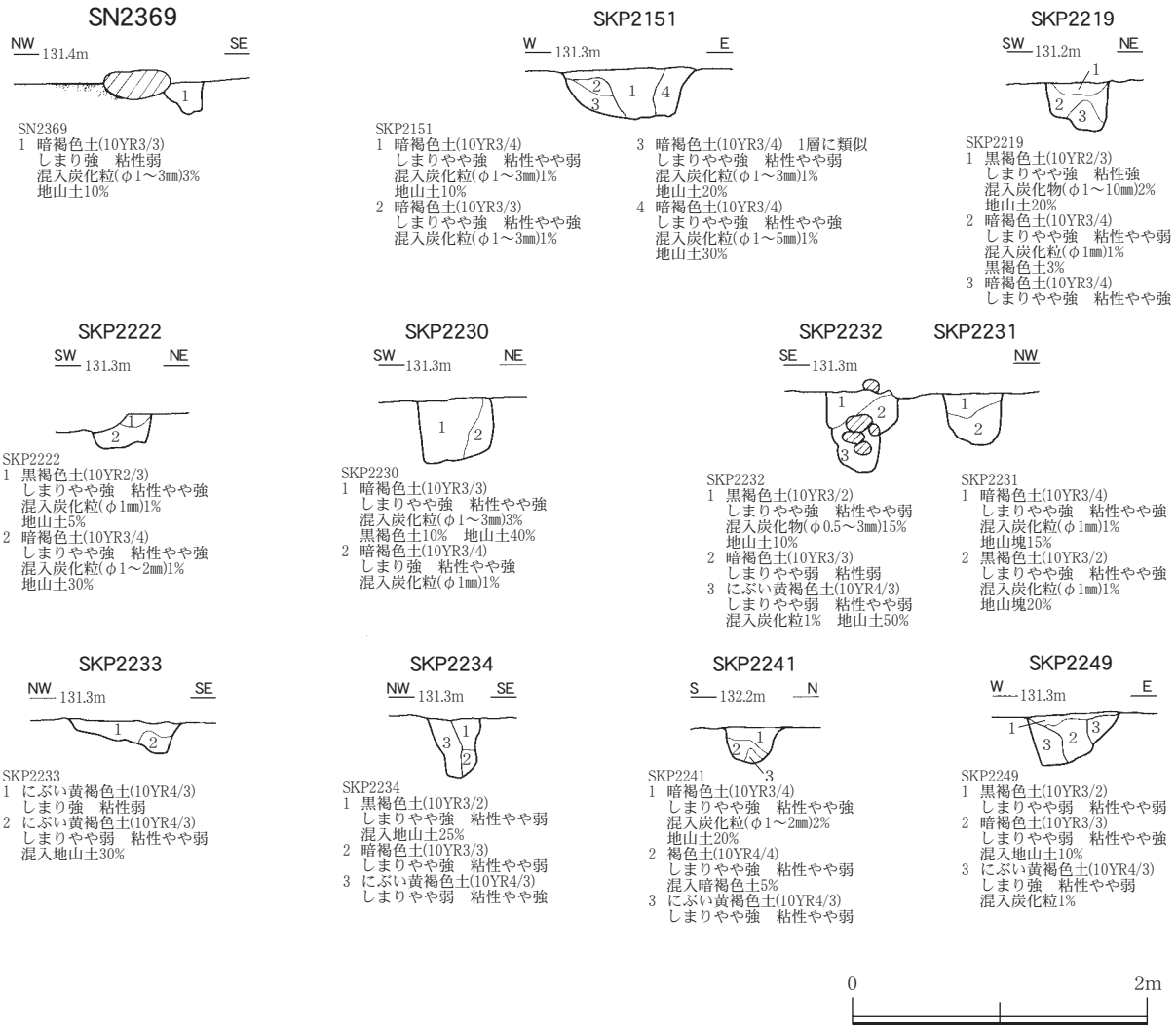
SKP2148
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土2%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ5㎜)1%
　地山土5%
3　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ3㎜)2%
　黒褐色土20%　地山土40%

第46図　ＳＮＲ2026・2034・2039土器埋設炉・ＳＲ2040・2106土器埋設遺構周辺(２)

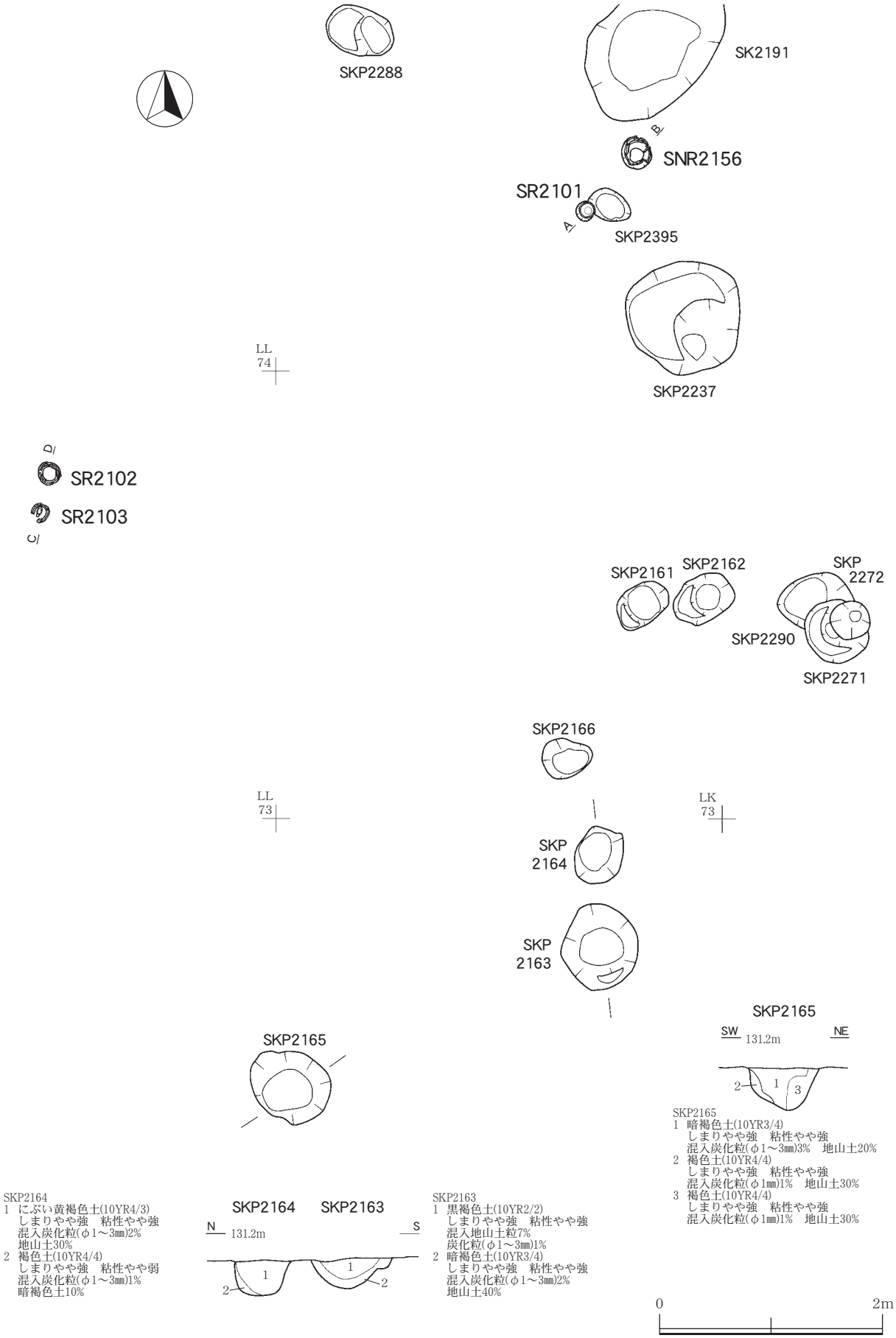


第47図　ＳＮＲ2109･2186土器埋設炉･ＳＮ2369焼土遺構周辺（１）

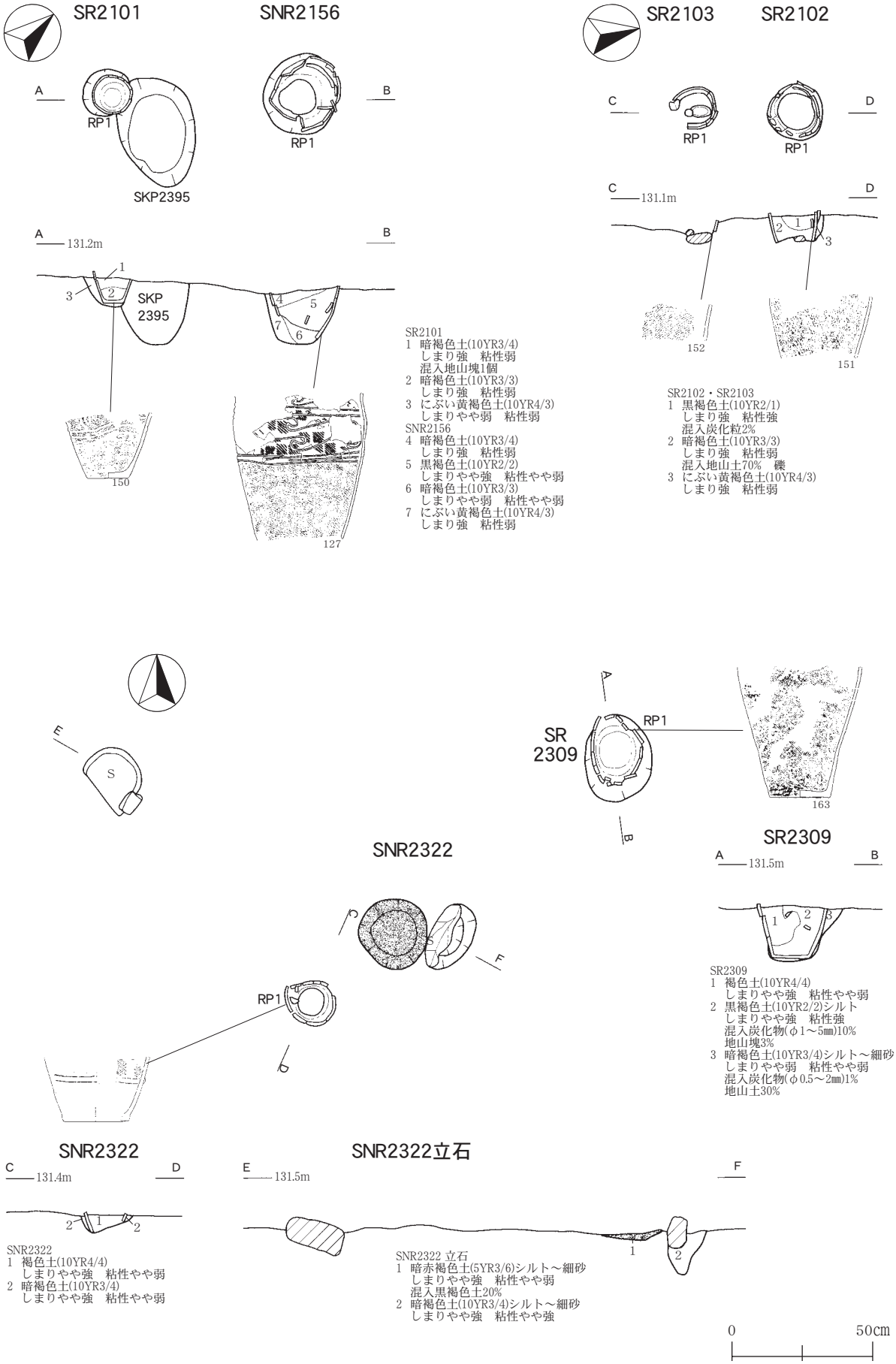




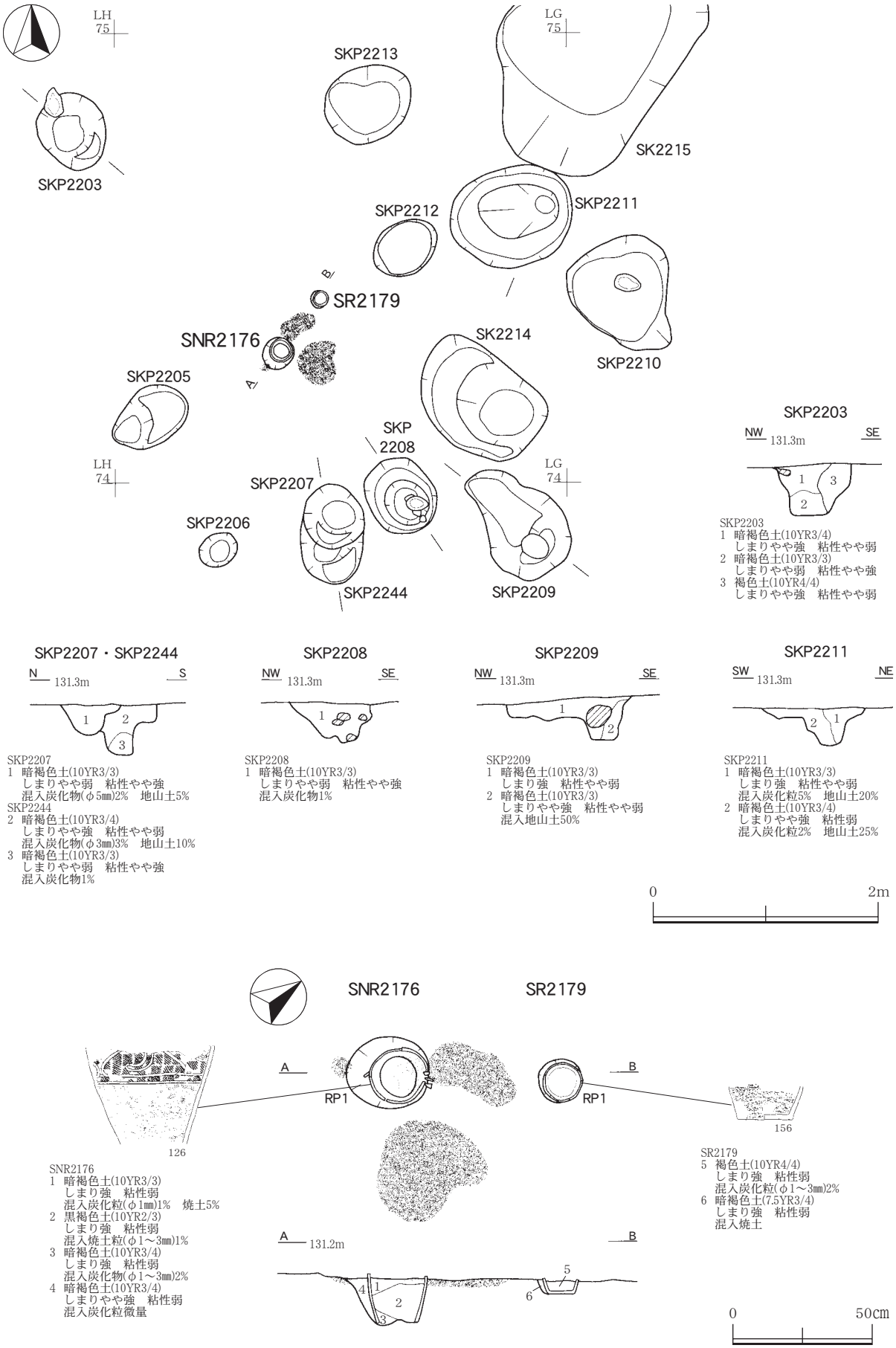
第48図　ＳＮＲ2109･2186土器埋設炉･ＳＮ2369焼土遺構周辺(２)



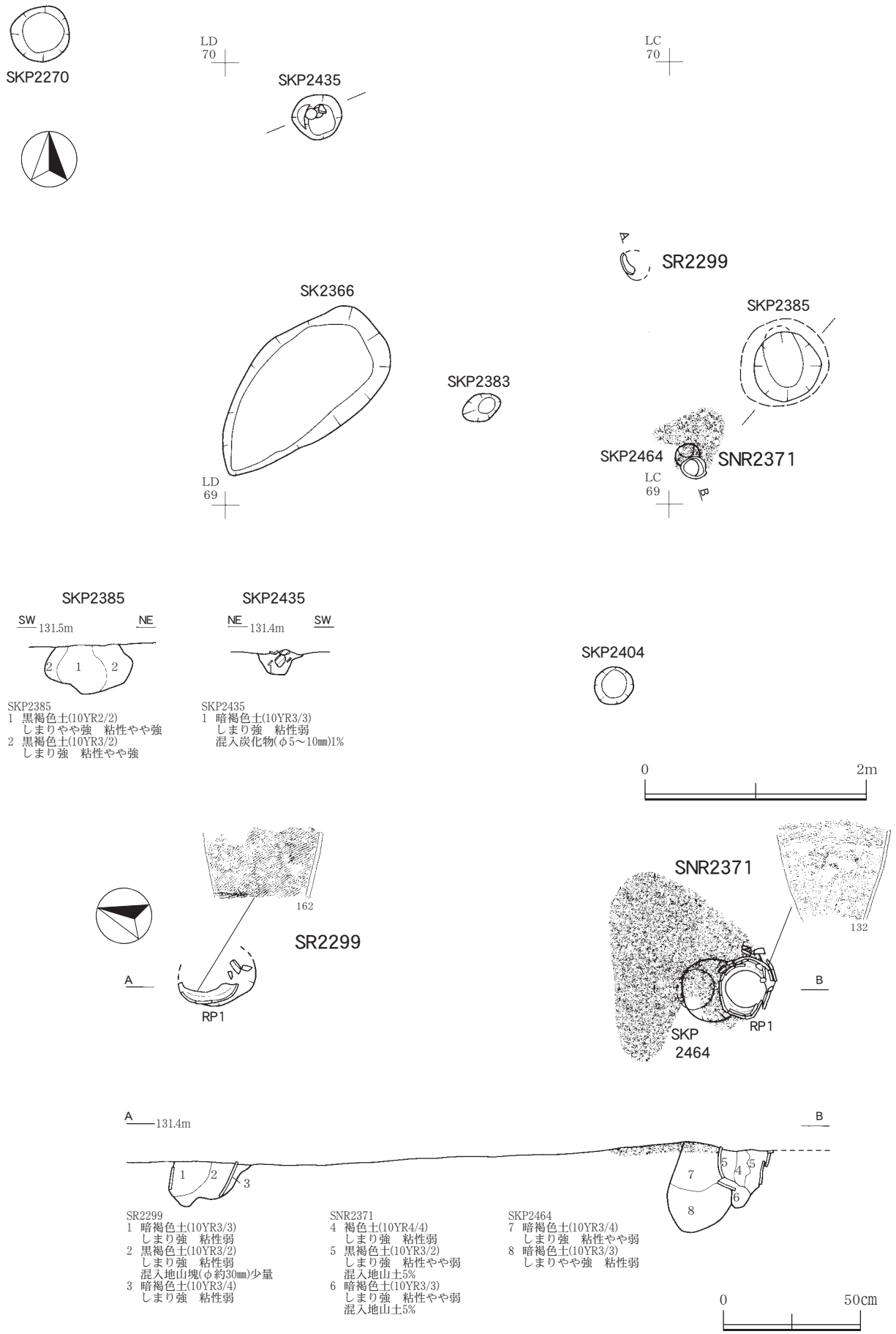
第49図　ＳＮＲ2156土器埋設炉・ＳＲ2101・2102・2103土器埋設遺構周辺(１)



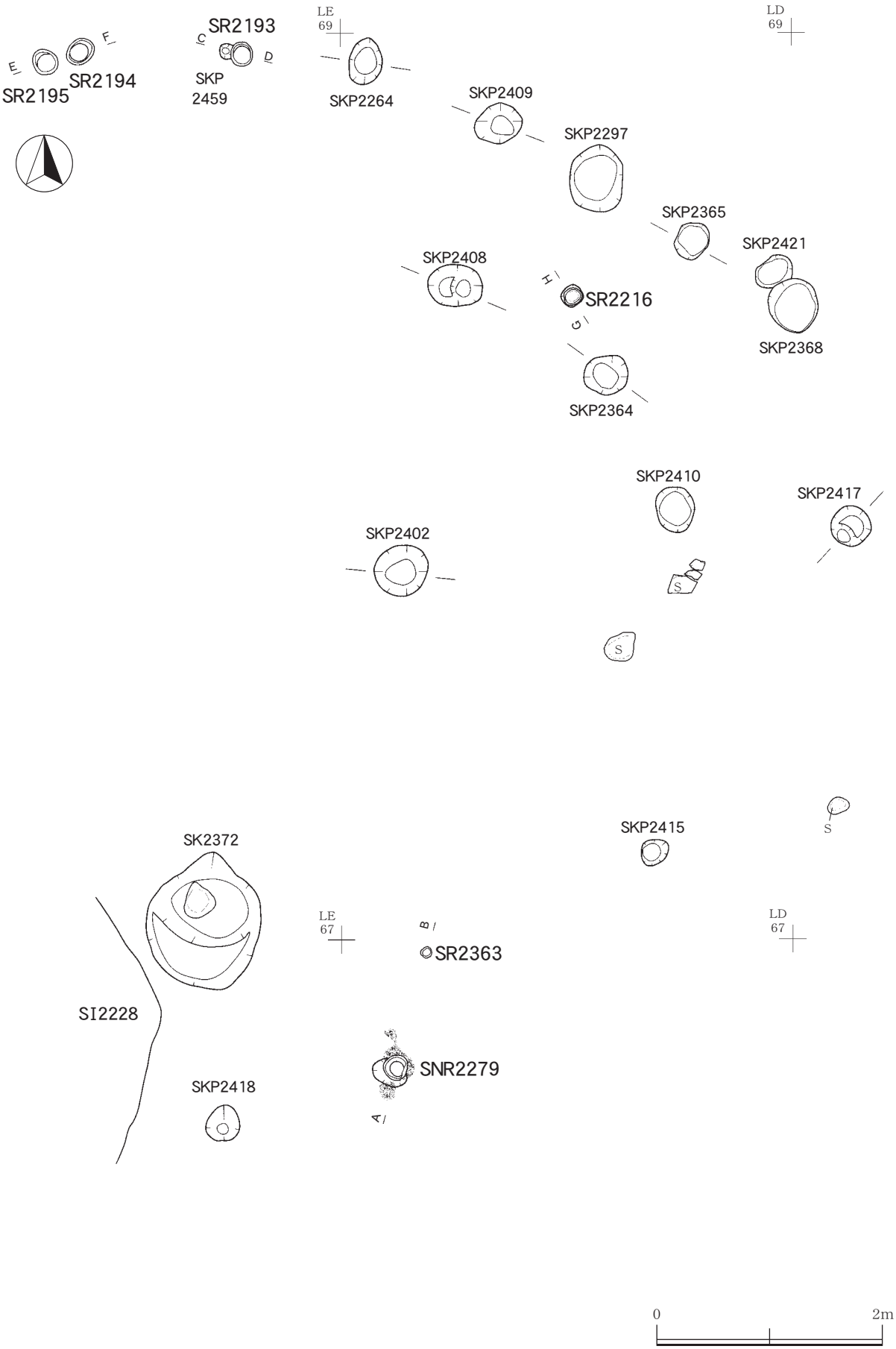
第50図　ＳＮＲ2156土器埋設炉・ＳＲ2101・2102・2103土器埋設遺構周辺(２)／ＳＮＲ2322土器埋設炉・ＳＲ2309土器埋設遺構周辺



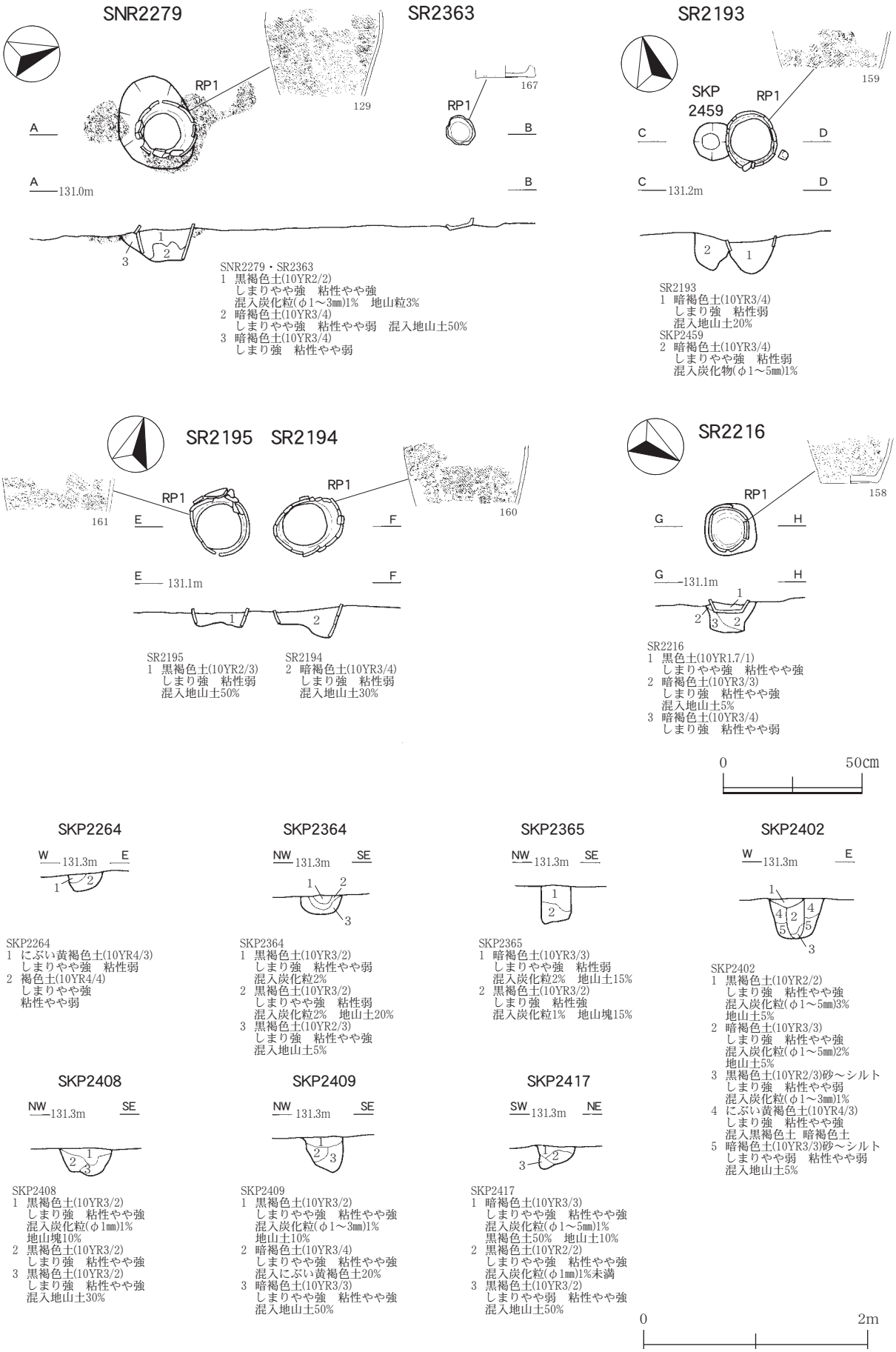
第51図　ＳＮＲ2176土器埋設炉・ＳＲ2179土器埋設遺構周辺



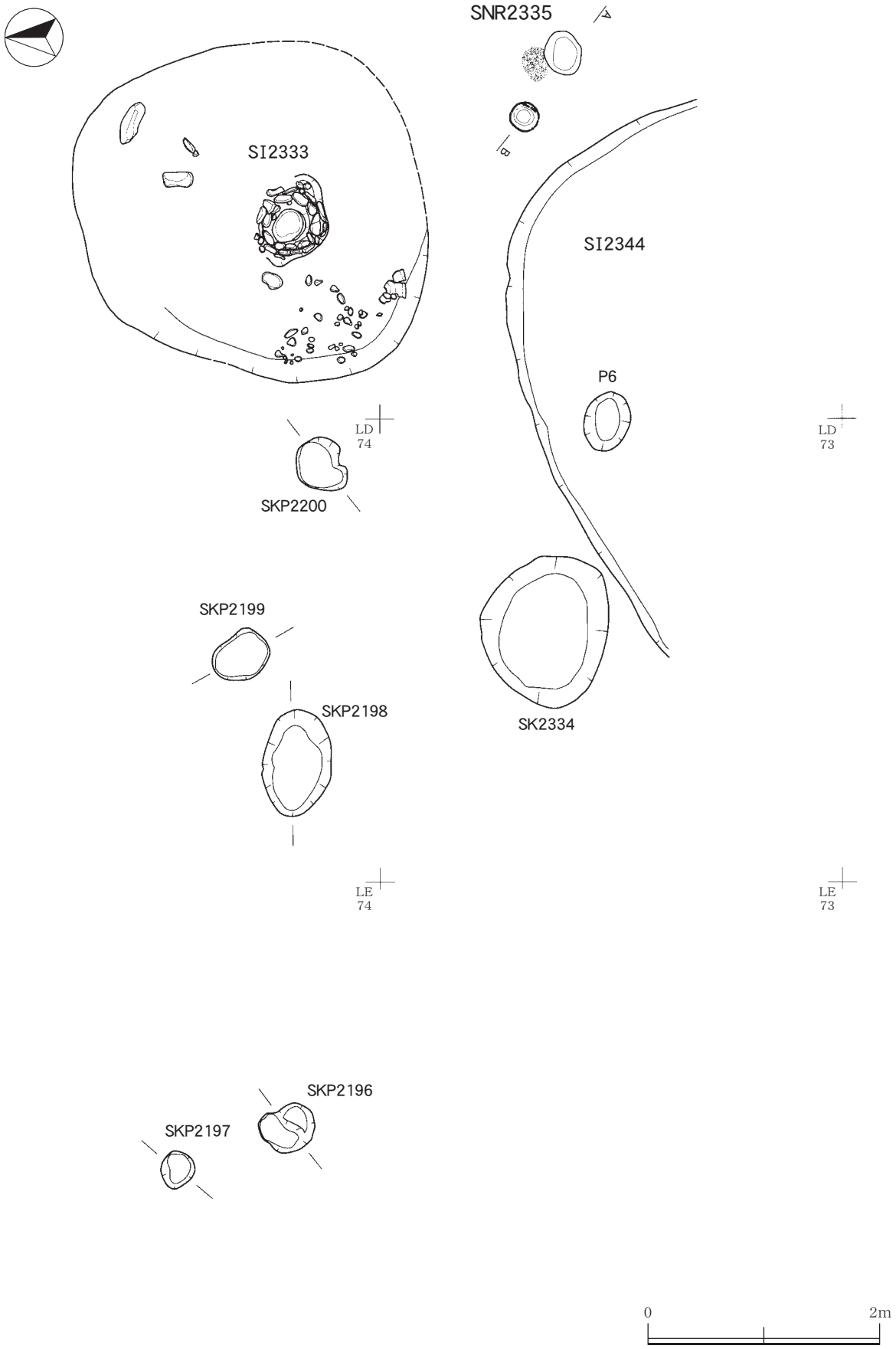
第52図　ＳＮＲ2371土器埋設炉・ＳＲ2299土器埋設遺構周辺



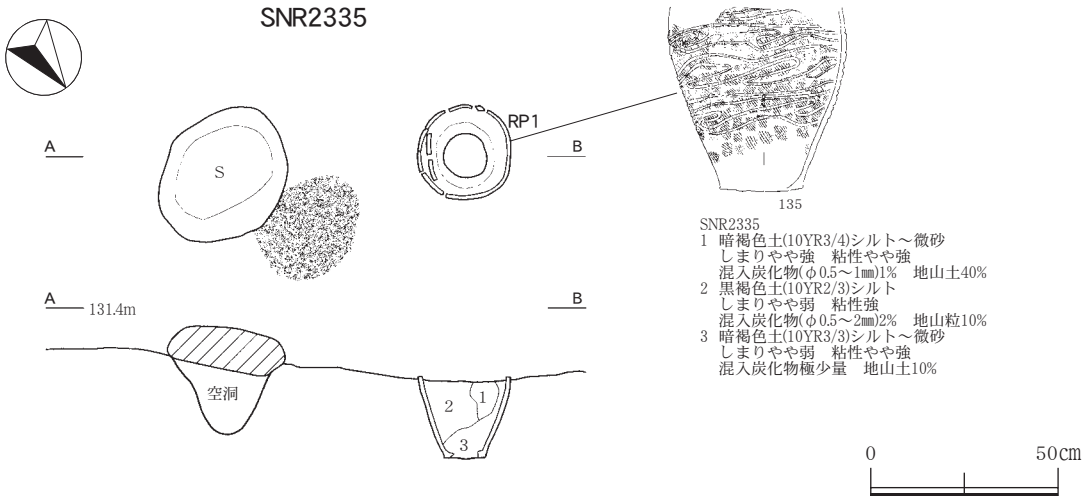
第53図　ＳＮＲ2279土器埋設炉・ＳＲ2193・2194・2195・2216・2363土器埋設遺構周辺（１）



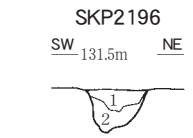
第54図　ＳＮＲ2279土器埋設炉・ＳＲ2193・2194・2195・2216・2363土器埋設遺構周辺(２)



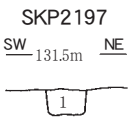
第55図　ＳＮＲ2335土器埋設炉周辺（１）



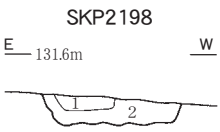
SNR2335
1　暗褐色土(10YR3/4)シルト～微砂
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ0.5～1㎜)1%　地山土40%
2　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物(φ0.5～2㎜)2%　地山粒10%
3　暗褐色土(10YR3/3)シルト～微砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物極少量　地山土10%



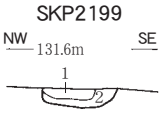
SKP2196
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土(粒～塊状)10%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入砂多量　地山土10%



SKP2197
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土30%



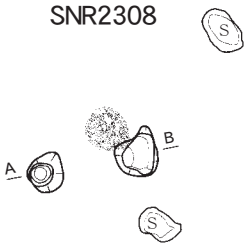
SKP2198
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%　地山土20%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%　黒褐色土2%
　地山土20%

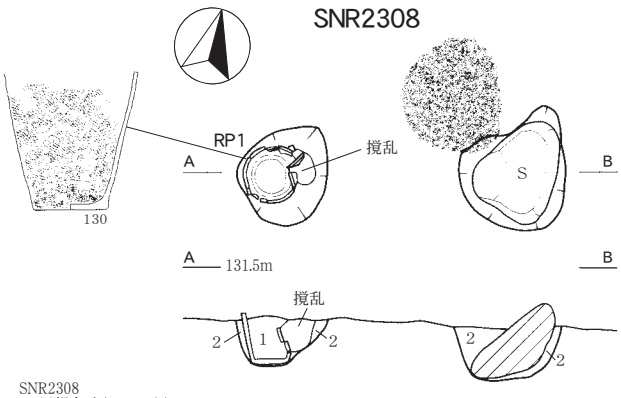


SKP2199
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土5%
2　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土20%

SKP2200
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土5%
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入暗褐色土5%　地山土5%

0　2m

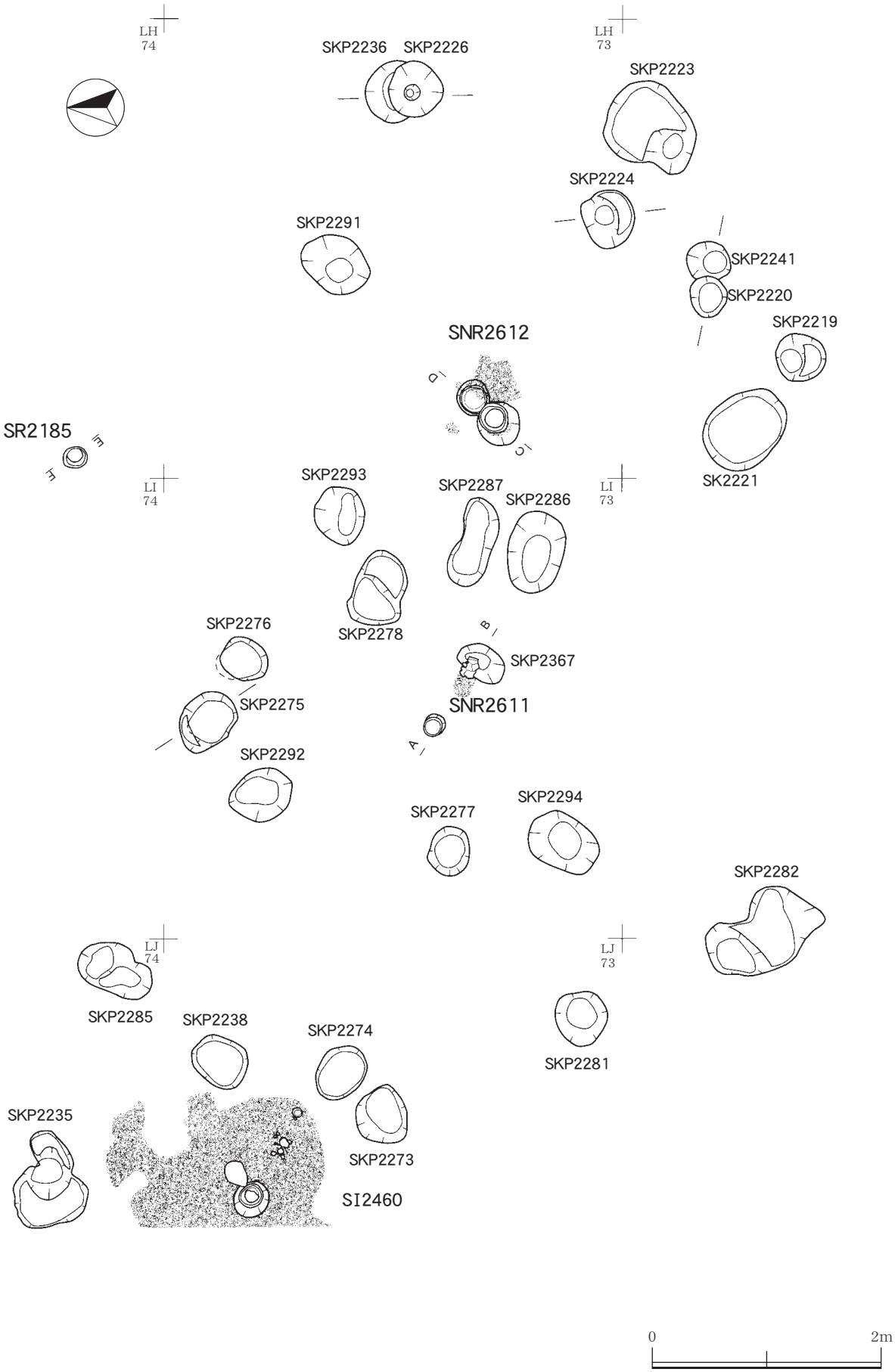




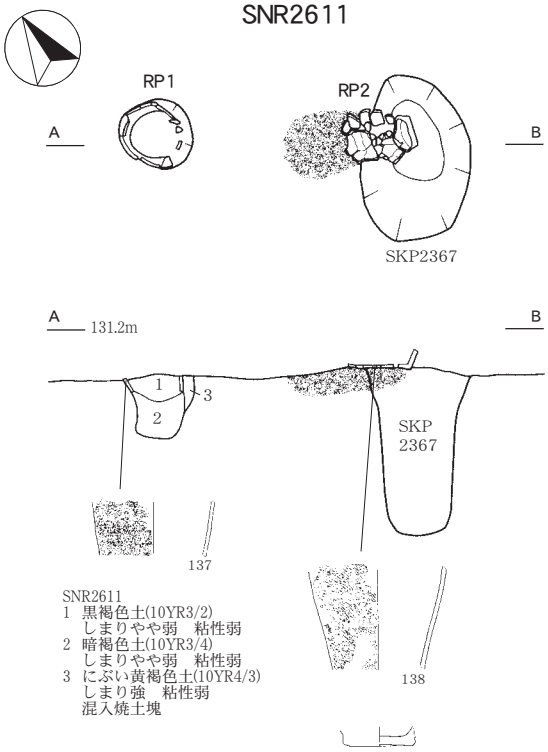
SNR2308
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ0.5～1㎜)3%　地山粒5%
2　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性やや弱

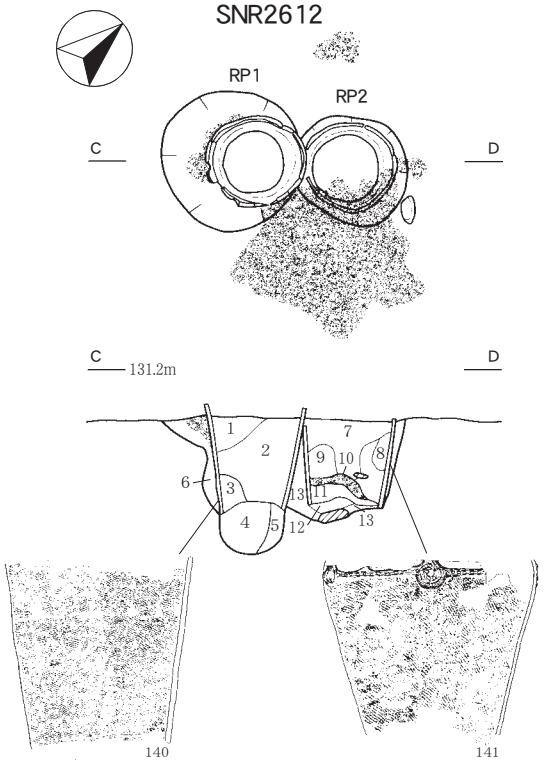
0　2m　　0　50cm

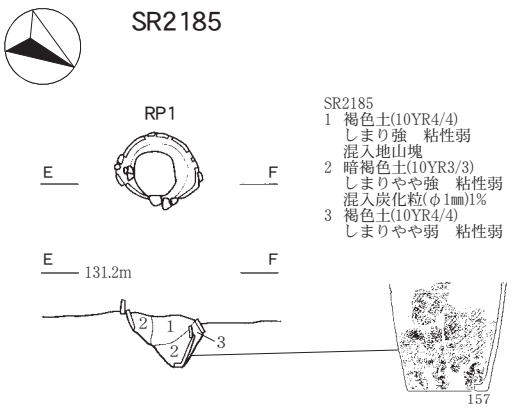
第56図　ＳＮＲ2335土器埋設炉周辺(２)／ＳＮＲ2308土器埋設炉周辺

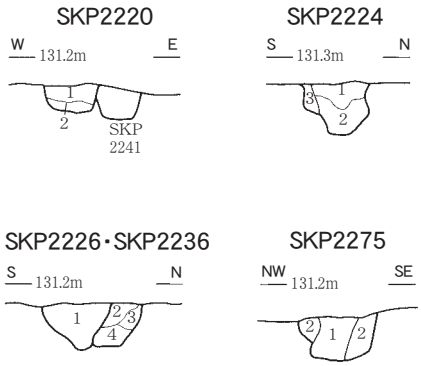


第57図　ＳＮＲ2611･2612土器埋設炉･ＳＲ2185土器埋設遺構周辺（１）



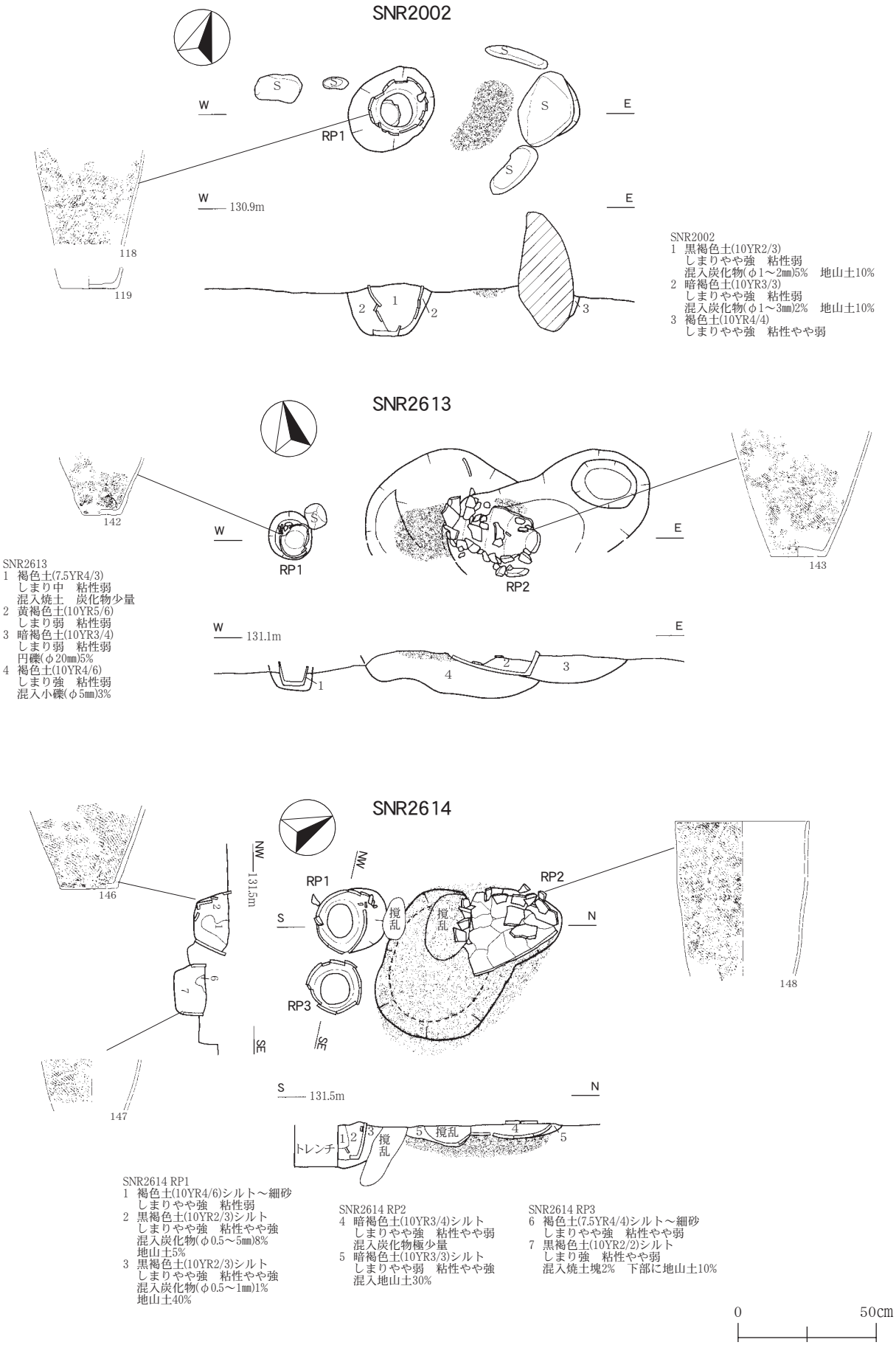




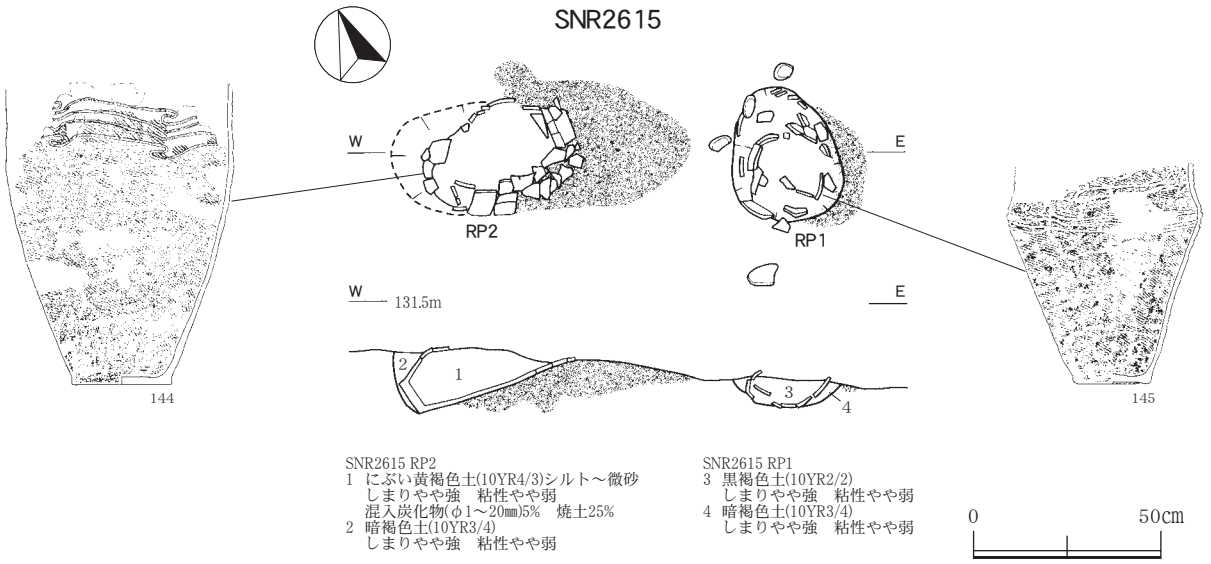


SKP2220
1　暗褐色土(10YR3/4)　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)2%　地山土20%
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりやや強　粘性やや弱
　混入暗褐色土3%　砂多量
SKP2224
1　黒褐色土(10YR3/2)　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～5㎜)3%　暗褐色土30%　地山土20%
2　暗褐色土(10YR3/4)　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%　地山土20%　砂多量
3　褐色土(10YR4/4)　しまり強　粘性やや弱　混入暗褐色土10%
SKP2226
1　黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱　粘性強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%　黒色土5%　地山土10%
SKP2236
2　黒褐色土(10YR3/2)　しまりやや強　粘性強 混入炭化粒(φ1㎜)1%　地山塊20%
3　暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや強　粘性やや強　混入炭化粒(φ1㎜)1%　地山塊20%
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまりやや強　粘性強　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%　地山土5%
SKP2275
1　暗褐色土(10YR3/4)　しまりやや弱　粘性やや強　混入炭化粒1%
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化粒1%　1層土30%

第58図　ＳＮＲ2611・2612土器埋設炉・ＳＲ2185土器埋設遺構周辺(２)

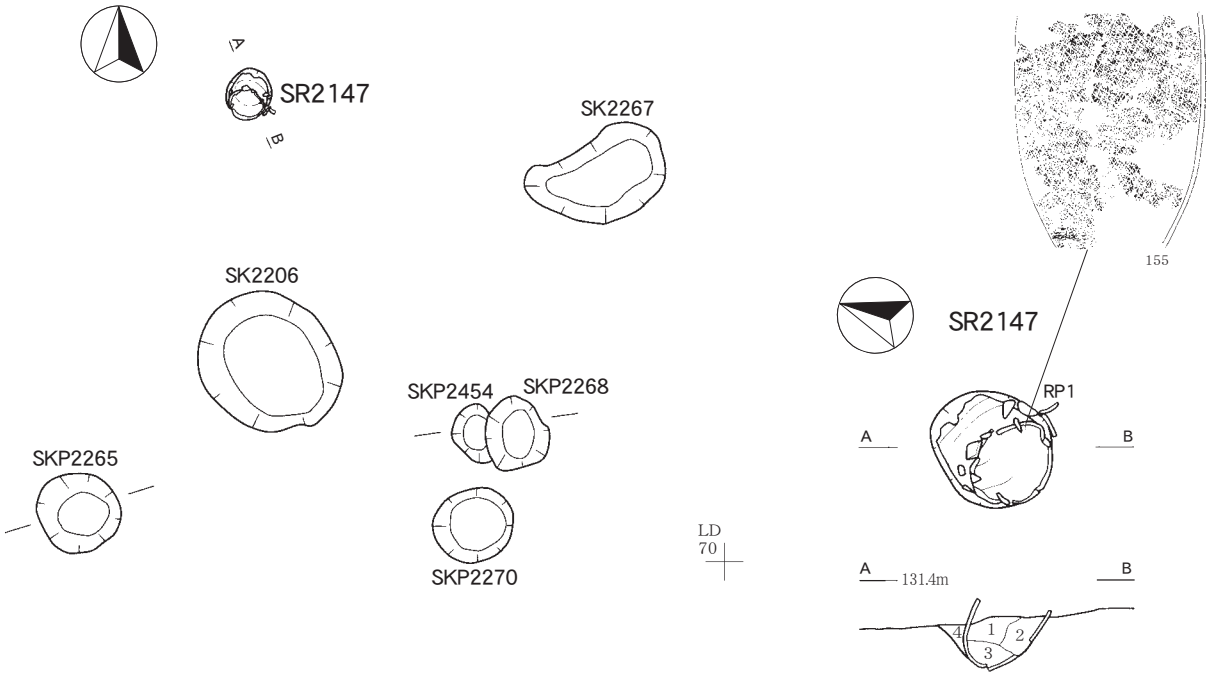


第59図　ＳＮＲ2002／2613／2614土器埋設炉



SNR2615 RP2
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)シルト～微砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～20㎜)5%　焼土25%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱

SNR2615 RP1
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
4　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや弱



SKP2265
SW　131.5m　NE

SKP2454・SKP2268
W　131.5m　E

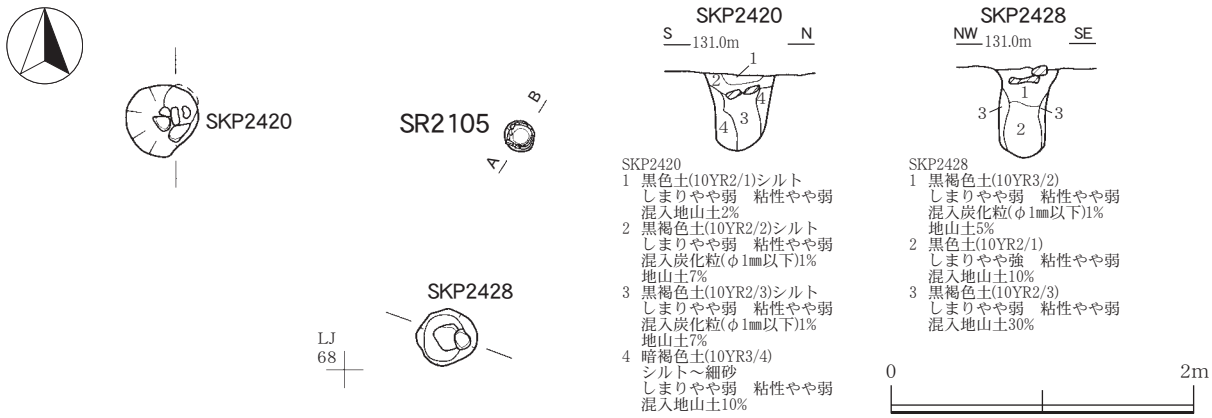
SKP2265
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～10㎜)2%
　地山土30%　黒褐色土10%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土5%　砂多量

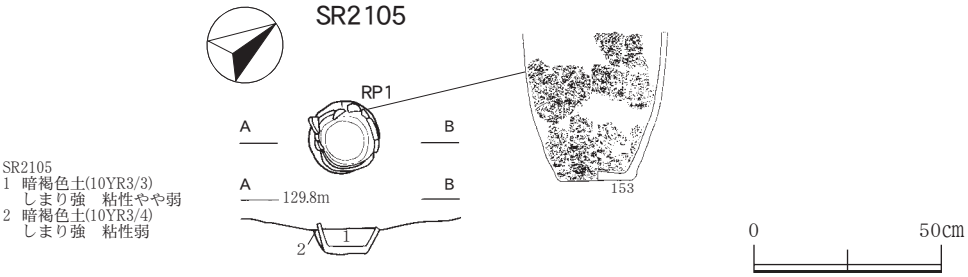
SKP2268
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土5%
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや強
3　灰黄褐色土(10YR4/2)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入地山土30%
SKP2454
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまりやや強　粘性弱

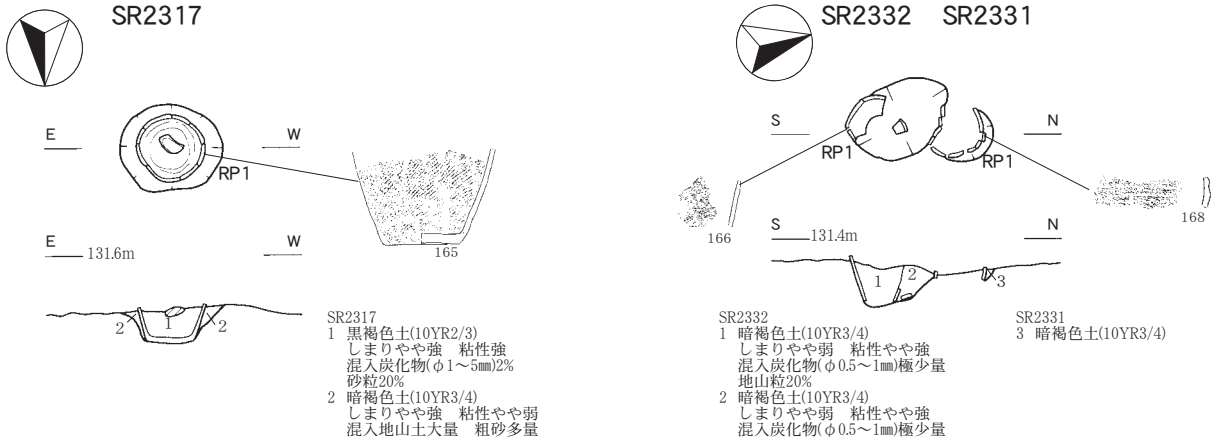
SR2147
1　黒色土(10YR2/1)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
3　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)2%
　地山土20%
4　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性弱

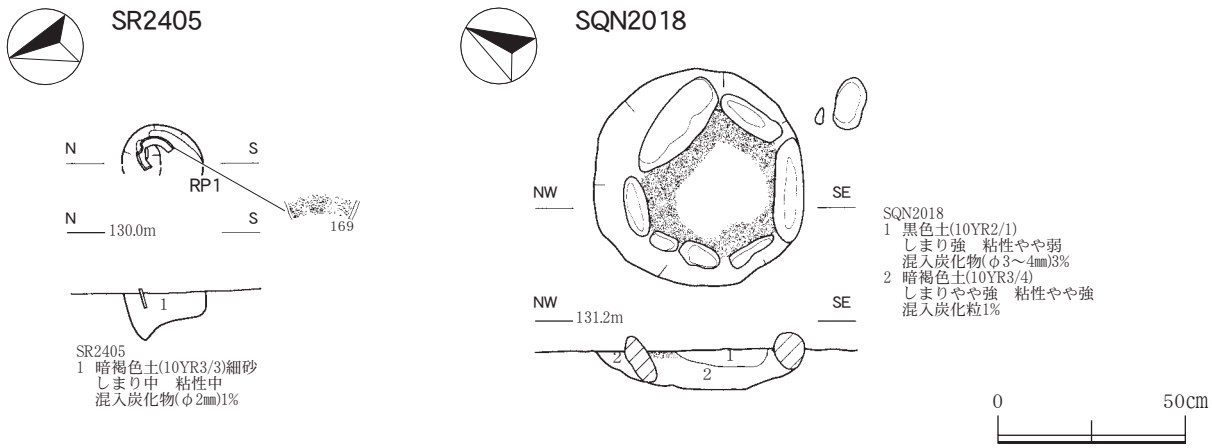
0　2m
0　50cm

第60図　ＳＮＲ2615土器埋設炉／ＳＲ2147土器埋設遺構周辺

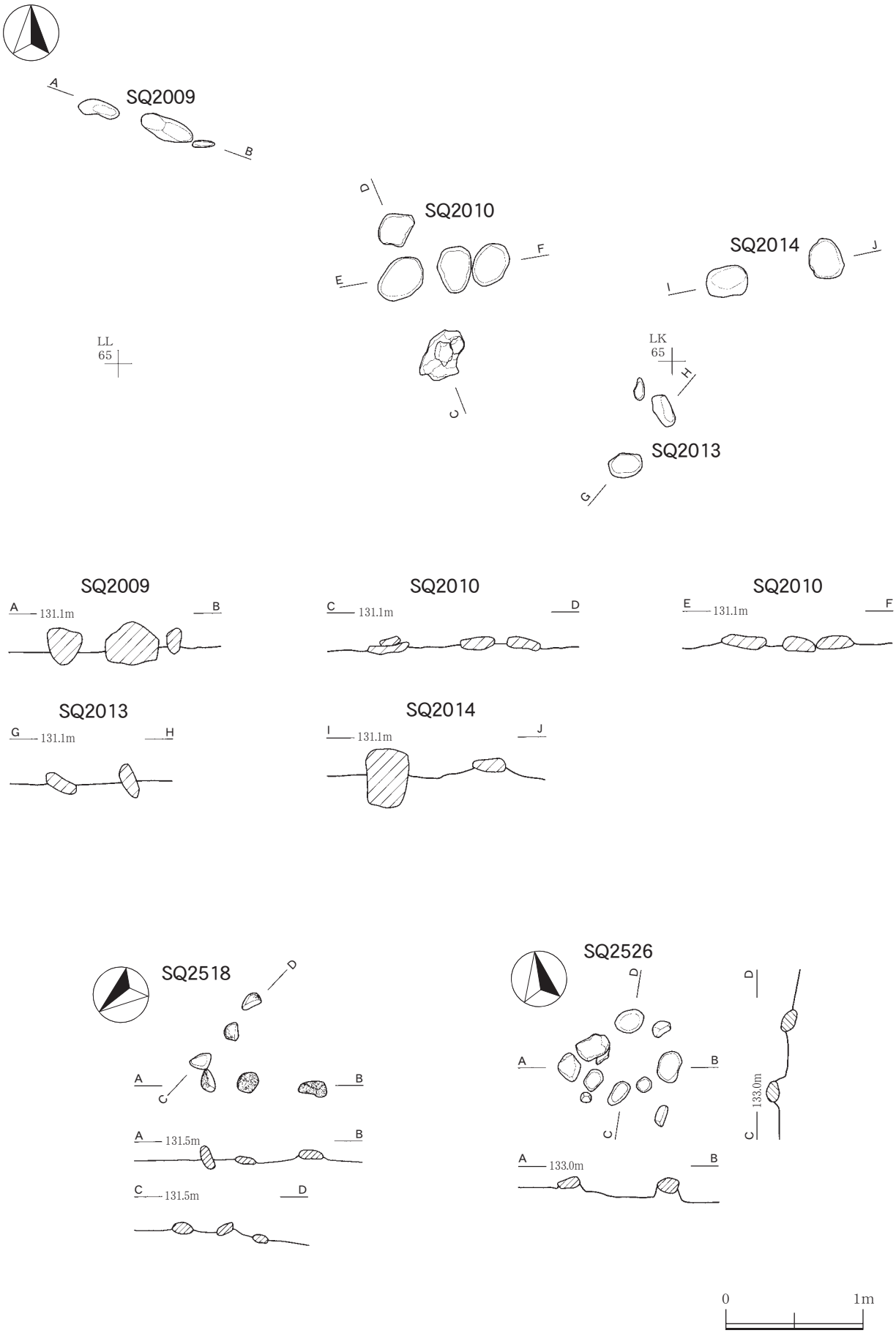






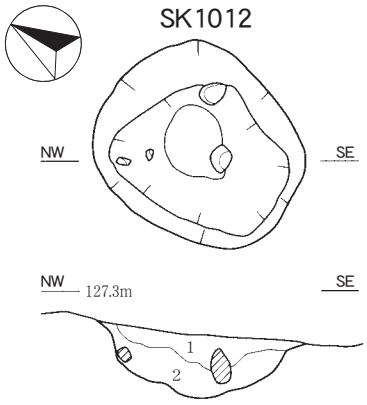


第61図　ＳＲ2105土器埋設遺構周辺／ＳＲ2317／2331・2332／2405土器埋設遺構／ＳＱＮ2018石囲炉

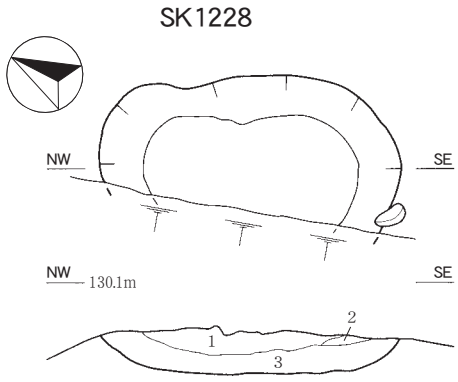


第62図　ＳＱ2009・2010・2013・2014／2518／2526配石遺構

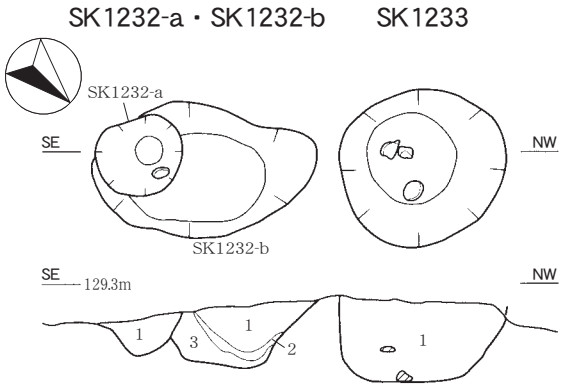
第63図　ＳＱ2325／2523配石遺構／ＳＮ1006焼土遺構



SK1012
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土5%
2　暗褐色土(10YR3/4)細砂
　しまりやや強　粘性弱
　混入地山土40%

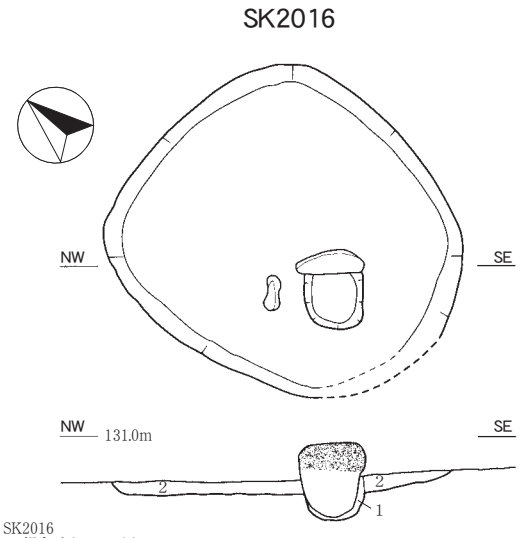


SK1228
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト～細砂
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～7㎜)10%　地山塊(φ1～5㎜)3%
2　暗褐色土(10YR3/4)シルト～細砂
　しまり強　粘性弱
　混入炭化粒(φ1～5㎜)1%　地山土2%
3　暗褐色土(10YR3/3)シルト
　しまり強　粘性強
　混入炭化粒(φ1～2㎜)2%　地山土15%

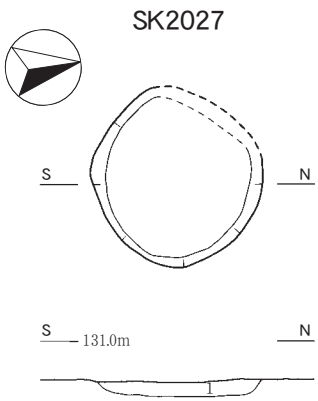


SK1232a
1　暗褐色土(10YR3/3)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山塊(φ3～10㎜)1%
SK1232b
1　暗褐色土(10YR3/4)シルト～細砂
　しまり中　粘性強
　混入炭化物(φ1～2㎜)1%
2　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや強　粘性強
3　暗褐色土(10YR3/4)シルト
　しまりやや強　粘性弱
　混入地山塊(φ1～5㎜)1%

SK1233
1　暗褐色土(10YR3/4)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山土3%　小礫多

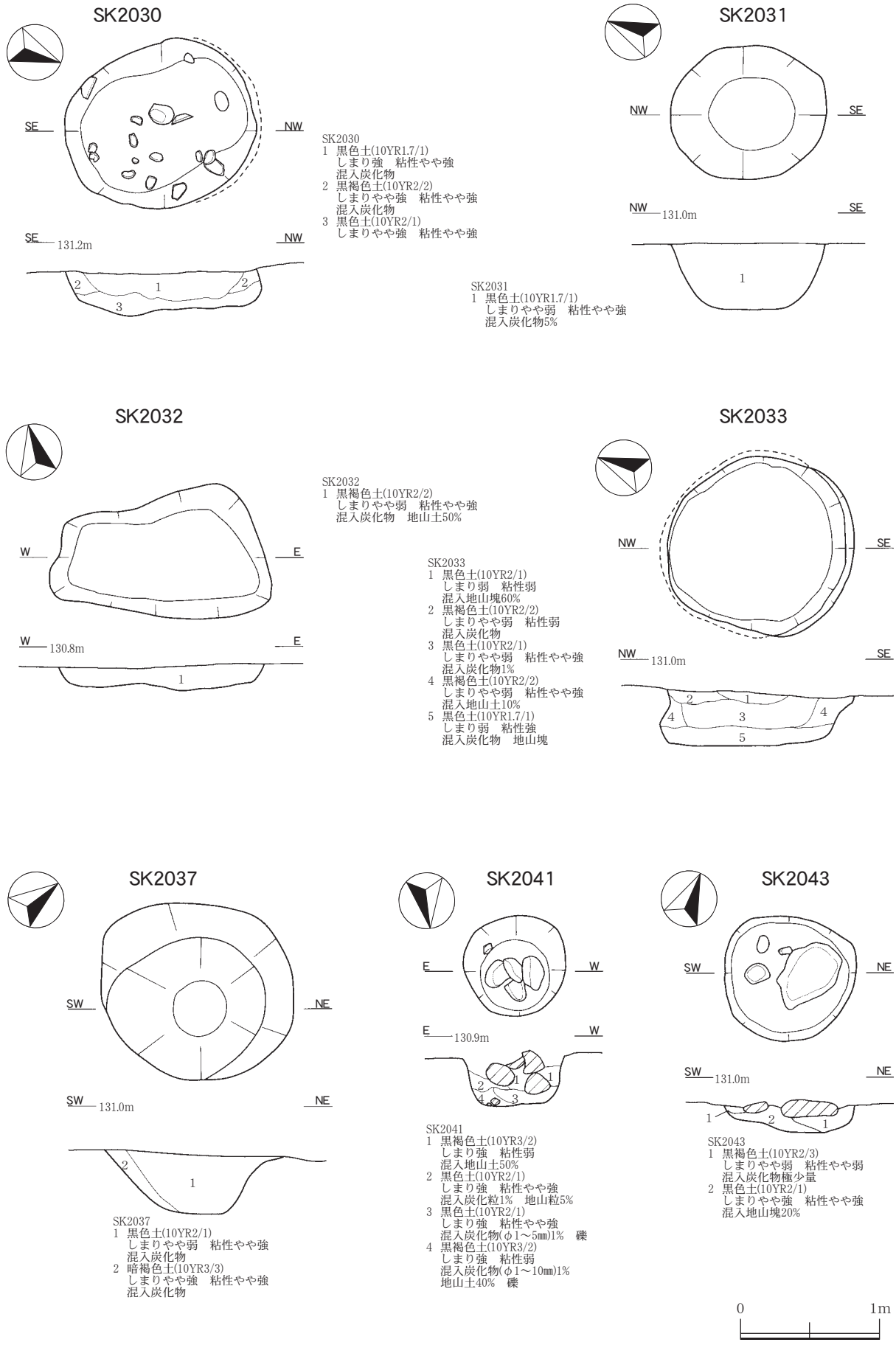


SK2016
1　褐色土(10YR4/4)
　しまり強　粘性やや弱
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物

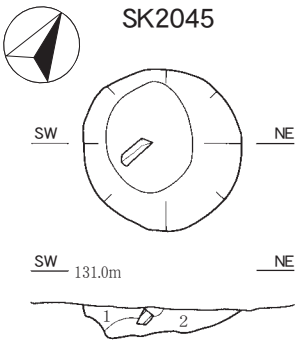


SK2027
1　黒色土(10YR1.7/1)
　しまりやや弱
　粘性やや強
　混入炭化物10%

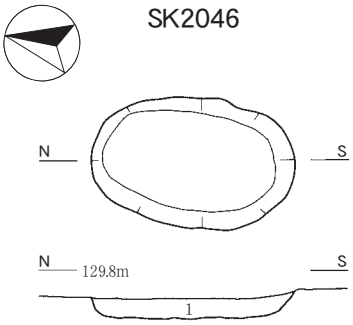
第64図　ＳＫ1012／1228／1232・1233／2016／2027土坑



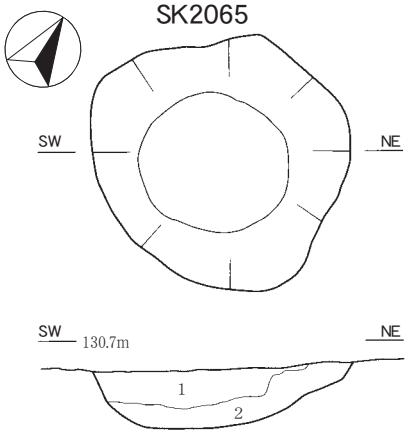
第65図　ＳＫ2030／2031／2032／2033／2037／2041／2043土坑



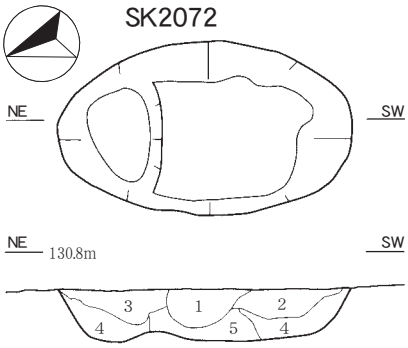
SK2045
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや強
混入地山土10%
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや弱　粘性やや弱



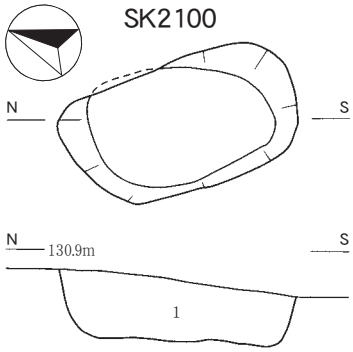
SK2046
1 暗褐色土(10YR3/3)
しまり強　粘性弱
混入地山土30%



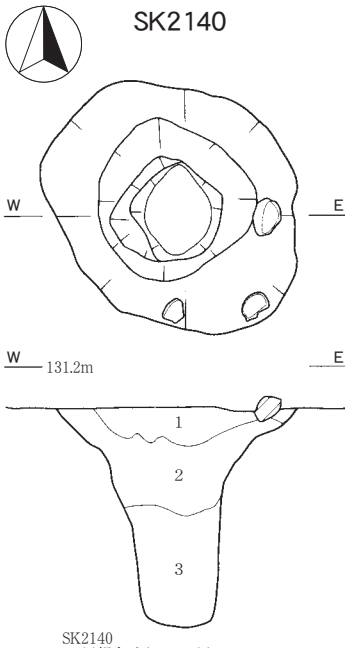
SK2065
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性弱
混入地山土30%
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入1層土20%



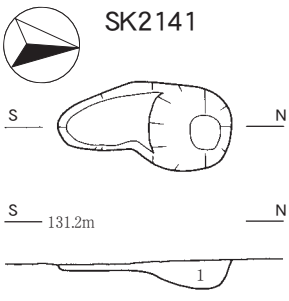
SK2072
1 黒褐色土(10YR2/2)　しまりやや強　粘性弱
混入炭化粒(φ1～3㎜)2%
2 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性やや弱
混入炭化粒(φ1～3㎜)3%　地山土10%
3 黒褐色土(10YR2/3)　しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化粒(φ1㎜)1%　地山土5%
4 暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや強　粘性弱
混入炭化粒(φ1～3㎜)3%
5 褐色土(10YR4/4)　しまりやや強　粘性弱
混入炭化粒(φ1㎜)1%



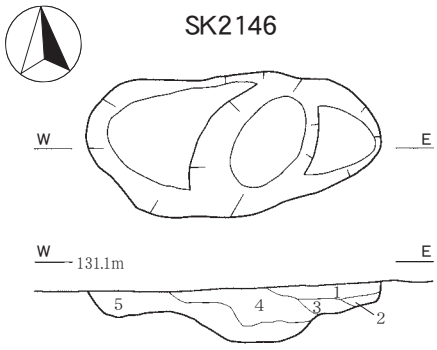
SK2100
1 暗褐色土(10YR3/4)
しまり強　粘性やや強
混入炭化物(φ1㎜)1%
地山土40%　黒褐色土10%



SK2140
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり強　粘性弱
混入炭化物(φ1～5㎜)5%
小礫(φ約50㎜)少量
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化物(φ1～10㎜)5%
3 黒褐色土(10YR3/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化物(φ1～5㎜)1%
小礫(φ約50㎜)中量

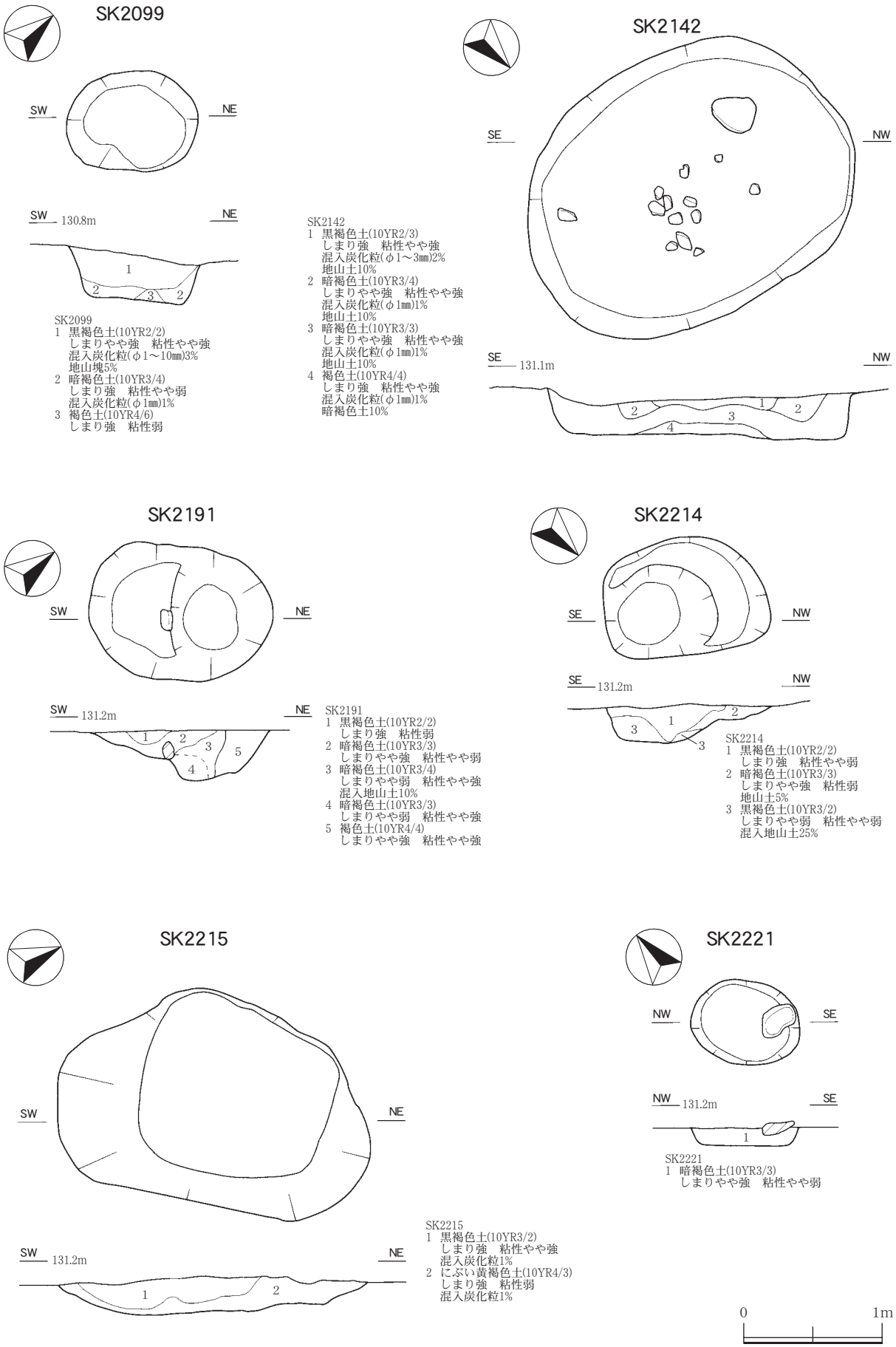


SK2141
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまり強　粘性やや弱
混入炭化物(φ1～3㎜)3%
地山土30%

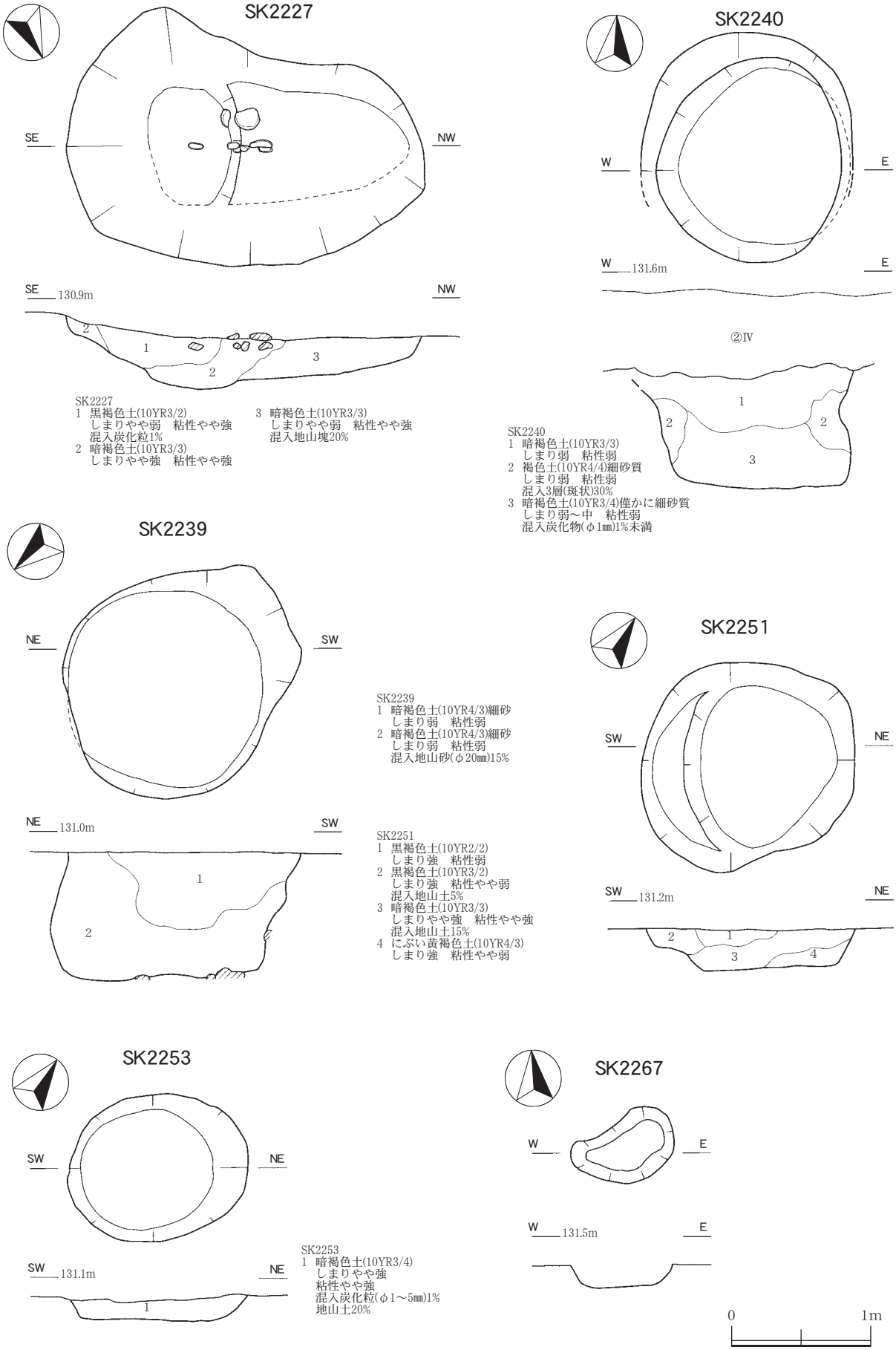


SK2146
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化物(φ1～5㎜)3%　地山粒10%
2 暗褐色土(10YR3/4)　しまり強　粘性やや弱
3 黒褐色土(10YR2/2)　しまりやや強　粘性弱
4 黒褐色土(10YR2/3)　しまりやや強　粘性やや弱
混入炭化物(φ1～10㎜)5%　地山粒5%
5 黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性やや弱
混入炭化粒(φ1～3㎜)3%　地山土60%

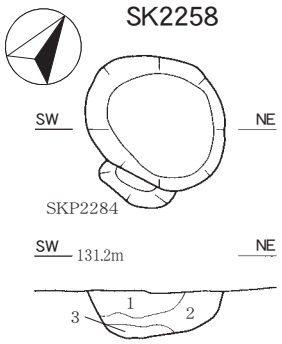
第66図　ＳＫ2045／2046／2065／2072／2100／2140／2141／2146土坑



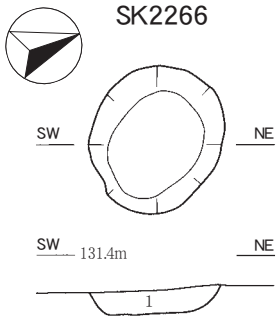
第67図　ＳＫ2099／2142／2191／2214／2215／2221土坑



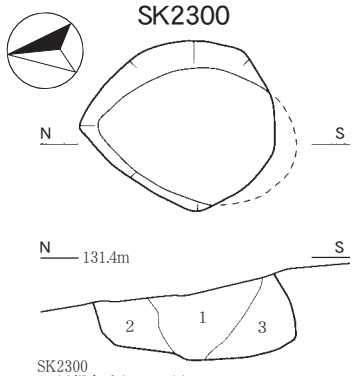
第68図　ＳＫ2227／2239／2240／2251／2253／2267土坑



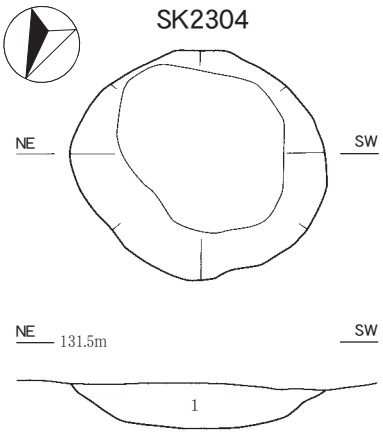
SK2258
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　暗褐色土10%(やや濁る)
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土10%(濁り弱)
3　1層に類似



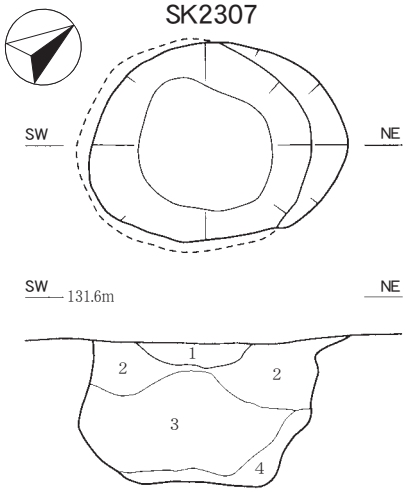
SK2266
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1㎜)1%
　地山土40%　黒褐色土5%



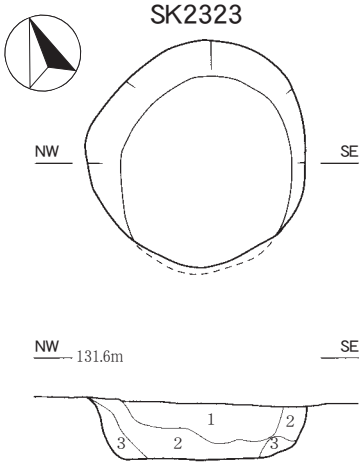
SK2300
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物3%　地山塊15%　地山土20%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物2%　地山土40%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物2%　地山土30%



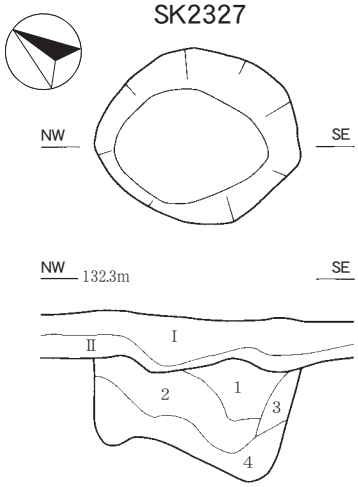
SK2304
1　黒色土(10YR2/1)シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ0.5～2㎜)1%
　地山土5%　小礫少量



SK2307
1　黒色土(10YR2/1)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物(φ0.5～2㎜)1%
　地山粒5%
2　暗褐色土(10YR3/3)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山土30%
3　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～2㎜)3%
　地山土5%
4　暗褐色土(10YR3/4)シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強
　混入地山土60%

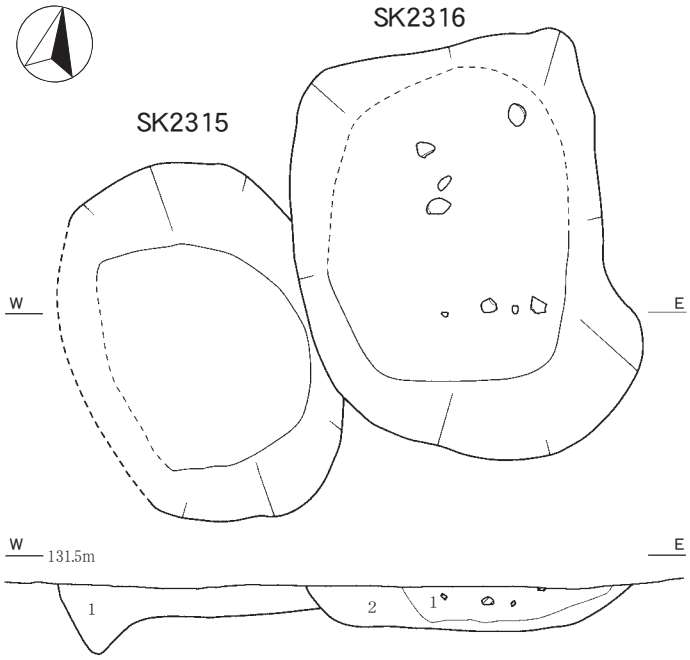


SK2323
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～5㎜)10%　地山塊5%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)7%　地山土20%
3　暗褐色土(10YR3/4)
　しまり強　粘性やや強
　混入地山土40%



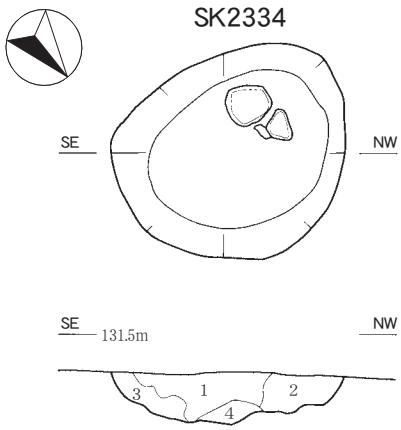
SK2327
Ⅰ黒色土(10YR2/1)シルト　表土
　しまり弱　粘性強
Ⅱ黒褐色土(10YR2/2)シルト　表土
　しまり弱　粘性強
　混入Ⅰ層土少量
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入2層土微量　Ⅰ・Ⅱ層土由来黒ボク土
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)シルト～細砂
　しまり極弱　粘性弱
　混入炭化物(φ2～5㎜)1%　十和田の大湯浮石50%
3　1層土に類似
　混入火山灰微量
4　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ1～2㎜)1%　地山粒1%

第69図　ＳＫ2258／2266／2300／2304／2307／2323／2327土坑

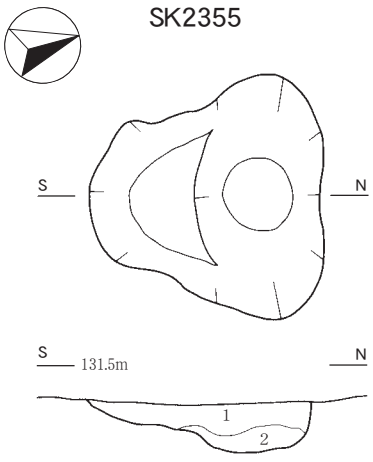


SK2315
1　黒褐色土(10YR2/(2)シルト
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ0.5～2㎜)2%　地山土10%

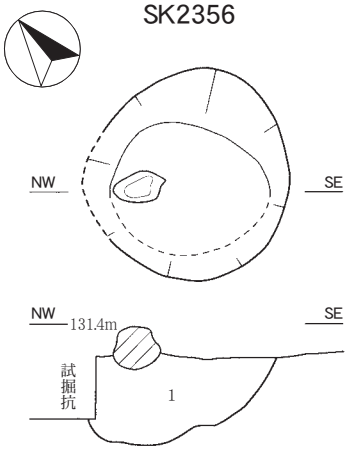
SK2316
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～5㎜)10%　地山土5%
2　暗褐色土(10YR3/3)シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)3%　地山土50%



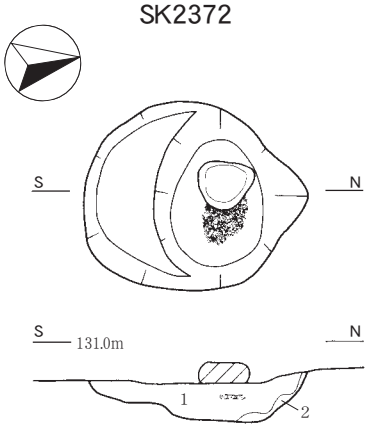
SK2334
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山粒25%　炭化物(φ0.5～3㎜)2%
2　暗褐色土(10YR3/4)シルト～微砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～2㎜)1%　地山土20%
3　暗褐色土(10YR3/3)シルト～微砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～10㎜)5%　地山粒10%
4　2層に類似
　混入炭化物(φ0.5～2㎜)1%　地山土40%



SK2355
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ1～5㎜)10%　地山塊5%
2　暗褐色土(10YR3/4)シルト
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～7㎜)5%　地山土30%

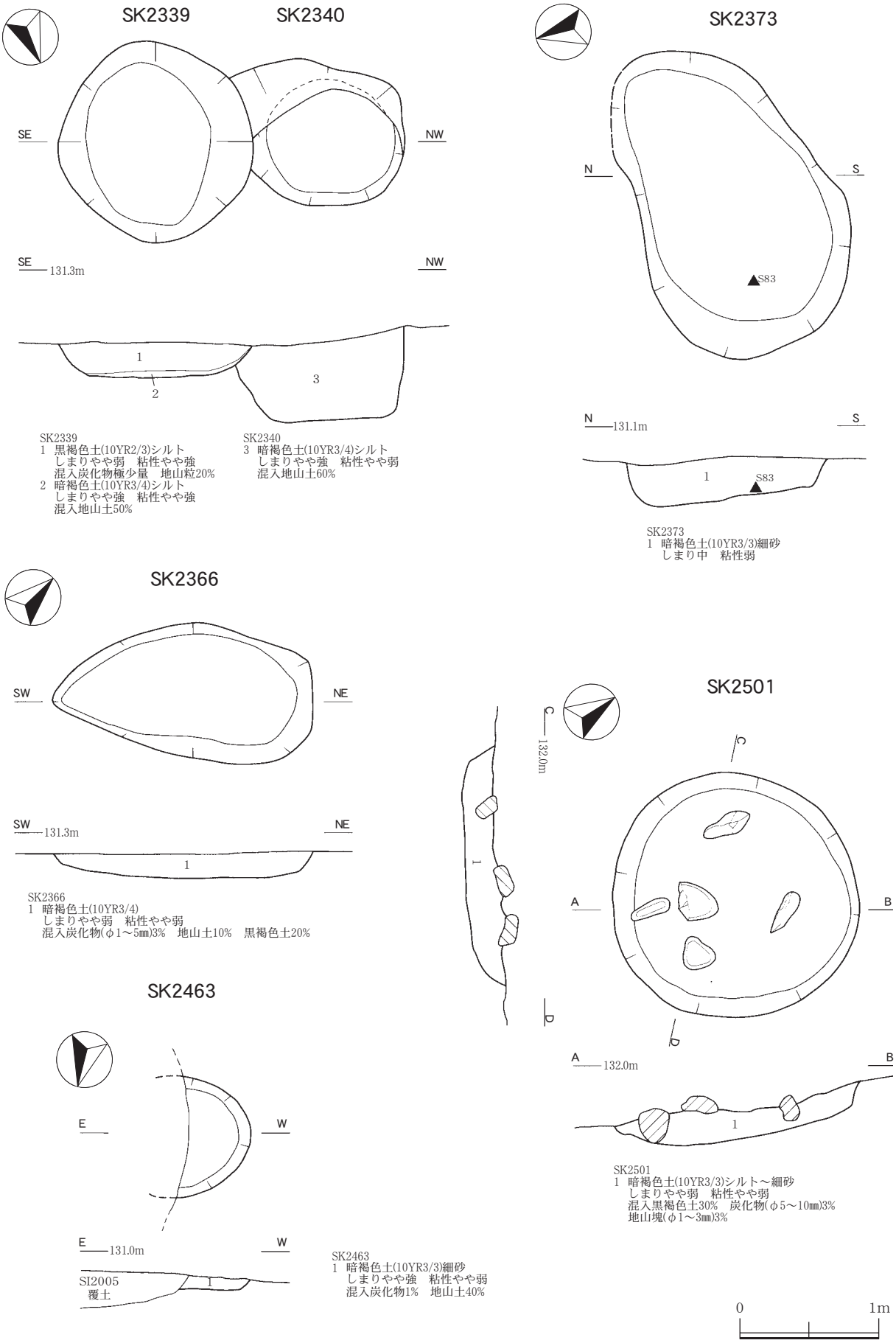


SK2356
1　暗褐色土(10YR3/4)シルト～微砂
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ0.5～5㎜)5%　地山土30%

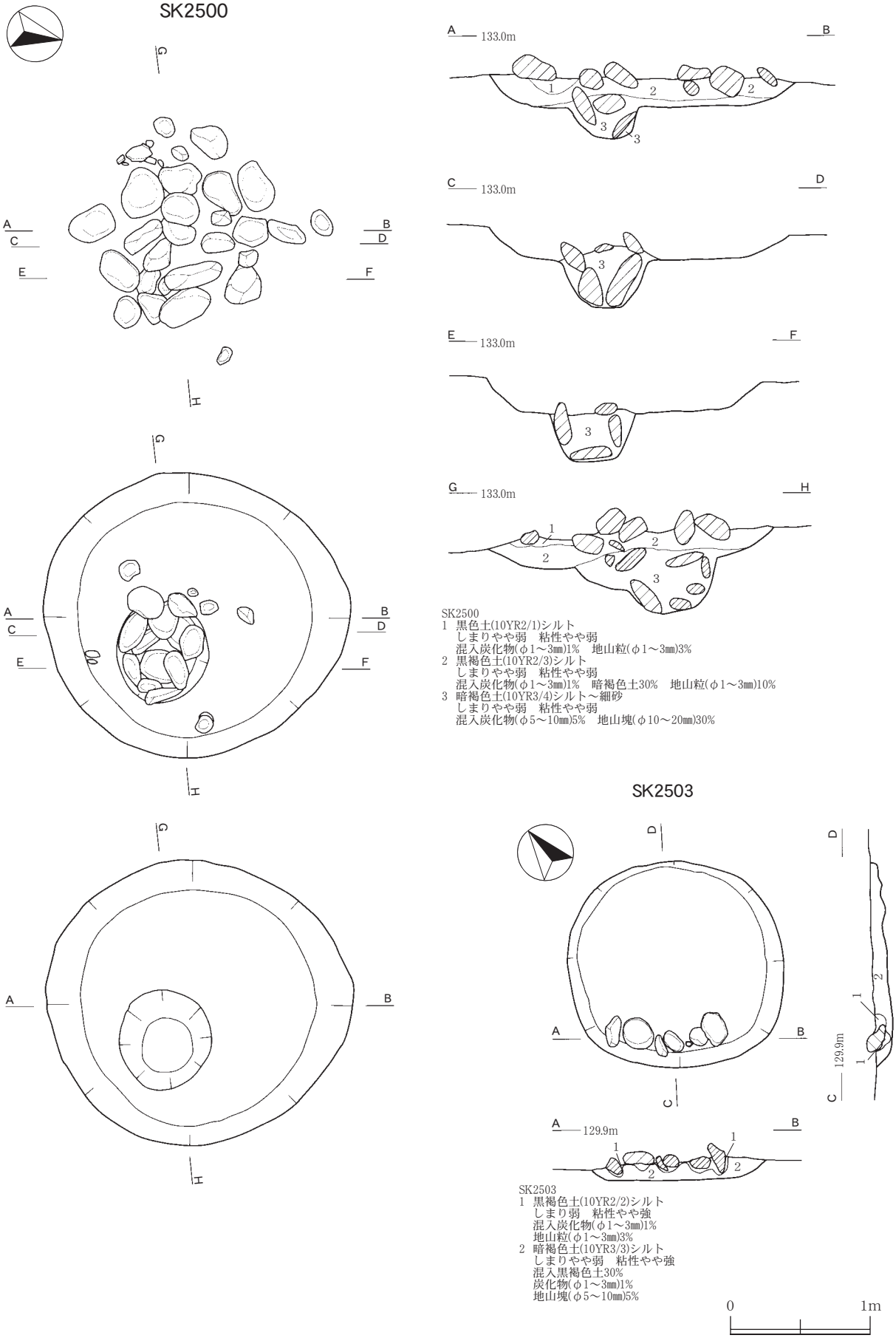


SK2372
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
　地山土20%　焼土塊
2　暗褐色土(10YR3/3)砂～シルト
　しまり強　粘性弱
　混入地山土20%

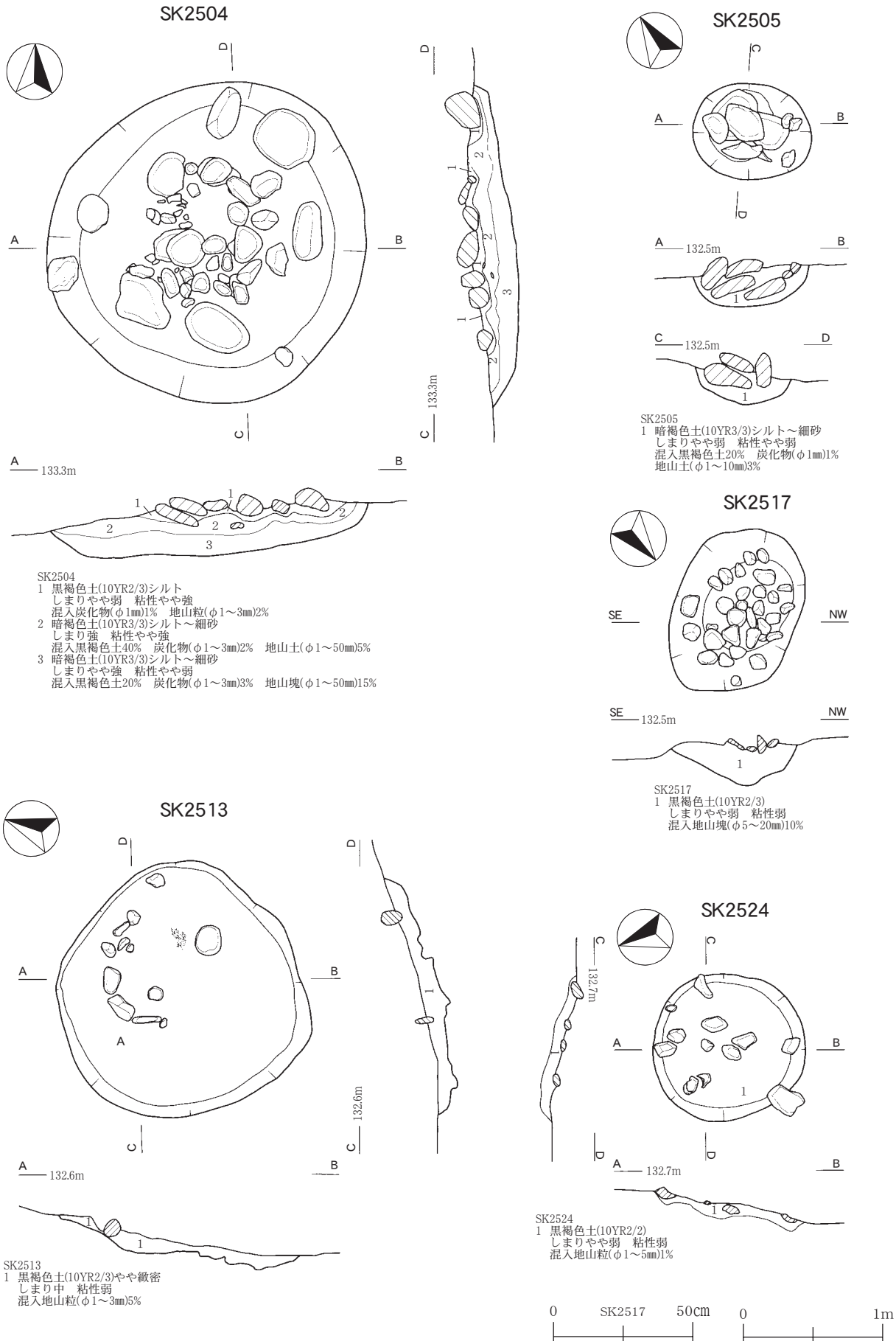
第70図　ＳＫ2315･2316／2334／2355／2356／2372土坑



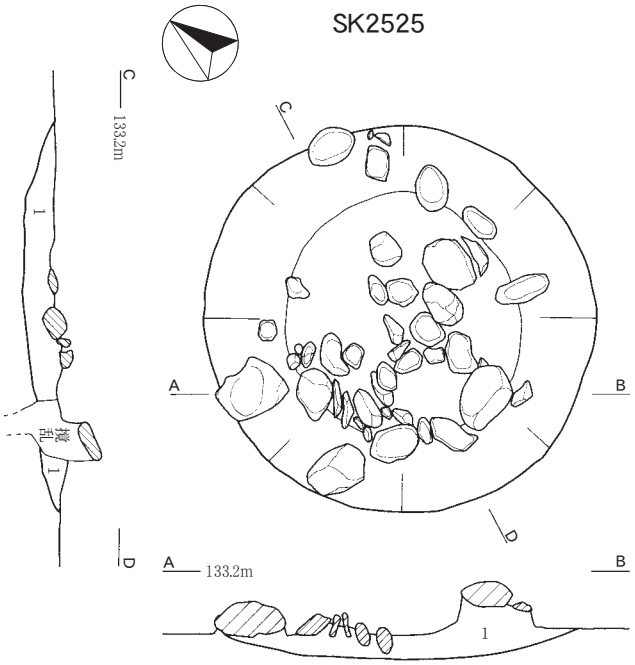
第71図　ＳＫ2339･2340／2366／2373／2463／2501土坑



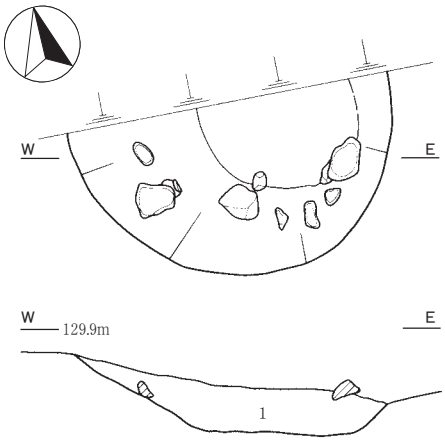
第72図　ＳＫ2500／2503土坑



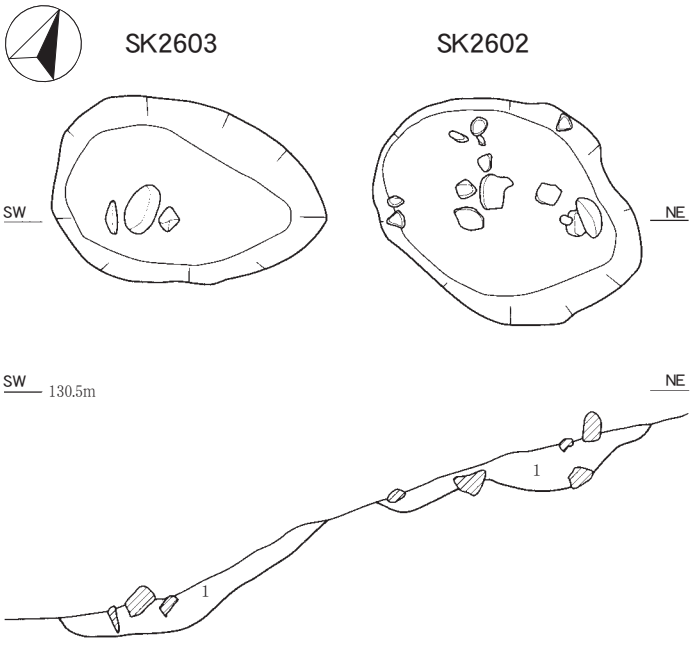
第73図　ＳＫ2504／2505／2513／2517／2524土坑



SK2525
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり弱　粘性やや強
　混入地山粒(φ1～3㎜)25%

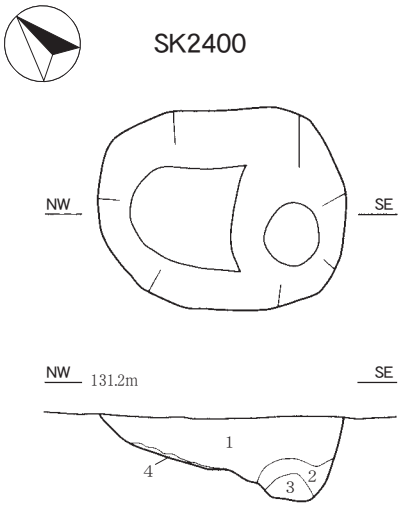


SK2527
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山塊少量



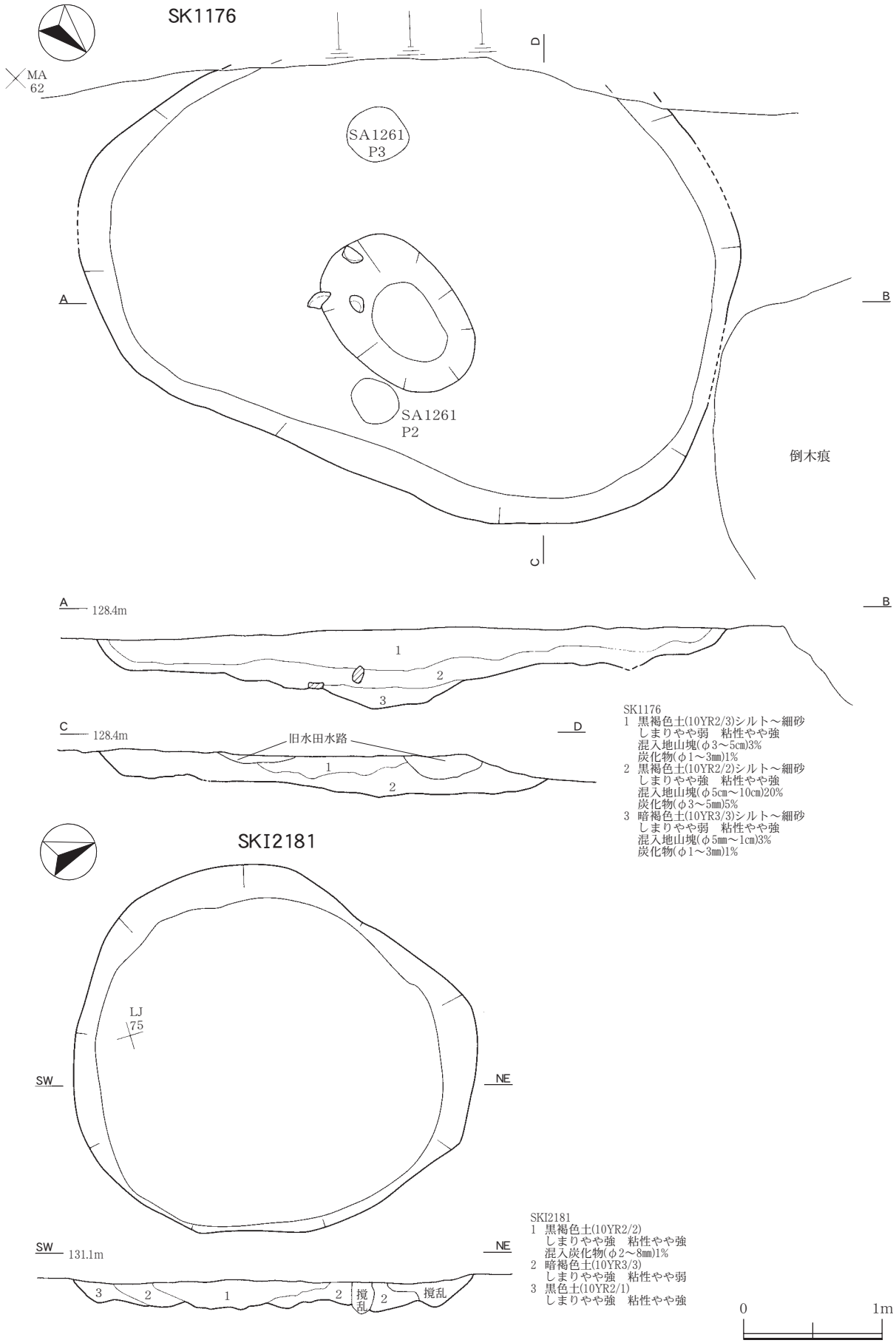
SK2603
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱

SK2602
1　暗褐色土(10YR3/3)
　しまりやや強　粘性やや弱

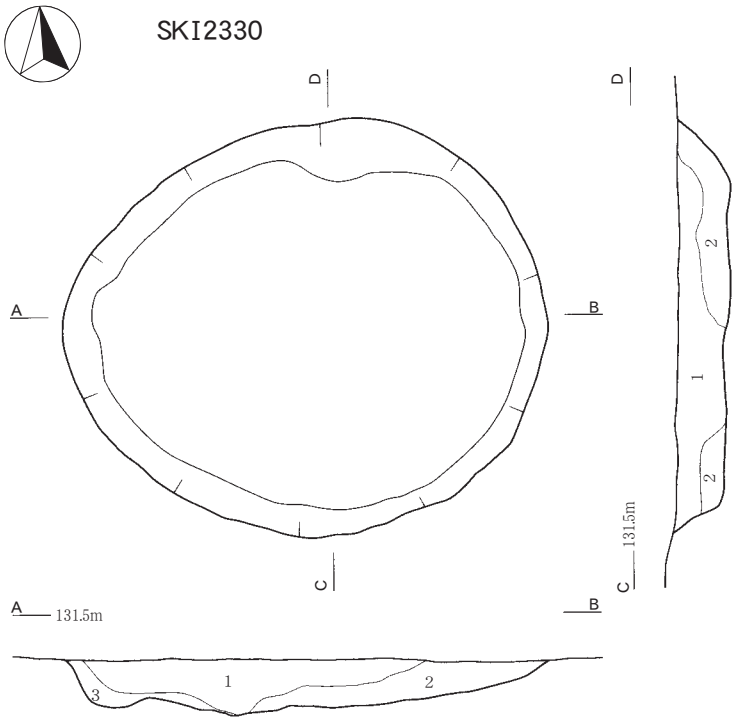


SK2400
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや強　混入地山塊5%
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや強　混入地山土30%
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山塊(φ10㎜前後)
4　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性やや弱　混入地山土60%

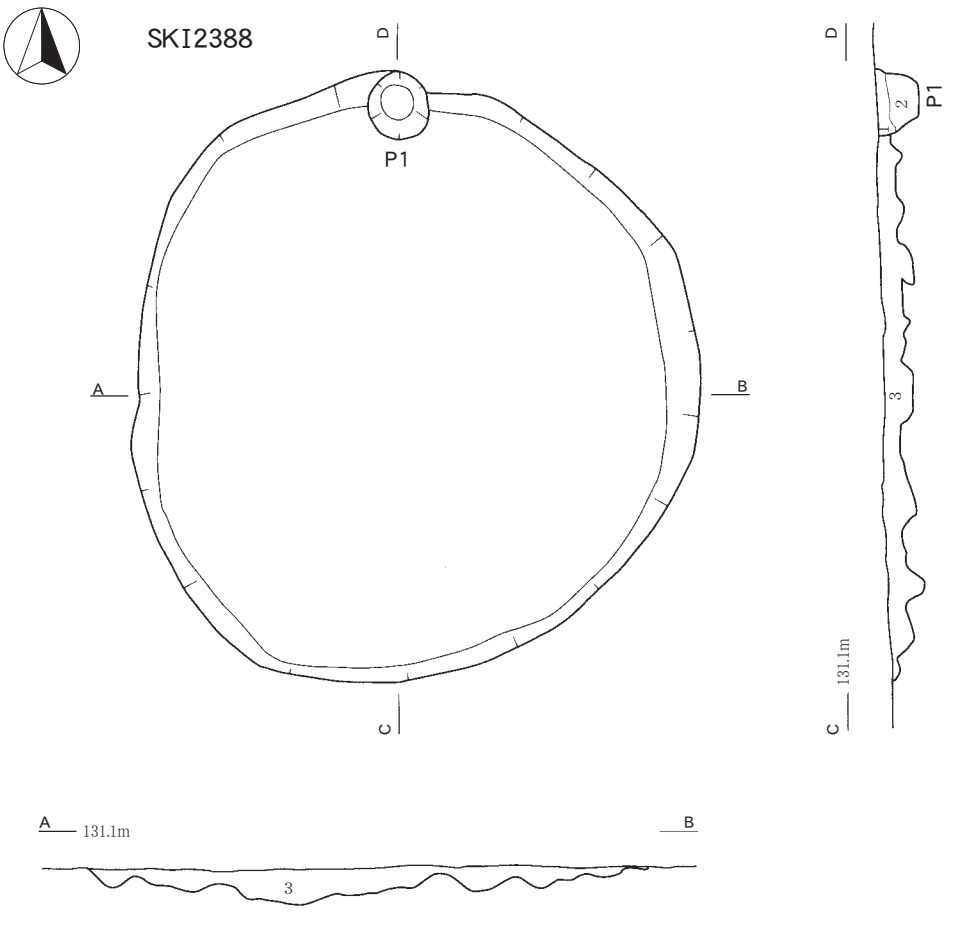
第74図　ＳＫ2400／2525／2527／2602・2603土坑



第75図　ＳＫ1176土坑／ＳＫＩ2181竪穴状遺構



SKI2330
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ2～10㎜)2%　少礫少量
2　暗褐色土(10YR3/4)シルト～微細砂
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ0.5～2㎜)3%　地山粒20%
　地山塊(φ10～100㎜)10%
3　暗褐色土(10YR3/3)シルト～微細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～2㎜)極少量
　地山塊(φ50～100㎜)5%　1層土10%

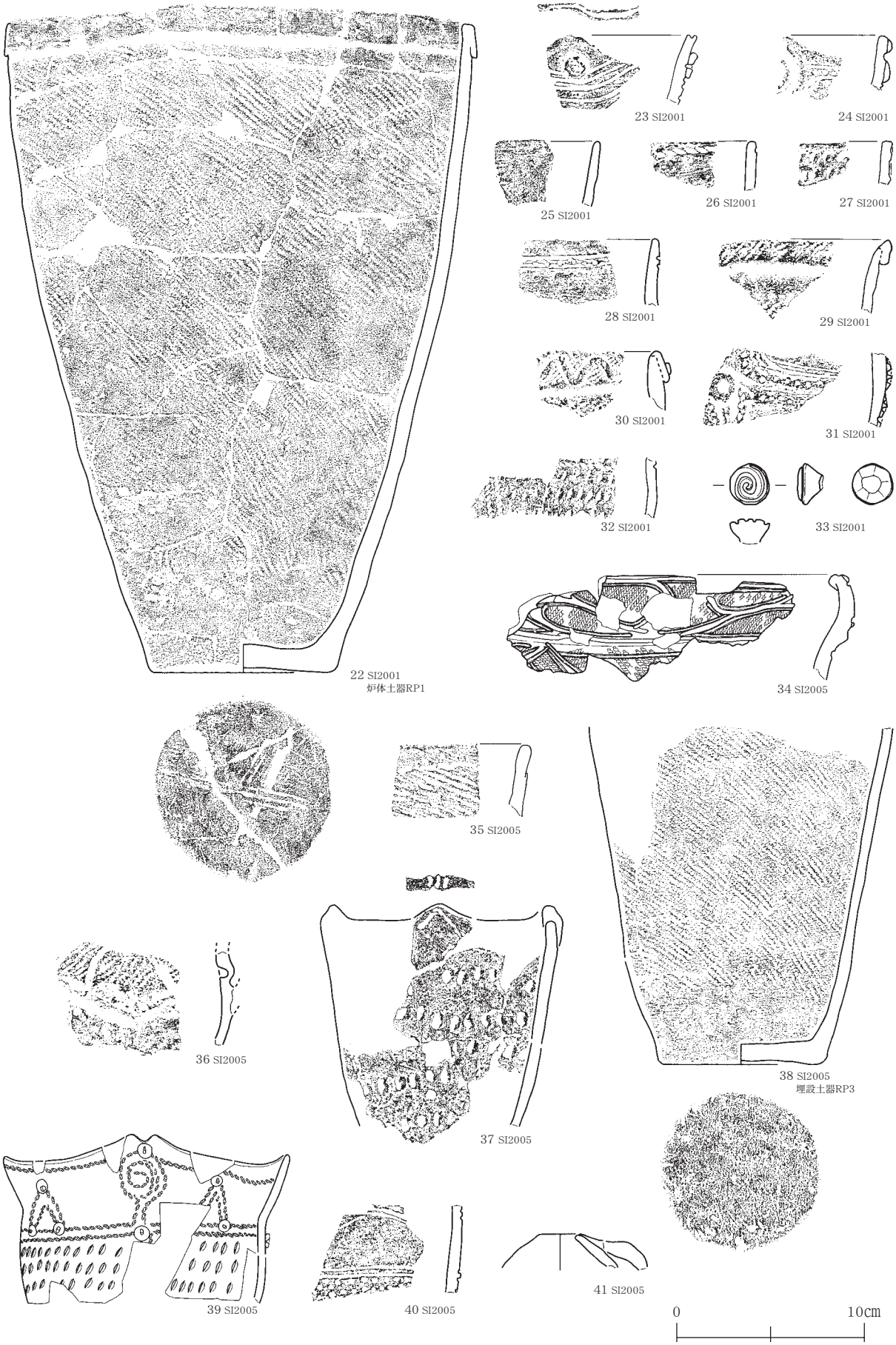


SKI2388
1　黒褐色土(10YR3/2)
　しまり弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～2㎜)3%
　地山土10%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　しまり弱　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山土25%
3　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山土30%

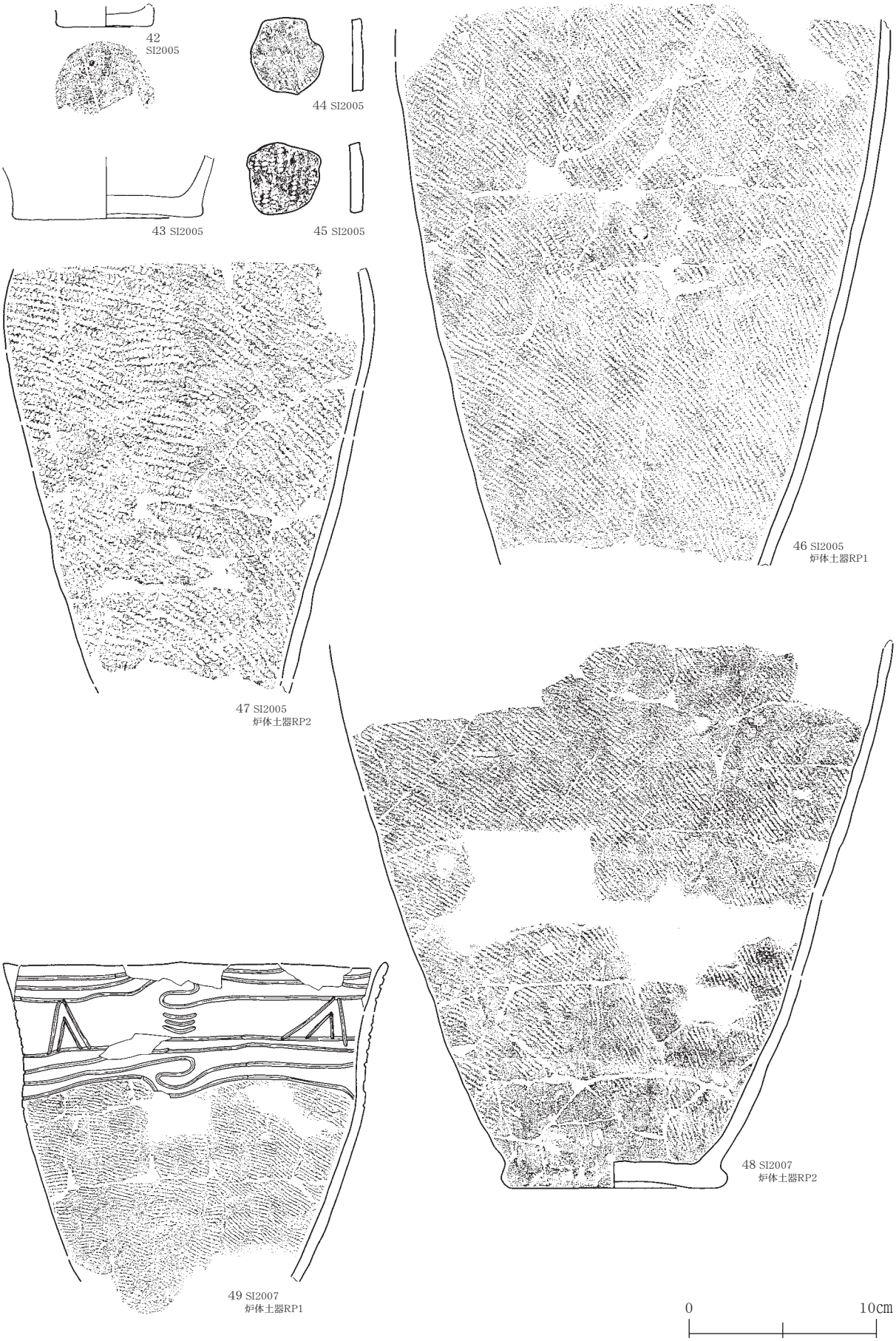
0　1m

第76図　ＳＫＩ2330／2388竪穴状遺構

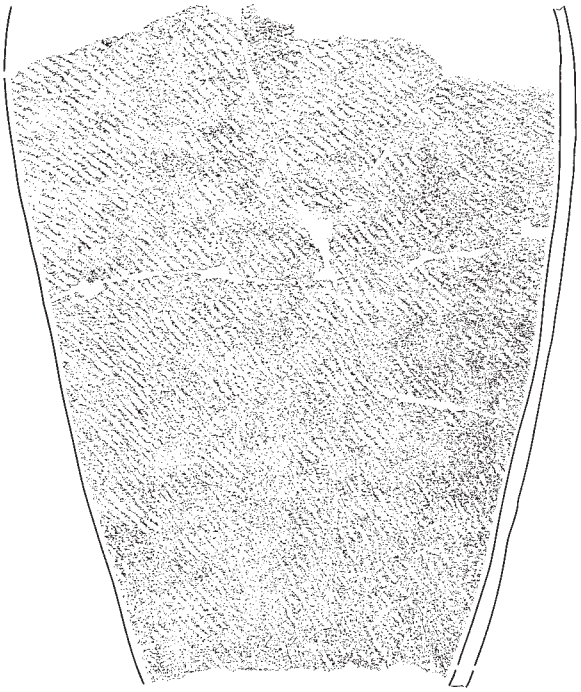
第77図　遺構内(ＳＩ1105･1229･2158)出土土器類(１)



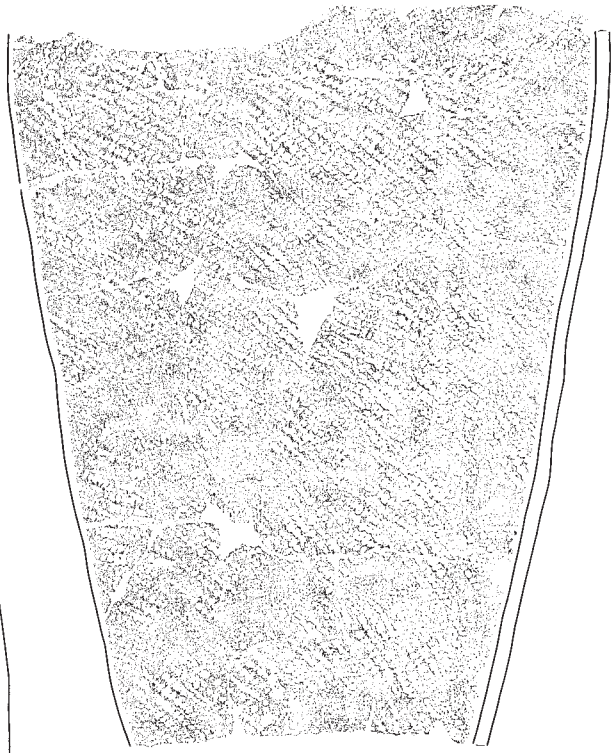
第78図　遺構内(ＳＩ2001･2005)出土土器類(２)



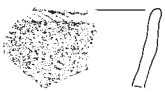
第79図　遺構内(ＳＩ2005･2007)出土土器類(３)



50 SI2017
炉体土器RP1



51 SI2017
炉体土器RP2



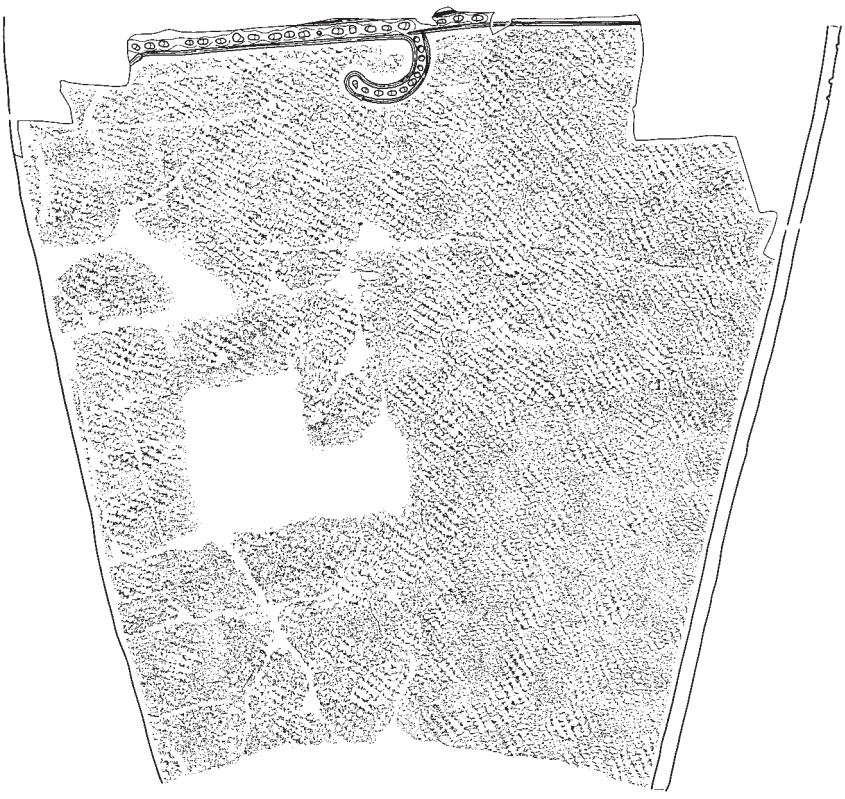
52 SI2017

53 SI2019
炉体土器RP1

0　10cm

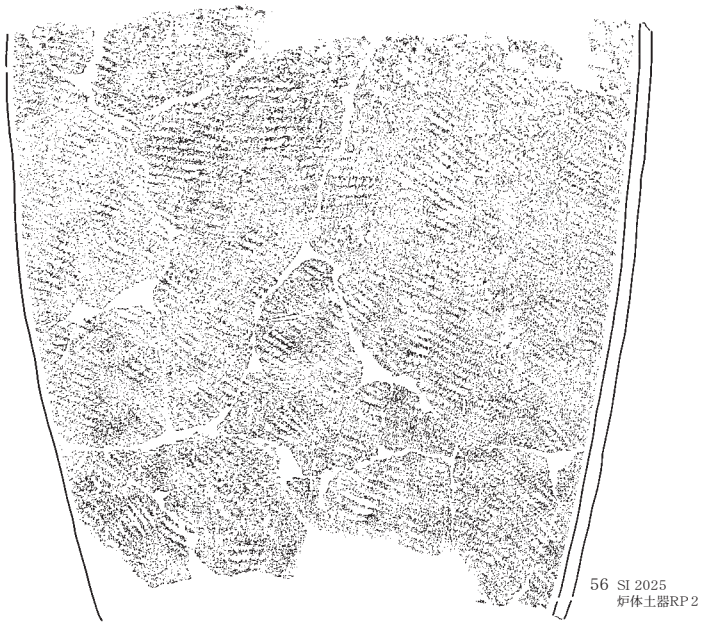
第80図　遺構内(ＳＩ2017･2019)出土土器類(４)

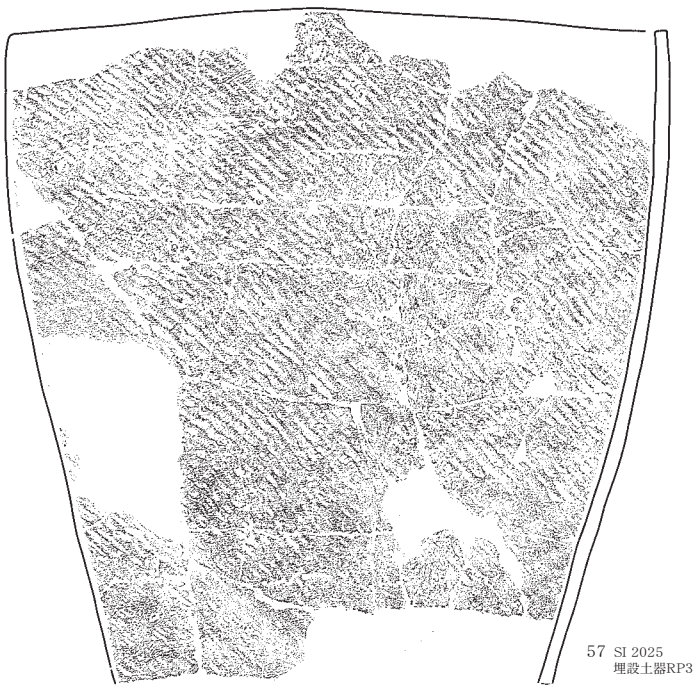
54 SI2019
炉体土器RP2

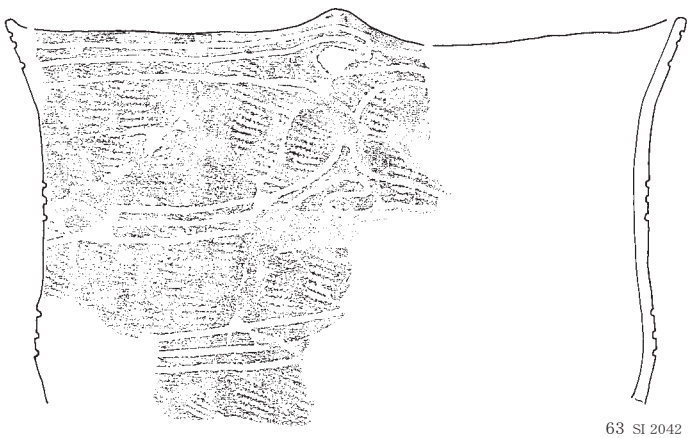


55 SI2025
炉体土器RP1

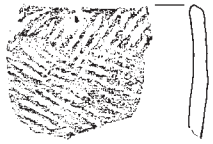
第81図　遺構内(ＳＩ2019･2025)出土土器類(５)

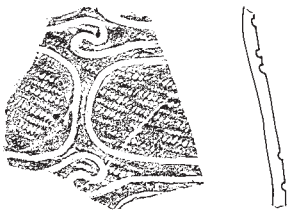

56 SI 2025
炉体土器RP２


57 SI 2025
埋設土器RP3

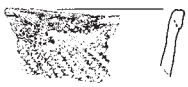

63 SI 2042

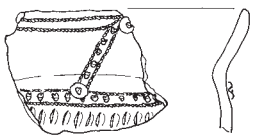
58 SI 2025


59 SI 2025


60 SI 2025

61 SI 2025

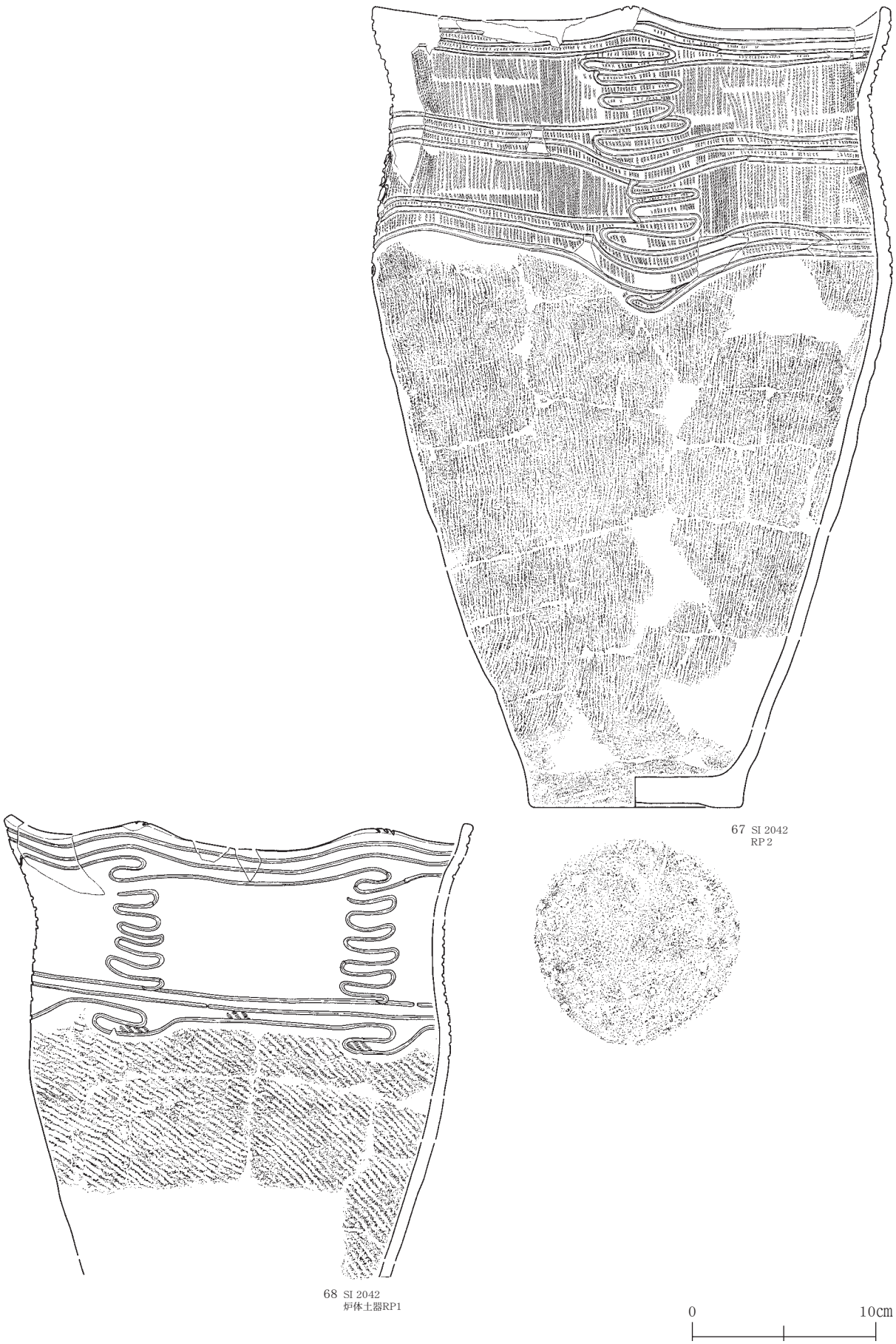

62 SI 2036


64 SI 2042

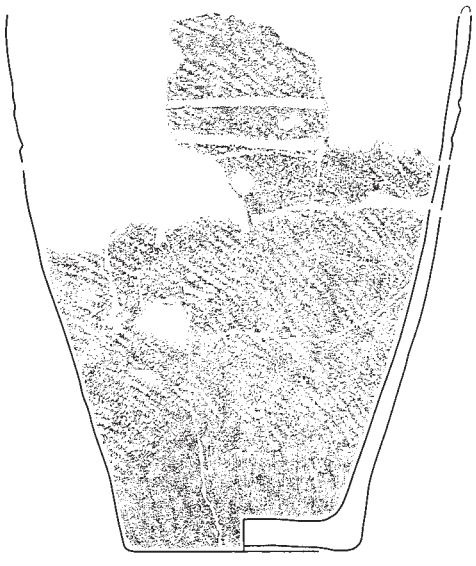
65 SI 2042

66 SI 2042

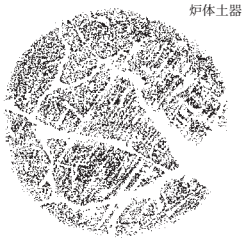
第82図　遺構内(ＳＩ2025・2036・2042)出土土器類(６)

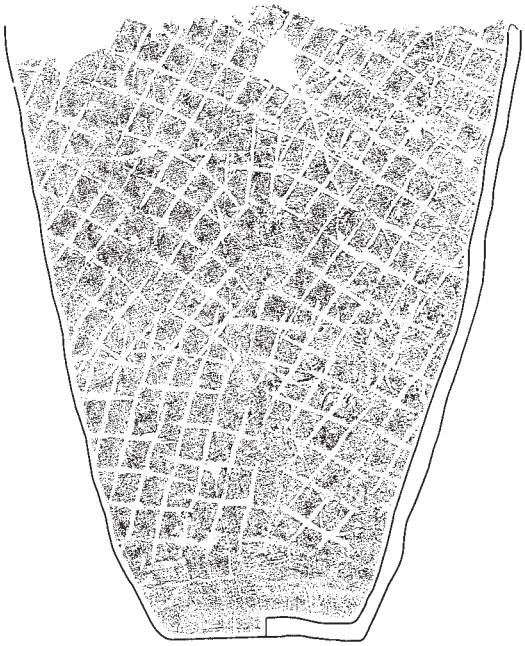


第83図　遺構内(ＳＩ2042)出土土器類(７)

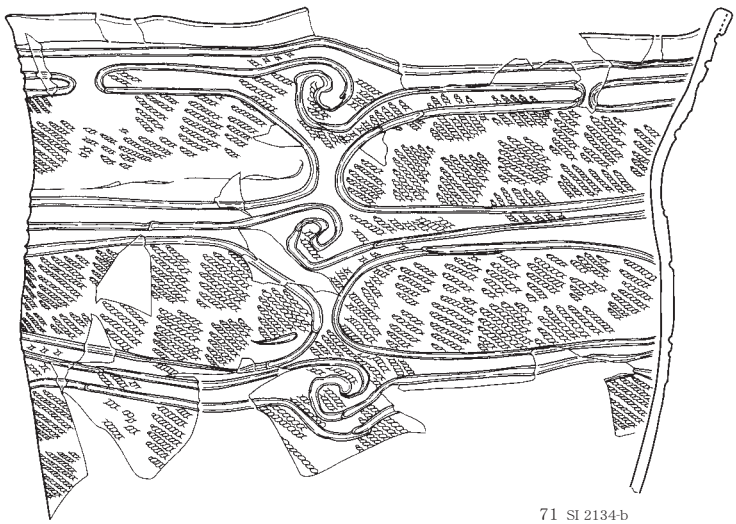


69 SI 2134-a
炉体土器 RP1

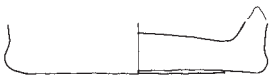




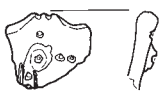
70 SI 2134-c
炉体土器RP3



71 SI 2134-b
炉体土器RP 2



72 SI 2134



73 SI 2134

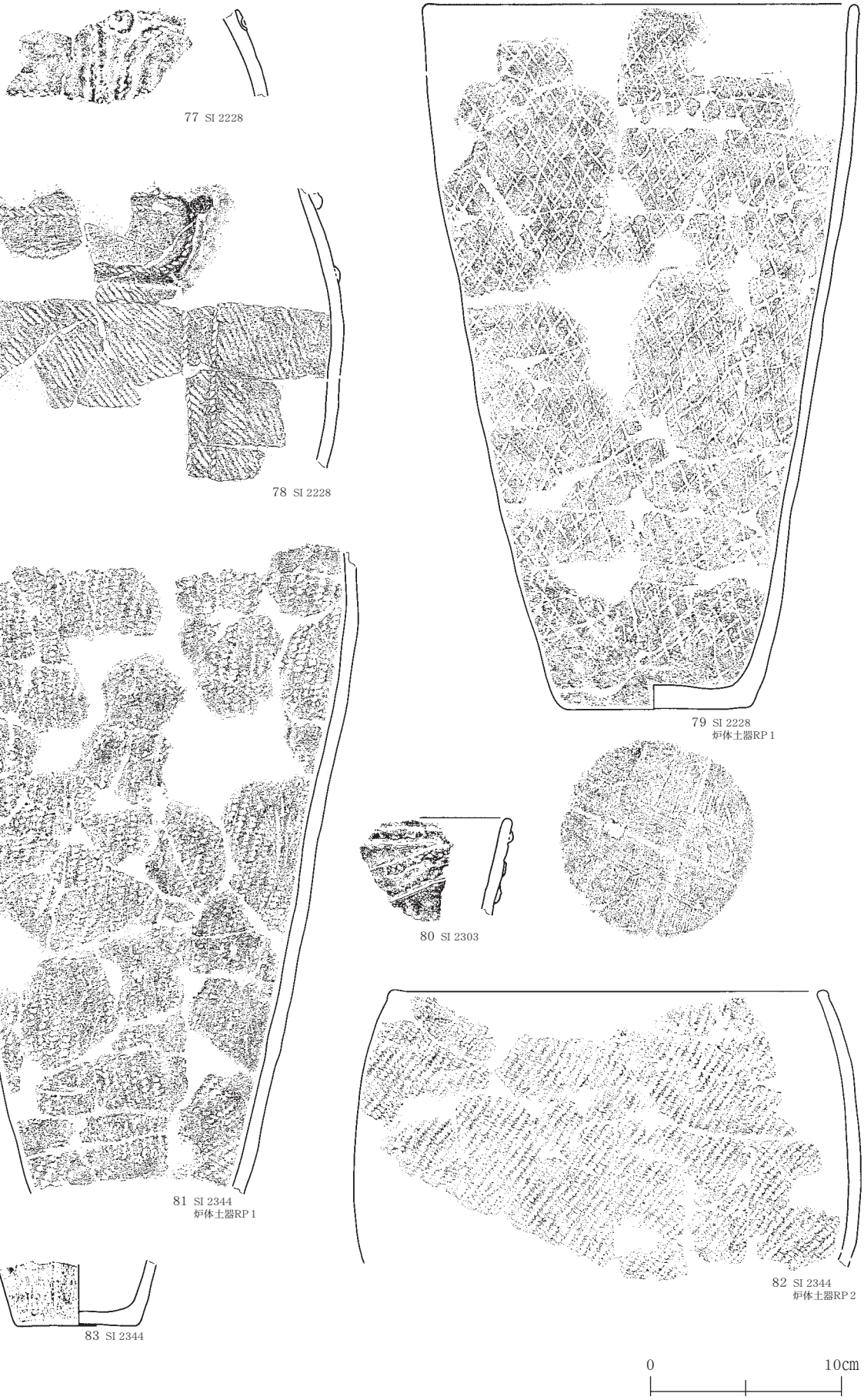
74 SI 2134

75 SI 2134

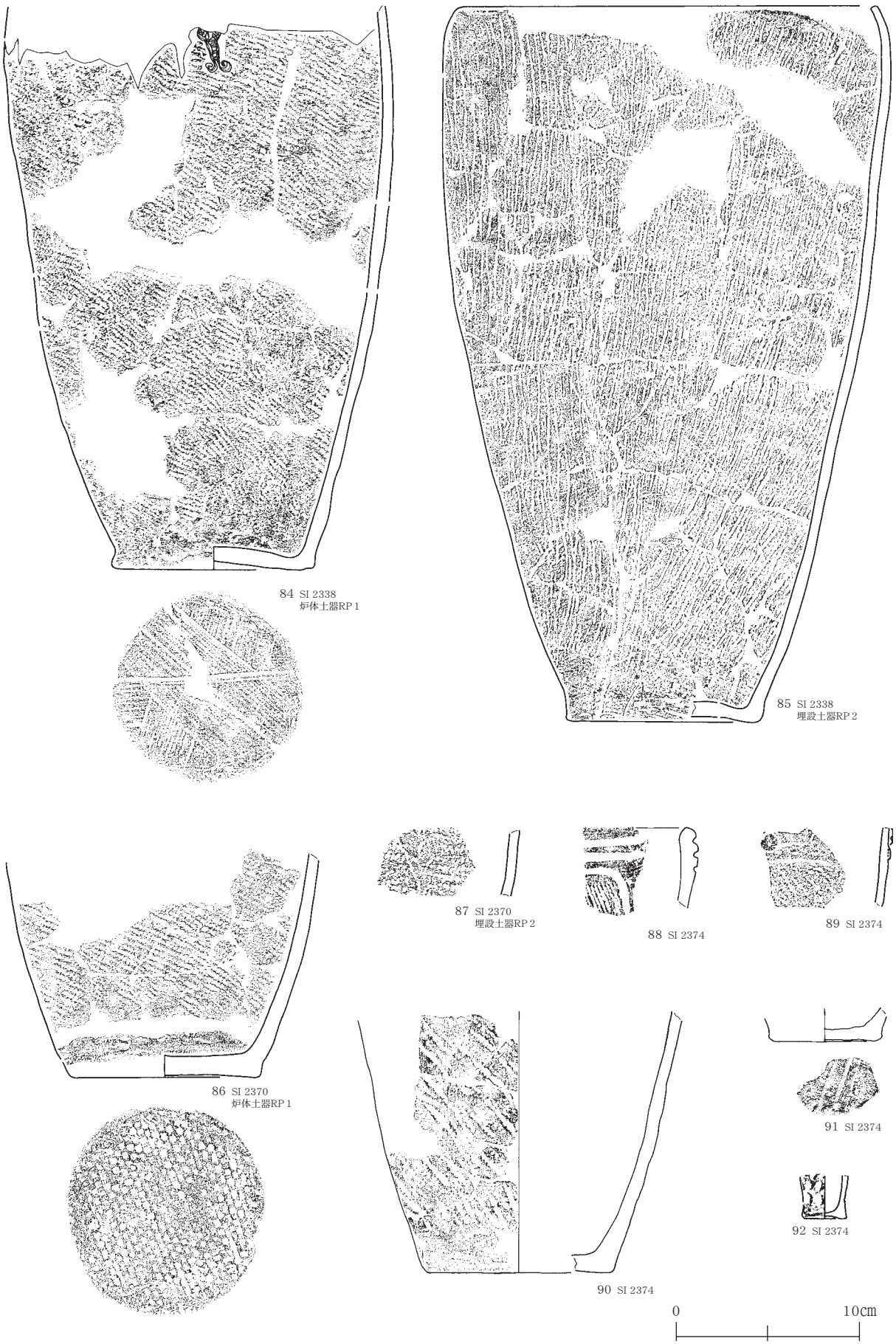
76 SI 2134

0　10cm

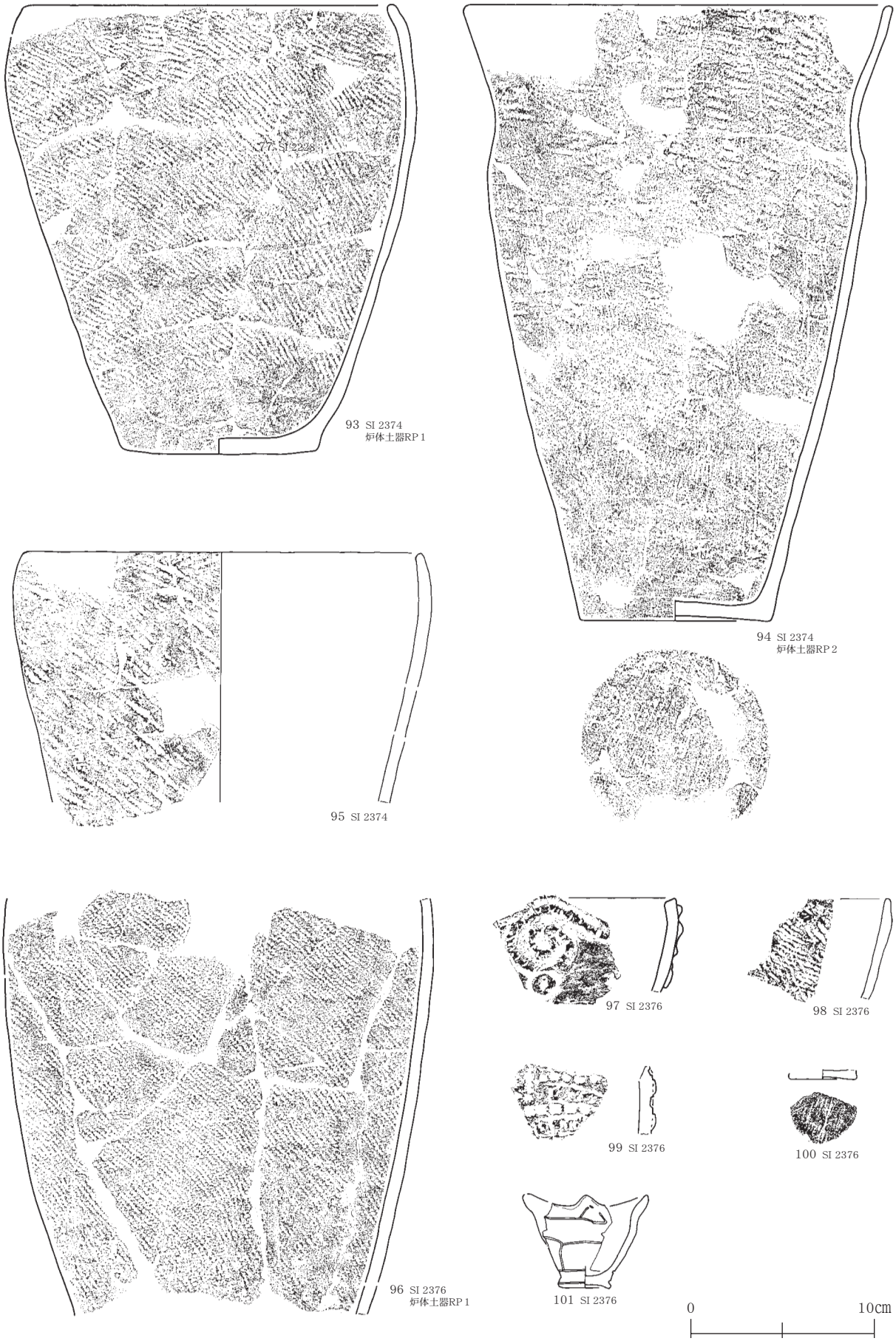
第84図　遺構内(ＳＩ2134)出土土器類(８)



第85図　遺構内(ＳＩ2228･2303･2344)出土土器類(９)

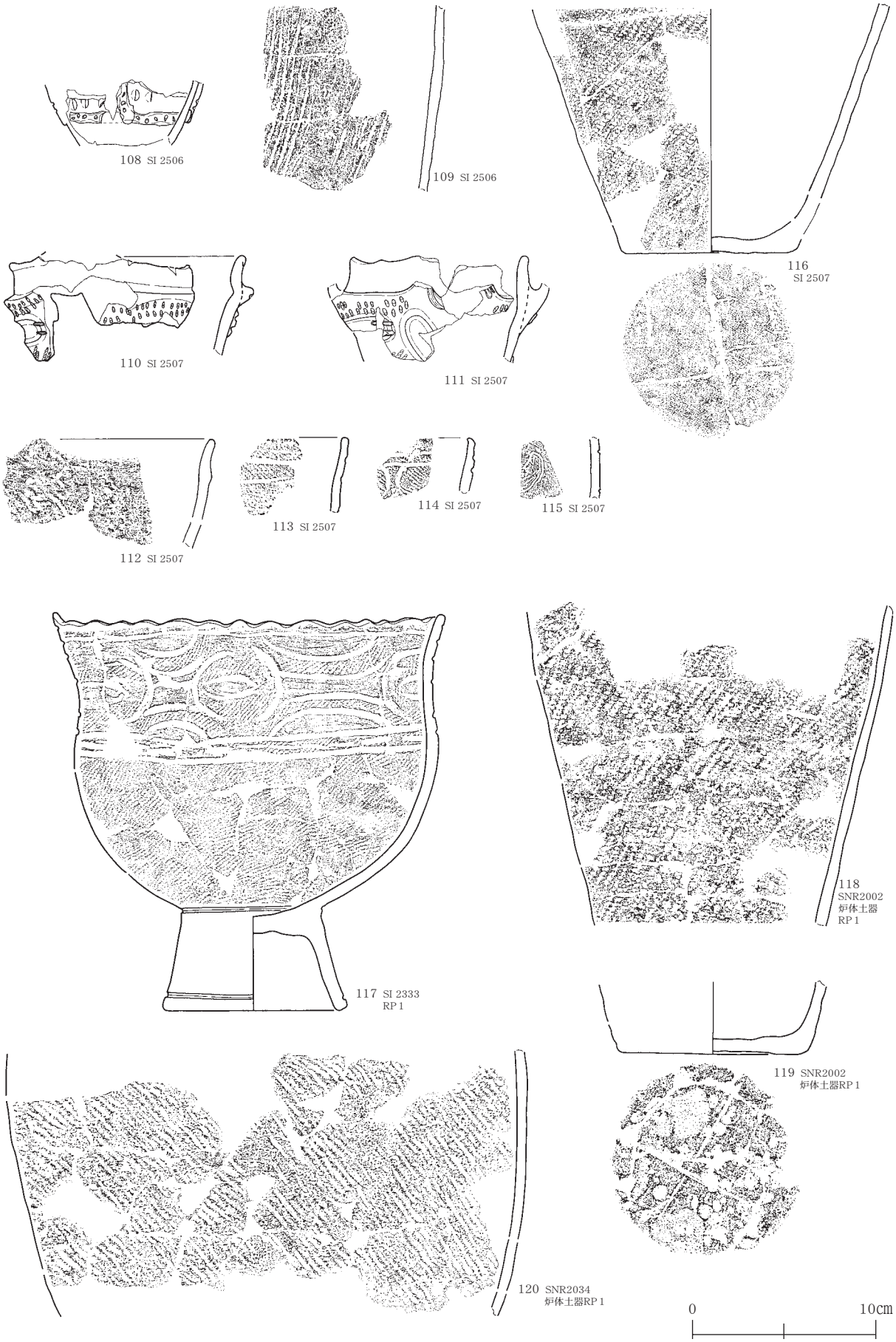


第86図　遺構内(ＳＩ2338・2370・2374)出土土器類(10)

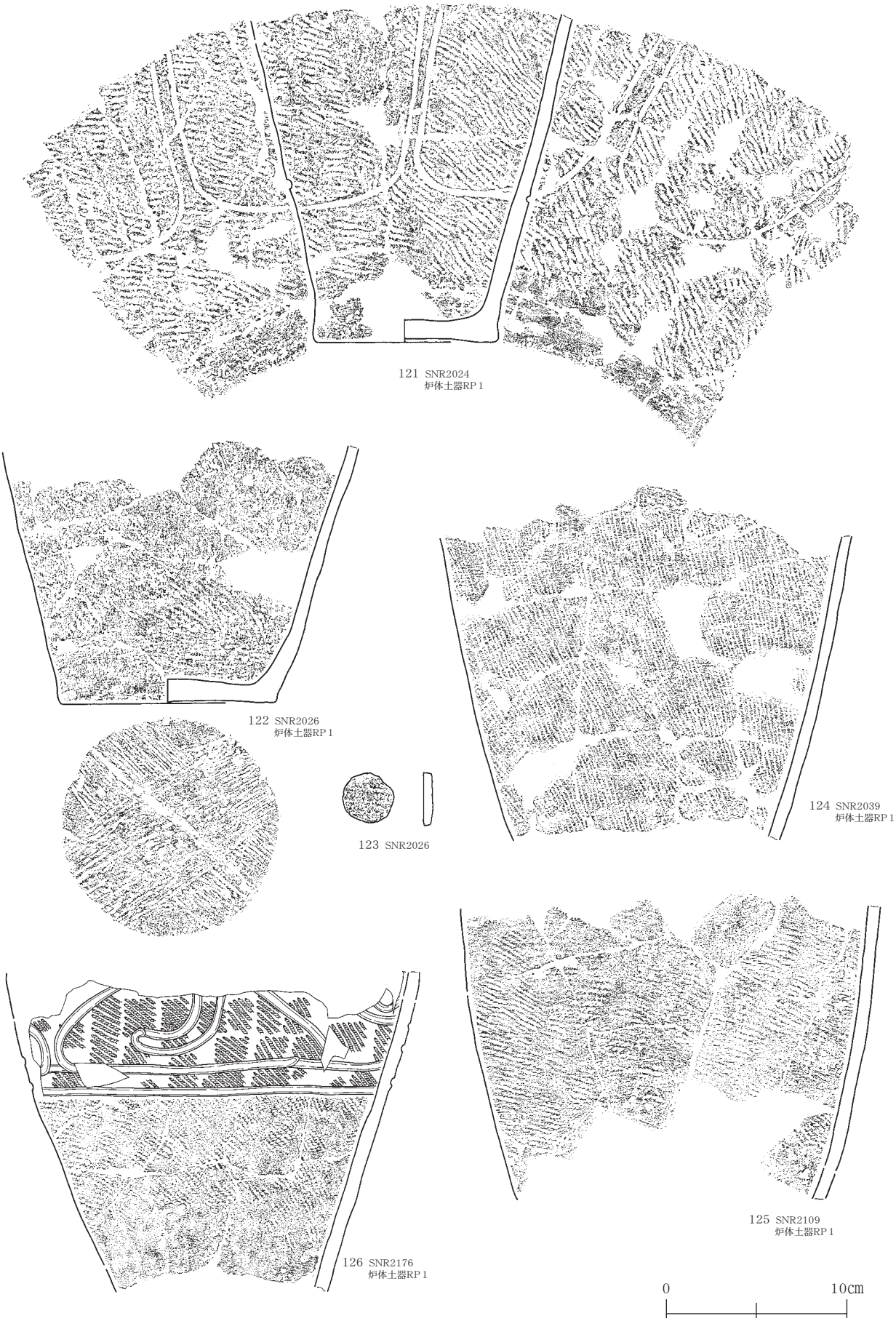


第87図　遺構内(ＳＩ2374･2376)出土土器類(11)

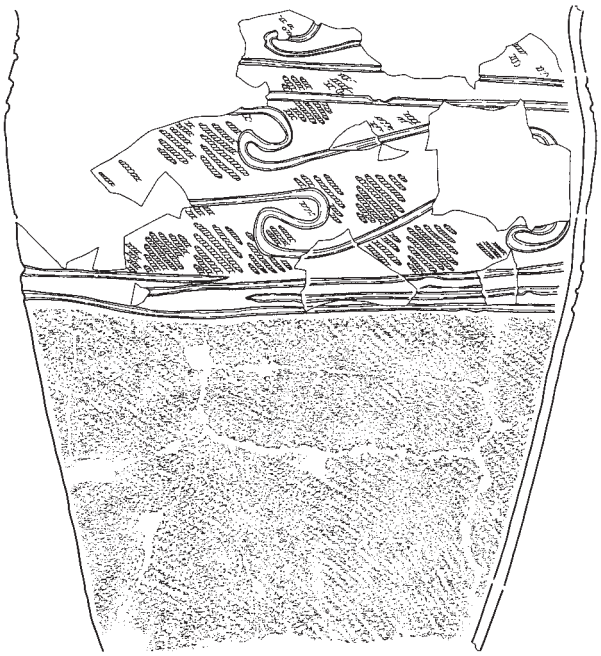
第88図　遺構内(ＳＩ2381･2460･2475)出土土器類(12)



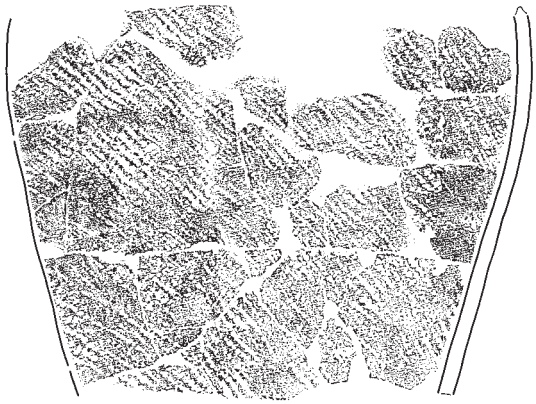
第89図　遺構内(ＳＩ2333・2506・2507・ＳＮＲ2002・2034)出土土器類(13)



第90図　遺構内(ＳＮＲ2024・2026・2039・2109・2176)出土土器類(14)



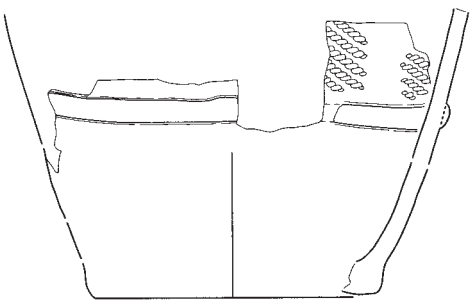
127 SNR2156
炉体土器RP１



129 SNR2279
炉体土器RP１

130 SNR2308
炉体土器RP１

128 SNR2186
炉体土器RP１

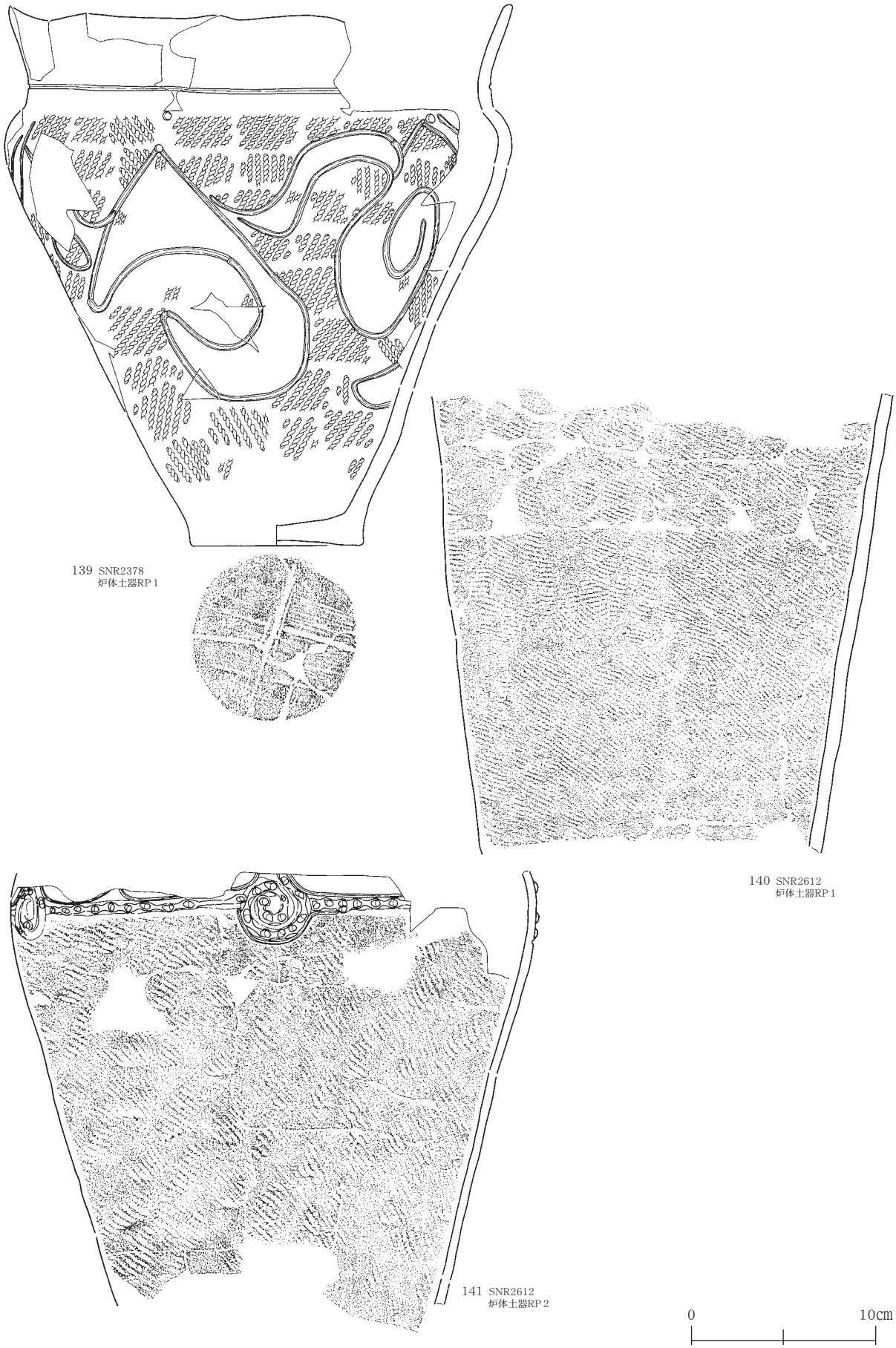


131 SNR2322
炉体土器RP１

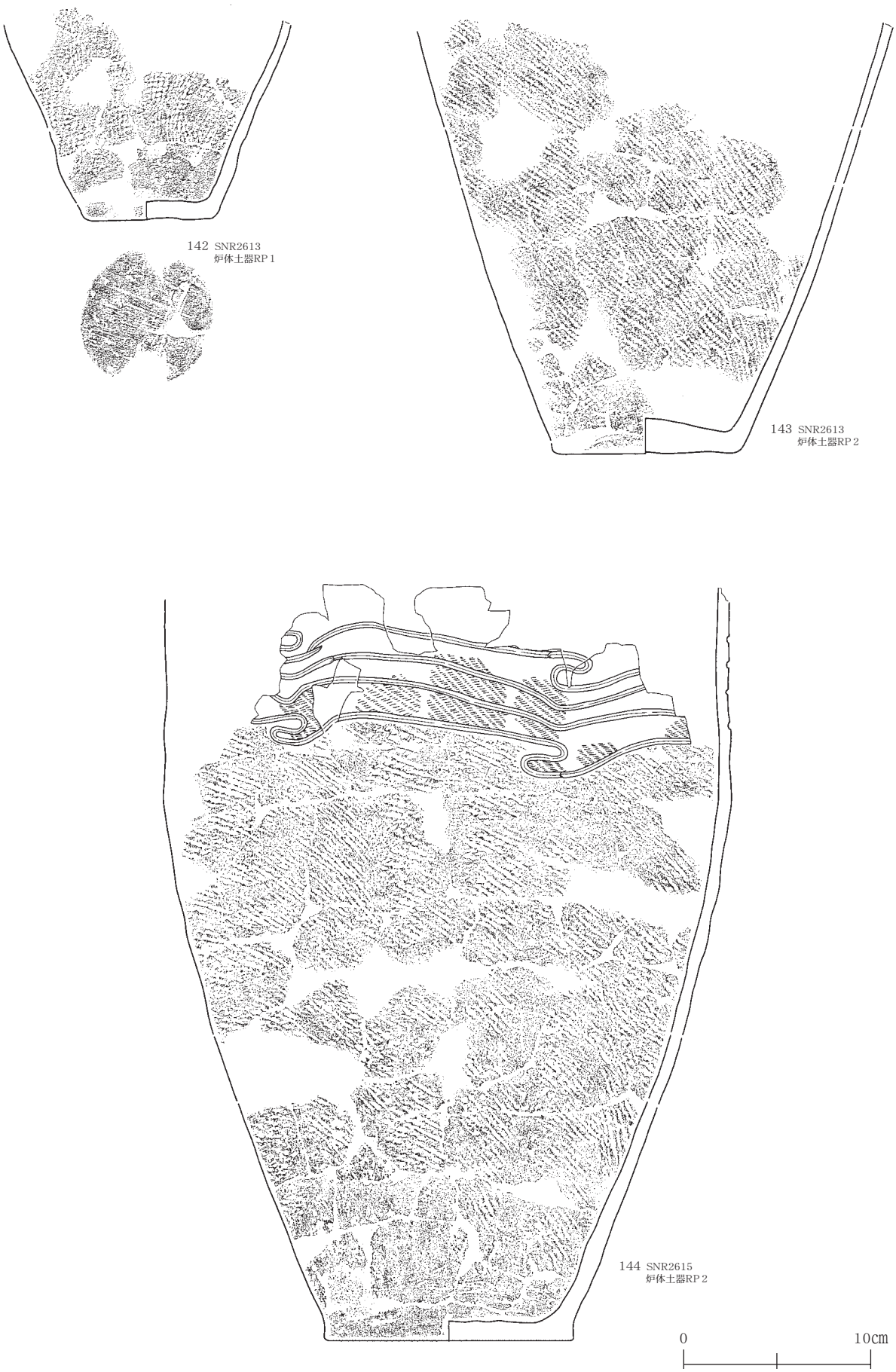
0　10cm

第91図　遺構内(ＳＮＲ2156・2186・2279・2308・2322)出土土器類(15)

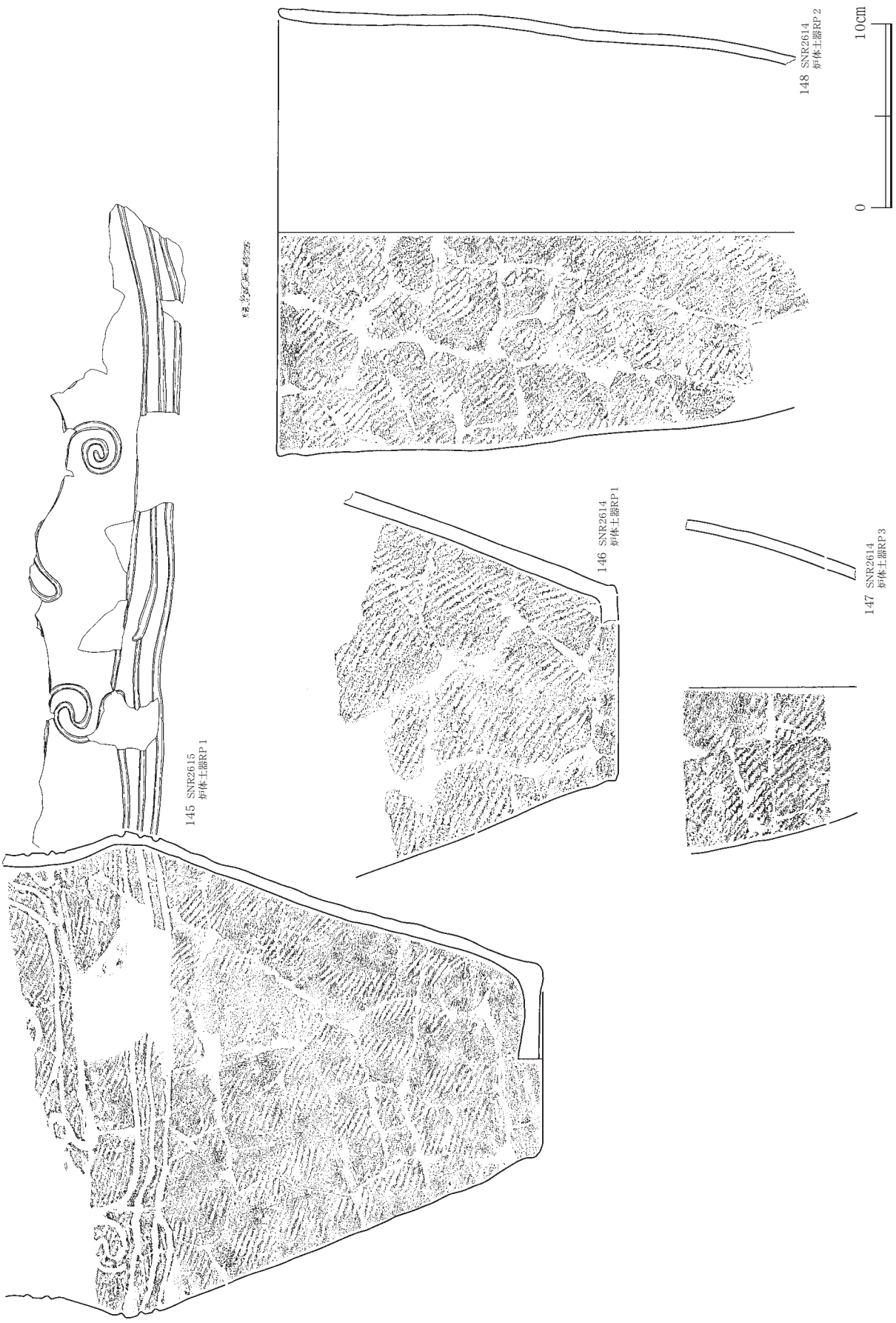
第92図　遺構内(ＳＮＲ2335・2371・2377・2611)出土土器類(16)



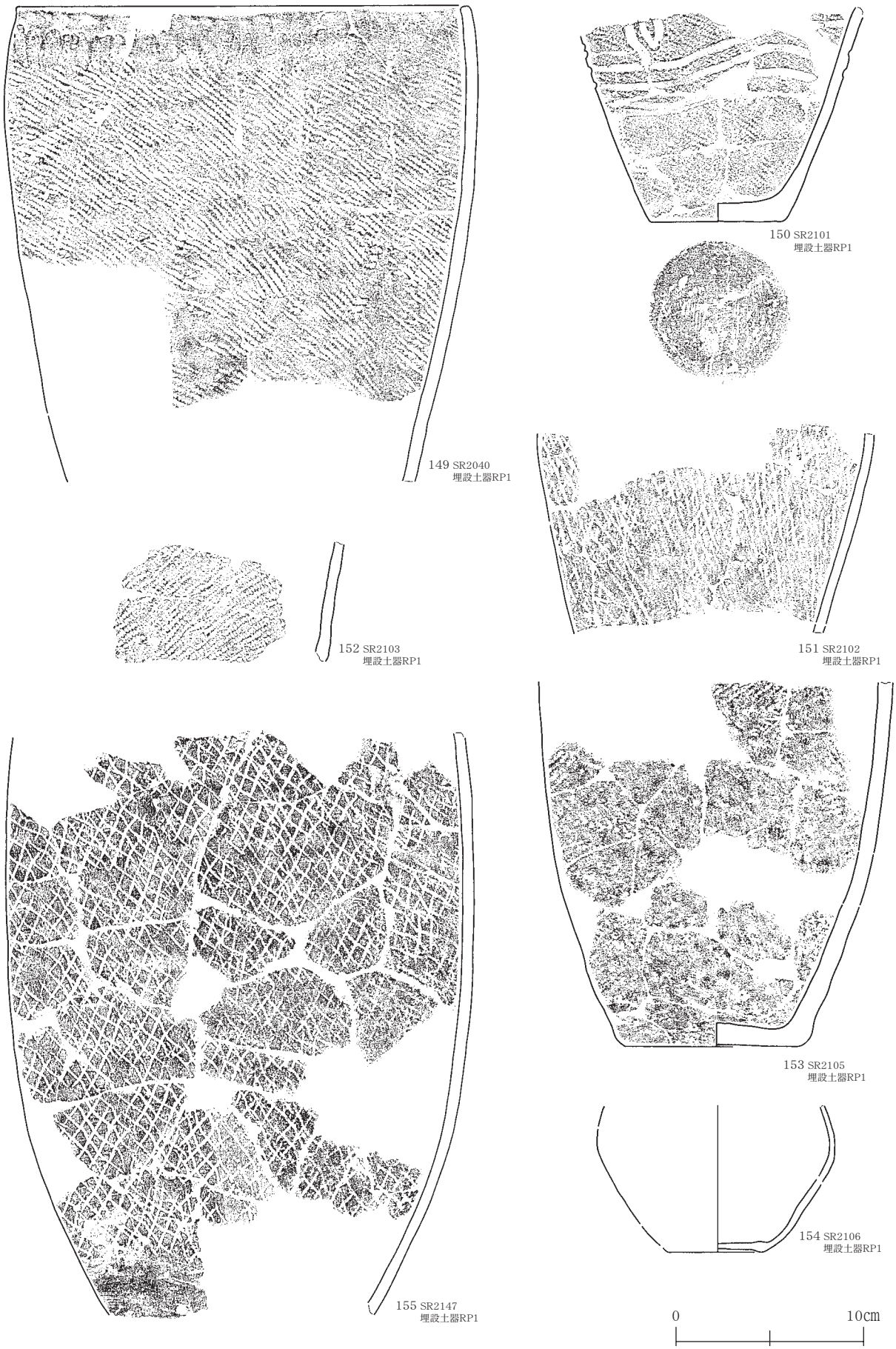
第93図　遺構内(ＳＮＲ2378･2612)出土土器類(17)



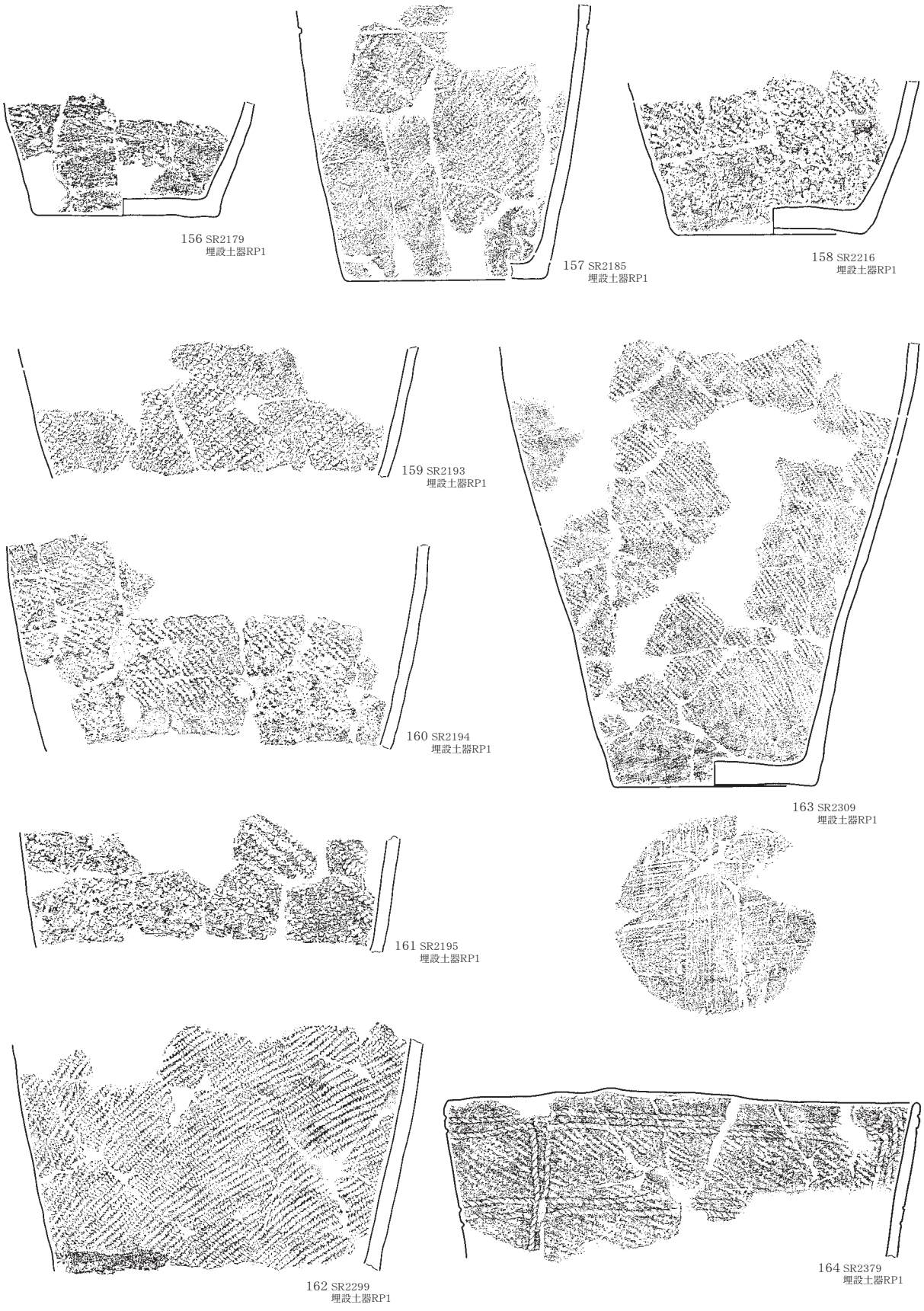
第94図　遺構内(ＳＮＲ2613･2615)出土土器類(18)



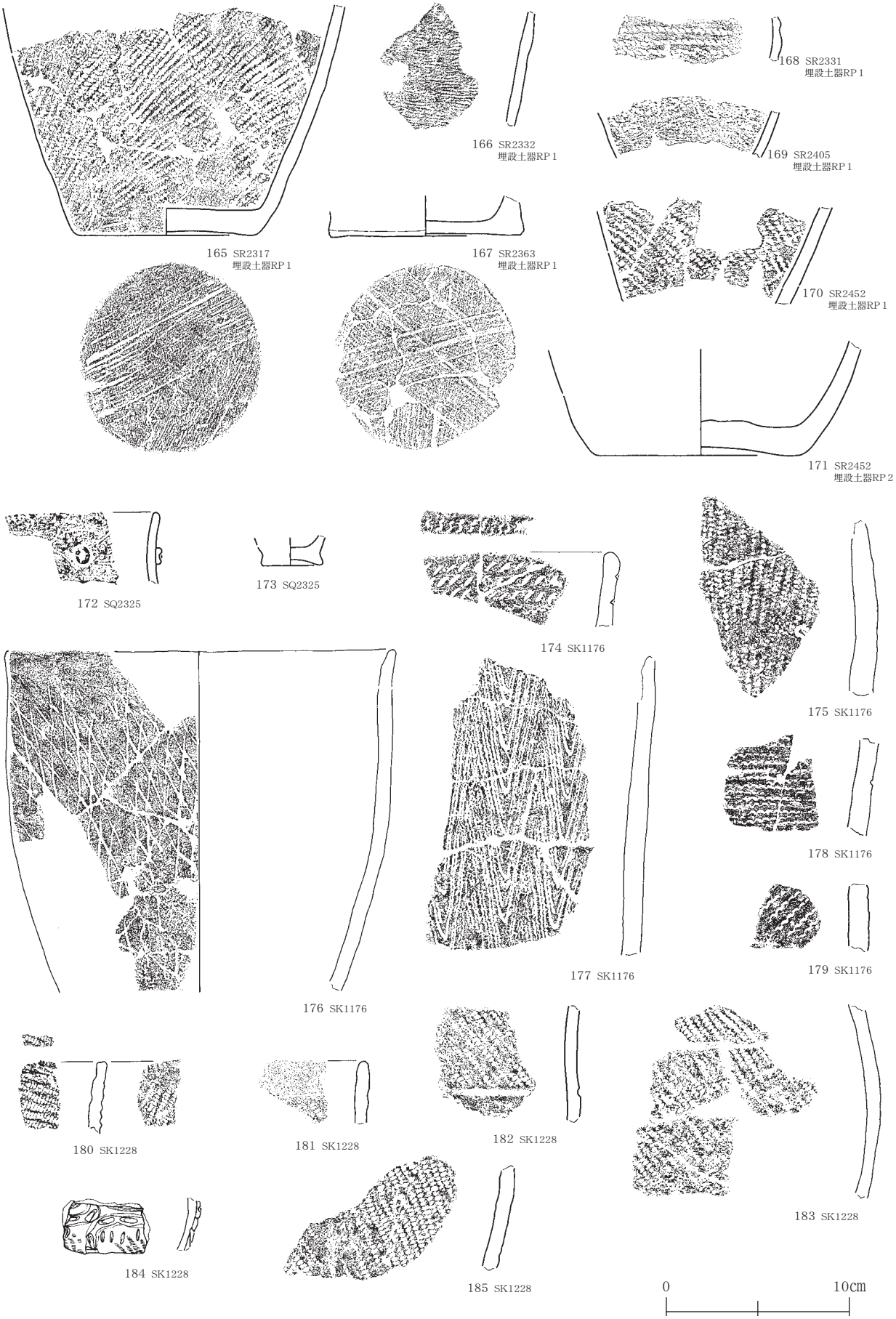
第95図　遺構内(ＳＮＲ2614･2615)出土土器類(19)



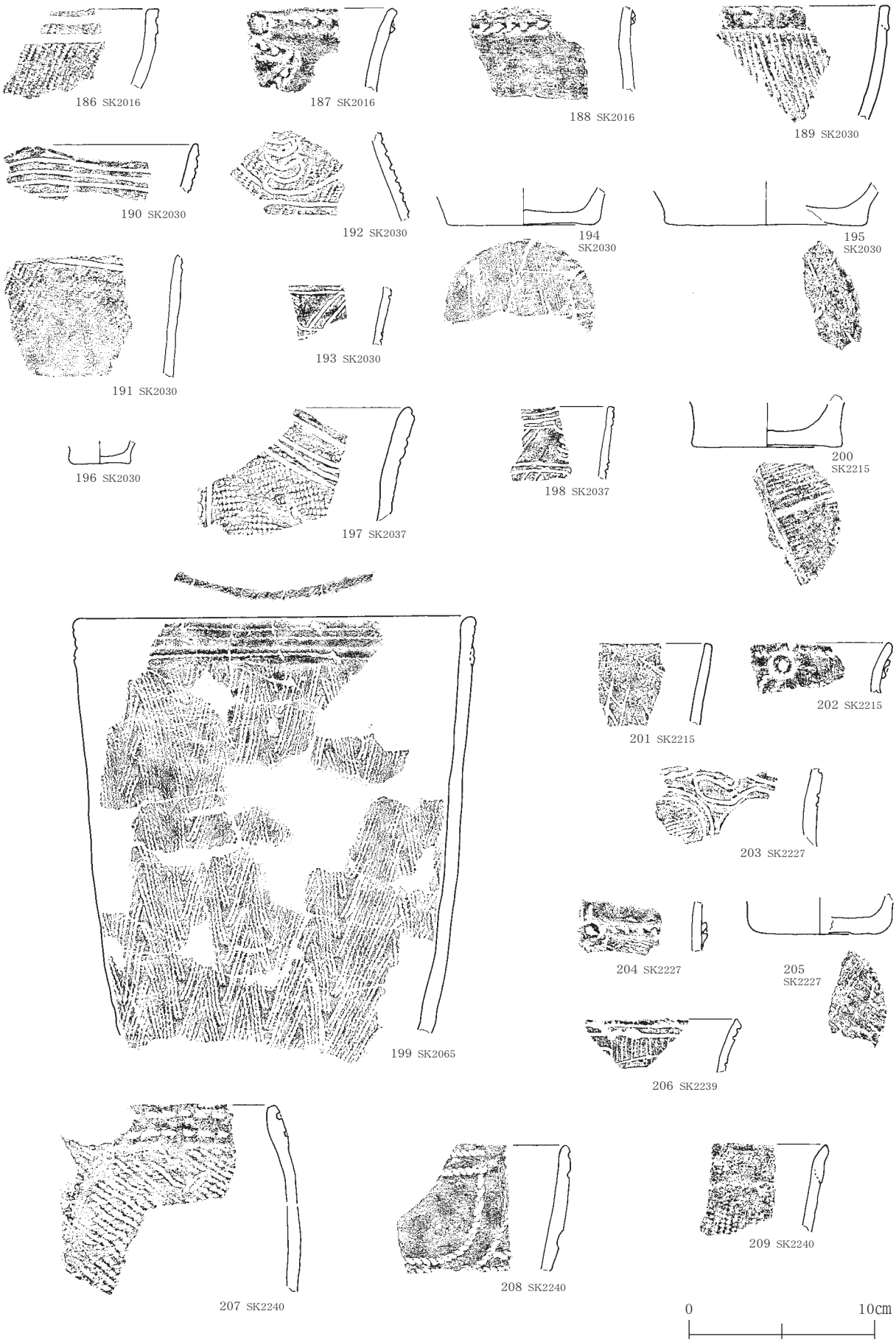
第96図　遺構内(ＳＲ2040・2101・2102・2103・2105・2106・2147)出土土器類(20)



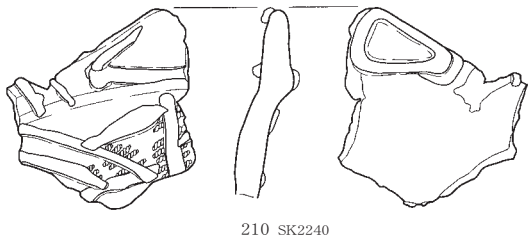
第97図　遺構内(ＳＲ2179・2185・2193・2194・2195・2216・2299・2309・2379)出土土器類(21)



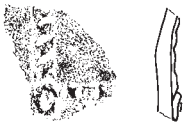
第98図　遺構内(ＳＲ2317・2331・2332・2363・2405・2452・ＳＱ2325・ＳＫ1176・1228)出土土器類(22)



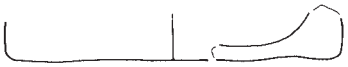
第99図　遺構内(ＳＫ2016・2030・2037・2065・2215・2227・2239・2240)出土土器類(23)


210 SK2240

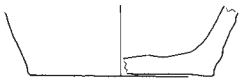
213 SK2240

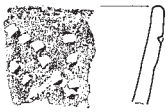

211 SK2240

212 SK2240

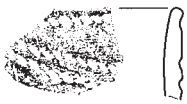

214 SK2240

215
SK2240


216
SK2315


217 SK2316

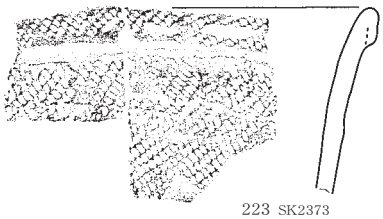
218 SK2316

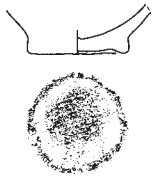

219 SK2323

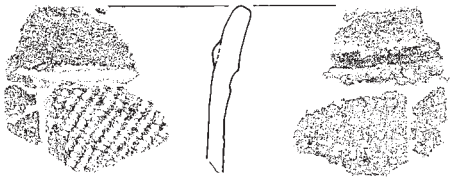
220 SK2323

221 SK2334

222 SK2355


223 SK2373


224 SK2373


225 SK2500

226 SKI2330

227 SKI2330

228 SKI2330

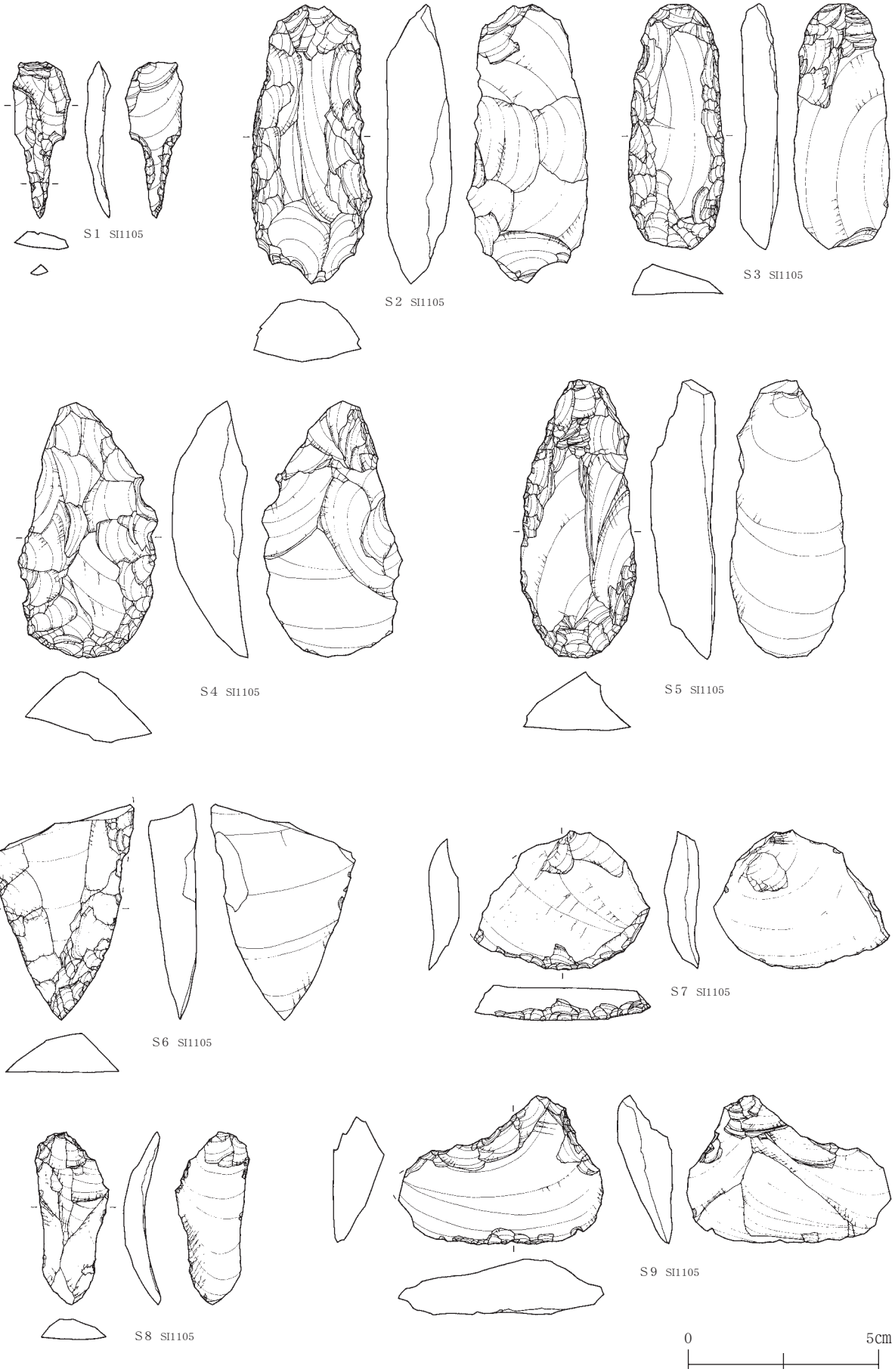
229 SKP2210

230 SKP2367

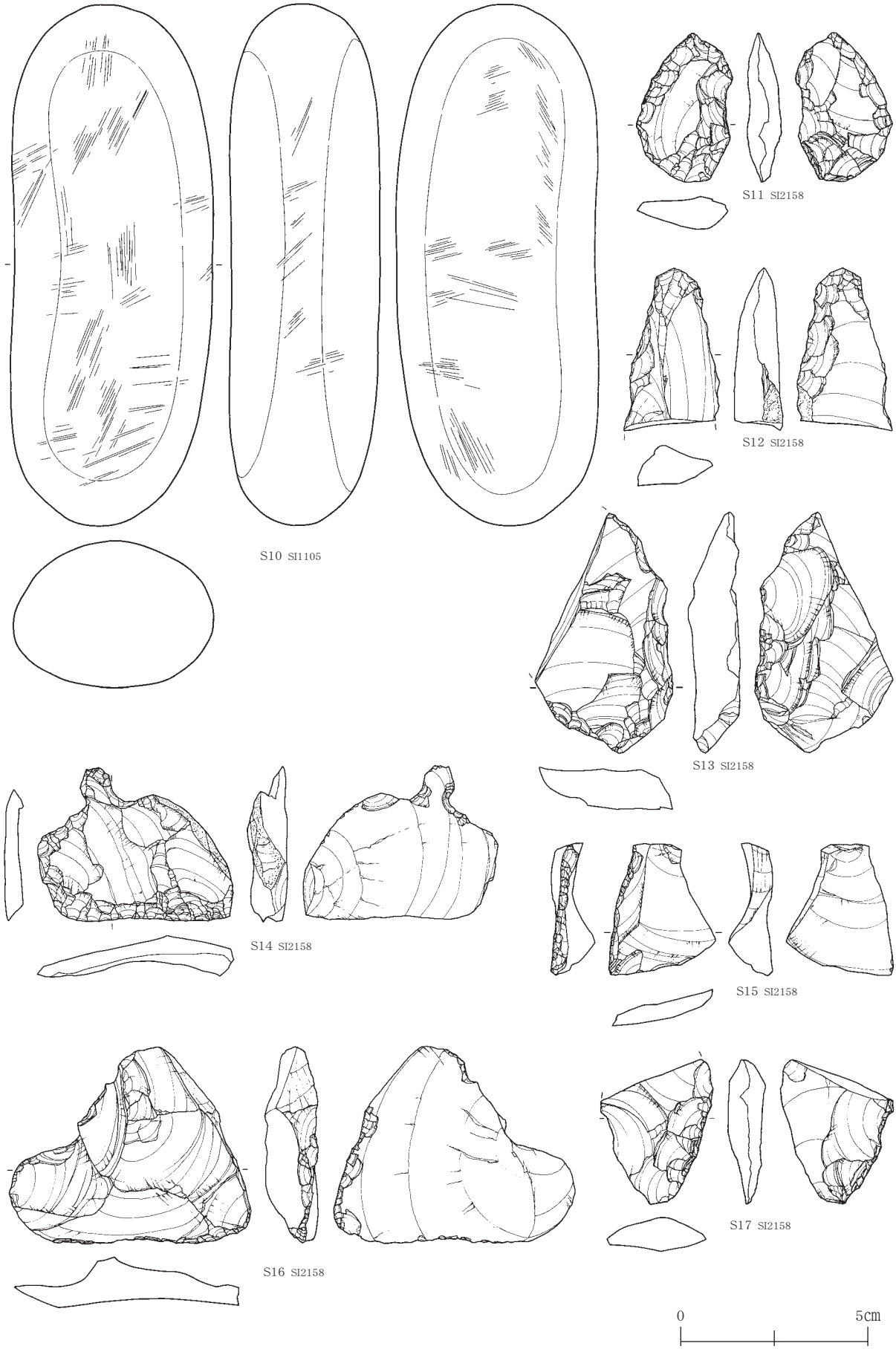
231 SKP2386

232 SKP2435

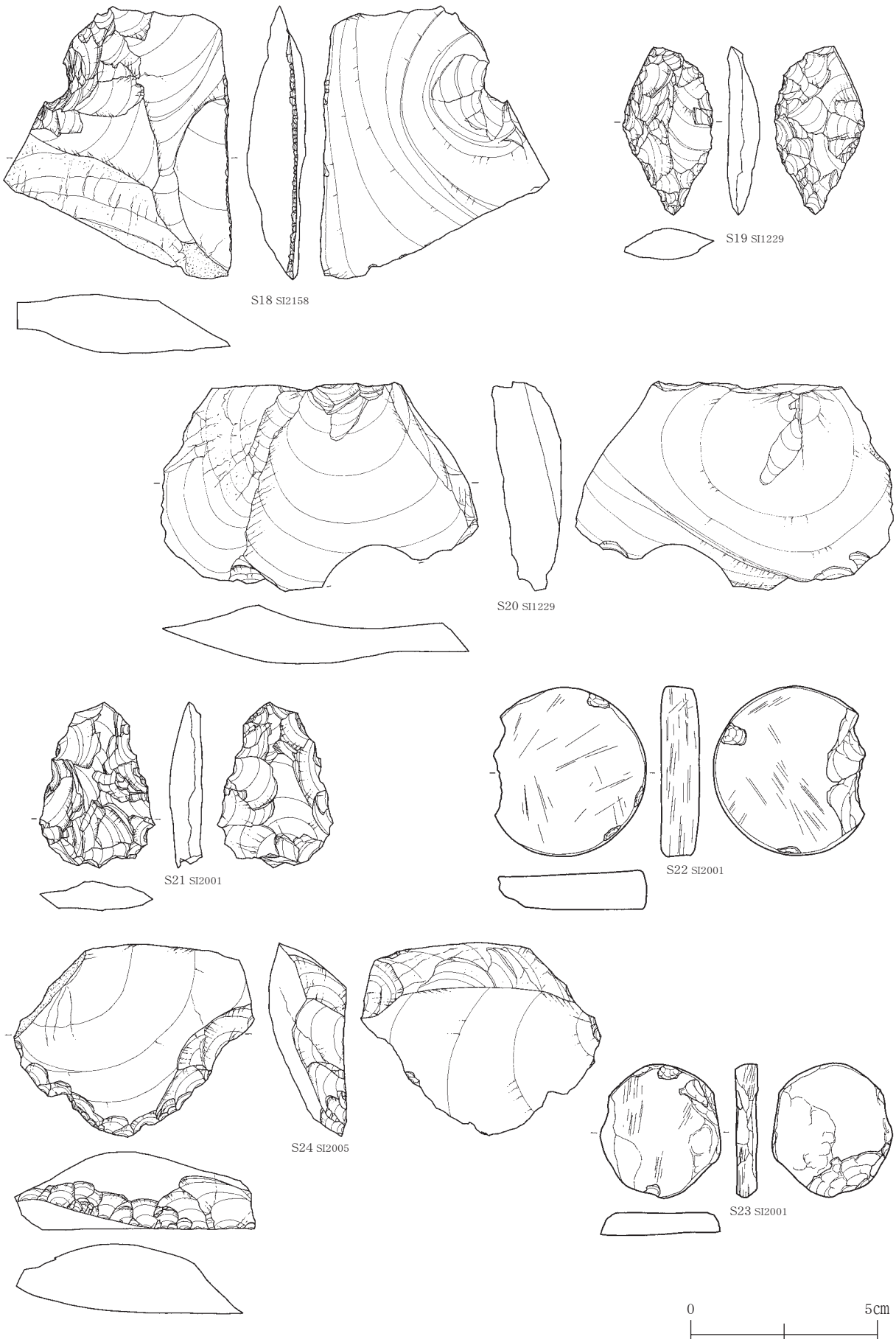
第100図　遺構内(ＳＫ2240･2315･2316･2323･2334･2355･2373･2500･ＳＫＩ2330･ＳＫＰ2210･2367･2386･2435)出土土器類(24)



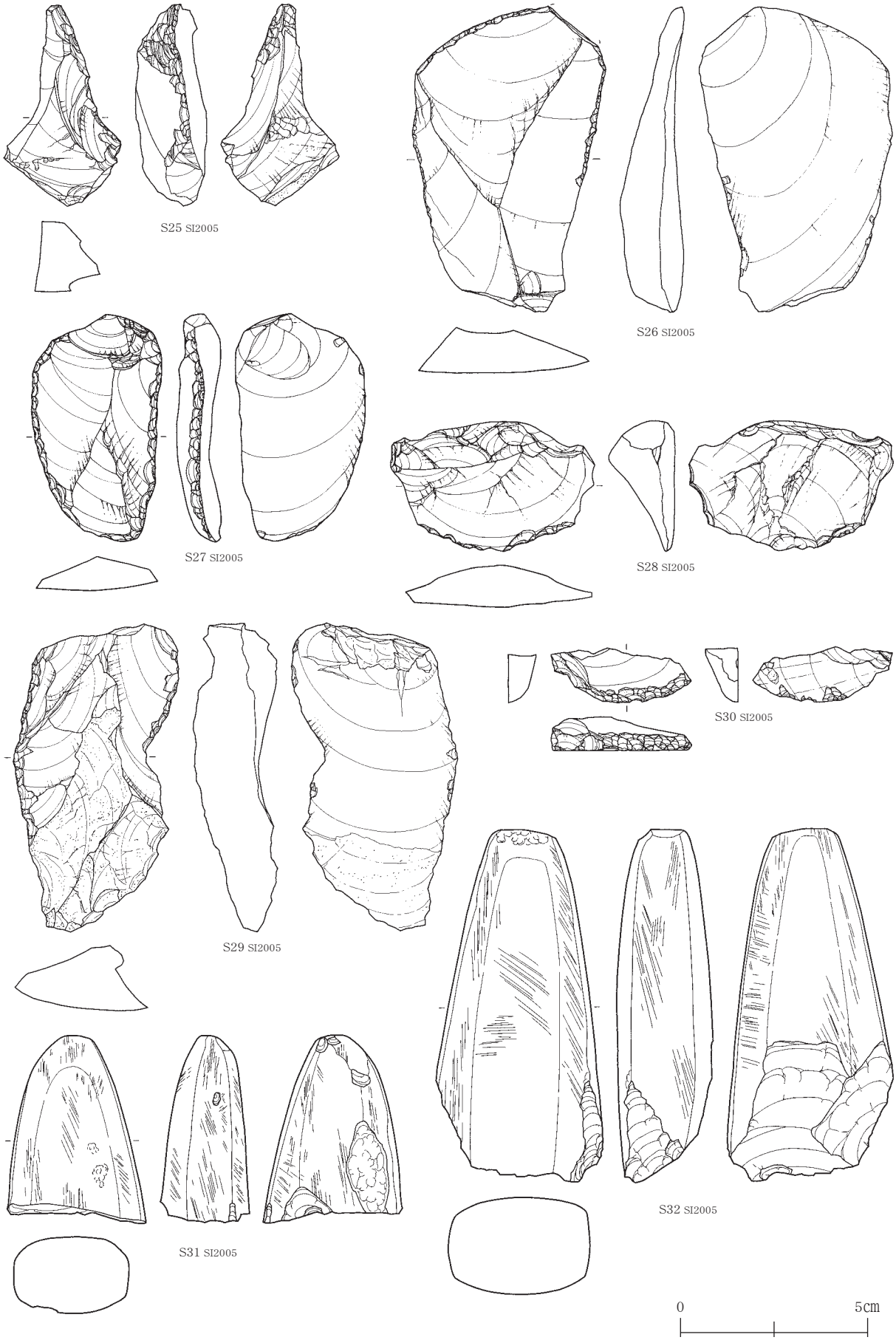
第101図　遺構内(ＳＩ1105)出土石器類(１)



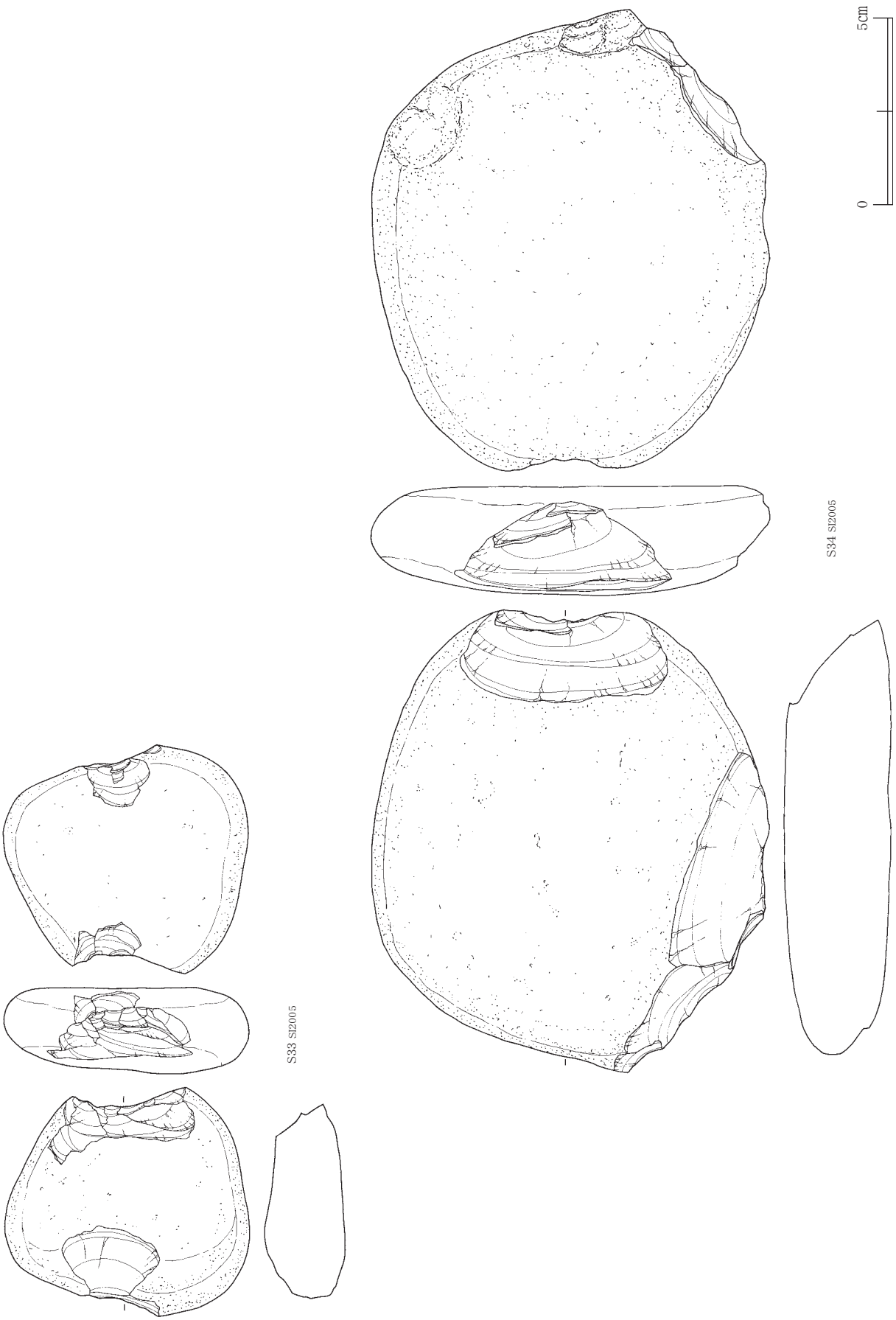
第102図　遺構内(ＳＩ1105･2158)出土石器類(２)



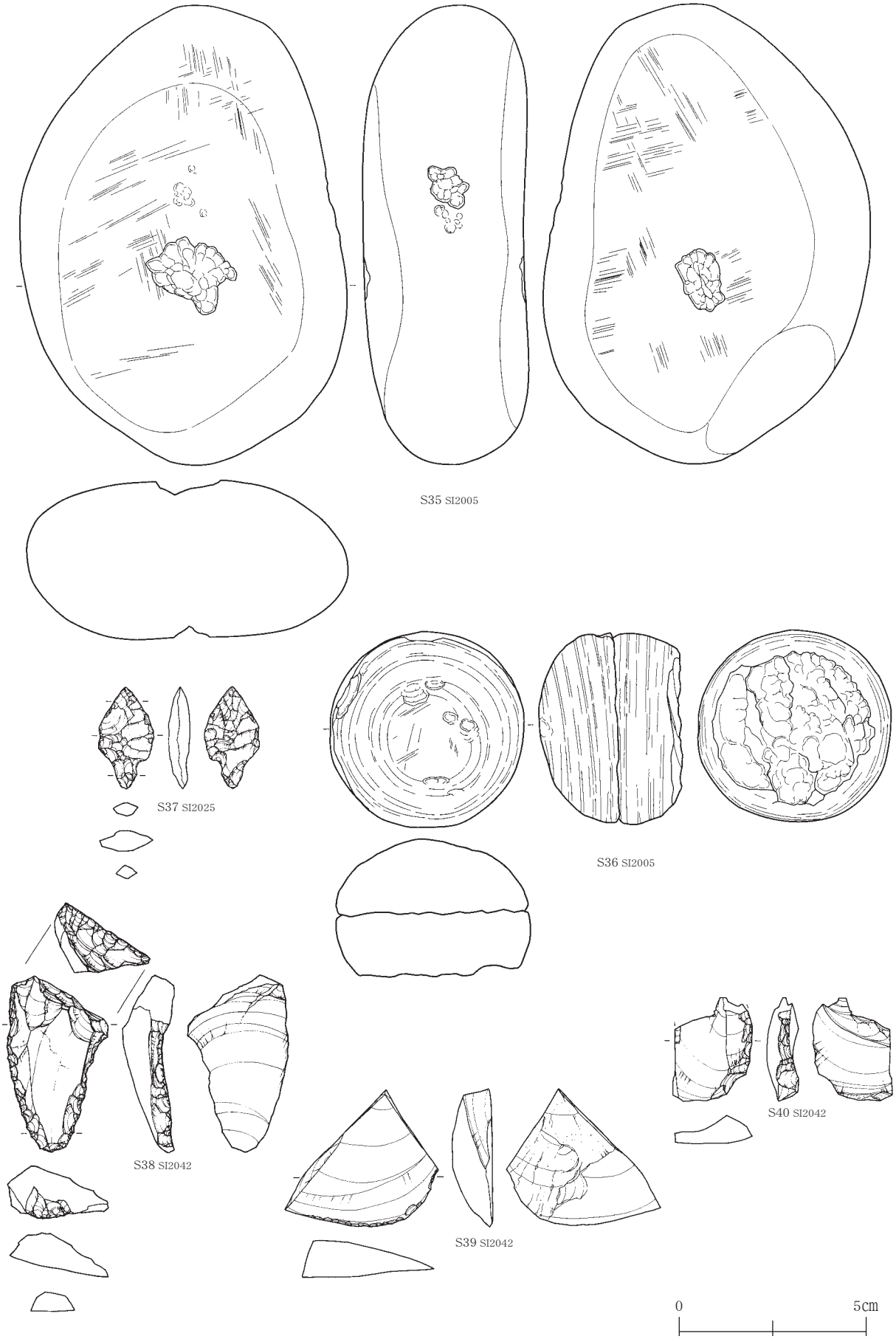
第103図　遺構内(ＳＩ2158・1229・2001・2005)出土石器類(３)



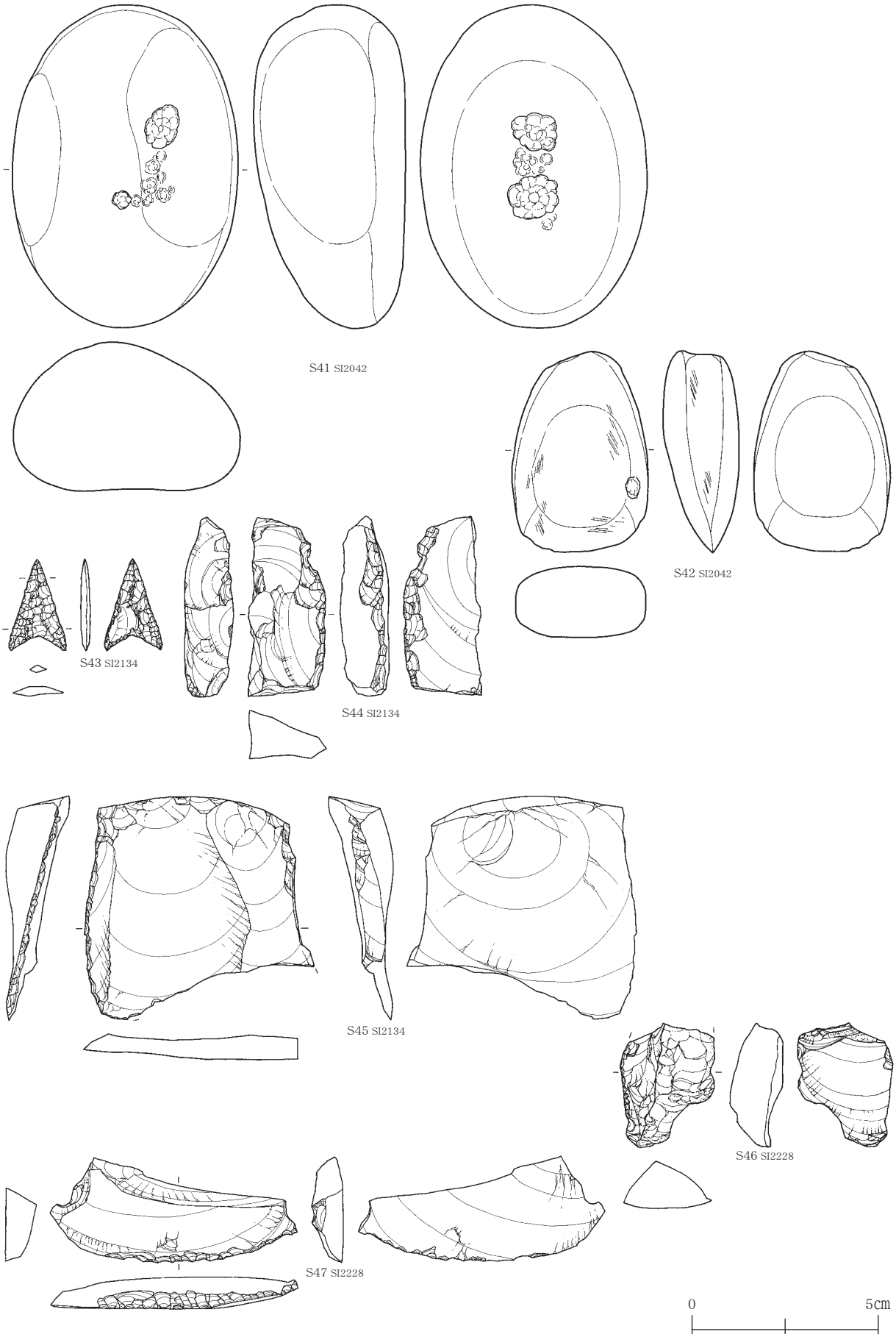
第104図　遺構内(ＳＩ2005)出土石器類(４)



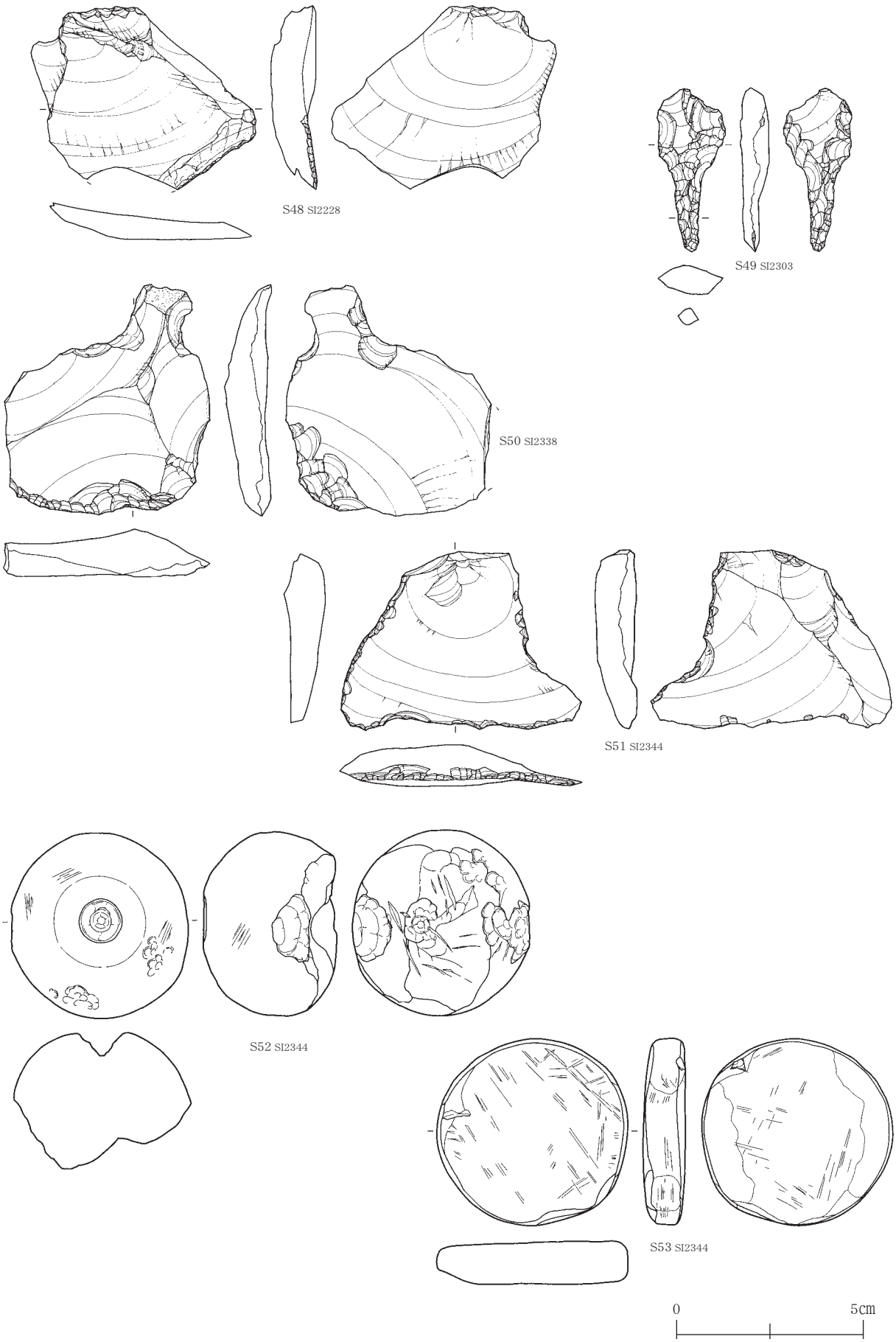
第105図　遺構内(ＳＩ2005)出土石器類(５)



第106図　遺構内(ＳＩ2005・2025・2042)出土石器類(６)

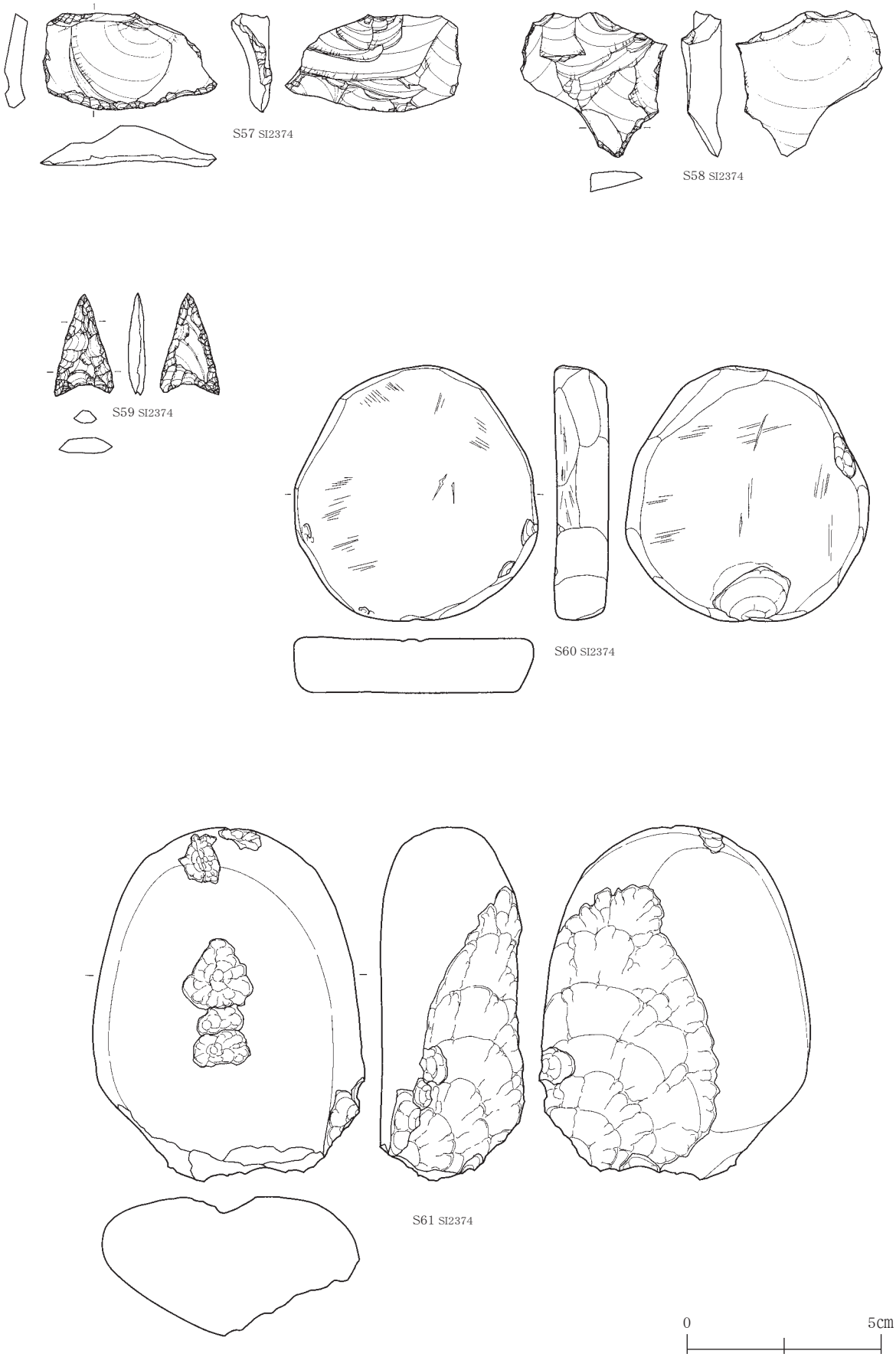


第107図　遺構内(ＳＩ2042・2134・2228)出土石器類(７)

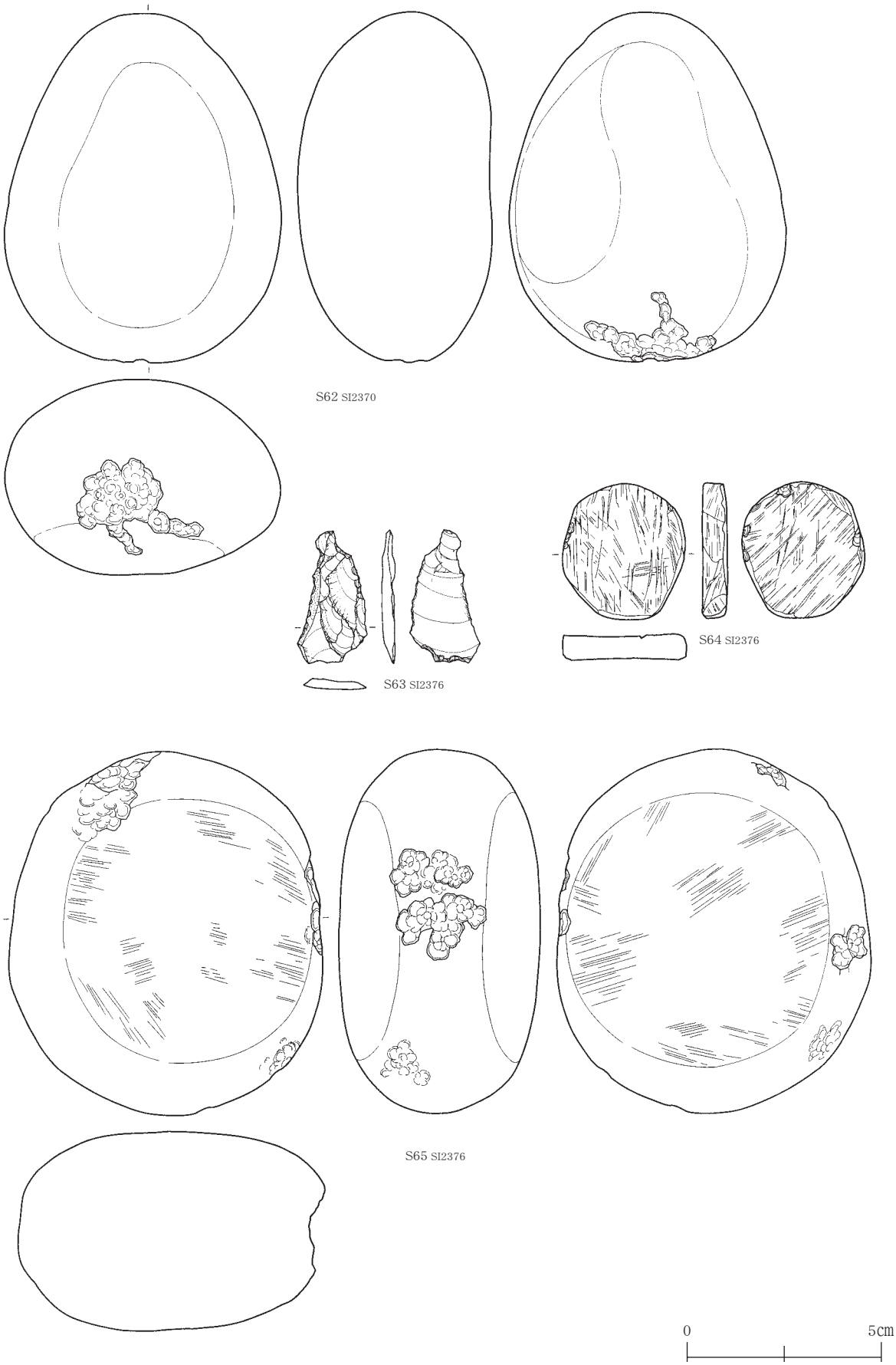


第108図　遺構内(ＳＩ2228・2303・2338・2344)出土石器類(８)

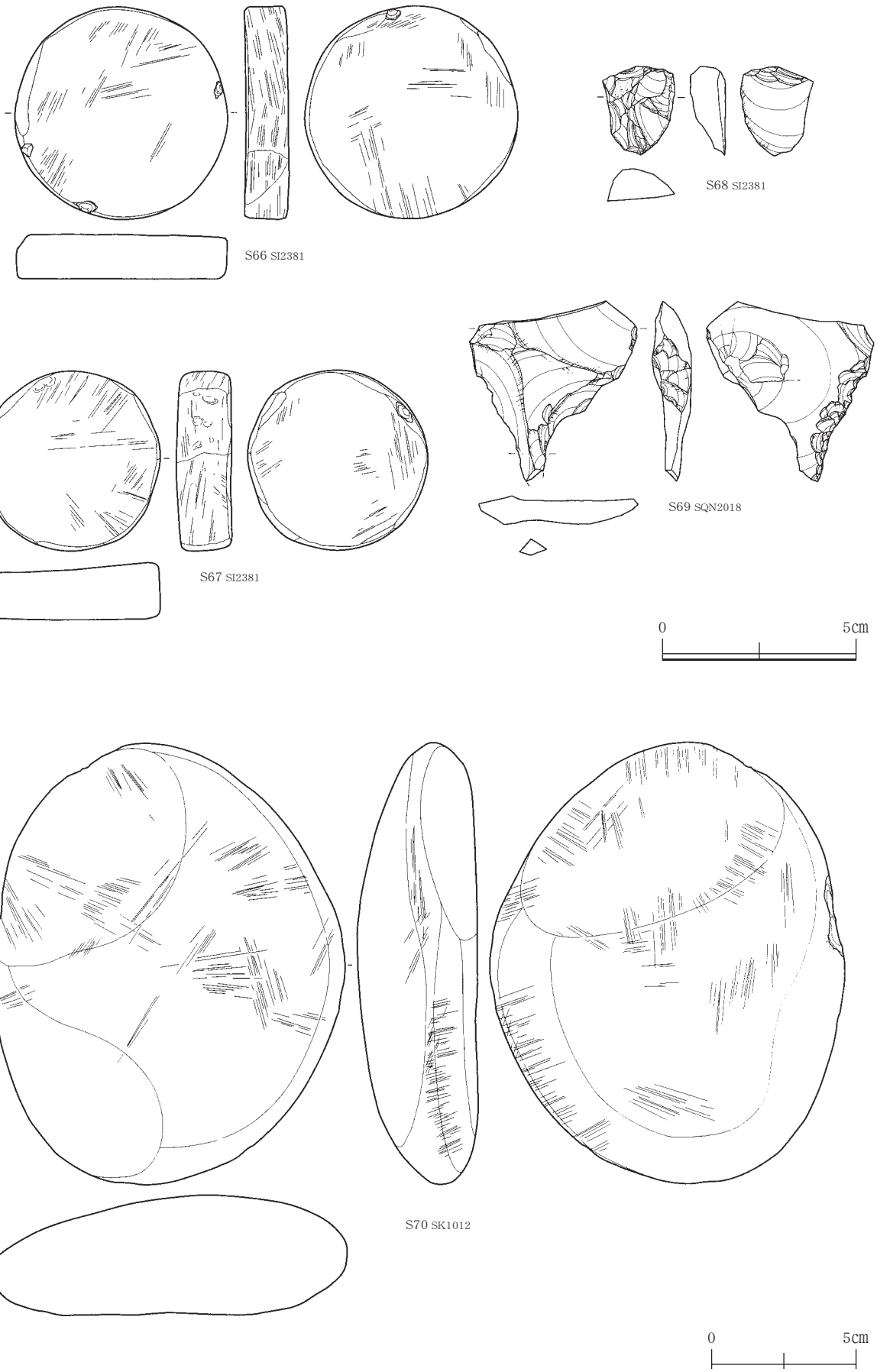
第109図　遺構内(ＳＩ2344)出土石器類(９)



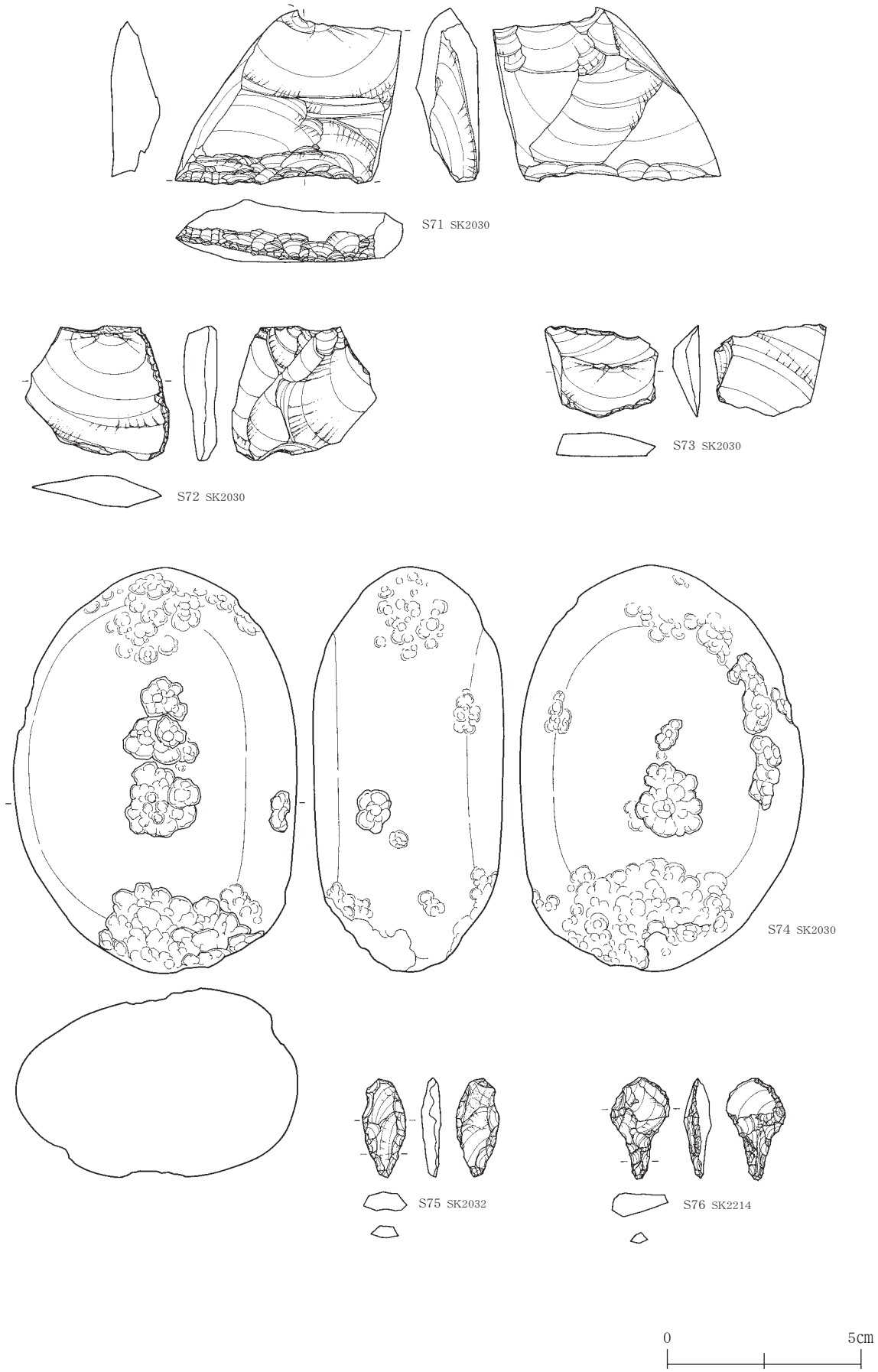
第110図　遺構内(ＳＩ2374)出土石器類(10)



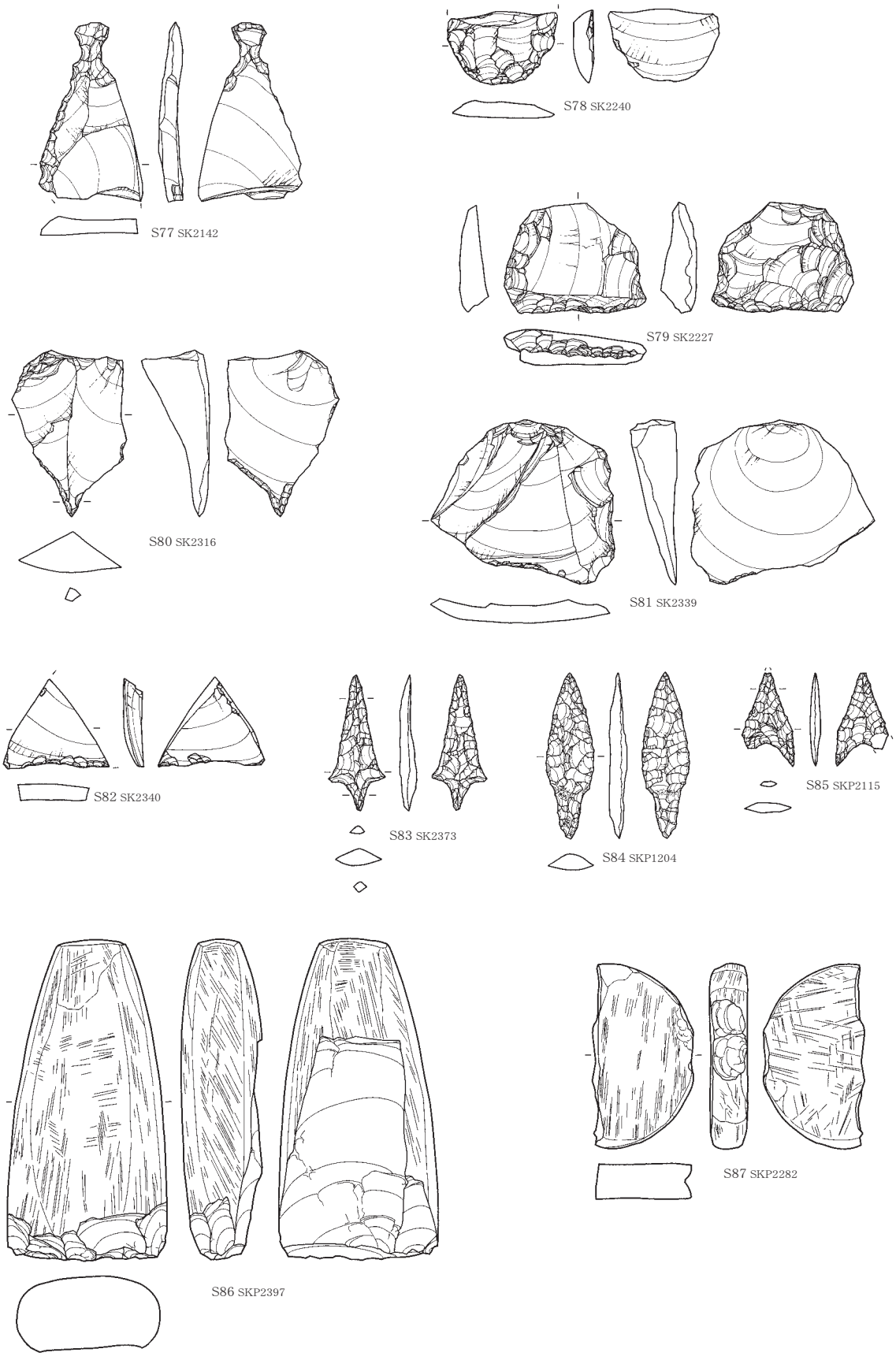
第111図　遺構内(ＳＩ2370･2376)出土石器類(11)



第112図　遺構内(ＳＩ2381・ＳＱＮ2018・ＳＫ1012)出土石器類(12)

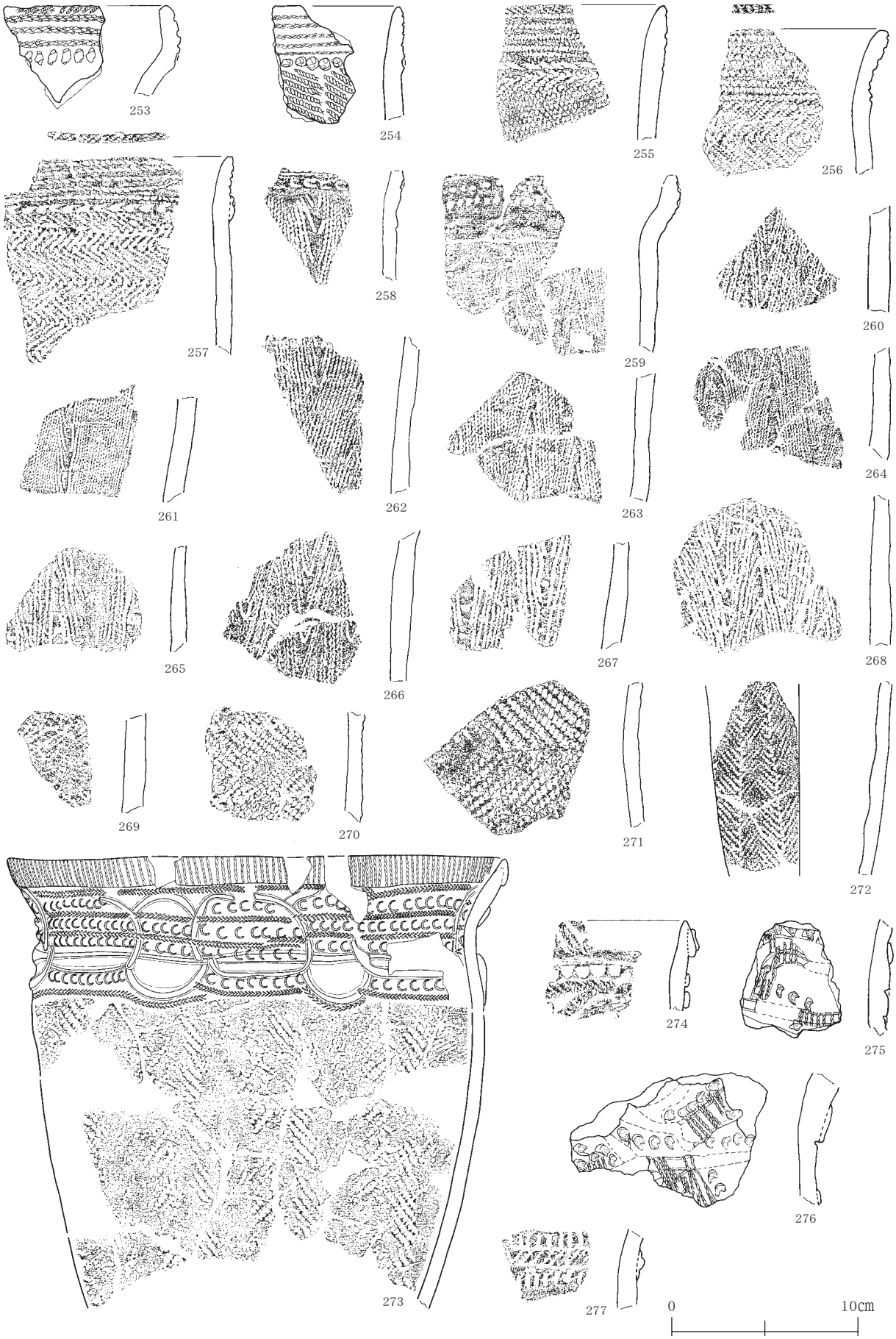


第113図　遺構内(ＳＫ2030・2032・2214)出土石器類(13)

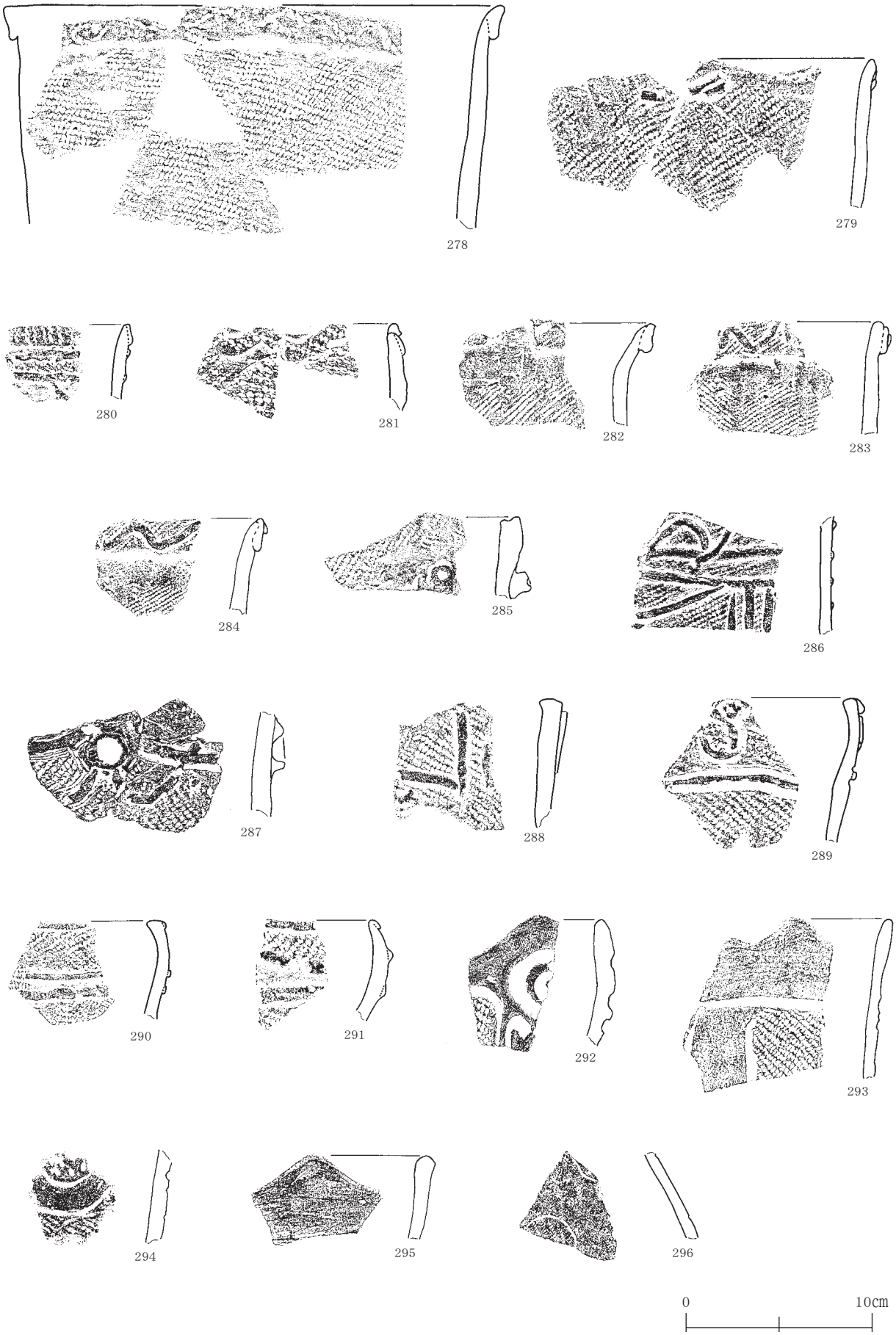


第114図　遺構内(ＳＫ2142・2227・2240・2316・2339・2340・2373・ＳＫＰ1204・2115・2282・2379)出土石器類(14)

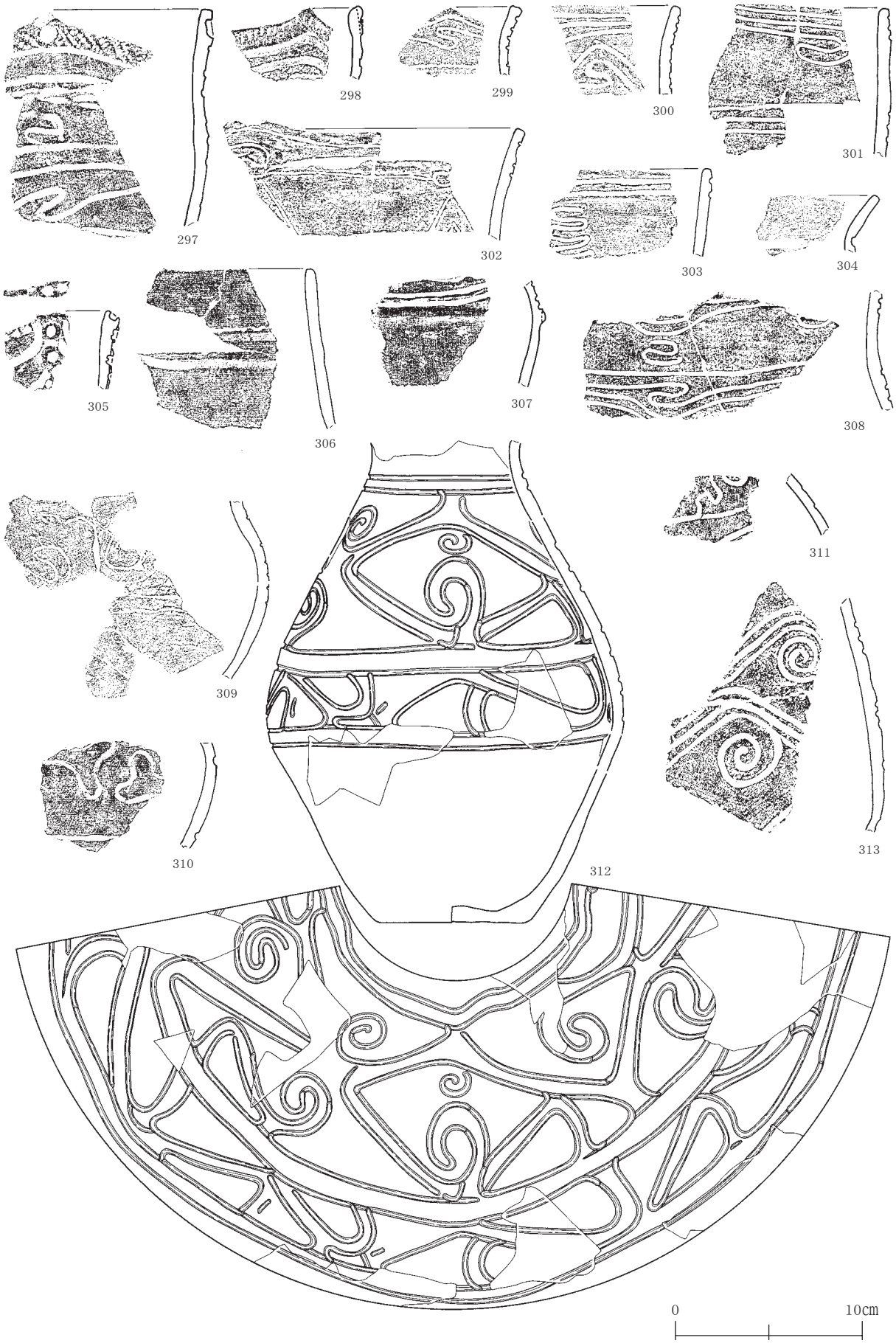
第115図　遺構外出土土器類(１)



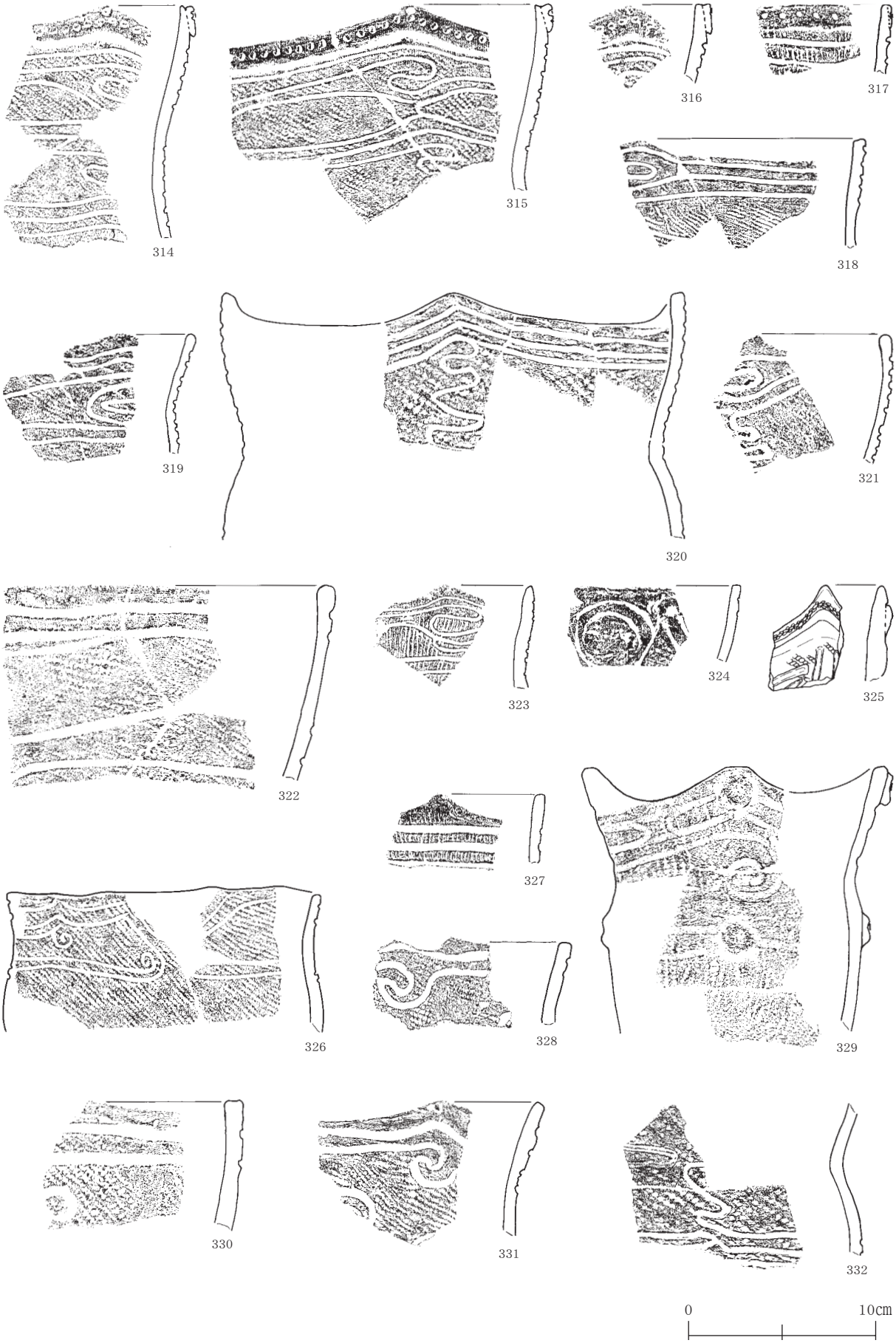
第116図　遺構外出土土器類（２）



第117図　遺構外出土土器類（３）

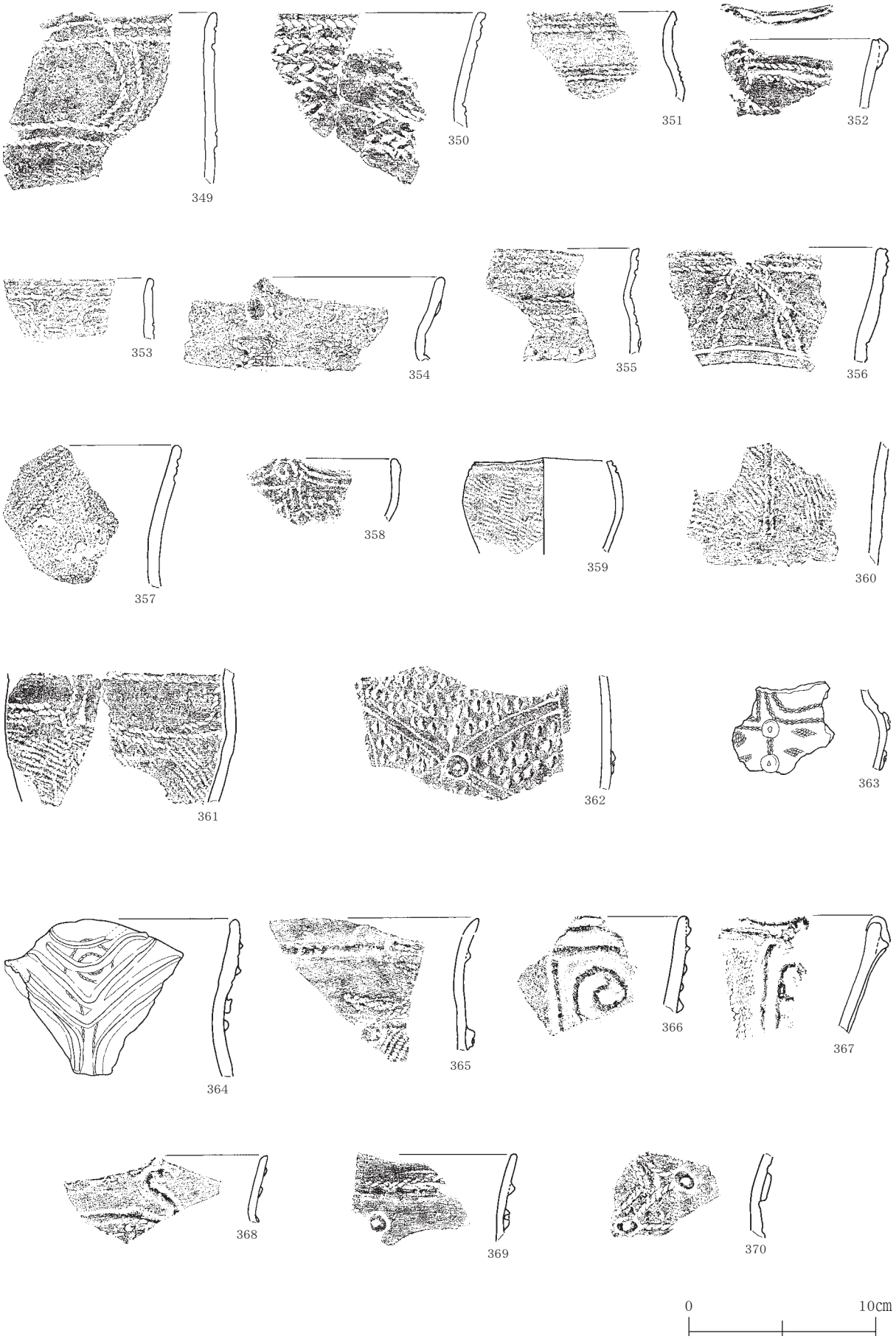


第118図　遺構外出土土器類（４）

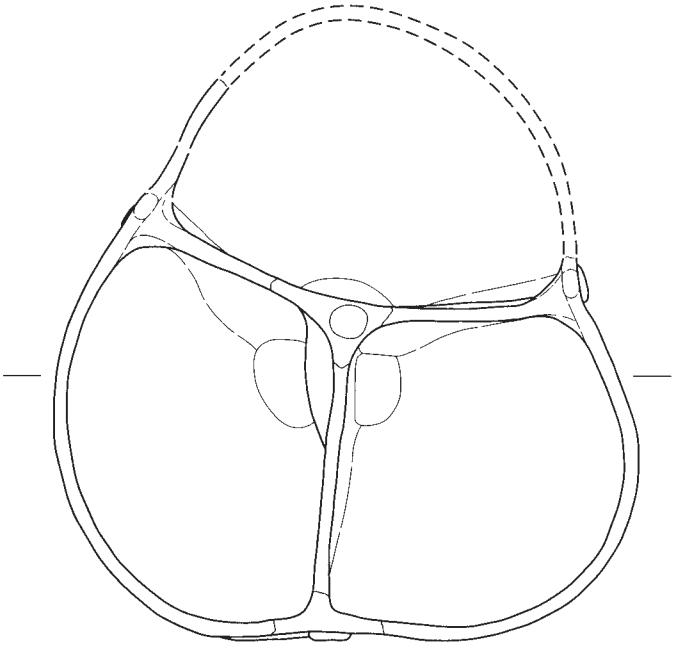


第119図　遺構外出土土器類(５)

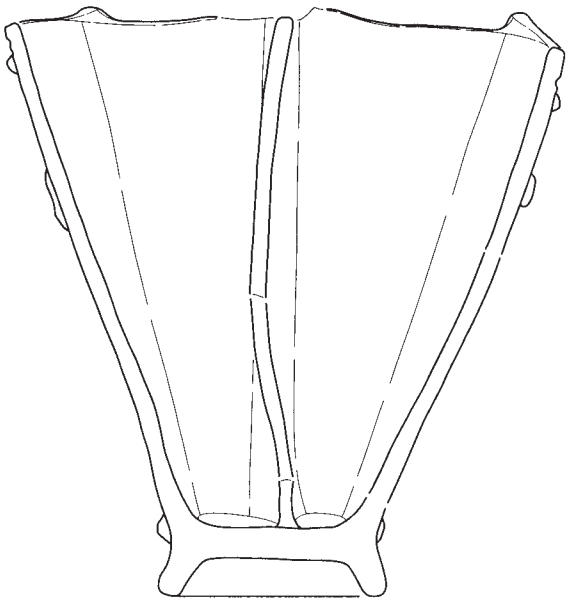
第120図　遺構外出土土器類（６）



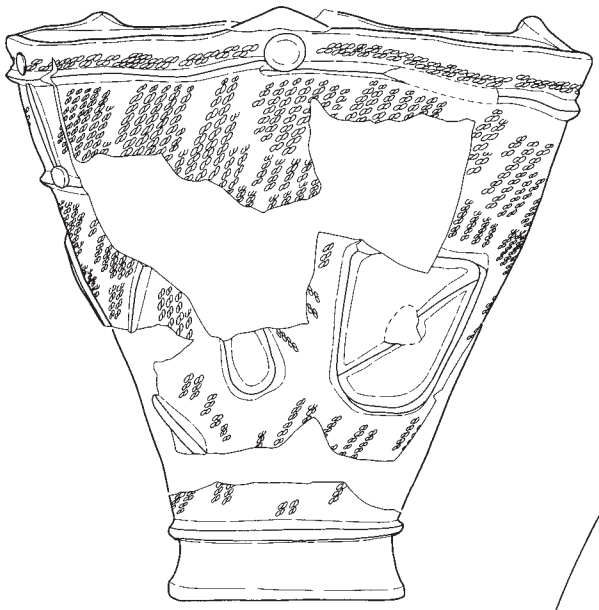
第121図　遺構外出土土器類(７)



371

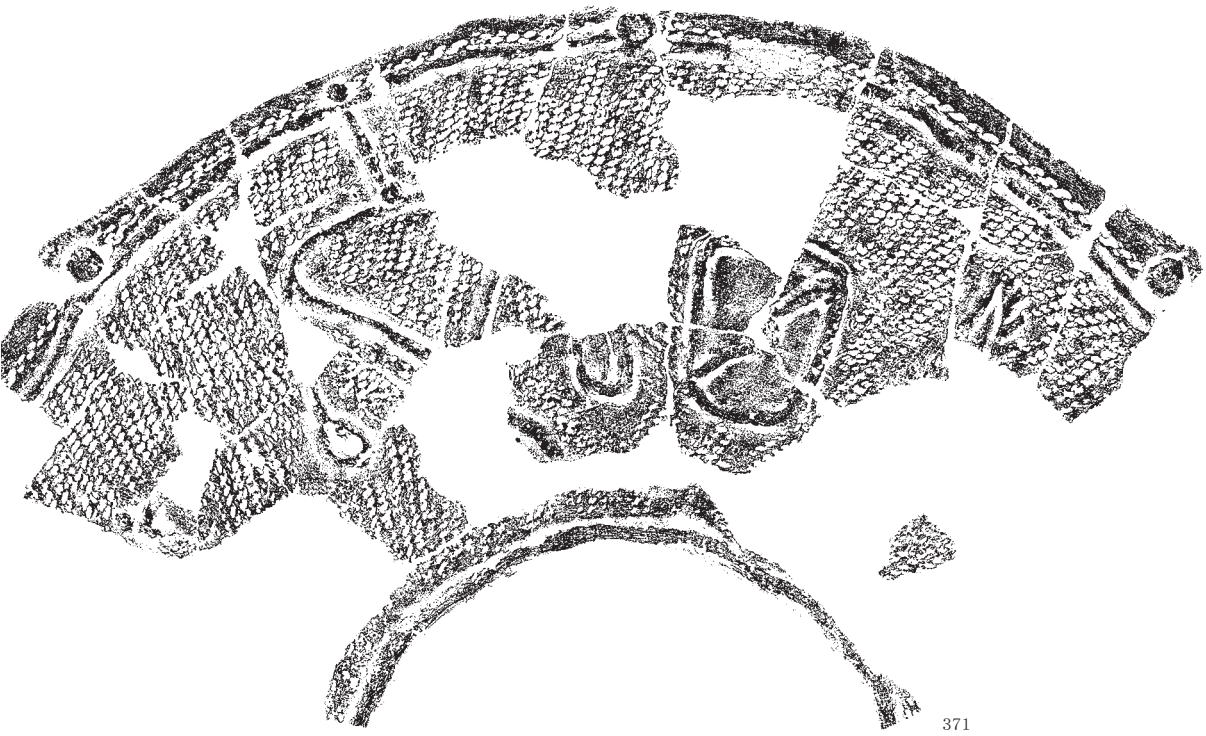


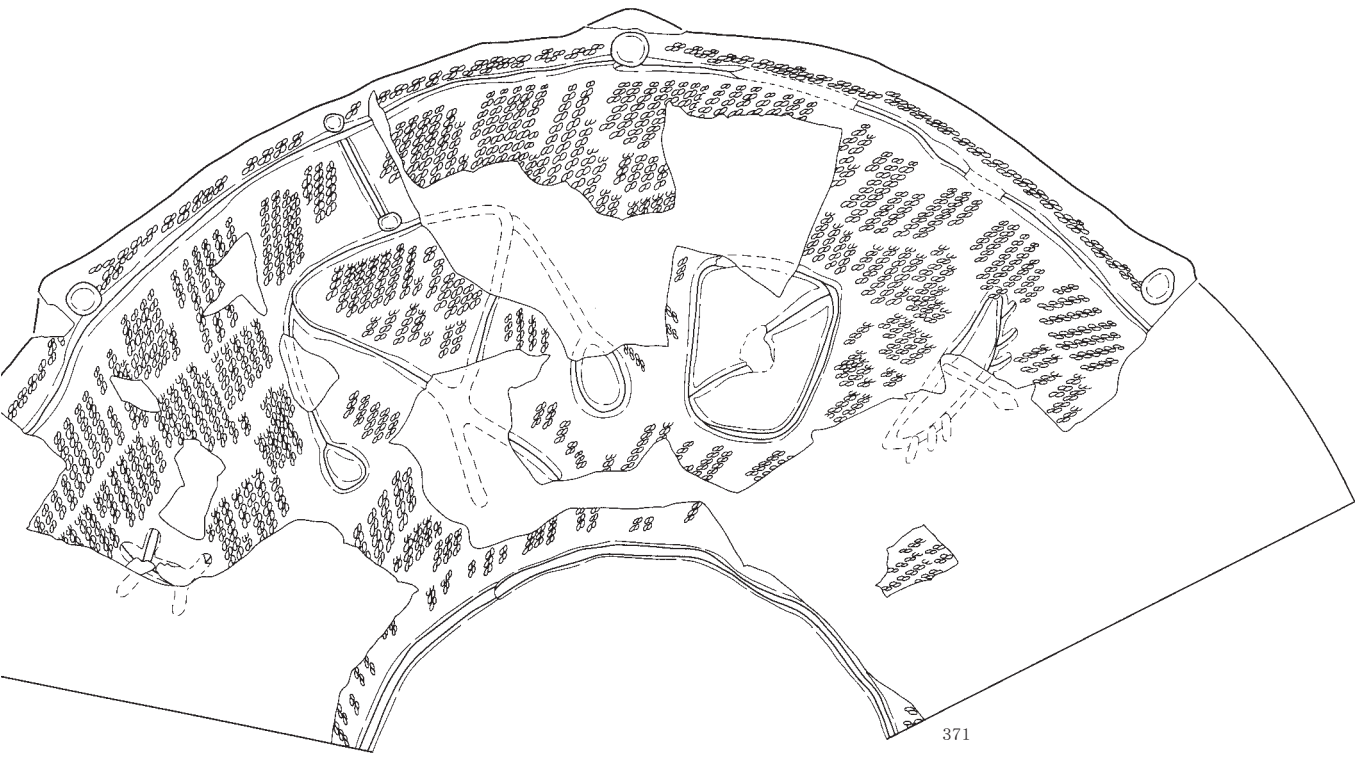
371



371

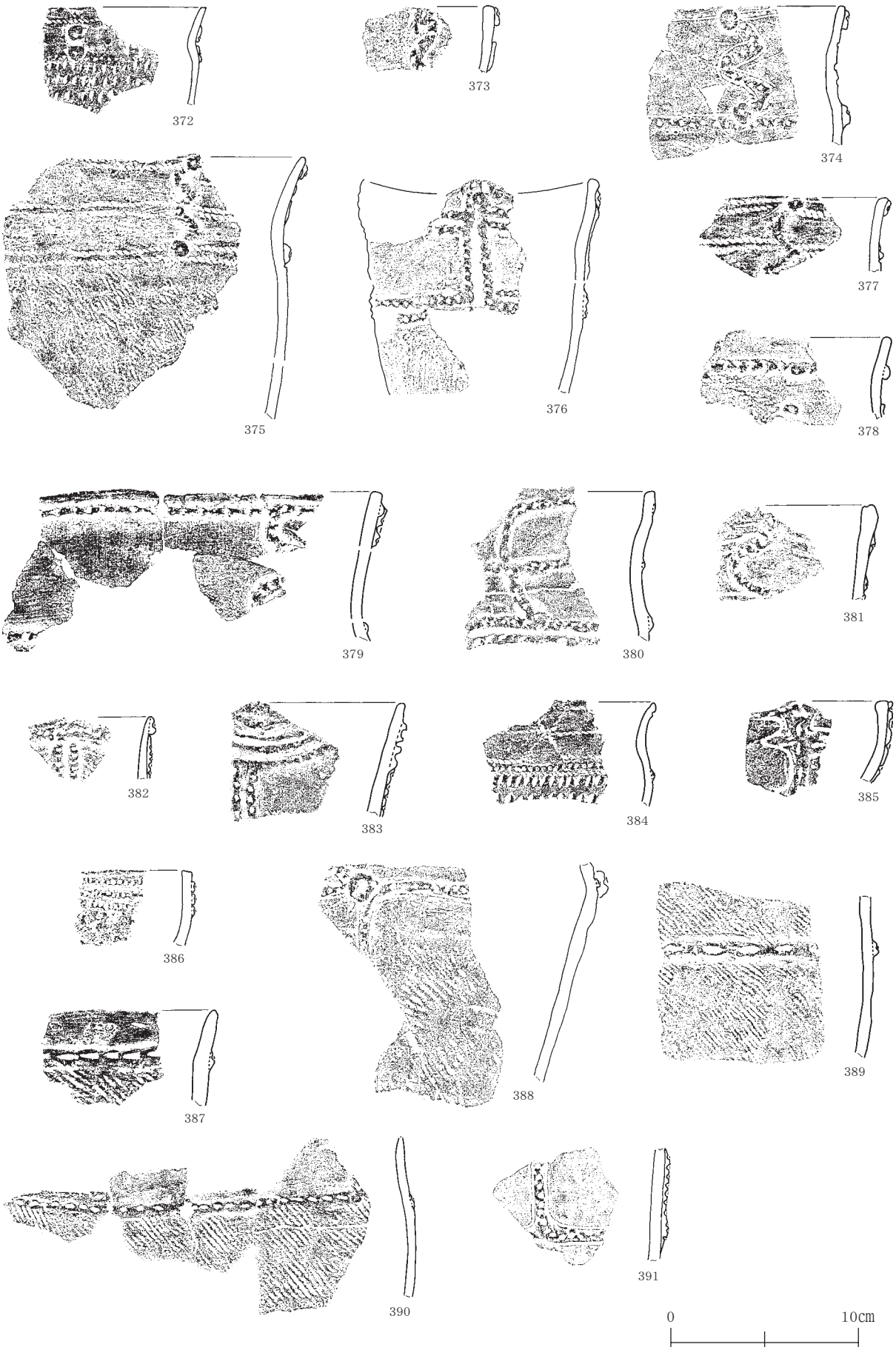
第122図　遺構外



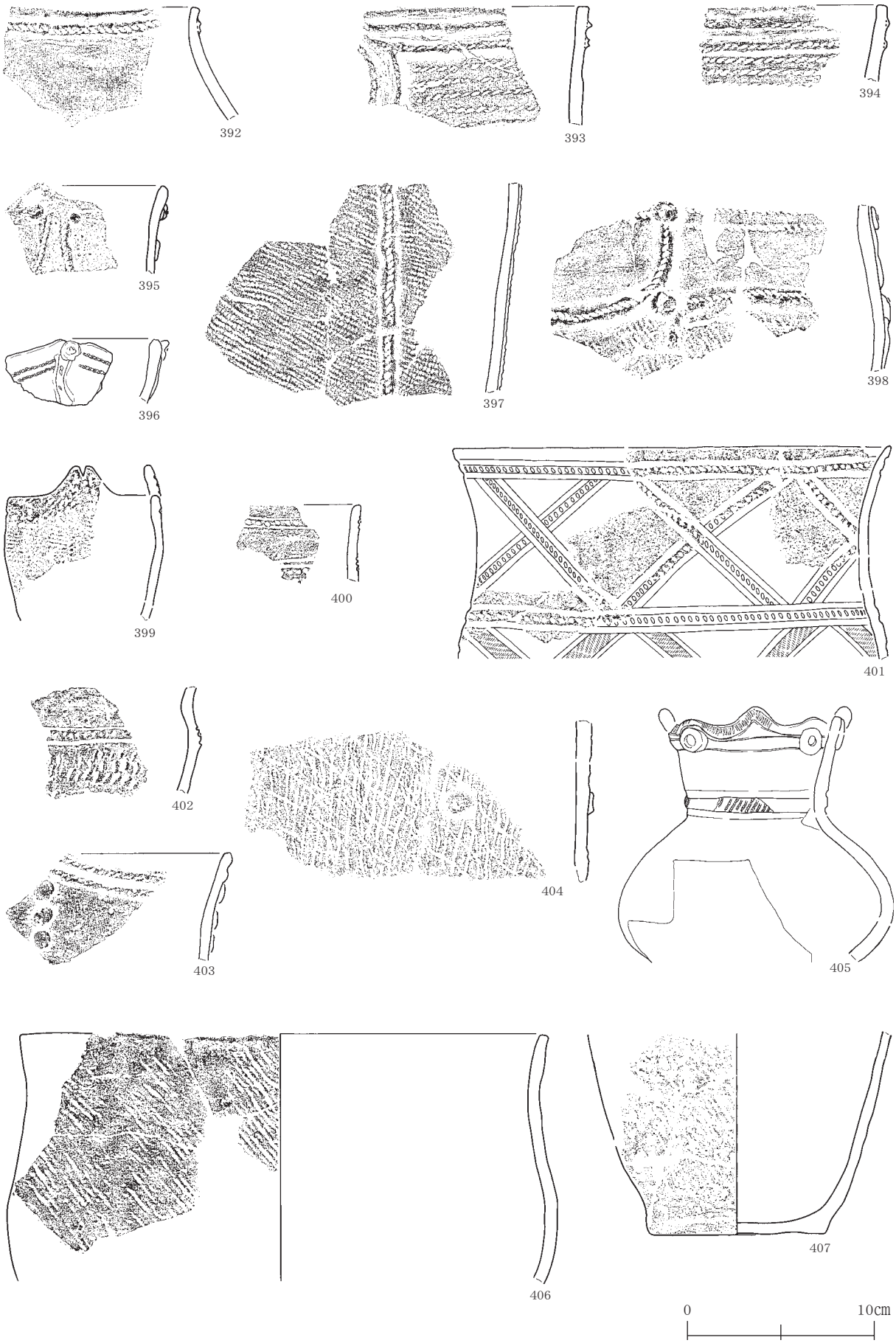


0 10cm

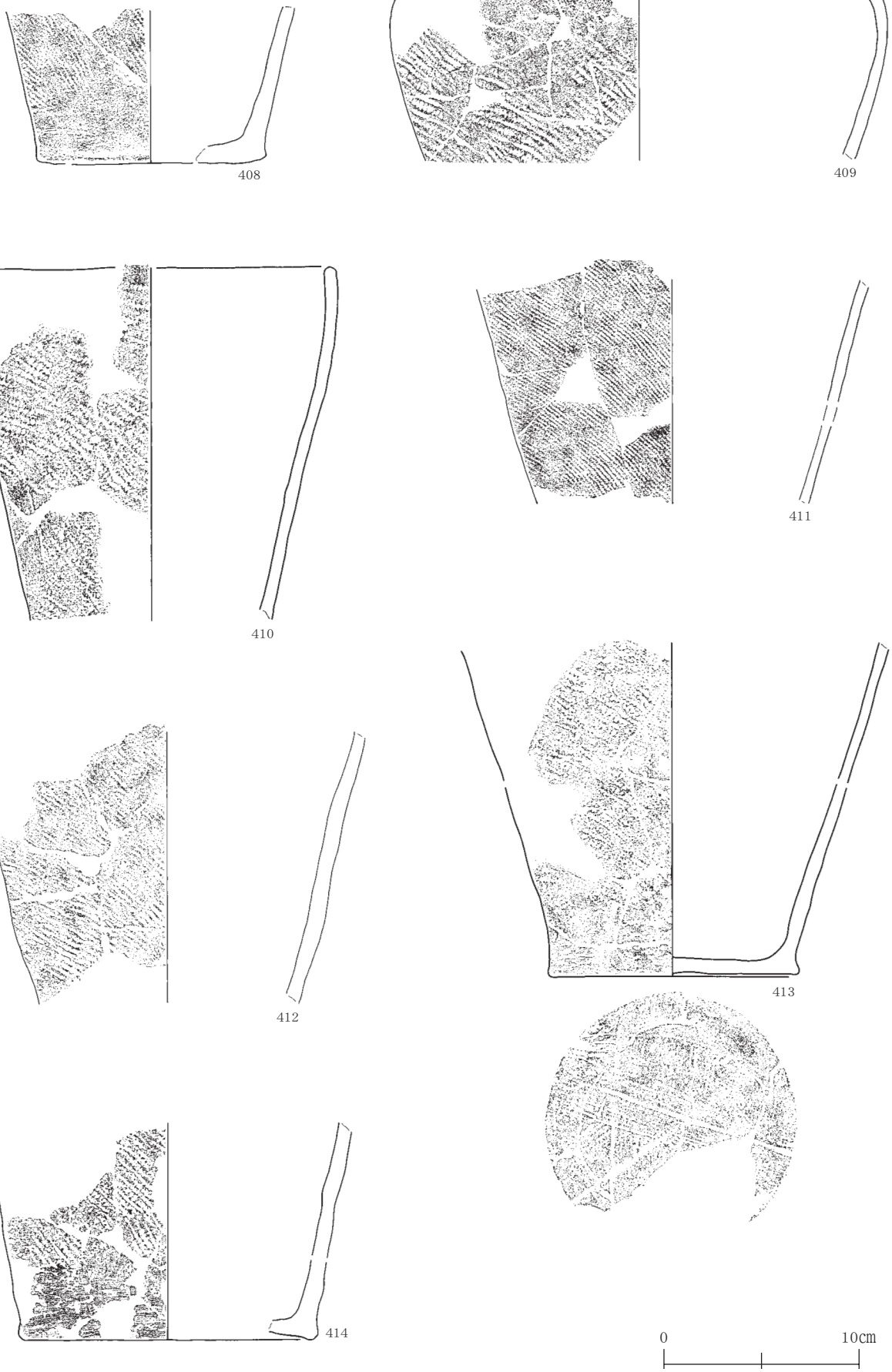
、出土土器類(８)



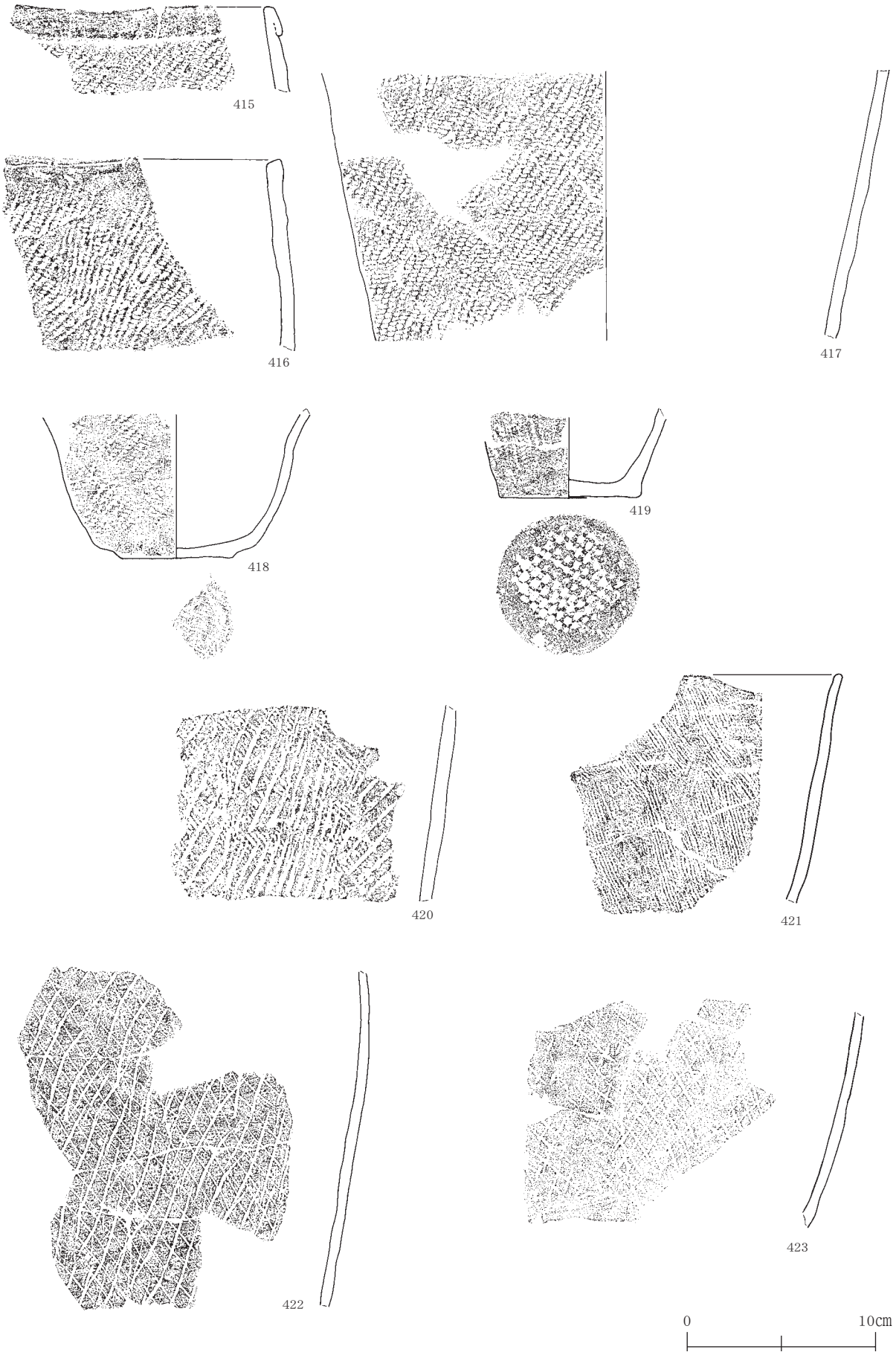
第123図　遺構外出土土器類（９）



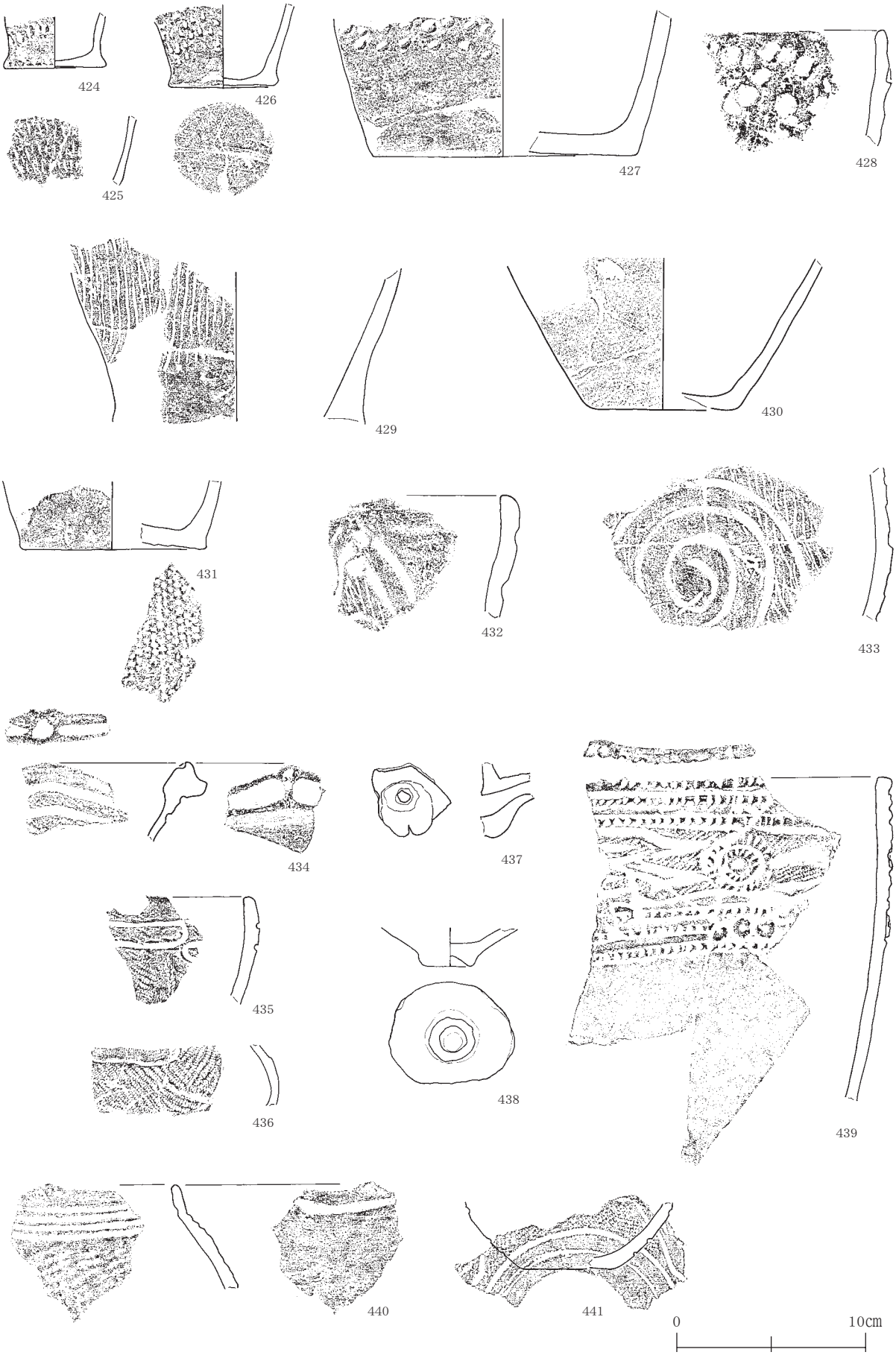
第124図　遺構外出土土器類(10)



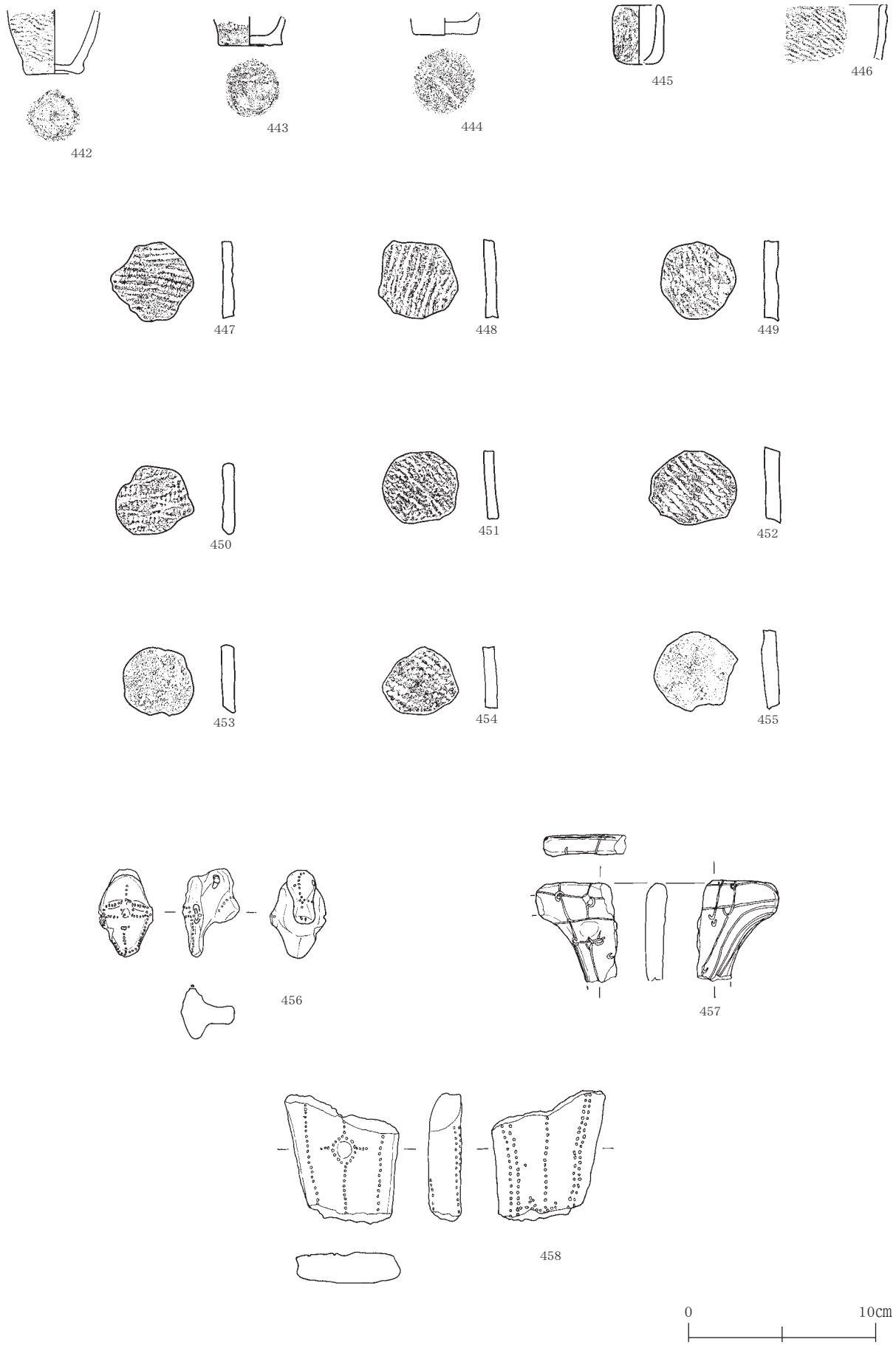
第125図　遺構外出土土器類(11)



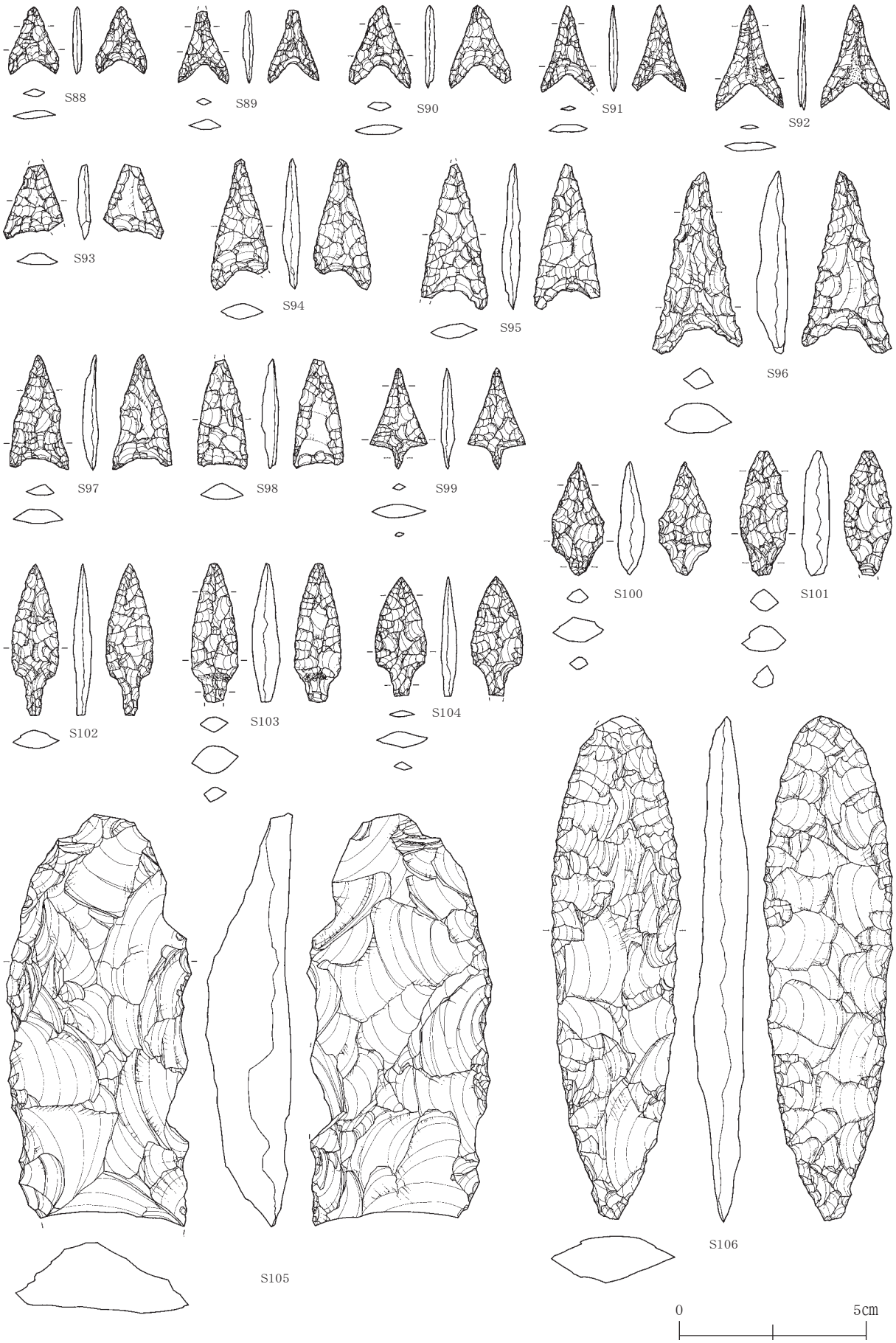
第126図　遺構外出土土器類(12)



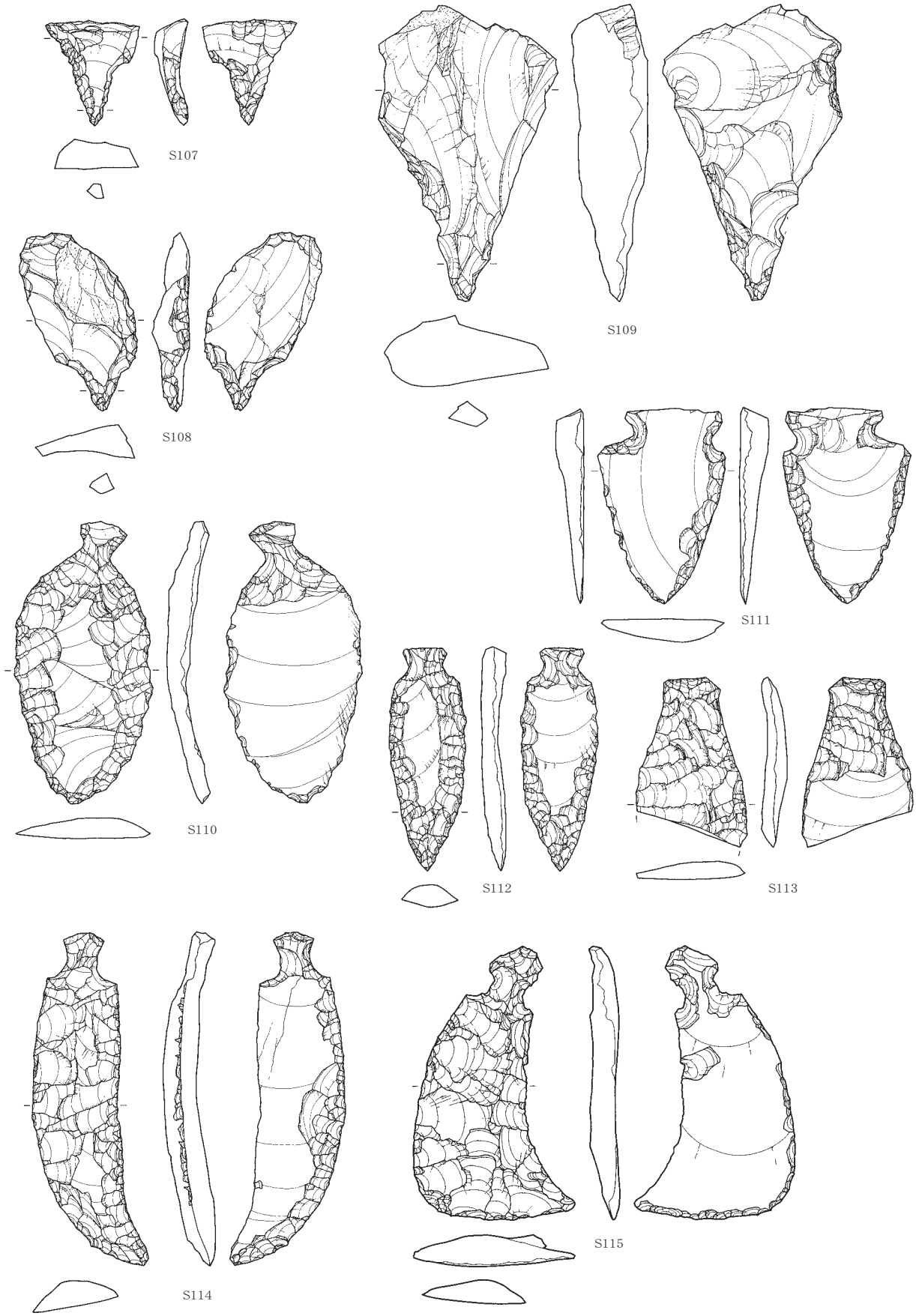
第127図　遺構外出土土器類(13)



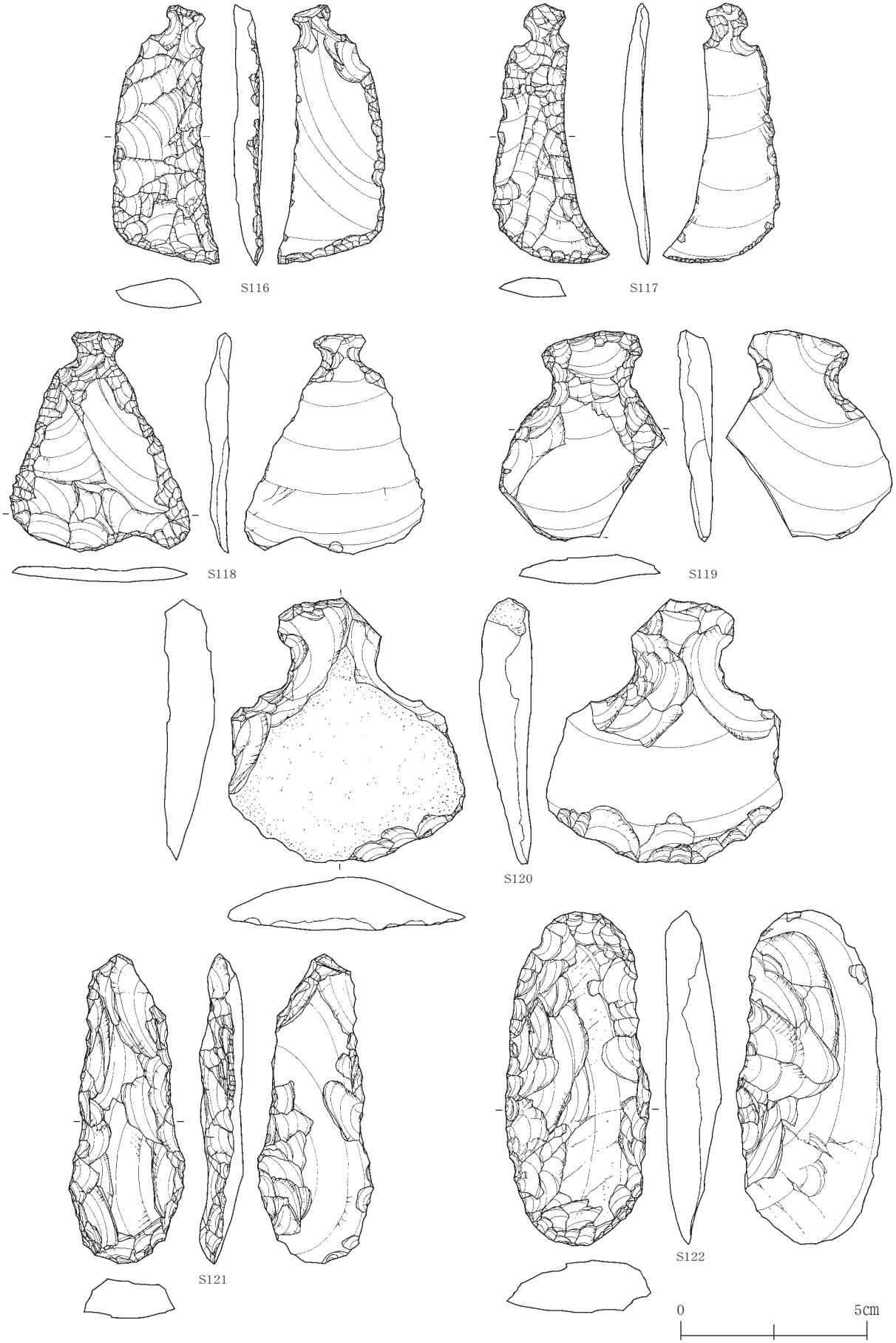
第128図　遺構外出土土器類(14)



第129図　遺構外出土石器類（１）

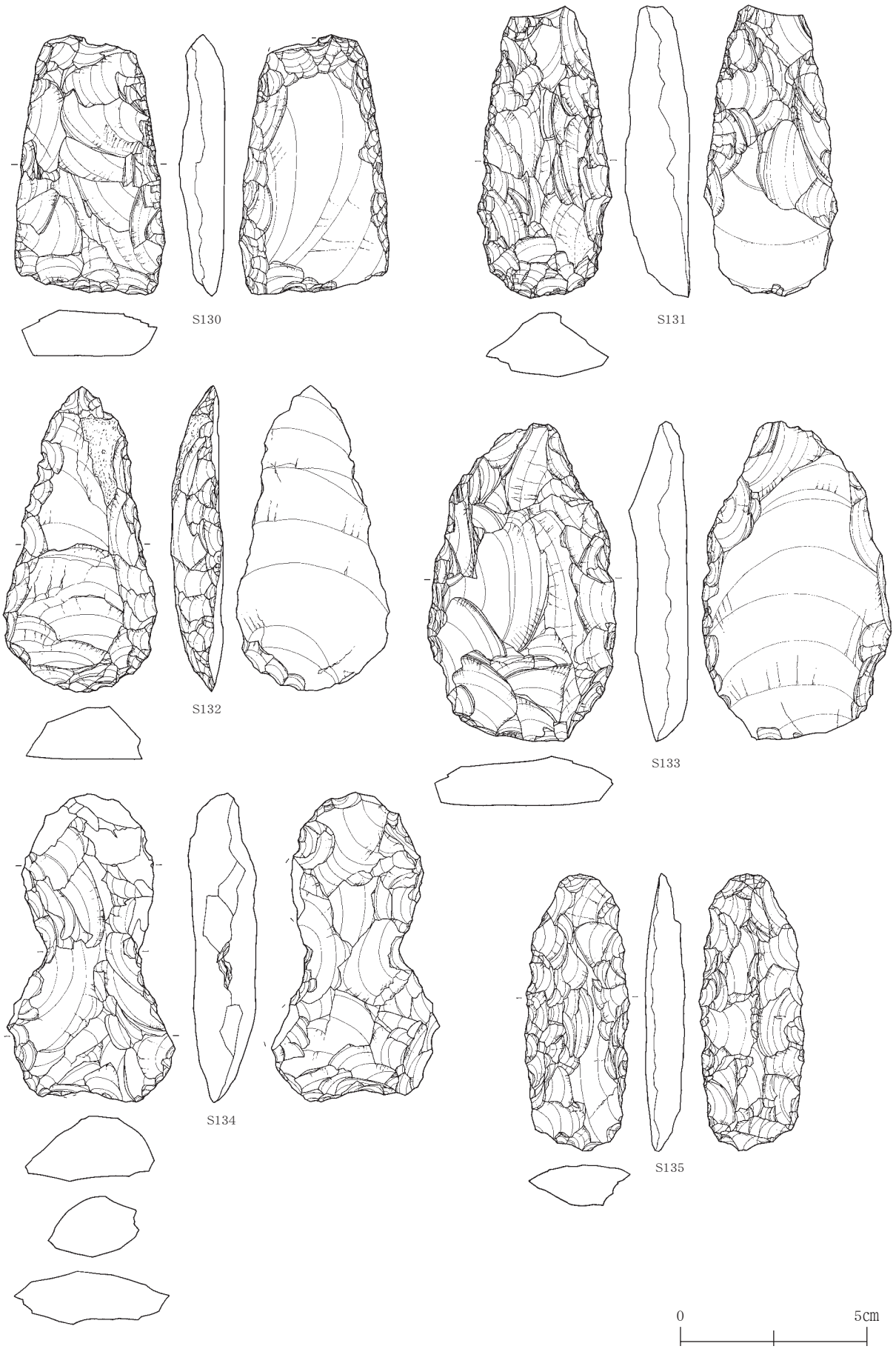


第130図　遺構外出土石器類（２）



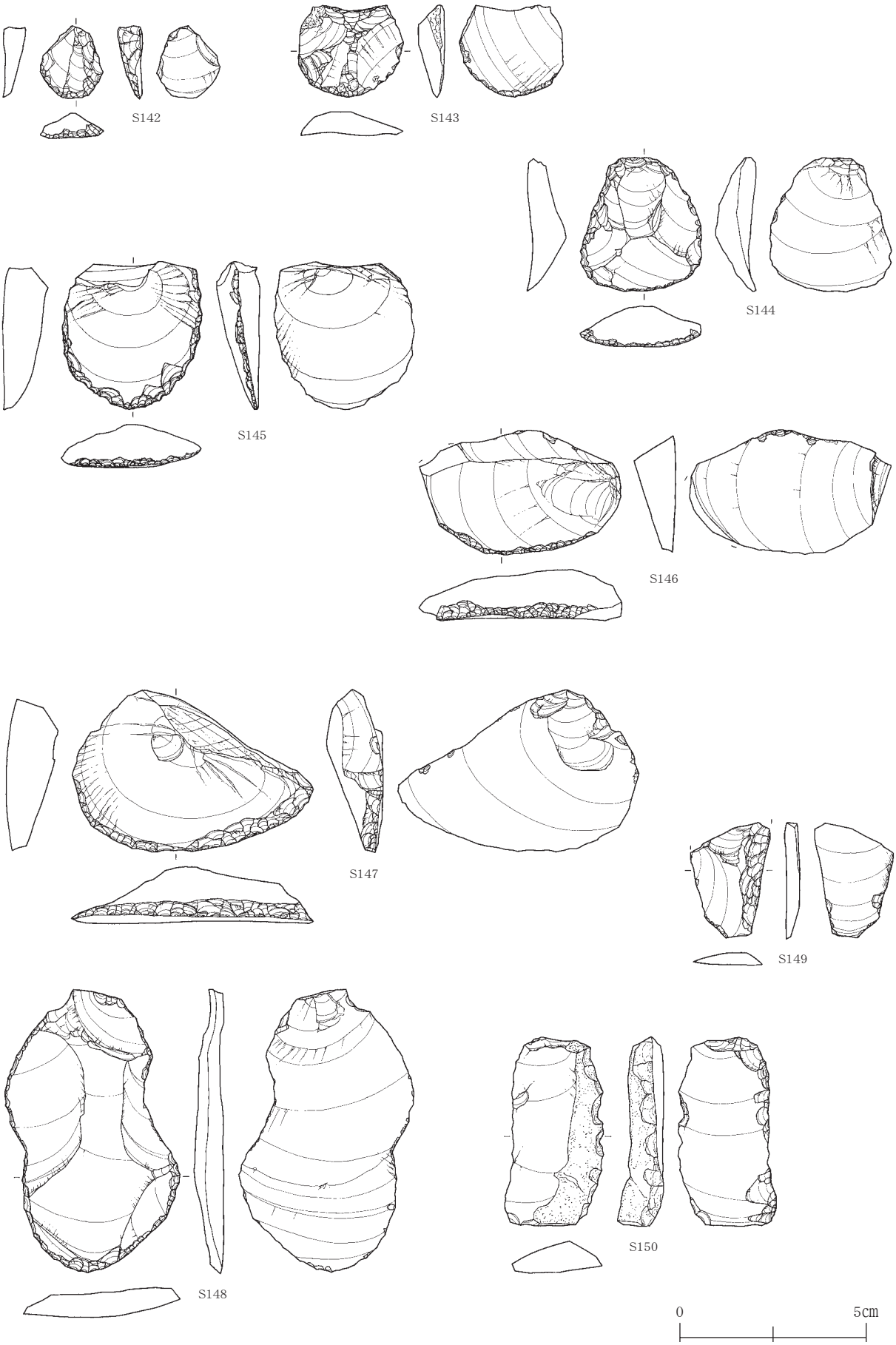
第131図　遺構外出土石器類（３）

第132図　遺構外出土石器類(４)



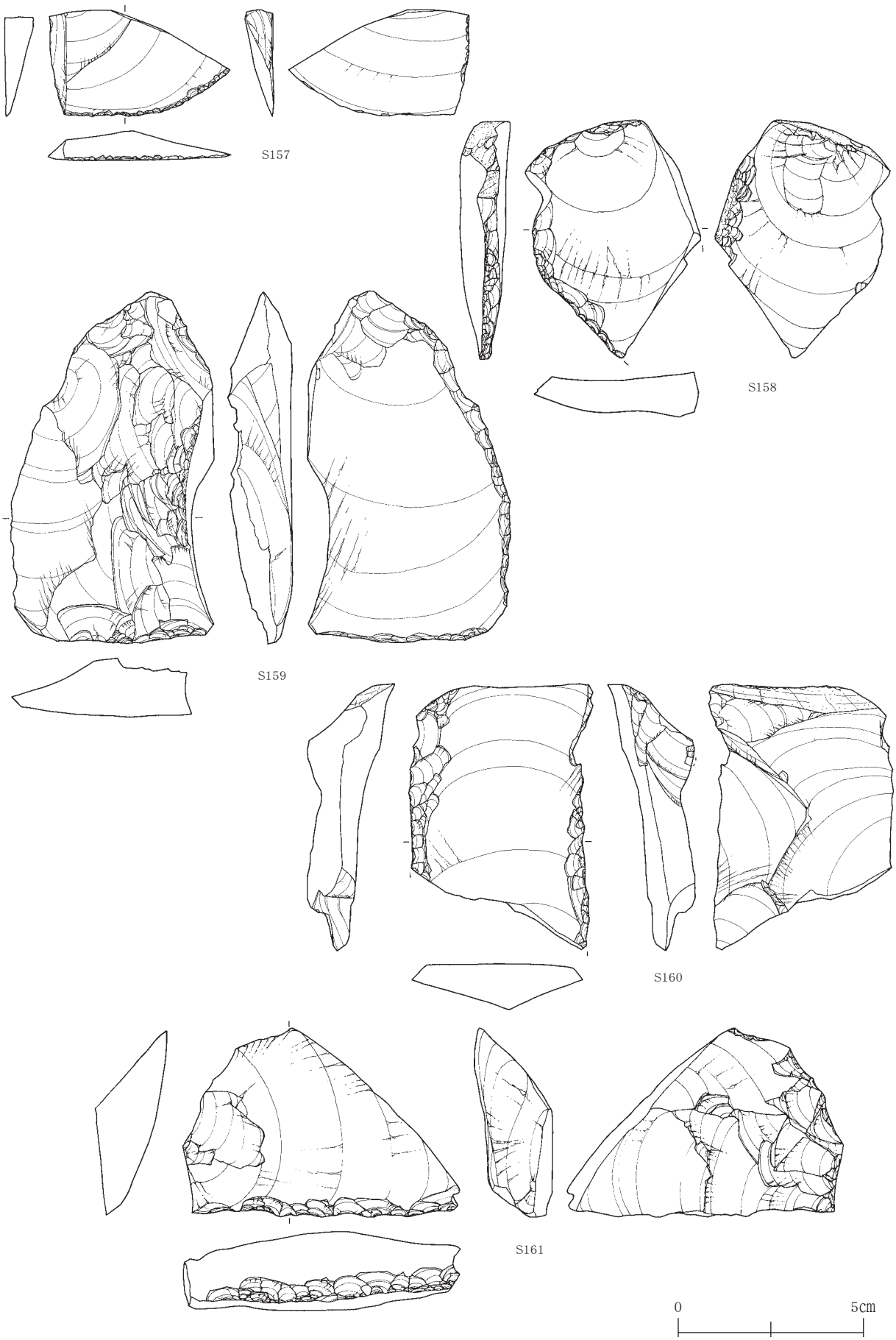
第133図　遺構外出土石器類（５）

第134図　遺構外出土石器類（６）

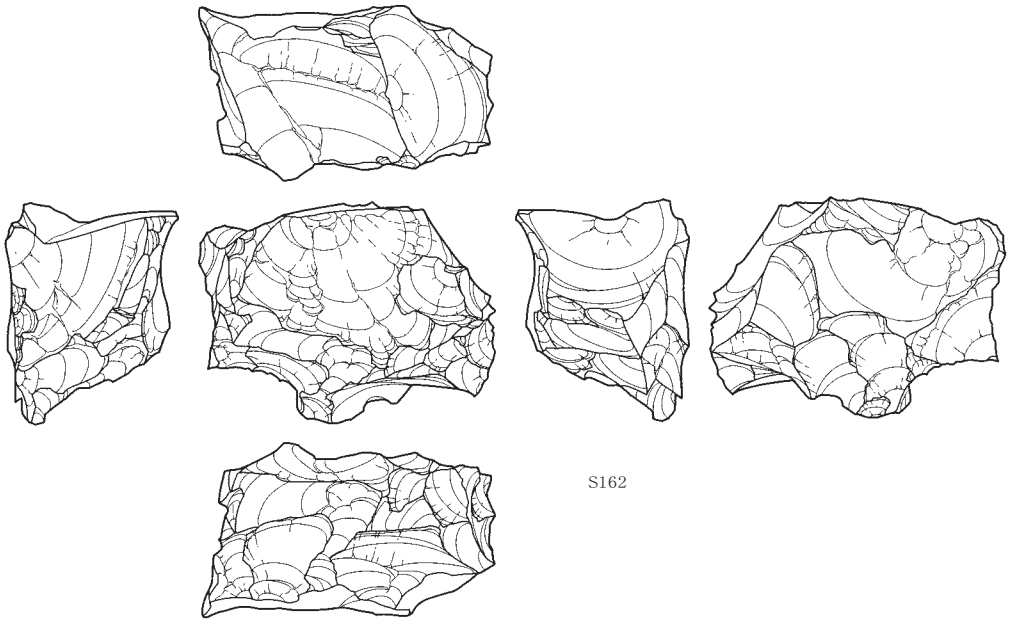


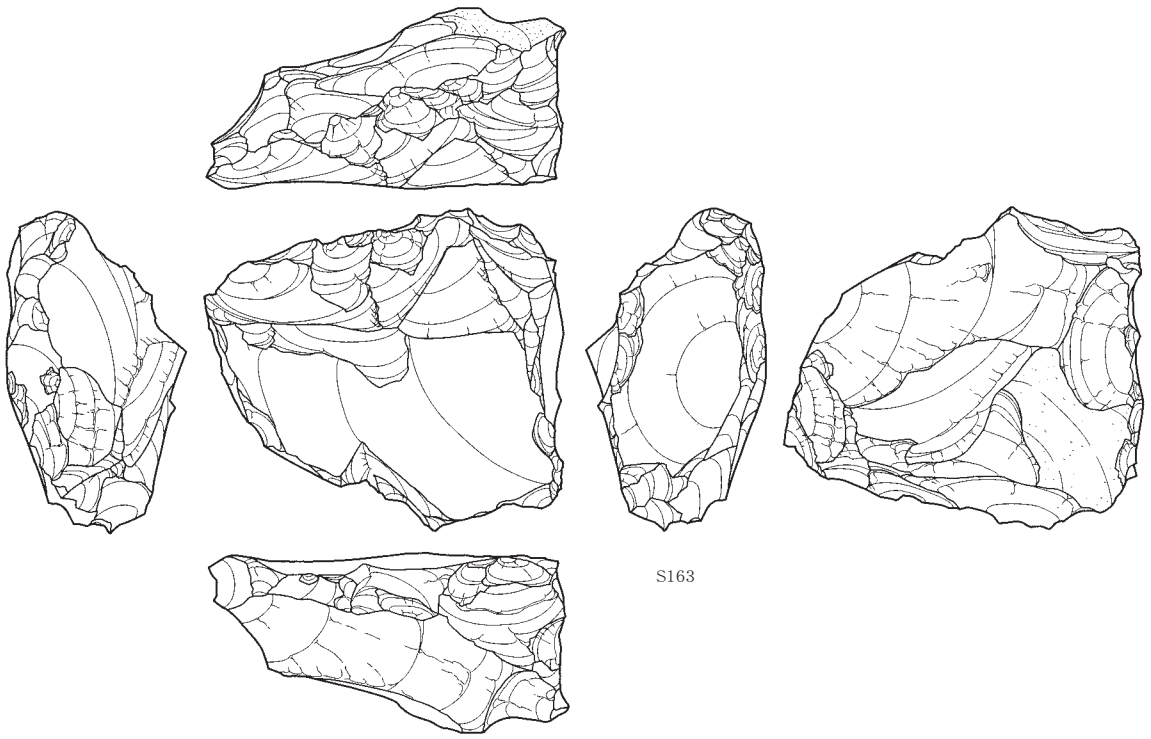
第135図　遺構外出土石器類（７）

第136図　遺構外出土石器類（８）

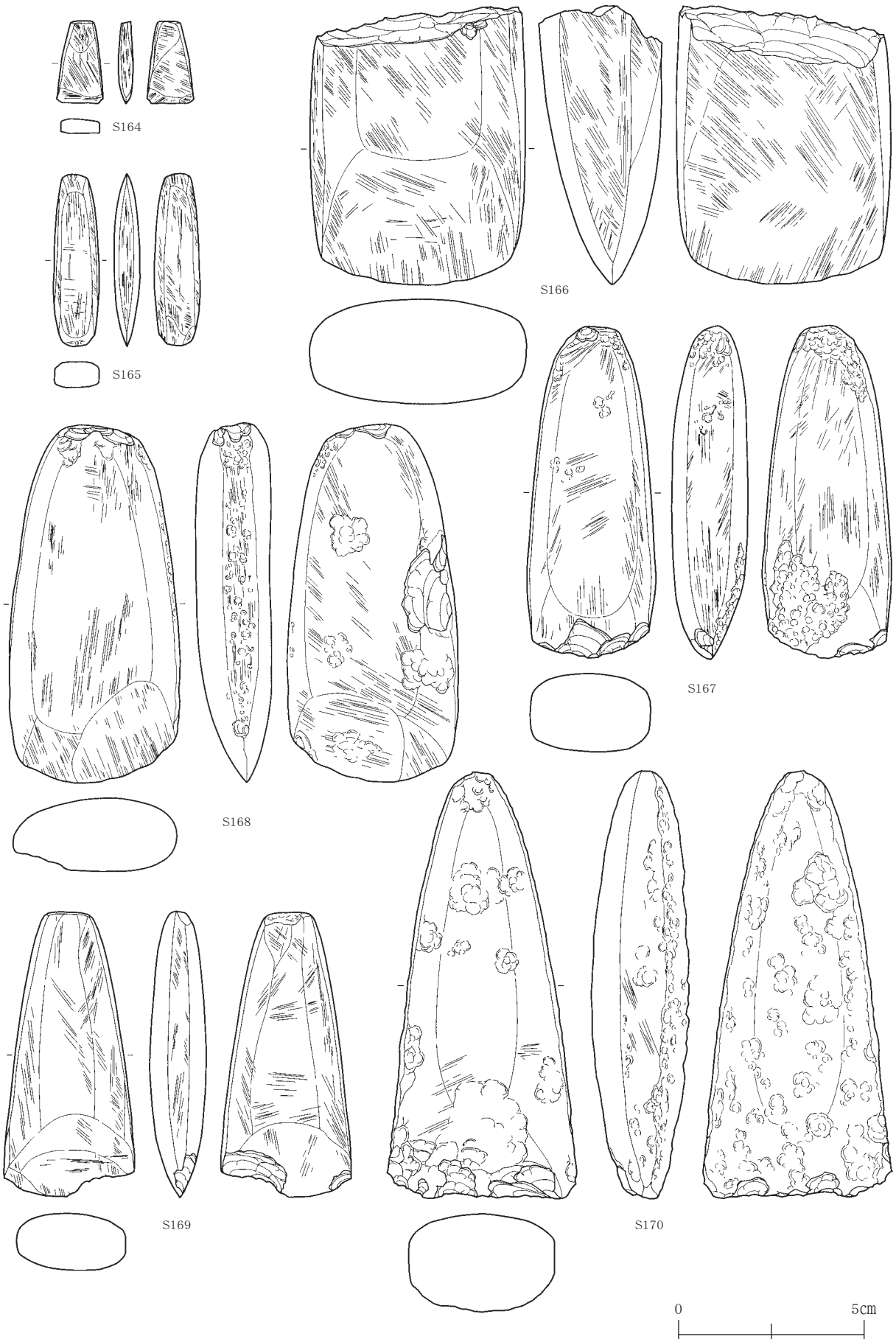


第137図　遺構外出土石器類（９）

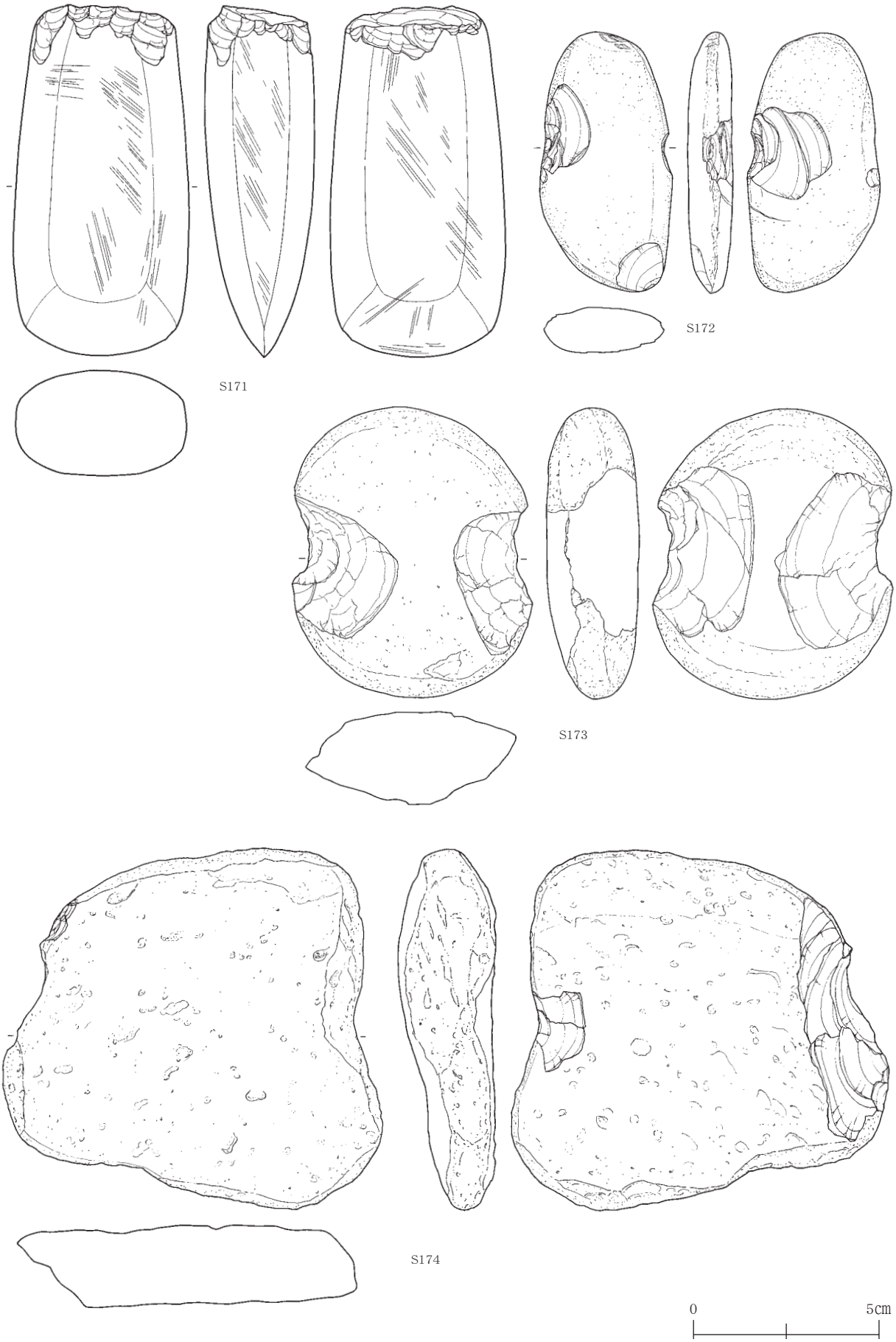




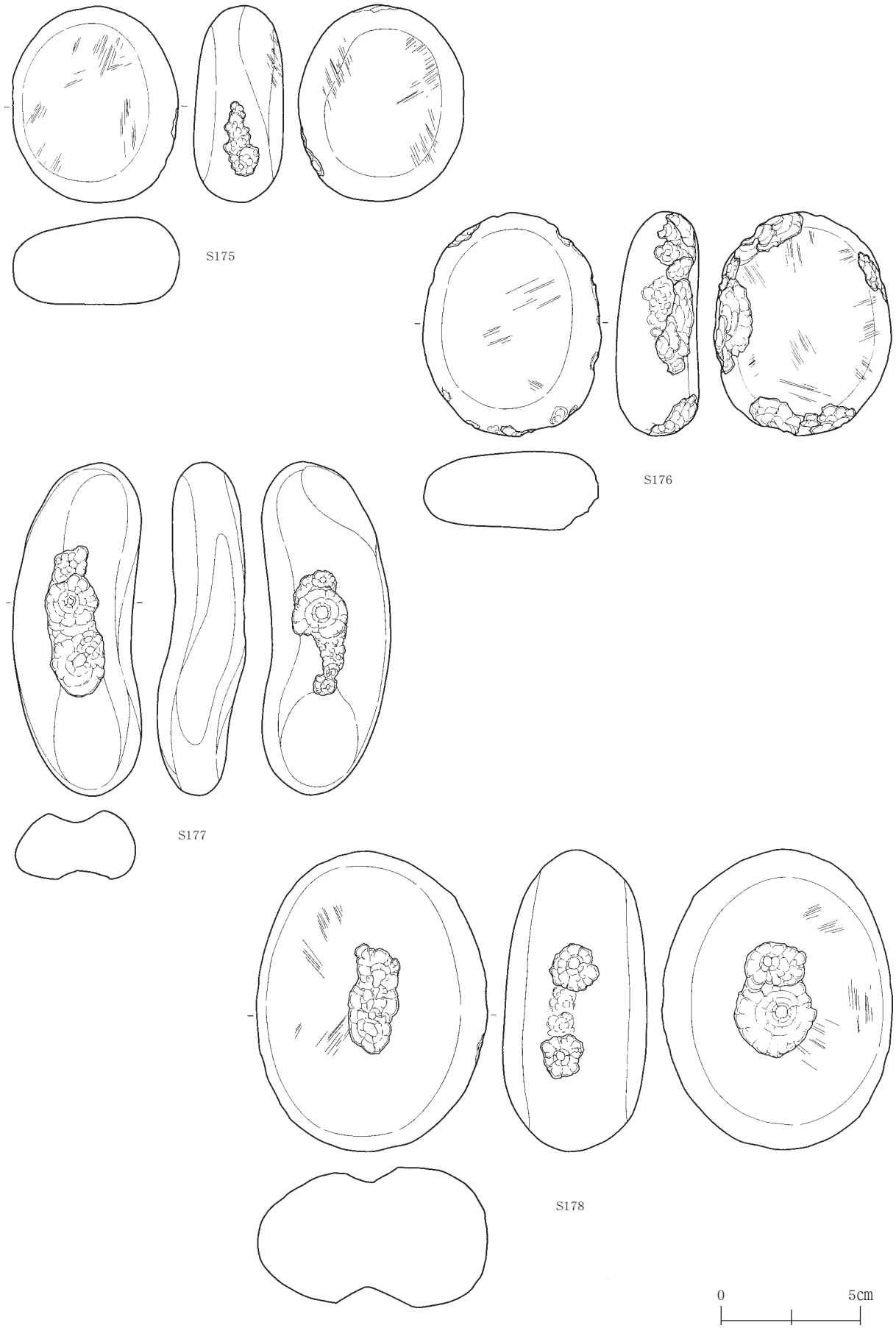
第138図　遺構外出土石器類(10)



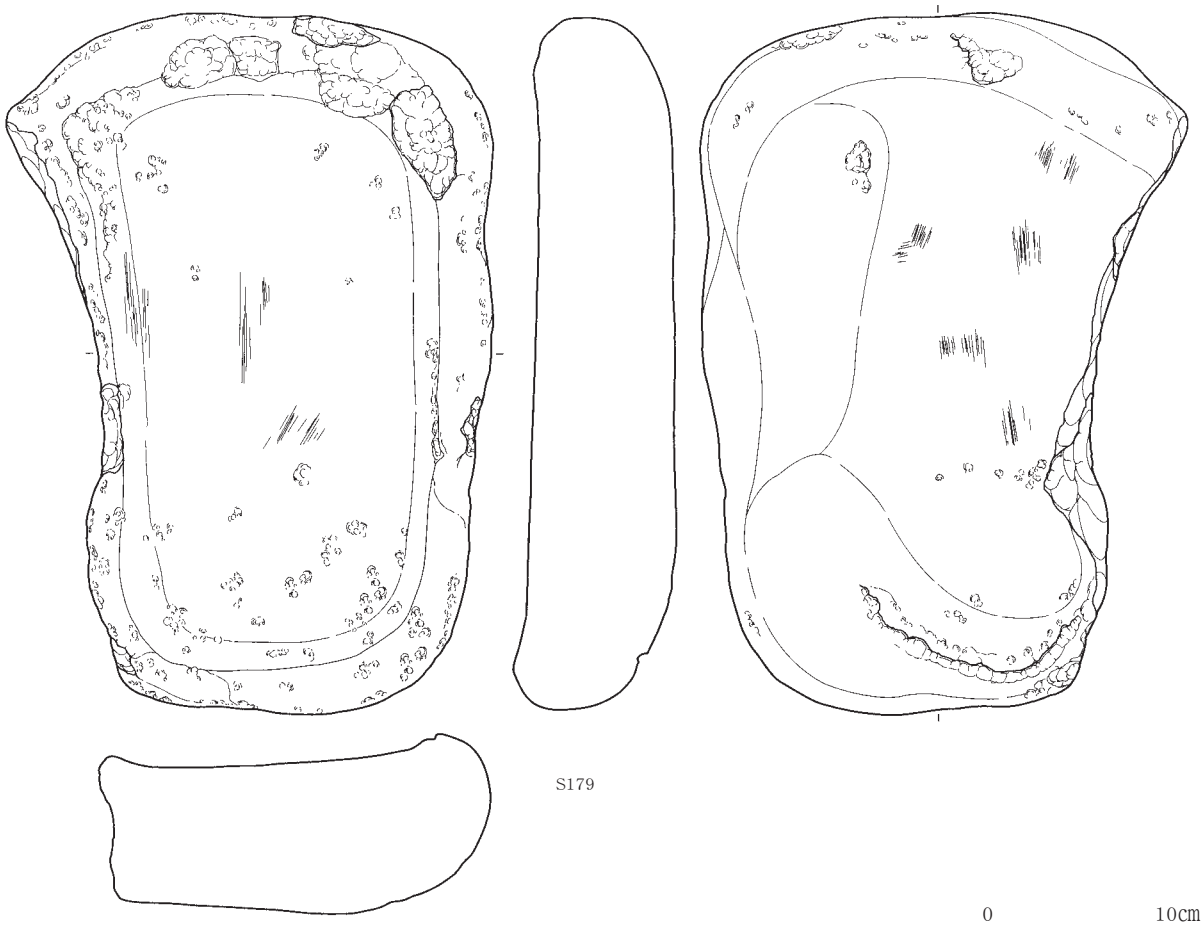
第139図　遺構外出土石器類(11)

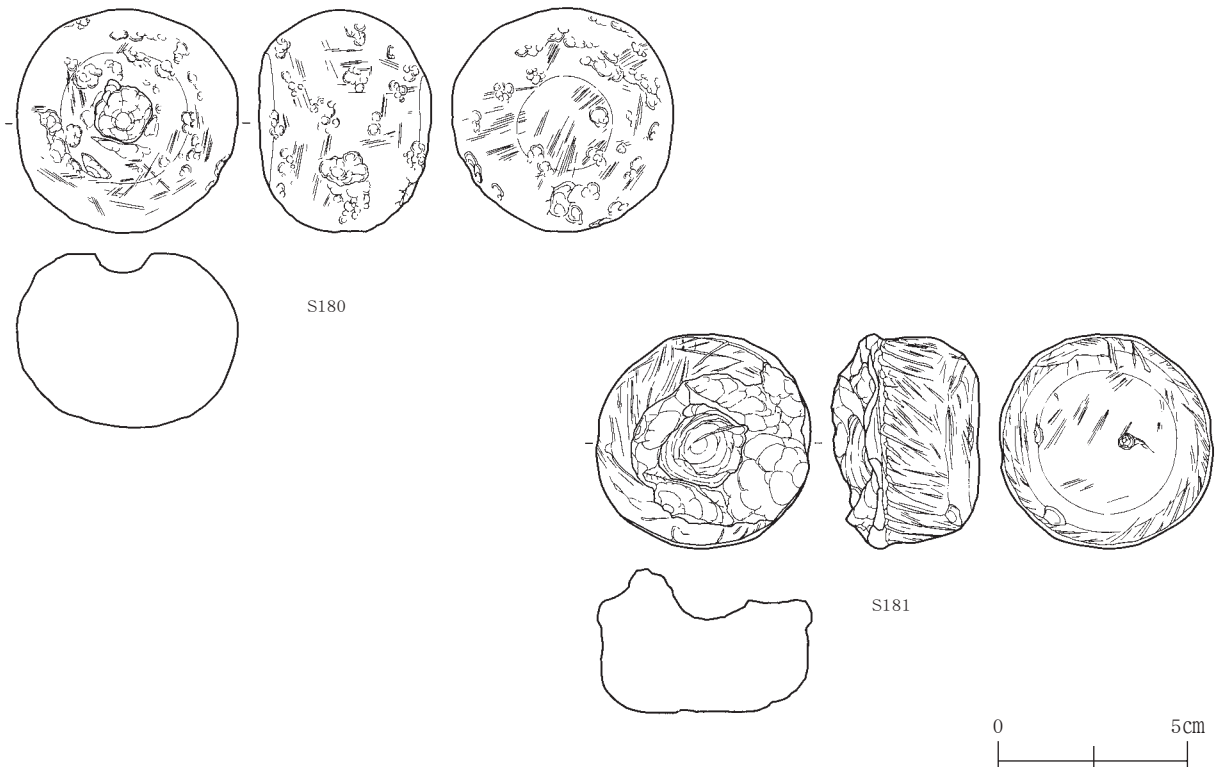


第140図　遺構外出土石器類(12)

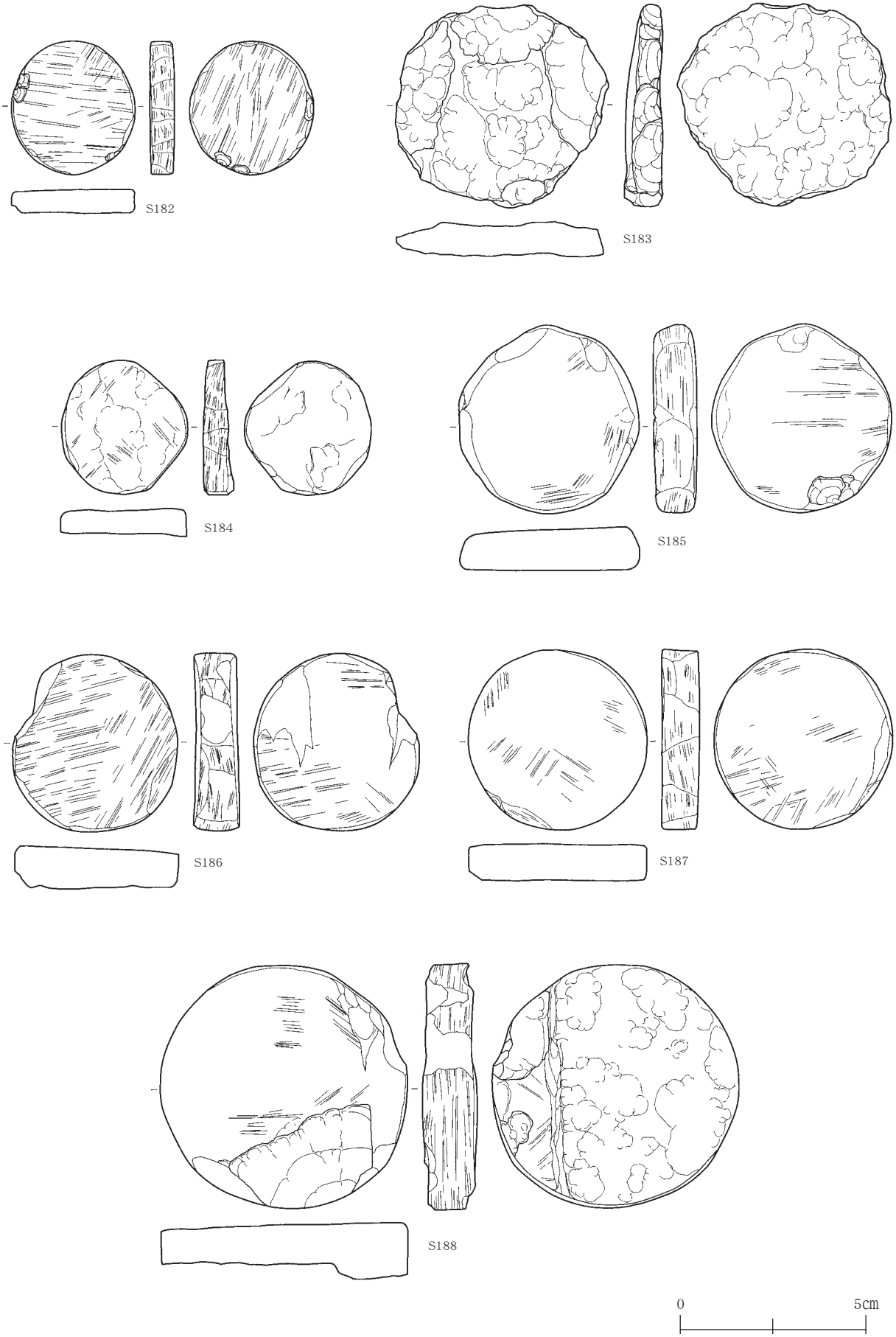


第141図　遺構外出土石器類(13)

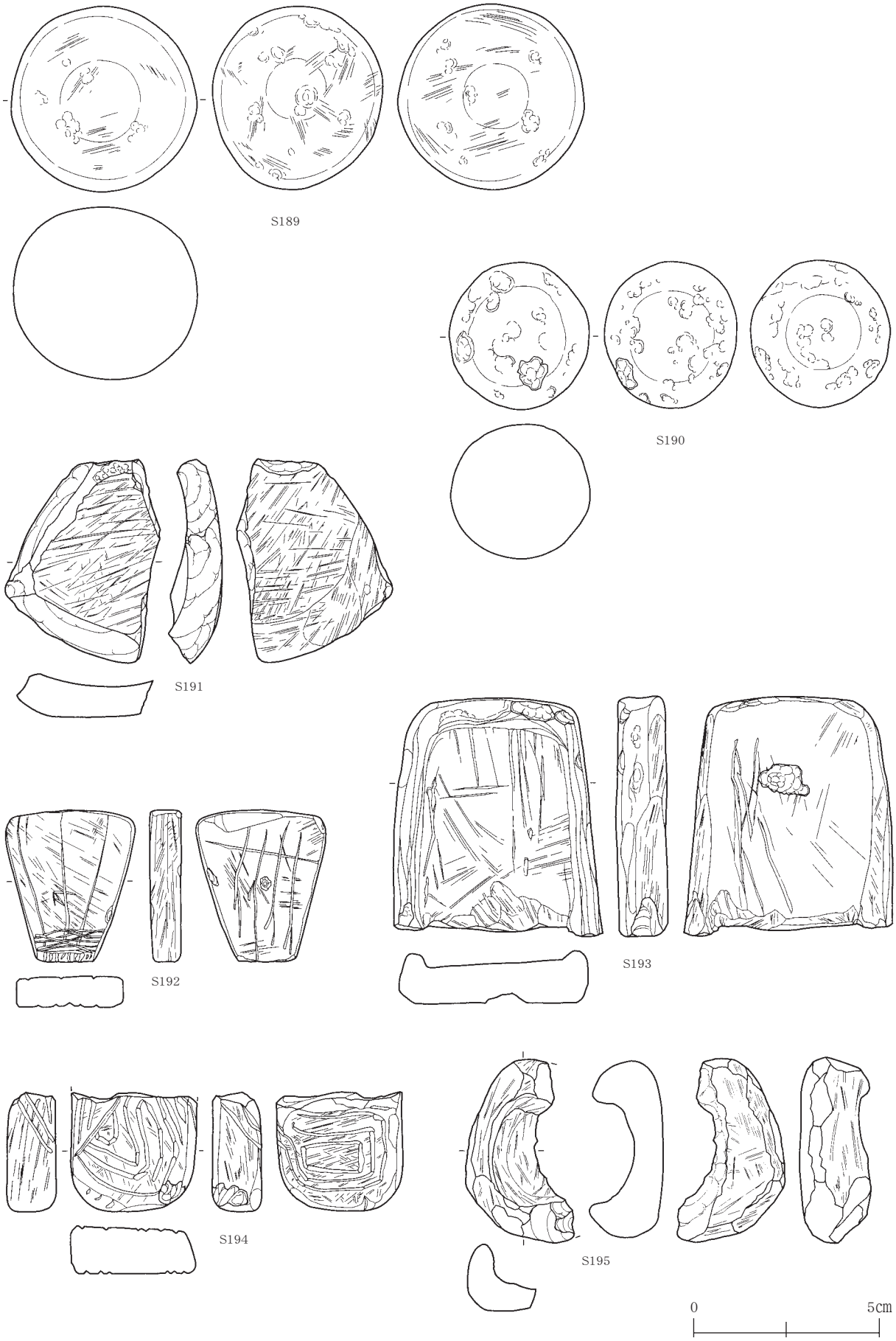




第142図　遺構外出土石器類(14)



第143図　遺構外出土石器類(15)



第144図　遺構外出土石器類(16)

第５表　土器・土製品観察表(１)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
1	SI1105	覆土～掘削痕	深鉢	単軸絡条体側面圧痕、刺突列、結束第1種羽状縄文	ミガキ	－	－	(9.2)	Ⅱ	6と同一個体
2	SI1105	覆土～掘削痕	深鉢	単軸絡条体側面圧痕、刺突列	ミガキ	－	－	(5.7)	Ⅱ	
3	SI1105	覆土～掘削痕	深鉢	縄側面圧痕(RL)、刺突列、結節回転文	ナデ	－	－	(5.2)	Ⅱ	
4	SI1105	覆土～掘削痕	深鉢	結束第2種羽状縄文	ナデ	－	－	(7.7)	Ⅱ	
5	SI1105	覆土～掘削痕	鉢	単軸絡条体第1A類	ナデ	－	－	(6.8)	Ⅱ	
6	SI1105	覆土～掘削痕	深鉢	結束第1種羽状縄文	ミガキ	－	13.7	(14.7)	Ⅱ	1と同一個体
7	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	波状口縁、刺突列、縄側面圧痕(LR)、単軸絡条体第1A類	ミガキ	－	－	(6.2)	Ⅱ	
8	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	無文	ミガキ	－	－	(3.2)	Ⅳf5	
9	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	波状口縁、刺突列、縄側面圧痕(LR)	ナデ	14.1	－	(3.5)	Ⅱ	
10	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	単軸絡条体側面圧痕	ミガキ	－	－	(3.0)	Ⅱ	12と同一個体
11	SI2158	床直	深鉢	単軸絡条体第1A類	ミガキ	－	12.9	(22.1)	Ⅱ	
12	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	RL縄文(横)、単軸絡条体側面圧痕、縄側面圧痕(LR)、LR縄文	ミガキ	－	－	(4.3)	Ⅱ	10と同一個体
13	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	単軸絡条体側面圧痕、刺突列、単軸絡条体第1A類	ナデ	－	－	(3.6)	Ⅱ	
14	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	単軸絡条体側面圧痕、刺突列、単軸絡条体第1A類	ナデ	－	－	(5.9)	Ⅱ	
15	SI2158	覆土～掘削痕	深鉢	縄側面圧痕(L)、結束第1種RL縄文(横)	ナデ	－	－	(4.1)	Ⅱ	
16	SI1229	覆土～掘削痕	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(7.9)	Ⅳh	補修孔1
17	SI1229	覆土～掘削痕	深鉢	貝殻腹縁文、貝殻条痕文、沈線文	ナデ	－	－	(10.1)	Ⅰ	
18	SI1229	覆土～掘削痕	深鉢	地文L縄文(縦、横)、沈線、ボタン状貼付(中心刺突)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(5.6)	Ⅳc1	
19	SI1229	覆土～掘削痕	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上粘土紐貼付)	ナデ	－	－	(4.0)	Ⅲa	
20	SI1229	覆土～掘削痕	深鉢	RLR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(5.2)	Ⅲb	
21	SI1229	覆土～掘削痕	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	4.0	(5.7)	Ⅲb	
22	SI2001	炉	深鉢	口縁隆帯貼付、LR縄文(縦)、底笹痕	ミガキ	25.0	10.0	34.8	Ⅳf1	炉体土器RP1
23	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	波状口縁、口唇沈線、ボタン状貼付(中心刺突)、沈線	ミガキ	－	－	(3.8)	Ⅳa1	
24	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	波状口縁、粘土紐貼付、粘土紐両脇沈線、平行沈線間刺突列	ミガキ	－	－	(3.0)	Ⅳc1	
25	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	地文LR縄文(横走)、細沈線	ナデ	－	－	(3.5)	Ⅳf4	
26	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	縄側面圧痕(LR)	ナデ	－	－	(2.5)	Ⅳb	
27	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	－	(2.3)	Ⅳf3	
28	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	刺突列両脇沈線	ミガキ	－	－	(3.5)	Ⅳd	
29	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上LR縄文(横))、LR縄文(横)	ナデ	－	－	(3.9)		
30	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上LR縄文(横)、粘土紐貼付)、LR縄文(横)	ナデ	－	－	(3.1)	Ⅲa	
31	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	沈線、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、ボタン状貼付	ミガキ	－	－	(4.0)	Ⅳc2	
32	SI2001	覆土～掘削痕	深鉢	縄側面圧痕(LR)、刺突	ミガキ	－	－	(3.3)	Ⅳb	
33	SI2001	覆土～掘削痕	スタンプ状土製品	沈線		－	2.2	(1.3)		
34	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	地文LR縄文(縦・横)、粘土紐貼付、粘土紐両脇沈線、沈線	ナデ	－	－	(5.6)	Ⅲa	
35	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(3.9)	Ⅳf1	
36	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、沈線、地文LR縄文(横)、内面刺突	ナデ	－	－	(5.7)	Ⅳa1	
37	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	口縁山形突起(頂部刻み目3)、縄側面圧痕(LR)、刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	－	(11.8)	Ⅳb	
38	SI2005	SR01	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	8.1	(18.1)	Ⅳf1	埋設土器RP3
39	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	波状口縁(4単位、頂部押圧状刻み目1)、縄側面圧痕(LR)、ボタン状貼付(中心刺突)、刺突	ミガキ	15.3	－	(9.0)	Ⅳb	
40	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	平行沈線、刺突充填	ミガキ	－	－	(4.6)	Ⅳa1	
41	SI2005	覆土～掘削痕	壺	把手	ナデ	－	－	(1.7)	Ⅳf5	
42	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	底木葉痕	ナデ	－	4.9	(1.2)	Ⅳg	
43	SI2005	覆土～掘削痕	深鉢	無文	ナデ、ミガキ	－	9.7	(3.8)	Ⅳg	
44	SI2005	覆土～掘削痕	円盤状土製品	縄文(不明)	ミガキ	－	－	(3.3)		
45	SI2005	覆土～掘削痕	円盤状土製品	RL縄文(縦)	ナデ	－	－	(3.7)		
46	SI2005	炉A	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(28.8)	Ⅳf1	炉体土器RP1
47	SI2005	炉B	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(23.0)	Ⅳf1	炉体土器RP2
48	SI2007	炉A	深鉢	L縄文(縦)	ナデ	－	11.2	(29.3)	Ⅳf1	炉体土器RP2
49	SI2007	炉A	深鉢	波状口縁(4単位)、沈線、L縄文(縦)	ミガキ	20.8	－	(17.2)	Ⅳa1	炉体土器RP1
50	SI2017	新期炉	深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(26.5)	Ⅳf1	炉体土器RP1
51	SI2017	旧期炉	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(28.3)	Ⅳf1	炉体土器RP2
52	SI2017	掘削痕	深鉢	縄側面圧痕(L)、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(3.1)	Ⅳb	
53	SI2019	炉A	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(29.1)	Ⅳf1	炉体土器RP1

第５表　土器・土製品観察表(２)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
54	SI2019	炉B	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(28.0)	Ⅳf1	炉体土器RP2
55	SI2025	炉	深鉢	地文LR縄文(縦)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、粘土紐両脇沈線、沈線(沈線間刺突列)	ミガキ	－	－	(30.5)	Ⅳc2	炉体土器RP1
56	SI2025	炉	深鉢	LR縄文(0段多条・縦)	ミガキ	－	－	(23.3)	Ⅳf1	炉体土器RP2
57	SI2025	SR01	深鉢	L縄文(縦)	ナデ	26.2	－	(25.8)	Ⅳf1	埋設土器RP3
58	SI2025	掘削痕	深鉢	地文単軸絡条体第5類、縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(3.5)	Ⅳb	
59	SI2025	SK02	深鉢	L縄文(口縁部横、胴部縦)	ミガキ	－	－	(8.0)	Ⅳf1	
60	SI2025	SK02	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(5.2)	Ⅳa2	
61	SI2025	SK02	壺	地文単軸絡条体第1類(R、縦・横)、沈線	ナデ	－	－	(5.3)	Ⅳa2	
62	SI2036	覆土～掘削痕	深鉢	口縁隆帯貼付、RL縄文(横)	ミガキ	－	－	(2.7)	Ⅳf1	
63	SI2042	覆土～掘削痕	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(縦)、沈線	ナデ	27.0	－	(15.3)	Ⅳa2	
64	SI2042	覆土～掘削痕	深鉢	縄側面圧痕(L)、ボタン状貼付(中心刺突)、刺突列、刺突列両脇縄側面圧痕(L)、刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	－	(4.9)	Ⅳd	
65	SI2042	覆土～掘削痕	深鉢	沈線、L縄文(縦)	ナデ	－	－	(4.1)	Ⅳa1	68と接合
66	SI2042	覆土～掘削痕	深鉢	無文	ナデ	－	7.6	(3.1)	Ⅳg	
67	SI2042	床直	深鉢	波状口縁(4単位、頂部刻み目3)、口縁隆帯貼付、地文単軸絡条体第1類(R、縦)、沈線、底笹痕	ミガキ	27.5	11.5	42.9	Ⅳa2	RP2
68	SI2042	炉	深鉢	波状口縁(6単位、頂部刻み目3)、沈線、L縄文(縦)	ミガキ	25.2	－	(25.0)	Ⅳa1	炉体土器RP1
69	SI2134-a	炉	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線、底笹痕	ミガキ	－	8.6	(21.6)	Ⅳa2	炉体土器RP1
70	SI2134-c	炉	深鉢	単軸絡条体第5類、底笹痕	ミガキ	－	7.8	(24.5)	Ⅳf2	炉体土器RP3
71	SI2134-b	炉	深鉢	口縁隆帯貼付、波状口縁(4単位)、地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	28.7	－	(23.6)	Ⅳa2	炉体土器RP2
72	SI2134	覆土～床直	深鉢	底笹痕	ナデ	－	9.2	(2.6)	Ⅳg	
73	SI2134-c	覆土～床直	深鉢	波状口縁(頂部刻み目2)、ボタン状貼付(中心刺突)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、粘土紐両脇沈線、刺突列	ナデ	－	－	(3.0)	Ⅳc2	SK02
74	SI2134-c	覆土～床直	ミニチュア土器	沈線、底木葉痕	ナデ	－	3.5	(1.0)		SK02
75	SI2134	覆土～床直	壺	沈線、漆付着	ミガキ	－	－	(5.4)		
76	SI2134	覆土～床直	円盤状土製品	LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(4.0)	Ⅳf1	
77	SI2228	床直	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、ボタン状貼付(貼付上縄側面圧痕(L))	ナデ	－	－	(4.7)	Ⅳc3	78と同一個体
78	SI2228	床直	深鉢	縄側面圧痕(L)、ボタン状貼付(貼付上縄側面圧痕(L))、粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、L縄文(縦)	ナデ	－	－	(14.1)	Ⅳc3	77と同一個体
79	SI2228	炉	深鉢	単軸絡条体第5類、底笹痕	ミガキ	22.4	9.5	36.4	Ⅳf2	炉体土器RP1
80	SI2303	掘削痕	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、粘土紐両脇沈線	ミガキ	－	－	(5.1)	Ⅳc2	
81	SI2344	炉	深鉢	RLR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(32.1)	Ⅳf1	炉体土器RP1
82	SI2344	炉	深鉢	RL縄文(縦)	ナデ	16.2	－	(13.0)	Ⅳf1	炉体土器RP2
83	SI2344	覆土～床直	深鉢	無文	ミガキ	－	6.1	(3.1)	Ⅳg	
84	SI2338	炉	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線(沈線間刺突)、底笹痕	ミガキ	－	10.5	(30.5)	Ⅳa2	炉体土器RP1
85	SI2338	SR01	深鉢	単軸絡条体第1類(R、縦)、底笹痕	ミガキ	22.3	10.2	38.7	Ⅳf2	埋設土器RP2
86	SI2370	炉	深鉢	LR縄文(縦)、底網代痕	ミガキ	－	10.1	(11.7)	Ⅳf1	炉体土器RP1
87	SI2370	SR01	深鉢	LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(3.5)	Ⅳf1	埋設土器RP2
88	SI2374	覆土～掘削痕	深鉢	地文単軸絡条体第1類、沈線	ナデ	－	－	(4.4)	Ⅳa2	
89	SI2374	覆土～掘削痕	深鉢	ボタン状貼付(中心刺突)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(4.2)	Ⅳc2	
90	SI2374	覆土～掘削痕	深鉢	L縄文(縦)、底笹痕	ミガキ	－	9.8	(13.5)	Ⅳf1	95と同一個体
91	SI2374	覆土～掘削痕	深鉢	底笹痕	ナデ	－	5.3	(1.3)	Ⅳg	
92	SI2374	覆土～掘削痕	ミニチュア土器	刺突列充填(粘土隆起)	ナデ	－	2.1	(2.3)		
93	SI2374	炉	深鉢	L縄文(横)	ナデ	20.0	10.4	24.4	Ⅳf1	炉体土器RP1
94	SI2374	炉	深鉢	条痕文をナデ消しLR縄文(縦)、底笹痕	ミガキ	23.2	10.2	33.4	Ⅳf1	炉体土器RP2
95	SI2374	覆土～掘削痕	深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	21.3	－	(13.3)	Ⅳf1	90と同一個体
96	SI2376	炉	深鉢	LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(22.4)	Ⅳf1	炉体土器RP1
97	SI2376	覆土～掘削痕	深鉢	波状口縁、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(4.8)	Ⅳc2	
98	SI2376	覆土～掘削痕	深鉢	L縄文(縦)	ナデ	－	－	(5.4)	Ⅳf1	
99	SI2376	覆土～掘削痕	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、刺突列	ナデ	－	－	(3.5)	Ⅲa	
100	SI2376	覆土～掘削痕	ミニチュア土器	底笹痕	ナデ	－	3.5	(0.9)		
101	SI2376	覆土～掘削痕	ミニチュア土器	沈線	ナデ	－	2.6	5.0		
102	SI2381	掘削痕	深鉢	LR縄文(0段多条、縦)	ミガキ	－	－	(4.7)	Ⅳf1	
103	SI2381	掘削痕	深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	14.0	－	(6.3)	Ⅳf1	
104	SI2381	掘削痕	深鉢	底笹痕	ナデ	－	9.3	(5.0)	Ⅳg	

第５表　土器・土製品観察表(３)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
105	SI2460	炉	深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	10.2	(25.5)	Ⅳf1	炉体土器RP1
106	SI2460	炉	深鉢	L縄文(縦)、底笹痕	ナデ	－	9.8	(16.0)	Ⅳf1	炉体土器RP2
107	SI2475	炉	深鉢	地文L縄文(縦)、沈線、底笹痕	ミガキ	－	10.0	(30.6)	Ⅳa2	炉体土器RP1
108	SI2506	覆土～掘削痕	深鉢	地文刺突(粘土隆起)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ミガキ	－	－	(3.8)	Ⅳc2	
109	SI2506	覆土～掘削痕	深鉢	単軸絡条体第1類(R、縦)	ミガキ	－	－	(9.9)	Ⅳf2	
110	SI2507	覆土～床直	深鉢	隆帯貼付(隆帯上刺突列充填)、粘土紐貼付(粘土紐上刻み目2)、沈線、RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(5.1)	Ⅳh	111と同一個体
111	SI2507	覆土～床直	深鉢	隆帯貼付(隆帯上刺突列充填)、粘土紐貼付(粘土紐上刻み目2)、沈線、RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(5.7)	Ⅳh	110と同一個体
112	SI2507	覆土～床直	深鉢	口縁山形突起、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(5.8)	Ⅳf1	
113	SI2507	覆土～床直	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(4.1)	Ⅳa2	
114	SI2507	覆土～床直	鉢	沈線、充填LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(2.9)	Ⅳa2	
115	SI2507	覆土～床直	壺	沈線、充填R縄文(縦)、赤色顔料付着	ナデ	－	－	(3.2)	Ⅳa2	
116	SI2507	覆土～床直	深鉢	RLR縄文(縦)	ミガキ	－	8.7	(13.1)	Ⅳf1	
117	SI2333	床直	台付鉢	口唇押圧状刻み目列、地文LR縄文(横)、沈線	ミガキ	21.1	9.4	21.5	Ⅵ	RP1
118	SNR2002		深鉢	RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(17.3)	Ⅳf1	炉体土器RP1
119	SNR2002		深鉢	底笹痕	ナデ	－	10.0	(4.0)	Ⅳg	炉体土器RP1
120	SNR2034		深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(14.2)	Ⅳf1	炉体土器RP1
121	SNR2024		深鉢	地文L縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	9.6	(17.6)	Ⅳh	炉体土器RP1
122	SNR2026		深鉢	L縄文(縦)、底笹痕	ミガキ	－	11.6	(13.9)	Ⅳf1	炉体土器RP1
123	SNR2026	覆土	円盤状土製品	LR縄文	ミガキ	－	－	(2.3)		
124	SNR2039		深鉢	R単軸絡条体第1類(縦)	ナデ	－	－	(16.8)	Ⅳf2	炉体土器RP1
125	SNR2109		深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(14.2)	Ⅳf1	炉体土器RP1
126	SNR2176		深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(17.5)	Ⅳa2	炉体土器RP1
127	SNR2156		深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(25.7)	Ⅳa2	炉体土器RP1
128	SNR2186		深鉢	縄側面圧痕(LR)、LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(29.5)	Ⅳb	炉体土器RP1
129	SNR2279		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(15.1)	Ⅳf1	炉体土器RP1
130	SNR2308		深鉢	LR縄文(0段多条、縦)	ミガキ	－	9.2	(18.2)	Ⅳf1	炉体土器RP1
131	SNR2322		深鉢	LR縄文(縦)、粘土紐貼付	ミガキ	－	11.2	(11.3)	Ⅳc1	炉体土器RP1
132	SNR2371		深鉢	地文L縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(15.9)	Ⅳa2	炉体土器RP1
133	SNR2371	覆土～土器内	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(5.3)	Ⅳa2	
134	SNR2371	覆土～土器内	深鉢	RL縄文(縦)	ナデ	－	－	(10.7)	Ⅳf1	
135	SNR2335		深鉢	地文L縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	10.8	(24.3)	Ⅳa2	炉体土器RP1
136	SNR2377		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(25.7)	Ⅳf1	炉体土器RP1
137	SNR2611		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(7.2)	Ⅳf1	炉体土器RP1
138	SNR2611		深鉢	LR縄文(縦)、底笹痕	ナデ	－	9.2	(13.6)	Ⅳf1	炉体土器RP2
139	SNR2378	炉	深鉢	波状口縁、磨消RL縄文(縦・横)、沈線、刺突、底笹痕	ナデ	26.8	9.2	28.9	Ⅳh	炉体土器RP1
140	SNR2612		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(24.6)	Ⅳf1	炉体土器RP1
141	SNR2612		深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、粘土紐両脇沈線、LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(23.3)	Ⅳc2	炉体土器RP2
142	SNR2613		深鉢	RLR縄文(縦)、底笹痕	ナデ	－	6.3	(10.5)	Ⅳf1	炉体土器RP1
143	SNR2613		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	9.2	(22.5)	Ⅳf1	炉体土器RP2
144	SNR2615		深鉢	地文L縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	13.2	(39.8)	Ⅳa2	炉体土器RP2
145	SNR2615		深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	9.3	(29.0)	Ⅳa2	炉体土器RP1
146	SNR2614		深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	10.4	(14.3)	Ⅳf1	炉体土器RP1
147	SNR2614		深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(9.0)	Ⅳf1	炉体土器RP3
148	SNR2614		深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	24.0	－	(28.0)	Ⅳf1	炉体土器RP2
149	SR2040		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	24.2	－	(25.5)	Ⅳf1	埋設土器RP1
150	SR2101		深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ナデ	－	7.3	(11.5)	Ⅳa2	埋設土器RP1
151	SR2102		深鉢	単軸絡条体第5類	ミガキ	－	－	(10.7)	Ⅳf2	埋設土器RP1
152	SR2103		深鉢	RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(6.5)	Ⅳf1	埋設土器RP1
153	SR2105		深鉢	RL縄文(縦)	ナデ	－	9.4	(19.5)	Ⅳf1	埋設土器RP1
154	SR2106		壺	無文	ミガキ	－	5.2	(7.9)	Ⅳf5	埋設土器RP1
155	SR2147		深鉢	単軸絡条体第5類	ミガキ	－	－	(31.1)	Ⅳf2	埋設土器RP1
156	SR2179		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	9.3	(5.9)	Ⅳf1	埋設土器RP1
157	SR2185		深鉢	地文RL縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	10.3	(14.7)	Ⅳa2	埋設土器RP1
158	SR2216		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	9.8	(8.0)	Ⅳf1	埋設土器RP1
159	SR2193		深鉢	RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(6.7)	Ⅳf1	埋設土器RP1
160	SR2194		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(10.9)	Ⅳf1	埋設土器RP1
161	SR2195		深鉢	LRL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(6.0)	Ⅳf1	埋設土器RP1
162	SR2299		深鉢	RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(11.9)	Ⅳf1	埋設土器RP1
163	SR2309		深鉢	LR縄文(縦)、底笹痕	ミガキ	－	10.5	(23.2)	Ⅳf1	埋設土器RP1
164	SR2379		深鉢	地文LR縄文(縦)、縄側面圧痕(LR)	ミガキ	23.4	－	(7.9)	Ⅳb	埋設土器RP1
165	SR2317		深鉢	RLR縄文(縦)、底笹痕	ナデ	－	9.7	(12.5)	Ⅳf1	埋設土器RP1
166	SR2332		深鉢	LR縄文(斜)	ミガキ	－	－	(6.8)	Ⅳf1	埋設土器RP1
167	SR2363		深鉢	底笹痕	ナデ	－	10.4	(1.3)	Ⅳg	埋設土器RP1
168	SR2331		深鉢	縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(2.5)	Ⅳb	埋設土器RP1

第５表　土器・土製品観察表(４)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
169	SR2405		深鉢	条痕文	ミガキ	－	－	(2.5)	Ⅳf4	埋設土器RP1
170	SR2452		深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(5.2)	Ⅳf1	埋設土器RP1
171	SR2452		深鉢	無文	ナデ	－	11.2	(5.8)	Ⅳg	埋設土器RP2
172	SQ2325		深鉢	沈線、沈線内刺突充塡、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(3.8)	Ⅳa1	
173	SQ2325		ﾐﾆﾁｭｱ土器	無文	ナデ	－	3.1	(1.5)		
174	SK1176	覆土	深鉢	口唇貝殻腹縁文、爪形文、貝殻腹縁文	ナデ	－	－	(3.9)	Ⅰ	
175	SK1176	覆土	深鉢	RL縄文(縦)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(9.0)	Ⅰ	
176	SK1176	覆土	深鉢	単軸絡条体第5類	ナデ	21.0	－	(18.5)	Ⅱ	
177	SK1176	覆土	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(15.7)	Ⅱ	
178	SK1176	覆土	深鉢	貝殻腹縁文	ナデ	－	－	(5.0)	Ⅰ	
179	SK1176	覆土	深鉢	貝殻腹縁文	ナデ	－	－	(4.6)	Ⅰ	
180	SK1228	覆土	深鉢	口唇RL縄文(0段多条、縦)、RL縄文(0段多条、横)、胎土に繊維混入	縄文	－	－	(3.8)	Ⅰ	
181	SK1228	覆土	深鉢	沈線、LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(3.4)	Ⅲb	182･183･185と同一個体
182	SK1228	覆土	深鉢	沈線、LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(6.0)	Ⅲb	181･183･185と同一個体
183	SK1228	覆土	深鉢	LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(10.0)	Ⅲb	181･182･185と同一個体
184	SK1228	覆土	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、刺突列、沈線、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(2.8)	Ⅳc2	
185	SK1228	覆土	深鉢	LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(5.5)	Ⅲb	181･182･183と同一個体
186	SK2016	覆土	深鉢	地文RL縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(4.3)	Ⅳa2	
187	SK2016	覆土	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、ボタン状貼付	ミガキ	－	－	(4.5)	Ⅳc2	
188	SK2016	覆土	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ミガキ	－	－	(4.3)	Ⅳc2	
189	SK2030	覆土	深鉢	口縁隆帯貼付、単軸絡条体第1類(R、縦)	ミガキ	－	－	(6.2)	Ⅳf2	
190	SK2030	覆土	深鉢	波状口縁、沈線	ナデ	－	－	(2.6)	Ⅳa1	
191	SK2030	覆土	深鉢	地文RL縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(6.4)	Ⅳa2	
192	SK2030	覆土	深鉢	地文RL縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(4.9)	Ⅳa2	
193	SK2030	覆土	深鉢	沈線	ミガキ	－	－	(3.0)	Ⅳa1	
194	SK2030	覆土	深鉢	底笹痕	ナデ	－	7.6	(1.6)	Ⅳg	
195	SK2030	覆土	深鉢	底笹痕	ミガキ	－	10.2	(1.8)	Ⅳg	
196	SK2030	覆土	ﾐﾆﾁｭｱ土器	無文	ナデ	－	3.1	(1.1)		
197	SK2037	覆土	深鉢	波状口縁、口唇沈線、地文LR縄文(横)、沈線	ミガキ	－	－	(6.0)	Ⅳa2	
198	SK2037	覆土	深鉢	沈線	ミガキ	－	－	(3.9)	Ⅳa1	
199	SK2065	覆土	深鉢	口唇LR縄文(横)、縄側面圧痕(LR)、単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	21.6	－	(22.0)	Ⅱ	
200	SK2215	覆土	深鉢	底笹痕	ナデ	－	7.8	(2.4)	Ⅳg	
201	SK2215	覆土	深鉢	単軸絡条体第5類	ナデ	－	－	(4.4)	Ⅳf2	
202	SK2215	覆土	深鉢	縄側面圧痕(LR)、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(2.7)	Ⅳb	
203	SK2227	覆土	深鉢	沈線、L縄文(横)	ナデ	－	－	(4.1)	Ⅳa1	
204	SK2227	覆土	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、ボタン状貼付(中心刺突)、L縄文(縦)	ナデ	－	－	(2.5)	Ⅳc2	
205	SK2227	覆土	深鉢	底笹痕	ナデ	－	6.1	(1.7)	Ⅳg	
206	SK2239	覆土	深鉢	地文単軸絡条体第1類(R、縦)、沈線	ミガキ	－	－	(2.8)	Ⅳa2	
207	SK2240	覆土	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上刺突列)、L縄文(縦)	ナデ	－	－	(9.8)	Ⅳd	
208	SK2240	覆土	深鉢	縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(6.8)	Ⅳb	
209	SK2240	覆土	深鉢	口縁隆帯貼付、RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(4.7)	Ⅳf1	
210	SK2240	覆土	深鉢	口縁山形突起、地文LR縄文(横)、粘土紐貼付、内面粘土紐貼付	ナデ	－	－	(7.6)	Ⅲa	
211	SK2240	覆土	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、ボタン状貼付	ミガキ	－	－	(4.0)	Ⅳc2	
212	SK2240	覆土	壺	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、沈線	ナデ	－	－	(4.5)	Ⅳc2	
213	SK2240	覆土	深鉢	L縄文(横)	ミガキ	－	－	(7.6)	Ⅳf1	
214	SK2240	覆土	深鉢	無文	ナデ	－	12.4	(1.6)	Ⅳg	
215	SK2240	覆土	深鉢	RL縄文(横)、底笹痕	ナデ	－	8.2	(2.4)	Ⅳg	
216	SK2315	覆土	深鉢	底笹痕	ナデ	－	7.2	(2.5)	Ⅳg	
217	SK2316	覆土	深鉢	刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	－	(3.9)	Ⅳf3	
218	SK2316	覆土	深鉢	貼付口縁、R縄文(縦)	ナデ	－	－	(3.6)	Ⅳf1	
219	SK2323	覆土	深鉢	縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(3.6)	Ⅳb	
220	SK2323	覆土	深鉢	沈線	ナデ	－	－	(5.8)	Ⅳa1	
221	SK2334	覆土	深鉢	地文L縄文(斜)、沈線	ナデ	－	－	(3.0)	Ⅳa2	
222	SK2355	覆土	深鉢	RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(4.1)	Ⅳf1	
223	SK2373	覆土	深鉢	口縁隆帯貼付、LR縄文(横)	ナデ	－	－	(7.3)	Ⅲa	
224	SK2373	覆土	鉢	無文	ナデ	－	3.8	(1.6)	Ⅳg	
225	SK2500	覆土	深鉢	沈線、RL縄文(縦)、内面粘土紐貼付	ナデ	－	－	(6.5)	Ⅲb	
226	SKI2330	覆土	深鉢	縄側面圧痕(LR)、LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(5.4)	Ⅳb	

第５表　土器・土製品観察表(５)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
227	SKI2330	覆土	深鉢	ボタン状貼付(中心刺突)、縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(3.2)	Ⅳb	
228	SKI2330	覆土	深鉢	波状口縁、縄側面圧痕(RL)	ミガキ	－	－	(3.6)	Ⅳb	
229	SKP2210	覆土	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(8.0)	Ⅳa2	
230	SKP2367	覆土	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(9.2)	Ⅳa2	
231	SKP2386	覆土	深鉢	地文L縄文(縦)、粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(LR))、ボタン状貼付	ミガキ	－	－	(11.3)	Ⅳc3	
232	SKP2435	覆土	深鉢	単軸絡条体第1類(R、縦)	ナデ	－	9.9	(4.0)	Ⅳf4	
233	ML35		深鉢	貝殻条痕文、尖底、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(4.5)	Ⅰ	
234	LT62	①Ⅶ	深鉢	貝殻腹縁文	ナデ	－	－	(5.2)	Ⅰ	
235	MB69	①Ⅲ	深鉢	LR縄文(縦走・横走)、胎土に繊維混入、内面LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(6.4)	Ⅰ	
236	範確		深鉢	無文、胎土に繊維混入、内面LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(5.4)	Ⅰ	35トレンチ
237	MA63		深鉢	口唇LR縄文、LR縄文(縦走・横走)、胎土に繊維混入、LR縄文(横走)	ナデ	－	－	(11.1)	Ⅰ	補修孔1
238	MM30	①Ⅲ	深鉢	波状口縁、LR縄文(縦)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(4.5)	Ⅰ	補修孔1
239	MI49	①Ⅶ	深鉢	LR縄文(0段多条、横)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(4.8)	Ⅰ	
240	MJ50	①Ⅶ	深鉢	LR縄文(横)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(4.4)	Ⅰ	
241	MB67	①Ⅰ	深鉢	結束第1種RL縄文(0段多条、横)、胎土に繊維混入	ナデ	24.0	－	(15.3)	Ⅰ	
242	MH･MI49	①Ⅲ	深鉢	LR縄文(0段多条、横)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(13.6)	Ⅰ	
243	ML35		深鉢	RL縄文(横)、底縄文(LR)、胎土に繊維混入	ナデ	－	10.5	(3.1)	Ⅰ	
244	MI48	①Ⅶ	深鉢	波状口縁、押引文、竹管文、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(4.9)	Ⅰ	
245	LO70	②Ⅶ	深鉢	縄側面圧痕(L)、単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(6.5)	Ⅱ	
246	LI64		深鉢	縄側面圧痕(LR)、単軸絡条体第1A類	ミガキ	－	－	(5.4)	Ⅱ	
247	LQ70		深鉢	縄側面圧痕(L)、単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(6.8)	Ⅱ	
248	LQ72	②Ⅳ	深鉢	口唇LR縄文、縄側面圧痕(LR)、単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(5.2)	Ⅱ	
249	LH72		深鉢	縄側面圧痕(LR)、単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(7.5)	Ⅱ	
250	LG72		深鉢	縄側面圧痕(R)、刺突列、RL縄文(横)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(5.0)	Ⅱ	
251	MI62	①Ⅵ	深鉢	縄側面圧痕(LR)、刺突列、結束第1種羽状縄文、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(6.4)	Ⅱ	
252	KG69		深鉢	縄側面圧痕(LR)、刺突列、結束第1種羽状縄文、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(5.8)	Ⅱ	
253	MF60	①Ⅶ	深鉢	LR縄文(横)、縄側面圧痕(LR)、縄(結節?)側面圧痕列	ミガキ	－	－	(5.0)	Ⅱ	
254	MB59	①Ⅶ	深鉢	縄側面圧痕(LR)、刺突列、RL縄文(横)、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(6.0)	Ⅱ	
255	LI72		深鉢	単軸絡条体側面圧痕、縄側面圧痕(L)、LR縄文(横)	ミガキ	－	－	(7.2)	Ⅱ	
256	MB59	①Ⅵ	深鉢	口唇縄側面圧痕列、単軸絡条体側面圧痕、結束第1種羽状縄文(付加条)、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(7.8)	Ⅱ	
257	LQ55	①Ⅵ	深鉢	口唇LR縄文(横)、縄側面圧痕(LR)、刺突列、結束第1種羽状縄文	ミガキ	－	－	(10.6)	Ⅱ	
258	ML38	①Ⅲ	深鉢	縄側面圧痕(R)、刺突列、単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(6.1)	Ⅱ	
259	LQ54	①Ⅶ	深鉢	刺突列、単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(9.5)	Ⅱ	
260	LQ54	①Ⅴ	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(5.6)	Ⅱ	
261	LR69	①Ⅵ	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(5.5)	Ⅱ	
262	MG56	カクラン	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(8.4)	Ⅱ	
263	MC61	①Ⅵ	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(6.8)	Ⅱ	
264	LQ54		深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(6.0)	Ⅱ	
265	MI54	①Ⅶ	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(5.6)	Ⅱ	
266	LT63	①Ⅲ	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(8.0)	Ⅱ	
267	LS50	①Ⅰ	深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(5.7)	Ⅱ	
268	LS70		深鉢	単軸絡条体第1A類、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(7.8)	Ⅱ	
269	LQ55	①Ⅴ	深鉢	結束第1種羽状縄文(横)、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(5.0)	Ⅱ	
270	MB61	カクラン	深鉢	結束第1種羽状縄文(横)、胎土に繊維混入	ミガキ	－	－	(5.9)	Ⅱ	
271	LR69	②Ⅳ	深鉢	結束第1種羽状縄文(横)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(7.7)	Ⅱ	
272	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	結束第1種羽状縄文(縦)、胎土に繊維混入	ナデ	－	－	(10.4)	Ⅱ	
273	LD77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上縄側面圧痕(R))、粘土紐貼付、刺突列、縄側面圧痕(組紐)、結束第1種羽状縄文(縦)	ミガキ	26.9	－	(24.2)	Ⅲa	
274	LF65	②Ⅶ	深鉢	口縁隆帯貼付、隆帯上粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、粘土紐貼付(粘土紐上単軸絡条体第1類)、刺突列	ミガキ	－	－	(4.8)	Ⅲa	
275	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、刺突列	ナデ	－	－	(6.3)	Ⅲa	
276	LH70		深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上単軸絡条体第1類(L))、刺突列	ミガキ	－	－	(7.0)	Ⅲa	

第５表　土器・土製品観察表(６)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
277	KT74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、刺突列	ナデ	－	－	(4.2)	Ⅲa	
278	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上縄側面圧痕(LR))、LR縄文(縦)	ナデ ケズリ	26.4	－	(12.0)	Ⅲa	
279	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(横)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(8.1)	Ⅲa	
280	LP70	①Ⅵ	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上縄側面圧痕(RL))、地文RL縄文(横)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(4.0)	Ⅲa	
281	LL66	①Ⅵ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上RLR縄文)、RLR縄文(縦、横)	ナデ	－	－	(4.7)	Ⅲa	
282	LM75	①Ⅵ	深鉢	口縁隆帯貼付、L縄文(横)	ミガキ	－	－	(5.7)	Ⅲa	
283	LK65	①Ⅵ	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上地文LR縄文(横)、粘土紐貼付)、LR縄文(縦・横)	ナデ	－	－	(5.9)	Ⅲa	
284	LI64	①Ⅵ	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上地文LR縄文(横)、粘土紐貼付)、LR縄文(横)	ナデ	－	－	(5.2)	Ⅲa	
285	MH56	①Ⅵ	深鉢	波状口縁(頂部肥厚)、口縁隆帯貼付(隆帯上LR縄文(縦・横))、貼付突起	ナデ	－	－	(4.4)	Ⅲa	
286	MA72	①Ⅲ	深鉢	地文LR縄文(横)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(6.3)	Ⅲb	
287	LQ54	①Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(横)、粘土紐貼付	ナデ	－	－	(5.5)	Ⅲb	
288	LJ64		深鉢	穿孔、地文RL縄文(横)、粘土紐貼付	ナデ	－	－	(7.0)	Ⅲb	
289	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、粘土紐貼付、粘土紐両脇沈線	ナデ	－	－	(7.7)	Ⅲb	
290	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦・横)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(5.3)	Ⅲb	
291	LH71	②Ⅶ	深鉢	地文LR縄文(横)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(5.5)	Ⅲb	
292	KD61	④Ⅱ	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(6.9)	Ⅲb	
293	KG61	④Ⅱ	深鉢	波状口縁、沈線、磨消縄文(LR縄文(縦))	ミガキ	－	－	(8.6)	Ⅲb	295と同一個体
294	LA75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	磨消縄文(LRL縄文(縦))、沈線、刺突充填	ミガキ	－	－	(5.0)	Ⅲb	円盤状土製品か
295	KG61	④Ⅱ	深鉢	波状口縁、沈線	ミガキ	－	－	(4.6)	Ⅲb	293と同一個体
296	KD60	④Ⅱ	壺	沈線、磨消縄文(RL縄文(横))、内外面赤彩	ナデ	－	－	(6.6)	Ⅲb	
297	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、RL縄文(横)、刺突、沈線	ミガキ	－	－	(11.7)	Ⅳa1	
298	LD76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、口縁隆帯貼付(隆帯上刺突列)、沈線	ナデ	－	－	(3.9)	Ⅳa1	
299	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(頂部刻み目2)、沈線	ナデ	－	－	(3.7)	Ⅳa1	
300	LG63		深鉢	沈線	ナデ	－	－	(4.6)	Ⅳa1	
301	LA76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	沈線	ミガキ	－	－	(7.9)	Ⅳa1	
302	LF76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、沈線	ミガキ	－	－	(5.9)	Ⅳa1	
303	LG66	②Ⅶ	深鉢	沈線	ナデ	－	－	(4.7)	Ⅳa1	
304	LG63	②Ⅶ	壺	沈線、外面赤彩	ミガキ	－	－	(3.0)	Ⅳa1	
305	LH76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(頂部刺突2)、刺突列、沈線、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(4.1)	Ⅳa1	
306	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	沈線	ミガキ	－	－	(8.6)	Ⅳa1	
307	LD76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	沈線、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(5.4)	Ⅳa1	
308	LA76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	沈線	ミガキ	－	－	(6.0)	Ⅳa1	
309	KS74	③Ⅱ～Ⅴ	壺	沈線	ナデ	－	－	(9.6)	Ⅳa1	
310	LI65	②Ⅶ	壺	沈線	ナデ	－	－	(5.5)	Ⅳa1	
311	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	壺	沈線、内外面赤彩	ミガキ	－	－	(3.6)	Ⅳa1	
312	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	壺	沈線、外面赤彩	ナデ	－	7.9	(26.0)	Ⅳa1	
313	LD76	③Ⅱ～Ⅴ	壺	沈線	ミガキ ケズリ	－	－	(12.3)	Ⅳa1	
314	LG77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、口縁隆帯貼付(隆帯上刺突列)、地文LR縄文、沈線	ミガキ	－	－	(12.4)	Ⅳa2	315と同一個体
315	LF76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、口縁隆帯貼付(隆帯上刺突列)、地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(9.9)	Ⅳa2	314と同一個体
316	LR69		深鉢	波状口縁、口縁隆帯貼付(隆帯上刺突列)、地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(4.3)	Ⅳa2	
317	LI64	②Ⅶ	深鉢	口縁隆帯貼付(隆帯上刺突列)、地文単軸絡条体第1類(L、縦)、沈線	ナデ	－	－	(3.7)	Ⅳa2	
318	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文L縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(6.6)	Ⅳa2	
319	LH73	②Ⅶ	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(6.3)	Ⅳa2	
320	KQ74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	25.0	－	(13.2)	Ⅳa2	
321	LE75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(6.8)	Ⅳa2	
322	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(10.3)	Ⅳa2	
323	LO69	②Ⅲ	深鉢	波状口縁、地文単軸絡条体第1類(R、縦)、沈線	ナデ	－	－	(5.5)	Ⅳa2	
324	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(4.1)	Ⅳa2	
325	LD77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	口縁山形突起、縄側面圧痕(RL)、地文LR縄文(縦)、粘土紐貼付、沈線	ミガキ	－	－	(5.2)	Ⅳa2	
326	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	16.9	－	(17.5)	Ⅳa2	
327	LA75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文単軸絡条体第1類(R、縦)、沈線	ミガキ	－	－	(3.7)	Ⅳa2	
328	KR73	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(横)、沈線	ミガキ	－	－	(4.5)	Ⅳa2	331と接合
329	KT74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(4単位)、地文RL縄文(縦)、沈線、ボタン状貼付	ミガキ	16.3	－	(14.2)	Ⅳa2	

第５表　土器・土製品観察表(７)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
330	LG75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、口縁隆帯貼付、地文LR縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(6.7)	Ⅳa2	
331	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文LR縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(7.2)	Ⅳa2	328と接合
332	KQ74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線、沈線間刺突列	ミガキ	－	－	(8.0)	Ⅳa2	
333	LH75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(横)、沈線	ミガキ	－	－	(5.0)	Ⅳa2	
334	LD77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(4.7)	Ⅳa2	
335	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文L縄文(縦)、沈線	ミガキ			(12.9)	Ⅳa2	
336	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文RL縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(6.4)	Ⅳa2	
337	KQ74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文L縄文(縦)、沈線、沈線間刺突列	ミガキ	－	－	(4.0)	Ⅳa2	
338	KQ73	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	磨消LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(5.4)	Ⅳa2	
339	範確		深鉢	地文RL縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(7.9)	Ⅳa2	28トレンチ内
340	LF76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文RL縄文(縦)、沈線	ナデ	－	－	(8.4)	Ⅳa2	
341	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(12.7)	Ⅳa2	
342	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線、刺突	ミガキ	－	－	(11.7)	Ⅳa2	
343	LQ70	②Ⅶ	深鉢	地文L縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	11.5	(16.2)	Ⅳa2	
344	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(6単位、頂部押圧状刻み目1)、LR縄文(縦)、文様帯部分縄文磨消、沈線、沈線間刺突列	ミガキ	30.5	－	(15.3)	Ⅳa3	413と同一個体か
345	LE77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文RL縄文(縦)、文様帯部分縄文磨消、沈線	ミガキ	－	－	(8.1)	Ⅳa3	
346	LA75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、文様帯縄文磨消、沈線	ミガキ	－	－	(6.7)	Ⅳa3	
347	LH77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文L縄文(縦)、文様帯縄文磨消、沈線	ミガキ	－	－	(9.0)	Ⅳa3	
348	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文付加条文(軸L、付加条R)、文様帯縄文磨消、沈線	ミガキ	－	－	(6.5)	Ⅳa3	
349	LC75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、縄側面圧痕(L)、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(9.2)	Ⅳb	
350	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	縄側面圧痕(L)、L縄文、刺突(粘土隆起)		－	－	(6.2)	Ⅳb	
351	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	縄側面圧痕(LR)、LR縄文(縦)	ナデ	－	－	(4.9)	Ⅳb	
352	LA72	②Ⅶ～Ⅸ	深鉢	口縁山形突起、口唇沈線、口縁隆帯貼付(隆帯上縄側面圧痕(LR))、縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(3.7)	Ⅳb	
353	LH75	②Ⅶ～Ⅸ	深鉢	縄側面圧痕(R)	ミガキ	－	－	(3.3)	Ⅳb	
354	LA76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	口縁山形突起、ボタン状貼付、縄側面圧痕(L)	ミガキ	－	－	(4.7)	Ⅳb	
355	KI62	④Ⅱ	深鉢	縄側面圧痕(LR)、刺突列	ミガキ	－	－	(5.6)	Ⅳb	
356	KQ72	②Ⅸ	深鉢	縄側面圧痕(LR)、沈線	ミガキ	－	－	(6.1)	Ⅳb	
357	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(7.5)	Ⅳb	
358	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(頂部刻み目2)、縄側面圧痕(LR)、刺突列	ミガキ	－	－	(3.3)	Ⅳb	
359	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	縄側面圧痕(L)、L縄文(縦)	ミガキ	7.4	－	(4.9)	Ⅳb	
360	KD62	④Ⅱ	深鉢	地文L縄文(縦)、縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(6.8)	Ⅳb	
361	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	縄側面圧痕(LR)、LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(7.2)	Ⅳb	
362	LD76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文縄側面圧痕(L)、ボタン状貼付(中心刺突)、刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	－	(6.2)	Ⅳb	
363	LA75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦、横)、縄側面圧痕(LR)、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(4.3)	Ⅳb	
364	KR73	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、縄側面圧痕(L)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(8.4)	Ⅳc1	
365	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付、縄側面圧痕(RL)、ボタン状貼付、RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(6.2)	Ⅳc1	369と接合
366	LP70	②Ⅶ～Ⅸ	深鉢	粘土紐貼付	ナデ	－	－	(5.2)	Ⅳc1	
367	KP72	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、地文RLR縄文(縦)、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(6.2)	Ⅳc1	
368	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、粘土紐貼付	ミガキ	－	－	(3.7)	Ⅳc1	
369	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、粘土紐貼付、縄側面圧痕(RL)、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(4.8)	Ⅳc1	365と接合
370	LH77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付、粘土紐両脇縄側面圧痕(RL)、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(4.6)	Ⅳc1	
371	LB～LD76 LC75～77 LG75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	口縁山形突起、地文RLR縄文(縦)、粘土紐貼付、縄側面圧痕(RLR)、ボタン状貼付	ミガキ	21.8	9.3	(23.5)	Ⅳc1	
372	LA75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	縄側面圧痕(LR)、ボタン状貼付(中心刺突)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、刺突列、刺突	ミガキ	－	－	(5.6)	Ⅳc2	
373	LH73	②Ⅶ～Ⅸ	深鉢	波状口縁(頂部刻み目3)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、ボタン状貼付(中心刺突)、粘土紐両脇沈線	ミガキ	－	－	(3.5)	Ⅳc2	
374	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突列、刺突列両脇沈線、ボタン状貼付(中心刺突)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ミガキ	－	－	(7.3)	Ⅳc2	
375	KS74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、縄側面圧痕(L)、ボタン状貼付(中心刺突)、LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(14.0)	Ⅳc2	
376	範確		深鉢	波状口縁(頂部刻み目2)、ボタン状貼付(中心刺突列)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突)	ミガキ	－	12.4	(11.3)	Ⅳc2	
377	KR74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、ボタン状貼付(中心刺突)、縄側面圧痕(L)	ミガキ	－	－	(4.0)	Ⅳc2	28トレンチ内
378	LC75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、縄側面圧痕(RL)、ボタン状貼付	ミガキ	－	－	(4.4)	Ⅳc2	

第５表　土器・土製品観察表(８)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
379	LB74 LC75･76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ミガキ	－	－	(8.0)	Ⅳc2	
380	LJ64	②Ⅶ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、刺突	ミガキ	－	－	(7.9)	Ⅳc2	
381	KS75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(頂部縄側面圧痕(LR)2)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、縄側面圧痕(LR)	ミガキ	－	－	(5.1)	Ⅳc2	
382	LA66	②Ⅶ	深鉢	波状口縁、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ミガキ	－	－	(3.2)	Ⅳc2	
383	LD76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(頂部刻み目3)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ナデ	－	－	(6.0)	Ⅳc2	
384	KR74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、縄側面圧痕(LR)、刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	－	(5.5)	Ⅳc2	
385	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(頂部刻み目2)、沈線、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、刺突列	ミガキ	－	－	(4.4)	Ⅳc2	
386	LH76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ミガキ	－	－	(4.0)	Ⅳc2	
387	LO68	②Ⅳ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(5.2)	Ⅳc2	
388	LB74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、粘土紐両脇沈線、ボタン状貼付(中心刺突)、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(12.0)	Ⅳc2	
389	LA74	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文L縄文(縦)、粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)	ナデ	－	－	(8.8)	Ⅳc2	
390	LB74･76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(8.5)	Ⅳc2	
391	LQ59		深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上刺突列)、粘土紐両脇沈線	ミガキ	－	－	(5.9)	Ⅳc2	
392	LF66	②Ⅶ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(LR))	ナデ	－	－	(5.5)	Ⅳc3	
393	LJ64	②Ⅶ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(RL))、縄側面圧痕(RL)	ミガキ	－	－	(4.8)	Ⅳc3	394と同一個体
394	LI64	②Ⅶ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(RL))、縄側面圧痕(RL)	ミガキ	－	－	(4.0)	Ⅳc3	393と同一個体
395	LD76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、縄側面圧痕(L)、ボタン状貼付	ナデ	－	－	(4.7)	Ⅳc3	
396	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁(頂部押圧状刻み目１)、ボタン状貼付(中心刺突)、縄側面圧痕(LR)、粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(R))	ナデ	－	－	(3.4)	Ⅳc3	
397	LF66	②Ⅶ	深鉢	地文LR縄文(縦)、粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(LR))	ミガキ	－	－	(11.3)	Ⅳc3	
398	LE66	②Ⅶ	深鉢	粘土紐貼付(粘土紐上縄側面圧痕(L))、縄側面圧痕(L)、ボタン状貼付(貼付上縄側面圧痕(L))、L縄文(縦)	ナデ	－	－	(8.7)	Ⅳc3	
399	KE60		深鉢	口縁山形突起(頂部刻み目1)、刺突列、LR縄文(縦)	ミガキ	8.0	－	(8.2)	Ⅳd	
400	LM67	②Ⅶ～Ⅸ	深鉢	刺突列、刺突列両脇沈線	ミガキ	－	－	(4.1)	Ⅳd	
401	LA･LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突列、刺突列両脇沈線	ナデ	23.5	－	(11.4)	Ⅳd	
402	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突列、刺突列両脇沈線、刺突(粘土隆起)	ナデ	－	－	(5.6)	Ⅳd	
403	LA75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、口縁隆帯貼付(隆帯上地文LR縄文(横)、沈線)、ボタン状貼付	ミガキ	－	－	(5.7)	Ⅳe	
404	LE77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文単軸絡条体第5類、ボタン状貼付	ミガキ	－	－	(5.9)	Ⅳe	
405	LO51		壺	口縁山形突起(4単位)、口縁隆帯貼付(隆帯上刺突列)、ボタン状貼付(中心刺突)、隆帯貼付(隆帯上LR縄文(横))、外面赤彩	ナデ	－	10.3	(14.9)	Ⅳe	
406	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	L縄文(縦)	ミガキ ケズリ	28.0	－	(3.3)	Ⅳf1	
407	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	L縄文(縦)	ミガキ	－	9.0	(10.7)	Ⅳf1	
408	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	L縄文	ミガキ	－	9.0	(8.0)	Ⅳf1	
409	KT73	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	LR縄文(0段多条、縦)	ミガキ	24.2	－	(8.9)	Ⅳf1	
410	LA76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	18.7	－	(18.1)	Ⅳf1	
411	KS･KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(13.9)	Ⅳf1	
412	KS74･75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(15.5)	Ⅳf1	
413	LB･LC76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	LR縄文(縦)、底笹痕	ミガキ	－	12.7	(16.9)	Ⅳf1	344と同一個体か
414	KP70	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	LR縄文(縦)	ミガキ	－	16.0	11.1	Ⅳf1	
415	LF76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	口縁隆帯貼付、RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(4.8)	Ⅳf1	
416	KQ73	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	RL縄文(縦)	ミガキ	－	－	(9.8)	Ⅳf1	
417	LI64	②Ⅶ～Ⅸ	深鉢	RLR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(14.1)	Ⅳf1	
418	LG64	②Ⅶ～Ⅸ	鉢	RL縄文(縦)、底網目状沈線	ミガキ	－	6.0	(7.9)	Ⅳf1	
419	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	RL縄文(縦)、底網代痕	ナデ	－	7.4	(4.8)	Ⅳf1	
420	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	不加条	ミガキ	－	－	(9.4)	Ⅳf1	
421	LM67	②Ⅶ～Ⅸ	深鉢	波状口縁、単軸絡条体第1類	ミガキ	－	－	(12.5)	Ⅳf2	
422	LA75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	単軸絡条体第5類	ミガキ	－	－	(17.8)	Ⅳf2	
423	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	単軸絡条体第5類	ミガキ	－	－	(11.9)	Ⅳf2	
424	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	(5.5)	(2.7)	Ⅳf3	
425	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突、内面付着物(漆？)あり	ミガキ	－	－	(3.7)	Ⅳf3	
426	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突、底笹痕	ミガキ	－	(5.4)	(4.4)	Ⅳf3	
427	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突(粘土隆起)	ミガキ	－	(13.9)	(7.3)	Ⅳf3	
428	LD77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	刺突(粘土隆起)	ナデ	－	－	(6.1)	Ⅳf3	
429	LD77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	条痕文	ミガキ	－	－	(8.0)	Ⅳf4	
430	LD76	③Ⅱ～Ⅴ	壺？	無文	ミガキ	－	(7.9)	(8.1)	Ⅳf5	

第５表　土器・土製品観察表(９)

挿図番号	出土遺構・区	層位	器形	文様等の特徴	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	備考
431	LF76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	底網代痕	ミガキ	－	(9.9)	(3.7)	Ⅳg	
432	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	波状口縁、刺突、地文単軸絡条体第1類(L、縦)、沈線	ナデ	－	－	(6.4)	Ⅳh	433と同一個体
433	LD77	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文単軸絡条体第1類(L、縦)、沈線	ナデ	－	－	(8.2)	Ⅳh	432と同一個体
434	KR74	③Ⅱ～Ⅴ	鉢	波状口縁、口唇沈線、地文LR縄文(縦)、沈線、内面:粘土紐貼付、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(4.3)	Ⅴ	
435	LH76	③Ⅱ～Ⅴ	深鉢	地文LR縄文(縦)、沈線	ミガキ	－	－	(5.7)	Ⅴ	
436	KD61	④Ⅱ	壺	沈線、充填縄文(LR縄文(0段多条))	ナデ	－	－	(3.1)	Ⅴ	
437	KN73	③Ⅱ～Ⅴ	注口	無文	ナデ	－	－	(3.9)	Ⅴ	438と同一個体か
438	LO51		注口	無文		－	(2.5)	(1.9)	Ⅴ	437と同一個体か
439	ML38		深鉢	口唇ボタン状貼付(中心刺突)、刻目文、入組帯縄文、充填LR縄文、ボタン状貼付(中心刺突)	ミガキ	－	－	(17.1)	Ⅴ	
440	ML38		甕	口縁小突起、沈線、LR縄文(横)、内面沈線	ナデ	－	－	(6.4)	Ⅶ	
441	範確		壺	沈線、充填縄文(LR縄文)	ナデ	－	(5.3)	(3.5)	Ⅶ	
442	KS75	③Ⅱ～Ⅴ	ミニチュア土器	L縄文(縦)	ナデ	－	(3.0)	(3.4)		
443	LI71	②Ⅸ	ミニチュア土器	刺突	ナデ	－	(3.3)	(1.5)		
444	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	ミニチュア土器	無文	ナデ	－	(3.4)	(1.2)		
445	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	ミニチュア土器	無文	ナデ	(2.2)	(1.5)	(3.2)		
446	LB74	③Ⅱ～Ⅴ	ミニチュア土器	L縄文	ミガキ	－	－	(3.0)		
447	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	円盤状土製品	LR縄文	ミガキ	－	－	(4.1)		
448	KQ73	③Ⅱ～Ⅴ	円盤状土製品	単軸絡条体第1類(R)	ミガキ	－	－	(4.2)		
449	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	円盤状土製品	単軸絡条体第1類(L)	ミガキ	－	－	(4.3)		
450	LP70	②Ⅶ～Ⅸ	円盤状土製品	単軸絡条体第5類	ナデ	－	－	(3.9)		
451	LG73	②Ⅶ～Ⅸ	円盤状土製品	L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(3.6)		
452	LH76	③Ⅱ～Ⅴ	円盤状土製品	L縄文(縦)	ミガキ	－	－	(4.2)		
453	LG75	③Ⅱ～Ⅴ	円盤状土製品	外面劣化により不明	ナデ	－	－	(3.4)		
454	LF64	②Ⅶ	円盤状土製品	LR縄文(縦)	ミガキ	－	－	(3.3)		
455	LL75	③Ⅱ～Ⅴ	円盤状土製品	底部片	ミガキ	－	－	(4.2)		
456	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	顔形土製品	刺突		(縦)4.2	(横)3.1	(幅)3.0		
457	LB76	③Ⅱ～Ⅴ	土偶	沈線		(縦)(5.3)	(横)(4.2)	(厚さ)4.0		
458	LH75	③Ⅱ～Ⅴ	土偶	刺突		(縦)(7.0)	(横)(5.9)	(厚さ)1.7		

第６表　石器・石製品観察表(１)

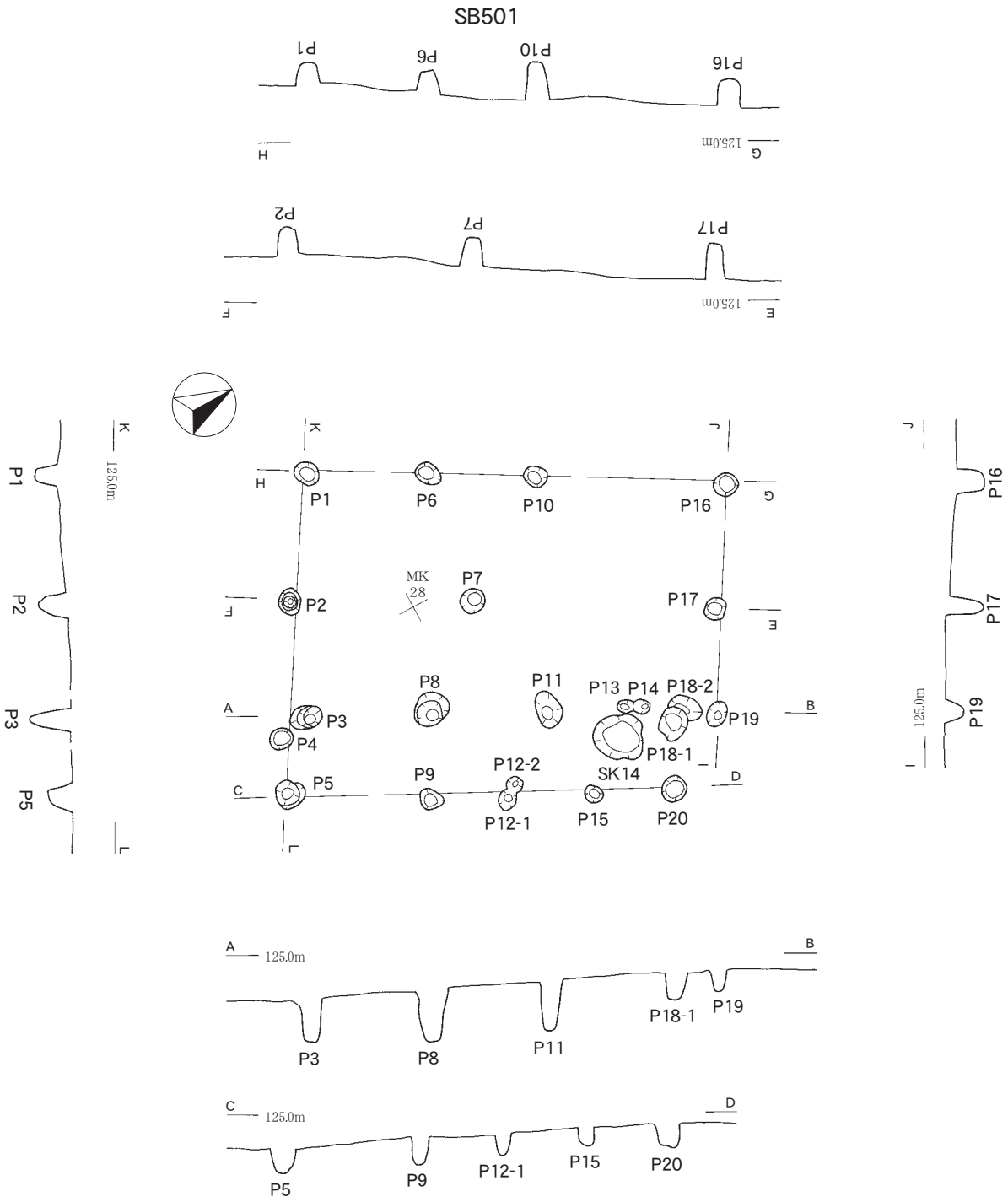
挿図番号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚み(㎜)	重量(g)	備考
S1	SI1105	覆土～掘削痕	石錐	珪質頁岩	41.1	15.5	6.9	2.5	
S2	SI1105	覆土～掘削痕	石箆	頁岩	73.4	32.3	17.4	45.3	
S3	SI1105	覆土～掘削痕	スクレイパー	頁岩	64.7	25.8	10.4	16.6	
S4	SI1105	覆土～掘削痕	スクレイパー	珪質頁岩	67.4	37.2	20.1	40.5	
S5	SI1105	覆土～掘削痕	スクレイパー	頁岩	73.2	30.8	17.2	33.7	
S6	SI1105	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	56.7	38.3	12.9	21.4	
S7	SI1105	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	36.6	46.3	9.5	13.8	
S8	SI1105	覆土～掘削痕	UF	珪質頁岩	45.4	19.7	10.0	4.3	
S9	SI1105	覆土～掘削痕	RF	頁岩	39.0	54.2	14.7	18.2	石匙か
S10	SI1105	覆土～掘削痕	磨石	輝石安山岩	142.0	55.0	41.0	549.6	
S11	SI2158	覆土～掘削痕	スクレイパー	珪質頁岩	40.4	25.8	9.6	8.5	石鏃未製品か
S12	SI2158	覆土～掘削痕	スクレイパー	頁岩	44.1	26.2	13.5	12.7	
S13	SI2158	覆土～掘削痕	スクレイパー	頁岩	65.1	37.8	14.1	28.8	尖頭器未製品か
S14	SI2158	覆土～掘削痕	石匙	珪質頁岩	41.7	53.4	11.1	15.3	
S15	SI2158	覆土～掘削痕	スクレイパー	珪質頁岩	36.0	29.1	12.0	7.2	
S16	SI2158	覆土～掘削痕	スクレイパー	頁岩	53.2	66.0	14.6	33.3	縁辺が不規則剥離に覆われた剥片断片。使用痕なし。
S17	SI2158	覆土～掘削痕	RF	頁岩	39.0	31.1	10.6	9.8	
S18	SI2158	覆土～掘削痕	UF	珪質頁岩	73.7	62.2	16.3	58.4	
S19	SI1229	覆土～掘削痕	RF	珪質頁岩	45.2	24.7	9.1	8.2	石鏃未製品
S20	SI1229	覆土～掘削痕	剥片	頁岩	56.3	86.6	19.0	61.5	
S21	SI2001	覆土～掘削痕	RF	頁岩	44.7	31.6	9.1	12.5	石鏃未製品か
S22	SI2001	覆土～掘削痕	円盤状石製品	凝灰岩	46.0	42.0	11.0	21.7	
S23	SI2001	覆土～掘削痕	円盤状石製品	流紋岩質凝灰岩	35.5	33.0	6.0	6.2	
S24	SI2005	覆土～掘削痕	スクレイパー	頁岩	52.2	65.5	21.3	63.4	
S25	SI2005	覆土～掘削痕	剥片	黒色頁岩	54.2	32.1	19.6	21.7	
S26	SI2005	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	82.2	52.7	17.6	49.5	
S27	SI2005	覆土～掘削痕	スクレイパー	珪質頁岩	61.4	35.6	12.3	23.7	右側辺の裏面側に使用痕光沢顕著
S28	SI2005	覆土～掘削痕	UF	珪質頁岩	35.2	55.5	17.8	24.9	
S29	SI2005	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	83.0	45.3	22.9	54.6	
S30	SI2005	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	14.8	38.2	9.2	4.7	被熱
S31	SI2005	覆土～掘削痕	磨製石斧	砂質凝灰岩	50.5	38.0	25.0	56.6	
S32	SI2005	覆土～掘削痕	磨製石斧	角閃石輝石安山岩	95.0	45.0	26.0	163.8	
S33	SI2005	覆土～掘削痕	石錘	安山岩	66.4	62.1	23.7	132.3	
S34	SI2005	覆土～掘削痕	石錘	凝灰岩	107.6	125.6	30.1	518.7	
S35	SI2005	覆土～掘削痕	凹石	安山岩	124.0	89.0	45.0	733.0	
S36	SI2005	覆土～掘削痕	球状石製品	流紋岩質凝灰岩	51.0	52.0	37.0	110.9	
S37	SI2025	掘削痕	石鏃	珪質頁岩	27.2	15.2	6.0	2.1	
S38	SI2042	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	48.1	27.5	14.2	9.0	
S39	SI2042	覆土～掘削痕	UF	黒色頁岩	37.1	41.6	11.0	12.5	
S40	SI2042	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	27.8	21.8	8.7	4.3	
S41	SI2042	覆土～掘削痕	凹石	輝石安山岩	88.0	62.0	41.0	296.8	
S42	SI2042	覆土～掘削痕	磨製石斧	閃緑岩	55.0	37.0	21.0	60.0	
S43	SI2134	覆土～床直	石鏃	珪質頁岩	24.6	15.8	2.8	0.6	アスファルト付着
S44	SI2134	覆土～床直	スクレイパー	珪質頁岩	48.7	21.4	13.4	13.8	
S45	SI2134	覆土～床直	スクレイパー	珪質頁岩	60.5	62.6	17.7	38.9	
S46	SI2228	床直～掘削痕	UF	珪質頁岩	33.6	26.2	14.6	9.4	
S47	SI2228	床直～掘削痕	スクレイパー	珪質頁岩	28.6	67.3	8.9	14.9	
S48	SI2228	床直～掘削痕	UF	珪質頁岩	49.3	61.4	12.5	17.0	
S49	SI2303	床直～掘削痕	石錐	頁岩	44.0	18.8	8.1	4.5	
S50	SI2338	床直～掘削痕	石匙	頁岩	62.2	56.0	12.9	30.0	
S51	SI2344	覆土～床直	スクレイパー	珪質頁岩	48.3	65.7	11.3	27.9	
S52	SI2344	覆土～床直	有孔石製品	流紋岩質凝灰岩	49.0	47.0	35.5	66.2	
S53	SI2344	覆土～床直	円盤状石製品	流紋岩質凝灰岩	50.0	52.0	11.5	20.4	
S54	SI2344	覆土～床直	凹石	安山岩	117.0	102.0	52.0	919.0	表裏面磨面
S55	SI2344	覆土～床直	凹石	輝石安山岩	95.0	69.0	35.0	358.0	表裏面磨面
S56	SI2344	覆土～床直	凹石	輝石安山岩	116.0	69.0	52.0	601.0	
S57	SI2374	覆土～掘削痕	スクレイパー	珪質頁岩	25.5	45.7	10.7	5.8	
S58	SI2374	覆土～掘削痕	スクレイパー	黒色頁岩	37.6	38.3	10.6	9.1	
S59	SI2374	覆土～掘削痕	石鏃	珪質頁岩	26.5	15.6	4.7	1.3	
S60	SI2374	覆土～掘削痕	円盤状石製品	流紋岩質凝灰岩	66.0	63.5	14.0	57.4	
S61	SI2374	覆土～掘削痕	凹石	安山岩	91.5	71.0	37.5	267.6	
S62	SI2370	掘削痕	敲石	輝石安山岩	90.0	72.0	51.0	467.2	
S63	SI2376	覆土～掘削痕	石匙	珪質頁岩	34.5	18.3	3.7	1.6	
S64	SI2376	覆土～掘削痕	円盤状石製品	流紋岩質凝灰岩	35.0	32.0	6.5	7.0	
S65	SI2376	覆土～掘削痕	凹石	輝石安山岩	94.5	82.0	52.5	594.5	表裏面磨面

第６表　石器・石製品観察表(２)

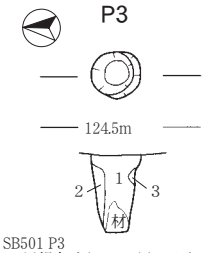
挿図番号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚み(㎜)	重量(g)	備考
S66	SI2381	掘削痕	円盤状石製品	緑色凝灰岩	56.5	56.0	11.5	39.5	
S67	SI2381	掘削痕	円盤状石製品	緑色凝灰岩	46.0	47.0	10.0	27.6	
S68	SI2381	掘削痕	UF	珪質頁岩	23.1	18.9	9.6	3.3	
S69	SQN2018	覆土	石錐	頁岩	47.0	44.1	10.4	15.2	
S70	SK1012	覆土	磨石	凝灰岩	154.0	124.0	42.0	1086.0	円盤状石製品未製品か
S71	SK2030	覆土	スクレイパー	珪質頁岩	45.5	59.6	16.5	40.5	
S72	SK2030	覆土	スクレイパー	珪質頁岩	35.1	37.8	8.8	10.6	
S73	SK2030	覆土	UF	珪質頁岩	23.9	29.6	7.1	4.8	
S74	SK2030	覆土	凹石	輝石安山岩	100.5	74.0	50.0	512.4	表裏面磨面
S75	SK2032	覆土	RF	頁岩	25.6	11.6	5.4	1.7	石鏃未製品
S76	SK2214	覆土	石錐	珪質頁岩	26.1	15.5	7.3	2.2	
S77	SK2142	覆土	石匙	珪質頁岩	45.3	26.6	6.5	5.9	
S78	SK2240	覆土	スクレイパー	珪質頁岩	18.6	28.2	5.3	2.7	
S79	SK2227	覆土	スクレイパー	珪質頁岩	27.9	36.2	9.3	8.6	
S80	SK2316	覆土	石錐	頁岩	41.9	29.2	17.3	9.6	
S81	SK2339	覆土	UF	頁岩	41.5	46.7	12.1	12.8	
S82	SK2340	覆土	スクレイパー	珪質頁岩	22.6	26.8	5.0	2.5	
S83	SK2373	覆土	石鏃	珪質頁岩	34.2	14.1	4.6	1.1	アスファルト付着
S84	SKP1204	覆土	石鏃	珪質頁岩	41.7	12.2	4.7	1.8	アスファルト付着
S85	SKP2115	覆土	石鏃	珪質頁岩	23.5	13.4	2.9	0.5	被熱
S86	SKP2397	覆土	磨製石斧	変質凝灰岩	81.0	41.0	21.0	121.6	
S87	SKP2282	覆土	円盤状石製品	流紋岩質凝灰岩	46.5	26.0	9.5	11.8	
S88	LO72	②Ⅳ	石鏃	めのう	18.1	13.9	2.6	0.4	
S89	LO67	②Ⅳ	石鏃	珪質頁岩	19.6	13.9	3.1	0.5	
S90	LO70	②Ⅸ	石鏃	めのう	22.2	17.0	2.8	0.6	
S91	LI63	②Ⅶ	石鏃	めのう	23.2	14.8	2.6	0.5	
S92	KS73	②Ⅶ	石鏃	珪質頁岩	28.3	18.8	2.4	0.6	アスファルト付着
S93	MM40	①Ⅲ	石鏃	頁岩	20.1	16.1	3.8	0.9	
S94	MB61	①Ⅶ	石鏃	頁岩	35.1	15.7	4.9	1.8	
S95	ML44	①Ⅶ	石鏃	珪質頁岩	39.1	18.1	5.2	2.4	
S96	LB74	③Ⅱ～Ⅴ	石鏃	珪質頁岩	49.0	24.4	8.6	5.8	
S97	LI63	②Ⅶ	石鏃	頁岩	30.9	16.1	4.4	1.6	
S98	MK42	①Ⅶ	石鏃	珪質頁岩	29.3	13.8	4.8	1.5	
S99	LO71	②Ⅳ	石鏃	珪質頁岩	27.0	15.3	3.9	0.9	
S100	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	石鏃	頁岩	30.5	14.4	7.4	2.5	
S101	KT71	②Ⅶ	石鏃	珪質頁岩	33.8	13.1	7.7	3.3	
S102	LS57	①Ⅶ	石鏃	頁岩	40.9	12.8	5.3	1.9	
S103	LO74	②Ⅶ	石鏃	珪質頁岩	37.5	12.8	7.8	3.1	アスファルト付着
S104	LH72	②Ⅶ	石鏃	珪質頁岩	32.2	14.1	4.5	1.5	
S105	LS57	①Ⅵ	RF	頁岩	111.8	49.8	23.4	112.8	尖頭器未製品
S106	MD65	①Ⅲ	尖頭器	珪質頁岩	136.8	35.0	14.9	58.6	
S107	LI66	②Ⅶ	石錐	頁岩	28.0	25.1	9.2	3.9	
S108	LC76	③Ⅱ～Ⅴ	石錐	頁岩	47.2	31.7	10.2	8.9	
S109	MG48	①Ⅵ	石錐	頁岩	78.5	47.8	20.5	55.0	
S110	LQ53	カクラン	石匙	頁岩	74.7	37.1	11.3	16.7	
S111	LH77	③Ⅱ～Ⅴ	石匙	珪質頁岩	51.7	34.2	7.7	10.3	
S112	LS71	②Ⅳ	石匙	頁岩	59.0	20.8	6.8	7.4	
S113	LG77	③Ⅱ～Ⅴ	石匙	珪質頁岩	45.0	29.8	7.2	6.9	
S114	MK47	①Ⅶ	石匙	珪質頁岩	88.5	23.0	14.3	20.5	
S115	範確		石匙	珪質頁岩	72.0	42.5	8.0	19.4	38トレンチ
S116	MG63	①Ⅶ	石匙	珪質頁岩	69.9	29.1	8.4	16.8	
S117	LP54	①Ⅵ	石匙	珪質頁岩	69.9	31.5	7.5	9.4	
S118	KJ63	④Ⅱ	石匙	珪質頁岩	59.2	49.1	7.2	13.2	
S119	LH62	②Ⅳ	石匙	珪質頁岩	56.6	44.8	9.4	17.1	
S120	LP70	②Ⅶ	石匙	頁岩	71.3	64.3	14.4	48.5	
S121	MA71	②Ⅳ	石篦	頁岩	83.1	31.7	12.0	29.8	
S122	LD75	③Ⅱ～Ⅴ	石篦	黒色頁岩	89.8	39.6	15.6	54.5	
S123	LH72	②Ⅶ	石篦	頁岩	50.8	33.9	16.8	27.9	
S124	LR72		石篦	頁岩	76.8	41.0	16.1	41.5	
S125	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	石篦	頁岩	77.2	31.6	18.4	36.4	
S126	LQ71	②Ⅶ	石篦	頁岩	67.2	37.8	14.1	43.9	
S127	MG63	①Ⅶ	石篦	珪質頁岩	62.1	35.5	12.4	32.0	
S128	MD64	①Ⅶ	石篦	頁岩	68.2	36.3	14.1	35.3	
S129	MB62	カクラン	石篦	頁岩	89.4	34.9	15.5	45.2	
S130	MA64	①Ⅲ	石篦	頁岩	70.0	40.9	12.7	38.8	
S131	LP54	①Ⅵ	石篦	珪質頁岩	78.3	36.4	17.7	50.3	
S132	MN35	①Ⅲ	石篦	頁岩	81.8	41.6	14.3	41.7	
S133	ME49	①Ⅵ	石篦	頁岩	85.5	51.3	15.9	69.4	

第６表　石器・石製品観察表(３)

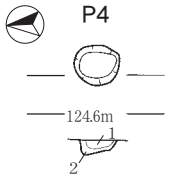
挿図番号	出土位置	層位	器種	石材	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚み(㎜)	重量(g)	備考
S134	MH49	①Ⅲ	石篦	頁岩	82.8	45.8	18.6	58.4	
S135	LJ66	②Ⅶ	石篦	黒色頁岩	74.6	28.7	11.0	25.2	
S136	MG50	①Ⅵ	石篦	頁岩	122.3	59.3	28.3	157.2	未製品か
S137	MA63	①Ⅶ	石篦	黒色頁岩	112.0	51.6	26.5	128.7	未製品か
S138	MG56	①Ⅵ	スクレイパー	頁岩	41.9	26.9	11.8	15.2	
S139	LD66	②Ⅶ	スクレイパー	珪質頁岩	39.8	34.2	13.3	18.8	
S140	MC66	②Ⅳ	スクレイパー	黒色頁岩	41.7	33.4	12.9	21.4	
S141	LL66		スクレイパー	頁岩	57.0	44.6	16.6	39.1	
S142	KI64		スクレイパー	珪質頁岩	19.6	17.1	7.0	1.8	
S143	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	黒色頁岩	24.9	28.8	7.3	4.7	被熱
S144	LH76	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	珪質頁岩	36.2	33.0	11.1	10.0	
S145	LM75	②Ⅶ	スクレイパー	頁岩	39.8	38.0	12.0	16.5	
S146	KI64		スクレイパー	珪質頁岩	54.5	34.0	14.0	23.8	
S147	LG71	③Ⅶ	スクレイパー	珪質頁岩	43.6	65.5	15.5	32.2	
S148	KE60	④Ⅱ	スクレイパー	黒色頁岩	76.3	47.6	8.5	22.5	
S149	LO75	②Ⅶ	スクレイパー	珪質頁岩	31.1	21.6	4.3	2.8	
S150	LT71	②Ⅳ	スクレイパー	珪質頁岩	50.9	26.9	12.6	14.8	
S151	LT70	②Ⅶ	スクレイパー	珪質頁岩	44.6	30.2	7.7	9.5	
S152	MC61	①Ⅵ	スクレイパー	頁岩	48.0	29.6	10.5	14.5	
S153	MB43	①Ⅲ	スクレイパー	頁岩	79.9	61.1	23.2	75.2	
S154	LE75	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	珪質頁岩	97.0	57.6	15.8	72.9	
S155	LB75	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	珪質頁岩	114.2	41.1	17.2	65.8	
S156	KS75	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	めのう	54.4	66.8	16.8	49.9	
S157	KF60	①Ⅶ	スクレイパー	珪質頁岩	29.1	49.5	8.2	8.8	
S158	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	珪質頁岩	64.5	47.6	14.0	36.0	
S159	LN74	②Ⅶ	スクレイパー	珪質頁岩	95.1	55.4	17.7	85.2	
S160	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	珪質頁岩	71.8	50.3	23.9	54.2	
S161	LE76	③Ⅱ～Ⅴ	スクレイパー	珪質頁岩	51.2	75.2	21.3	59.9	
S162	LH71	②Ⅶ～Ⅸ	石核	珪質頁岩	58.5	44.0	34.0	93.6	
S163	LB68	②Ⅶ	石核	珪質頁岩	71.0	64.0	36.0	168.4	
S164	LQ70	②Ⅶ	磨製石斧	珪質頁岩	22.5	13.0	4.0	2.2	
S165	LP70	②Ⅶ	磨製石斧	安山岩	46.5	13.0	7.0	7.4	
S166	LI63	②Ⅶ～Ⅸ	磨製石斧	凝灰岩	75.0	58.0	33.0	210.2	
S167	範確		磨製石斧	砂岩	89.5	35.0	21.0	105.8	32トレンチ
S168	表採		磨製石斧	変質安山岩	96.0	46.0	21.0	160.0	
S169	KE61	④Ⅲ	磨製石斧	輝緑岩	78.0	35.5	15.5	59.8	
S170	排土		磨製石斧	角閃石輝石安山岩	116.0	51.0	26.5	216.8	
S171	範確		磨製石斧	石英閃緑岩	95.0	48.0	30.0	219.8	29トレンチ
S172	LP68	②Ⅳ	石錘	黒色頁岩	70.6	36.4	12.9	47.6	
S173	LF76	③Ⅱ～Ⅴ	石錘	凝灰岩	78.6	65.4	25.4	133.0	
S174	MA63	カクラン	石錘	玄武岩	97.8	103.5	26.7	255.0	
S175	KR72	②Ⅶ	磨石	輝石安山岩	71.0	60.0	33.0	217.4	
S176	KR72	②Ⅶ	敲石	輝石安山岩	80.5	64.0	30.5	229.8	
S177	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	凹石	輝石安山岩	120.0	47.0	28.0	210.4	
S178	KP71	②Ⅶ	凹石	輝石安山岩	109.0	83.0	52.5	534.8	
S179	KJ64	③Ⅰ	石皿	角閃石輝石安山岩	372.0	257.0	95.0	1250.0	
S180	MM35	①Ⅲ	有孔石製品	デイサイト	59.0	58.5	46.0	176.8	
S181	KS73	③Ⅱ～Ⅴ	有孔石製品	凝灰岩	57.0	57.0	40.0	90.4	
S182	LO68	②Ⅶ～Ⅸ	円盤状石製品	凝灰岩	36.0	34.5	6.5	8.8	
S183	LI64		円盤状石製品	凝灰質砂岩	54.5	58.0	10.5	27.6	
S184	LL66	②Ⅶ～Ⅸ	円盤状石製品	凝灰岩	36.0	34.0	9.0	8.4	
S185	LJ64	②Ⅶ～Ⅸ	円盤状石製品	変質流紋岩	51.0	49.0	12.0	27.4	
S186	LE72	②Ⅶ	円盤状石製品	砂質凝灰岩	48.0	45.0	13.0	29.0	
S187	KT75	③Ⅱ～Ⅴ	円盤状石製品	凝灰質砂岩	49.0	48.5	10.0	35.6	
S188	LO70	②Ⅶ～Ⅸ	円盤状石製品	凝灰質砂岩	66.5	66.0	15.0	63.2	
S189	KQ71	②Ⅶ	球状石製品	輝石安山岩	50.0	51.0	47.0	152.0	
S190	LS72	②Ⅳ	球状石製品	流紋岩質凝灰岩	39.5	38.0	36.0	48.4	
S191	KT73	③Ⅱ～Ⅴ	碗形石製品	凝灰岩	55.0	42.5	10.0	19.2	
S192	排土		岩版	珪質頁岩	41.0	36.0	9.0	14.6	
S193	LD77	③Ⅱ～Ⅴ	石皿状石製品	砂質凝灰岩	65.0	57.0	14.0	45.6	
S194	排土		岩版	流紋岩質凝灰岩	32.0	34.0	13.0	16.4	
S195	LG74	③Ⅱ～Ⅴ	有孔石製品	凝灰岩	50.0	29.0	20.0	13.8	



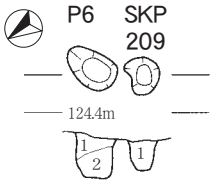
第145図　ＳＢ501掘立柱建物跡（１）



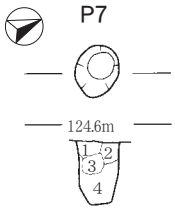
SB501 P3
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　粘性強　しまりやや強
　混入炭化粒微量
　地山粒微量
2　1層土に類似
　混入黒褐色土塊
　(φ20～40㎜)20%
　地山塊(φ50～70㎜)20%
3　1層土に類似　細砂
　混入地山土70%



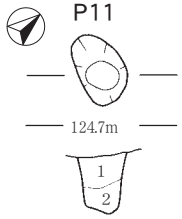
SB501 P4
1　黒褐色土(10YR2/3)
　シルト～微細砂
　粘性強　しまりやや強
　混入炭化物(φ1～2㎜)2%
　地山土5%
2　暗褐色土(10YR3/4)細砂
　地山土
　混入1層土少量
　炭化物(φ0.5～1㎜)1%



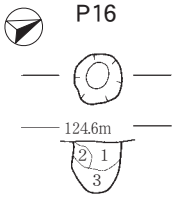
SB501 P6
1　黒褐色土(10YR2/1)シルト
　粘性やや強　しまり弱
　混入炭化物(φ0.5～1㎜)1%
　地山粒微量
2　黒褐色土(10YR2/2)
　シルト～細砂
　粘性やや強　しまり弱
　混入1層土ブロック(φ10㎜)5%
　炭化物(φ5㎜)5%　地山粒3%
SKP209
1　黒褐色土(10YR2/1)シルト
　粘性やや強　しまりやや弱
　混入炭化物微量　地山粒5%



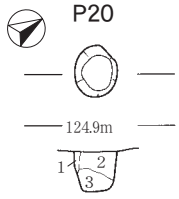
SB501 P7
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　粘性やや強　しまり強
　混入炭化物(φ2～5㎜)1%
2　暗褐色土(10YR3/4)細砂
　粘性弱　しまり極強
　混入1層土10%
　炭化粒微量
3　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　粘性やや強　しまり極弱
　混入炭化物(φ2～5㎜)1%
4　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　粘性やや強　しまり極強



SB501 P11
1　黒褐色土(10YR2/1)シルト
　粘性やや強　しまり弱
　混入炭化物(φ0.5～1㎜)1%
　地山粒1%
2　黒褐色土(10YR3/1)
　シルト～微細砂
　粘性弱　しまり強
　混入地山土50%

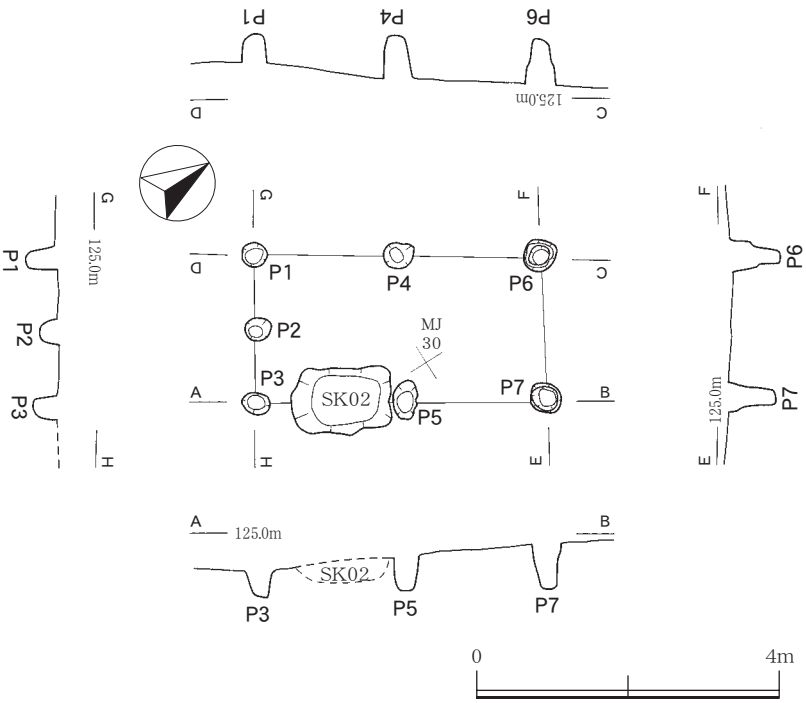


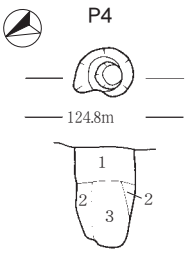
SB501 P16
1　黒褐色土(10YR2/3)
　シルト～微細砂
　粘性やや強　しまりやや弱
　混入地山粒20%
2　暗褐色土(10YR3/4)細砂
　地山土
　粘性極弱　しまり強
　1層土塊(φ10～20㎜)20%
3　黒色土(10YR2/1)シルト
　粘性やや強　しまり弱
　混入地山塊(φ10～30㎜)5%



SB501 P20
1　2層土＋地山粒40%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　粘性強　しまりやや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)2%
　地山塊(φ10～20㎜)5%
3　2層土に類似
　混入地山塊15%

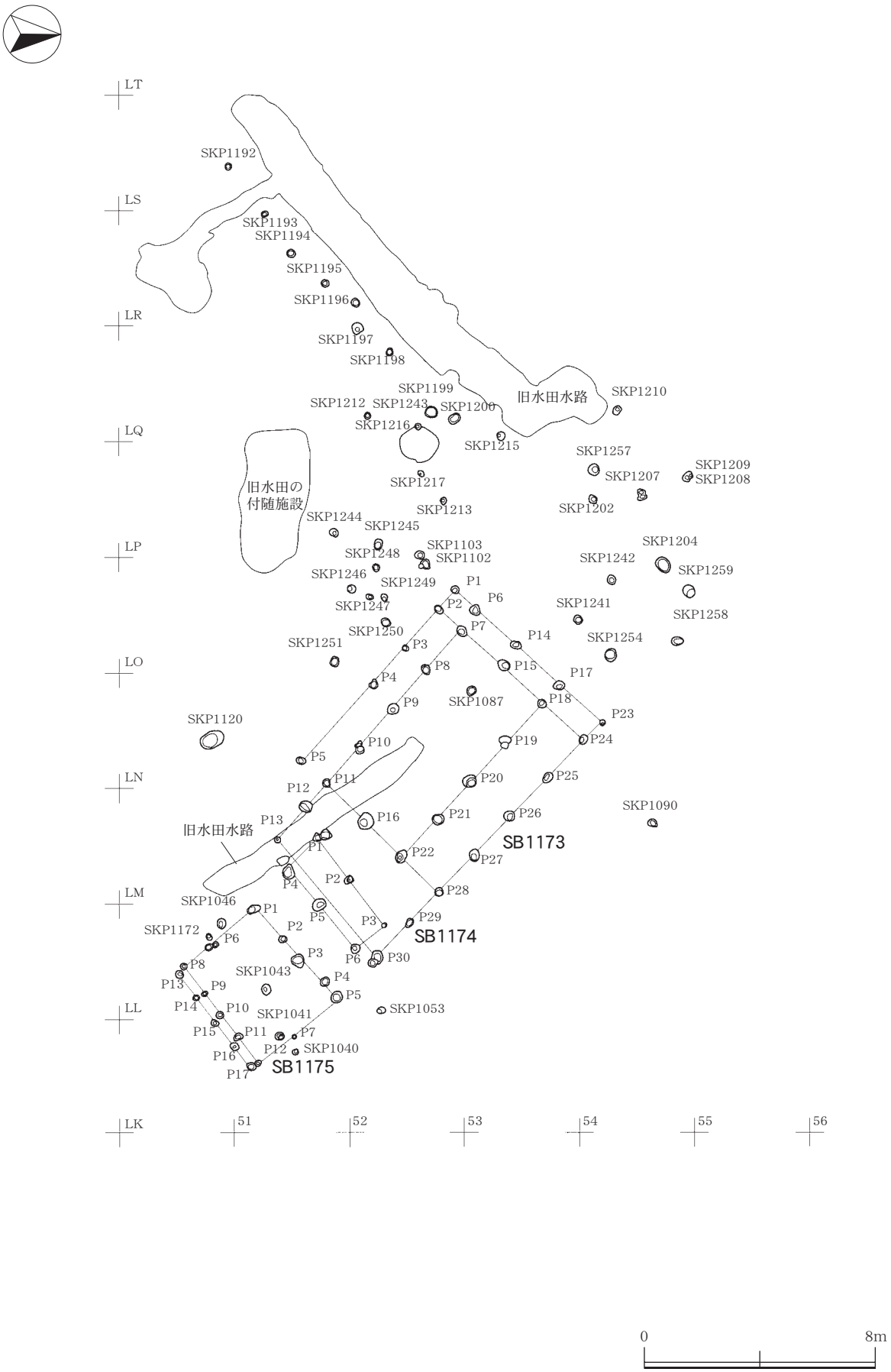
SB502



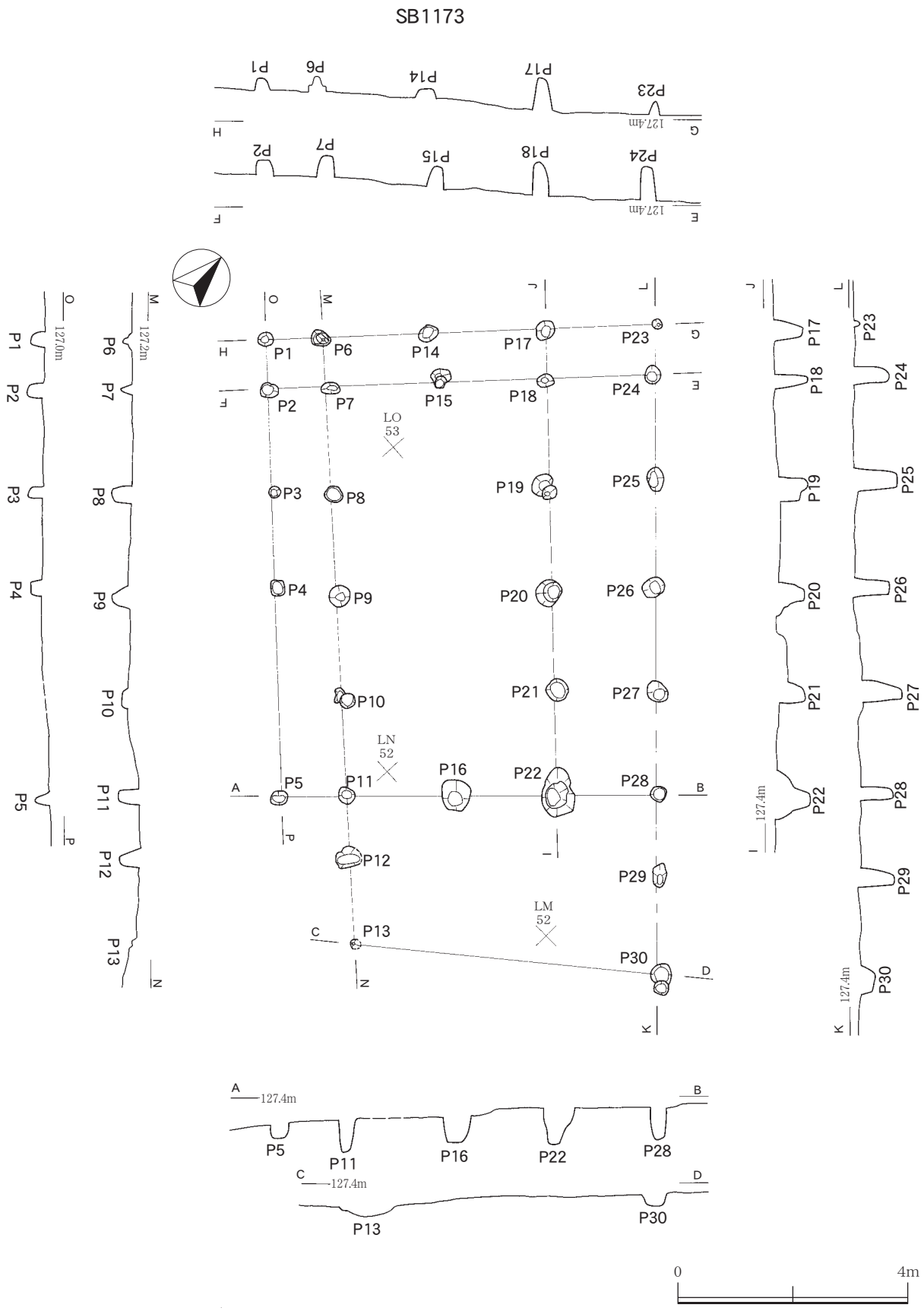


SB502 P4
1　黒褐色土(10YR2/3)
　シルト～細砂
　粘性弱　しまり強
　混入地山塊(φ30～50㎜)多量
　炭化物(φ0.5～2㎜)1%
2　1層土に類似
　混入地山塊50%
3　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　粘性強　しまりやや弱
　混入地山粒5%
　炭化物(φ0.5～5㎜)1%

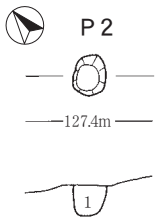
第146図　ＳＢ501掘立柱建物跡(２)／ＳＢ502掘立柱建物跡



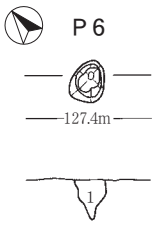
第147図　柱穴様ピット配置図(ＬＫ～ＬＴ・50～56区)



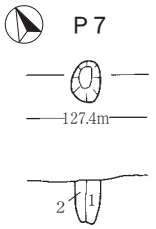
第148図　ＳＢ1173掘立柱建物跡(１)



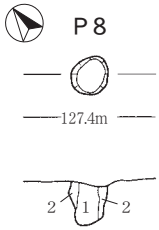
SB1173 P2
1　黒色土(10YR2/1)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物(φ7～13㎜)1%
　地山塊(φ50㎜)1%



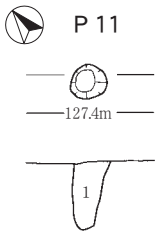
SB1173 P6
1　黒色土(10YR2/2)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山塊(φ7～10㎜)1%



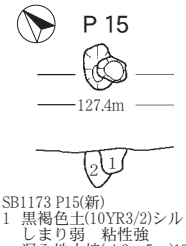
SB1173 P7
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山塊(φ5～20㎜)5%
2　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山塊(φ5～20㎜)3%



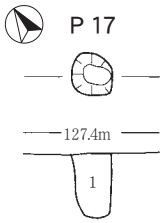
SB1173 P8
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入地山塊(φ10㎜)1%
2　暗褐色土(10YR3/3)シルト
　しまり弱　粘性やや強



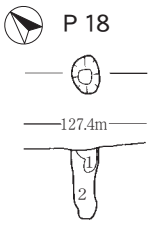
SB1173 P11
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ5～20㎜)1%
　地山塊(φ10～30㎜)2%



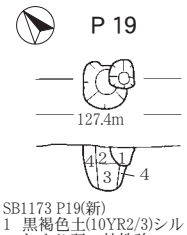
SB1173 P15(新)
1　黒褐色土(10YR3/2)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入地山塊(φ3～5㎜)1%
　炭化物(φ12～15㎜)1%
SB1173 P15(旧)
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山塊(φ3～10㎜)7%
　炭化物(φ20㎜)1%



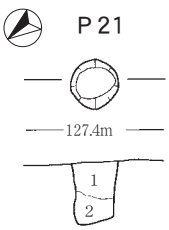
SB1173 P17
1　灰黄褐色土(10YR4/2)シルト
　しまり弱　粘性やや弱
　混入地山塊(φ20～30㎜)5%
　炭化物(φ5～10㎜)



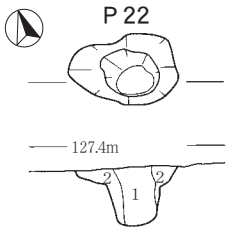
SB1173 P18
1　暗褐色土(10YR3/3)
　シルト～細砂
　しまり弱　粘性強
　混入炭化物
2　暗褐色土(10YR3/3)シルト
　しまり強　粘性強



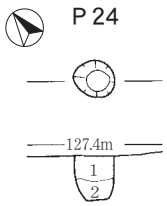
SB1173 P19(新)
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入地山塊(φ5～15㎜)20%
　炭化物(φ1～5㎜)3%
SB1173 P19(旧)
2　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入地山塊(φ1～5㎜)5%
　炭化物(φ5～20㎜)15%
3　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入地山塊(φ1～5㎜)2%
　炭化物(φ5㎜)5%
4　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入地山塊(φ5㎜)10%



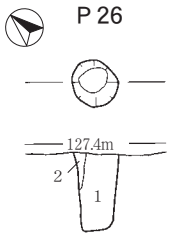
SB1173 P21
1　黒色土(10YR2/1)シルト
　しまり弱　粘性やや強
　混入地山塊(φ5～65㎜)15%
2　黒褐色土(10YR3/2)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入地山塊(φ7～65㎜)40%



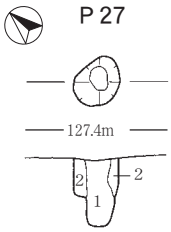
SB1173 P22
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入炭化物　地山土10%
2　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり強　粘性強
　混入地山土60%(斑状)



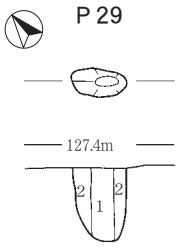
SB1173 P24
1　暗褐色土(10YR3/4)
　シルト～細砂
　しまり中　粘性弱
　混入炭化物
2　暗褐色土(10YR3/3)
　シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　混入炭化物



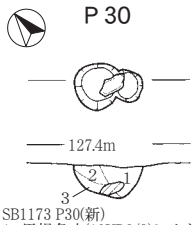
SB1173 P26
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまり強　粘性弱
　混入炭化物(φ3～8㎜)1%
　地山塊(φ5～60㎜)15%
2　褐色土(10YR4/6)シルト
　しまり強　粘性強



SB1173 P27
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまり弱　粘性弱
　混入炭化物(φ5～20㎜)2%
2　褐色土(10YR4/4)シルト
　しまりやや弱　粘性やや強

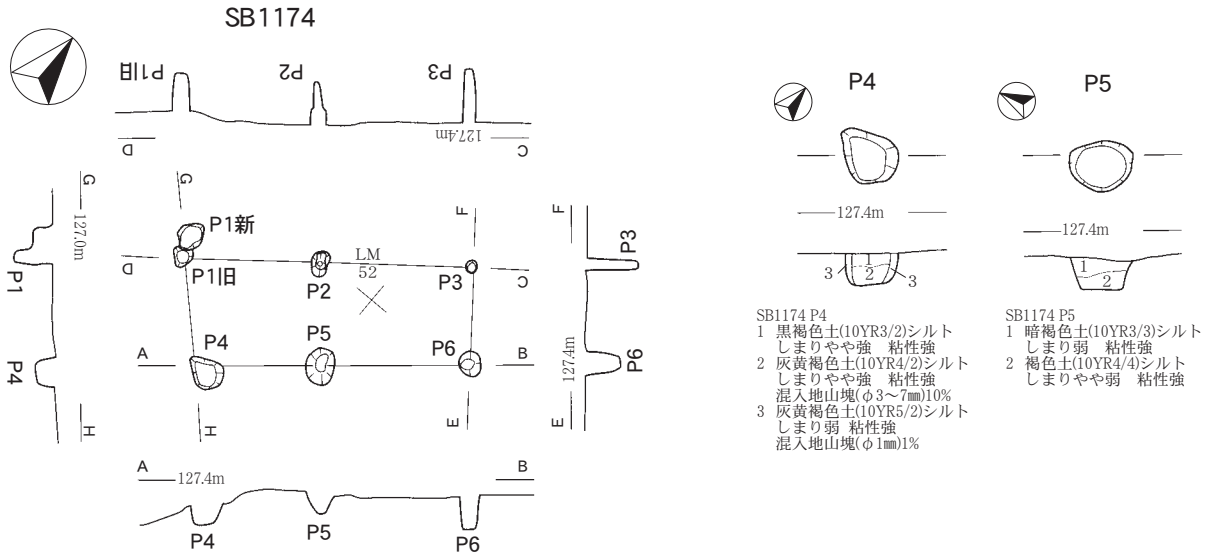


SB1173 P29
1　黒色土(10YR2/1)
　シルト～細砂
　しまり中　粘性強
　混入炭化物
2　褐色土(10YR4/4)シルト
　しまりやや強　粘性強
　混入黒色土



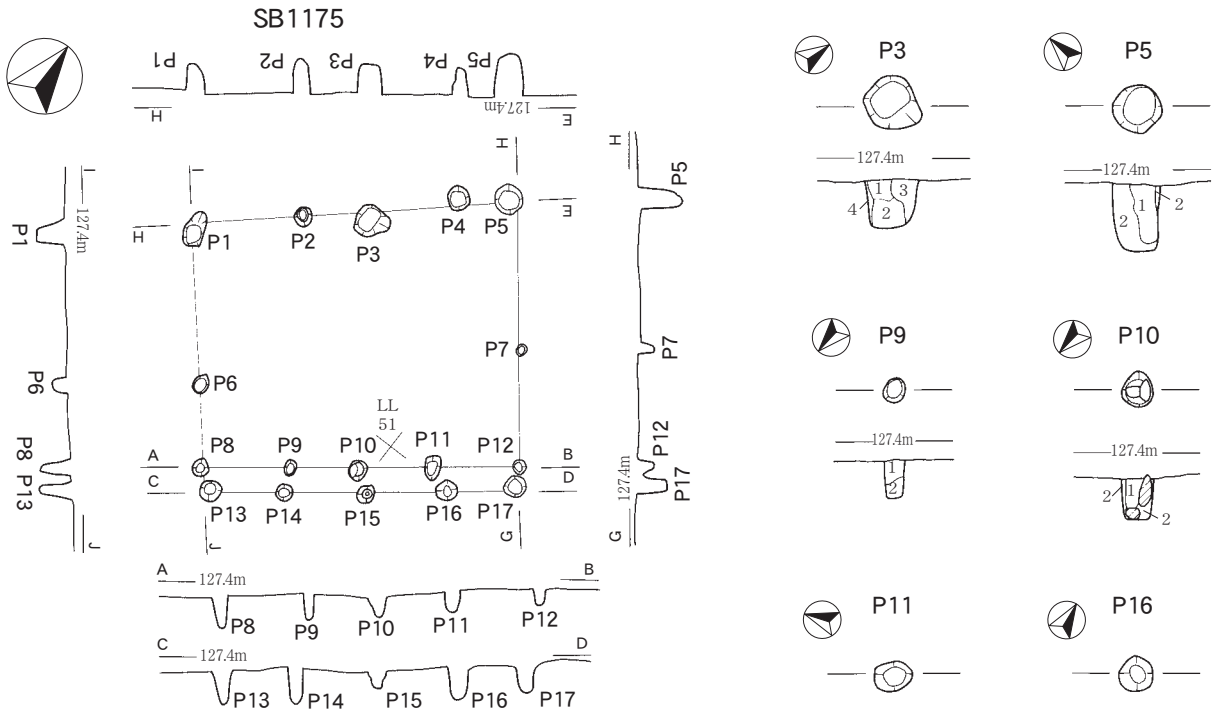
SB1173 P30(新)
1　黒褐色土(10YR2/3)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山塊(φ1～10㎜)30%
SB1173 P30(旧)
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまり弱　粘性強
　混入炭化物(φ1～5㎜)10%
　地山塊(φ1～5㎜)5%
3　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまり中　粘性強
　混入地山塊(φ1～5㎜)3%

第149図　ＳＢ1173掘立柱建物跡(２)



SB1174 P4
1　黒褐色土(10YR3/2)シルト　しまりやや強　粘性強
2　灰黄褐色土(10YR4/2)シルト　しまりやや強　粘性強　混入地山塊(φ3～7㎜)10%
3　灰黄褐色土(10YR5/2)シルト　しまり弱　粘性強　混入地山塊(φ1㎜)1%

SB1174 P5
1　暗褐色土(10YR3/3)シルト　しまり弱　粘性強
2　褐色土(10YR4/4)シルト　しまりやや弱　粘性強



SB1175 P3
1　黒褐色土(10YR3/1)シルト　しまり弱　粘性強　混入炭化物(φ3～12㎜)5%　地山塊(φ3～7㎜)1%
2　にぶい黄橙色土(10YR5/3)シルト　しまりやや弱　粘性強　混入炭化物(φ15～30㎜)15%
3　にぶい黄橙色土(10YR7/2)シルト　しまり弱　粘性強
4　にぶい黄橙色土(10YR6/3)シルト～粘土　しまり弱　粘性強

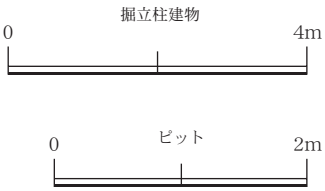
SB1175 P5
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂　しまりやや弱　粘性やや強　混入地山土塊(φ10～20㎜)10%
2　黒褐色土(10YR2/3)シルト～細砂　しまりやや強　粘性やや弱　混入炭化物(φ1～5㎜)3%　地山土塊(φ10～20㎜)20%

SB1175 P9
1　黒色土(10YR2/1)シルト　しまり弱　粘性やや強　混入炭化物(φ3～5㎜)40%
2　黒褐色土(10YR3/1)シルト　しまりやや弱　粘性強　混入炭化物(φ5～15㎜)1%

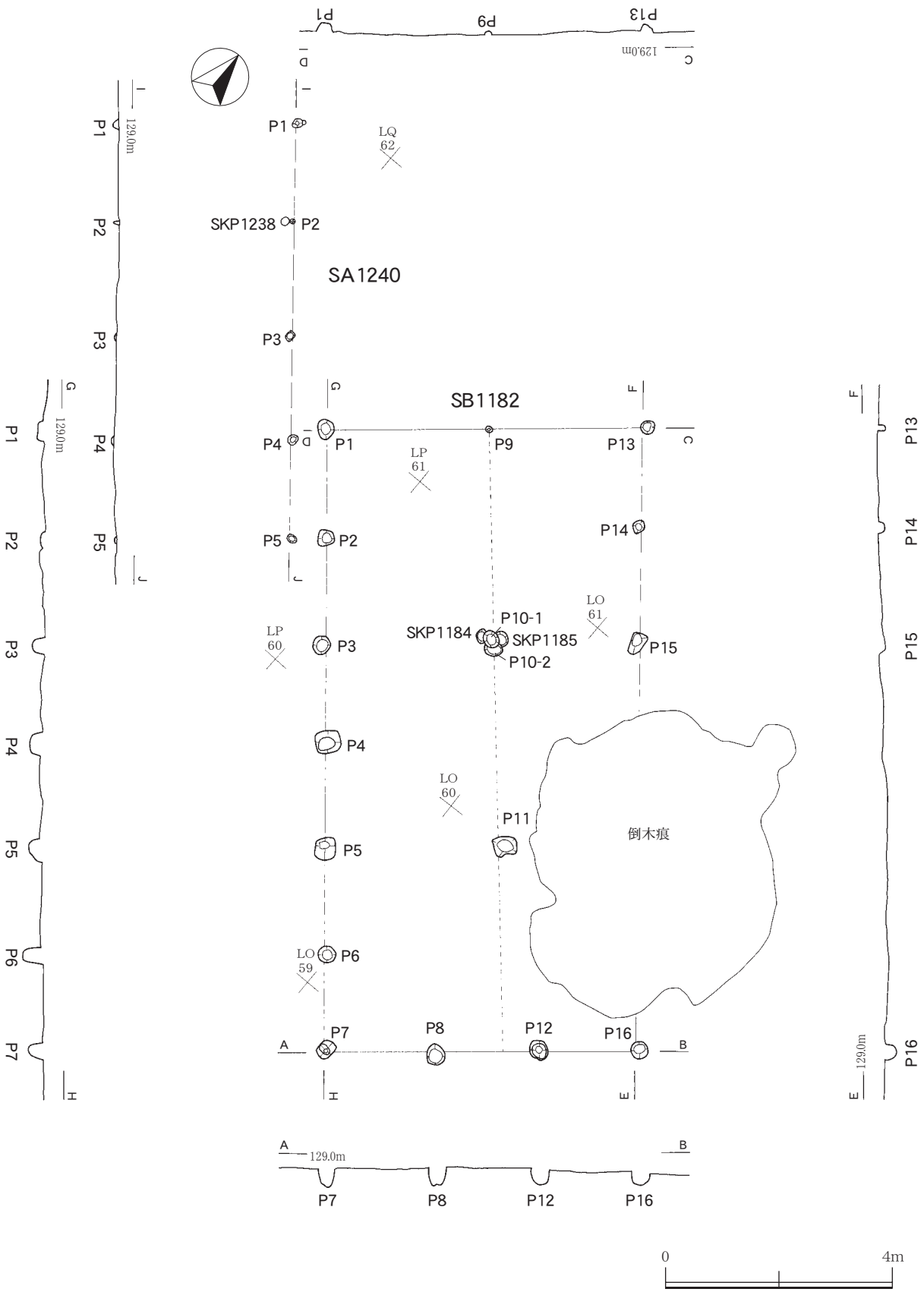
SB1175 P10
1　黒褐色土(10YR3/1)シルト～細砂　しまりやや弱　粘性弱
2　黒褐色土(10YR1.7/1)シルト～細砂　しまりやや弱　粘性やや弱　混入炭化物(φ5～10㎜)20%

SB1175 P11
1　黒褐色土(10YR3/1)シルト　しまりやや弱　粘性やや強　混入炭化物(φ10～30㎜)70%
2　褐灰色土(10YR5/1)シルト　しまり強　粘性やや弱　混入炭化物30%　オリーブ灰色粘土(φ20～40㎜)20%
3　オリーブ灰色土(10Y6/2)シルト～粘土　しまりやや弱　粘性強
4　灰色土(10Y6/1)シルト～粘土　しまり弱　粘性弱

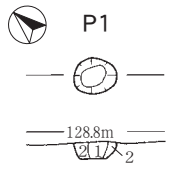
SB1175 P16
1　灰黄褐色土(10YR6/2)シルト～細砂　しまり強　粘性強　混入炭化物(φ3～10㎜)1%
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)細砂～粗砂　しまり強　粘性やや強
3　オリーブ黄色土(5Y6/3)シルト　しまり強　粘性強



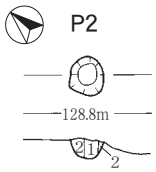
第150図　ＳＢ1174／1175掘立柱建物跡



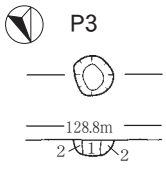
第151図　ＳＡ1240柵列跡・ＳＢ1182掘立柱建物跡（１）



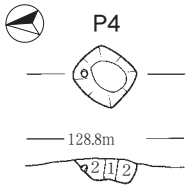
SB1182 P1
1　黒色土(10YR1.7/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ3～5㎜)3%
　地山粒(φ3～5㎜)5%
2　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ1～5㎜)3%
　地山塊(φ30～50㎜)15%



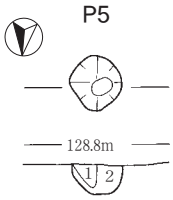
SB1182 P2
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ3～5㎜)3%
　地山塊(φ10～30㎜)5%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)5%
　地山塊(φ30～50㎜)25%



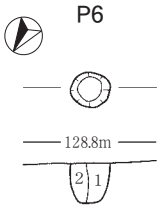
SB1182 P3
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ3～5㎜)7%
　地山(φ1～3㎜)1%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山塊(φ30～50㎜)10%



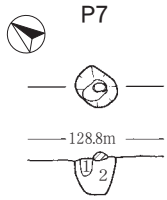
SB1182 P4
1　黒褐色土(10YR3/2)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土40%
2　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山塊(φ10～30㎜)3%



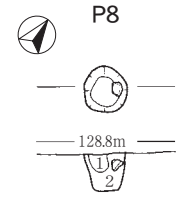
SB1182 P5
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山粒(φ1～3㎜)3%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ3～5㎜)3%
　地山塊(φ10～30㎜)15%



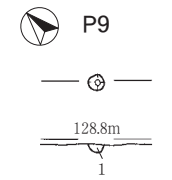
SB1182 P6
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山塊(φ10～30㎜)15%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性弱



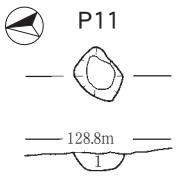
SB1182 P7
1　黒褐色(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性弱
　混入地山塊(φ1～3㎜)1%
2　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物(φ3～5㎜)3%
　地山塊φ(5～10㎜)3%



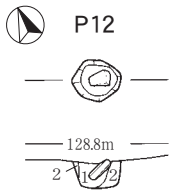
SB1182 P8
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山塊(φ30～50㎜)5%
2　褐色土(10YR4/4)シルト～細砂
　しまり強　粘性やや強
　混入炭化物斑状(φ1～3㎜)1%
　黒色土7%



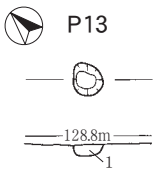
SB1182 P9
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山粒(φ1～3㎜)3%



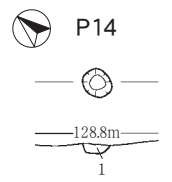
SB1182 P11
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物1%
　地山塊(φ30～50㎜)7%　小礫



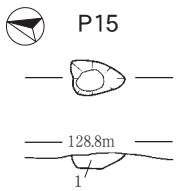
SB1182 P12
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山塊(φ3～5㎜)7%
2　黒褐色土(10YR3/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山塊(φ1～3㎜)5%



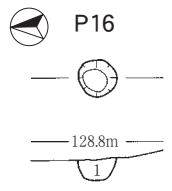
SB1182 P13
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物(φ3～5㎜)3%
　地山塊(φ10～30㎜)5%



SB1182 P14
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
　地山塊(φ10～30㎜)5%

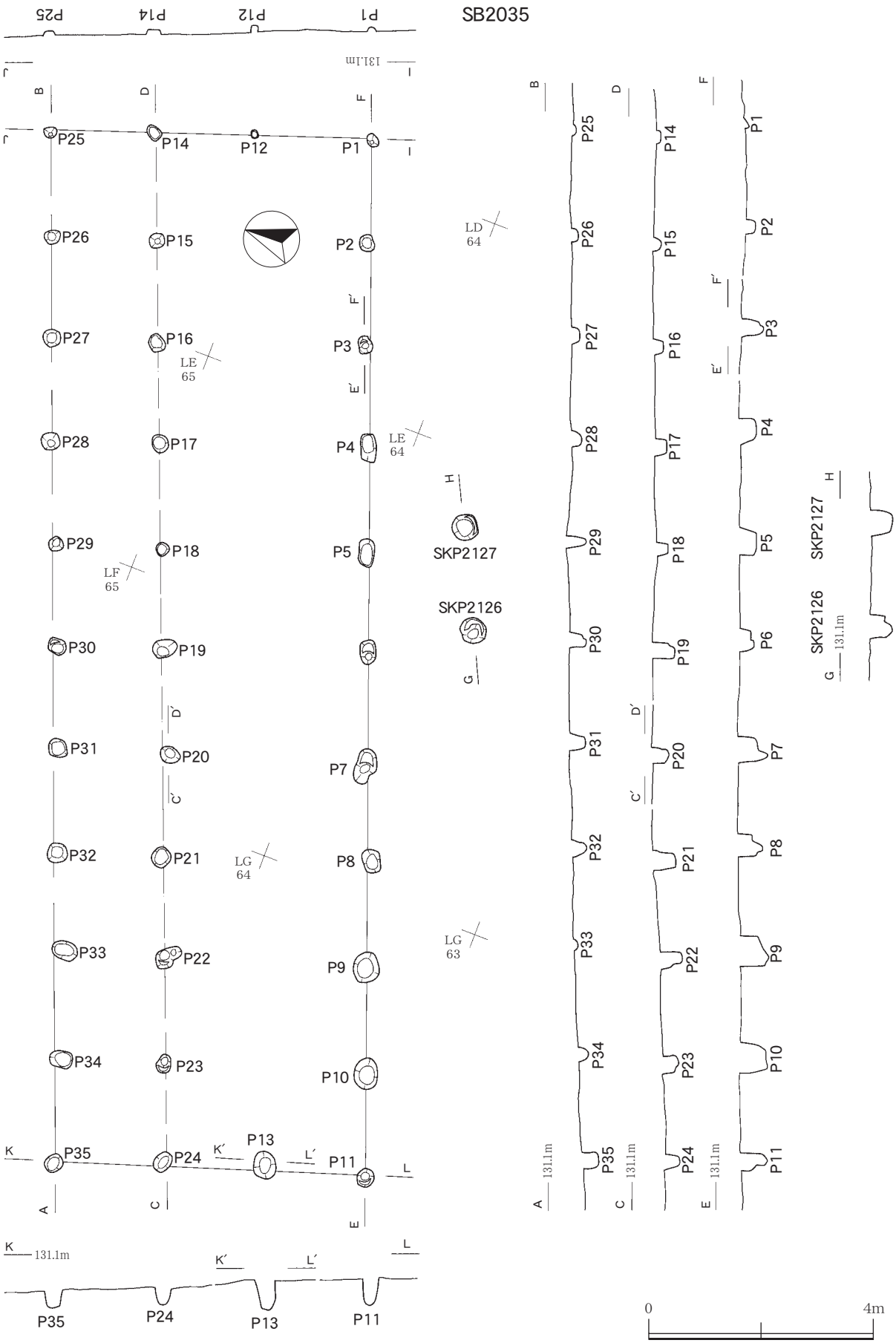


SB1182 P15
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物(φ3～5㎜)2%
　地山塊(φ10～30㎜)3%

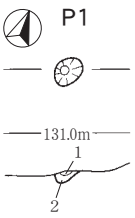


SB1182 P16
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまり強　粘性やや弱
　混入炭化物(φ3～5㎜)3%
　地山塊(φ30～50㎜)5%

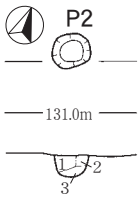
第152図　ＳＢ1182掘立柱建物跡(２)



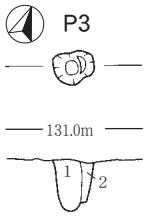
第153図　ＳＢ2035掘立柱建物跡（１）



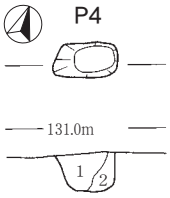
SB2035 P1
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性弱
　混入地山土20%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土60%



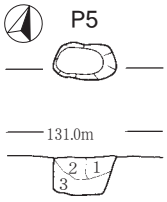
SB2035 P2
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり弱　粘性やや強
　混入炭化物10%
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山塊2%
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山塊5%



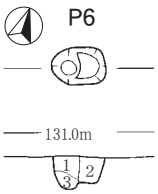
SB2035 P3
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物3%　地山塊30%
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土40%



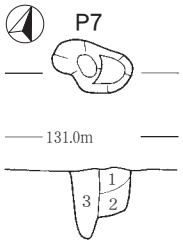
SB2035 P4
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや強
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや強



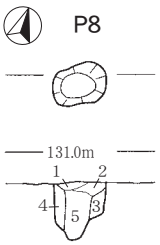
SB2035 P5
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山塊30%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや強



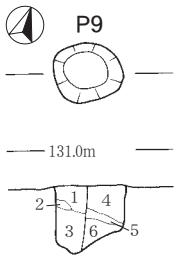
SB2035 P6
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物10%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性やや強
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入炭化物5%



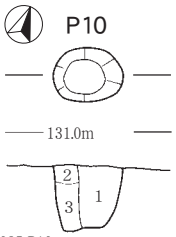
SB2035 P7
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山塊5%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまり弱　粘性やや弱
　混入地山塊3%
3　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物5%



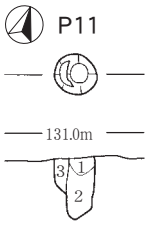
SB2035 P8
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
3　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山粒5%
4　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
5　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性やや強



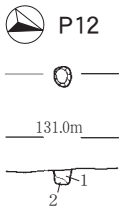
SB2035 P9
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山塊10%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや強
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり弱　粘性やや弱
　混入地山塊10%
4　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土50%強
5　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山塊2%
6　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山塊5%



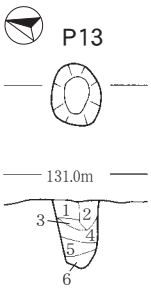
SB2035 P10
1　黒色土(10YR2/1)
　しまり弱　粘性やや弱
　混入炭化物25%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土30%
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり弱　粘性やや弱



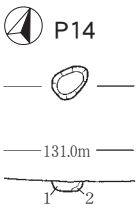
SB2035 P11
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物25%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物2%　地山塊2%
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土25%



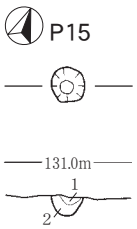
SB2035 P12
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物1%　地山粒1%
2　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土30%



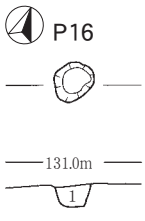
SB2035 P13
1　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山粒3%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物5%　地山粒1%
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山塊20%
4　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり強　粘性やや強
　混入地山粒1%
5　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性やや弱
6　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山粒1%



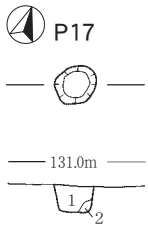
SB2035 P14
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物1%　地山塊30%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山土60%



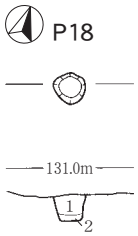
SB2035 P15
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入地山塊20%
2　黒色土(10YR2/1)
　しまりやや強　粘性やや弱



SB2035 P16
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物1%　地山塊3%

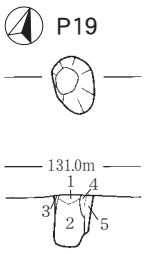


SB2035 P17
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物3%　地山塊10%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱

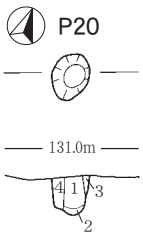


SB2035 P18
1　黒褐色土(10YR2/2)
　しまりやや弱　粘性やや弱
2　暗褐色土(10YR3/4)
　しまりやや強　粘性やや強

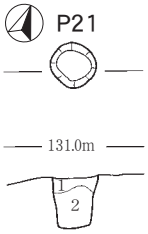
第154図　ＳＢ2035掘立柱建物跡(２)



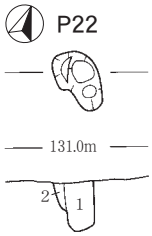
SB2035 P19
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入炭化物20%　地山粒10%
2 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入地山塊5%
3 褐色土(10YR4/4)
しまり強　粘性弱
混入2層土30%
4 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山土20%
5 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山粒3%



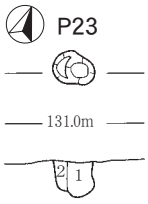
SB2035 P20
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性やや弱
混入炭化物20%　地山塊10%
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱　粘性やや強
混入地山塊20%
3 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入地山粒1%
4 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入地山塊15%



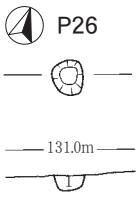
SB2035 P21
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入炭化物5%
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性やや弱
混入地山塊3%



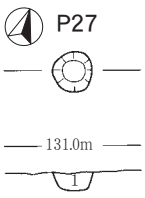
SB2035 P22
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性やや弱
混入炭化物10%
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入地山塊2%



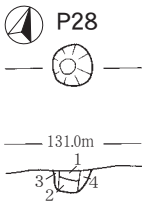
SB2035 P23
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性やや弱
混入炭化物15%
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入地山塊5%



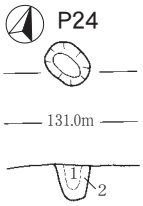
SB2035 P26
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化物1%　地山粒5%



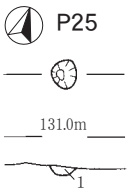
SB2035 P27
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱
粘性やや強
混入地山土20%



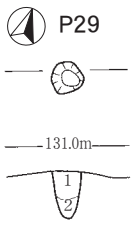
SB2035 P28
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入炭化物30%　砂粒
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性やや弱
混入地山塊3%
3 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山塊2%
4 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや弱
混入地山粒



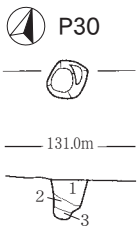
SB2035 P24
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性やや弱
混入地山土少量
2 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入地山粒10%



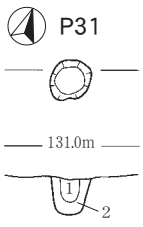
SB2035 P25
1 黒色土(10YR2/1)
しまりやや弱　粘性やや弱
混入地山土70%



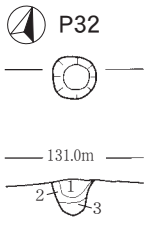
SB2035 P29
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや弱
粘性やや弱
混入炭化物10%
2 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱
粘性やや強



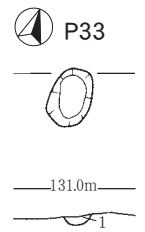
SB2035 P30
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入地山粒5%
2 黒色土(10YR2/1)
しまりやや弱　粘性やや弱
3 黒褐色土(10YR3/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入地山土30%



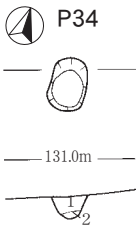
SB2035 P31
1 黒色土(10YR2/1)
しまり弱
粘性やや弱
混入炭化物15%
2 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強
粘性やや強
混入地山塊10%



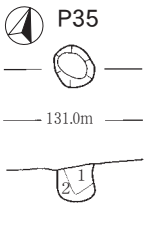
SB2035 P32
1 黒色土(10YR2/1)
しまりやや強　粘性やや弱
2 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや強
3 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや弱　粘性やや強
混入地山土20%



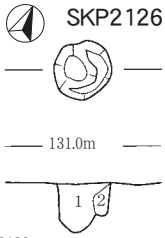
SB2035 P33
1 黒色土(10YR2/1)
しまり弱　粘性やや弱



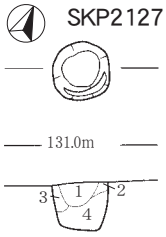
SB2035 P34
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまり弱　粘性やや弱
2 黒褐色土(10YR3/2)
しまりやや弱　粘性やや弱



SB2035 P35
1 黒色土(10YR2/1)
しまりやや弱　粘性やや弱
2 褐色土(10YR4/4)
しまりやや強　粘性やや弱

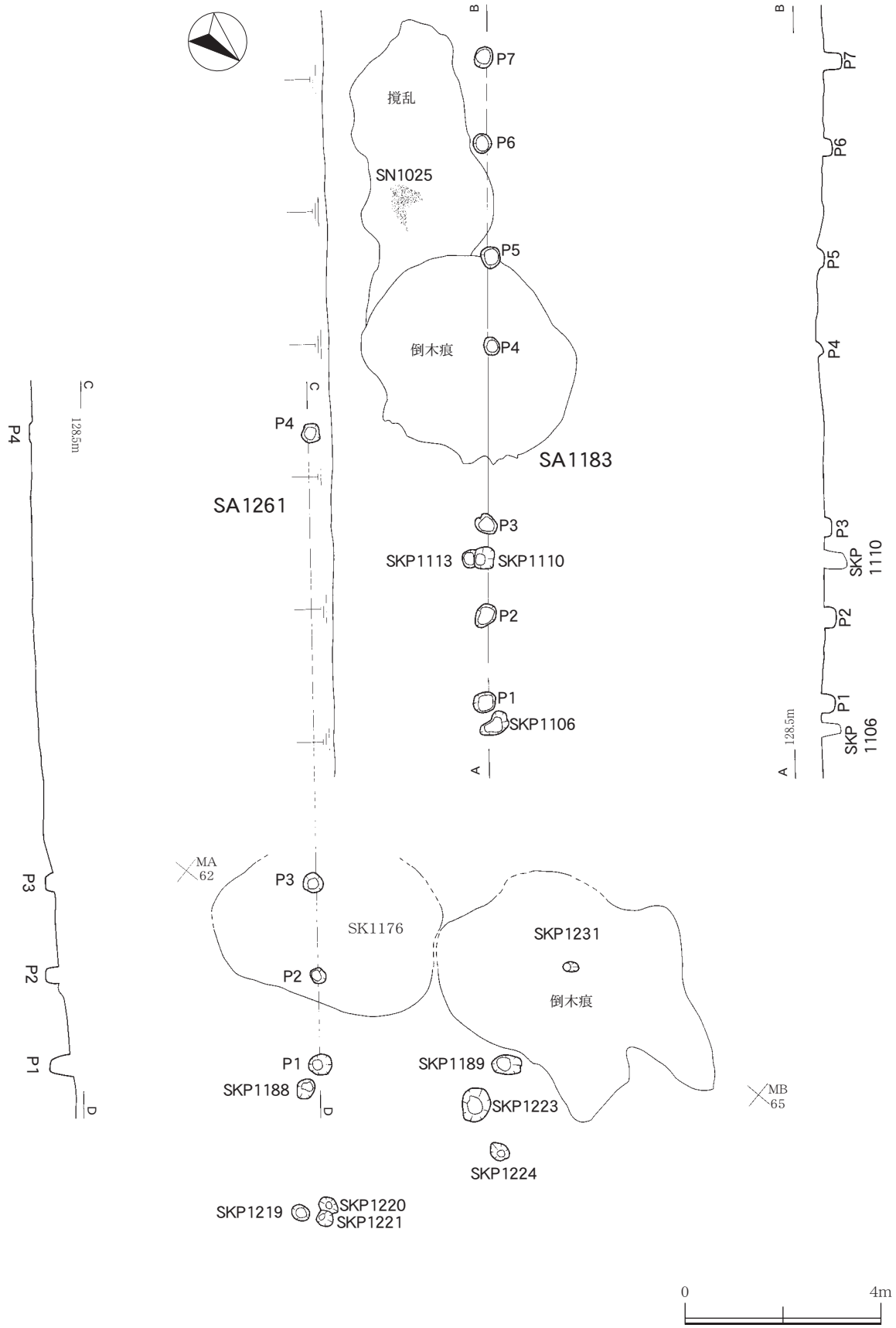


SKP2126
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化粒(φ1～3㎜)1%
地山塊(φ5～10㎜)10%
2 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強　粘性やや強
混入地山土50%



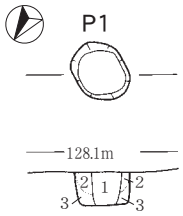
SKP2127
1 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化粒(φ1㎜)1%
地山粒(φ3～10㎜)2%
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまりやや強　粘性やや強
混入地山土40%
3 暗褐色土(10YR3/3)
しまり強　粘性やや弱
混入地山土60%
4 黒褐色土(10YR2/2)
しまりやや強　粘性やや強
混入炭化粒(φ5～10㎜)1%
地山土10%

第155図　ＳＢ2035掘立柱建物跡(３)

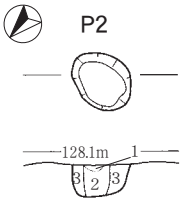


第156図　ＳＡ1183／1261柵列跡（１）

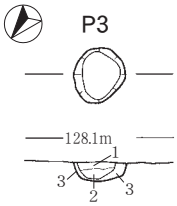
SA1183



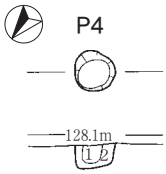
SA1183 P1
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物
　地山塊(φ10～30㎜)10%
2　暗褐色土(10YR3/3)シルト
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物　地山土40%
3　黒色土(10YR2/1)シルト
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山土20%



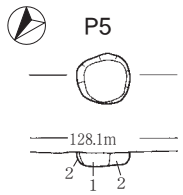
SA1183 P2
1　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物
　地山塊(φ10～30㎜)3%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物
　地山塊(φ10～20㎜)10%
3　黒褐色土(10YR2/3)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性弱
　混入炭化物　地山土30%
　黒色土(10YR1.7/1)10%



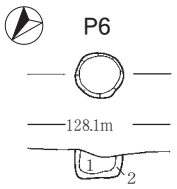
SA1183 P3
1　黒褐色土(10YR3/1)シルト
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物
　地山塊(φ3～7㎜)5%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入地山塊(φ5～50㎜)30%
3　黒褐色土(10YR3/2)シルト
　しまり弱　粘性やや弱
　混入地山土40%



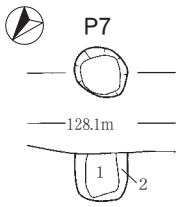
SA1183 P4
1　黒褐色土(10YR2/2)
　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物
　地山塊(φ5～100㎜)1%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物　地山塊40%



SA1183 P5
1　黒褐色土(10YR2/2)
　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物
　地山塊(φ5～10㎜)10%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物
　地山塊(φ5～10㎜)7%

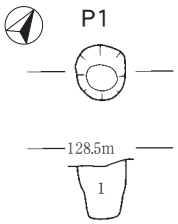


SA1183 P6
1　黒褐色土(10YR2/2)
　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや弱
　混入炭化物
　地山塊(φ10～30㎜)10%
2　暗褐色土(10YR3/3)
　シルト～細砂
　しまりやや強　粘性やや強
　混入炭化物　地山塊40%

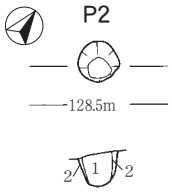


SA1183 P7
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物
　地山塊(φ10～30㎜)5%
2　黒褐色土(10YR2/3)
　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入炭化物　地山塊40%

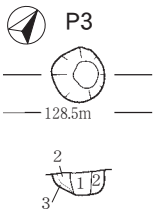
SA1261



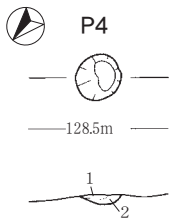
SA1261 P1
1　黒褐色土(10YR2/3)＋褐色土(10YR4/4)
　シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%



SA1261 P2
1　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまり弱　粘性やや強
　混入炭化物(φ3～5㎜)1%
　地山粒(φ3～5㎜)3%
2　黒褐色土(10YR2/3)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性やや強
　混入地山塊(φ5～10㎜)10%

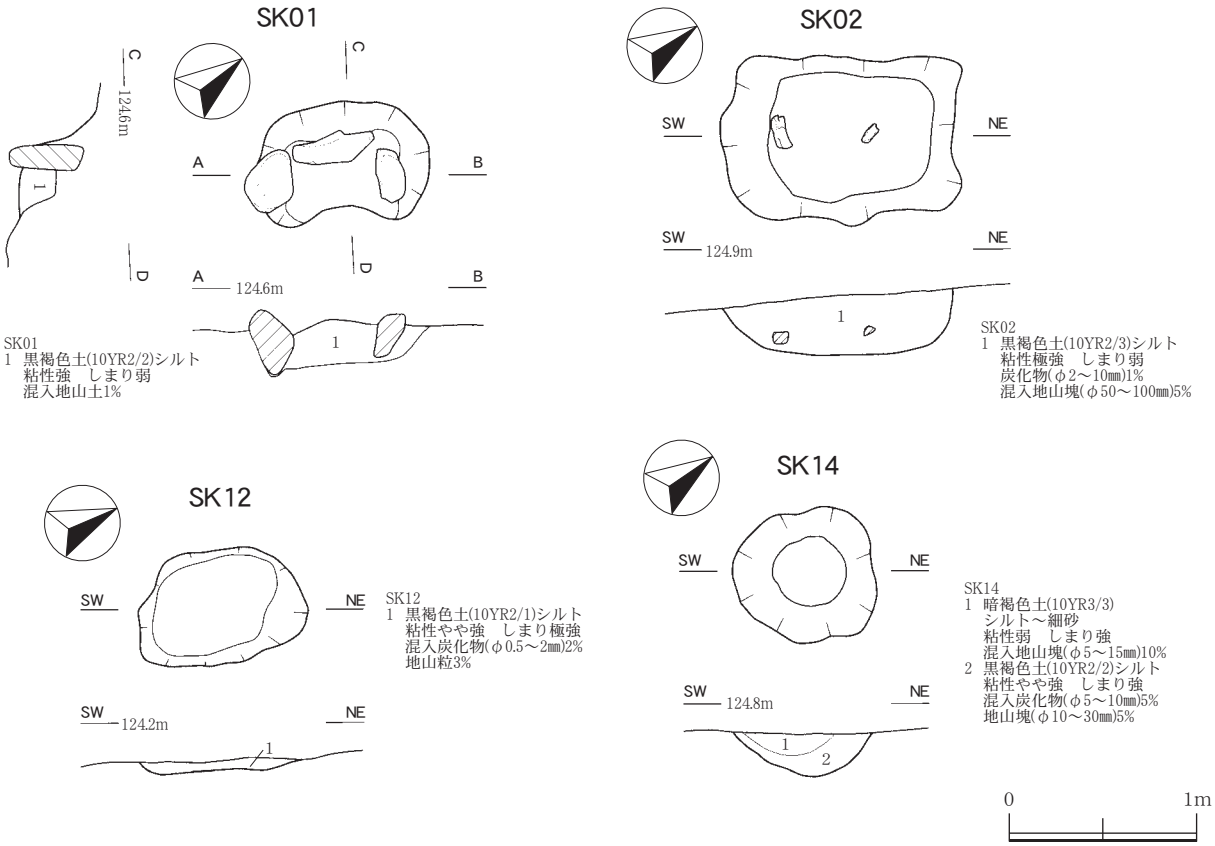


SA1261 P3
1　黒色土(10YR1.7/1)シルト～細砂
　しまり弱　粘性強
　混入炭化物(φ1～3㎜)1%
2　黒色土(10YR2/1)シルト～細砂
　しまり弱　粘性強
　混入炭化物(φ3～5㎜)1%
3　黒褐色土(10YR2/2)シルト～細砂
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山土10%

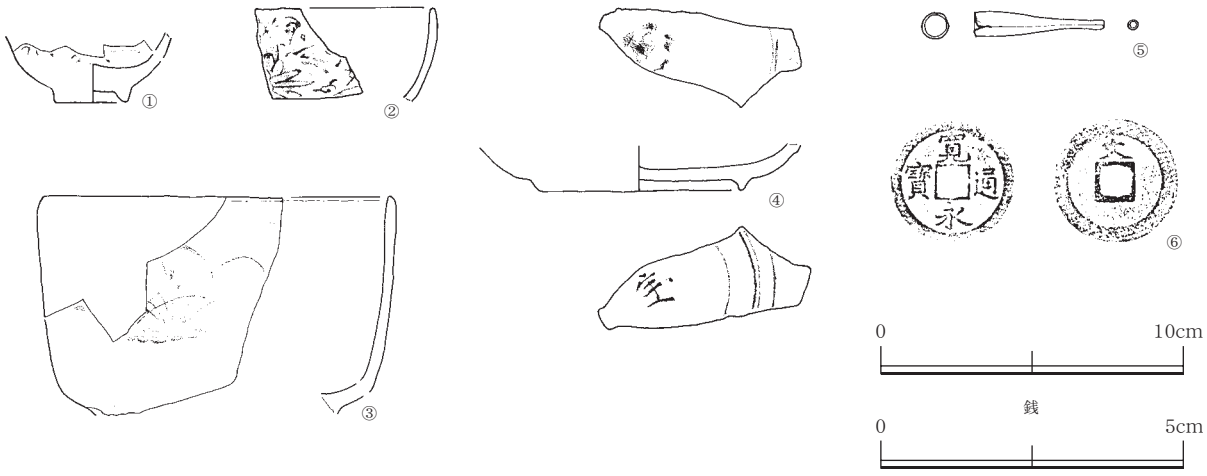


SA1261 P4
1　黒色土(10YR2/1)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入炭化物
　地山塊(φ6㎜)5%
2　黒褐色土(10YR2/2)シルト
　しまりやや弱　粘性強
　混入地山塊
　(φ15～40㎜)40%

第157図　ＳＡ1183／1261柵列跡(２)



第158図　ＳＫ01／02／12／14土坑



第159図　近世出土遺物

挿図番号	出土地点	種別	器種	文様等の特徴	口径（cm）	底形等(cm)	器高等(cm)	産地	時期
①	SKP153	磁器	碗	染付,高台砂付着	－	2.4	(2.6)	肥前	18世紀後半
②	LP51	磁器	碗	染付	－	－	(3.6)	肥前	18世紀後半
③	LP51	磁器	蓋付鉢	染付,口縁無釉	(11.4)	－	(8.6)	肥前	18世紀
④	LP51	磁器	皿	染付	－	(8.0)	(1.8)	不明	18世紀後半
⑤	LP49	金属製品	キセル吸口		長さ 5.2	最大径 1.0	最小径 0.3	－	－
⑥	LR64	金属製品	銭	寛永通寶	径 2.5	厚さ 0.1	－	－	－

第７表　近世出土遺物観察表

第５章　自然科学分析

「第３節岩石肉眼鑑定」は、発掘調査中に実施したため、その後の検討の結果、遺構でないと判断したものについても、一覧表には遺構番号が付してある。それらは一覧表の欠番欄にチェックした。また、石器の器種別岩石構成については、発掘調査中に無作為に抽出した遺物を対象としたものである。

第１節　火山灰(テフラ)分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

秋田県域には、十和田、鳥海、目潟、秋田駒ヶ岳など秋田県域とその周辺に分布する火山のほか、北海道、中部、中国、九州地方、さらには中国北朝鮮国境の白頭山などの火山などから噴出したテフラ(tephra，火山砕屑物，いわゆる火山灰)が多く分布している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの関係を求めることにより、地層の堆積年代や土壌の形成年代のみならず、遺構や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。

ここでは、森吉町日廻岱Ｂ遺跡で採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って、指標テフラの検出同定を試みた。分析の対象となった試料は、発掘調査担当者によってＮ調査区のＳＫ2327から採取送付された試料29である。

２．テフラ検出分析

(１)分析方法

１)試料29について超音波洗浄により泥分を除去。

２)80˚Cで恒温乾燥。

３)実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(２)分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。試料29には灰黄色の細粒軽石(最大径2.0㎜)が比較的多く含まれている。また灰黄色や白色の火山ガラスも多く含まれている。火山ガラスの色調は灰黄色や白色がほとんどで、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスや繊維束状に発泡した軽石型ガラスが認められる。

３．屈折率測定

(１)測定方法

試料29について、日本列島とその周辺のテフラカタログ(町田･新井，1992)の作成にも利用された温度一定型屈折率測定法(新井，1972，1993)により、テフラ粒子の屈折率の測定を行った。

(２)測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。試料に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.503-1.510である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.705-1.708である。

４．考察

試料29に含まれるテフラの起源としては、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率、重鉱物の組合せ、さらに斜方輝石の屈折率などから、いずれも十和田火山起源で、約1.2～1.3万年前*1に噴出した十和田八戸テフラ(To-HP，早川，1983，Hayakawa，1985)あるいは十和田八戸火砕流堆積物(To-H，早川，1983，Hayakawa，1985)、十和田中掫テフラ(To-Cu：約5,500年前*1，大池ほか，1966，早川，1983，福田，1986，町田･新井，1992)、十和田ａテフラ(To-a：915年，町田ほか，1981)などに由来する可能性が考えられる。さらに詳細にみて、試料に含まれる軽石粒子が新鮮なことや角閃石がほとんど含まれていないことなどを考慮すると、含まれるテフラ粒子の多くが両者またはTo-Cuとそれ以前に噴出したテフラに由来する可能性が高いように思われる。

なお、より高精度のテフラ同定のためには、信頼度の高いエレクトロンプローブＸ線マイクロアナライザー(EPMA)による火山ガラスの主成分化学組成分析などを行う必要があろう。また分析作業より前の段階において、分析者による遺跡やその周辺での土層断面の観察によるテフラの特徴把握や試料採取が有効である。

５．小結

森吉町日廻岱Ｂ遺跡において採取された試料29について、テフラ検出分析と屈折率測定を行った。その結果、十和田火山の完新世の大規模噴火に由来するテフラ粒子が比較的多く含まれていると考えられる。

*1　放射性炭素(^{14}Ｃ)年代.

文献

新井房夫(1972)斜方輝石･角閃石によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，　11，p.254-269.

新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２－研究対象別分析法」，　p.138-149.

福田友之(1986)考古学からみた「中掫軽石」の降下年代．弘前大学考古学研究，３，p.4-15.

早川由紀夫(1983a)火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰．火山，28，p.25-40.

早川由紀夫(1983b)十和田火山中掫テフラ層の分布，粒度組成，年代．火山，第２集，28，p.263-273.

Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.

町田　洋･新井房夫(1992)火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋･新井房夫･森脇　広(1981)日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

大池昭二･中川久夫･七崎　修･松山　力･米倉伸之(1966)馬淵川中･下流沿岸の段丘と火山灰．第四紀　研究，５，p.29-35.

表１　テフラ検出分析結果

試料	軽石･スコリア			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	色調	形態
29	++	灰黄,白	2.0	+++	灰黄,白	pm(sp,fib)

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．pm：軽石型．sp：スポンジ状発泡，fb：繊維束状発泡．

表２　屈折率測定結果

火山ガラス(n)	重鉱物組成	斜方輝石(γ)	角閃石(n_2)
1.503-1.510	opx>cpx	1.705-1.708	-

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法(新井，1972，1993)による．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．

吉田町、郡山城跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

第２節　放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１．試料と方法

No.	試料	種類	前処理・調整	測定法
1	N区　SI2005　北側炉内最上層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
2	N区　SI2005　中央炉内最下層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
3	N区　SI2025　炉内最下層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
4	N区　SI2134	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
5	N区　SI2370　NE床直	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
6	N区　SI2506　ピット	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
7	N区　SI2507　炉の炭(内部)	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
8	N区　SI2507　３層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
9	N区　SR2024　土器内	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
10	N区　SR2071　７層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
11	N区　SQ2333　下部	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
12	N区　SQ2503　２層(地山直上)	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
13	N区　SQ2504　３層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
14	N区　SQ2505　覆土	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
15	N区　SK2030　３層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
16	N区　SK2033　３層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
17	N区　SK2215	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
18	N区　SK2239	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
19	N区　SK2240　１層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
20	N区　SK2372	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
21	N区　SX2601　１層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
22	C区　SKP1034	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
23	C区　SKP1086　１層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
24	C区　SKP1146　１層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
25	C区　SKP1119　１層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
26	C区　SN1006	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
27	C区　SI1229　炉	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法
28	S区　SKP50	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ法

２．測定結果

No.	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. (Beta-)
1	3870±40	-26.4	3850±40	交点：BC 2300 １σ：BC 2400 ～ 2380, ：BC 2360 ～ 2270, ：BC 2260 ～ 2220 ２σ：BC 2460 ～ 2200	173179
2	3800±40	-26.6	3770±40	交点：BC 2200 １σ：BC 2270 ～ 2260, ：BC 2220 ～ 2140 ２σ：BC 2300 ～ 2120, ：BC 2100 ～ 2040	173180
3	3750±40	-25.5	3740±40	交点：BC 2140 １σ：BC 2200 ～ 2120, ：BC 2090 ～ 2050 ２σ：BC 2280 ～ 2030	173181
4	3730±40	-22.3	3770±40	交点：BC 2200 １σ：BC 2270 ～ 2260, ：BC 2220 ～ 2140 ２σ：BC 2300 ～ 2120, ：BC 2100 ～ 2040	173182
5	2820±40	-25.4	2810±40	交点：BC 940 １σ：BC 1000 ～ 910 ２σ：BC 1040 ～ 850	173183
6	3890±40	-27.3	3850±40	交点：BC 2300 １σ：BC 2400 ～ 2380, ：BC 2360 ～ 2270, ：BC 2260 ～ 2220 ２σ：BC 2460 ～ 2200	173184
7	3860±40	-27.0	3830±40	交点：BC 2290 １σ：BC 2330 ～ 2210 ２σ：BC 2450 ～ 2140	173185
8	4320±40	-27.0	4290±40	交点：BC 2900 １σ：BC 2910 ～ 2890 ２σ：BC 2930 ～ 2880	173186
9	3790±40	-25.7	3780±40	交点：BC 2200 １σ：BC 2280 ～ 2140 ２σ：BC 2310 ～ 2120, ：BC 2090 ～ 2050	173187
10	3800±40	-23.9	3820±40	交点：BC 2280 １σ：BC 2310 ～ 2200 ２σ：BC 2430 ～ 2140	173188
11	2970±40	-24.8	2970±40	交点：BC 1200 １σ：BC 1270 ～ 1120 ２σ：BC 1310 ～ 1040	173189
12	3840±40	-25.6	3830±40	交点：BC 2290 １σ：BC 2330 ～ 2210 ２σ：BC 2450 ～ 2140	173190

No.	^{14}Ｃ年代 (年BP)	δ^{13}Ｃ (‰)	補正^{14}Ｃ年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. (Beta-)
13	3840±40	-26.7	3810±40	交点：BC2270,2260,2220 １σ：BC2300～2200 ２σ：BC2400～2380, ：BC2360～2140	173191
14	4030±40	-26.1	4010±40	交点：BC2550,2540,2490 １σ：BC2580～2470 ２σ：BC2600～2460	173192
15	3900±40	-27.4	3860±40	交点：BC2310 １σ：BC2430～2280 ２σ：BC2460～2200	173193
16	3710±60	-25.2	3710±60	交点：BC2130,2080,2060 １σ：BC2200～2020 ２σ：BC2290～1940	173194
17	3860±40	-27.2	3820±40	交点：BC2280 １σ：BC2310～2200 ２σ：BC2430～2140	173195
18	3780±40	-27.3	3740±40	交点：BC2140 １σ：BC2200～2120, ：BC2090～2050 ２σ：BC2280～2030	173196
19	3760±40	-25.7	3750±40	交点：BC2140 １σ：BC2210～2130, ：BC2080～2060 ２σ：BC2290～2030	173197
20	1520±40	-23.5	1540±40	交点：AD540173198 １σ：AD450～570 ２σ：AD420～620	
21	1540±40	-24.6	1550±40	交点：AD530173199 １σ：AD440～560 ２σ：AD420～610	
22	110±40	-25.2	110±40	交点：AD1700,1720,1820,1840, ：AD1880,1920,1950 １σ：AD1680～1740, ：AD1810～1930, ：AD1950～1950 ２σ：AD1670～1780, ：AD1800～1950	173200
23	170±40	-24.4	180±40	交点：AD1670,1770,1800,1940,1950 １σ：AD1660～1680, ：AD1730～1810, ：AD1930～1950 ２σ：AD1650～1710, ：AD1720～1880, ：AD1910～1950	173201

No.	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. (Beta-)
24	280±40	-25.8	270±40	交点：AD 1650 １σ：AD 1530 ～ 1550, ：AD 1630 ～ 1660 ２σ：AD 1510 ～ 1600, ：AD 1620 ～ 1670, ：AD 1780 ～ 1800	173202
25	160±40	-24.7	160±40	交点：AD 1680,1740,1800,1930,1950 １σ：AD 1670 ～ 1690, ：AD 1730 ～ 1810, ：AD 1920 ～ 1950 ２σ：AD 1660 ～ 1950	173203
26	540±40	-27.2	500±40	交点：AD 1420 １σ：AD 1410 ～ 1440 ２σ：AD 1400 ～ 1450	173204
27	2080±40	-27.3	2040±40	交点：BC 40 １σ：BC 80 ～ AD 10 ２σ：BC 160 ～ AD 50	173205
28	160±40	-24.9	160±40	交点：AD 1680,1740,1800,1930,1950 １σ：AD 1670 ～ 1690, ：AD 1730 ～ 1810, ：AD 1920 ～ 1950 ２σ：AD 1660 ～ 1950	173206

１)^{14}C年代測定値
試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

２)δ^{13}C測定値
試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比(^{13}C/^{12}C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

３)補正^{14}C年代値
δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４)暦年代
過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998,Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。
暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ(68％確率)・　2σ(95％確率)は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

第３節　岩石肉眼鑑定

パリノ･サーヴェイ株式会社

はじめに

日廻岱Ｂ遺跡は小又川の中流の段丘上に位置する小又川遺跡群の一つである。小又川遺跡群の東北方には竜ヶ森(標高1,050m)および小繋森(1,010m)という山地が分布し、古期花崗岩質岩とこれに貫かれる中―古生層起源の堆積岩類が露出している。これらは、本地域の基盤岩となっている。さらに古期岩層を貫く新第三紀花崗岩質岩体が存在する。第三紀層は古期岩層をとり巻いて始新統大又層と漸新統の巻渕層が分布し、中流域からは新第三系が堆積し、地域北方には森吉火山が存在している。なお、古期岩層と花崗岩体については藤木(1970)、第三系下部層については斉藤･大沢(1956)、吉田(1967)、新第三系中新統については角･盛谷(1973)、森吉火山については大沢･角(1957)の記載を参照した。今回の自然科学分析調査では、本遺跡検出の石器の岩石肉眼鑑定を行い、出土石器の器種と岩種の関係および石材産地について検討を行った。

１．試料

観察を行った試料は計623点で、器種別には石鏃19点、石匙５点、石錐1点、磨製石斧５点、尖頭器２点、礫563点、円盤状石製品２点、岩版２点などである。試料の調査区、遺構/グリッド、番号、種別、石質については、表１に示した。

２．方法

当社技師が平成14年９月３日･４日、遺跡現地において実施した。方法は野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。

３．地質概要

下部の基盤岩類から上部の現世火山に至る岩層を以下に記述する。

(１)基盤岩類(竜ヶ森－小繋森岩体)

１)古期堆積岩類

小又川支流の湯ノ沢上流の小繋森南斜面に分布する。大部分はホルンフェルス化した頁岩で構成されている。岩相から北部北上型の古生層に対比されている。

２)古期花崗岩類

古期花崗岩類は石英閃緑岩～黒雲母角閃石花崗閃緑岩体と黒雲母角閃石花崗閃緑岩～アダメロ岩体に区分される。前者は中粒で弱い片状組織を有する特徴があり、後者は塊状優白色で斑状である。

３)新期花崗岩質岩

新第三紀中新世に貫入した岩体で、細～中粒閃緑岩－石閃緑岩と斑状黒雲母花崗閃緑岩－花崗斑岩の２岩体がある。前者は湯ノ沢最上流および小繋森山頂部に分布している。肉眼的に灰色不均質な岩石で、連続的に細粒～中粒と漸移する。後者は肉眼的に塊状優白色で粗粒である。

４)脈岩類

輝緑岩：大谷層および新期花崗岩質岩までを貫く岩脈で、暗緑色緻密質岩石で輝緑岩特有のオフィティック組織を有している。

斜長流紋岩：青灰色の石基中に斑晶状の斜長石がみられる火山岩で、大谷層までを貫いている。しばしば黄鉄鉱･黄銅鉱などの鉱物を伴う。

流紋岩：白っぽい石基中に粒状の石英斑晶を有する特徴的な岩石で、一部は石英斑岩の岩相に移化する。

(２)新第三系

本地域に分布する第三系は50,000分の１地質図幅「米内沢」(角・盛谷、1973)によれば下位から大又層、巻渕層、桐内層、小猿部川層、岩谷層、藤琴川層、小比内沢層、前山川層の８累層に区分され、その上に湯車層や段丘堆積物などの第四系紀が堆積している。

１)大又層

下部は主に淡緑色酸性凝灰岩で部分的に基底礫岩が堆積している。上部は主に変質安山岩とその火山砕屑岩で構成され、頁岩の薄層を挟有している。男鹿半島の赤島層に対比され、第三系始新統に属するとされている。

２)巻渕層

小又川上流域に比較的広く分布する地層で隣接地域では阿仁合層あるいは大倉層と呼ばれる。礫岩・安山岩を主体とし、砂岩層を伴う。阿仁合型植物群と呼ばれる植物化石を産する特徴を有する。男鹿半島の門前層に対比され第三系漸新統に属するとされている。

３)桐内層

巻渕層を整合に覆い、下部層は礫岩・砂岩・酸性凝灰岩、上部は泥岩・玄武岩で構成される。遺跡周辺は本層に属するかんらん石玄武岩および火山砕屑岩が広く露出している。

４)小猿部川層

酸性火山岩類を主とし、黒色泥岩および珪質頁岩(硬質珪岩)を伴う地層である。酸性火山岩類は下位の異質岩塊を含む酸性凝灰角礫岩と上位の硬質頁岩層を伴う酸性凝灰岩層に細区分される。

下部の酸性凝灰角礫岩に含まれる異質岩塊は安山岩・デイサイト・泥岩・花崗岩類である。一部に流紋岩溶岩を挟在する。流紋岩は灰白色堅硬で石英斑晶を含み、顕著な流理を有している。

上部層の酸性凝灰岩は無層理の軽石凝灰岩から層理を有する凝灰岩を経て細粒凝灰岩までの岩相変化に富んでいる。硬質頁岩は灰色ないし灰白色で板状を呈して露出するが、軽石凝灰岩中にレンズ状岩塊としても産する。次項の岩谷層の硬質頁岩との相違点は数㎜単位のラミナがあまり見られないことである。

遺跡付近では様田東南の山腹に分布している。

５)岩谷層

本層は小猿部川層を整合で覆い、珪質頁岩で特徴付けられ、阿仁前田西方の山地に広く露出する。この地域の岩谷層はほとんど硬質頁岩だけで構成されるが、阿仁前田北方の寄延・桂瀬付近では酸性凝灰岩や珪藻質泥岩が卓越している。硬質頁岩中にはしばしば化石が含まれ、男鹿半島の女川層と対比されている。

６)藤琴川層・小比内沢層

藤琴川層は岩谷層を整合に覆う塊状黒色泥岩で構成される地層で、秋田油田の船川層に相当する。小比内沢層は藤琴川層を不整合に覆う地層で、シルト岩・シルト岩－砂岩互層で構成される。秋田油田の北浦層・天徳寺層・笹岡層に相当している。

７)前山川層

砂岩･礫岩を主とし、亜炭層を挟在する地層である。秋田油田の脇本層ないし鮪川層に相当する地層とみられる。

(３)森吉火山

玉川溶結凝灰岩を基盤とする複合成層火山で、約100万年から80万年前までの20万年にわたって活動したと推定されている。現在は噴気活動を含めて火山活動を停止している。ほぼ中央にカルデラがあり、その中に円錐状の中央火口丘(向岳、標高1,454m)が形成されている。外輪山は両輝石安山岩で、打当内溶岩･沼ノ沢溶岩･時戸溶岩･前岳溶岩･戸鳥内溶岩･魚ノ子溶岩の６溶岩に分けられる。後カルデラ期の溶岩は中央火口丘の向岳溶岩と、寄生火山の檜葉倉溶岩･立ガ森溶岩でかんらん石を含む両輝石安山岩で外輪山の溶岩類より塩基性である。

このうち遺跡が存在する小又川に直接関与する溶岩は沼ノ沢溶岩と前岳溶岩である。

沼ノ沢溶岩は両輝石安山岩で、淡褐灰青色～暗灰青色を呈する緻密堅硬で板状に割れやすく、縞状の流状構造が発達する。斑状であるが、有色鉱物の斑晶は少ない特徴を有している。外輪山の北西部を構成し、前岳溶岩に被覆される。

前岳溶岩は外輪山の西部を覆い、溶岩流と凝灰角礫岩で構成されている。溶岩は両輝石安山岩である。暗青灰色～暗青色を呈し、緻密(一部多孔質)堅硬な斑状岩で、斜長石および輝石の斑晶をややガラス質の石基が充塡している。

４．日廻岱Ｂ遺跡出土石器の岩質

日廻岱Ｂ遺跡出土石器623点を観察した結果は表２と図１に示すように、堆積岩類はシルト岩･珪質頁岩･砂岩･凝灰質砂岩の４岩種、火砕岩類は凝灰岩･火山礫凝灰岩･凝灰角礫岩の３岩種、火山岩類は黒曜石、流紋岩、デイサイト、安山岩、輝石安山岩の５岩種、半深成岩類は石英斑岩･輝緑岩の２岩種、深成岩は閃緑岩の１岩種、変質岩類は変質凝灰岩･変質流紋岩･変質安山岩･珪化岩の４岩種、鉱物としてメノウが認められた。

なお、火山岩のうち単に「安山岩」とした岩石には次の３種が含まれる。(１)斜長石斑晶が認められ斑状組織を示すが、輝石斑晶が極めて少ない岩相をもつ安山岩。「安山岩」の大半を占めて85点検出された。(２)石基が緻密黒色ガラス質となっているガラス質安山岩、および同質であるが一部に輝石の微晶が認められ「ガラス質輝石安山岩」とした岩石で７点検出された。(３)多孔質安山岩が２試料検出された。これら３種の安山岩も顕微鏡観察ではおそらく輝石安山岩とされると思われる。また、「輝石安山岩」とした安山岩は輝石斑晶に富み新鮮な岩相を示す斑状安山岩が卓越して410点が検出されるが、他に「黒色緻密質安山岩」とした細粒岩が１点みられる。

安山岩と輝石安山岩はいずれも未変質の岩石で、変質作用を受けた変質安山岩とは区別される。

５．器種と岩種の関係

鑑定試料623点の大半(562点)は礫として出土し、61点が石器として出土している。全体的な石器･礫の岩石構成は図１に示すように輝石安山岩と安山岩が主な岩種となっている。石器と礫に区分して岩石の構成比を比較するときわめて大きな相違が認められる。

石器では図２に示すように珪質頁岩が全体の43.3%を占めて最も多く検出され、次いで輝石安山岩が21.7%、その他の火山岩類が11.7%の順となる。

器種別には、石鏃に珪質頁岩が15点、流紋岩が1点、メノウが３点で、主に珪質頁岩が使用されている。石匙(５点)と石錐(１点)は全試料に珪質頁岩を使用している。磨製石斧は５点検出されているが、岩種はすべて異なり、珪質頁岩･安山岩･輝緑岩･閃緑岩･変質凝灰岩が使用されている。石槍は２点で珪質頁岩とシルト岩(やや砂質な頁岩)が使用されている。

石皿･台石･敲石は輝石安山岩11点と安山岩３点と鑑定される。円盤状石製品とされる２試料はいずれも変質凝灰質砂岩である。岩版とされる試料は凝灰質砂岩、凝灰岩および輝石安山岩が使用されている。輝石安山岩は黒色緻密質輝石安山岩で礫の主体となる輝石安山岩とは岩質が異なっている。

礫の主体となる岩石は輝石安山岩(397点)と安山岩(90点)の安山岩類で礫の86.5%を構成している。次いで凝灰岩が37点(6.6%)、火山礫凝灰岩10点(1.8%)の順で構成比が低くなる。石器石材として多用された珪質頁岩は礫としては出土していない(図３)。

図３の岩石構成は図１と類似するが、日廻岱Ｂ遺跡から出土した礫試料563点は全試料の90%を占めていることに原因している。

６．岩石産地の推定

(１)堆積岩類

シルト岩･砂岩･珪質頁岩･凝灰質砂岩がある。このうちシルト岩と砂岩は堅硬な岩質で、中-古生層の古期岩層に由来する。小又川支流湯ノ沢上流に分布する竜ヶ森-小繋森岩体中の古期岩層に由来すると考えられる。

珪質頁岩は本遺跡周辺地域では新第三系中新統の小猿部川層と岩谷層に胚胎している。岩谷層は男鹿半島の女川層に対比される典型的な珪質頁岩層であるが、分布は阿仁前田周辺となるのに対し、小猿部川層は本遺跡付近では様田東南の山腹に露出し、酸性凝灰岩層と共在している。出土試料の一部には斑晶状の石英に富む流紋岩質凝灰岩と共在する珪質頁岩が認められること、およびラミナが見られる岩石が少ないことから小猿部川層に由来する珪質頁岩が多く含まれる可能性が高い。在地性の岩石と推定される。

凝灰質砂岩は小又川上流に分布する新第三系中新統の巻渕層あるいは桐内層起源と思われる。

(２)火砕岩類

凝灰岩、火山礫凝灰岩、凝灰角礫岩の３岩種がある。凝灰岩には安山岩質のものと流紋岩質のものがある。安山岩質凝灰岩は巻渕層、流紋岩質凝灰岩は小猿部川層に起源すると判定される。火山礫凝灰岩、凝灰角礫岩は小猿部川層下部に起源すると考えられる。

(３)火山岩類

黒曜石･流紋岩･デイサイト･輝石安山岩･安山岩がある。

黒曜石については本遺跡周辺に産地は知られていない。米内沢南方の倉の山にパーライトがある。パーライト岩体はしばしば黒曜石を伴うことが多いので、同地内の調査が必要である。いずれにしても異地性の岩石と判定される。

流紋岩･デイサイトについては明確な産地は知られないが、竜ヶ森－小繋森岩体中の脈岩となっているほかに小猿部川層下部層に流紋岩溶岩が存在することが知られている。在地性の岩石であろう。

日廻岱Ｂ遺跡で最も多く出土する岩種は安山岩類である。輝石安山岩と安山岩はともに新鮮な岩相を有し、変質作用を蒙った形跡が見られないことから第三紀末から第四紀の火山活動で生成した溶岩

に由来していると考えられる。本地域で該当する火山は森吉火山と考えられる。本遺跡は小又川の段丘面上に立地しているが、段丘堆積物中の礫として最も多く産する岩種は輝石安山岩と安山岩である。森吉火山の北側を西流する小又川で運搬された安山岩礫を利用したと考えられる。ただし、岩版とされる黒色緻密質輝石安山岩は段丘礫中では確認されていない。本岩については搬入された可能性を含めて検討課題となる。

(４)半深成岩類

石英斑岩と輝緑岩がある。いずれも竜ヶ森－小繋森岩体中に岩脈として存在する岩石である。

(５)深成岩類

閃緑岩が１試料検出されている。湯ノ沢最上流の小繋森に産する新第三紀中新世に貫入した新規深成岩類と判定される。

(６)変質岩類

変質凝灰質砂岩･変質凝灰岩･変質流紋岩･変質安山岩･珪化岩がある。珪化岩を除く変質岩類はいずれも淡緑色ないし緑色を帯びた変質岩でグリーンタフ地域に特有の変質岩である。小又川上流地域に分布する第三系始新統に対比される大又層から由来した岩石と判定される。

珪化岩は当地方に散在する鉱床地帯の変質帯(珪化帯)の岩石と考えられる。

(７)メノウ

メノウは石鏃として３点、その他として１点、合計４点出土している。黄色のカルセドニー質(玉髄質)で、縞模様はあまり発達していない。本遺跡付近ではメノウ産地に関する具体的な情報は得られていない。しかし、この種のメノウは多くの場合流紋岩の変質部に伴われることが多い。本遺跡でも変質流紋岩や火山礫凝灰岩に玉髄を含む試料が出土していることからグリーンタフ地域の変質流紋岩や火砕岩中の変質部に生成された在地性鉱物の可能性も有力な選択肢の一つである。

(８)まとめ

日廻岱Ｂ遺跡から出土した石器･礫の大部分は在地性の岩石で、明らかに異地性とされる岩石は黒曜石のみであるが、異地性の可能性も考慮されなければならない岩石･鉱物として黒色緻密質輝石安山岩とメノウが挙げられる。本遺跡は礫の出土が極めて多いことで特徴付けられるが、礫の大半は円礫であり、礫の岩種および構成比を比較すると、小又川流域に堆積した段丘礫層から採取したものと考えて矛盾はみられない。

参考文献

藤木幸雄(1970)秋田県竜ヶ森地域の花崗岩質岩体．岩石鉱物鉱床学会誌，65，p.16-33.

大沢　穠･角　清愛(1957)5万分の１地質図幅「森吉山」および同説明書．42p.，地質調査所.

斉藤正次･大沢　穠(1956)5万分の１地質図幅「阿仁合」および同説明書．39p.，地質調査所.

角　清愛･森谷智之(1973)米内沢地域の地質．地質調査研究報告(5万分の１地質図幅)，46p.，地質調査所.

吉田善亮(1967)立又、明又鉱山の地質と鉱床について．鉱山地質，17，p.101-106.

表１　石質一覧(１)

遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番	遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番	遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番
SI1229	礫	凝灰岩		SQ2325	礫	凝灰質砂岩		SI2381	礫	安山岩質凝灰岩	
SI1229	礫	安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SI2387	礫	輝石安山岩	×
SI1229	礫	安山岩質凝灰岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SI2387	礫	輝石安山岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	安山岩		SKP2389	礫	安山岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2389	礫	流紋岩質凝灰岩	×
SI1229	礫	凝灰岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2420	礫	凝灰質砂岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2420	礫	輝石安山岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2420	礫	凝灰岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2420	礫	凝灰岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2420	礫	凝灰岩	×
SI1229	礫	安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2428	礫	輝石安山岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SKP2428	礫	凝灰岩	×
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	凝灰質砂岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	凝灰岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	凝灰質砂岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	安山岩	
SI1229	礫	凝灰岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	石英斑岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	安山岩		SQ2325	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	凝灰岩		SK2500	礫	安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SQ2325	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SX2329	礫	安山岩	×	SK2500	礫	角閃石輝石安山岩	
SI1229	礫	ガラス質安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI1229	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SNR2002	礫	安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SNR2002	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SNR2002	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI2005	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	閃緑岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI2005	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI2007	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2009	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2009	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	安山岩	
SQ2009	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2010	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2010	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2010	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2010	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2010	礫	凝灰岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2013	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2013	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQ2014	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	閃緑岩	
SI2017	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQN2018	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQN2018	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQN2018	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQN2018	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SQN2018	礫	多孔質安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SNR2024炉	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI2134-a	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI2025	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI2036	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SK2041	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	火山礫凝灰岩		SK2500	礫	輝石安山岩	
SI2042	石皿	安山岩		SI2333	礫	安山岩		SK2501	礫	輝石安山岩	
SK2043	礫	凝灰質砂岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2501	礫	輝石安山岩	
SI2134-c	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SK2501	礫	安山岩	
SKP2067	礫	輝石安山岩	×	SI2333	礫	凝灰岩		SK2501	礫	安山岩	
SK2142	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SK2142	礫	凝灰角礫岩		SI2333	礫	凝灰岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SI2158	礫	輝石安山岩		SI2333	礫	凝灰岩		SQ2502	礫	角閃石輝石安山岩	×
SI2158	礫	輝石安山岩		SNR2335炉	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SI2158	礫	黒色緻密質輝石安山岩		SI2338	礫	閃緑岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SI2158	礫	凝灰岩		SI2344炉	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SI2158	礫	輝石安山岩		SI2338炉	礫	安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SI2158	礫	輝石安山岩		SI2374	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SI2158	礫	輝石安山岩		SI2376	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SI2228	礫	輝石安山岩		SI2381	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SNR2308炉	礫	輝石安山岩		SI2381	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	変質安山岩(G)	×
SNR2308炉	礫	安山岩		SI2381	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SQ2325	礫	安山岩質凝灰岩		SI2381	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SQ2325	礫	安山岩		SI2381	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SQ2325	礫	輝石安山岩		SI2381	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×
SQ2325	礫	輝石安山岩		SI2381	礫	輝石安山岩		SQ2502	礫	輝石安山岩	×

表１　石質一覧(２)

遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番	遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番	遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	珪化岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2505	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2505	礫	安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	ガラス質安山岩	×	SK2505	礫	石英斑岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2505	礫	多孔質安山岩	
SQ2502	礫	石英斑岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2505	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2505	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	安山岩	×	SK2505	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2505	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	石英斑岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2505	礫	火山礫凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SI2506	礫	流紋岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SI2506	礫	安山岩	
SQ2502	礫	角閃石輝石安山岩	×	SQ2502	礫	安山岩	×	SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	角閃石輝石安山岩	×	SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	火山礫凝灰岩	×	SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	安山岩	×	SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SQ2502	礫	安山岩	×	SI2507	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2503	礫	安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2503	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2503	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2503	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	凝灰質砂岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2503	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2503	礫	安山岩		SI2507	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2503	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	変質安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	ガラス質安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SI2507	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	凝灰岩		SK2513	礫	角閃石輝石安山岩	
SQ2502	礫	ガラス質安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	変質安山岩	×	SK2504	礫	安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	安山岩		SK2513	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2513	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	安山岩		SN2514	礫	安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SN2514	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	凝灰角礫岩		SN2514	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SN2514	礫	凝灰角礫岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	デイサイト		SN2514	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SN2514	礫	安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	凝灰岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	凝灰岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	ガラス質輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	火山礫凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	安山岩		SK2517	礫	凝灰岩	
SQ2502	礫	凝灰岩	×	SK2504	礫	角閃石輝石安山岩		SK2517	礫	安山岩	
SQ2502	礫	火山礫凝灰岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	砂岩(古期)	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	火山礫凝灰岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	輝石安山岩		SK2517	礫	変質流紋岩(含玉髄)	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	安山岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	凝灰質砂岩		SK2517	礫	輝石安山岩	
SQ2502	礫	安山岩	×	SK2504	礫	珪化岩		SK2517	礫	火山礫凝灰岩	
SQ2502	礫	輝石安山岩	×	SK2504	礫	凝灰岩		SK2517	礫	安山岩	

表１　石質一覧(３)

遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番	遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番	遺構/グリッド/挿図番号	種別	石質	欠番
SK2517	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	輝石安山岩		SQ2526	礫	輝石安山岩	
SK2517	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	輝石安山岩		SQ2526	礫	輝石安山岩	
SK2517	礫	凝灰岩		SK2524	礫	輝石安山岩		SQ2526	礫	輝石安山岩	
SK2517	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	輝石安山岩		SQ2526	礫	輝石安山岩	
SK2517	礫	変質凝灰岩(G)		SK2524	礫	凝灰岩		SQ2526	礫	流紋岩	
SK2517	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	安山岩		SK2604	礫	輝石安山岩	
SK2517	礫	火山礫凝灰岩		SK2524	礫	ガラス質安山岩		SK2372　S83	鏃	珪質頁岩	
SQ2518	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	輝石安山岩		LH72 S104	鏃	珪質頁岩	
SQ2518	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	輝石安山岩		KT71 S101	鏃	珪質頁岩	
SQ2518	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	火山礫凝灰岩(含玉髄)		KS73 S92	鏃	珪質頁岩	
SQ2518	礫	輝石安山岩		SK2524	礫	輝石安山岩		SI2373 S59	鏃	珪質頁岩	
SQ2518	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LE76 S98	鏃	珪質頁岩	
SQ2518	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		SKP2115 S85	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LO74 S103	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LH72 S72	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		KS73 S92	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	デイサイト		ML44 S95	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LB74　S96	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LO71	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	安山岩		LO67 S89	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		SI2158 S11	鏃	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LO72 S88	鏃	メノウ	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LI63 S91	鏃	メノウ	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LO71 S99	鏃	メノウ	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	凝灰岩		LI71	鏃	流紋岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		SI2376 S63	匙	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		SI2158 S14	匙	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		KI64 S146	匙	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LH77 S111	匙	珪質頁岩	
SQ2523	礫	安山岩		SK2525	礫	安山岩		LP54 S117	匙	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LG70	尖頭器	シルト岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	安山岩		MD65 S106	尖頭器	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	安山岩		SK2214 S76	錐	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		SKP2397 S86	磨製石斧	変質凝灰岩(G)	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	デイサイト		SI2042 S42	磨製石斧	閃緑岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		KE61 S169	磨製石斧	輝緑岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LP70 S165	磨製石斧	安山岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	安山岩		LQ70 S164	磨製石斧	珪質頁岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	安山岩		LI64 S183	円盤状石製品	凝灰質砂岩(G)	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩					
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	安山岩		KT75 S187	円盤状石製品	凝灰質砂岩(G)	
SQ2523	礫	凝灰岩		SK2525	礫	輝石安山岩					
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LI74 S195	岩版	流紋岩質凝灰岩	
SQ2523	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		LD77 S193	岩版	凝灰質砂岩	
SK2524	礫	凝灰岩		SK2525	礫	輝石安山岩		KS73	石片	凝灰岩	
SK2524	礫	輝石安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		SI2025	石片	珪質頁岩	
SK2524	礫	安山岩		SK2525	礫	安山岩		SD2509	石片	変質流紋岩(G)	×
SK2524	礫	安山岩		SK2525	礫	輝石安山岩		SI2376	石片	黒曜石	
SK2524	礫	凝灰岩		SQ2526	礫	ガラス質安山岩		SI2134	石片	メノウ	
SK2524	礫	火山礫凝灰岩		SQ2526	礫	安山岩		SI2303内	石片	珪質頁岩	
SK2524	礫	輝石安山岩		SQ2526	礫	輝石安山岩		LC69	石片	珪質頁岩	
SK2524	礫	輝石安山岩		SQ2526	礫	安山岩					
SK2524	礫	輝石安山岩		SQ2526	礫	安山岩					

表２　器種別石質一覧

岩石区分	岩石名	石鏃	石匙	石錐	磨製石斧	尖頭器	石核	石皿・台	敲石	礫	円盤状	岩版	その他	計
堆積岩	シルト岩					1								1
	珪質頁岩	15	5	1	1	1							3	26
	砂岩									1				1
	凝灰質砂岩									7		1		8
火砕岩	凝灰岩									37		1	1	39
	火山礫凝灰岩									10				10
	凝灰角礫岩									3				3
火山岩	黒曜石												1	1
	流紋岩	1								2				3
	デイサイト						1			2				3
	安山岩				1			2	1	90				94
	輝石安山岩							11		397		1	1	410
半深成岩	石英斑岩									4				4
	輝緑岩				1									1
深成岩	閃緑岩				1					3				4
変質岩	変質凝灰質砂岩										2			2
	変質凝灰岩				1					1				2
	変質流紋岩									1			1	2
	変質安山岩									3				3
	珪化岩									2				2
鉱物	メノウ	3											1	4
計		19	5	1	5	2	1	13	1	563	2	3	8	623

表3　石器・礫の岩石構成

岩石名	個数	比率(%)
珪質頁岩	26	4.2
その他の堆積岩	10	1.6
凝灰岩	39	6.3
その他の火砕岩	13	2.1
輝石安山岩	410	65.8
安山岩	94	15.1
その他の火山岩	7	1.1
変質岩類	11	1.8
その他の岩石･鉱物	13	2.1
計	623	

表4　石器の岩石構成

岩石名	個数	比率(%)
珪質頁岩	26	43.3
輝石安山岩	13	21.7
その他の火山岩	7	11.7
変質岩類	4	6.7
メノウ	4	6.7
その他の岩石	6	10.0
計	60	

表5　礫の岩石構成

岩石名	個数	比率(%)
凝灰質砂岩	7	1.2
凝灰岩	37	6.6
火山礫凝灰岩	10	1.8
輝石安山岩	397	70.5
安山岩	90	16.0
その他の岩石	22	3.9
計	563	

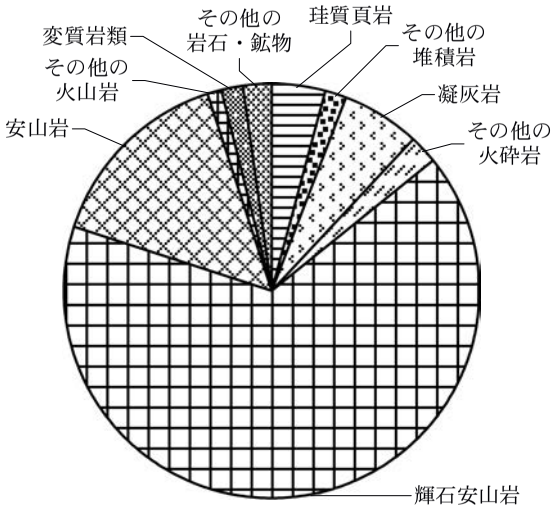


図１　日廻岱Ｂ遺跡出土石器・礫の岩石構成

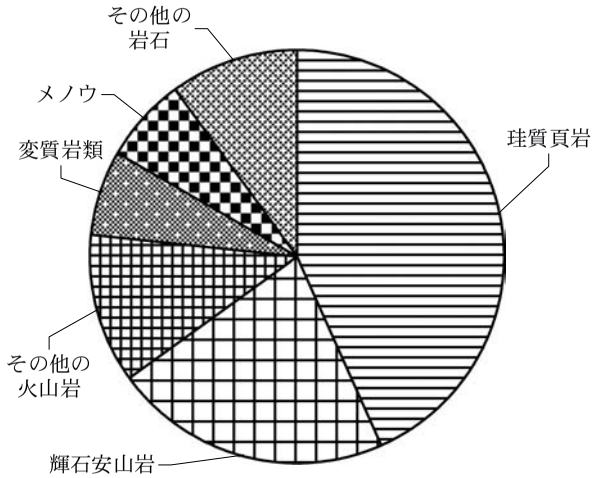


図２　日廻岱Ｂ遺跡出土石器の岩石構成

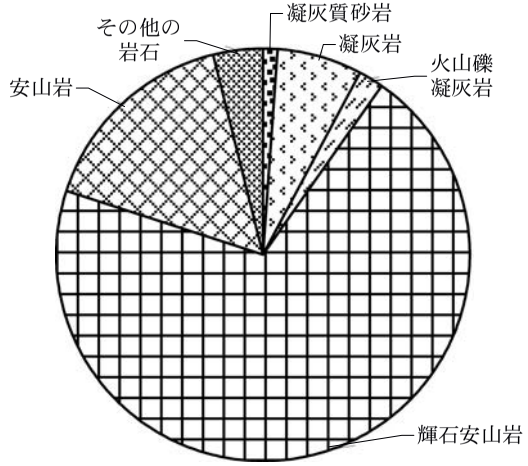


図３　日廻岱Ｂ遺跡出土礫の岩石構成

第6章　まとめ

日廻岱Ｂ遺跡では縄文時代前期後葉、後期初頭、中近世の集落が確認された。各時期の概観は第３章で前述したため、ここでは本遺跡の主体である後期初頭の状況について若干の検討を加え、まとめとする。

１．第Ⅳ群土器について

日廻岱Ｂ遺跡では、大木10式より新しく、十腰内Ⅰ式より古い、後期初頭に属すると推定できる土器群(第Ⅳ群)がまとまって出土した。それらは、東北地方中部の土器型式である門前式(註１)土器の影響が認められるＢ系統(第Ⅳ群ｈ類)と、それ以外のＡ系統(第Ⅳ群ａ～ｃ類)に大きく分けることができる。東北地方北部では、該期の土器型式として、岩手県・青森県の出土資料をもとに「馬立(註２)式」「沖附(2)(註３)式」「蛍沢(註４)式」などが提唱されている。しかし、Ａ系統土器群はそれらの型式に比定することは難しく、小又川流域で独自に変遷を辿った可能性が考えられる。

ここでは、有文の炉体土器・埋設土器を中心に、器形、文様帯、文様分帯、文様展開、文様モチーフ、地文、施文技法の７つの要素をとりあげ、型式学的な観点から、Ａ系統土器群の変遷の復元を試みた(第160図)。まず、文様帯の位置と、施文技法で大きく３期に大別し、Ⅱ期はその他の要素の変化により５細分した。Ⅰ期はⅣ群ｂ・ｃ類土器群、Ⅱ-１期はⅣ群ａ類-１土器群、Ⅱ-２期はⅣ群ａ類-３土器群、Ⅱ-３～５期およびⅢ期はⅣ群ａ類-２土器群に対応する。

Ⅰ期

施文技法に粘土紐貼付、縄側面圧痕を用いることを特徴とする。器形は胴上半で最大径となり、頸部で括れ、口縁は開く。後出のものより、最大径の屈曲は強い。文様帯は口縁から胴部最大径部分までで、１段で構成される。ただし、Ｌ字状の文様要素をもつものは、部分的に最大径以下まで文様が垂下するものもある(128など)。文様は横位の区画文の間を、三角文や渦文を縦位に繋ぐものを主体とする。地文は施文されない。

Ⅱ期

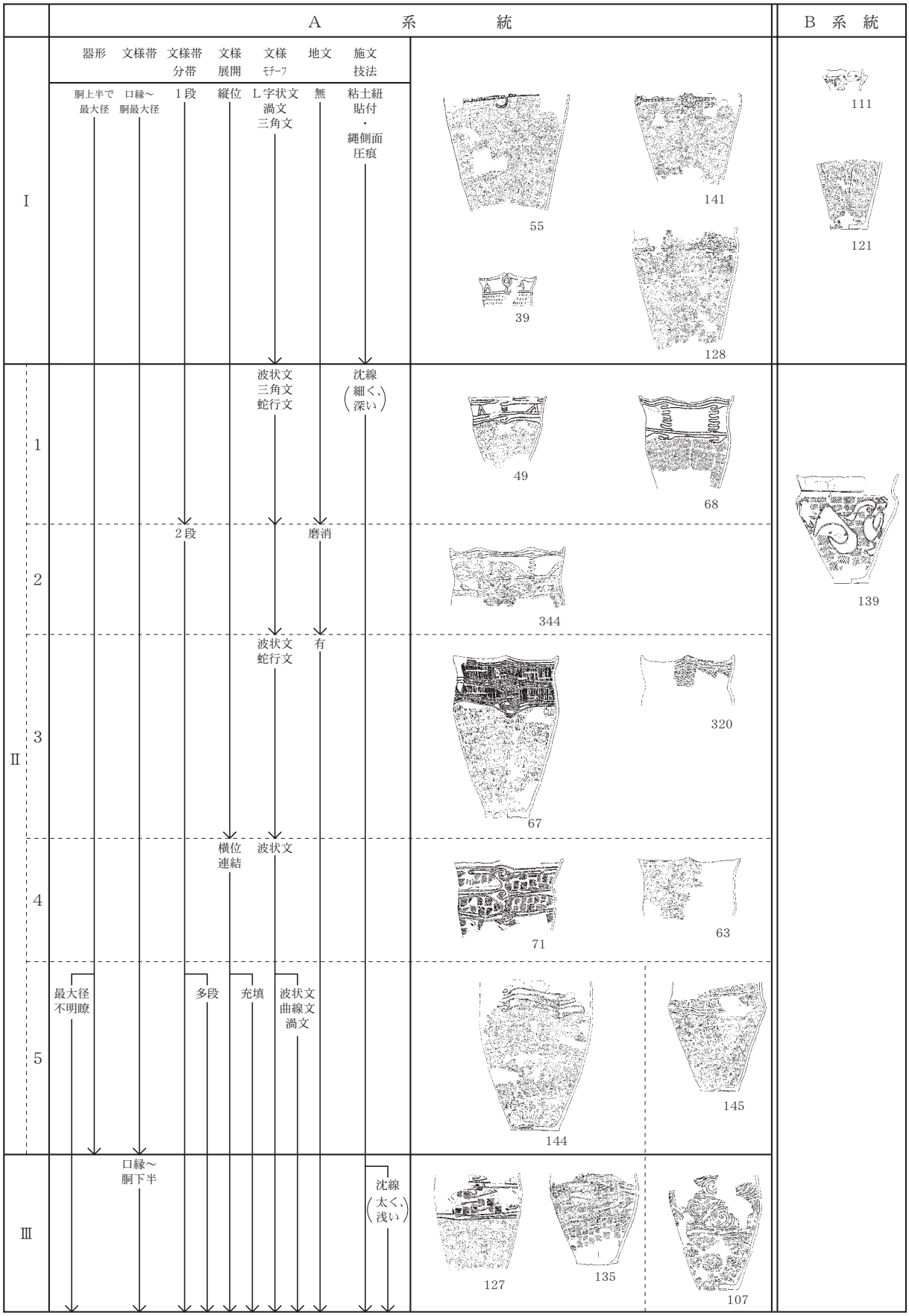
施文技法に細く深い沈線を用い、文様帯は口縁部から胴部最大径部分までとすることを特徴とする。その他の要素の変化により５期に細分した。

Ⅱ-１：器形、文様帯、文様帯分帯、文様展開、地文の有無はⅠ期と変化はない。文様モチーフに蛇行文が加わり、Ｌ字状文が消失する。三角文は残存し、Ⅰ期と類似する文様をもつ土器(49)も確認できる。区画文には波状文が施文されるようになる。

Ⅱ-２：特徴として、文様帯が２段化することが挙げられる。また、文様帯部分にも縄文が施され、文様施文以前に磨り消される。

Ⅱ-３：地文に縄文や撚糸文が施文されるようになる。また、文様モチーフから三角文が消失する。

Ⅱ-４：蛇行文が消失し、それまで区画文として用いられてきた波状文を、横位に連結し、主文様として用いるようになる。



第160図　第Ⅳ群土器群変遷図(案)

Ⅱ-５：胴部最大径が不明瞭となるもの(144)や、文様帯が多段化するもの(144)が表れる。また、文様は区画された文様帯内を、渦文や曲線文で充填するもの(145)が表れる。

Ⅲ期

文様帯が口縁部から胴部最大径以下まで延びることを特徴とする。また、この時期、沈線が太く浅いものが表れる。他の要素はⅡ期を踏襲する。

なお、以上想定した変遷案を、遺構の切り合いより検証すると、調査時に認められた切り合い関係に「ＳＩ2005 → ＳＩ2042 → ＳＩ2001 → ＳＩ2475」があり、ここで想定した「39(ＳＩ2005覆土)→68(ＳＩ2042炉体土器)→67(ＳＩ2042床面直上)→63(ＳＩ2042覆土)→107(ＳＩ2475炉体土器)」の変遷案と矛盾は認められない。

２．検出遺構について

(１)後期初頭の住居の分布状況について

後期初頭の住居は北部段丘面と、南部段丘面、北東端緩斜面で確認した。北部段丘面に多くの住居が密集し、南部段丘面では１軒(ＳＩ1229)、北東端緩斜面では２軒(ＳＩ2506、2507)と、分布状況に差異がある。南部段丘面の住居は、炉の形態から北部段丘面の住居群よりも相対的に古いと推定できる。また北東端緩斜面に位置する２軒の住居は、出土遺物から北部段丘面の住居群よりも古いか、もしくは最古段階に併存すると推定される。これら３軒の住居と、北部段丘面の住居群との関係は、現状では特定しがたいことから、以下の検討は、北部段丘面に位置する遺構群に限定する。

(２)集落の構造につぃて

住居が密集して検出された北部段丘面は、西向きの舌状台地である。段丘面の北西側は、小又川に続く急勾配の段丘崖で、南西は低位段丘面(遺跡内南部段丘面)が続く。南は比高差約４ｍの高位段丘面、南東は緩斜面(遺跡内北東端緩斜面)である。ほ場整備により地形は若干改変されており、本来北部段丘面は、長軸(北西－南東)90ｍ前後、短軸(北東－南西)50ｍ強、南西方向にごく僅かに傾斜する平坦面であったと復元される。

北部段丘面では、縄文時代後期初頭の遺構は、竪穴住居跡、土坑、配石遺構などが検出されている。貯蔵穴群、大規模な墓域、掘立柱建物群などは認められない。住居は、東西54m、南北18ｍの遺構空閑地を挟み、長楕円状に分布する。南半は弧状を描くが、北半は直線的である。住居は段丘面縁辺に分布することから、南半と北半の形状の違いは、地形に制約されたものと推定する。西側は整然と住居が分布し、南北の境も明瞭であるが、東側は住居の分布にばらつきがあり、南北の境は不明瞭である。住居跡は一定の場所に密集しており、ほとんどの住居で住居間の重複が想定される。東側に構築される住居には、床面に段丘礫が露出する住居(ＳＩ2017)や、段丘礫層を掘り込んで炉を構築する住居(ＳＩ2460、ＳＮＲ2611、2613など)があり、空間占地に強い規制が働いていたことが伺える。

検出された竪穴住居跡は22軒(改築を含まない)で、ほかに住居の炉と考えられる土器埋設炉21基、焼土遺構２基を検出した。一住居内に複数の土器埋設炉が伴う例は極めて少数であることから、土器埋設炉、焼土遺構がそれぞれ別の竪穴住居に伴う炉であると仮定すると、住居数は最少で延べ45軒と

復元できる。また、焼土が伴わず土器埋設遺構とした22基の遺構は、すべて上位が削平を受けており、埋設土器に炉体土器特有の被熱痕(ハジケ)が認められるものが一定量存在することを考え合わせると、それらも住居に伴う土器埋設炉であった可能性がある。これらの土器埋設遺構がすべて住居に伴う炉と仮定すると、67軒の住居跡があったと復元できる。

土坑は、時期比定困難なものが多く、確実に集落に伴うと考えられるのは、ＳＩ2005と出土遺物が接合したＳＫ2030のみである。ＳＫ2030は、遺物出土状況および覆土の堆積状況より、土坑墓と推定される。ほかにＳＫ2030と覆土や形態が類似するＳＫ2031、2033、2037、2041、2043、2307なども、集落に伴う可能性が高い。

また、周囲には配石遺構が５基検出されている。集落の北東側に１基(ＳＱ2325)、南西に４基(ＳＱ2009、2010、2013、2014)である。いずれも住居分布範囲の外側に構築されており、住居分布域との相関関係が看取できることから、５基の配石遺構は集落に伴う可能性を推定できよう。

(３)住居の形態について

本遺跡で検出された竪穴住居跡で、竪穴掘り込みが確認できたのは16軒である。掘り込みの平面形は円形もしくは楕円形で、平面円形が11軒と多数を占め、平面楕円形は５軒である。床面積は12.00㎡前後が５軒と最も多い。最も小型の住居は約7.50㎡、大型の住居は約22.00㎡であり、12.00㎡をピークとして漸移的に推移する。柱穴は攪乱などにより、すべての柱穴を検出できたとは言い難いが、現状では柱穴が存在しないものから、７基のものまでが認められている。床面積が17.00㎡以上の住居は６基以上の柱穴を伴い、逆に、柱穴が５基以下の住居は床面積15.00㎡以下の住居に限られる傾向がある。

炉は基本的に住居中心に構築されるが、壁際にも炉が構築される例(ＳＩ2005、2007など)もある。炉の形態は土器埋設炉が最も多く、他に石組炉、立石炉、石囲炉がある。また、住居内の付属施設として、壁際に土器埋設遺構を伴う住居(ＳＩ2005、2025、2338)や、土坑を伴う住居(ＳＩ2025、ＳＩ2134-b,c)も若干数認められる。

(４)炉の形態について

炉の構造が明らかであったものは、住居内の炉24基、竪穴が確認できない炉25基の合わせて49基である。土器埋設炉が42基と圧倒的に多く、他に石組炉１基(ＳＩ2381)、立石炉４基(ＳＩ2028など)、石囲炉２基(ＳＩ2303)がある。土器埋設炉は、炉体土器の被熱状況に差異があることから、炉体土器の機能は一様ではなかったと推定される。しかし、現状では機能を復元することは困難であることから、ここでは形態より以下の４種類に分類した。

Ａ．単独土器埋設炉(ＳＩ2001、ＳＩ2228、ＳＩ2376、ＳＩ2475など)

土器が単独で正位または逆位に埋設される炉である。集落全体に認められ、18基を確認した。正位埋設が16基で、逆位埋設は２基である。正位埋設のものは底部を伴うものと、欠損するもの、底部穿孔のものがある。焼土面は、炉体土器周囲に接して位置するものや、部分的に接するもの、離れて位置するものなどがあるが、土器の被熱状況と合致しない場合が多く、廃絶後に掻き出された可能性が想定される。このタイプの炉は、本来、土器埋設立石炉だったものが、削平により立石が消失したも

のも含まれている可能性がある。

Ｂ．土器埋設立石炉(ＳＩ2005炉Ｂ、ＳＩ2025、ＳＩ2134-ａ、ＳＩ2134-ｃなど)

正位に埋設された土器から0.5～1m程度離れた位置に、立石を伴う炉である。集落全体に散在するが、特に南西部に多い。12基を確認した。立石は円礫を用い、扁平な礫の場合は、扁平面を土器側に向け設置される。土器はすべて正位に埋設されるが、底部を伴うものと欠損するものがある。焼土面は土器周辺に広がるものと、土器と立石の間に形成されるものがある。後者は炉体土器に帯状被熱がなく、胴部のハジケのみが認められる。

Ｃ．正位＋横位土器埋設炉(ＳＩ2007炉Ａ、ＳＩ2017旧期炉、ＳＩ2374、ＳＩ2460など)

正位に埋設された土器から30㎝前後離れた位置に、口縁部側を正位の土器へ向けて、横位もしくは斜位に埋設される土器を伴う炉である。集落北側に偏在し、７基を確認した。正位の土器は底部のあるものと、欠損するものがある。横位の土器は縦半分が欠損するものが多いが、上位を削平された例も多いことから、機能時の形状は特定しがたい。炉体土器の被熱状況を見てみると、正位の土器すべてに帯状被熱が認められる。そのうちの半数ほど(ＳＩ2007など)は、胴部ハジケが弱いか認められず、それに伴う横位の土器に胴部ハジケが認められる傾向がある。焼土面は、正位の土器と横位の土器の間に形成され、横位の土器の下面に連続する例が多い。このことから横位の土器は炉廃絶後に儀礼的に置かれた可能性も考えられる。しかし、横位の土器と下位の焼土面は密接しており、焼土面を掘り込んで設置したような痕跡は認められないこと、横位の土器の内面に、炉体土器特有の被熱痕(ハジケ)が認められること、横位の土器の下位に位置する焼土面は相対的に深いことから、横位の土器は炉廃絶後に炉床を掘り込んで設置されたものではないと推測する。ただし、土器が焼土面に接する外面部分には被熱痕が認められないため、このような状況が起こりうるのかは、再検討が必要であろう。

Ｄ．その他の土器埋設炉

上記に含まれない形態の炉が４種類５基存在する。

・正位＋横位土器埋設立石炉(ＳＩ2344)：正位の炉体土器、横位の炉体土器、立石が一直線上に並ぶ。焼土面は正位の土器から立石までの広い範囲に形成される。

・土器埋設石囲炉(ＳＮＲ2024)：正位に埋設された土器から30㎝離れた位置に、半円状の組石を伴う。焼土面は炉体土器と礫の間に位置する。

・横位土器埋設炉(ＳＮＲ2378)：土器が単独で横位に埋設される炉である。焼土面は口縁部付近に位置する。

・複数土器埋設炉(ＳＩ2019、ＳＮＲ2612)：２個の土器が正位に埋設される。２基確認した。重複の可能性もあるが、判然としない。焼土面は２個の土器に接して位置する。

(５)遺構の変遷について

検出された住居は、住居同士の重複があったと想定されるにもかかわらず、削平により覆土が残存しない住居が大半を占めることと、住居に伴う炉体土器の半数以上が粗製土器であり、詳細な時期比定が困難なことから、新旧関係が不明なものが多い。新旧が明らかなものは以下の５例である。

（旧）　　（新）

・ＳＩ2005 → ＳＩ2042 → ＳＩ2001 → ＳＩ2475
　ＳＮＲ2024 ―――――――――――――――┘

・ＳＩ2134-ｃ → ＳＩ2134-ｂ
　　→ ＳＩ2134-ａ

・ＳＮＲ2377 → ＳＩ2374 → ＳＮＲ2378

・ＳＲ2379 → ＳＩ2376

・ＳＮＲ2612 → ＳＮＲ2611

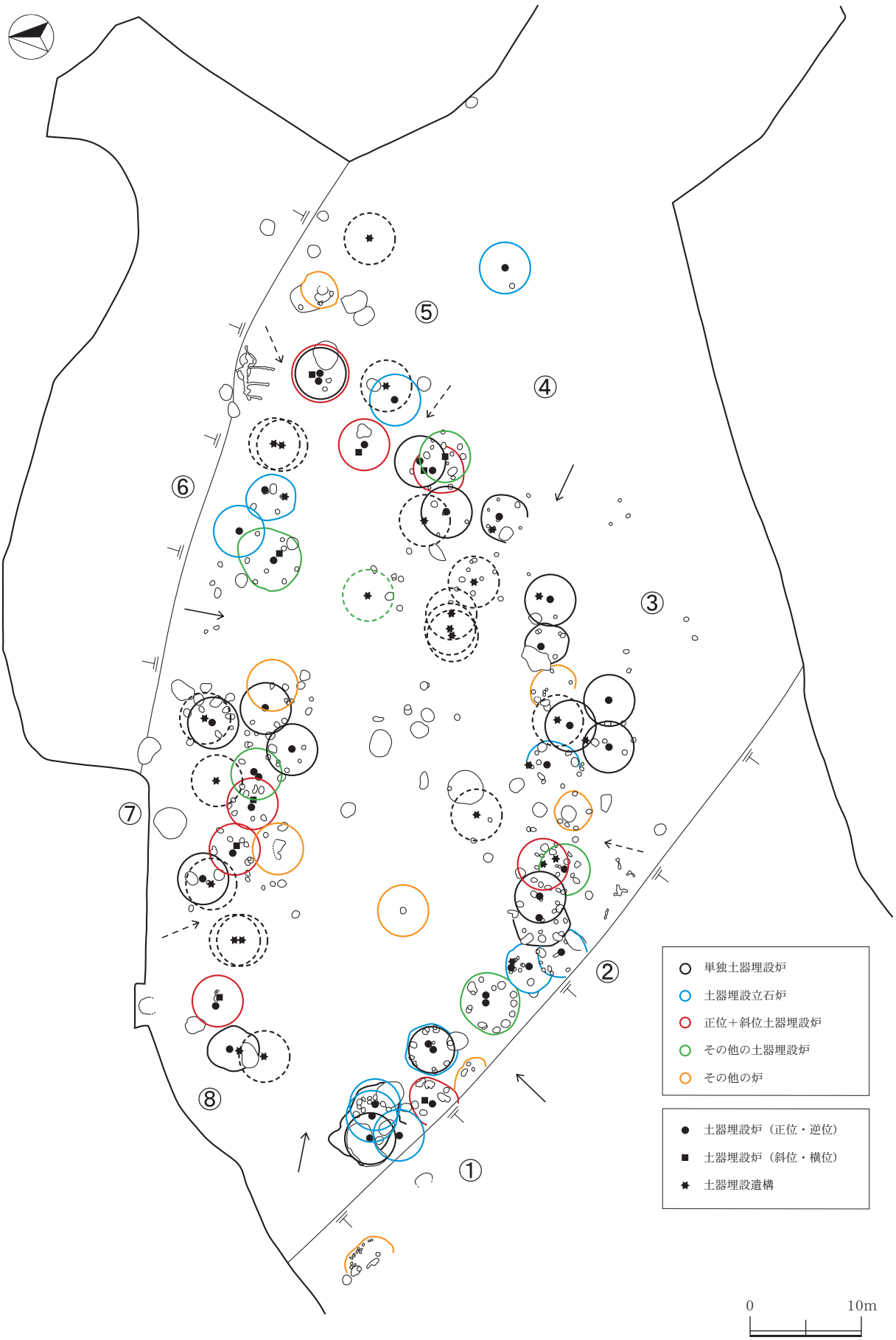
重複する住居の新旧関係が不明なものが多いことから、一時期に同時存在した住居数は特定しがたい。しかしながら、竪穴が検出されなかった土器埋設炉や土器埋設遺構が、本遺跡の住居のほぼ平均である直径4.5ｍの竪穴を伴うと仮定し、住居の重複状況を復元する(第161図)と、0.5～１ｍ程度の空白帯(第161図矢印部分)を境にして８小群(第161図丸囲み数字)に分割することができる。この小群を単位とすれば、数の増減はあるだろうが、一時期に７～８軒の住居が同時に存在していた可能性が考えられようか。

つぎに、前述した土器の変遷に基づき遺構の分布をみてみる。Ⅰ期の土器を炉体土器とする住居は４小群(②、③、⑤、⑦)に１～２軒認められる。このことから、集落初期段階には、少なくとも４つの小群が存在していたと想定できる。一方、Ⅲ期の土器を炉体土器とする住居も４小群(①、②、⑥、⑦)に認められる。最終段階においても、少なくとも４つの小群が存在していたと推定できる。ただし、時期比定の困難な炉体土器も半数以上あり、初期段階、最終段階ともに、さらに多くの小群が存在していた可能性が高いといえようか。

次に遺構の重複と土器の変遷より、土器埋設炉の形態変遷を見てみる。４軒の住居が重複するＳＩ2001、2005、2042、2475では、旧い住居２軒(ＳＩ2005、2042)が土器埋設立石炉、新しい住居２軒(ＳＩ2001、2475)は単独土器埋設炉である。また、炉の改築が認められるＳＩ2017においても、旧期炉は土器埋設立石炉、新期炉は単独土器埋設炉である。このことから、土器埋設立石炉→単独土器埋設炉への変化が想定されよう。土器埋設立石炉を伴う住居の分布を見てみると、５小群(①～③、⑤、⑥)に１～２軒認められるが、小群①では４軒(ＳＩ2134-a、ＳＩ2134-c、ＳＩ2017、ＳＮＲ2002)が集中する。ＳＩ2134-ｃの炉体土器はⅢ期に比定できることから、小群①では、集落最終段階まで、継続して土器埋設立石炉を構築し続けたものと推定できよう。

正位＋横位土器埋設炉は、立石を伴う例(ＳＩ2344)があることから、旧い段階から存在していた可能性がある。ＳＩ2007の炉体土器(49)はⅡ-１期に位置付けることができ、その点からも矛盾はない。また下限は、ＳＮＲ2615の炉体土器(144、145)がⅡ-５期に位置付けられることから、集落後半期においても用いられていたと考えられる。

最後に、炉の軸方向について、土器埋設立石炉や正位＋横位土器埋設炉など、炉に軸方向が認められるものには、南北方向をとるグループと、東西方向をとるグループに大きく２分できる。南北方向のグループは南側に多く、集落の内側を向いていると捉えることも可能である。東西方向のグループは北側に偏在する傾向が看取できる。炉の形態変遷や、炉体土器より、南北方向のグループと東西方



第161図　北部段丘面住居配置復元図

向のグループには時期差が認められないことから、軸方位の相違は集団差と捉えることが妥当であろう。

３．まとめ

今回の調査で確認した日廻岱Ｂ遺跡における後期初頭の集落は、特徴を以下のようにまとめられる。

・縄文時代後期初頭の環状集落である。集落の主要な構成要素は住居と広場で、若干の土坑墓、配石遺構が伴う。土坑墓群、貯蔵穴群、掘立柱建物群などは伴わない。

・住居数は延べ45～67軒程度である。

・竪穴住居の規模は径４～５ｍ前後の円形を主体とする。炉は住居の中心に構築され、若干例を除き、基本的に土器埋設炉の形態をとる。

現在までのところ、秋田県内では、後期初頭に比定される環状集落は確認されておらず、本遺跡が初例である。本遺跡は上位を著しく削平されており、集落内での住居の変遷など、詳細を解明することは困難であった。今後、さらに小又川流域の調査が進み、同時期の大規模な祭祀遺跡である漆下遺跡(註5)など、周辺遺跡との関係が明らかになった上で、日廻岱Ｂ遺跡の位置付けを行い、集落の様相を再検討する必要があろう。

(註１)　熊谷常正　「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』第４号　1986(昭和61)年

(註２)　鈴木克彦　『北日本の縄文後期土器編年の研究』　雄山閣　2001(平成13)年

(註３)　成田滋彦　「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』第４巻　小学館　1989(平成元)年

(註４)　本間　宏　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第１号　1985(昭和60)年

本間　宏　「東北地方後期前葉土器群の研究(１)」『よねしろ考古』第３号　1987(昭和62)年

本間　宏　「東北地方後期前葉土器群の研究(２)」『よねしろ考古』第４号　1988(昭和63)年

(註５)　漆下遺跡(未報告)は本遺跡より小又川の上流約１㎞に位置する後期の大規模な祭祀遺跡である。調査担当者によると、本遺跡とほぼ同時期の住居跡と、配石遺構群が確認されている。

第８表　竪穴住居跡一覧

遺構番号	時期	区	重複 (〈新しい、〉旧い)	規模 (m)	平面形	床面標高 (m)	床面積 (㎡)	炉	炉位置	柱穴 (本)	付随施設	備考
SI1229	後期初頭	LS70・71	〉SK1232-a,b SK1233	－	－	－	－	石組炉	中央	多数	－	
SI2001	後期初頭	LK・LL 66・67	〉SI2005・2042 〈SI2475	4.8	円	130.70	18.0	単独土器埋設炉	中央	7	－	
SI2005	後期初頭	LL・LM 66・67	〈SI2001・2042・SK2099 〉SK2463	3.9	円	130.60	12.0	炉A：土器埋設立石炉？ 炉B：土器埋設立石炉	中央 北壁際	5	SR01	
SI2007	後期初頭	LO・LP 68・69	－	－	楕円	130.65	－	炉A：正位＋斜位土器埋設炉 炉B：立石炉	中央 東寄り	3	－	
SI2017	後期初頭	LN・LO 68・69	〈SK2016	4.7	円	(130.75)	17.3	旧期炉:単独土器埋設炉 新期炉:土器埋設立石炉	中央 中央	6	－	柱穴改築
SI2019	後期初頭	LM・LN 67・68	－	5.1 ×5.7	楕円	(130.80)	22.0	複数土器埋設炉	中央	6	－	柱穴改築
SI2025	後期初頭	LH・LI 66・67	－	4.0 ×4.8	楕円	(130.75)	15.0	土器埋設立石炉	中央	4	SR01 SK02、03	
SI2028	後期初頭	LO68	－	－	－	130.60	－	立石炉	北東寄り	2	－	
SI2036	後期初頭	LI・LJ 65・66	〈SK2037	3.1	円	130.60	7.5	不明	中央？	5	－	
SI2042	後期初頭	LL・LM 65・66	〉SI2005 〈SI2001,SK2099,倒木	(4)	円	130.75	－	土器埋設立石炉	中央	3	－	
SI2134-a	後期初頭	LO・LP 70・71	〉SI2134-c 〈倒木	－	－	130.75	－	土器埋設立石炉	中央	－	－	
SI2134-b	後期初頭	LP・LQ 70・71	〉SI2134-c 〈倒木	－	－	130.75	－	単独土器埋設炉 (土器埋設立石炉？)	中央？	－	SK01	
SI2134-c	後期初頭	LP・LQ 70・71	〈SI2134-a,SI2134-b	－	－	130.60	－	土器埋設立石炉	中央	－	SK02	
SI2228	後期初頭	LE・LF 66・67	〈倒木	3.5 ×4.0	楕円	131.00	11.0	単独土器埋設炉	中央	4	－	柱穴改築
SI2303	後期初頭	KQ・KR 71・72	〉SKI2357	3.5	円	131.40	9.0	石囲炉	中央	0	－	
SI2338	後期初頭	LB・LC 72・73	－	4.2 ×4.5	円	131.40	14.5	土器埋設立石炉	北東寄り	2	SR01	
SI2344	後期初頭	LC・LD 72・73	〉SK2356	5.3 ×6.0	楕円	131.25	20.9	正位＋横位土器埋設立石炉	南東寄り	6	－	
SI2370	後期初頭	LN・LO 73・74	〈SK2373	3.9 ×4.6	楕円	－	－	単独土器埋設炉	中央	－	SR01	
SI2374	後期初頭	LA・LB 68・69	〉SNR2377 〈SNR2378	4.2 ×4.6	楕円	131.25	15.1	正位＋横位土器埋設炉	北寄り	4	－	
SI2376	後期初頭	LB・LC 67・68	〉SR2379 〈SK2400	3.9	円	131.10	12.0	単独土器埋設炉	中央	5	－	
SI2381	後期初頭	LF・LG 66・67	－	3.4 ×4.5	楕円	130.90	12.0	石組炉	北寄り	4	－	
SI2460	後期初頭	LJ 73・74	－	－	－	130.90	－	正位＋横位土器埋設炉	中央？	－	－	
SI2475	後期初頭	LL・LK 66・67	〉SI2001、SNR2024	4.5	円	130.90	－	単独土器埋設炉	中央	4～5	－	
SI2506	後期初頭	KH・KI 62・63	〈地割れ	3.2	円	131.90	8.0	立石炉	中央	2	－	
SI2507	後期初頭	KF・KG 60・61	－	4.1 ×4.3	円	131.10 ～130.40	13.8	石囲炉	中央	3	－	

第９表　土器埋設炉・土器埋設遺構・焼土遺構一覧(１)

遺構番号	区	重複	形態	機能面標高(m)	炉体土器 RP№	埋設状況	上端帯状被熱	内面ハジケ	口縁部	底部	煮炊痕	土器分類	時期	焼土面	上部削平	旧番号
SI2001炉	LL66	〉SI2005・2042・SK2099 〈SI2475	単独土器埋設炉	130.70	RP1	正	全周	上弱	有	有	有	Ⅳf1	不明	有	無	SR2448
SI2005炉(A)	LM67	〈SI2001・2042	土器埋設立石炉？	130.55	RP1	正	全周	上弱	無	無	有	Ⅳf1	不明	？	無	SR2446
SI2005炉(B)	LM67		土器埋設立石炉	130.60	RP2	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	無	SR2447
SI2005 SR01	LM67		－	－	RP3	正	無	無	無	有	有	Ⅳf1	不明	－	無	SR2159
SI2007炉(A)	LP69	－	正位＋横位 土器埋設炉	130.70	RP1	正	全周	弱	一部	無	無	Ⅳa1	Ⅱ-1	有	無	SR2441
		－			RP2	斜	無	有	無	有	無	Ⅳf1	不明			SR2008
SI2007炉(B)	LO69	－	立石炉	130.70	－	－	－	－	－	－	－	－	－	有	無	－
SI2017炉(新)	LN69	〈SK2016	単独土器埋設炉	130.80	RP1	正	全周/一部	無	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2442
SI2017炉(旧)	LN69	〈SK2016	土器埋設立石炉	130.75	RP2	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2443
SI2019炉	LM68	－	複数土器埋設炉	－	RP1	正	全周/一部	無	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2445
		－			RP2	正	全周	上	無	無	有	Ⅳf1	不明			SR2444
SI2025炉	LH66	－	土器埋設立石炉 (入れ子)	130.75	RP1	正	全周	上	無	無	無	Ⅳc2	Ⅰ	有	無	SR2451
		－			RP2	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明			
SI2025 SR01	LH67	－	－	－	RP3	正	無	上	一部	無	有	Ⅳf1	不明	無	無	SR2071
SI2028炉	LO68	－	立石炉	130.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	有	無	－
SI2042炉	LL66	〉SI2005 〈SI2001・SK2099	土器埋設立石炉	130.70	RP1	正	全周/一部	有	一部	無	有	Ⅳa1	Ⅱ-1	有	無	SR2449
SI2228炉	LE66	－	単独土器埋設炉	130.95	RP1	正	全周/一部	有	一部	有	有	Ⅳf2	不明	？	無	SR2217
SI2303炉	KQ71	〉SKI2357	石囲炉	131.35	－	－	－	－	－	－	－	－	不明	無	無	－
SI2338炉	LB73	－	土器埋設立石炉	131.35	RP1	正	全周	上弱	無	有	有	Ⅳa2	不明	無	無	SR2337
SI2338 SR01	LB72	－	－	131.40	RP2	正	一部	上弱	一部	穿孔	有	Ⅳf2	不明	無	無	SR2336
SI2344炉	LC72	〉SK2356	正位＋横位 土器埋設立石炉	131.25	RP1	正	全周	上弱	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	無	SR2350
					RP2	横	無	有	有	無	無	Ⅳf1	不明			SR2354
SI2370炉	LN73	〈SK2373	単独土器埋設炉	130.90以上	RP1	正	無	有	無	無	無	Ⅳf1	不明	無	有	SR2245

第9表　土器埋設炉・土器埋設遺構・焼土遺構一覧(2)

遺構番号	区	重複	形態	機能面標高(m)	炉体土器									焼土面	上部削平	旧番号
					RP№	埋設状況	上端帯状被熱	内面ハジケ	口縁部	底部	煮炊痕	土器分類	時期			
SI2374炉	LA69	〉SNR2377 〈SNR2378	正位＋横位 土器埋設炉	131.30	RP1	正	全周	有	一部	有	有	Ⅳf1	不明	有	無	SR2362
					RP2	横	無	有	有	有	無	Ⅳf1	不明			SR2361
SI2376炉	LC67	〈SK2400	単独土器埋設炉	131.20	RP1	正	全周	上弱	無	無	有	Ⅳf1	不明	?	無	SR2380
SI2381炉	LF66	−	石組炉	130.95	−	−	−	−	−	−	−	−	−	有	無	−
SI2460炉	LJ73	−	正位＋横位 土器埋設炉	131.00	RP1	正	全周	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	有？	無	SR2295
					RP2	横	無	有	無	有	有	Ⅳf1	不明			SR2296
SI2134-a炉A	LP70	〉SI2134-c	土器埋設立石炉	130.70	RP1	正	全周	弱	無	有	有	Ⅳa2	Ⅲ	有	無	SR2023
SI2134-b炉B	LP70	〉SI2134-c	単独土器埋設炉	130.70	RP2	逆	無	有	有	無	有	Ⅳa2	Ⅱ-4	有	有	SR2038
SI2134-c炉C	LP70	〈SI2134-a,b	土器埋設立石炉	130.60	RP3	正	全周	上	無	有	有	Ⅳf2	不明	有	無	SR2064
SI2475	LK66	〉SI2001、SNR2024	単独土器埋設炉	130.90	RP1	正	一部/全周	上	無	有	有	Ⅳa2	Ⅱ	有	有	SR2024
SI2506	KI61	−	立石炉	132.20	−	−	−	−	−	−	−	−	−	有	無	−
SI2507	KG60	−	石囲炉	131.20	−	−	−	−	−	−	−	−	−	無	無	−
SNR2002	LP70	−	土器埋設立石炉	130.65	RP1	正	全周	弱	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	無	SR2002
SNR2024	LJ66	〈SI2475	土器埋設石囲炉	130.75	RP1	正	無	上	無	有	有	Ⅳh	Ⅰ	有	無	SR2024
SNR2026	LH65	−	単独土器埋設炉	130.85	RP1	正	全周	有	無	有	有	Ⅳf1	不明	無	無	SR2026
SNR2034	LG65	−	単独土器埋設炉	130.90	RP1	逆	全周	有	無	無	無	Ⅳf1	不明	有	無	SR2034
SNR2039	LG66	−	単独土器埋設炉	130.90	RP1	正	一部	無	無	無	有	Ⅳf2	不明	有	無	SR2039
SNR2109	LH72	−	単独土器埋設炉	(131.10)	RP1	正	無	無	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2109
SNR2156	LK74	−	単独土器埋設炉	131.10	RP1	正	全周	有	無	無	有	Ⅳa2	Ⅲ	無	有	SR2156
SNR2176	LG74	〈SR2179	単独土器埋設炉	130.60	RP1	正	無	弱	無	無	有	Ⅳa2	Ⅲ	有	有	SR2176
SNR2186	LG73	−	単独土器埋設炉	131.20	RP1	正	全周	弱	無	無	有	Ⅳb	Ⅰ	有	無	SR2186
SNR2279	LD66	−	単独土器埋設炉	(130.90)	RP1	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2279
SNR2308	KQ67	−	土器埋設立石炉	131.35	RP1	正	全周/一部	上	無	有	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2308
SNR2322	KT70	−	土器埋設立石炉	131.30以上	RP1	正	無	無	無	穿孔	有	Ⅳc1	Ⅰ	無	有	SR2322
SNR2335	LC73	−	土器埋設立石炉	131.25	RP1	正	無	上弱	無	穿孔	有	Ⅳa2	Ⅲ	有	有	SR2335
SNR2371	LB69	〉SKP2464	単独土器埋設炉	131.35	RP1	正	全周	上弱	無	無	有	Ⅳa2	Ⅲ	有	無	SR2371
SNR2377	LA69	〈SI2374、SNR2378	単独土器埋設炉	131.35	RP1	正	一部	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	無	有	SR2377
SNR2378	LA69	〉SI2374、SNR2377	横位土器埋設炉	131.35	RP1	横	無	有	有	有	無	Ⅳh	Ⅱ	有	無	SR2378
SNR2611	LI73	〉SNR2612	正位＋横位 土器埋設炉	131.40	RP1	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2178
					RP2	横	無	無	無	有	無	Ⅳf1	不明			SR2104
SNR2612	LH73	〈SNR2611	複数土器埋設炉	131.30	RP1	正	全周	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	無	SR2182
					RP2	正	全周	上弱	無	無	有	Ⅳc2	Ⅰ			SR2298
SNR2613	LM74	−	正位＋横位 土器埋設炉	130.70	RP1	正	無	無	無	有	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2074
					RP2	横	無	無	無	有	無	Ⅳf1	不明			SR2075
SNR2614(新)	KS 71・72	−	正位＋横位 土器埋設炉	131.40	RP1	正	全周	無	無	穿孔	無	Ⅳf1	不明	有	無	SR2310
					RP2	横	無	有	無	無	無	Ⅳf1	不明			SR2311
SNR2614(旧)	KS71	−	単独土器埋設炉	131.35	RP3	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	有	有	SR2320
SNR2615	LA70	−	正位＋横位 土器埋設炉	131.35	RP1	正	無	有	無	有	有	Ⅳa2	Ⅱ-5	有	有	SR2321
					RP2	斜	無	有	無	有	無	Ⅳa2	Ⅱ-5			SR2318
SR2040	LG66	−	−	−	RP1	逆	無	有	有	無	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2040
SR2101	LK74	−	−	−	RP1	正	無	無	無	有	有	Ⅳa2	Ⅲ	−	有	SR2101
SR2102	LL73	−	−	−	RP1	正	無	無	無	無	無	Ⅳf2	不明	−	有	SR2102
SR2103	LL73	−	−	−	RP1	正	無	無	無	無	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2103
SR2105	LI68	−	−	129.90以上	RP1	正	無	無	無	有	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2105
SR2106	LH65	−	−	−	RP1	正	無	無	無	有	無	Ⅳf5	不明	−	有	SR2106
SR2147	LD70	−	−	−	RP1	斜	無	有	無	無	有	Ⅳf2	不明	−	有	SR2147
SR2179	LG74	〉SNR2176	−	−	RP1	正	無	有	無	有	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2179
SR2185	LH74	−	−	−	RP1	正	無	無	無	穿孔	有	Ⅳa2	不明	−	有	SR2185
SR2193	LE68	〉SKP2459	−	−	RP1	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2193
SR2194	LE68	−	−	−	RP1	正	無	無	無	無	無	Ⅳf1	不明	−	有	SR2194
SR2195	LE68	−	−	−	RP1	正	無	弱	無	無	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2195
SR2216	LD68	−	−	−	RP1	正	無	有	無	有	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2216
SR2299	LC69	−	−	−	RP1	正	無	有	無	無	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2299
SR2309	KT70	−	−	−	RP1	正	無	有	無	有	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2309
SR2317	KP70	−	−	−	RP1	正	無	弱	無	有	有	Ⅳf1	不明	−	有	SR2317
SR2331	LA72	〈SR2332	−	−	RP1	正	無	有	無	無	無	Ⅳb	不明	−	有	SR2331
SR2332	LA72	〉SR2331	−	−	RP1	正	無	無	無	無	無	Ⅳf1	不明	−	有	SR2332
SR2363	LD66	−	−	−	RP1	正	無	無	無	有	無	Ⅳg	不明	−	有	SR2363
SR2379	LC68	〈SI2376	−	−	RP1	逆	無	有	有	無	有	Ⅳb	Ⅰ	−	有	SR2379
SR2405	LO73	−	−	−	RP1	正	無	無	無	無	無	Ⅳf4	不明	−	有	SR2405
SR2452	LJ66	−	−	−	RP1	正	無	弱	無	無	無	Ⅳf1	不明	−	有	SR2452
					RP2	斜	無	弱	無	有	無	Ⅳg	不明	−	有	−
SN2177	LJ72	−	立石炉	131.15	−	−	−	−	−	−	−	−	−	有	無	−
SN2369	LF73	−	立石炉	131.20	−	−	−	−	−	−	−	−	−	有	無	−
SQN2018	LK 69・70	−	石囲炉	131.10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	有	無	−

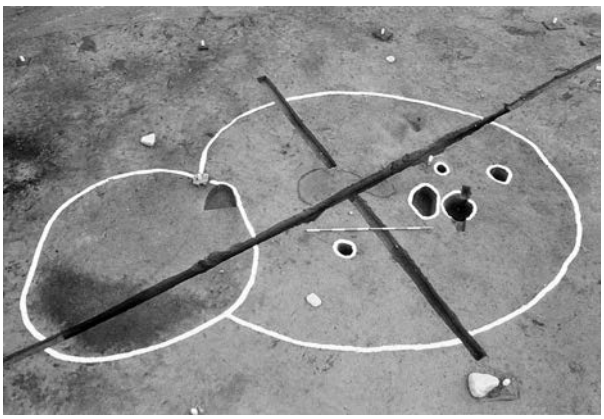
遺跡遠景(北→)

北部段丘面全景(下：北)

図版2　SI1105/1229/2158竪穴住居跡

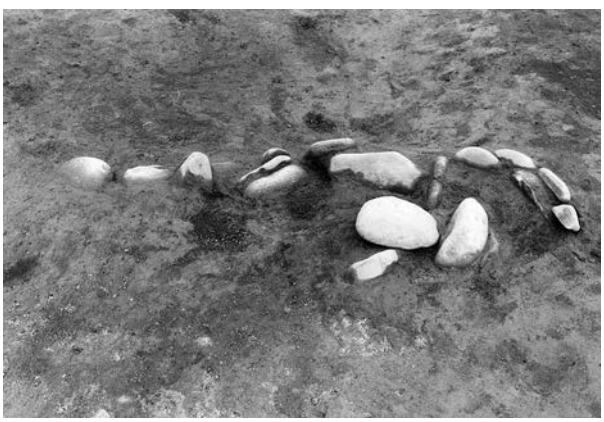
ＳＩ2158完掘状況(東→)

ＳＩ2158遺物出土状況(北→)



ＳＩ1105完掘状況(北→)

ＳＩ1229完掘状況(北東→)



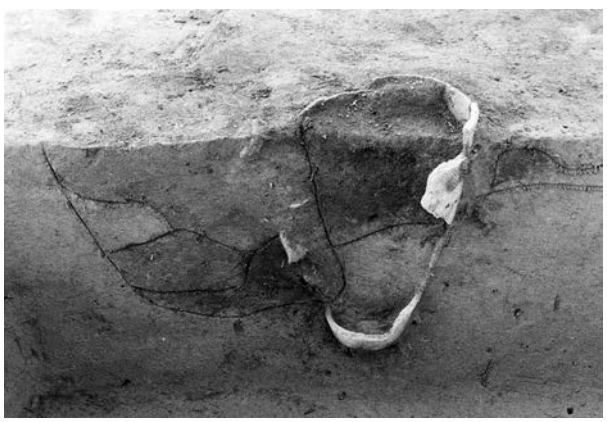
ＳＩ1229炉確認状況(南西→)

図版3　SI2001・2005・2042竪穴住居跡(1)

S I 2001・2005・2042完掘状況(北→)

S I 2001炉確認状況(西→)

S I 2001炉側面(南東→)



S I 2001炉断面(南東→)

S I 2001周辺調査風景(北→)

図版4　SI2001・2005・2042竪穴住居跡(2)

SⅠ2005炉A確認状況(北→)

SⅠ2005炉B確認状況(南→)

SⅠ2005炉A側面(西→)

SⅠ2005炉B・SR01側面(南→)

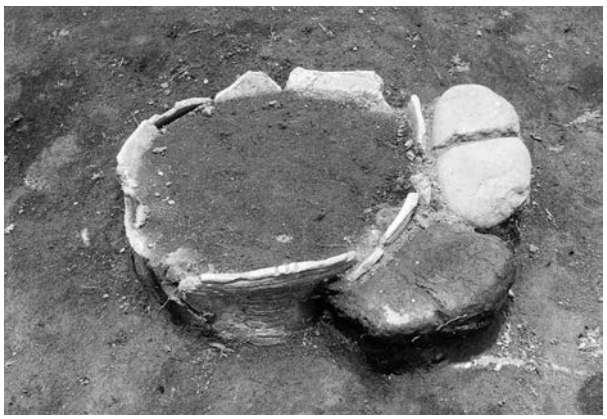
SⅠ2005炉A断面(西→)

SⅠ2005炉B・SR01断面(南→)

SⅠ2005遺物出土状況(北東→)

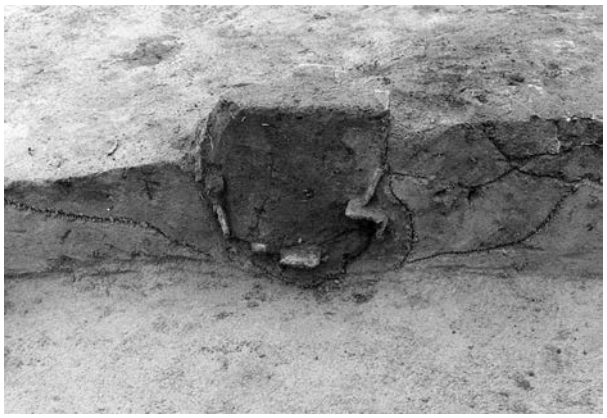
SⅠ2005調査風景(北東→)

図版5　SI2001・2005・2042竪穴住居跡(3)／SI2007竪穴住居跡

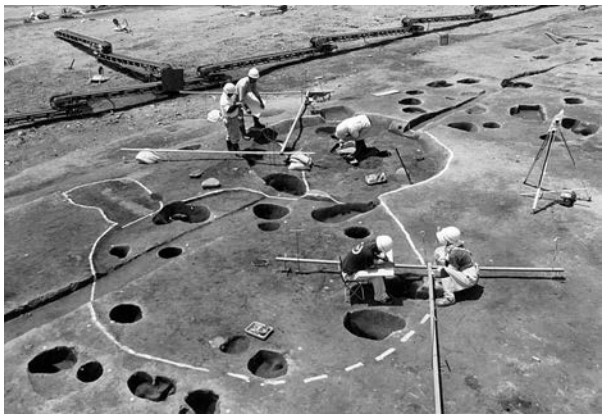


SⅠ2042炉確認状況(南→)

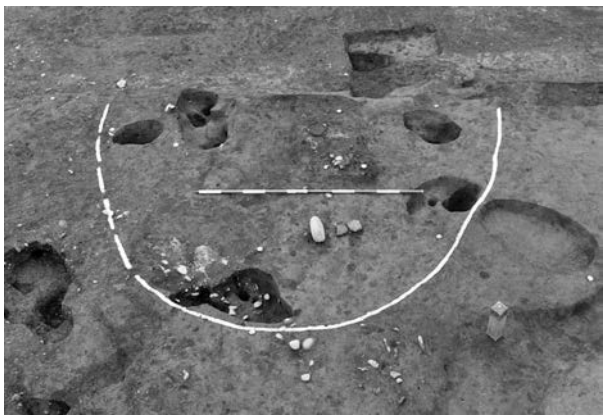
SⅠ2042炉側面(東→)



SⅠ2042炉断面(東→)



SⅠ2001・2005・2042調査風景(東→)



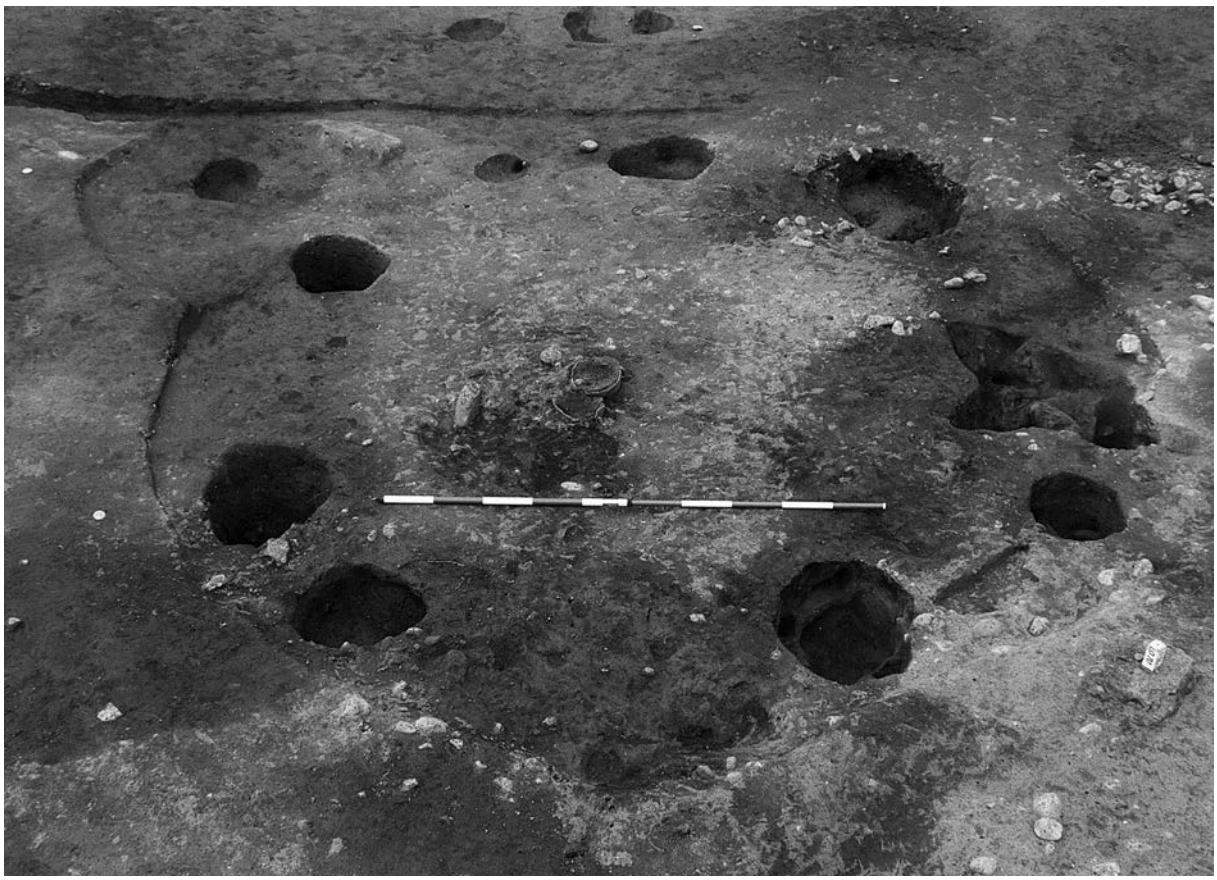
SⅠ2007完掘状況(北東→)

SⅠ2007炉確認状況(南東→)

SⅠ2007炉側面(南東→)

SⅠ2007炉断面(南東→)

図版6　SI2017竪穴住居跡



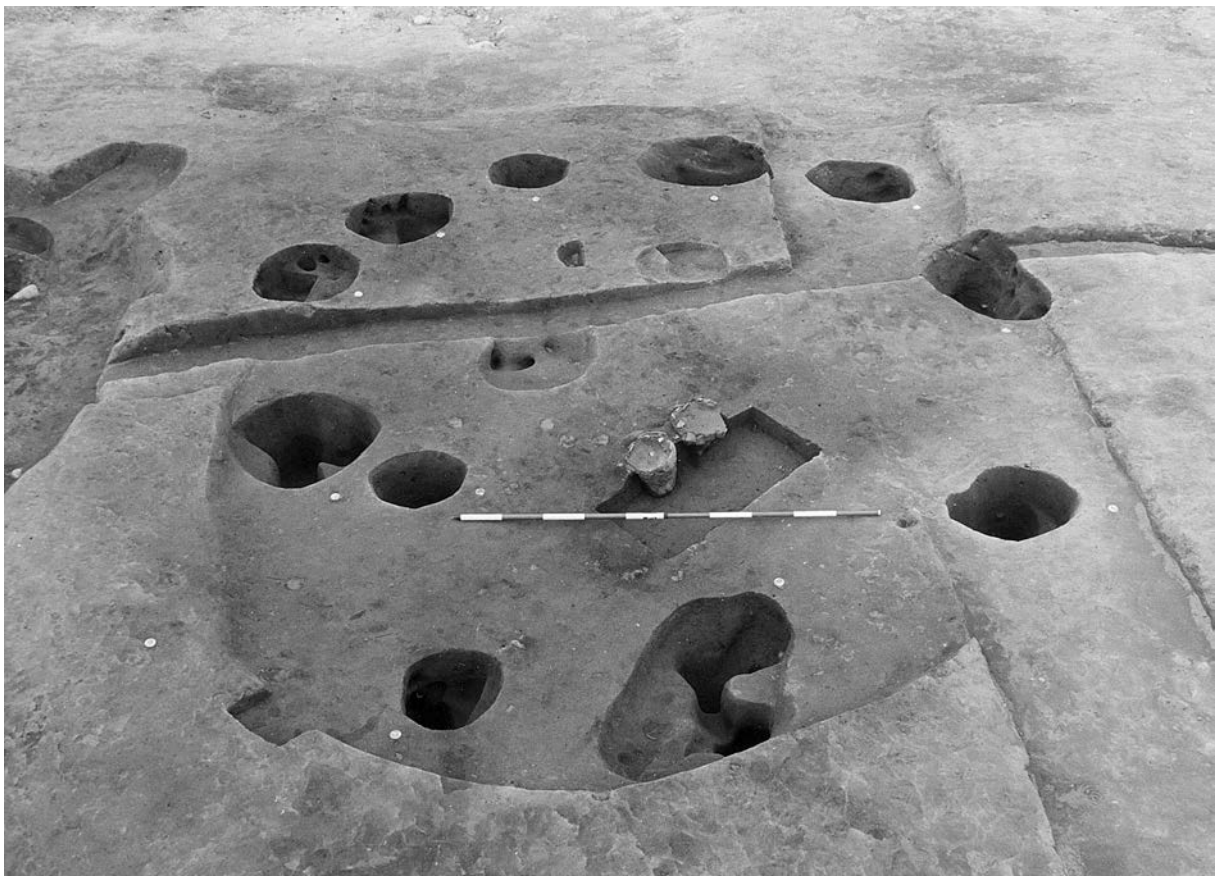
ＳＩ2017完掘状況(東→)

ＳＩ2017炉確認状況(南東→)

ＳＩ2017炉側面(北→)

ＳＩ2017旧期炉断面(北東→)

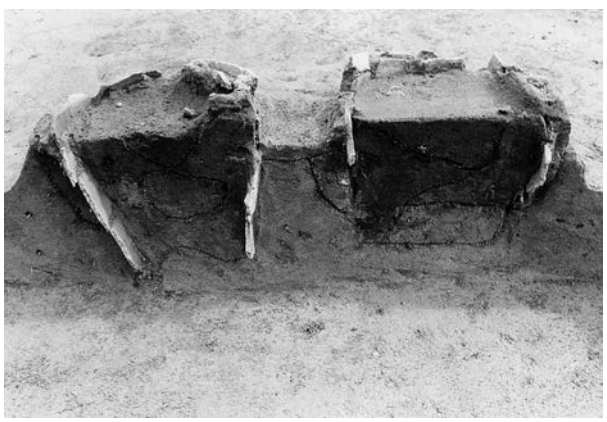
ＳＩ2017新期炉断面(北西→)



ＳＩ2019完掘状況(北東→)

ＳＩ2019炉(炉Ａ:左、炉Ｂ:右)確認状況(北→)

ＳＩ2019炉(炉Ａ:左、炉Ｂ:右)側面(北→)

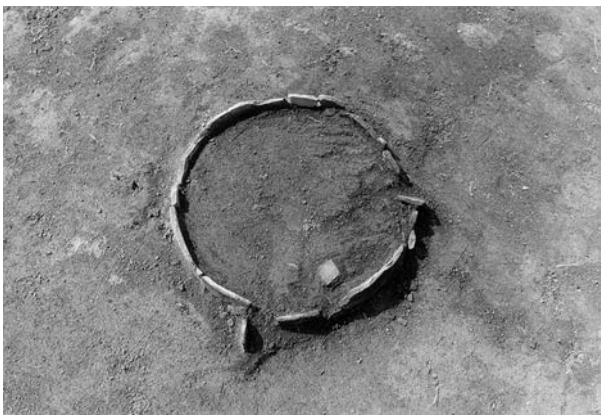


ＳＩ2019炉(炉Ａ:左、炉Ｂ:右)断面(北→)

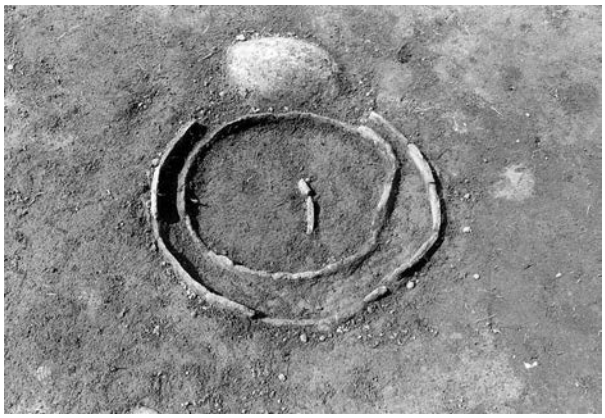
ＳＩ2028完掘(南西→)

図版8　SI2025/2036竪穴住居跡

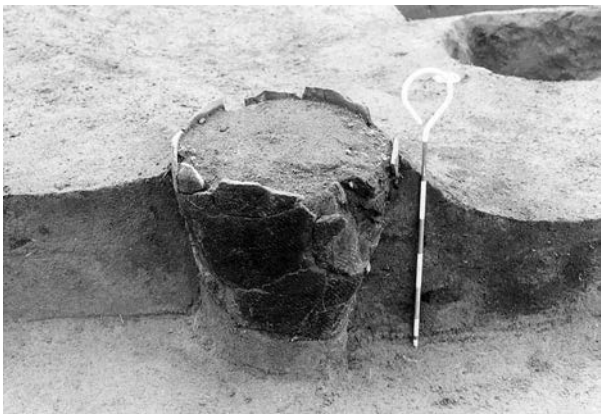
S I 2025完掘状況(北西→)



S I 2025 S R 01確認状況(北→)



S I 2025炉確認状況(北→)

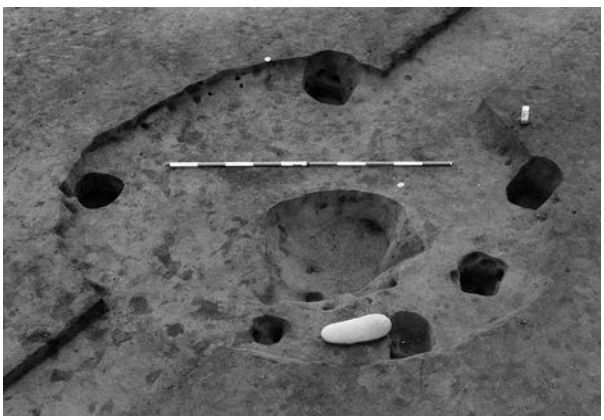


S I 2025 S R 01側面(北西→)

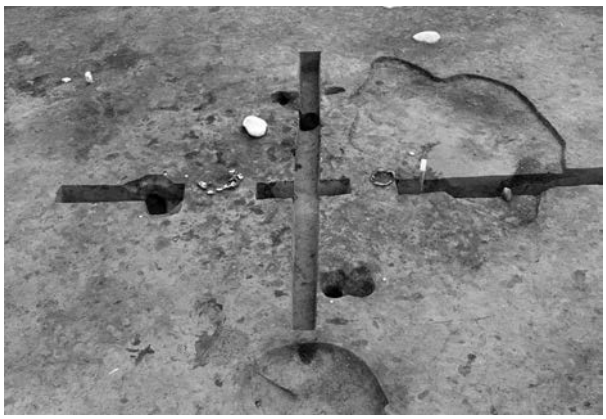
S I 2025炉側面(南東→)

S I 2025 S R 01断面(北西→)

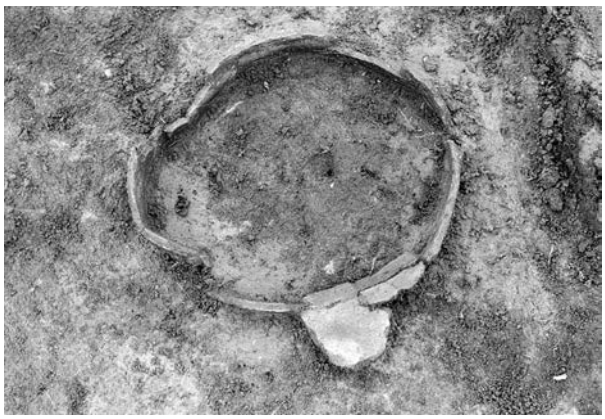
S I 2025調査風景(北→)



S I 2036完掘状況(北→)



S I 2228完掘状況(北東→)



S I 2228炉確認状況(南西→)

S I 2228炉側面(北東→)

S I 2228炉断面(北東→)

S I 2134完掘状況(北→)

図版10　SI2134竪穴住居跡(2)

SⅠ2134 - a炉A確認状況(西→)

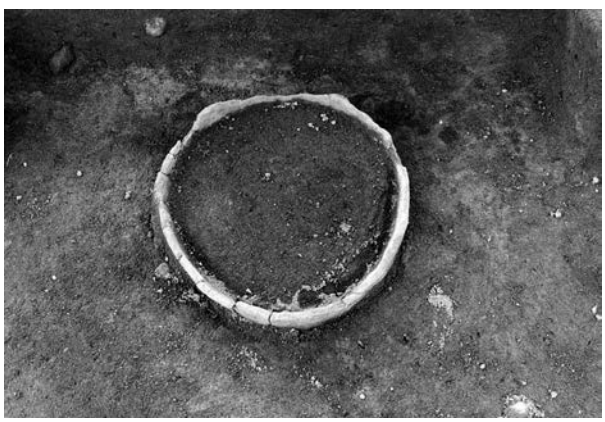
SⅠ2134 - b炉B確認状況(南→)

SⅠ2134 - a炉A側面(南→)

SⅠ2134 - b炉B側面(南→)

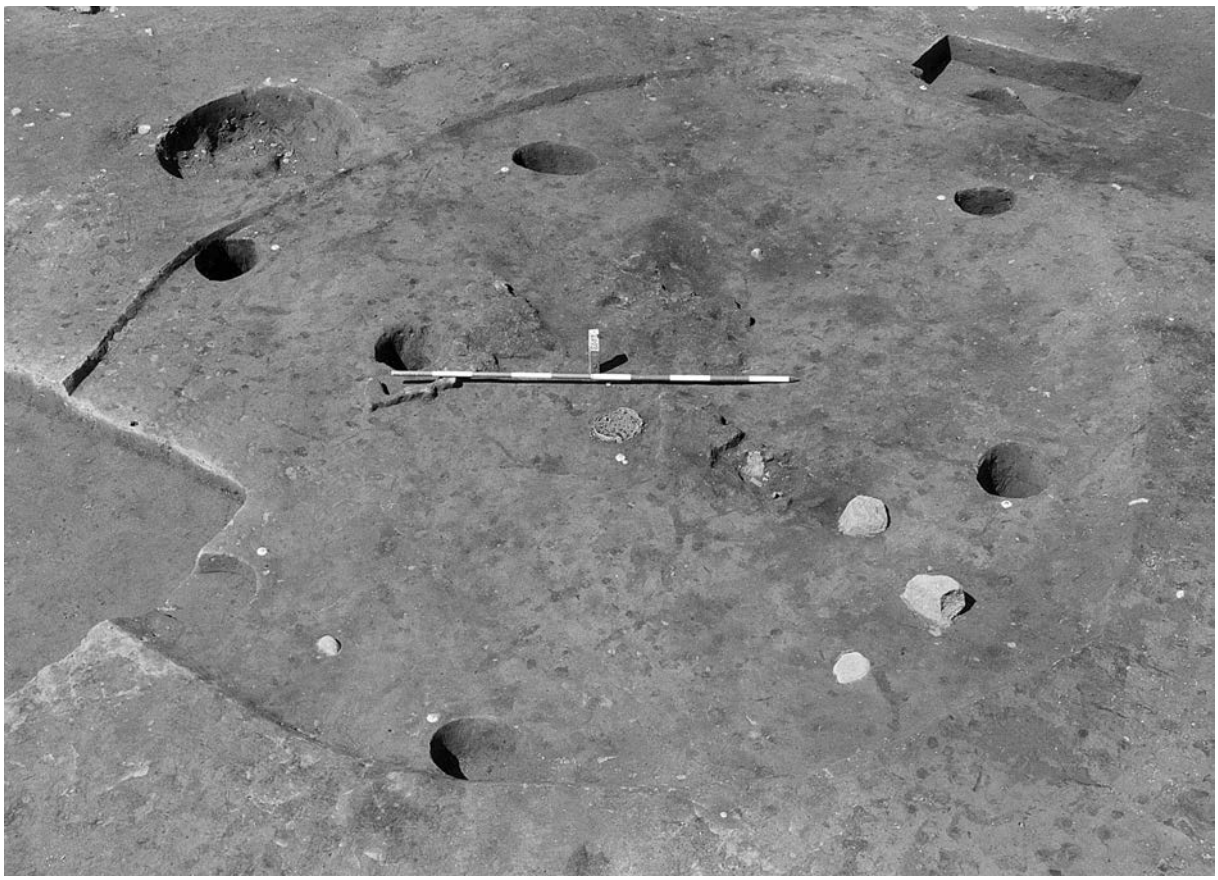
SⅠ2134 - a炉A断面(南→)

SⅠ2134 - b炉B断面(南→)



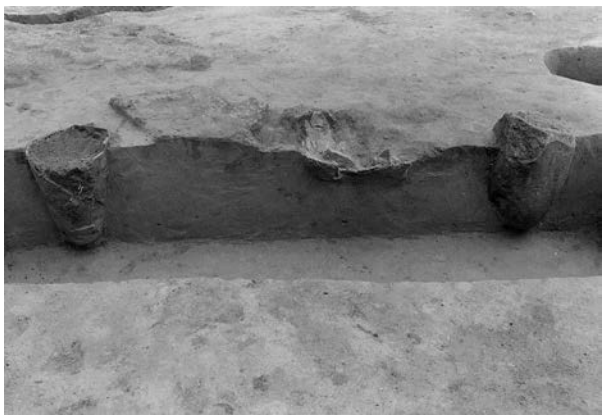
SⅠ2134 - c炉C確認状況(北西→)

SⅠ2134 - c炉C側面(北西→)



ＳＩ2344完掘(南→)

ＳＩ2344炉確認状況(南→)

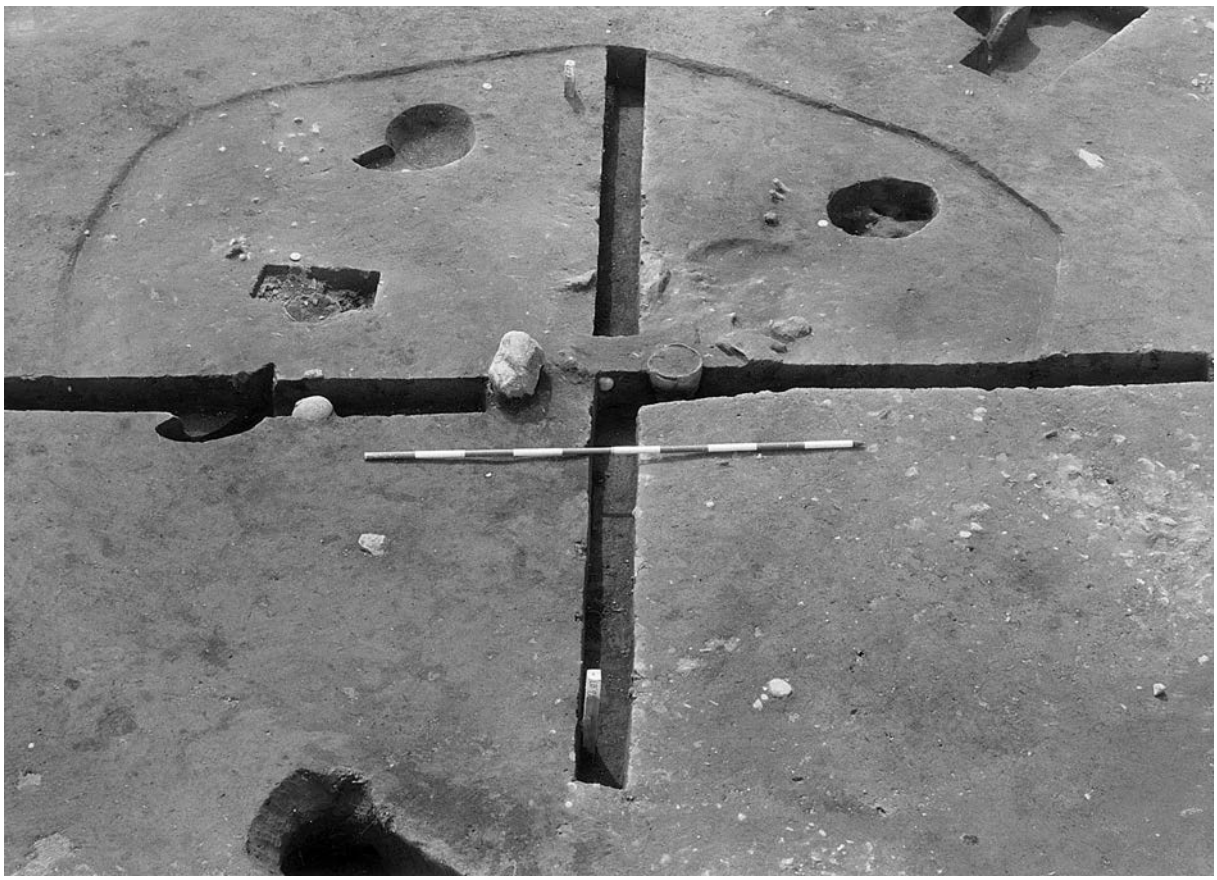


ＳＩ2344炉体土器側面(南西→)

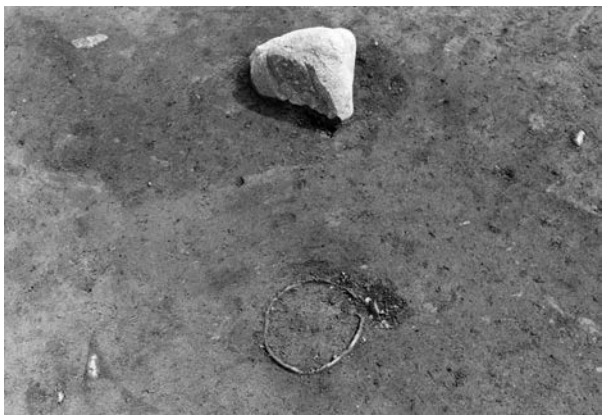
ＳＩ2344炉断面(南西→)

ＳＩ2344調査風景(南東→)

図版12　SI2338竪穴住居跡(1)



SＩ2338完掘状況(東→)



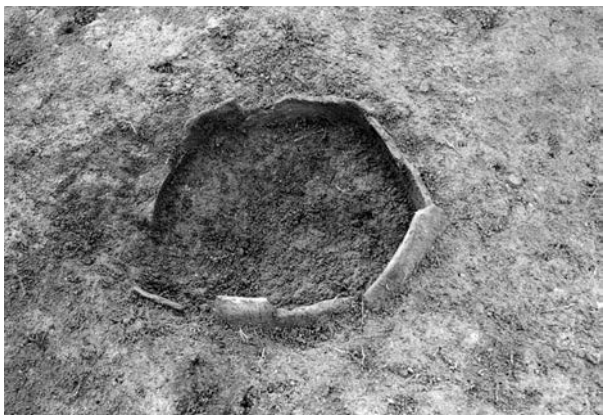
SＩ2338炉確認状況(北→)

SＩ2338炉側面(東→)

SＩ2338炉断面(東→)

調査風景

図版13　SI2338竪穴住居跡(2)／SI2374竪穴住居跡・SNR2377・2378土器埋設炉(1)



ＳＩ2338ＳＲ01確認状況(北西→)

ＳＩ2338ＳＲ01側面(西→)

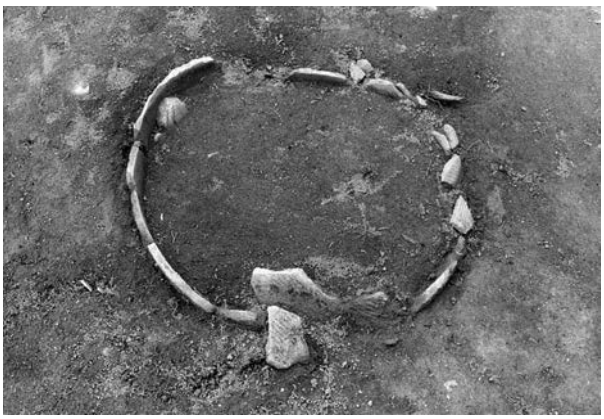
ＳＩ2338ＳＲ01断面(西→)

調査風景

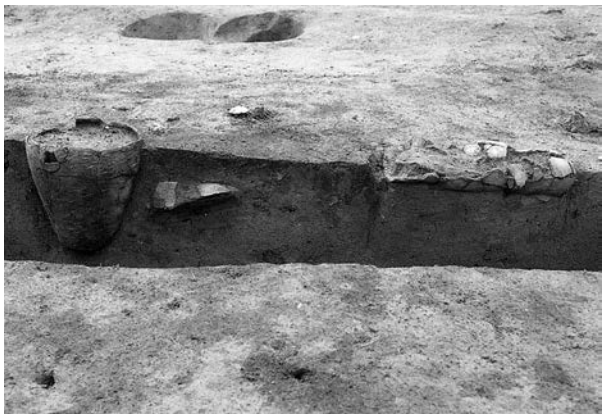
ＳＩ2374・ＳＮＲ2377・2378現況(北→)

図版14　SI2374竪穴住居跡・SNR2377・2378土器埋設炉(2)

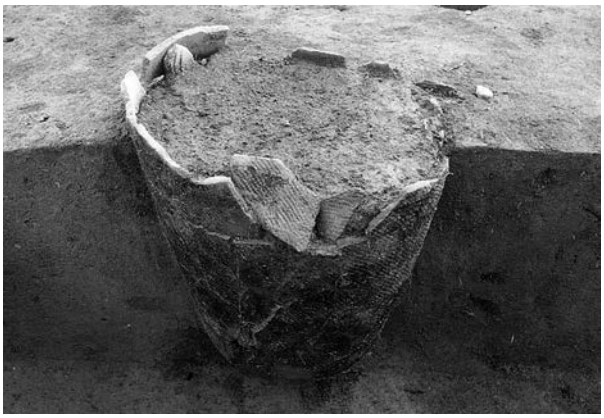
ＳＩ2374炉確認状況(東→)



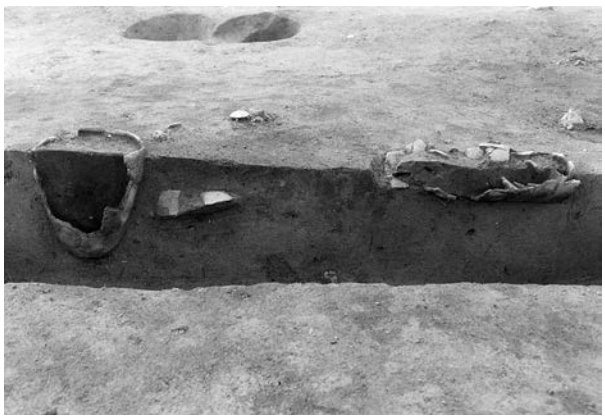
ＳＮＲ2377確認状況(北東→)



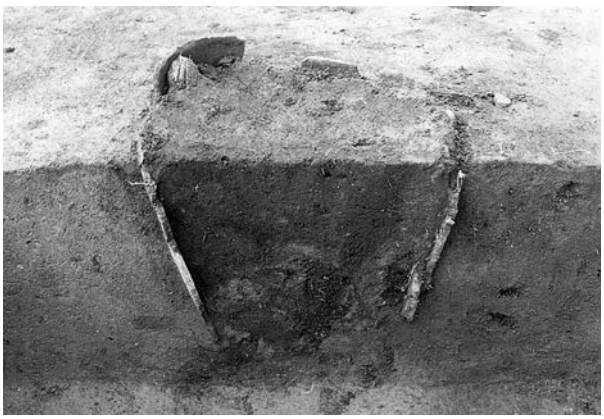
ＳＩ2374炉側面(東→)



ＳＮＲ2377側面(北東→)



ＳＩ2374炉断面(東→)

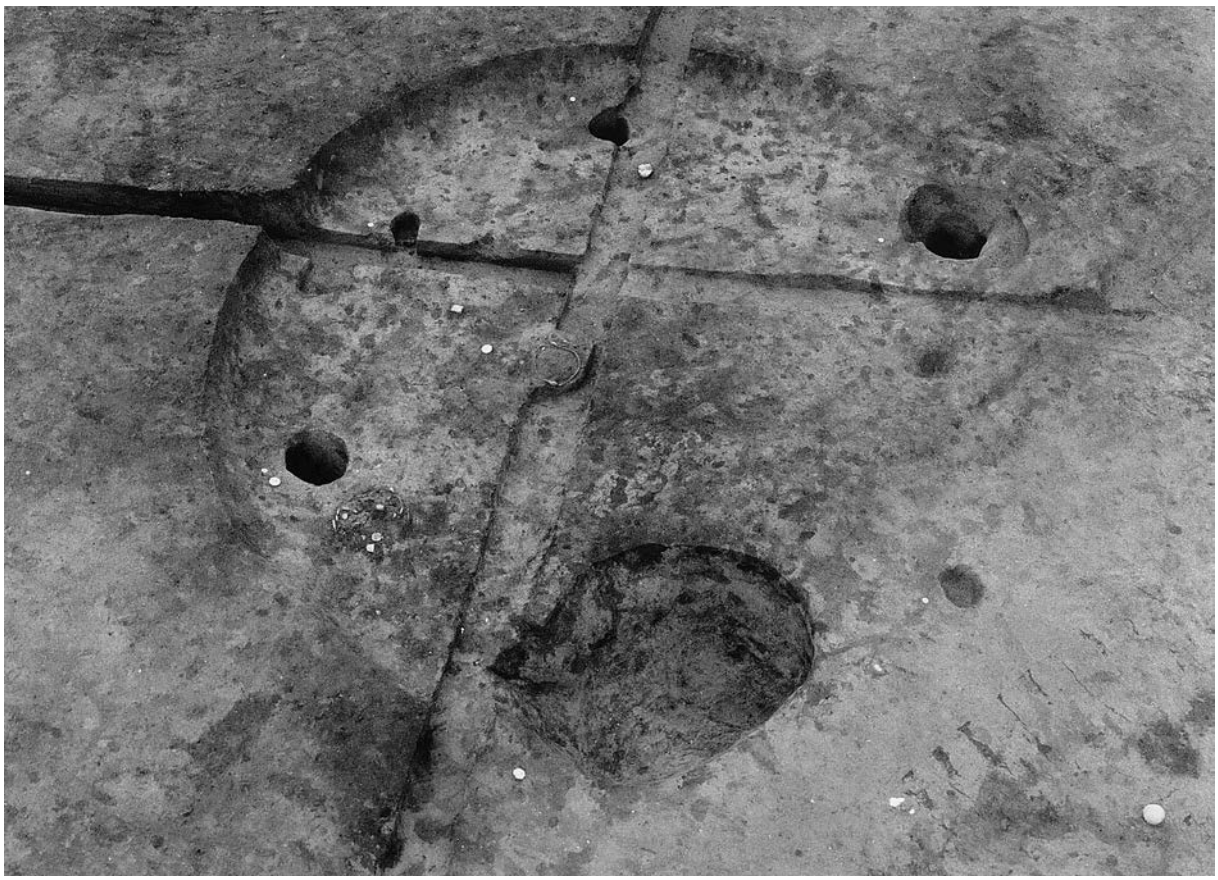


ＳＮＲ2377断面(北東→)

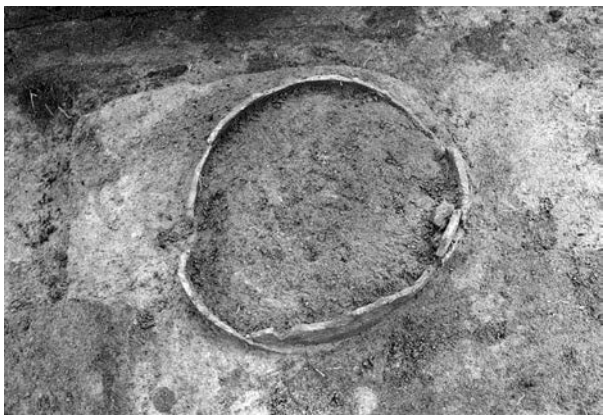
ＳＮＲ2378確認状況(北東→)

ＳＮＲ2378側面(北東→)

図版15　ＳＩ2376竪穴住居跡・ＳＲ2379土器埋設遺構(1)／ＳＫ2400土坑



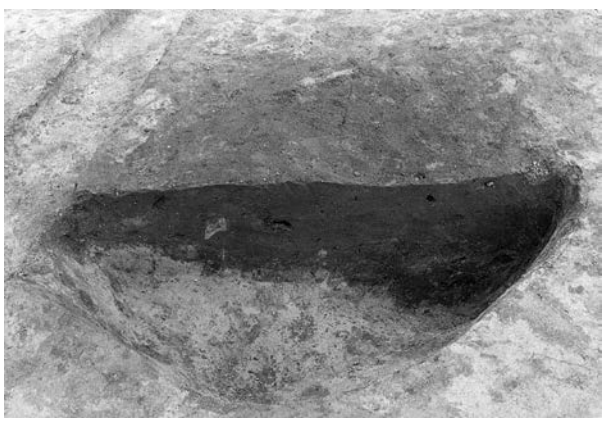
ＳＩ2376・ＳＲ2379完掘状況(西→)



ＳＩ2376炉確認状況(北東→)

ＳＩ2376炉側面(南西→)

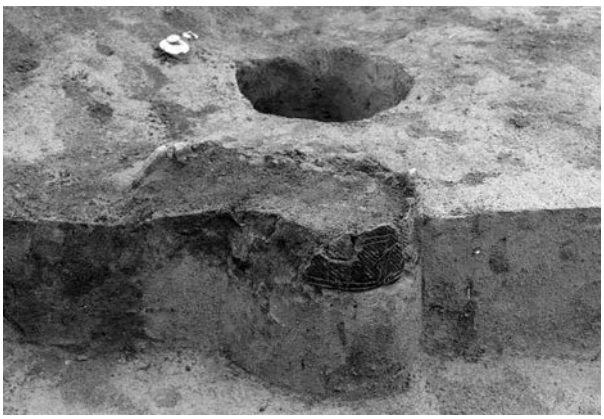
ＳＩ2376炉断面(南西→)



ＳＫ2400断面(南西→)

図版16　SI2376竪穴住居跡・SR2379土器埋設遺構(2)／SI2381竪穴住居跡

SR2379確認状況(北東→)



SR2379側面(南西→)

SR2379断面(南西→)

SI2381炉(南→)

SI2381完掘(北東→)

ＳＩ2460炉確認状況(南西→)

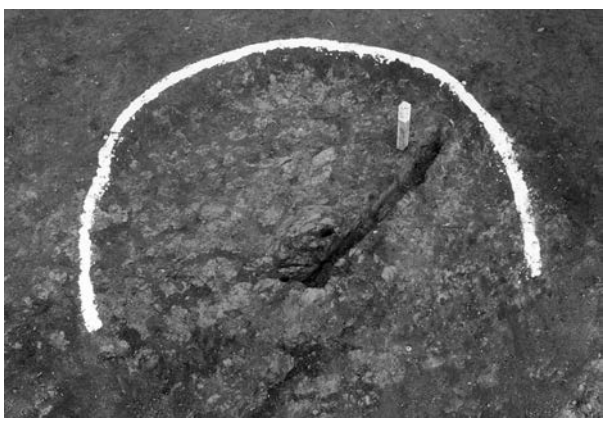
ＳＩ2475炉確認状況(北→)

ＳＩ2460側面(南西→)

ＳＩ2475側面(南→)

ＳＩ2460断面(南西→)

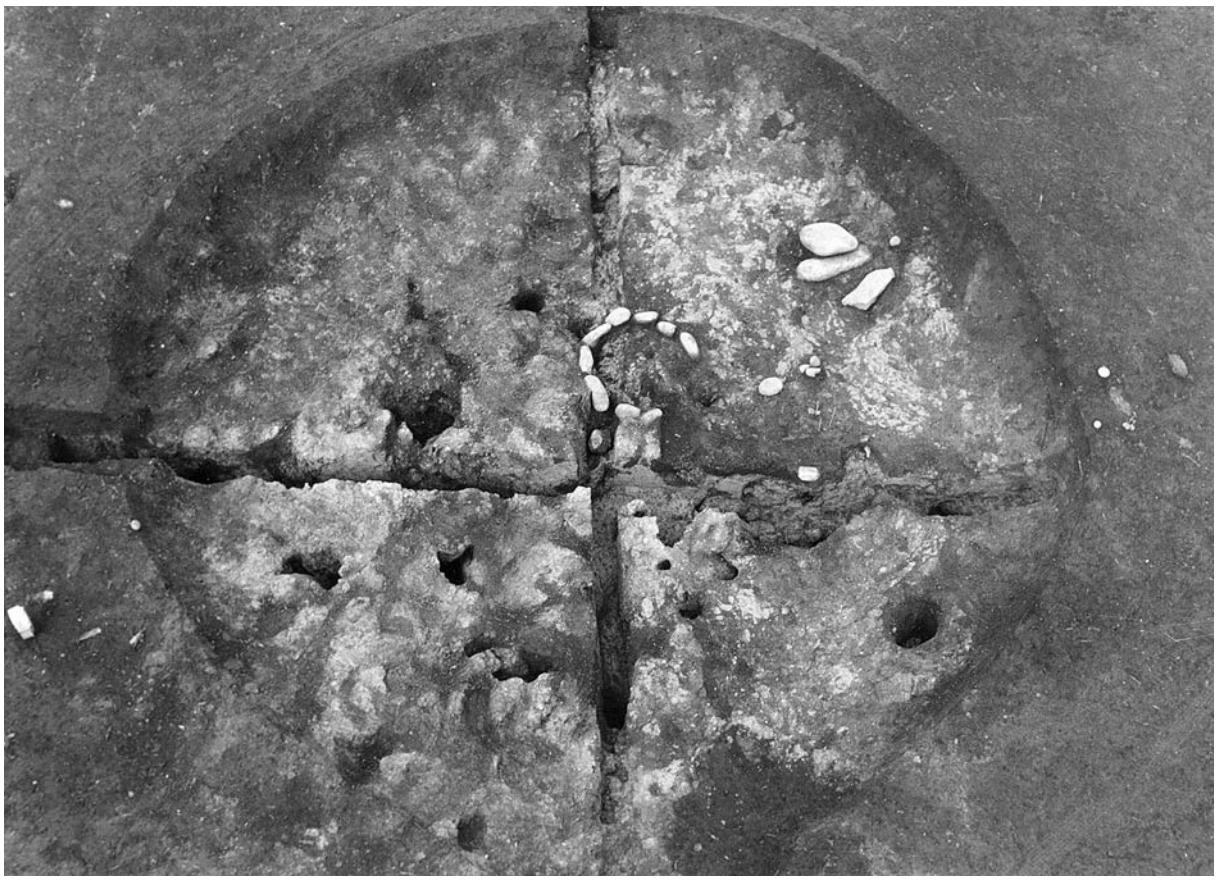
ＳＩ2475断面(東→)



ＳＩ2506完掘状況(南東→)

ＳＩ2506断面(南→)

図版18　SI2507竪穴住居跡



ＳＩ2507完掘状況(南西→)

ＳＩ2507断面(南東→)

ＳＩ2507断面(南西→)

ＳＩ2507炉確認状況(北西→)

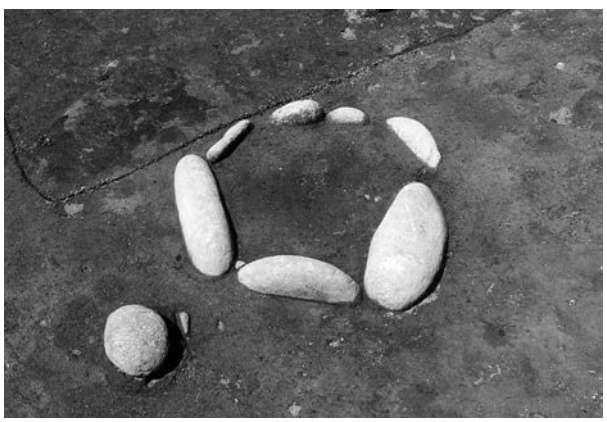
ＳＩ2507炉断面(北西→)

図版19　ＳＩ2333竪穴住居跡／ＳＱＮ2018石囲炉

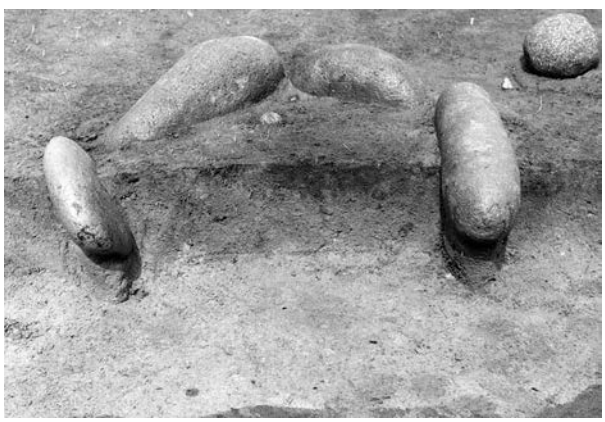
ＳＩ2333完掘状況(北西→)

ＳＩ2333炉確認状況(南西→)

ＳＩ2333炉断面(北→)



ＳＱＮ2018確認状況(東→)



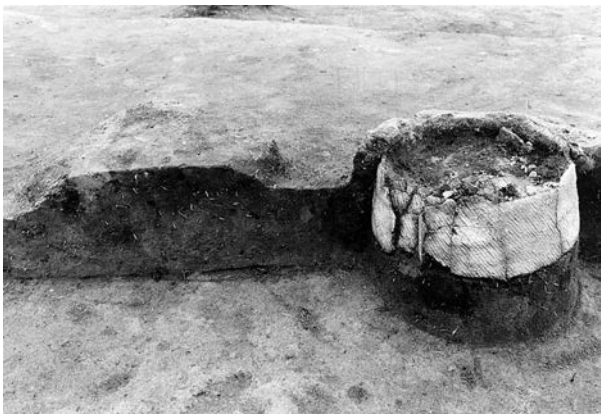
ＳＱＮ2018断面(南西→)

図版20　SNR2002/2026/2034土器埋設炉

SNR2002確認状況(南西→)

SNR2034確認状況(西→)

SNR2002側面(南→)

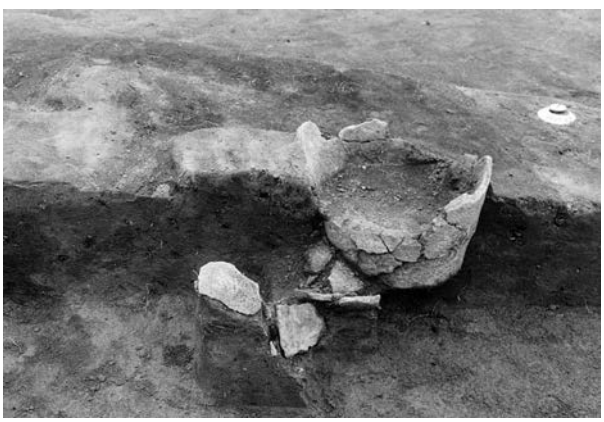


SNR2034側面(西→)

SNR2002断面(南→)

SNR2034断面(西→)

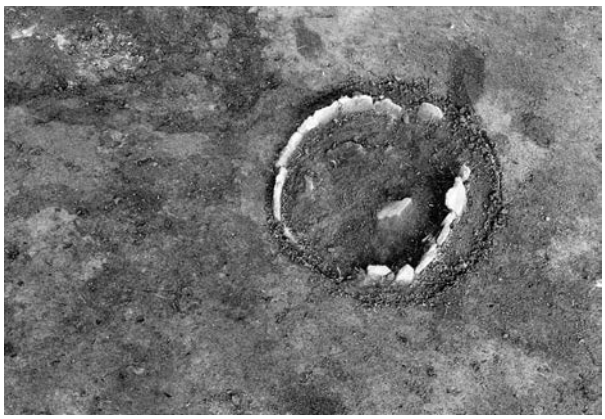
SNR2026確認状況(西→)



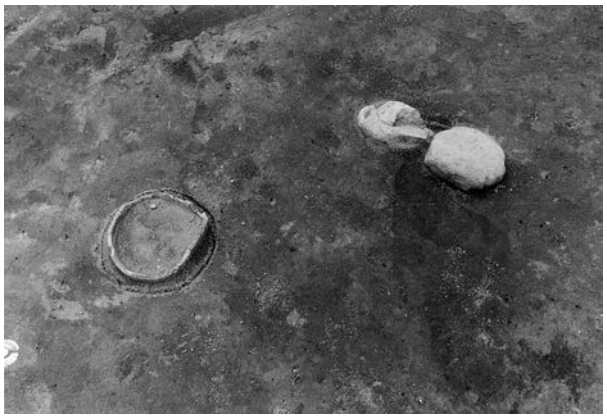
SNR2026側面(西→)

図版21　SNR2024／2039／2322土器埋設炉

SNR2024周辺(北→)



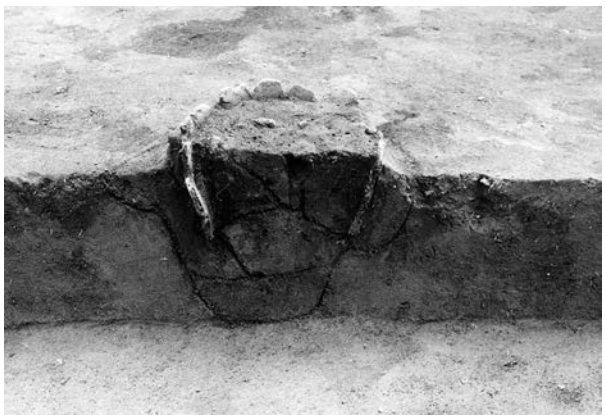
SNR2039確認状況(北西→)



SNR2024確認状況(東→)

SNR2039側面(北西→)

SNR2024側面(西→)



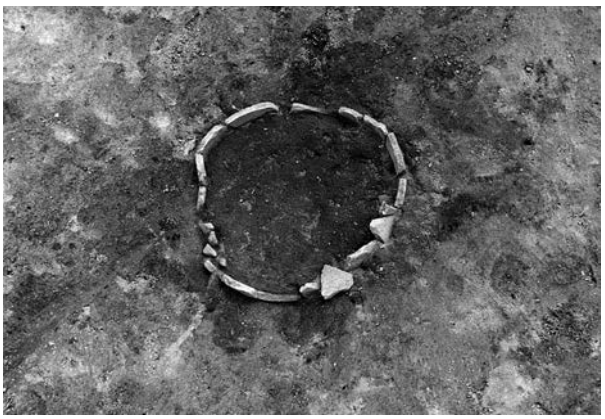
SNR2039断面(北西→)

SNR2322確認状況(南→)

SNR2322側面(北西→)

図版22　SNR2109／2156土器埋設炉・SR2101土器埋設遺構

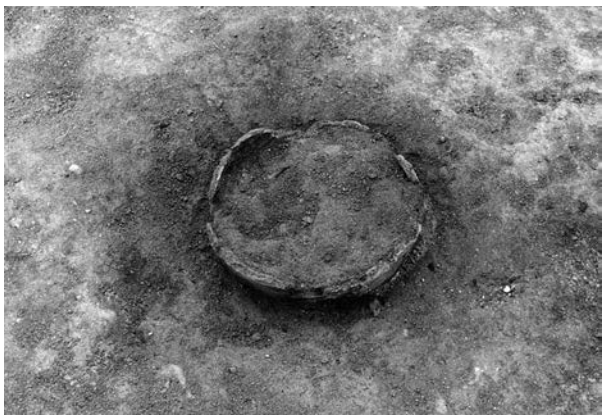
SNR2109周辺(西→)



SNR2109確認状況(南西→)

SNR2109側面(北東→)

SNR2109断面(北東→)



SR2101確認状況(南→)

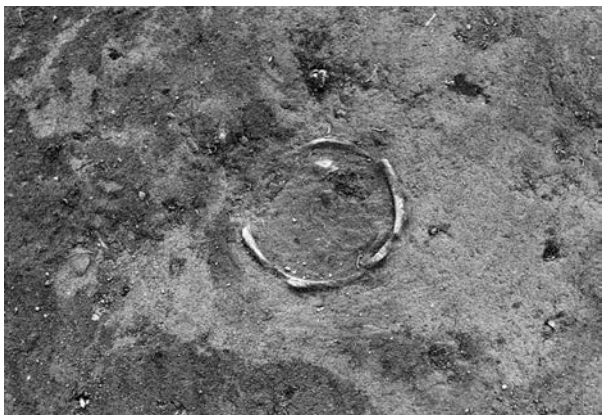
SNR2156確認状況(東→)

SR2101(左)・SNR2156(右)側面(南東→)

SR2101(左)・SNR2156(右)断面(南東→)

図版23　ＳＮＲ2176土器埋設炉・ＳＲ2179土器埋設遺構／ＳＮＲ2186土器埋設炉周辺

ＳＮＲ2176・ＳＲ2179周辺(南東→)

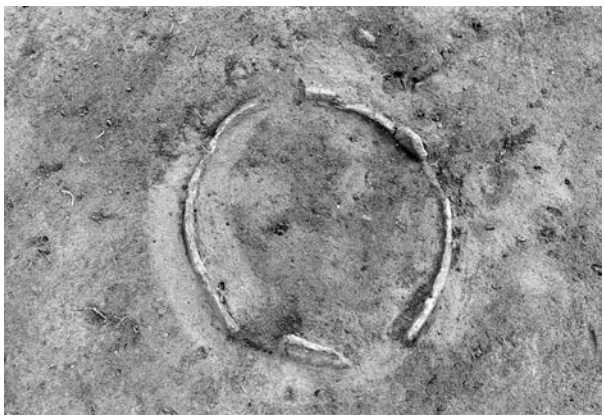


ＳＲ2179確認状況(東→)

ＳＮＲ2176(左)・ＳＲ2179(右)側面(南東→)

ＳＮＲ2176(左)・ＳＲ2179(右)断面(南東→)

ＳＮＲ2186周辺(南東→)

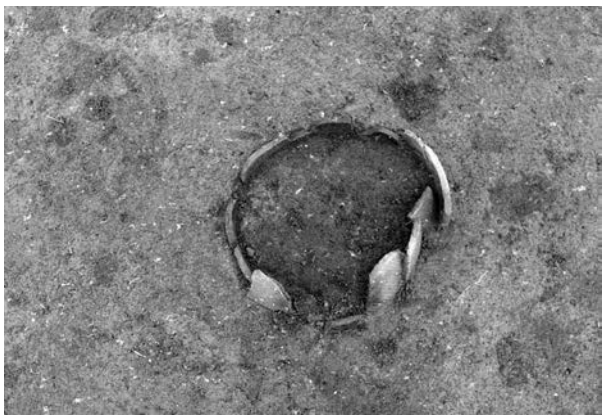


ＳＮＲ2186確認状況(北→)

ＳＮＲ2186側面(南東→)

ＳＮＲ2186断面(南東→)

図版24　SNR2279／2308／2335土器埋設炉



ＳＮＲ2279確認状況(南東→)

ＳＮＲ2335確認状況(北→)

ＳＮＲ2279側面(東→)

ＳＮＲ2335側面(北東→)

ＳＮＲ2279断面(東→)

ＳＮＲ2335断面(北東→)

ＳＮＲ2308断面(南→)

調査風景

SNR2371確認状況(南→)

SNR2613RP1確認状況(東→)

SNR2371側面(南西→)

SNR2613RP2確認状況(南→)

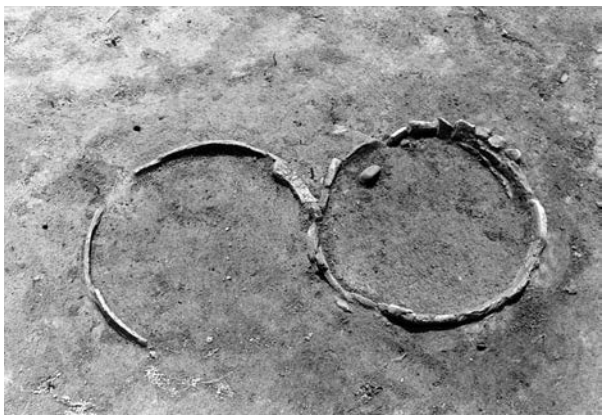
SNR2371断面(南西→)

SNR2613RP1(左)RP2(右)断面(南→)

SNR2611周辺(南西→)

SNR2611側面(南西→)

図版26 SNR2612/2614/2615土器埋設炉



SNR2612RP2(左)RP1(右)確認状況(北西→)

SNR2614RP1(左)RP3(右)確認状況(南西→)

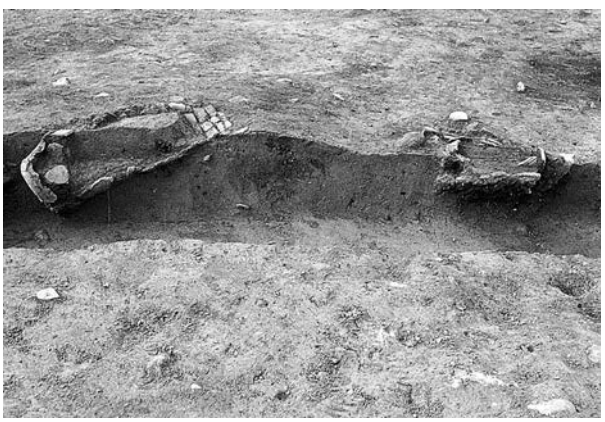
SNR2612RP1(左)RP2(右)側面(南東→)

SNR2614RP1(左)RP3(右)断面(南西→)

SNR2612RP1(左)RP2(右)断面(南東→)

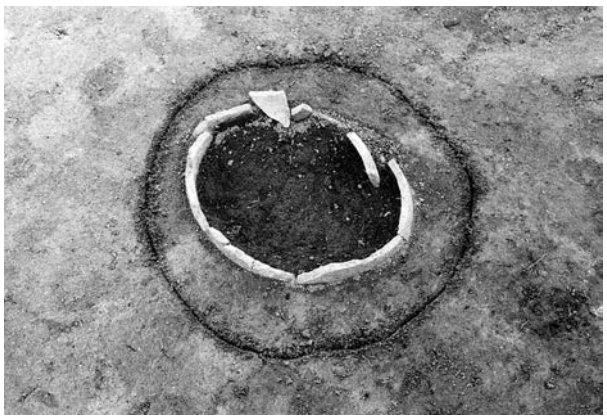
SNR2614RP1(左奥)RP2(右)断面(南東→)

SNR2615RP1確認状況(南東→)

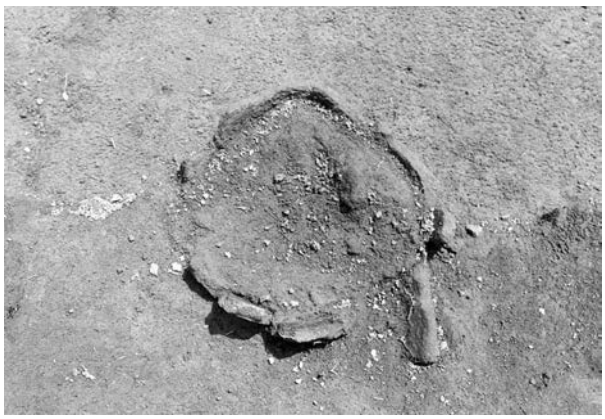


SNR2615RP2(左)RP1(右)断面(南西→)

図版27　SR2040/2105/2102・2103土器埋設遺構



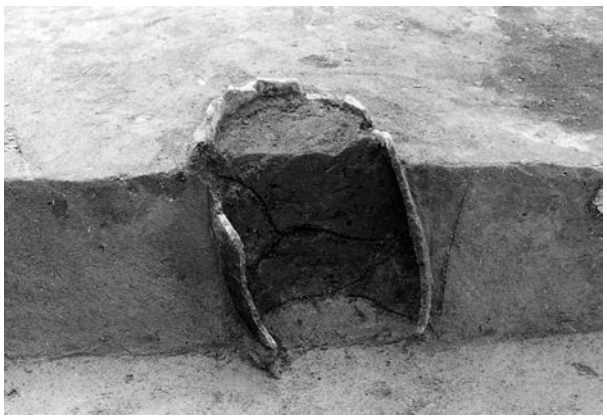
S R 2040確認状況(北西→)



S R 2105確認状況(西→)

S R 2040側面(北西→)

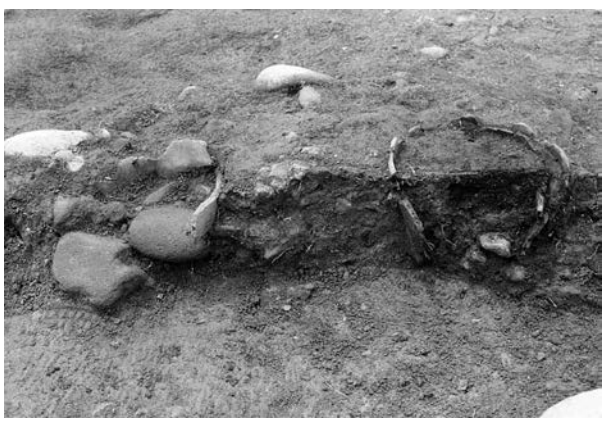
S R 2105側面(南東→)



S R 2040断面(北西→)

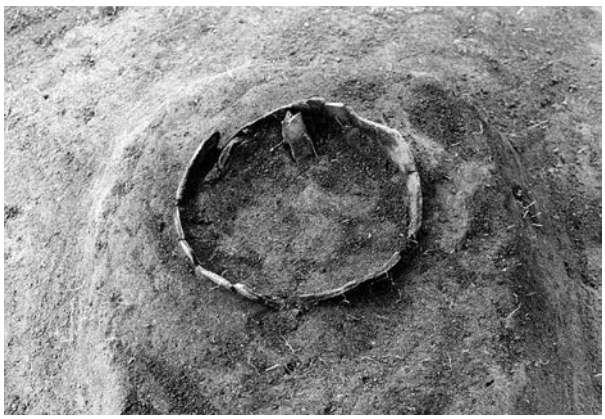
S R 2105断面(南東→)

S R 2103(左)S R 2102(右)確認状況(東→)

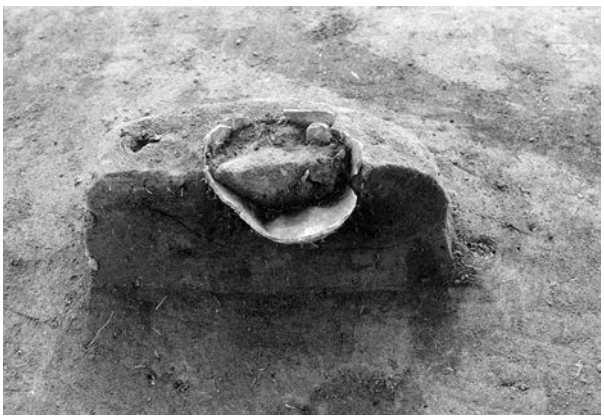


S R 2103(左)S R 2102(右)断面(東→)

図版28　SR2106/2185/2193土器埋設遺構

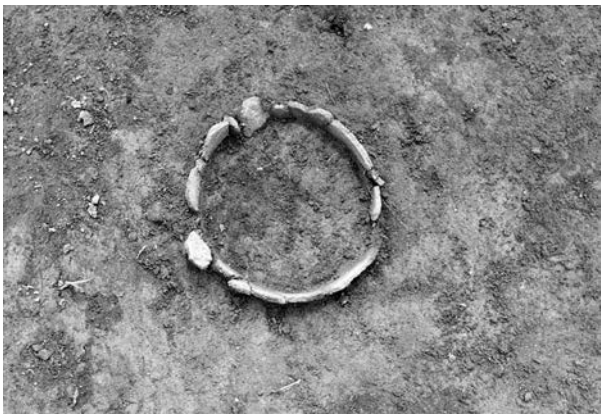


SR2106確認状況(南→)



SR2106断面(東→)

SR2185確認状況(北→)

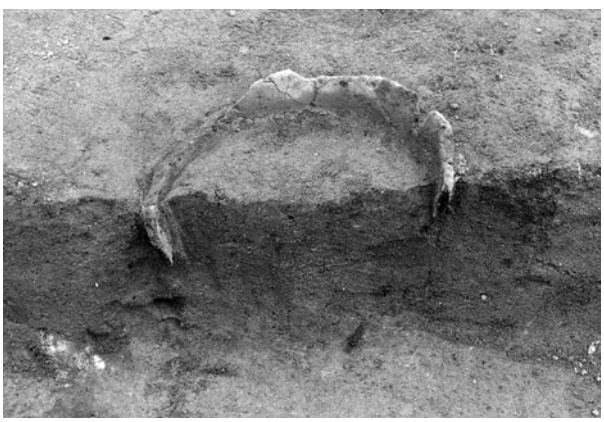


SR2193確認状況(北東→)

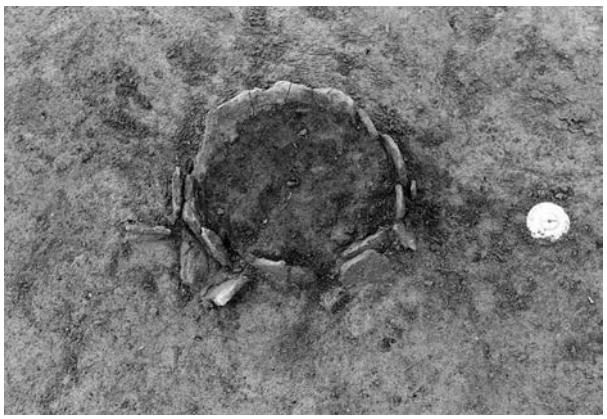
SR2185側面(北東→)

SR2193側面(南→)

SR2185断面(北東→)



SR2193断面(南→)



SR2147確認状況(北東→)

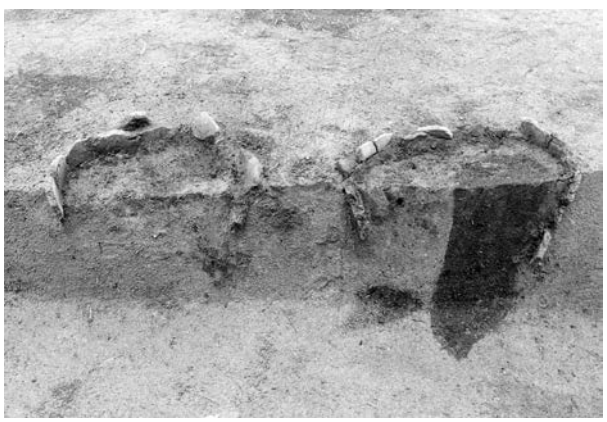
SR2147断面(西→)

SR2194(左)SR2195(右)確認状況(北→)

SR2299確認状況(西→)

SR2195(左)SR2194(右)側面(南→)

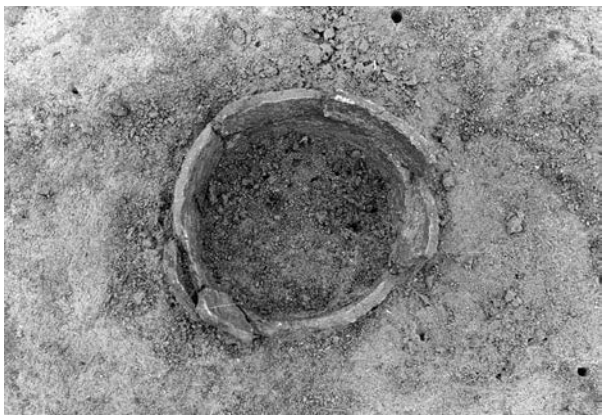
SR2299側面(南西→)



SR2195(左)SR2194(右)断面(南→)

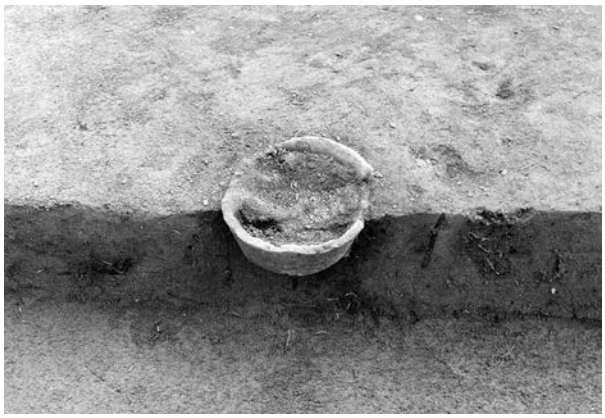
SR2299断面(南西→)

図版30　SR2216/2317/2331・2332/2363土器埋設遺構



SR2216確認状況(南→)

SR2332(左)SR2331(右)確認状況(東→)

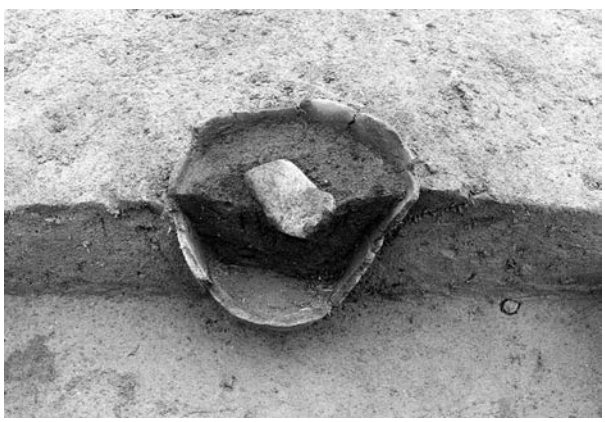


SR2216側面(北東→)

SR2332(左)SR2331(右)断面(東→)

SR2317確認状況(北→)

SR2317側面(北→)



SR2317断面(北→)

SR2363確認状況(北東→)

図版31 SQ2009/2010/2013/2014/2523/2526/2325配石遺構/SK2517土坑

S Q2009側面(南西→)

S Q2010確認状況(北東→)

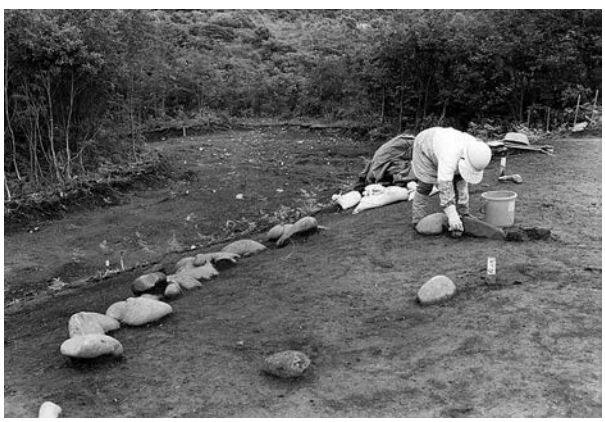
S Q2013確認状況(北→)

S Q2014確認状況(南→)

S Q2523確認状況(東→)

S Q2526確認状況(南→)

S K2517確認状況(北→)



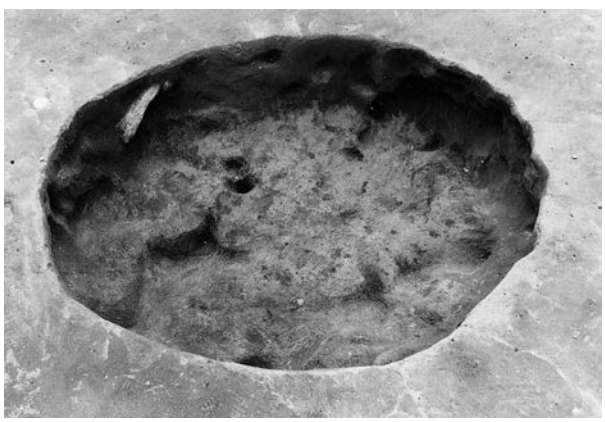
S Q2325調査風景(西→)

図版32　SQ2325配石遺構/SK2030/2500土坑

SQ2325確認状況(南→)

SK2030遺物出土状況(東→)

SK2500礫確認状況(東→)



SK2030完掘状況(東→)

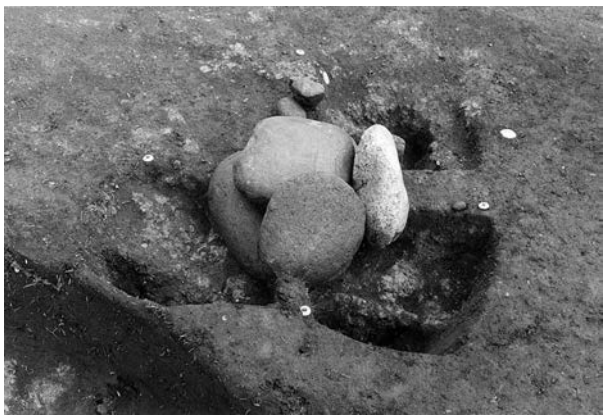
SK2500下部礫確認状況(南→)

SK2501礫確認状況(南→)

SK2504礫確認状況(東→)

SK2503礫確認状況(南西→)

SK2504断面(南→)



SK2505礫確認状況(北西→)

SK2504完掘状況(東→)

SK2513礫確認状況(南西→)

SK2525礫確認状況(南→)

図版34 SKP2148/2437/SB1173・1174・1175/1182/2035掘立柱建物跡/SA1183柵列跡

SKP2148礫確認状況(南→)

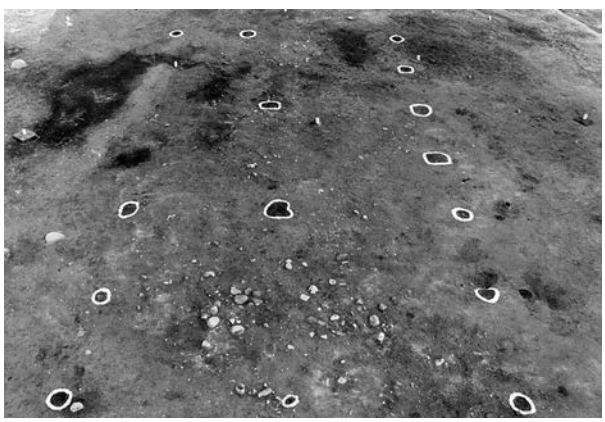
SKP2437礫確認状況(南西→)

狩猟文土器底部出土状況(北西→)

調査風景

SB1173・1174・1175完掘状況(南東→)

SA1183完掘状況(北東→)

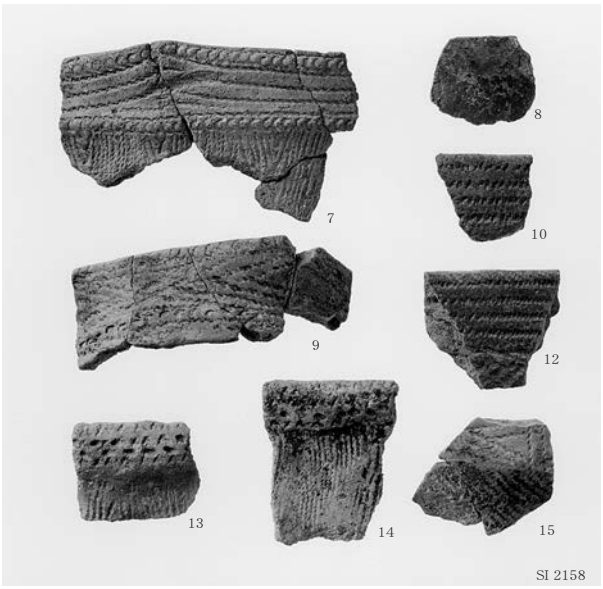


SB1182完掘状況(北西→)

SB2035完掘状況(東→)

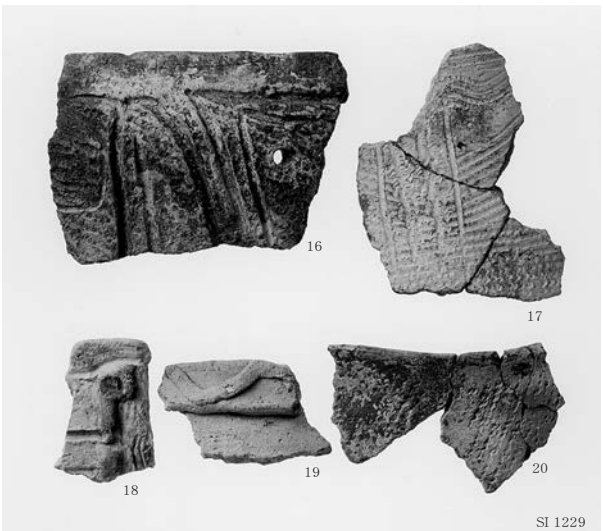
SI 1105

SI 1105



SI 2158

SI 2158



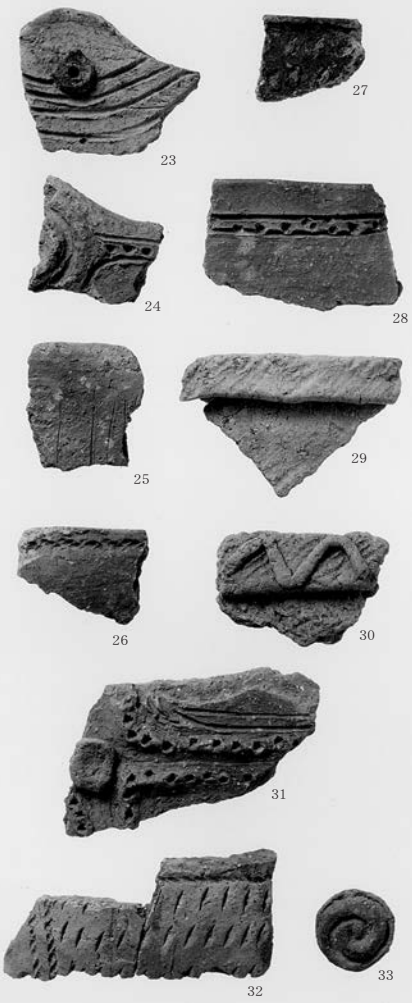
SI 1229

SI 1229

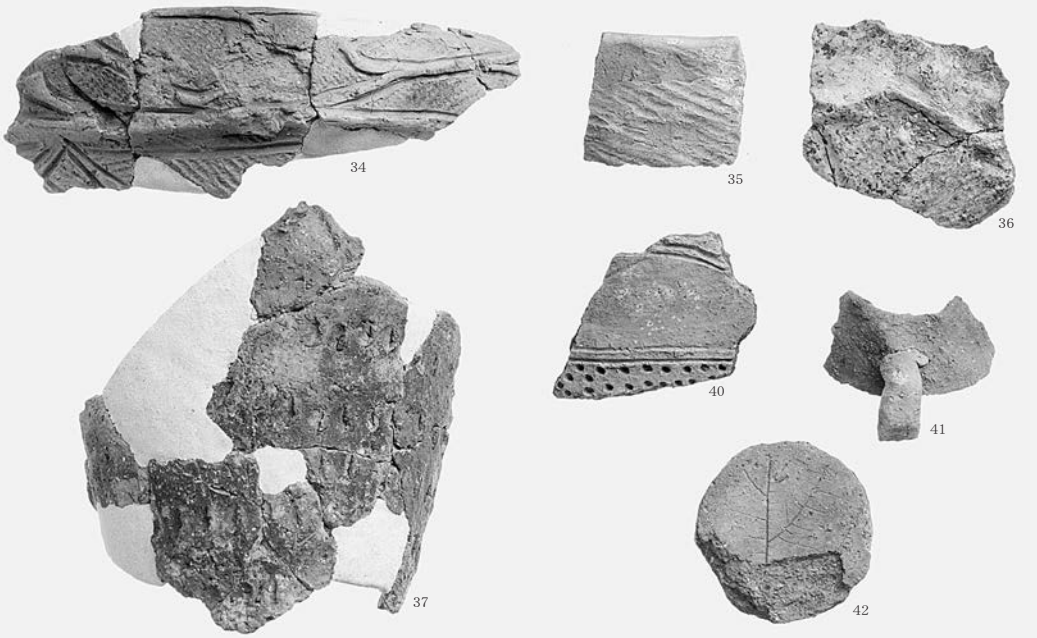
図版36　遺構内出土土器(2)

22 炉体土器RP1

SI 2001



SI 2001



SI 2005

図版37　遺構内出土土器(3)

46 炉体土器RP1

SI 2005

47 炉体土器RP2

SI 2005

38 埋設土器RP3

SI 2005

39

SI 2005

49 炉体土器RP1

SI 2007

48 炉体土器RP2

SI 2007

図版38　遺構内出土土器（4）

50 炉体土器RP1

SI 2017

51 炉体土器RP2

SI 2017

53 炉体土器RP1

SI 2019

54 炉体土器RP2

SI 2019

55 炉体土器RP1

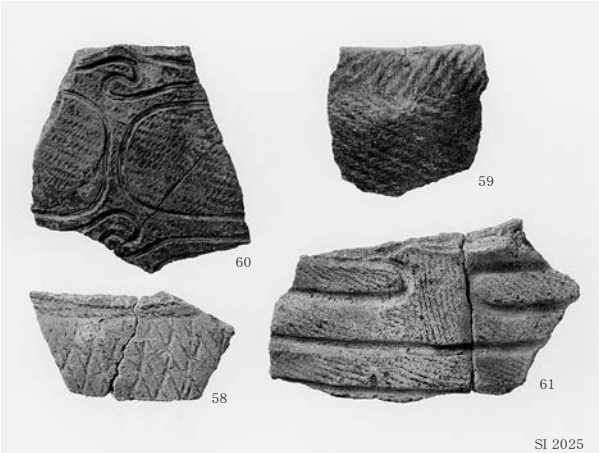
SI 2025

56 炉体土器RP2

SI 2025

57 埋設土器RP3

SI 2025



59

60

58

61

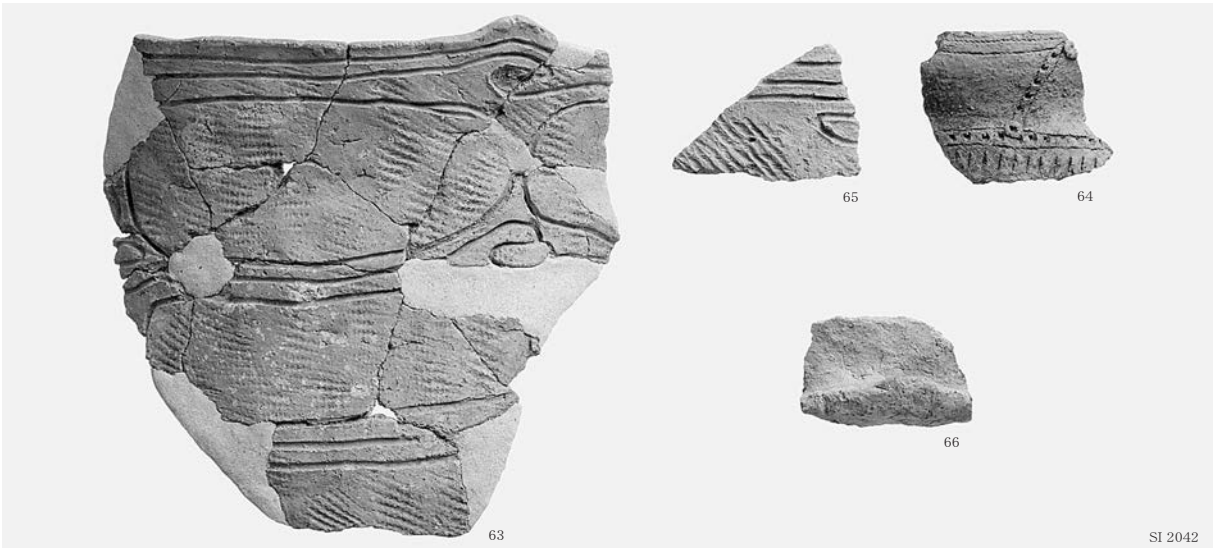
SI 2025

68 炉体土器RP1

SI 2042

67 RP2

SI 2042



63

65

64

66

SI 2042

図版40　遺構内出土土器(6)

69 炉体土器RP1

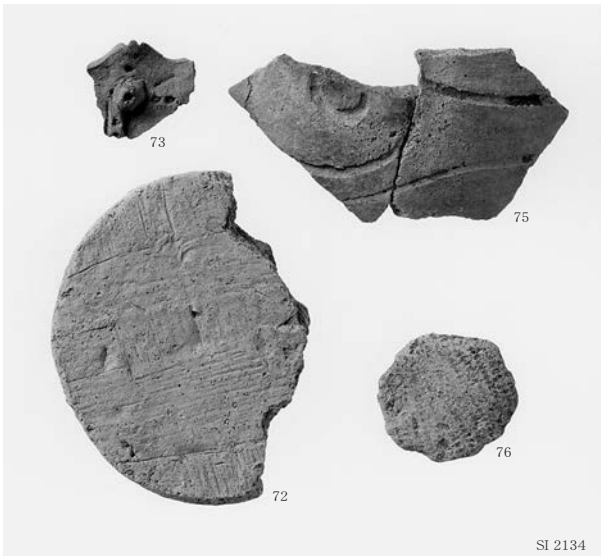
SI 2134-a

71 炉体土器RP2

SI 2134-b

70 炉体土器RP3

SI 2134-c



SI 2134

SI 2228

79 炉体土器RP1

SI 2228

81 炉体土器RP1

SI 2344

82 炉体土器RP2

SI 2344

86 炉体土器RP1

SI 2370

84 炉体土器RP1

SI 2338

85 埋設土器RP2

SI 2338

図版42　遺構内出土土器(8)

117 RP1

SI 2333

136 炉体土器RP1

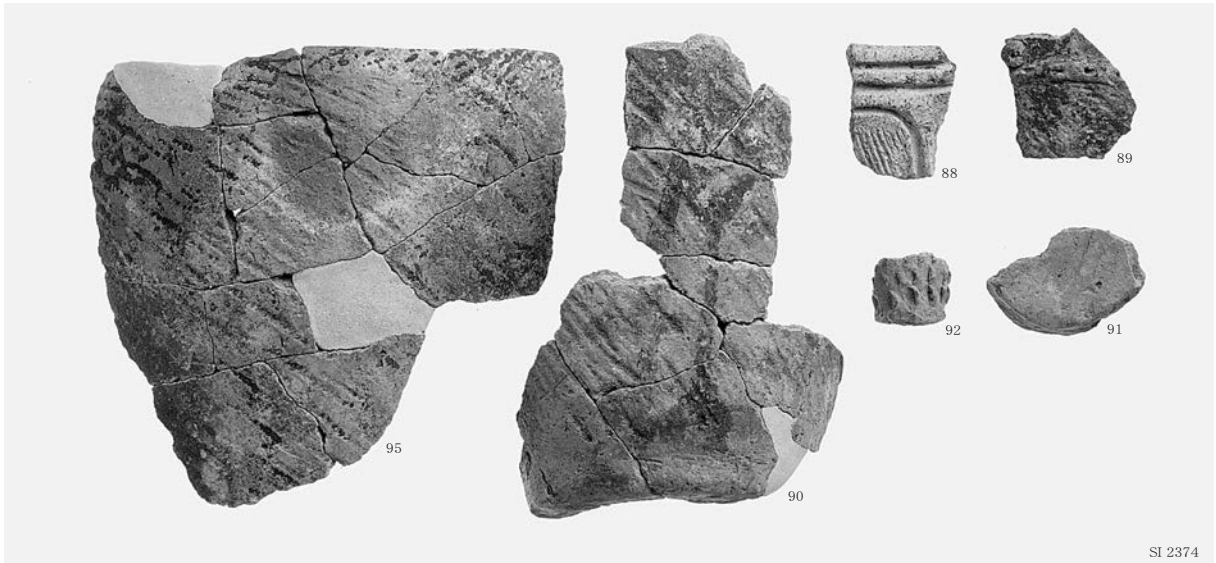
SNR 2377

93 炉体土器RP1

SI 2374

94 炉体土器RP2

SI 2374



95

90

88

89

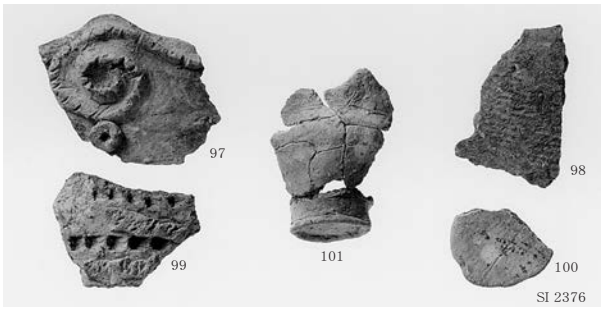
92

91

SI 2374

96 炉体土器RP1
SI 2376

164
埋設土器RP1
SR 2379


97
98
99
101
100
SI 2376

105 炉体土器RP1
SI 2460

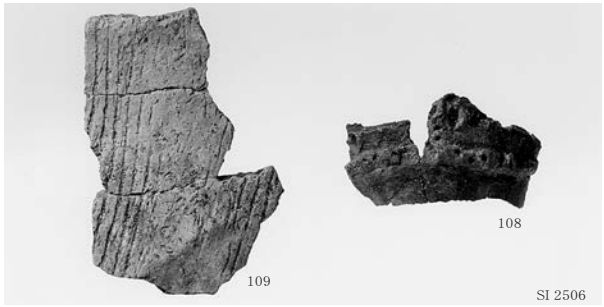
106 炉体土器RP2
SI 2460

102
103
SI 2381

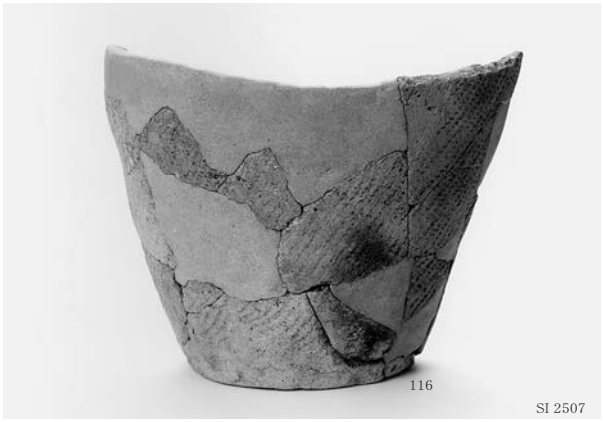
107 炉体土器RP1
SI 2475

139 炉体土器RP1
SNR 2378

図版44　遺構内出土土器(10)

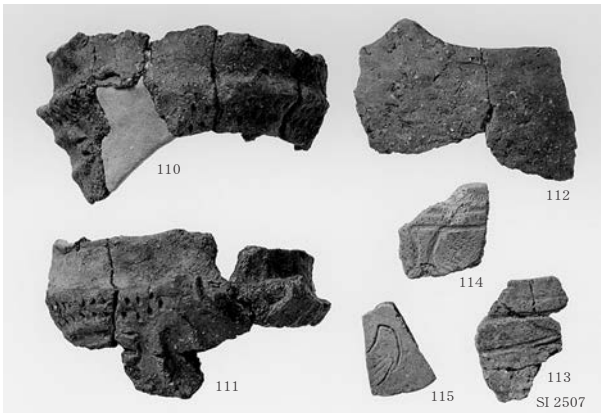


SI 2506



SI 2507

SNR 2002



SI 2507

SNR 2002

SNR 2024

SNR 2026

SNR 2034

124 炉体土器RP1

SNR 2039

125 炉体土器RP1

SNR 2109

126 炉体土器RP1

SNR 2176

129 炉体土器RP1

SNR 2279

127 炉体土器RP1

SNR 2156

128 炉体土器RP1

SNR 2186

図版46　遺構内出土土器(12)

130 炉体土器RP1

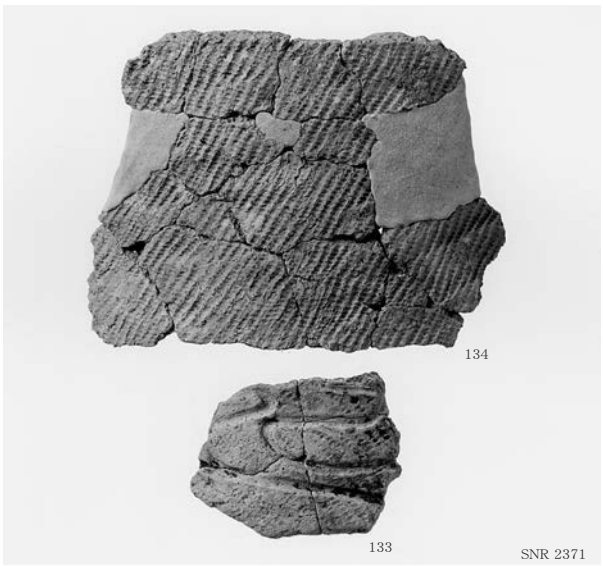
SNR 2308

131 炉体土器RP1

SNR 2322

132 炉体土器RP1

SNR 2371



134

133

SNR 2371

140 炉体土器RP1

SNR 2612

141 炉体土器RP2

SNR 2612

137 炉体土器RP1

SNR 2611

138 炉体土器RP2

SNR 2611

142 炉体土器RP1

SNR 2613

143 炉体土器RP2

SNR 2613

145 炉体土器RP1

SNR 2615

144 炉体土器RP2

SNR 2615